福井久藏著

枕詞の研究と釋義

不二書房版

福井久藏著

枕詞の研究と釋義

不二書房版

はしがき

この書は實のことを云へば私の處女作である。想ひ起すこ、明治三十二年の頃、恩師上田博士芳賀博士を始め、帝國大學・高等師範學校・第一高等學校・陸軍中央幼年學校に奉職せられる關根正直・松井簡治・和田萬吉・菊池壽人・岡倉由三郎・赤堀又治郎等の諸先生方が水曜會こいふものを起され、例月水曜日の晩に大學や御茶の水の講師室に集まつて、故織田得能師を聘して法華經の研究を起されてゐたことがあつた。その時芳賀博士のお執成しで、學問上の青二才である私をもそのまゞゐにお加へ下さるここになり、佛教書林をさがし、科註などを求めたものであつた。この會は芳賀博士が獨逸へ御留學なされる前までは續いてゐて、佛典の研究以外に面白い會であつた。私は諸先輩の御話などを承つて啓發されることが多かつた。そこで三十五六年の頃には努力してこの處女作を一通り纒めたのであつた。當時色々と御本を貸して戴いた井上賴圀翁なども、大に喜んで下さつて、何かの學會で拙い私の研究を御披露下さつた

と見えて、思はぬ方から、お尋ねを蒙つたり御訪問も受けたことが時折あつた。その後上田博士の御厚意で大學の國語研究室にも釋義の部十卷の複本を取つて下さつた。斯ういふことで日本文法史以前に出版の話も少しはあつたが、自ら氣の進まぬところが多く、そのまゝ篋底に仕舞こんで置いた。その後知人から切に世に出すことを慫慂されたが、例の疎懶な性質から長い間うち捨てて置いた。顧ると日露戰役以後國語國文學界は一層の活氣を呈し、學界は日進月步、篤學の士によつて種々と立派な研究が數へ切れない程發表された。自分どもの如き世にあまされたものが兎角いふべきではないが、不思議なことには、ひとり日本文學に特有な枕詞の研究に就ては、明治大正を通じて、この詞に關する一篇の論文もパンフレツトをも見ないのは頗るもの足りないやうな感がする。そこで烏滸がましい次第であるが、このたび舊稿に多少の手を加へて世に出して見ることにした。併しなまじかに考へついたと思つたことも、今是昨非を曉ることが多く、解決の出來ない箇條は二十餘年を重ねた今日も同樣で、折角版にして見ると、何だか自分の學問の淺薄な未熟な頭をそのまゝさらけ出したやうで、衷心忸怩たる念に堪へないものがある。けれども私は不完全であると云つて、自稿を輙

遇突智の神に手向けたり、又古井を索めてその中に埋め込むほどの勇氣はまだもたないのである。さてこの詞に關した大體の意見は往年心理學會で講演した速記に遺つてゐるから、少し長くはあるが、序文に代へる積で次に載せることにした。世の先覺の方々はどうぞ御高教を垂れて我が蒙をお啓き下さることを心から切に御願いたす次第である。

昭和二年四月

多摩御陵の參拜を終へ還りて池袋なる我が小松園にて筆をとる。

著者　白す

序言

枕詞は現今に於ては多くの人士に忘れられて、大分縁遠いやうに思はれてある。併し我等の祖先は盛にこれを使用したもので、歴代の歌人文人の作物の中には屢これを見出されるのであつて、その數を計算して見ると隨分多數に上ることである。松山貞主の冠辭例といふ徳川時代に出來たポケツトブツクのやうな本には、足引の山、久方の天などいふ類の枕詞を五十音順に列ねてある。その數は大凡千二三百もある。物集博士の日本大辭林の終にも枕詞の五十音索引が添へてある。これにはすべてで九百六十八を載せてある。この差異はどうかといふに、大辭林の方には、例へば、ひさかたの天、ひさかたの月、ひさかたの雲の上等を一つに合せてあるが、冠辭例の方はそれを別々にしてあるからである。私の考究したものは、上の五音が同じものを一つに合せて計算すると千二百、接續の相異るものを勘定すると千七八百以上あつたかと記憶してある。今日迄斯樣に澤山に用ひられたのである。其の中には出來た時代の新らしいものもあれば餘程古いものもある。例へば「神風の伊勢」と云ふ枕詞は古典によると神武天皇がお始めになつたのであり、「ひさかたの天」と云ふのは日本武尊がお始めになつたことが記紀に見えて居る。倘さう云ふ例を

二三擧げて見ると「新玉の年」と云ふ枕詞は日本武尊の妃の宮簀姫が始めてお用ひになつたのである。又仁德天皇のお用ひになつた「そらみつ　やまと」或は「おしてる　なには」「つぎねふ　やましろ」と云ふやうな非常に古い時代のものもあれば、又極々新らしいものもある。現に明治大正時代になつて新たに出來たのもある。例へば故高崎男爵の奈破翁を詠まれた歌に「潮沫のヱルバ島」と云ふ續け方があり、村田良穂の甲信紀程には「さし楯の赤羽」とか「穗波よる田端」とか「刈り積むや稻荷の山」とか「神まつる杵淵の村」といつたやうな新らしい例がある。さう云ふ風に誰がどういふ枕詞を創めたかと云ふことを調べて見たが、それだけでも一冊の大きな索引が出來た位である。枕詞の中には斯う云ふ風に極新らしいのと古いのがある爲に、その意味が明瞭に理會されるものとさうでないものとがある。さう云ふ所から世間の歌人なり學者なりがこの枕詞に對し非常に間違つた考を懷いて居る方も多いやうに見える。それはどう云ふ譯かと云へば、まづ第一に枕詞は意味のない詞であると說いてゐる人もある。例へば「青丹よし奈良の都は咲く花の匂ふが如く」と云ふ歌で「青丹よし」といふ一句は一首の意味に何も關繫がない。これは無用の用と云つたやうな類であると說くのである。彼の良少將が仁明天皇のご崩御に方り非常に世を儚んで、ま盛りの身で忽ち黑髮を剃つておとし僧の遍照となつたことは皆人の知るところで、

たらちねはかかれとてしもうば玉の
　わが黒髪をなでずやありけむ

と云ふ名高い歌はその時に詠んだものである。この歌の「うば玉」と云ふ詞に就て既に平安朝の終りに於ては無用の用といふやうな考からこれを半臂句と名づけて居る歌人がある。中古の衣服の中に袖巾の狭い半臂と云ふ一種の着物があつた。この句は丁度半臂のやうなものであると考へて、さやうに命名したことが鴨長明の「無名抄」に載つてゐる。平安朝の終りに於て既にさう云ふ状態であつた。徳川時代の有名な歌人富士谷御杖などもさう云ふ説を「歌ぶくろ」の中にかいて居る。現代の學者歌人の中にもさう云ふ考を有つて居る人もあるやうに見受ける。斯かる説は外國人にまで傳はつたと見える。今から五十三年前、即ち明治十年西南戰爭の時に　チャンバーレン氏は「枕詞及言語上の遊戲」(ピロウワード・エンド・プレイ・アポン・ワーヅ)と云ふ題で亞細亞協會雜誌に一論文を掲げ枕詞は意味のない詞であると云つて居る。此の説は私どもの考では採るに足らないものと思ふ。是は中世に至り枕詞の本義を失つて、唯だ古人の用例を踏襲した作ばかりを見て無造作に立てた說に過ぎないやうである。次には枕詞は本文に關係がないからさう云ふものは別に研究する必要はない。唯だ山といひたければ「あしびきの」を使ひ、年といふには「あらたまの」といつておけば澤山である、別にその原義を正さなくても宜いと云ふ說を持て居る人も多いやうであるが、是も間違つた説と思

ふ。それはつまり枕詞と云ふものを殺して考へて居るのである。もしこれを活かして見るならば、さう云ふ説は恐らくは一顧の價が無いと考へねばならぬ。成程枕詞はその歌の中心思想を形づくるものでないけれども。これを用ふるに依つてある部分に特別の情趣を與へ、色彩を附し、その歌を讀んだ場合を間接に匂はせたり、又これによりて多少の背景を示したりしてその全體にある種の趣を與へると云ふ事を考へたならば、部分的のものだといつてそれを顧みないのは大に間違つて居る。かういふ考も第一の場合と同じく一掃したいと思ふ。第三には新らしい歌人や文人の中には枕詞と云ふものは古人の遺骸である、今日は詩歌に於ても無技巧を尚ぶ時代であるから、さう云ふ古い修辭法は要らぬと云ふ説を持つて居る人も少くないやうである。何千年の前に起つて世間に忘られて居る枕詞を復活すると否とは別問題として、枕詞といふものは前に擧げたやうに我が文學上には隨分多く用ひられ、然かも我國特有な措辭、特有と云つては少し獨斷かも知れぬが、恐らくは世界に類例の稀な修辭法である。それを學海が放棄して顧みないといふのは遺憾なことではあるまいか。新を喜ぶは人の情であるとは云ひながら、古いものの價も究めず、代ふべき新しいものを見出さずに、無暗にこれを斥くるといふことは思慮ある仕方ではあるまい。それゆゑに吾人は以上の三説あるにも拘らず、一切それらを斥けて、まづ枕詞の本旨と云ふものはどう云ふものであるかと云ふ事を知つて置く必要があるやうに考へる。今日は思想問題に就て新

聞や雜誌などに於て種々論議されて居るが、西洋の思想界に非常な變動があつても我國の思想界の根本が能く分つて居れば、吾々はそんなに驚かなくとも宜いと思ふ。これと同樣に吾々は日本固有の修辭法で而も材料が非常に豐富であるものを研究すると云ふことは無益でないと信ずるのである。枕詞は日本固有のものであつて他に類例がないと申したが、私の世界の文學を廣く究めてゐるのではないから、間違があるかも知れぬ。私の貧しい研究に據ると、希臘のホーマーの詩には我が枕詞に幾らか似通つたものがありはしないかと考へて居る。無論私どもは希臘の文字は讀めないのであるが、英譯又は獨譯を通して見ますと「ホーマー」の「オゼシー」の中には朝日の昇る形容を「薔薇色の指」即ち「ロージー、フィンガード」と云ふやうな文句が屢々繰返されて居る。又「イリアット」の詩篇の中には足の速かつた「アキレス」と云ふ人の形容に「スイフト、オブ、フット」と云ふ句がいつでも使はれてゐる。擊つことも殺すことも出來なかつたアキレスが、運のきはみか、最後に脚の腱を斷たれて歩くことが出來なくなつた時でも、矢張り「スイフト、オブ、フット」と云ふ形容の言葉が加へられてゐる。又「アガメンノン」にはいつも「キンク、オブ、メン」の形容を用ひ、「ジュノー」には「マイテイ、クヰン」と云ふ形容の詞がいつも加へられてある。この外濕つた波といふ形容も屢々見出す。斯樣にホーマーには「ホーマリック、エピセット」と云ふ術語もあるくらゐであるから、西洋の學に明るい方々に研究を願つたら、私

の存じないものがまだ澤山にあるのかも知れぬ。併し只今までのところでは他に類例を多く見出きないのでまづは日本固有と唱へてゐるのである。

枕詞に就ては古來種々な說もあるが私の考に依ると、その中には種々な要素が含まれて居ると思ふ。日本の上代文學に見えてゐる修辭法は對句と疊句とを除きその他の要素は悉く枕詞といふ中に包含されて居るやうに考へられる。此の點から見て枕詞の研究は古代修辭法の研究と云ふ意味にも近づいて來て、これが研究は忽せに出來ない第二の要項となる。

枕詞の中には古い種々の言葉や材料が包含されてゐるから、これを研究するときは古代の言語の學問上にも大なる貢獻をなし得ると考へられる。更に枕詞に使つてある材料を一々調べて見て、古人が此の材料をどんな風に取扱つて居るかと云ふことを考へたならば、上代の我が國民がどんな生活をなし又どう云ふ風に思想を表現したかと云ふことも餘程明かになるやうに考へられるのである。

次に吾人は枕詞に關し古人がどういふ研究をなしたかと云ふことを回顧して見る必要がある。そしてその上に吾々はどういふ研究を續けたら宜しいかと云ふことを考へて見たいと思ふ。始めて枕詞を研究したのは隨分古い事であつて、當初は日本紀、萬葉集などを講究する序に副次的に研究したのである。德川氏時代以前の研究は即ちそれであつて、古い歷史など研究する序にやつ

たのに過ぎないのである。古典や古歌集などから、これを抽き出してそのもののみを對象として主動的に研究したのは德川時代以後の事である。此の德川時代から今日に至る迄の間に出來た枕詞に關する書物で私の一通り見たものは四十餘部ある。中に西洋人の研究が二つ。他に著述目錄などに書名は載つて居るが實際私の見ないものが約十部ばかりもある、斯う云ふ風に澤山な著作はあるが、概括して古人の研究はと云ふと、唯だ一語づつ解釋するといふ方面に殆ど限られて居る。例へば「久かたのあめ」と云ふ事は如何なる義であるか、久しく堅い天であるとか、匏形の天とか、日刺方の天といふやうな解說が主となつてゐて、其の他は接續上の例を擧げてあるばかりである。此の解釋に關しては極めて意義の明白なるものもあるが、中には各人各別の說を立て今に一致を見ないものが隨分少くないのである。その說の區々なるものに於ては吾人は何方に從つたら宜しいか分り兼ねるものが多い。今試に古今の學說が多岐に分れてゐる一つの枕詞に就て色々な說をとりつまんで述べて見やう。「足びきのやま」と云ふ枕詞に就ては十幾通りの異なつた解說がある。先づ第一に天曆の頃に出來た矢田宿禰公望の日本紀私記の中には、山へ行くと登るのに苦しい、苦しいから足を曳く、それで「足曳の山」と云ふ風に說いてある。所が鎌倉初期の和歌の權威者であつた京極中納言定家卿は古今集の顯注密勘と云ふ書の中に「あしびき」といふのは芦を引いた事である。我邦は太昔には非常に沼澤などが多くて人々は大抵山の上に住つて

居た。道が惡くて常に困つたから刈つた芦を引いて來て山に登るに便利にした、それで「あしびきのやま」と云ふのだと解釋してある。尤もこれは定家卿の自說でなくて古人の說を引用したもののやうである。それから少し降つて文永の頃（矢張り鎌倉時代で元寇のあつた頃）に出た有名な仙覺律師はどう云ふ說を抱いてゐたかと云ふに「あしびき」と云ふは山齋の木のことで（現今東京邊には盆栽にするやうであるが、田舍へ行くとその葉を煮て野菜などに生ずる有虫を殺すに便つてある）その木の茂つて居る山と云ふ說を立てて居る。前說よりは餘程進んだ解釋である。萬葉集には馬醉木を詠んだ歌が數首あつて地方によりては山に多い木である。德川時代になつて枕詞を始めて主動的に研究した下河邊長流の枕詞燭明抄には古來の說を集めて載せてある。昔三方と云ふ沙彌があつて惡い日に旅立して非常に難儀をした、そこで旅をするには吉日を撰まなくてはならぬ、惡しき日に出て來て山で災難を得たから惡日來の山と云ひだしたといふ一說も舉げてある。長流は古學者でさう云ふ迷信說を信じた譯でなからうが、古說として載せて置いてゐる。賀茂眞淵の「冠辭考」の說では「あしびき」の「しびき」と云ふのは繁木で、山は木の茂つてゐるのが尊いから、茂つた木の山と云ふ意に續けたと說いてゐる。尤も「あしひき」のあの字に就ては、青いと云ふ意味か、「あめつち」のあめといふ意味か、或は神代史にある軻遇突智の神の足は、繁山祇といふ繁木山を掌る神樣になられたといふ神話に依つて、足を云ふ意味かとも考へ

られる。その三つの一であると説いてある。その門人の楫取魚彦の冠辭懸緒といふ書には朝日刺す木山の義だと説き、本居宣長の古事記傳にはあしひきは足引城の意にて、山脚の長く引き延へた一構への土地の義で、下のきと云ふは「城」であると説いてある。又萬葉の研究に一身を委ねた土佐の鹿持雅澄は、萬葉枕詞の中によく茂つて居る「檜」の山と云ふ風に説いてある。高橋殘夢が石上枕詞例には、あしひきは山の形勢を指したもので、山脚の延びた形をいつたものであると説いて居る。又故黑川眞賴博士は大きく茂つた木の山か、若しくは令生木即ち美しく生へた木の山と云ふ義の轉と説いてゐる。斯う云ふ風に色々の説があつてどれが正しいか取捨に迷ふばかりである。斯くの如く面倒である上に本文にはあまり關係がないから研究せずとも宜しいと云ふやうな説が起り易くなるのである。私共の考へて居ることは一體此の枕詞を始めて誰が使つたか、又どんな場合に用ひたかと云ふその最初の有樣を考へ、自らその當時の氣分になつて解したら正鵠を得る事が出來やうと考へるのである。そこで此の「あしひき」といふのは木梨輕皇子が始めて「あしひきの山田をつくり」と使はれたのが書に見えてゐる最初のものであることをつきとめて、歌の前後の續きや當時の狀況を考へて解釋したいと思ふのである。眞淵の冠辭考はこの詞の研究史上エポック・メーキングの作であつて宣長翁の如きもこの書に由つて感憤し、古學に志を深めたといふことであるが、田安中納言の評せられたやうに、眞淵は枕詞を難かしく說

く傾向がある。併し古人はさうむつかしい理窟を並べて歌を詠んだものではあるまい。又さういふ歌ならば傍で聞いてゐても一向面白くはあるまい。私どもの考では何でもその眼前にあるものを採つて歌に詠む、枕詞に使ふといふ風であつたと思ふ。例へば此所に青色の着物を着てゐる方がある、それを形容するにそこらを飛んでゐる青い毛色の「そに」と云ふ鳥を譬にとつて「そに鳥の青きみ衣」と詠むとか、又黑いと云ふには、邊りに澤山生へてゐた射干の實の黑いのを例に取り「ぬばたまのくろき」と云ふ風に、眼前にあるもの若しくは一方をいへば他の方が類推されるやうなものを持つて來て、譬にするといふ風であつたかと信ずる。兎に角枕詞を活かして使つたものに違ひない。さう云ふ風に皆解釋したいと思ふのである。斯ういふ見地から云ふと彼の名高い「冠辭考」も飽き足らないことや、無理な說が多いやうに思はれる。例へば「つぎねふやましろ」と云ふ義を大和の國より山城の國へはあまた續きたる峯々を經過して到る故に次嶺經の意であると說いてあるが、山から山を通つてゆくのは何も山城に限らぬ、大和から伊賀や紀伊へ參る方が次々に嶺を經なくてはならぬ。又この大和山城二國より山の澤山ある所は多い。然るに山城に限つて用ひてあるのは別の理由では無からうか。又他の書に依ると「つぎねふ」は繼木根生にて、卽ち若苗の作つてある處の山と云ふ意味の續けだといふ說もある。是も吾々は聞いて成程と感ずることは出來ない。一體解しにくい古語を眞淵の試みたやうに延約の說を無闇にあてては

めて見るとさんでもない誤を生ずることがある。解りにくい語には本邦語でなくて他國語の交つてゐるものが無いとも限らない。例へば萬葉の中に「葛飾の眞間のてこな」と云ふ婦女のことがある。このてこなといふは私はアイヌ語では無からうかと考へて居る。アイヌ語にて蝶のことをてこなと云ふ。それを女の子の名につけたものであらう。これに就て思出すのは木村鷹太郎氏の說である。氏は世界的研究に基ける日本太古史の中に冠辭二十餘种を說明してゐる。その中「つぎねふ」と云ふのは希臘語で「双生」を意味して居るメンゲネスと云ふのが訛つたものと說いてゐる。そうしてつぎねふ山代川とある山代川は埃及にあるナイル川のことでその上流が二股に分れてゐる。所謂スンゲネスになつてゐる。これはアポロの神話から起つた地名だと解釋してあつたやうに記憶してゐる。吾々は斯うまでは說くことも信ずることも今では出來ないのである。試に「つぎねふ」に就て私の考を述べて見ると、「つぎね」と云ふのは草の名で、今の「ふたりしづか」のことである。「ふたりしづか」は山城地方に非常に多い草である。つぎねといふ名は隨分古く用ひられた稱と見えて、源順の倭名抄にも載つてゐる。そうして「つぎねふ」の「ふ」と云ふのは園生、芝生、粟生、淺茅生などの生で物の生へて居る場所と云ふ意味である。つまりその地方の物を以て枕詞とされたものと信ずる。この枕詞は仁德天皇が山城の筒城宮にお出になつた時の御製に見えてゐて、當時天皇はその宮の邊に多く生へてゐる「つぎね」を眼前にみそなはして

む詠嘆ばしたものと考へられる。私は斯ういふ風にその時の狀況とか自然物とか當時の人の氣分などを考へ、むづかしく說かないでなるべく易く解釋したい。枕詞は意味の無いどころでは無く昔の人には當人は勿論それを聞いた人もすぐに善く分つたに違ひないから、さういふ心持で解釋したいと思ふのである。古書に載つてゐる枕詞の中で解釋の出來にくいのは文字の寫し誤の場合も多いことと思ふ。仙覺律師の如きは鎌倉時代に生れ萬葉難解の歌百五十二首の讀方を新に考へた程の人であるが「ことさへぐ、百濟」といふ枕詞を「ことうへぐ」と書いてある本により牽強の說を述べてゐる。下つて卜部懷賢の「日本紀纂疏」には「いすくはし鯨」とある枕詞を「い救はし」といふ風に解してゐる。斯の如く古大家の說にも隨分と間違や無理な說があるから現代の新らしい頭を有つた方に更に深い御研究を願ひたいと云ふ考から以上の如く述べた次第である。古人を誹る考などは毛頭ないのである。尚此の解釋に就て一々愚見を申し述べることは爰では避ける。

次には枕詞全體につき愚見を陳ぶるに先ち、その名稱の沿革に就て多少說明する要がある。一體枕詞と云ふ名稱は現今廣く一般に用ひられて居るやうであるが、又冠辭の稱を用ひる人も少くない。一番古い時代には何と呼んだのか分らないが、天暦の頃には「發語」と云つて居る。これは上の言葉が次の言葉を引起す意味で使つたやうである。それから鎌倉時代には仙覺はこれを諷

詞と云つてゐる。降つて足利の中頃からは枕詞と呼んでゐる。今川了俊の著書などにその例が見えてゐる。冠辭と云ふ名稱を用ひたのは荷田春滿が始めで、眞淵も其の説を敷衍して居る。上田秋成は「うず」「かざし」などと付けるのが正しからうが、よそひと呼ぶと云つてゐる。谷川士淸は「歩語」、「頭辭」などいふべきかといひ、本居大平は設け詞と命名し、漢學者の中には「發語」と言ふのが適當であらうと云つてゐる人もある。又「玉かづら」と稱してゐるものもある。此の名稱を研究すれば枕詞に對して古人の有つて居た考が粗々分るやうである。

　次に枕詞の定義に就きて述べる。抑も枕詞といふものは如何なるものを云ふか。「ひさかたの天」「あらかねのつち」などと例を擧げて見れば直ぐ分るが、もう少し他の言葉で概括的にその意味を申して見やうと思ふ。普通には「あしびきの山」といふ枕詞ならば、その中の上の五音だけを枕詞といつてゐるがそれだけでは實は枕詞とならぬのである。枕詞は上下の關聯したものでなければならぬ。上半分だけでは特別の意味をもたぬことになる。例へば柿本人麿の始めて用ひた「鳥がなくあづま」と云ふ枕詞でも單に「鳥が啼く」だけでは普通の句であつて枕詞ではない。兎に角上下の約束された言葉と云ふ事を考へなくてはならぬ、此の上下の約束の中で上の方へ來る言葉はどう極めるかといふと、普通は五音からなつてゐる。「あしびきの」でも「ひさかたの」でも皆五音である。併しながら精密にいへば、三音からなつてゐるのもある、四音からなつてゐ

るのもある、又六音からなつてゐるのもあれば七音もある。例へば古今集の序にある「月の桂」「春の梅津」などの月の春のは三音から成つてゐる。四音のものには「おしてる、なには」「そらみつ、やまと」「みかしほ、はりま」「つぎねふ、やましろ」と云ふ類で古い書にその數は凡そ二十ばかりある。尤もこの類は後には「おしてるや、なには」「そらにみつ、倭」といふ風に五音にのばされてゐるのも大分ある。これは歌聖人麿などが長歌のリズムを五七調に統一しやうと考へた結果から生じたのである。それから六音の例は「つまびらか」と云ふ古言のつばら／＼と云ふ詞の上に置く「梶の音の」と云ふ類で、「いかほの沼の、いかにして」と云ふのは七音の例である。七言以上のものはないかと云ふに同じ類のものがまだ他にある。例へば「ながらへて」と云ふに「ささきみの長等のやまの、ながらへて」と置く、是は十二音から出來てゐる。長いといふ爲に「あしびきのやまどりのをの、しだりをの」と三句十七音を置いてある。又くらなしの濱といふ爲に「乙女子が赤裳ひづちて植ゑし田を刈りてをさめん」と二十四音置いた例もある。長歌に至つては更に長く、柿本人麿の歌には七五調二十四句二百六十八音から出來てゐるのもある。さう長いものと短いものとを一つに合せるのも不便である。そこで私は日本の和歌が五又は七のリズムから成つてゐるものが多いから、七音以下を枕詞と定めそれ以上を序と名づけることにしてゐる。次に下の方の言葉との關係を考へて見ると、その全部に懸るものと一部分に懸るものとの別もある、又一

語だけでなく一句全體の上にかかるものもある。例へば「鳥が啼く、あづま」と云ふのは今日では全體に懸ると見るが、鳥が啼く東麿大人と云へば人名の一部分に懸つてゐる。「犬じもの、道に臥しつゝ」の犬じものは下の句全體にかゝつてゐる。斯う云ふ風に上下關係してゐるもの、上の部分は無論下の言葉を現はす爲に從屬的の地位に立つもので、下の言葉が被修飾部であれば上の部分は修飾部となるのである。

次には枕詞の起源に就て考へて見たいと思ふ。最も普通の説は上の部分は調を整へる爲に置いたといふ説で（第一）これは大分有力な説である。日本の歌は古くは五、七調にきまつてゐた。それゆゑ五と置くべき時に七といつても都合が悪いから、調子の爲に、一句を置いたのに始まつたといふ、つまり整調説である。眞淵は冠辭考の初に於てさういふ説を旨と述べて居る。（所によつては次にいふ修飾の説を交へてゐる所もある）香川景樹の如きも矢張整調説を唱へて居る。

これに對し上の一半は下の語句の修飾の爲に用ふるといふ説（第二）を執つて居る人もある。上田秋成の如きはそれを主張した人で、即ち或る言葉を綺麗にする爲に使つたのではないかと云つて、その名稱もよそひごと云ふが適當だとしてゐる。この修飾説は整調説と共に今日も有力な説である。橘守部が枕詞は稱言の一種だと説いてゐるのは「花ぐはし、櫻」の類を見て云つたことゝ考へられるが、これも修飾説の中に含めて善からうと思はれる。次には枕詞は古くより意味の

分らぬ言葉である、それゆゑ飜譯的に上下同義の語を重ねたものであらう。（第三）例へば「ひきかた」と云ふ言葉は譯すると天と云ふ語で、「あをによし」と云ふ詞は奈良といふ言葉である、これは千字文を讀むに天地玄黄「あめつち黒く黄い」と重讀すると同じ起原であらう。この重譯說は荷田春滿が或る一つの枕詞に就いてほのめかしてゐるやうである。現代に於ては或先輩がそう云ふ考をもつて居られるが、その他某先輩は枕詞は或る同音の語を區別する爲に起つたものではないか。（第四）例へばしようと發音する字が澤山ある時、正月の正とか或は暦の大小の小といへば區別がよく出來るやうに、同音異義語を區別する爲に用ひたものであらう。朝鮮の、興富傳といふ小說に口字形の家といふことがある。これは中庭を四方から圍んで出來てゐる朝鮮家屋を特に說明したもので、區別の爲に起つたのだ。枕詞もこれと同樣であらうと說くのである。此の區別說も大分耳を傾けるに足る說と思ふ。然しこの說の當否を考へるにはまづ日本語には一體同音異義語が多いか否かと云ふ研究に這入らねばならぬ、先づ古い時代のことは正確には分らぬが楫取魚彦の古言梯には總數千八百八十三語を收めてあるが、その中同音異義語は二百二十六語ある。可なり多いと謂はねばならぬ。それを區別する爲に枕詞が起つたと想像するも一說とする値もあるかも知れぬ。だが現存してゐる枕詞を調べて見ると實際は極めて少いやうだ。かけといふ語の中、心にかける方には「たまだすき、かけ」と云ひ、家鷄の方には「庭つ鳥かけ」と用ひた

など數例しか見られない。次にある語を說明せむが爲に置いた詞といふ說もある（第五）日本紀私記に發語と命名したのはさういふ所から來たとも見えるが說明がないから分らぬ。本居太平の如きはある語を審にする爲に設ける語といひ、高橋殘夢は說明の爲に事の故を置くのだといつてゐる。この釋明說は第二に述べた修飾說と多少の交涉がある。修飾說はこの釋明說の一歩進んだものたるに過ぎないのである。

次に枕詞の性質に關しても種々の說がある。チャンバレーン氏の如きは同格語といつてゐる。土子金四郎氏は洒落哲學の中に滑稽の語だと說いて居る。尤も滑稽のものといふ考はそれより前に井上淑蔭氏などもその歌學書の中に述べてゐる。眞淵や秋成の說は起源を論じたところに述べた通である。仙覺は諷喩的のものと見たのであらう。その他にも尙變つた說があるが、私の考ではその起源に於ても性能に於ても唯だ單純に整調の爲であるとか、修飾の爲であるとか、一元的に取扱ふと云ふことは事實上いかがと思ふ。說明に用ひたものもある、修飾の爲に用ひたものもある、音調の爲に用ひたのもある、色々な分子がその中に含まれてゐるから、私はむしろ多元的に取扱ひたいのである。中にも私の第一に擧げて見たいと思ふのは一つのものゝ顯著性を示す一群である。著るしい點を有つて居るものがあると、それを取出して、次の言葉を思はせると云ふ手段を執つたのが大分あるやうに思はれる。例へばなにはの地名に「芦が散る」と置く、これは

古昔の浪華の浦には蘆荻が叢生して居てその花の散るさまは雪でも降るやうな趣があつて特に人の注目を惹いた、そこでその土地の顯著なるものを擧げて浪速浦を聯想させたのである、或は「眞菰刈る淀」と云ふ續け方がある。これは淀川の水が停滯して其の邊一帶菰が生へて居る、里人のこれを刈取る狀が行人の目にとまり易い、そこでその實景を詠つたものが、後には菰を刈る時でなくても彼地を思出させるやうになる。以上の如き地理的のものでなく、人事の上について云つて見ても同樣で、人の力の強い有樣を云ふには「ちはやぶる」と云ふ語を用ひる、是もその顯著性から來たのである。「八隅知し我が大君」「高光る日の御子」といふのも稱贊の語ではあるが同じ類と見るべきであらう。

第二には類似性から來たと思はれるものがある。一つのものを說明したり修飾するのに似寄つたものを持つて來るのである。古人は創造力が強かつたか、種々の喩を取ることは著るしいものである。例へば婦人の形容をするに、婦女が柔順であると云ふことをいふになよなよした若い草に喩へて「若草の妻」と云ひ、眞白い肥えた手を形容するに大根に喩へて「ねじろの、白き腕」と比してある。「花の顏ばせ雪の肌」などの形容は後世のことであつて、大根のやうに白い腕と美人を形容するは洵にプリミチーブな奇拔な比喩ではないか。枕詞は斯の如く直ぐその附近にある物、若しくは人のよく知つてゐる物を持つて來て分り易く云ふのが普通であつて、或は若々しい人の

胸を「沫雪の若やる胸」といつたり、或は顔の立派である婦人のことを「櫻花匂へる妹」或は「躑躅花匂へる妹」などゝ云つたものもある。斯う云ふ類似性から來たものが澤山ある。そうして斯ういふ喩を取るにも支那人とは大分趣が違つてゐる。同じ婦人の形容をするにしても支那人の方では動物に喩へることが珍しくない。例へば詩經碩人の章に膚の綺麗なことを「凝脂」の如くと云つてゐる。手の白いことを「蝤蠐」の如しと云つてある。是は樹の髄を食ふ白い蟲だと聞いてゐる。我邦ではこれと異り植物に喩へることが多いのである。そうしてその喩は如何にも自然で極く晴々した傾向をもつたものが多い。斯いふ所にも國民性の流露を見るのである。

第三は相關性で聯ねるのである。私は一向心理學の事は委しくは存じないが、此の相關性の中には大きいものと小さいものと、反言すれば部屬の關係で聯ねたのがある。先づ鳥の例でいつて見ると、上に類とか族とかいふ如き大きな名を擧げて下に種とか小さき名を連ねるのである。例へば家鶏（かけ）を云ふ爲にまづ家庭に飼つてゐる鳥即ち庭つ鳥といつて「かけ」と續け、或は野つ鳥といつて次に雉子と連ね、島つ鳥といつて鵜と續け、沖つ鳥といつて鴨と連ねる類である。この類はまづ總念を與へて多少の準備をさせ、それからその中の小い種名にうつるのである。この相關の中には種々の種類がある。その地に地する傳説と結び付けたものがある。例へば「神風の伊勢」の如きがそれであらう。又その地の名産を結び付けたのもある。例へば大和の三輪にはうまい上等

の酒を産した所から「うまさけみわ」といふのである。(尤もこれらの枕詞は種々の異説があつて解しにくいのであるが、自分はまづそう決めてゐる)又概括した數を言つて置いてその中に含まれてゐるものを連ねるのもある。例へば上に「百足らず」と置き下に八十とも五十路とも云ふやうに續けたのもある。

第四は音調から來たもので、適當の名稱を知らないが、今假に聲調性とでも云つて置かう。上下の事柄には何等の類似も關係もなく唯だ音調の類似で次の詞を引き出す類を指すのである。例へば紀貫之が夘した「唐衣頃も久しき」の如く脚音を繰り返して別の物に續けた如きはそれである。尤も聲調の方では「芥川俺くとや」の如く頭の韻を繰返すもの、又中間の音を繰返すもの、即ち頭韻、間韻、脚韻の別がある。頭韻は西洋では十四世紀頃までは一般に用ひたものである。後に至つても英國のチョーサーや獨逸のヨルダンなど矢張盛に用ひたのである。

次に或る一つの事が基であつてそれから次の意味に變る。是を轉義と名づける。前に擧げた中にもその例があつたが、更に擧げて見ると「あしびきの山」と云ふより「あしびきの病」「あま小舟はつせ」といふより「あま小舟二十日の月」といふが如く全く懸離れた意味に轉ずるのである。これが枕詞を發達させ、多種多様にするのである。前に擧げたやうに枕詞の總數を約千二百と概算しそれを時代々々に分けて見れば古事記・日本紀の時代に在る枕詞は凡そ百三十、萬葉集には約

五百、三代集にはざつと三百である。鎌倉や室町時代は創始されたものが殆ど罕で、次の徳川時代には先づ二百六十程ある。

次には枕詞の發達に就て少しく述べて見る。文獻によれば神武天皇以前に見えた枕詞は約二十種、それから萬葉集以前には說明的のもの比喩的のもの轉義のものが稍々同じくらゐで、萬葉集に至ると「飛鳥川あすも」の如き聲調的のものは十數倍も增し、記紀時代に少かつた「さなかづら後も逢はむ」の如き隱喩の類も餘程殖えて來た。この時代に於て柿本人麿は百二十餘種の枕詞を用ひてゐるが、その中の五十は皆この詩人の創造したもので、二十は古い枕詞を新しく生かして使用したのである。大伴家持の如きは百種の枕詞を用ひてゐるが自家の創始したのは僅に二十四種に過ぎない。三代集時代には比喩の中にも「犬じもの」、「鹿兒じもの」といふ類は全く用ひない、又「花ぐはし」「香ぐはし」の如き禮讃の類も用ひない。その代り掛詞、緣語と伴つて用ふるやうになつた、例へば古今にある、

からごろも日も夕暮になるときぞ
かへすがへすも人は戀しき

と云ふ歌に於けるやうに、古の衣には紐が着いて居た、それを結ぶといふ所から「日もゆふぐれ」と轉義したのである。そうして更に着物は折つたり返したりする所から「返す返す」と云ふ緣語

が伴はれてゐる。或は「瀧つ瀨の、はやき心」と云ふ枕詞を用ひてあればこれに關聯してその下に「人目づゝみ」と云ふが如く堤といふ緣語を伴つてある。三代集にはこの類が隨分と少くない。

尙もう一つ掛言葉に兼用することが流行した。例へば、

別るれば心をのみぞつくし櫛
　さして逢ふべき方を知らねば

に於けるやうに、心を着くといふ所から筑紫櫛に言懸けて枕詞とし、櫛は頭髮に挿すものであるから指すの義に轉じてある。一體「つくし櫛さす」といふ枕詞の筑紫櫛は下の「さす」だけにかゝるのが本體であつたものが、この場合にはその上にある心をのみぞの判定語の役目をも兼ねてゐる。斯うなつて來ると單に枕詞といふべきか否やといふことを考へねばならぬぐらゐに發達したのである。或は一つの語が二つの別々の語に關係するやうな枕詞も生じて來たのである。例へば「梓弓春立ちしより年月の射るが如くにおもほゆるかな」に於て、梓弓の張るといふ所から春にかけてあるが、射るといふ緣語にも響かせてある。

斯ういふ風に五音から成つた語で種々の詞に連ねて枕詞となつてゐるのも少くない。中にも梓弓と言ふ語は今日迄の歌書に見えた所でも四十幾つの異つた語にかゝつて枕詞となつてゐる。梓の木で作つた弓に限つたことは無いが、兎に角弓には弦があり、筈がある。筈には本があり、末が

ある、面も裏もある。さうしてそのものを使ふ上から云へば矢をつがへて、押へる、引く、張る、放つ、かへる、音を立てると云ふやうに、色々の働きがある、これらを利用して、鶴の命、敦賀の海、思はず、末野、末の球名、(人名)矢田、屋陸、八幡、八十の港、八島、大和、小嶺山、引野、引豐國、春、歸る、與良の山、音羽、入佐山、入野、入江、磯邊、一志の浦、軍の庭といふ風に色々轉義させて用ひるのである。池邊義象君の歌には「梓弓印度の海に船出して」と云ふ續け方もあつたやうだ。今後尚殖えるかも知れぬ、彼の梓弓ほどの數には上らなくても可なり續け方の多いのがある。例へば「ひさかたの」は三十、「ぬばたま」や「たまくしげ」は二十幾つ、「からごろも」や「しろたへの」は十五六の異なつた續け方がある。三代集時代の歌人は記紀や萬葉に始めて見えた枕詞の中、優美な五音を取つて新しい續け方を工夫することに骨を折つたやうであるが、上下全く新なのを思付いた例は比較的少いやうである。

　次に枕詞の上半に採つた材料につき調べたところを少しく述べて見ると、自然界は植物が多く動物はこれに亞ぎ、礦物は極めて少いのである。植物の中では木本よりも草が多く、草の中では花もの丶次には水草や蔓草が割合に多い。動物では鳥類が多く鳥の中では水鳥が大部分を占めてゐる。海國でありながら魚類の少いのは不思議である。天象や月令では日のことは多いが星は少く、一日の中では夕よりも朝のことが多く、一年の中では春が多く見えてゐる。地儀では山は少

く水に關したものが非常に多く、人事に於ては衣は多く住はこれに次ぎ食のことは少い。武器は劍が多く弓がそれに亞ぎ、鉾は少い。裝飾品では玉が最も多く鏡がそれに亞いでゐる。身心に就ては體に關するものが多く、體の中では上體の部分が多い。生業に關しては海人のことが多く、次は狩人工夫樵夫等で、農に關するものは少く、商に關するものは殆ど無い位である。此等の統計を委しく調べて見ると上代國民の心理研究の資料になるかとも考へてゐるが、多岐に亙るを恐れて爰には省略する。

　枕詞の種類その他に就て尙述べたいこともあるが、こゝには省略して、最後に枕詞の將來といふことに關して少しばかり述べて見る。私は以上の如き性能を有してゐる點から枕詞は今後も全く亡びない、又滅したくないと思ふのである。今日新らしい歌をお詠みになる方などは舊い修辭法は一切排斥するといふ意氣込であるやうに見受けるが、內容をぬきにした技巧は勿論排斥せねばならないが、古往今來立派な文學は充實した內容を盛るにふさはしい技巧は世界いづれの國の文豪でも用ひてゐるのである。破壞は建設に先つといふこともあるが、舊來の日本家屋が都合が惡いといつて、代るべき住宅も作らずに壞すといふことは考ふべきことである。況んや舊いところにも調べて見ると幾多の美點や長所のあることを忘れてはならないのである。古い風の歌をお詠みになる方は唯古人の用方を踏襲するばかりでなく枕詞を活かして使つて戴きたいと思ふのであ

る。近松巣林子の如きは歌人ではないが戯曲の中に枕詞を工夫して用ひてゐる。出世景淸の中に「白旗の源氏の大將」などと創作したるもあり、天網島には「營む業も紙店に紙屋治兵衛と名を付けて千早ふるほど買ひに來る」と地口にも使てゐる程である。故高崎正風男は晩年に御目にかゝつた時、自分は歌人を以て目せられるのは困るといつてゐられたが、時に臨んでは新しき枕詞を作られてゐる。例へば駿河の志田温泉へ行かれた友人に新年に送られた歌に「裏白のしだの出湯に君ませば」と云ふやうな作があつた。これは裏白は本名がシダであるから、これを地名の志田へうつした枕詞であるが、お正月の事だからその景物が活きてゐる。かう云ふ風に現代に於ても場合に應じ新作があつて欲しいのである。私が麴町元園町に寓居してゐた頃、門前で十ばかりの女子が三四人遊んで巫山戯てゐながら枕詞のやうな詞を使つてゐたのに驚いたことがあつた。種といふ女子がその中にゐたと見へて、「梅干のたねちやん」と繰返してゐると、他の方では愛といふ子が居て「お肴のあいちやん」と同じやうに呼んで居た。これは唯滑稽に云つてゐた例であるが、子供でも枕詞の如きものを創作する例として當時枕詞を研究してゐた私にとつては甚珍しく感じたのである。無心の子供の申す中にも斯のやうであるから、天分に富まれた文學に携はれる人々は機に臨み時に應じてこれを創作されたり、或は舊來のものを活かして用ひられることを希望するのである。尙述べて見たいことは多くあるが、あまりに長くなることを恐れてこれで終

とする。

これは大正八年心理學研究會の爲に赤門内の講義室で講演した速記の大要であるが、今本書を出すに方り序に代へてこゝに掲げたのである。

目次

第一編　枕詞の研究史

第二編　枕詞の研究（その一）

第三編　枕詞の研究（その二）

附録　年表索引類

第四編　枕詞の釋義

目次終り

凡例

一、本書は四編及附錄より成り、第一編は枕詞の研究史とし、斯の詞に關する內外古今の學者並に歌人等の研究の跡を尋究し、二十節に分ち論じたり。第二及第三編は余が描き研究の成果を記載せるものにて、第二編にはその名稱の由來沿革より始めて、その內容形式を說き、その發生の起源をたづね、その發展及生命を論じ、第三編には記紀時代・萬葉時代・三代集時代及その以後に於ける各時代々々に使用したる斯の詞を網羅し分類して時代の傾向を說き、又この詞の創始者並に新しき接續を試みし狀況を明かにしたり。第四編は斯の詞の釋義の部とし、古今の枕詞一千有餘を諸集よりぬき五十音順に列ね、各枕詞のあらゆる接續の狀を說き、その證歌を掲げ、上下連接する所以を述べたり。

一、枕詞採錄に方り、古來の學者又は歌人がそれと定めたる中にも、唯尋常の形容詞句等に過ぎざるものあり。又考定の結果枕詞と見做すべからざるもあり。敷宴相の如き、冠辭考にとりて以來、これを擧ぐるもの多しといへども、原文の誤讀より來れるものにて、枕詞にあらざること疑なし。されど本書には便宜上これらの類をも捨てずして、その條下に誤なることを說きたり。

萬葉集所載の枕詞には漢字を宛てたるより、學者によりその訓方を異にせるものあり。味澤相をあざさはふ・うまさはふ兩樣に訓し、水薦刈をみくさかる・みすゞかる・みこもかる三樣に訓せるが如し。本書には各別にこれを擧げ、その正しと思ふものの條下に釋義を附することとせり。

一、一の枕詞にして種々に連るものは、上下連接の自然的なるものを首とし、次に轉移せるものに及せり。これ枕詞展開の自然的徑路を見るに便なればなり。而してその類例の同じきものにありては、年次の古きものより次第に時代順に連ねたり。又同一用例のものはその古きを擧げて新しきを省きたり。

一、引例には長歌は僅にその一部分若しくはそのかかる語句にのみ止め、短歌は全首を出したり。而して記紀萬葉の如き字書多く且目馴れざる文字を用ひたるものは讀下の便宜を考へ、異說なきものは平假名又は常用の漢字に改めたり。但し諸家の解釋に引用せるものはなるべく古典のまま出せるも少からずとす。これら證歌の排列は主として成立せし集の時代順によりて叙でたれど、又釋義の說明上、接續の類似せるものを次第に並べたるものも多少これありとす。

一、個々の枕詞の解釋に關しては古來學者の間に異說ありて一定せざるもの少からず。又今日の研究にては尙未だ明解を下すこと能はざるもの多きが故に、首に余の信ずるところを揭げ、次

に古今の諸説を著書若しくは著者の年代順により、その説の異なるところの要文を抄出して載せたり。中には僻説取るに足らずと見ゆるもあれど、他の説との關繫上なるべく網羅することとせり。これこの詞の研究に從事する人に參考の料とならむと思惟したればなり。

一、枕詞に關する著作は比較的多からず。そが中寫本稀にして世の讀書子の目に觸れざるもこれあらむ。その目ありて管見に接せざるも少しとせず。本書には第一編に於て古人の著作の大要を述べたるが、個々の枕詞の解釋に關しては、一つ一つの枕詞の條下にこれを引きたり。而して中古より現代に至る異説を列擧し置きたれば、語學史研究者にとりても多少の參考とならむと信じ、繁冗を厭はずしてこれを列載せり。

一、附錄としては年表及索引二種を以てせり。年表は主として單行せる刊本並に寫本を旨とし、重要の關繫あるものは他書中の一部分の說をも多少交へ擧げ、末に、その名ありて未だ管見に觸れざるもの、若しくはその志ありて脫稿するに至らざりきと思はるる書名をも附載せり。索引の一は、第一編より第三編に至る間に所出の人名書名事項の索引にして、その二は、第四編に載せたる枕詞一千有餘の五十音引なりとす。この他、枕詞の作者を知るべき索引、掛けらるべき語句によりて掛くべき枕詞を知るべき索引の二種は紙數に限あるを以てこれを省きたり。

一、釋義の中、動植器財等の品物は圖解一篇を加ふる豫定なりしが、支障ありてこれを載するに

至らず。他日版を改むるに至らば附圖一卷を加へむことを期す。

一、第四編釋義の中に引用せる諸書の略符は次の如し。

【石】　石上枕詞例
【一言】枕辭一言抄
【稜道】稜威道別
【苑】　詞草小苑
【緒】　冠辭懸緒
【尾】　尾崎雅嘉枕詞補註
【解】　萬葉枕詞解
【考】　冠辭考
【鐘】　鐘の響
【紀】　古事記
【几】　冠辭袖几帳
【黑】　黑川眞賴古今冠辭考
【契】　契冲萬葉枕詞

【い】　いそのかみ
【稜言】稜威言別
【入綾】神樂催馬樂入綾
【奥】　奥儀抄
【小琴】萬葉玉の小琴
【折】　萬葉辭典
【管】　萬葉管見抄
【考略】冠辭考略
【雅】　雅言考
【記】　古事記
【玉蜻考】伴信友玉蜻考
【金】　金葉集
【古】　古今集

【古義】萬葉古義
【攷】萬葉攷證
【後】後撰集
【釆】詞林釆要抄
【双】双樹落葉
【私】日本紀私記
【精匠】精撰本代匠記
【拾】拾遺集
【栞】和訓栞
【匠】代匠記
【續古】續古今集
【燭】枕詞燭明抄
【信】信濃漫錄
【新千】新千載集
【新勅】新勅選集

【厚】厚顔抄
【國】國號考
【後拾】後拾遺集
【纂】日本紀纂疏
【三】三代枕詞例
【詞】詞華集
【枝】荻原元克詞枝折
【袖】袖中抄
【釋】釋日本紀
【續考】楫取魚彥續冠辭考
【續千】續千載集
【證】枕詞證歌附
【新古】新古今集
【新續古】新續古今集
【諺】和歌詞諺

【貂】冠辭續貂
【千】千載集
【選】萬葉集選要抄
【存】冠辭考存疑
【大】本居大平考
【貞】貞丈雜記
【槻】槻乃落葉
【傳】古事記傳
【豐】豐田八十代萬葉新釋
【年】年々隨筆
【檜柧】萬葉檜柧
【檜別】萬葉檜柧別記
【僻】萬葉僻案抄
【辨】冠言辨
【補】枕詞補註

【詔】歷朝詔詞解
【仙】仙覺萬葉抄
【旋】旋頭歌解
【玉勝】玉勝間
【鷹】木村鷹太郎日本太古史
【通】日本書紀通釋
【摘】摘要冠辭考
【童】和歌童蒙抄
【南】加藤枝直南山雜記
【服】服部高保續冠辭考
【比】比古婆衣
【彥】山彥冊子
【品】萬葉品物解
【袋】歌ぶくろ
【北】北邊隨筆

【萬】萬葉集
【美】萬葉美夫久志
【例】冠詞例
【龍】龍澤公隨筆
【萬燈】萬葉燈
【無】源俊賴無名抄
【略解】萬葉略解

凡例終り

第一編　枕詞の研究史

第一　序說

凡そ文化を有せる一國には獨特の文學あり。世界文學史に對して國文學史の存在するはこれが爲なり。一國文學にはまた特殊の修辭あり。一般修辭學の外に特殊の措辭法なかるべからず。我が國文學には今姑く想を離れて、形の上より見ても印度、支那並に歐米各國の文學に殆比類を見ざる修辭法の存するを知るべし。枕詞といひ掛詞といひ、緣語といふ。いづれも本邦特有のものにして他邦にこれあるを知らず。特に枕詞はその他の措辭と關繫を有し、その種類も頗る多く、古來の和歌にその他の文學に多少散見せざるはなく、これを研究するは興味甚だ多きのみならず、學術上極めて有益なるものとす。

然るに世の枕詞に關する見解こそ心得られね。曰はく意義なき詞なり。曰はく歌の文字足らざる時補ふ詞なり。曰はく理會しがたき詞なり。曰はく他に冠らしむる詞なり。曰はく滑稽に用ふる詞なり。曰はく何、曰はく何とその說區々にして統一するところなく、容易にその眞を認めがたし。近時の文壇に於ては一切の形式の打破を唱幾し、新を立つるに急にして古を顧みるに遑なく、殊に枕詞の如きは死語として注意を拂ふものなし。和歌が國民詩たる以上は緣語といひ掛詞といひ枕詞といふ類の措辭は國民特殊の所產として一わたり研究を遂ぐべく、學

術上決して閑却すべきものならずと信じて止まざるなり。

抑も枕詞は遠く上代に起り、藤原寧樂朝時代に至り盛に用ひられ、平安朝に至り更に發達變化せるものにて、試に萬葉集を繙くときは、その長篇には殆どこれを具へざるなく、自後の文學に於ても多少これを包含せざるはなく、足利時代の謠曲、德川時代の淨瑠璃、その他國文にて認められたる幾多の著書の序に跋にその餘にもこれを見出すべく、使用の範圍も極めて廣し。その種類より見るも同比あり、暗比あり、轉義あり、頭韻及脚韻を用ふるあり、その材料に資りたるものを撿し見れば、動植花卉より鳥獸蟲魚、衣服器玩より自然人事に至る凡百の事象を含まざるなし。依つてこれが研究は海外國の思潮を受けざる我文學に於ける修辭法の考察となり、他面には語原の究明となり、我國語の性能を明むる一助ともなり、純潔なる我祖先の構想法を察知する手段ともなるを得るなり。吾人は此等の諸點より半ば世の學界より忘却せられたる斯枕詞の攻究を以て汎く世人の注意を喚起せむことを望みて止まざるなり。

第二　古人研究の回顧

吾人は短見を述ぶるに先ち、まづ古人の研究の結果を明かにせざるべからず。歴史は創作の才なき徒のすさびと言ふ勿れ。いづれの業といへども先覺の惠示なきはあらざらむ。仄かなる一點の燈光も、道を辿る旅客にはいかばかりの力と望とを與ふるか量りがたきものあり。されば吾人は斯界に盡しし先輩の功績と失敗とを明に辨へ、

動かざる礎石の上に莊嚴なる殿堂を新に築かざるべからず。而して先進の所說を博く搜りてその卓見をたたへ、その誤謬を正し、その說の幽かなるところを闡くを以て、研究上の第一過程となさざるべからず。

熟々古人の枕詞研究の跡を考ふるに、最初は他の研究に附隨して纔にその一部分の考究せらるるに過ぎざりしが德川時代に至り、從來の副次的研究を離れて、主動的研究を起すものを生ずるに至れり。而してその先驅者たりしは下河邊長流を推すべく、これに次ぎて圓珠庵契沖あり、文學東遷期に至りて賀茂眞淵はこれが大なる殿堂を築き、その門人楫取魚彥・服部高保の徒これが補備を作り、又一面に於ては詠作上これを使用する便宜を考へたる人あり。斯くて眞淵派の繼述となり集成となり歌人派の雜著となり、轉じては反眞淵派を生じ、德川末期に至りては高橋殘夢の如き歸納派を生じたり。維新後に至りては一二外人の著作も出でたれど、その說見るべきなく、その他に於ても大いなる考究起らずして全く閑却せられたり。これその大要なり。以下序を逐ひて詳にこれを縷述すべし。

第三　副次的研究の起原及その經過

事實は說明に先つ。枕詞の使用は上古より行はれたれど、その名稱は記紀萬葉集の撰集時代には未だ起らず。平安朝に至り朝廷にて日本紀の講究を起されて後その研究の端は開かれたり。矢田部宿禰公望が天曆中に記せし日本紀私記中いすくはしの條下に發語と註したる、これぞこの詞の命名の物に見えたる始なるべし。降りて平氏全

壁の頃に至り、藤原清輔出でて奥儀抄、和歌初學抄、袋艸子等を著し六條家の歌學を樹立するに及び、多少これが研究を進めたり。即ち清輔が奥儀抄及その弟顯昭が袖中抄には解し難き枕詞の意義を詳說し、また和歌初學抄には喩來物の部中にそれを列擧し、その他の部にも詠作上いかにこれを使用すべきかを說くところあり。枕詞中のあるものは比喩として用ふべきことを說けり。

鎌倉時代に至り仙覺律師出で文永の頃萬葉の注釋をなし、集中の枕詞を解けり。但し當時は尙未だ枕詞の稱なく、俊賴、顯昭等の用ひたる如く諷詞の名を用ひたり。仙覺篤學にして善く萬葉を讀み古說を改め、また新點百五十二首を加へ創見少しとせず。されど善本少く、原本の誤字のままに說を立てたるところあり。彼の百濟原に騷くる言さへぐの枕詞を商來言右敵久とあるにより、ことうへぐと訓みて牽强の說をなせるが如き、また『冬こもり春さり來らし足引の山にも野にも鶯鳴くも』の歌に於て冬籠りを春の枕詞とせず、冬間鶯の籠れる意に見たる如き誤謬なしとせず。

仙覺と前後して神道家に卜部懷賢あり、藤原實經及その子家經の爲に釋日本紀二十八卷を著す。その二十三卷以下二十八卷に至る和歌部六卷には書紀の歌に見えたる枕詞を解釋せり。日本紀私記の一部がこの書中に引用せられて今に傳はりたるが如き、吾人がこの書によりて益するところは決して尠からざれど、解釋はすべて漢文にて簡約に記され、間々牽强附會の說を傳ふるものあり。神武紀に見ゆる鯨に懸けたるいすくはしを謂レ不レ得レ斂と註し、いすのいを接頭辭のいと見做し、斂はじと訓みたるが如き、枕詞の妙用を全く滅却したるものさへもなきにあらず。

足利時代に至り貞治の頃藤澤に由阿ありて詞林采葉抄及青葉丹花抄を著し萬葉の歌を注す。詞林采葉抄中には五十餘の諷詞を說けり。その說仙覺に負ふもの少しとせず。されど兩者の間にはまた差異あり。仙覺は悉曇の智識に基き音の相通を唱へ、一音毎に意義を說けること多く、由阿は口碑若しくは風土記等に見ゆる傳說を引き釋明せむとしたるところ多きに似たり。但し由阿が說は仙覺に比し不熟のもの多し。當時は尙枕詞のみを廣く蒐めて主動的に研究するには至らざりしなり。

第四　主動的研究の濫觴

古典研究の一部として副次的に考究するにあらで、古典その他より多くこれを抄出し、全體として枕詞を考察したるはいつを始とすべきか。吾人はさきに下河邊長流を以てそのその先驅者とせり。されど尙考ふべきなり。長流の枕詞燭明抄の序に發語を註するに特に三條内府實隆公の說を用ひたることを斷れり。尾崎雅嘉によれば逍遙院内府がこの詞百餘を撰してその義を釋したる書ありと云へり。吾人は未だその原本に接せず。今雅嘉の著はせる和歌枕詞補註を見るに、所載の枕詞百七十六種中、古人の說を引かで始めより今案と註したるもの七十三種あり。これを除けば百三種となり、序に云へる數と合す。而してこれを燭明抄に照合するに解說引用全く相同じ。さればこの書に先ち逍遙院の和歌枕詞といふ一本ありしを知るべし。然らばその先驅者は實隆公を推すべきか。兵亂打續き世は常闇の如くなりし足利の季世に斯道に於て明星の如く仰がれたりし公に斯る著作のありしは尊し

むべからざらむ。されど是は唯個々の枕詞の注釋又撰續を說くに止まりて全體の考說は無かりしならむ。
下河邊長流が枕詞燭明抄は上中下三巻ありて寛文十年大阪の書肆鳥飼市兵衞の開板するところ、契沖によれば長流の壯年時代の作といふ。この書萬葉より採るもの九十八種、三代集六々家集より抄出せるもの十種合せて百八種の枕詞を收む。その注は『日本紀・風土記・舊事紀・古事記・古語拾遺・萬葉の古抄、顯昭の說々、ことに三條内府實隆公の御說を用ひたり。私の管見も所々に加ふ』とある如く、諸家の說を網羅し自說をも加へたり。書籍廻林にこの書を藤原清輔の作とせるは妄も甚だしと謂ふべく、明和七年上梓の細川幽齋聞書全集第二巻に載せたるは射利の徒の徒ら事なるべし。試に之が注釋を取て萬葉管見抄に照し見るに合致するもの多し。管見抄は氏の壯歳の時の說といふこと一般に認めらるるところなるが、中に三つ四つは燭明抄とその說を異にするものあり。いづれか一方を改めたるなるべし。氏は枕詞を如何に見たるかといふに『歌に枕詞あるは人に氏姓あるに同じ。氏を置きて呼ぶ名の長きが如く、古き歌のたけ高く聞ゆるは枕詞を置き、多くは序より續けるが故なり』と云へり。氏は枕詞が歌のたけを高くならしむるものなることを認めたり。たけの義は別にことわらざれど、顧ふに調を旨とし、品位を指したるが如し。但し氏はそれ以外には枕詞全體に關しては別にいふところなし。
長流の莫逆の友たりし契沖阿闍梨が萬葉代匠記を著し、古典研究の基礎を定めたりしことは云ふまでもなく、枕詞に對しても一二の著作を遺したり。氏は貞享四年詞草正採抄一卷を著したり。この書は詠歌の爲にせる所、歌詞によりてこれに適合する枕詞を引くに便す。學術的のものならねど、歌人にとりては實用上大に裨益ありしなるべし。

この外に萬葉枕詞の著あり。代匠記總釋の一部たり。初稿本は一卷收むるところ枕詞僅に二十二種に過ぎざれど、あもり付、天のかぐ山、名ぐはしき吉野、打わたす竹田の原、あらたまのきへのはやしの如きは枕詞に似て枕詞にあらずといひ、その注釋は一々古典を引き自家の說を加ふ。古傳說といへども事の當らざるは取らずして、『古き說は好事のもののしわざ』と一喝し、袖中の作者たる顯昭法橋の如きも釋義宜しからずとて大に痛棒を喫せしめたり。枕詞全體に就きては長流の氏姓あるに同じとの說に贊し、日本紀中の神の人にかかりて言ふ言葉にも枕詞を用ひられたる例を引き、これら何となく幽玄にしてかうがうしく聞ゆと評せり。精撰本代匠記に載するは上下二卷いろは順に列ね、萬葉の外古事記・日本紀等に所載の枕詞をも載せ、古典延喜式、和名抄等までも引きて確實の所以を一々細かに記し、相似たるは並べあげ、意の解しがたきは强ひて說かざる方針によりたり。又枕詞の長きを序とし、これも集中より例を引きて示したり。氏の說は學究的たり。例へばあきもよし紀とかかる枕詞の如きも彼の國の產物たる麻裳を擧げてその國を聯想せしめたりとするが如きこれなり。傳統的なる定家の假名遣を斥けて考據ある歷史的假名遣を唱道したる精神はこの詞の解釋に於ても見えたり。

靜嘉堂文庫に元祿六年圓珠庵にて寫すといふ奥書ある萬葉集冠辭拾要と題せる一本あり。三百の枕詞を五十音順に擧げ接續の例を萬葉集より引きたり。下河邊長流の作とせり。長流及契沖の頃には冠辭といふ名稱ありしとも見えず、その排列の五十音順なるは燭明抄と合せず、むしろ冠辭考より抄出せしなるべく、後人の偶作と見えたり。

第五　主動的研究

枕詞の研究上一時期を劃したるは賀茂眞淵の冠辭考とす。この書は寶暦七年六十一歳の時に上梓せり。全部十卷萬葉記紀の枕詞三百四十餘を五十音に列ね、一々考證的に語義を說き連接の理を明にす。眞淵は元祿の文學復興時代に生れ、齡たけて後、都に出て、稻荷の神杉の下荷田大人に就學すること四年學成り幟を江戶に下し、忽ちにして田安悠然公の眷遇を蒙り萬葉調の和歌古文を以て天下を風靡す。この書が本居宣長をしてその學識を慕ひ名簿を捧ぐるに至らしめしは故なきにあらず。

氏は枕詞の名稱を師說に基きて冠辭と改めたり。蓋し春滿は萬葉僻案抄の八隅知之の條下に枕詞を以て本邦歌謠文章の一風とし、枕詞の稱の適當ならざることを說き、又その他に於てこの詞を釋したれど、全體に就きて說く所なし。眞淵はその使用の目的に關しては「和歌に五七の調あり、これ天地の調にして冠辭はこれが姿を裝ひ調を助くるものなり」といへり。これ裝飾と諧調との二方面より見たるものにて、從來の說に一步を進めたりと謂ふべし。而してその範圍に於ても從來とは廣くして花細し名細しの如き賞詞は勿論區別の爲に用ふる天降(あもり)つく天の香山、たたなはる靑垣山の類のあもりつく、たたなはるの類もこれに總攝せり。その數は燭明抄に所載のものの三倍を超え、接續の異なる上よりは六百に達するに至れり。

その種類に關しては序中に「久方の天は象を喩へ、虛見つ大和は故をいひ、千早振神は性を擧げ、垂乳根の母は

本をたゞへ、弱草の妻は類をなん引ける」といひて五類を立てたるが如し。併し一切の枕詞を捺して分類せしにあらず、且今日より見ばその標準も議すべきもの多し。

氏は創見に富み、枕詞の訓み方に於ても異説を立てたるものあり、水薦刈信濃と續けたるを、古來みくさかると訓み契沖はみこも刈ると訓みたるを、薦は篶の誤とし、みすゞ刈ると訓み、さゞなみの志賀をささなみのと清音に呼ぶが如きその一例たり、次に接續の理由に關しても異説を更むるところ少からず、さゝなみのは小波にあらで篠並といふ地名なりといひ、打よする駿河は急流に波寄するにあらで、髮を梳る時用ふる水をゆするといへば打泔る泔る髮と重ねて續けたりといひ、つまごもる屋上の山は妻籠る屋にあらで端の下にこもる端と續くとなし、朝霞かびやと續くは古言曇るをかをるといへばかの一言に掛けたりといふが如し。斯の如く新創の説も多ければ世の學者之に靡きたるなるべし。されど契沖と異なり獨斷に失せるものなきにあらず。また創始に急にして考據足らざるものあり。是に於てか後その繼承派及反對派を生ずるに至れり。

第六　冠辭考の批評

冠辭考は實に當時の名著たり。これを賞讃する聲は多かりしならむ。肯へて非難を試みるものはなかりき。唯獨り田安宗武卿は眞淵を厚遇しながら、必ずしもその説に同ぜざりき。卿は英邁の資、好學の念篤く、その思惟するところは少しも囘避せず直に發表せられたり。服部管見を著し、又貝原益軒の大和本草の誤を正さんとて繁雜な

作り、荷田在滿が國歌八論を進獻せしや八論餘言を草し、眞淵の國歌論臆說を奉るや臆說剰言をものし、眞淵これが辨疑を草すれば更にその批評をなす。斯くの如く全く學究的なり。從つて冠辭考に對して異說あるものは之を輯りて五卷となす。所謂摘要冠辭考これなり。眞淵は新を立つるに意ありて殊更にむつかしく冠辭を解釋したるもあり。『すべて古の冠辭むつかしきは少くて易らかなるが多ければ、いづれにもとらるるは易らかなるによるべし』と提唱せり。これ考に對する一針なり。例へばあさもよし紀と續く枕詞を眞淵は解して曰はく、『もよしは助語。こは淺葱といふを上下に分ちて連ねたり』と斯の如き解說は卿の全く斥くるところたりしなり。枕詞の範圍に於ても眞淵よりは狹く考へたるが如し。神功紀に見ゆる天疎向津媛命の天さかるを考には採りたれど、卿は冠辭にあらずといひ、萬葉九卷の朝開榜出のあさびらきの如きも用語にて冠辭と見るべきものならずといへるが如き是なり。眞淵は萬葉は誤字多しとて、內容批評に由つて改定せること少からず、三諸著鹿背山とある三諸著は天もりつくの誤となせるが如し。卿はこれも大なる强言なりと斥け、犢牛の三宅を眞淵の訓み改めたるを非として牛の子の三宅と讀むべしと評し、いなのめの明くは考にいへるが如く寢目（いなのめ）にあらず、楓の一種なるいなの芽の赤くと續けたりと論ずるなど新しき考を加へたるところあり。身三卿の班にあり而もその招聘せし學者とその說を鬪はすが如き世上稀に見る在上の君子と謂ふべし。

四にいふ。摘要冠辭考は多く世に知られず。天保七年作直方の寫本によれば卷一にはあ部十三條。卷二にはいう部十四條。卷三にはかよりこまで十四條、卷四にはさしの部十一條。卷五にはまの部二條、おの部一條を收めたり。

縣門に多士濟々なりしことは儒學に於ける木門に於ける如し。神典に萬葉に歌文に語學にさまざまの方面にその志を繼ぎ業を成さむとせるもの多し。中に古言梯の著者楫取魚彦は冠辭に關する著述二編を遺せり。一を續冠辭考といひ一を冠辭懸緒といふ。前書は明和七年に茅生庵にて著すところ、名の如く冠辭考の補篇とも見るべく、考は萬葉・記・紀に限りたるをこの書は皇太神儀式帳、延喜式、續日本後紀等より珍しきを拔き出で、或は考に擧ぐるところの冠辭にして接續のもれたるを拾ひ集めたり。その數六十九種。これを抄出の書に分てば次の如し。

萬葉　四十三　　日本紀　八　　儀式帳　六　　古事記　五　　續日本後紀　四　　延喜式　二　　後撰集　一

その解說は極めて簡單にして、出典と接續の狀を示すに過ぎず。又枕詞全體に關する說は全くあるなし。

魚彦に少し後れて服部高保は安永四年續冠辭考二卷同別記一卷を撰びたり。こも亦名の如く冠辭考の補篇といふべく萬葉・古事記中考に洩れたるもの及古今集中の枕詞合せて百三十四種を抄出し、その語原を說き接續の狀を示したり。その資料を引書によつて分てば、古事記より取るもの十種、萬葉集より抄するもの八十九種、古今集より取るもの三十五種なり。東京高等師範學校所藏本にはこの他考餘四十條を附錄とし、梓弓、沖つ藻の類にして、その接續の冠辭考に洩れたるものを擧げたり。この書にも枕詞全體に亙りての考說は更に見えざれども、一々二

つの枕詞に就き將來はいかに續け用ふべきかといふことを說き加へたるは詠歌者流の爲にせることながら、この詞をとはに生かさむとの用意なりしが如し。この詞の研究者の多くは古典又古歌集に使用の跡を尋ね、或はその用法を考證するに止まりたるに、ひとりここに意を注げるは斯學研究史上看過すべからざるものと謂ふべきか。

第八　當流に於ける枕詞の見方

堂上家に於ては歌道傳授の事夙く行はれたり。いつの頃より始まりしか明かならねど、當流には二條家枕詞之傳授といふこと起りき。抑も傳授は一面形式尊重の精神より出でたれど、學術上よりは價値の大なるもの少し。我が如き門外の身にはその眞相を十分に知悉するを得ずといへども、今傳書に就きてその要を窺はむ。圖書寮松岡本に二條家御秘傳之歌書枕詞といふ一卷あり。中に古傳の枕詞として

久方の天　あらがねの土　しき島の倭　神風や伊勢　ちはやぶる神　足引の山
玉鉾の道　天ざかる鄙

の八種を擧げ、これに新玉の年、茜さす日、うば玉の夜を合せ、十一種は古歌を見、その心を會得する爲には要あれど、詠作上には用ひ古したれば、寧ろこれが使用を避くるを善しと示したり。次に枕詞の種類を六つに分てり。

一、前によせていへる。　飛鳥のあすか、しながる鳥ゐなの如き

二、所によせて故事あるをいへる。　青丹よし奈良、逢阪の木綿つけ鳥の如き
三、近所の名所を一つに合せてよめる。　石上布留、まきもくの穴師、菅原や伏見の如き
四、詞の縁により所にいひかけたるもの。　水鳥の青葉山、山かげの賀茂、さゞなみや志賀の如き
五、故事により所によせたるもの。　もろこしの吉野、しもといふ葛城山の如き
六、地名ならで詞のいひ掛によりて用ふるもの。　梓弓やたけ、唐衣ひも、呉竹の夜の如き

これなり。この引例中には枕詞ならざるも交れり。又分類の法も非議すべき點あれど、第二第三第四第六の分類の如きは今日といへども採りて參考とすべきが如し。語の解釋につきては他と異るものあり。例へばあしびきの山といふは、山の裾にある里を麓とし山へ登る道筋をいふと說き、玉鉾の道とは鉾は喩にて物を劈き通す如く、野山の道筋を開くことをいふと說くが如し。而して足引の山は一切和調の始に傳受することなれば、極めて大切なることにて別に口訣ありとせり。儒佛神道の說を加味してそこに重大なる意義ありと說くところ、德川時代初期のものならむか。

第九　歌人派の著作

古典を解し古歌を釋するに、冠辭考が大なる指針となりたることは既に說けるが如し。されど彼著は實證か新意を創せんと心をこめしものにて、所謂考證的なれば世のなべての詠歌者流には直接の利得多からず、詠作上の實

益を得んには自ら又別途の編著なかるべからず。古人も夙くよりその必要を感じたりしならむ。彼の契沖の著はせる詞草正採抄はその現存せるものの最も古きものなるべく、これが第二書とも見るべきは建部綾足の枕詞增補詞草小苑なりとす。この書はその門人平湯鞍・藤原熊成の筆錄せるを明和九年上木せるもの。普通の詞よりそれにかくる枕詞を引く小字典にて所載の詞八百六十に餘れり。固より啓蒙的のものなれば語義の解說も極めて簡單に、多くは考の說の要點を約めたるものの、異說あるものは部外としては二十條を末に添へたり。自序の中に枕詞の形式に關して云へるところあり。曰はく『後の世に發語と號けていへる言あり。これは次の句に續く五言をなもいへり。然か下に續く意の言は五言のみならず。四言あり、七言あり、十まり二言あり、十まり七言なるも侍るは號けて言はゞ皆發語ならましを、そは各唱へかへて重語・續語・序語などいへり』云々と氏は詞草大苑を出す志ありと見えたれど、成るに至らざりしが如し。これらは學說としては見るべきものなし。綾足が詞草小苑出版の後安永六年賀茂季鷹は枕辭一言抄を著す。季鷹は賀茂の神官山本安房守と稱す。千蔭に學び、和歌並に狂歌を以て名あり。この書は詠歌のたづきにせんが爲にさる貴人に贈りし稿本なるべし。その跋にいへるあり。『縣居翁の考はよく考へられたれば、廣く世に行はるれど、中には浮きたることもありて、且長々しく書き續けられたれば頓にその心を得むには煩し』云々とその抄書若しくは梗概を記せるものの貴ばれしことを知るべし。題して一言抄といふ。特に論ずべきものなけれど、その內容を撿するに、冠辭考より次に擧ぐる

はし向ふ　ぬつ鳥　つぎねふ　おしてる　千葉の　玉もよし　珠衣の　わが衣

つまこもる　大魚よし　まがみふる　まそがよ　みなそこふ　みなそそぐ　水たま

る

の十五種を削りたり。その理由は知るべからず。その釋義に關し考とその説を異にするは、みすゞかる、ももしぬ、玉ちはふ、玉はやす、なびくもの、ことひ牛の、まきさく、あをによし、大伴の、高くらの十三條に過ぎず。而してその解説も季鷹獨創の説は極めて少しとす。安永八年楫取魚彦の著はせる冠辭の續貂もこの類なるべし。即ち人の需により、世によく用ひらるる冠辭五十種をぬき古來よりかけ來れる詞を擧げ所々小註を加へたるに過ぎず。倘この類の書には藤原武由良の枕詞證歌附七卷あり。天明四年の作にかかる。この書は詞草小苑に於けるが如く、詞によりてこれに加ふべき枕詞を引きいづるに便あり。採錄の數は小苑の八百有餘なるに對し、これは千四五百以上に上れり。蓋し記紀萬葉に止まらず、二十一代集六家集等よりも汎く例を取りたればなり。例へば立田にかかる枕詞を引かんに、萬葉十卷に於ける唐ころも立田より始めて、古今の春風の立田、拾遺の唐錦立田、後拾遺の白波の立田、新古今の春風の立田、續後拾遺の木枯の立田、堀河百首の朝霧の立田、壬二集の秋霧の立田、月清集の秋風の立田、拾玉集の夏衣立田等の採錄の狀一見して直に知らるるの便あるが如し。この書は語釋を簡にし、證歌の出典を皆としたり。但しそが中には枕詞にあらざるも交れるが如し。

第十　類聚冠辭略解

三日月蕭に仕へ萬葉摘芳及國風發蒙などを著はしし深澤蕭も安永二年に類聚冠辭略解八卷を著したり。民は様

足の如くある語には如何なる冠辭を置くべきかを容易く知らしめむことを庶幾してその編著を志せり。されど彼の如く五十音列によらで、常用集的の事項によりて彙類せり。その目は神祇、天象、地理、時令、人倫、人事、身體、宮室、器用、動植、彩色、通用の十二に分ち、まづ語を擧げこれに掛くべき枕詞を記し、その下に解釋及接續する所以を略述せり。これ全く詠作の爲にせるものなり。但しその序文中に接續上、十二三種の差別あることを論ぜり。稍々重複せるが如きもあれど、左にこれを掲ぐべし。

一　たゞへたる辭。　花細し櫻のめで。名細し吉野の類。
二　物のありかたちを指していふ辭。　さぬつ鳥雉子。鳥つ鳥鵜の類。
三　擬へていふ辭。　ぬば玉の夜。たくづぬの白き。
四　重ねたる辭。　眞菅よし蘇我の川原。青雲の白肩津。
五　數もていふ辭。　百足らず八十坰手。かき數ふ二上山。
六　物を指していふ辭。　しじもの水くへ籠り。鳥じもの海に浮き居。村肝の心。
七　所の名もていふ辭。　篠並の志賀。新治筑波。
八　所に在るものを擧げていふ辭。　知らぬ火筑紫。しなさかる越。葦が散る浪華。
九　ことを重ねてかれる辭。　ちちのみの父。ははそばの母。
十　ありのまゝなる辭。　天傳ふ入日。茜さす日。
十一　事を借りて他し事をいふ辭。　神風の伊勢。鳥が鳴吾妻。

十二　呼び出す辭。　玉もよし讃岐。あさもよし木人。
この他別にえだ辭三條を設けたり。即ち
一　次まで言を續くる辭。　八雲立出雲八重垣。
二　語を隔てたる辭。　足引の片山岸。ぬば玉の飛騨の大黒。
三　轉れる辭。　青丹よし國中。千早ぶる賀茂の社。
この三つを上記十二條の幹の辭に對し枝なる辭と名づけたり。この隔てたる連接及轉用は別に論ずべきなれど枝辭のその一は幹辭の十一に攝すべく、幹辭中にても第四と第九とは相合すべく、その他にも一つとなすべきもの或は更に分つべきもの等相雜れり。又その題目とするところ當らず。尙その例に擧げたる中、甲に屬すべきを乙に、乙に屬すべき内に當てたる類少からず。これその意義接續の狀を十分に理解せざりし結果に基くにあらざるか。讀方並に解釋に關しても誤謬の甚しきものあり。今一々これを擧げず。唯節用的の分類を用ひて解釋せるは他に見ざるところなりとす。

第十一　漢學者の枕詞注釋

漢學者にして國文國歌を善くせるもの古來これなきにあらず。林道春・貝原益軒・新井白石・室鳩巣の如き國學の大家にして、國學に通じたることは更に贅するを要せず。されど漢學者にして枕詞の研究を試みるが如きは甚し

千百人中一人あるのみ。坐光寺爲胖はその一人か。爲胖は甲州の市河の人、南屏と號す。醫を業とし漢の學に通じ兼ねて書を善くす。安永九年和歌詞謌二卷を著し、ももしき以下ひもの紐に至る百二十の難解の枕詞をぬきて注釋を試みたり。當時古學派の人々は漢學を排斥するもの多し。氏はこれを非とし、又自ら進んで漢學の力を以て枕詞を說かむとせるなり。詞謌の自序にいへるあり。「世の和學者は本邦の書の外は目に觸まじきものの樣に思ひ、又他の國の文字ををもては和歌は說くべからずなどいふもあり」云々とその固陋を斥け、その矛盾を詰れり。己が利によれば、漢の書をも引用ふる、固より假名を以て眞を見ることとなれば當らぬこと多く、又其言ところ顚矛盾とやいふものならむ。氏は枕詞の名稱に關しては『後世文化の餘、步語、序語、冠辭など雅稱するに似たれども、言のさま遮ふ。詩を以ていはゞ璉語ともいふべけれども、詩と和歌とは意ひとしからず。云々。唯頭詞と云はむこそ若古とやいふべき』とて頭詞の稱を用ひ、まづ古傳說・契沖・東麿・眞淵・綾足の說のいづれかを擧げ、次に自家の案を加ふ。飛鳥のあすかを釋するに、海篇直音に凡鳥必擧二双足一方能飛とあるを引き、鳥の飛ばんとする時まづ脚をかゞめ力をこむる習ありとし、足蹇の義よりあすかと續くと說き、あかねさす君と續くるは詩經秦風に顏如二渥丹一其君也哉とあるにより、あかねは渥丹なり。クとカと通じ丹と根と通ず。刺すは射の字にて射の音さとなると說くが如し。所說新しきものありといへども我が國特有の措辭を漢風に說くはいかがあらむ。它山の石以て我玉を琢くはよけれど、餘りに牽引して附會に陷るもの多く、採るべきもの極めて少し。この書安永九年の自序あり。天明四年青島茂彥の序を加へ上梓せむと謀りたるが如し。但し予は未だ板本を見ず。寫本も極めて稀なり。或は奇劂に附するに至らざりしか。

第十二　眞淵派の集成

冠辭考がこの詞の研究上エポックメーキングのものなること、及その門人が一二の補編を作りしことは既に說けるが如し。されど共に上梓するに至らず、また完美のものといひがたし。縣門加藤宇萬伎の教を受けし上田秋成は冠辭考再板の翌、即寛政八年冠辭考續貂七卷を出せり。その內容を撿するに考に見えて接續の狀異なれるもの五十種、その他より新に摘み出でたるもの二百八十八種合せて三百三十八種を收む。而してこれを引き出でし原本によりて分てば、

萬葉　百二十　古今　六十六　後撰　四十四　拾遺　四十　古今六帖　十一　記紀　十四　家集風土記延喜式　四十三

に於けるが如し。これらの枕詞は冠辭考に倣ひ五十音順に排列し、いづれも始に用例を擧げその意を釋し、次に接續する所以を詳にす。みづから謙抑して續貂といへど、考の續篇としては整へるもの。眞淵が考は魚彦高保が著とこの書と相竢つて略々集成せられたる觀あり。

栗田山下に草庵を結びたる秋成は世のすねもの、續貂を著しつもこの詞全般に關しては縣居翁と必ずしも見解を同じうせず。否却りて相扞格するところ多し。次にこれを項を分ちて述べむ。

第一、名稱に就きて。まづこの詞の沿革を說き、眞淵の唱道せし冠辭といふも、世の常の枕言といふも件たる

ず、古語に從へば冠・挿頭といふべけれど、猶私には裝といはましと說く。

第二、形式に就きて。必しも五言に限らず、三言四言六言十二言十七言より二十四言のものもありといひ、冠辭と序と分つを否とす。

第三、種類に就きても。君を祝ふ、物を褒め、物に喩へ、故に付け、所のさまもていひ、言に交ならでも唯聲永くゆたけく謠ふといひて、眞淵の象をいふ以下五類に分つを必とせず。

第四、使用の目的に就きて。眞淵は姿をも裝ひ調をもなせるといひ、秋成は調ぶるよすが歌ふのみにはあらで、くさぐ\のあやなんあるといひ、重きを修飾に置きたるが如し。

第五、引例に就きて。眞淵は古書のままに記し、秋成は記紀萬葉といへども、眞字書なるは直に假名に改むるを便とし、且眞淵はこれによりて古意を辨ふる方便となさんとて例を古に限りたるを、秋成は冠・裝は古言の跡のみならで中比までもこれを用ひたりとて、三代集三十六家集にも及し、又中世には秀句に假名遣の誤ありとてこれを斥くるを諾はず。

要するに續貂は考の後四十年にして成る。名はともあれ、その中には大に抱負の存するあるを見るなり。餘齋はもとこれ不羈の人、古學の園におひたちながら、契沖の唱道せし歷史的假字のかたくるしきを好まず、靈語通を著して便利主義を唱へ、縣居の鎌倉右府を掲ぐるにも心はよらで、ひたすら山水の懷にひたる西行法師を慕ふ。鈴屋大人の名聲嘖々たる時、「ひがごとをいふてなりとも弟子ほしや古事記傳兵衛と人はいふとも」口きたなく嘲く。されば一すぢに傳統を以て律すべからざるなり。

第十三　惠岳の枕詞畧註及考の縮刷

萬葉の研究に志すものは、才の短きも長きも、その中に數多き枕詞の意義用法に就き、心を潜めてこれが研究に指を染めざるなし。長流・契沖・眞淵はいふまでもなく、魚彦・高保・薫・秋成の徒に至るまで、一方には萬葉の注釋或は類選を企て、他方には枕詞の著述をなせるなり。ここに常陸の明引山に住ひし惠岳も萬葉集選要抄・萬葉集旁註等の書を著して刊行せしが枕辭略註三卷を著せり。この書は旁註と同じく天明四年の作にかゝる。上卷には天傳ふより乙女等に至る、中卷は神風のよりともし火のに至る、下卷はなるかみのよりおし照るに至る約三百の萬葉集中の枕詞をとりて注釋せるもの。その說は契沖などの考に基き新說の見るべきなしといへども、序中に冠辭と改稱するの不可を說けり。惠岳は字は俊道、俗姓は鈴木氏、明引山羣法寺に住することと十九年、師資明かならざれど、萬葉に香火せる人たりしなり。

惠岳と前後して釋義亮も石上を著す。この書は門人石吉雁忠次・椋下六春武・玉函齋政敦が義亮の說を錄して寛政十年に上梓せるもの。安永四年義亮の序あればその脱稿は十數年前に成りしか。この書は記紀萬葉に見えたる枕詞三百十七種を、いろは順に列ね、各條下に原本の書體のまゝに出典を擧げ、傍訓を施し、語義を簡單に註けり。足引のに於けるが如く古說に資りたるあり。玉鉾のに於けるが如く契沖に據りたるあり。あをによしの如く東高偕に從へるあり。ひさかたの如く在滿に依れるあり。實にあさもよし、みかしほ、しなてるの如く、契沖の

說に少しく自家の見を加へたるも交れど、大體よりいはゞ考に據りたるものにて、その條項は考の中、磯貝の、春鳥の、鳰てる、玉垂の、夏衣、大幣の、呉はとり、引網の、水泡の、器薬の等十餘種を除き、いろは順に排列したるものにて、考の縮册と見做すべきなり。

義亮は幕臣御小姓組松平三郎次郎の子冷泉爲村卿の門下か。石上の自序によれば、夙く佛門に歸し空阿と稱し、東國の暫淺に住み、白蓮社を結びしか如し。嘗てその著百人一首臆斷二卷を見たることあり。石上の内容を檢しても古學派の說を奉じたるが如し。

この他古學の流を掛める人の著に冒頭の書あり。その内容を檢するに、記紀萬葉の枕詞三百三十種をぬき、五十音順に列ね、語義を說き接續の狀を示す。天さかる鄙、あらかねの地等の外その解釋は全く考の說に基き、所々考に見えずして詞草小苑に出でたるものを書き加へたり。東京帝國大學に著者の稿本と覺しきものあるのみにて他に類本なく、その作者を明にせずといへども享和文化頃のものにて、これも考の縮書と見るべきなり。

又冠言辨といふものあり。文政五年衣妙舍の著すところ、三百四十五の枕詞を擧げて語義と接續の狀とを說く。その著古言辨と合せて紙數七十二葉。浮寶舟・糸のきだ短きなど一二新しきを加へたれど、却つてその學の淺きを示すが如く、考の誤をも正すに至らず。唯その跡を追はんとするに過ぎず。又渡邊重名門下の安達盈か著に冠辭考略あり。靜嘉堂文庫にその自筆本あり。文政十一年に成る。長瀬眞幸の序を請ひ上梓せむとせるが如し。而も板本を見ず。その内容を見るに、ちちのみの父などの外は殆ど全く考の說を縮め二三本居宣長の說を引けるに過ぎず。斯る類の書も一時世の需要ありしなるべし。

第十四　歌人派の雜著

富士谷家にては成章の時より多少これを講究したりしと見ゆれども、その詳しきを知るべからず。歌袋第二卷には世の常の枕詞百五十二種を擧げ、下に續くる語を示し、簡單に語釋を加へたるに過ぎず。但し同家にてはこれをかぶりと呼びて挿頭足結と共に歌詞の重要なる一部門とせり。寛政五年に御杖の刊行せし歌道非唯抄の附錄にもこれを擧げたり。北邊隨筆にはかぶりはよせ歌（序歌をいふ）の短きものといひ、これが使用に關しても『いひて善からず思ふことあらんに、卿にても用あらん詞を置かば、猶いへるに等しくなりぬべく、さりとてうつたへに云はざれば、句の數足らはねばわざと無用の詞を置くなり」と述べ、又『必要の詞のいふべからぬ時その必要の詞に代へたるものと知れ』とも說きたり。此く見れば無用の詞のやう聞ゆれど、こは御杖の歌學說は神道說と結合せるものにて、心に思ふことを赤裸々に表すときは身に禍を得べしとの所謂時宜說より出發し、間接なる詞を置くの義を斯く述べたるが如し。尙足引の山と續くるが如き難解のものはこれをかぶり本抄に讓る云々と歌袋には見えたれど、本抄といふものは未成にて了りしならむか。「古學を要とするにあらで、詠歌を旨とする人の爲には、古典萬葉を原文のまゝに引用せるものは目に親しまず。前に擧げたる詞草小苑・一言抄・冠辭續貂の類を始とし、假名書のものを要求するは自然の勢なりとす。歌袋の如きも然り、又寛政十年に上木せし尾崎雅嘉の和歌枕詞補註の如きも亦その一に屬す。

この書は近體の歌詠み習ふ人の爲に中世に用ひたる枕詞を主とし、これに古代のものを交へ、いはばしるより始め菅の根のに至る。百七十六の枕詞を收め、記紀萬葉等より引ける例は悉く假名書に改めたり。逍遙院殿のかゝふることを百あまり集め給ひて、その意を記させ給へる文のあれば、中略増し補ひて各證歌を擧げ今案を加へ云々と自序にいへるによりて、その大要を知るべし。今その内容を撿するに今案を加へざるものは、長流が燭明抄の文と全く相同じきこと、既にいへるが如し。蓋し逍遙院の和歌枕詞といふものをさながら用ひたるなるべし。今案には八代集といはず十三代集と限らず。夫木集・名寄・藻汐草の類、又家集にては曾丹集・拾遺愚草・月清集等より近くは牡丹花肖柏集、正徹が草根集又後水尾天皇の鷗巣御集、靈元天皇の桃蘂御集に至るまで一々搜りて數多證歌を拔き出でたれば參照とするに便ありといふべし。抑も歌は人によりて標準とするところ同じからず。眞淵一派の古今集以上を標的とするに對し、こは堂上近體の歌を規模とせるが故に、引くところ自ら同じきを得ざるなり。この書歌人派の著作として廣く世に用ひられたるが如し。尙詞苑小苑などの系を追ひたるものには加藤竹里のみやびこと玉かづらあり。この書は氏の歿後三年即ち寛政十年の上木にかかる一の折本にて、一行五段、一折六行とし、歌詞を五十音順に列ね、その下に掛くべき枕詞を記紀萬葉三代集古今六帖よりぬきて容易く引出づるに便せるもの。詞の數七百八十六種に上る。いはば枕詞の表の如きものなり。かかる捷覽の書はその後も次いで出でたり。竹里名は景範、大阪の人、信成の子、國雅管窺、濱づと、みなれ棹、名所ついまつ、和歌虚詞考、竹葉の露等の著あり。有賀長伯の教を受けて小歌書を出すこと少からず。

又岡崎年平門下の松山貞主は享和二年横綴の小本冠辭例を出せり。上卷は詞草小苑及玉かづらに倣ひ詞によりて

枕詞を引き、下巻は枕詞によりて連接すべき詞を引くに便す。その數は上下各千二百二十五に上る。引例語釋もなく、いはば枕詞の目錄若しくは索引の如きものとす。

これに後るること十年即ち文化元年犬飼戸次は冠辭袖几鏡を出す。（雅文の序によれば寛政九年の作といふ）横綴小本一に冠辭例の如く內容は枕詞一言抄に似たり。又草鹿砥宣隆の冠辭訓言の如きもこれと同じく簡畧のものたり。これらの小册子は小さき歌人があやしき歌を詠ひ出さんとするに方り、物陰にて竊に開き見るばかりのものたるに過ぎず。

第十五　冠辭考の補正及反眞淵派

冠辭考がこの詞の研究上重要なるものなること、並にその門流によりて別著にて增補せられ集成せられたること既に述べたるが如し。眞淵の說は僻見はあれども傳說もなきにあらず。本居宣長の如き中正を尙び師說を補ひ若しくは正したるところあり。されどこの詞に關しては別に一の著作をなすに至らず。門人西田役輪平重宣の冠辭考及詞草小苑に洩れたるを拾ひ集めし一本は、宣長の校定を經て、大衣庭立綱か註を加へし玉挿前二卷ありきといへど、池魚の災にかかりて今は傳らねば、いかなるものなりしかを知らず。宣長の養子大平に枕詞考・鈴風伊勢考等の稿本あれど、その條項も少く且治く世に知られず。五十槻園荒木田久老は日本紀歌の解・槻の落葉及信濃漫錄を著し考の說を改めたるところ多し。漫錄は享和元年九月善光寺に參詣の途次筆するところ中に枕詞に關する

もの約二十條あり。久老の說は飮食物に託して說けるもの多し。例へば神風の伊勢を釋して、神風は神饌稻(かんけしね)の義食稻の義なる伊勢へかかると說き、三諸就鹿脊山を釋して、三諸は糟交の酒の名とし、鹿脊山にかかるは食稻(けしね)の義にて續くと說くが如きこれなり。眞淵は校合に重きを置かで內容批評によりて漫に本文を改むる癖あり。久老が『世の萬葉學の徒心得がてなるところは深く考へむものとせず、心に任せて誤字ぞとて文字を改めんとするは古を失へるわざにていとも／＼うれたかりける』といへるは至言なれども、久老の立てたる說も奇矯に馳せ首肯すべきもの少きが如し。特に信濃漫錄は師說を補正するが如くにして實は本居宣長に當りたるものと見るべく、歌の風致論及詞に近古なき論二篇の如き鈴屋を貶し、その徒の說を評して『宣長に垣せられてその師を出づること能はざる頑愚の論』と酷評を下せり。ここに於て花園春里の徒がこれが駁論を作りしこと予が大日本歌學史に說きたるが如し。

文化五年に成りし石原正明が年々隨筆卷五にも冠辭考の非を匡したるもの數條あり。『枕詞は冠辭考によりて義をもとむる當時の習なり。長流の燭明抄などいふも聞ゆれど、えがたきにや、人多くは繙ばず、考の說心ゆかぬところもあれど、大方は宜しくて岡部氏の述作はこれらをすぐれたりとす』と評し、この頃ものついでにこれを見て二三條その非を摘みて書つくと述べて、射目立てて跡見、くれなゐの淺葉の野ら、むらさきのこがたの海、唐棣の衣、夏衣かとりの浦の類を釋して自家の見を立てたり。

村田春海門下の岸本由豆流は萬葉集攷證の中に考の說の誤を正し漏れたるを補ひ、更に冠辭考補正に說くべしと記せるところ多し。されどもこの補正は現存せざるか吾人の管見に觸れず。又伴信友の如きも玉蜻考をあらは

してその意見の採るべきもの多し。

斯かる隨筆の類ならで特に一部の書を著し、眞淵の說に反對を試みたるを土佐の鹿持雅澄及大神景井等とす。土佐は海南の僻地、文書の外中央の學海とは接觸を有つこと少ければ、學徒の說も自ら固陋に陷るものなしとせず。土佐の古學は眞淵門下の谷眞潮に起るといへども、雅澄は一生を萬葉の研究にささげ、眞淵の說の諾なひがたきものを見て反對の見を立てたるなり。彼の萬葉枕詞解は尤然たる萬葉古義の一部にして、全部五卷文政五年に成り翌年これが附錄として玉蜻考一卷を著す。枕詞解には五百の枕詞をぬきて五十音に列ね、原文のまま博く證例を引き語義及接續の狀を明かにせり。

雅澄の萬葉學は今村樂及その先輩細木瑞枝に負ふところ少からず。瑞枝は高知附近の里正にして命を奉じて水利を開き又心を盡して農民の開發を圖る。旁ら萬葉を研究してその家集櫻根集の如きは全部悉く萬葉假名にて記せり。雅澄屢々その家に遊びその敎を受く。雅澄は冠辭の稱を舍てて枕詞の名を與ふ。而してその使用の目的に關しての說を異にす。枕詞の種類に關しても眞淵は五類を立てたるに、雅澄は接續の狀態により二十一種の別を立てたり。特に語釋に就きては考と解とを比べ見ばその趣の大に異なるを見るべし。今味澤相めと續く枕詞に就きて之を比せんに

【考】味鳧の多に群れわたる意なるを、その群の語を下へ回して且むれの反めなればあぢ多群めと續けたるなり。さはとは多きてふ古語、經は經渡るをいへり。

【解】味澤相はうまさはふと訓み、味粟生の義なるべし。目とかかるは群生といふ言なるべし。だらの切はま、

はえの岡はへにて、そのまへを縮ればぬとなれり。粟はあるが中にも勝りて生殖するものなれば、かく續けたるならむ。

斯くの如し。後說必ずしも優れるにあらず、今その說の異るものを數へ擧ぐれば、その數は百餘にも及ばんか。萬葉は假借の文字多ければ偏に文字にたよりて義を說くべからず、されど又古人の用ひたる文字を參考として語義を說くべき場合も少からず。枕詞解には一つの枕詞に關する文字もさまざまに書きたるを悉く集め擧げたれば大に參照の便あり。例へばあしびきに就きては、安之比奇乃、足引之、蘆檜木之、足疾之、足冰木之など悉く原本の出所を記して集め出したれば後人說を構ふるに便あり。枕詞解に收むる所は五百七種に上れど、そが中には天にます月讀男、又垣こゆる犬などの類をも枕詞として擧げたり。氏は尋常の形容詞句と枕詞との間に、截然たる區別を置かざりしか。氏は古歌に枕詞を用ふること多く、新しき歌にはこれを用ふること少き所以を說きたれど、その說たる根本義をはきたがへ、獨斷に陷りたるところあり。

大崎景井は將軍谷干城子の父、その曾祖秦山の頃より學を以て世々山内侯に仕へたり。景井始め息吹廼舍に就き國學を修む。壯年の頃藩内學問の爭擾にして景井もその間に立ち、反對派に棄せられ、家に錮せらるること十二年、性忠惻にして赦後も土佐を離れず。心を著作に傾け、日本紀學柱二十一卷及非冠辭考を著す。非冠辭考はその書佚して傳らず、枕詞解に一二引かれたるところあり。例へばあらたまは考に明ら玉の意にて貴しといふ心より年と續けたりといへるに對し、景井はあらたまのあらは改る義たまのはたもの即ち田物或は田實の意にて新稻をいふ。この新稻を田に寄するといふ心にて、田寄の約なるとしを年の義にかけたりと說けるが如し。但し全書

はいかばかりのものなりけむ。予は夙く時軍に見えて、その有無をただしたれど、遂に見えずとのことなりき。

この他、出雲の中村守臣が冠辭追考一册、大國隆正が冠辭考附說三册など冠辭考の纘述若くは反駁の書と見ゆれどまだ管見に觸れず。

第十六　荒唐なる言靈說

言語は神の賜にして靈妙なるものなりとの考は、古くは世界各國の學者の信ぜし所にして、歐洲に於いても十八世紀の末葉までは、頗る有力の說なりしが如く、我邦にても鈴木離屋が雅語音聲考を著し擬聲說を唱へたるにも拘らず、言語が性靈を有すとの說は滔々として行はれたり。殊に文政天保の頃平田篤胤などは頻に言靈說を鼓吹せり。その徒井面守訓といひ鶴峯戊申といひ高橋殘夢といひ野々口隆正といひ、いづれもその流を立てたり。中に一音一義說あり又一音五義說あり。所說さまざまなれど各偏る所あり。唯舊詞考の著者の說の如きは常識に陷りて捕捉しがたきものあるが如し。

舊詞考は四卷三本東京帝國大學にあり。天保壬辰の卯月日推易堂に記す旨序に見えたり。推易堂は何人の雅號なるかを知らず。五十音發生のことより說き起して、主に古き枕詞を釋し、間々古言の義を述べ四卷の終に追加として三山の傳を擧げたり。

この書語原を說くに、我古典のみならず、詩書・易經等の漢籍を引き、或は梵語を引き、さも該博なるが如しと

いへども、その說の條理を缺ける、或は狂人の作と思はるるばかりなり。例へば鳥總立てとは壁の御門といふ意の舊詞にして、とことはといふ詞なりと釋し、たまちはふとは千早ぶる又八千鉾のともいふ意の舊詞にてかといふ枕詞なりといひ、青丹よしとは、青海原息長足姫といふ意の言葉にして、青とは荒妙といふ意の舊詞なり。にとは熟田津に船乘せむとの舊詞にして神の小忌田といふ言葉と同じ。よしとは忍照や難波の浦の菁ともよしとも三吉野の奧の山神に只柴の戸をさして思ふ心の奧もみよしのの花といふ意の詞なり。故に奈良といふ枕詞ともなるなり。ならとはくならといふ意の詞にして、荒妙の藤井が原の藤衣といふ意の舊詞なりと說くが如き、抑も何の意たるを知らず。

又五十音は人生れて自らなる言の葉にして、倭・漢・梵のみにあらず、八洲の外のあふり亞米利加の言の葉も同じ理なるべしといひ、かさたなはまやらわの九の言、皆あの韻に屬ひぬなど說けるを見てその一斑を知るべし。

推見堂の著に萬葉枕詞解一卷同續編一卷あり。前書にはいなびづまよりしなざかるまでの萬葉の枕詞を擧げ、後書には同じく枕詞八十一條を說く。その說舊詞考に基づきたるものにて、考據なく架空の說を列ねたるが如し。

第十七　歸納派の著述

從來の研究は、枕詞各個の意義を尋ぬるを旨とし、その全體を彙類し、一定の秩序に排列し、その成立組織等を論ずるものは全くこれあらざりき。冠辭考を始めその他の書にも種類を分ちたれど、唯二三の例に就きてい

へるのみ。すべての枕詞の性質を検討し、これを類別したるは高橋残夢を以て嚆矢とすべし。氏の枕詞に關する著書は二つあり。一を石上枕詞例といひ、一を三代枕詞例といふ。共に弘化元年に脱稿せしことその序に見えたり。石上枕詞例（五卷）は記紀萬葉に見えたる枕詞四百五十を選みて、詞の成立上より七種に分ち、これに屬する證歌を類によりて列擧したり。所謂七種とは

第一　正しく名を置きて用語へ續けたるもの　百一種

第二　用語を枕に置きて體に續けたるもの。例へば茜さす　石ばしる等　九十五種

第三　じもの。例へば犬じもの等　十種

第四　なす等の詞を結びて比したるもの。例へば鶉なす等　二十二種

第五　よしの詞を結びて比したるもの。例へば青丹よし等　六種

第六　くはし等の詞を置きて、物の名、地の名に續けたるもの。例へばいすくはし　名ぐはし等　四種

第七　の、が、に、を、や、よ等の雜目にて、その義を分てるもの。　二百二種

これなり。この分類は枕詞を構成せる終の字によりて分てるものにて、今日より見ば尚不完全の點あれど形式的分類としては極めて簡明なるものとす。又この分類に從ひ證歌を擧ぐるにも、洽く古例を集めて、一の轉けさまより他に移る狀を明にせむことを努めたるが如し。即ち第一義より第二義に、第二義より第三義にといふが如く推移の狀を明にし、枕詞の轉義を知らしめたるは多しとすべし。氏が研究はその材料を類によりて一々分類し、それに共通の性質を認めむとするにありたるが如し。この歸納的の方法は記紀歌謠抄●萬葉歌謠抄など氏の別著に

微しても明かなりとす。但しその或ものに至りては啻に材料の蒐集のみに止まり、結論なく、研究のなほ半ばにて止みたるものも少からず。

從來枕詞と見做されたる中にも、その性質によりては全くこれと放ちて區別すべきもののあることをいへり。かの花細し及玉藻よしの類は枕詞と呼ぶべきものならず、宜しく賞詞若しくは稱詞と唱ふべしと提言せるが如きこれなり。この他歷史的考察を用ひしことも、多とせざるべからず。石上枕詞例の終に枕詞寄の一項を設け、記紀萬葉に見えたる枕詞中、作家の明かなるものを拾蒐し、上は素盞男尊より下は萬葉に見えたる防人のに至るまで、その年序により敍列し、いかなる歌人がいかなる枕詞を始めて用ひしかを知らしめたり。この年序は萬葉作者履歷などによりたりと見えたり。これ枕詞の本義と轉義とを知り若しくは作家の意匠技巧を一見知了するを得るの便益あり。

三代枕詞例三卷は名の如く三代集に見えたる枕詞を集めて考究せるものにて、石上枕詞例の姉妹篇とす。書中に收むる所の枕詞二百八種、これを次の如き六項に分てり。

第一　名を枕に置きて用語に續けたるもの。三十六種

第二　用語を置きて體に續けたるもの。十二種

第三　のの結を以て終れるもの。百三十七種

第四　が、に、を、やの辭を以て結とせるもの。十一種

第五　地名を枕に置きたるもの。十二種

氏は時代によりて使用すべき枕詞の種類を異にすることを認めたり。即ち萬葉集時代と三代集時代とは多少その趣を異にすることを論ぜり。曰はく、『三代集の頃の手ぶりは萬葉に見えたるも多かれど、その續け樣、その世の一手風にて、枕の緣語を以て一首となし、又序の如く言ひ下して軈て枕としたるなど萬葉の頃には見えぬ謂ひざまなり』と、又地名國名を置けるもの、同語を重ねたるものは萬葉に異るといへり。大凡なかにも時代變遷を認めたるは多とすべし。但し說いて精しからざるは時代上止むを得ざるなり。今吾人は以下を擧げて氏が研究法を賞讚すれども、語釋に關しては、首肯しがたきもの多きを認むるなり。こは一種の言靈說に執着せるが故なり。

玆にまづ犬じもの、鳥じものなどに於けるじものに就て氏の說を窺はむ。

自物(じもの)と枕に置けるは、じの一聲助辭にして自他を領るの義なり。淸みてしと助辭に結ぶものは一方を占領る義にて君し思はば、花し散らずば等その一物を領てその物事業の上を强むるなりさるを濁りてじと結ぶときは靈極るが故に義變りて二方を合せ領るの義となる。淸濁の化なり。冠辭考にいへるもその義かはりては聞えねどじの助辭のことを說明せねばここにいふ。

と述べたり。音の性質と言語との關係は多少これあるべきも、しじの淸濁二音が國語に於てしかく截然たる區別を有するか、又他の言詞に適用して同じやうに說かるべきか、これのみに就きて說を立てたるは獨斷の甚だしきものたるを免れず。吾人は本居太平のじものは狀之(さまの)の轉と見る說に贊せざるを得ず。次に饒なす、鶉なすの類に於けるなすの解釋に關し、氏は『なは推留るの靈、止まるの詞、すは中に湊るの靈、空しき義、寄の詞なり。なすといふはなは靈によりすは詞によりて結びし詞なり。人を始め生物は事により業に留りて爲る事あり。をなすと

いふ。なゝは天然なり。なすは生物の業なり。されはなすといへる枕詞はそのもののなすわざの如きを我もなすといふか、又はそのものよりなりくる形勢を我もなすといへるかの兩義なり。自物と比したるにひとし。如くといふ義に聞ゆるは比していへるが故なり。」と說けり。言語は靈妙なる作用を有するものなれど、必ず或る靈ありてそれが詞とあらはるといふが如きは今日は信ずる能はず。このなすの詞も吾人は冬木のす枯とづつくのすと併せて考ふべく、なすが原形にてのすは轉移せるか、或はのすが原形にてなすはそれの轉か、それの關繫を明むるを要すべく、この二つは似す、似せてなどと關繫なきかを考慮して說を立つる方穩當ならむか。次に靑丹よし、玉藻よしの如きよしに關しては二種ありとし、これを釋していへるやう、『よは似曾の靈、顯れ起る義、呼の詞、しはゞ領るの靈、締るの義、助くるの詞なり。萬人依會れる中に一物あらはれ起りて衆物にすぐれたるを呼て善といふ。同じく物の上も亦然り。是則吉なり。されば何よしといふ枕詞はその國その地に生る物、諸國に優れたるをとり出でてその國その所を稱譽する時何よしといへるが古例なり。今一種はよとその物を呼んでしとその物自たるにて吉と賞したるにあらず』と說けり。この說の如きは前說よりもやや無難なるが如しといへども、言靈にかかづらふは一なりとす。氏は又假名遣などにも同じく言靈說を主張し、國字定源を著はせることは拙著日本文法史に說きたれば玆には贅せず。唯言靈說は牽强附會に陷り易く曖夢が幾多の例を歸納して說を立てながら、語源說•言靈派にかぶれたるが故に吾人は首肯し能はざるなり。

第十八　明治維新後の研究

幕府の末造より維新の當初に亙りて存へし國學者の手になりし枕詞の注釋は多からず。又大國隆正に冠辭考附註の作ありといひ、仙臺の保田光則にも枕詞に關する著述ありしこと雅歌考の奥附に見えたれど、その書現存せざるか。共に管見に觸れず。井上文雄が伊勢家苞の中には枕詞及其轉用の一篇あり。門人村井長央が枕詞轉用例を抄出し「今までの古學者はこの轉用に心付かずして兎角頑なに論じいふはいとにくし」と本居派にあたり、枕詞の解釋に關しても木下幸文がさやさや草紙に宣長の玉勝間の説をもどけるを引きて贊意を表し、歌よみの常に口ならしぐさにするよりいへるなるべしと述べたる外別に説くところなし。又岡本保孝の稿本に冠辭考存疑一冊あり。冠辭考の要を抜き、之に宣長の説秋成の考、その他の説を旁書し、△○等の符號を用ひて出典を示せるもの、一見その要を撮むに便あり。創説なしといへども參考とするに足る。

足代門下の佐々木弘綱に枕詞早見といふ一稿本あり。いはばしる瀧よりすずがねのはゆまに至る。枕詞ないろは順に列ねたるもの。明治二十四年出版の同氏の假名遣枕詞辭典には、普通の枕詞を五十音順に連ね、被くる詞をその下に記し且小註を加へたるもの。同年京都にて出版せし高橋富兄の冠辭初學は、上半を冠辭便覽の部とし、三百三十五の枕詞を五十音順に連ね、接續と語義とを簡單に説き、後半を冠辭索隱の部とし、三百七十餘の詞を擧げ、これに掛くべき枕詞を引くに便す。この他木村正辭の弟某氏の冠辭例歌集あり。以上はいづれも啓蒙

的のものとす。

維新後この詞の考究者は黒川眞頼氏を推さざるべからず。翁が東京帝國大學等にて國文學の講義中、枕詞の語義に關し種々解釋を試みられたるは、親しくその教を受けし人の記する所、例へば足引は大茂木の義、青丹よしは大土よしの轉。いはばしのには石橋石階の二義あり。いなむしろ川と續くるは寢席のがは〳〵と鳴る音に取る。あからびく色妙の子はいろたへとよみて、紅などを塗りたる乙女の顏の明らめく義なりなど古人の說と異るもの頗多かりきといふ。翁の書入本冠辭考十册今もその家に藏す。數次の書入と見えて甲乙兩說相矛盾するなきにあらざれど、とにも角にも釋義の新しきものあるは喜ぶべし。氏は又古今集冠辭考一册を著せり。こは古今和歌集註疏の一部にして、集中、所見の枕詞を拾ひ冠辭考の如くに列ねたるものにて、その始に枕詞を大別して冠辭、複稱疊語、双聲、言掛の五つとなり。左にその例を掲ぐ。

冠辭　久方のあめ　あら金の土　足引の山　ちはやぶる神

複稱　近江のや鏡山　大原や小鹽山　菅原や伏見の里　東路のさやの中山　なにはなる御津

疊語　岩淸水いはで　音羽山音にきき　初雁のはつか　ねぬなはのねぬな

双聲　春かすみ霞みて　唐衣頃も經ず　鳴くたづの尋ね　藤なみの並に

言掛　立別れ因幡の山　あひ見まく星　山城のとはに

以上五種の釋義は別に加へざれども、第一は古形の枕詞、第二は地名の大字小字と連接せるもの、第三は頭音の反覆によるもの、第四は脚音反覆によりて他義に轉ぜしむるもの、第五は兩義を有せるものなること、知るべし

この他雜誌上にこれを論ずるもの二三はこれありしかど、特にいふべきなし。吉田東伍氏の如きも或る誌上に枕詞の文法的說明法といふ一文を載せたることあり。氏は從來枕詞といふ名を用ひて特別のものとして說き來りたるは甚だ當を失せるものとし、これを詞辭論より見れば、形容詞的のもの、及副詞的のもの、の二種に分つべく、文章論よりいへば主格的のものと目的格のものとの二種に分つべしとて、以上四種を擧げ文法上より解說を試みたり。一見條理あるが如しといへども、枕詞として修辭上の妙味を說くに至らざるは惜しむべきことなり。

第十九　外國人の枕詞研究

外國人にして我日本文學並に語學を研究せしもの少からず。近年のことはこれを措き試にウェンクステルンの大日本書史を繙かば、二十餘年前に於ても如何にその種類の多きかに驚かざるはなからむ。余が編著日本文法史の後付に上せしものにても、その數、百十餘に及べり。チャンバレイン氏が古事記を譯し、又 Classical Poetry of The Japan に於いて、萬葉古今及謠曲狂言の若干を譯し、サトー氏が Ancient Japanese Literature に於いて祝詞を譯し、アストン氏が日本文學史を著したるなど枚擧に遑あらず。されど枕詞に關しては、チャンバレイン氏とデッケンス氏の外これあるを聞かず。蓋し枕詞は本邦特有の措辭にして、風俗好尚を異にせる外人には特に解し易からざれば、自らこれが研究に指を染むるもの多からざるなり。

チャンバレイン氏は、西暦千八百七十七年一月刊行の Asiatic Society in Japan 誌上に Pillow-word の一篇を揭

げたり。氏は枕詞を以て意義なき詞となし、英語のアポジイションと成立を同じくせりと斷言せり。次に作者上の性質を論じ内容上の分類に及び、冠辭考には五種に分ちたれど、歐米人の爲には四種に分つを便とすとて、一々例を引きて說明せり。所謂四種とは

第一　泣く兒なすの如く、形容詞若くは比喩の性質を帶びたるもの。

第二　久堅のの如く、第一種より轉じてその適用を異にせるもの。

第三　薩摩にかくる隼人の如く、歷史若くは神話上の事項より起りたるもの

第四　衣手の常陸に於ける如く、兩義に用ひらるる滑稽的のもの。

斯の如し。

次に氏は Play upon words と題し、いひかけ等に就き三種の別あることを論ぜり。素より冠辭考を本とし僅少の例につき論斷せることなれば、著大の創見もなけれど、他山の石として貴ぶべきことなり。殊にこの論文は明治十年に成りしものにて、當時同胞は軍事に外交に忙殺せられ、自國文學を研鑽するもののなき時に方り、外國人の身にて解しがたき斯詞の研究に心を注ぎしを思はば、吾人は衷心忸怩たるを禁ずる能はざるなり。

これより後明治三十三年に至り、ヴィクトル・デッキンスは同誌上に日本最古の韻文に於ける枕詞といふ一册子を公にせり。この書は紀記萬葉の枕詞五百十三種をアルファベット順に列ね、之を記載せる漢字を說き如何なる詞と共に用ふるかを示し、これが例證として長歌の一節若くは短歌を擧げ英譯をも添へたり。その說は主として鹿持氏の枕詞解に取り、契沖及千蔭の說を少しばかり交へたり。その種類を四に分ち、第一にのにて終るもの

次になすにて終るもの、次にものにて終るもの及その他の雜類となしたり。この分類は殘夢のそれに似たり。

枕詞の總數が枕詞解より少し多きは、八千矛の（神）宮人の（あゆひの小鈴）綱手引く（海）新室を（ふみしづむ子）等、枕詞に非ざるものを加へたるが故なり。解釋につきては、そらみつは山の空飾く義にて、これをやまとの一部に掛け、鳥ぶさたては、鷄の巢を築く義ならむといひ、玉鉾はアストン氏の說に基き男根崇拜の義など記せる外は殆全部雅澄の說に從へり。內容上よりの分類は立てざるも、一つ一つの解說の傍下にうちひさす宮、みづかきの久しなどの類は褒詞といひ、ことりくの泊瀨、まとりすむ雲梯の如きは描寫的 Descriptive のものといひ、さころもの小筑波、みはかしを劍の池の如きは序 Complementary とし、なら柴の馴はし、をし鳥の惜しきの如きは同聲 Phonetic と記せるを見ば、凡そ斯の如き四類に分てるが如し。八つめさすを八雲さす、焼太刀をやけたちの、百傳をもつたひとなせる類の誤謬交れるは言語風俗を異にせる外人のこととて深く咎むべからざるなり。

第二十 結論

上文に縷述せる如く、枕詞の研究は、日本紀及萬葉を講するの徒が本文解釋に方り隨所に多少これを解說せるに始まる。その後歌人が髓腦の中に難語の注釋としてこれを說くものあり。例へば綺語抄の和歌童蒙抄には、久堅の、足曳の、茜さす等を擧げてその意義を說けるが如し。されども上下連接の理由などに關しては殆どいふところあな

し。奥儀抄中には、多少そこに言及すれども多くは傳說的の說明を須ゐて吾人をして首肯せしむるもの稀なり。卜部氏の日本紀纂疏にはこの詞を解說せるもの多かれども、漢文にて記述したれば、說いて詳かならず。而もその說の見るべきもの少し。萬葉の注本には多少これを說かざるなしと云へども、原本の讀易からざるが故に誤寫のままに附會して說けるもの多し。彼の卷頭の籠毛與美籠母知を、こけころもなどと訓めるが如き類あれば、注釋の中らざるは素よりなりとす。仙覺律師は萬葉の校本を作り、新點を加へ、悉曇を學びたる頭腦を以て、細に音義を考へて新に註釋を作り萬葉研究史上に一時期を劃せりといへども、既に說けるが如く甚しき誤謬に陷りたるもののあるを免れず。

德川氏の始下河邊長流は從來の如き副次的研究を離れて、枕詞燭明抄を著せしより契沖・春滿を經て眞淵に至り、主的研究やうやく熾となり、特に眞淵はこの詞の性能を說き、その種類を論じ、種々に連接せる所以を明にせり。されど氏は元來古典派にして古今集以往を標準とし、以下の集に及ばず。隨つてその門下には三代集若しくは廿一代集・三十六家集・家々の集などより汎くこれを拾蒐してその補篇を作れるあり。或は古集中師翁の見落したる枕詞を摘み連接の洩れたるを補へるあり。或は解說の正鵠を外れたるを訂正せんとするあり。後にはこれらの纏述、補成、批正諸派の外に反對の旗幟を立てたる一派ありしことも既にいへるが如し。又別に語釋等に拘らす詠歌の爲にのみするあり。契沖の詞草正探抄を始めとして、綾足の詞草小苑・武由良の枕詞證歌附より、景範の玉かづら、貞主の冠辭例の類に至るまで、この目的の爲に編著せられたるものとす。冠辭考などが主として語義を考證し接續上の轉義を明にするに對し、普通の詞にあつべき枕詞を見出づるを旨とす。中には以上二つを折衷せ

るものあり。後殘夢が石上枕詞例及三代枕詞例を著すに至り、その研究は大にその歩武を進めたり。維新後西行人の一二これに關する著書も出でたれど、特に創見といふべきほどのものなし。

以上古人の研究を通觀して、吾人は大に啓發せらるること多きを思ふと同時に、尚考究すべき數多の問題を遺されたることを知る。今その二三を擧ぐれば枕詞は如何にして起りしか、又從來いづれの歌人によりて多く創作せられしか、又その種類は如何、その範圍は如何、又一の枕詞が次第に發達變遷せし跡はいかに、又この時代と他の時代とに於ける枕詞使用の差異はいかに、又枕詞が修辭學上如何なる地位を占むべきか、我古文學上如何なる價値を有せしか、將來この詞はいかに成るべきか等の問題は今後吾人の考究を俟たざるべからざるを知る。全篇以下にはこれに對する管見を述べむ。

第二編　枕詞の研究（その一）

第一章　枕詞の名稱の沿革

前編に於いては、枕詞に關する古人の著作を紹介し、併せてその研究的態度の、時代につれて漸く推移せることを論ぜり。本編には枕詞の何たるかを明かにし、その範圍を定め、その種類を攝し、その起原を尋ね、その發達變遷を叙し、修辭上文學上の位地價値を究めむとす。

これが端緒として、まづその名稱の沿革を述ぶべし。抑も枕詞といふ名は、いつの頃より用ひ來れるか明かならず。或說によれば、平安朝の中頃よりなりといへり。彼の古今集の假名序にまくらことばと有るは、まくら詞はの誤なること先哲既に說あり。源氏物語に枕言（こと）とあるは、吾人の所謂枕詞とはその意義必しも同じからざるか如し。奈良朝時代には何と呼びけむ、その名も知るべからず。濱成式には神風の伊勢と續けたる歌あれど、更に之に說き及せるなし。天曆の御代に矢田部宿禰公望の物せし日本紀私記には、發語と名づけたり。蓋しこの語を置きて次の詞を喚び起すより負はせたる稱なるべし。この發語即ち起しことばは、私記の作者が創めて命名せしか。或はこれより以前に他の唱道せしものありしか明かならず。

一條院の御宇、斯道の大家を以て世の崇敬を受けし四條大納言の新撰髄腦には、この語は見えねど、歌枕の語あり。『古人多く歌枕を置きて末に思ふ心をなむ見はしける』云々と、降つて基俊が作と傳ふる悅目抄に詠歌の法を說くとて公任の句を引き、更に敷衍して、

『今之をいふに、本に歌枕を置きて末に思ふ心を見はすは、例へば久方の月とも容とも、足引の山、おしてる海、玉鉾の道、天さかる鄙といふやうな詞を、上の三句の間に置きて、下二句に思ふことを述ぶべきなり。』

といへり。公任の意は斯の如くなりしや否やを知らずといへども、悅目抄にいへる、歌枕は昔人の所謂枕詞と相合するを見るなり。但しこの歌枕といふには枕詞の外に、歌によみ入るる名所などをも含ましめたるが如し。守舊派の基俊に對し、革新の旗幟を樹てし源俊頼が說を考ふるに、俊秘抄には別に所見なし。山木髄腦といふ一書には、茜さす日、久方の月、新玉の年の類二十七條を擧げたるが、その始に諷詞の目あり。こは俊頼の始めて用ひし所なるか後人の書き加へしものなるか明かならず。

鎌倉時代に至り萬葉に新點を加へし仙覺律師は、諷詞の語を用ひ、よそへことばと訓みて、五言の枕詞のみならず、長き序詞をも包括せしめたり。蓋し物によせ擬ふる義に取りたること明かなり。而して律師は萬葉の注釋の中にい寄せ立ててしなどのいの辭をば發語と稱せり。是に於いてか、公望の私記にいへる發語とは語義に轉變を來せしなり。仙覺の流を酌める藤澤寺の由阿が、諷詞の名を襲用せしことは、詞林采葉抄を繙くものの知る所なるべし。

由阿に後るること三四十年、應永の頃に至り、今川了俊あり。武道に勳しむ暇に、種々の歌書を著して、冷泉家

の歌風を鼓吹す。その著落書露顯に枕言に關する說あり。或問に答へて、

枕ことゝは何ぞやと云々。まくらことゝは世俗に持言といふ事なり。人の口付に好みて云ふ詞の事なり。云々又歌の枕言などと云は、たとへば、早と云事をよまんが爲に岩きりとをし行水のとよみ、山といはん爲に足引をいふ。道といはんれうに玉鉾といふ如くなる詞を枕ことばと可二心得一なり。所詮その事の題目なり。

といへり。氏が枕言といふに兩義あること明かなり。これ古くより行はれたる事實に基きて、明瞭なる證言を示ししものか。而して今いふ枕詞と序詞とを一に攝ねしめたるは仙覺及び由阿と渝らざるなり。唯その事の題目なりといへるは、前に來るといふ義か、或は事を起すものといふ義か、少しく解釋に苦しむといへども、既に本義の忘られたる上に就きていへるに似たり。

これに後れて、一條禪閤の古今童蒙抄には、『神の枕詞に千早ぶるといふこと說々定まらず』とあるを見れば、枕詞の稱は室町時代に至りては諷詞に代りて次第に用ひられたるなり。斯くてその意義の解釋區々なりしかば、三條西實隆は古書より枕詞百餘種を抄出して小註を加へたり。公の枕詞は燭明抄の序及尾崎雅嘉の枕詞補註に引かれたれど、その原本は今傳はらざるが如し。但し三內秘訣などに徵すれば、註釋も古傳に由りたるが如く、枕詞全般に亘りては、別に所論なかりしものの如し。

元和偃武の後、文運復興の時に當り、國學研究の魁たりし下河邊長流・契沖阿闍梨は舊說を受けて枕詞と稱へたりしこと、前篇に云へるが如し。荷田春滿に至り、始めて冠辭と改稱せり。眞淵は師說を敷衍して、

『枕詞とては古き雅言とも聞えず、枕は夜の物にてかたより、冠は日のものにてもはらなり。物を上に置くこと

を冠らすといふも、古今に通れる語なれば是によれり。』

又『この冠辭はいと上つ代の物なるからは、流れたる世の心詞をばいひも出すまじきものを』

といへり。即ち眞淵は尙古主義の學者なれば、之を古に復し、且佳名を以てせむとせるなり。その物によりて時代相應の語を以て呼ばんとするは可なれども夜の物の喩はあまりに頑なりといふべし。されどその學說は天下を風靡したれば、爾後漸くこの稱を用ふるもの多くなりたり。但し本居宣長及その學派を汲める人は枕詞の稱を用ひたり。宣長と親交ありし谷川士清は、和訓栞に枕詞を釋して、

冒頭の辭なれば頭辭と書くべきにや。常には枕詞と書けり。私記には發語といへり。或は小語をよめり。

と記せり。甲州市河の人座光寺爲祥は、その著和歌詞謂にこれを論じて、

後世文化の餘、步語・序語・冠辭など雅稱するに似たれども、言のさま違ふ。詩を以ていはゞ疊語ともいふべけれども、詩と和歌とは意ひとしからず。…(中略)…唯頭詞と云はむこそ若古とやいふべき

とて士清に基きて頭詞の稱を以てせり。

北邊家の第二世富士谷成章は、眞淵に基きてかぶりと呼び、楫取魚彥・服部高保等は皆冠辭の稱を襲ふ。加藤千萬伎門下の上田秋成は冠辭の稱を用ひながら、尙その意見としては、眞淵の考を慨けり。曰く、

冠辭も神代より言ひ囃せる言の名にはふさはしからず。…(中略)…髻華挿頭などいはんぞ古なるべきを、賢私には裝とやいはまほしく思へり。裝としもいふべく思ふは、必言の上にのみはあらで、歌のあや、詞のまゝに詞の半らにも云ふならひなればなり。

と。髻華といひ挿頭といふは、詞の位置に就きていへるにて、裝といふはその使用の目的に就きて命せるなり。餘齋はこの點に於いても、實に一隻眼を有せしなり。鈴屋の後を承けし本居大平は言詞といふべしとの説を立てたり。

この他、加藤竹里は玉かづらといひ、大寂庵立綱は玉挿頭と唱へたるが如し。又同じく『まくらことば』といふにも、加茂季鷹の著には枕辭と書し、中臣武由良・尾崎雅嘉等は枕詞と書し、『かむりことば』といふにも、或は冠言と書し、或は冠詞と記すなど漢字を樣々に用ひたり。

今以上述ぶる所を表にて示さば、次の如し。

發語	公望	頭詞	篤胤
歌枕	公任	かぶり	成章・御杖
諷詞	仙覺・由阿	よそひ	秋成
枕詞	貞世・兼良・實隆・長流・契沖・宣長・雅嘉・殘夢	言詞	大平
冠辭	春滿・眞淵・魚彦・高保・貞主	かざし	立綱
頭辭	士清	玉かづら	竹里

以上にて名稱の沿革を知るべし。吾人は尙一步を進めて、枕詞の語義を一わたり考究せむとす。蓋し名は實の寶なる所、その使用の所縁はいかにもあれ、既に學術の語として用ひらるる上は、十分にその語義を究むるの要を認むるなり。抑も枕といふ語は夙く神代卷に見え、記紀中に或は枕方といひ、或は枕まくといひ、萬葉集には

敷栲の枕とか、枕づく嬬屋とか、菰枕とか、或は枕の太刀とも、或は枕ぐともいひ、三代集には枕結とも、枕塒へとも、枕の峯とも、枕の下の海とも詠み、宇津保物語には枕上の語見え、源氏桐壺の卷には、大和言の葉をも唐土の歌をも、唯その筋をぞ枕言にせさせ給ふの句あり。この他手枕・袖枕・草枕・假枕・磯枕・石枕の類、物に見えたる悉く擧ぐべからず。

次に枕といふ語の語原に關して、三四の說を擧げむに、貝原益軒の日本釋名には、「まはあたまの上略。くらは座の義にして、頭を置く義なり」と見え、新井白石の東雅には、日本紀私記に師說を引きて枕とは首高之眼目とあるを難じ、說文を引きて、首を置く義とせり。卽ち東雅第八卷に、

說文に枕は臥所薦首とも見えたれば、首を置く義なりけむも知るべからず。まは猶かみといふが如く、かみとは則首をいふなり。

と記し、細註にかみはくみに同じく、くみは首と等しと附說せり。和訓栞には目座の義又纒の意と說き、俚言集覽にはまくは卷くなり、らは助詞なり。枕は柔かなる物を纒きて用ひしものなれば然か呼ぶと定め、言海には、纒座の約、物を纒きて頭の座とすればなりといへり。

枕といふ語の語原に就きては、斯くの如く諸說紛々たり。吾人は暫く俚言集覽の說に從ひ、更にこの語が一の名詞より、枕ぐの如き動詞に用ひられ、一の具象的より抽象的に應用せられたることを認むるなり。而して枕の用たる、頭を支へて安定ならしむるものなれば、後には據り所の意に用ひられ、遂には典故などの義を生じたるを知るなり。彼の淸少納言が、「上の御前は史記といふ書をなむかかせ給へると宜にせしを、枕にこそはし侍らめ」

と枕草子にいへるは正しくこれが證例と見做すべし。紫式部が『枕ごとにせさせ給ふ』といふも亦同じかるべし。斯くて、詠歌の上に津梁となり典據となれるものをば、特に名づけて歌枕と稱へ來れるが如し。されば歌枕は一義にあらず、源氏玉葛の卷に、

よろづの草子、歌枕よく案内しり見つくして、その中の詞を取り出づるに、よみつきたる筋こそは強うはかなからざるべけれ。

とある歌枕は、詠歌の助となるものを汎稱せるが如し。必ずしも名所を指すに非ず、歌詞のみを指すに非ず、將た枕詞のみを指すに非ざるなるべし。歌枕の義は典據の義よりして、單に名所記を示すことにも用ひられ來れり。大鏡卷五謙徳公の條に、『人のすべて知らぬ歌や詩や、又六十餘國の歌枕に名ありたる所々などを書きつつ參らするに、』とあるは、之が徴證といふべし、寛弘の昔九重雲深きわたりにて行成卿の冠を打ち落したりし實方中將に、歌枕見て參れとの綸言ありし歌枕とあるも、之に同じかるべし。歌人が足近叢の外に出でず、新しき外界に接せずして歌を詠まむには、名所記は一層缺くべからざるものとなれり。能因法師の五代集の歌枕の如き、平日はいはず、當座に於いても几帳の下にいかに重要せられけむ。長明が無名抄に『名所を取るに故實あり、國々の歌枕數も知らず多かれど』といへるも之の類の次第に多く出で來しを知るべし。勝地吐懷篇に『和歌之有二名所一、猶二衾之有一レ枕、因レ枕夢熟、因二名所一而佳句成』との思想は古くよりありしなるべし。

歌枕の義は之に止まらず、歌詞の注釋書の義にも用ひたり。萬葉集卷八に出でたる『天霧らひ雪も降らぬか椎の花さかぬばかりにそへてだに見む』の天霧らひの解釋に關し、仲實の綺語抄には、四條大納言の歌枕に、雪の降

るに曇るをいふ云々と見えたる如き是なり。小山田與清が作歌故實に、門人篠原資軍が説を擧げて、『歌枕とは名所のこと記せる書に限らず。すべて歌詞の注釋の名なるべし』といへるはこの説明をなせるものといふべし。

又歌枕の義は悅目にいへるが如く、歌のたすけとなる枕詞のことに用ひたり。鹿持雅澄が枕は頭を保け持つ寓の具にて、枕詞も語の頭を保け持つを要するより喩へたりといふは、あまりに鑿ちたる說にて、唯典據の義より次第に轉義したるものと見るべきなり。斯く歌枕の義はその包容する所尨雜なれば、後には名所歌集の意にのみ用ひられ、枕詞の如きは、上にいへるが如き變遷を來したるものなるべし。

要するに、前に掲げし如く、諸種の名稱あるは、その位置よりいふものと、性質よりいふものと、効力よりいふものと、立脚點を異にせるより起りたる結果なりとす。

第二章　枕詞の定義

枕詞といふ語は、初學の徒も、口にし耳にする名辭なれど、今、例を離れて、枕詞とは何ぞやとの問題に對しては、學者も容易く之が解答を與ふるに苦しむべし。蓋しその種類多く、その性質用法の特殊なるものあればなり。

久方の月、あらがねの地、そを枕詞ならずといふものあることなし。されど、枕詞は五音より成るかと見れば、剣太刀さやをぬけ出で伊香胡山とよめるが中の頭の十二音を以て之に擬するあり。又吹風の目に見えぬが如

くに於ける、吹風のは序詞にして枕詞にあらずとなすあり。朝日さす春日の山のに於ける普通の形容詞句をも之に入れむとするあり。之に反して、あをによし奈良、足引の山などの如く、語義の明瞭ならざる五音の句に限らむとするあり。その範圍も人により一致せず。從つて之が定義を下さむには、まづその境界を定めざるべからず。吾人はまづ韻文若しくは雅文に於ける特殊の措辭にして、その一半は三音四音六音なるもあれど通常五音節より成り、他の語句と結びつき上下連鎖的の性質を有する語句に限局せむと思ふなり。この見解に基きまづ古人の說を擧げて、次に管見に及ぼさむとす。

前章に述べしが如く、矢田部公望などは、次の語を引き起す語と釋して、發語と名づけ、仙覺などは比擬の義と考へ諷詞の文字を宛てたり。共にその性質より考定したるなり。又近古以降、一般の歌人は單に上下約束の語となし、別にその義を究めざるあり。晩近に於いても枕詞は解釋を加ふべからざる詞といふ一派あり。こは前者の流亞なりと謂ふべし。

德川時代に至り、古學起り、この研究も次第に進みたるが、荷田春滿始めて冠辭の稱を以てす。蓋し次の詞句に冠らしむる詞となせるなり。眞淵は師說に基き、更に聲調を諧ふる爲に設くる辭にして、一方にては他の修飾となることをいへり。冠辭考の序に、

「枕詞てふ語は、延喜承平までの御時までなくて、後に云ひ出でしなりけり。源氏物語に云々の事を枕言としてと書けるは、古言を藉きもて今の思をいふ故の語なり。この冠辭はこを本として下の意をいふに有らず。たゞ歌の調の足はぬを整へるより起りて、かたへは詞を飾るものにていはれことなり。」といへるもの是なり。本居

宣長は名稱は師說によらざりしかど。その起原に關しては諧調の爲に置く說を奉じたり。玉勝間卷八に『枕詞としもいふは頭に置くもの故と誰も思ふめれど、然にはあらず。枕は頭に置くものにはあらず、頭を支ふるものにこそあれ。さるは頭のみにもあらず．すべて物の浮きて間のあきたる所を支ふる物を、何にても枕といへば、名所を歌枕といふも、一句言葉の足らで明きたる所に置く山の名と聞ゆれば枕詞といふも、その意にて云ひ始めけむ。』といへり。その養子の大平は『告知らすることの言を審にせむとてまづいふ辭なれば發詞とやいはまし』といひ、內遠は鈴屋翁の說の如く、『言の調の思ふままに緩急を得がたき時に言のあやとしてたち入るるものなり』と古調考に說き．古今集を以て金科玉條とし、しらべの說を以て天下を聳動せし香川景樹も亦その隨筆中に枕詞は調を整ふる具なりといへり。

純諧調說、即ち單に調の爲に置くといふ說に反し、修飾に重きを置きたるを上田秋成とす。氏は眞淵門下の加藤宇萬伎に學びたれど、必ずしも師說によらず。『冠辭は推古天皇の御代に定められしものなれば、冠言の稱も古意に合はず、又必ずしも言の始に冠らしむるにあらず、詞の中にも冠らしむ』といひ、その性質より推して、よそひと命名するを最も恰當すといひたり。冠辭續貂の序に歌のあや調のままにといひ、又『こは言の始にもなからにも冠らせて、そのことの心にあたはぬものから、調ぶるよすか歌ふのみにはあらで、くさぐさのあやなんある。』といへるもの、その意見の要旨を認むべし。鹿持雅澄に至りては、單に詞を飾るが爲に置くといへり。即ち宣長、景樹と異なり純修飾說たるなり。萬葉枕詞解に

『再考ふるに、枕といふは保け持つよしの名なるべし。さるは枕は頭を保け持つ爲の具にて、又枕詞も詞の頭を

保け持つを要する詞なるから、かた〳〵思ひ寄せて喩へ云へるなるべし。』

『枕詞を一句の詞の足らで明きたる所に置きて、詞を補ふ料のものと思ふはいと〳〵あらぬことなり。後の世の歌にこそさる様も見えたれど、古の歌ならば、さる由にはあらず。皆詞を美しくかざりていはん爲に此詞はあるなり。』

とあるを以て徴すべし。

又枕詞は事實の當面には關繫無くして婉曲の表出を助くるに必要なるものとせるあり。北邊隨筆に曰く

『歌に用なき詞をわざともとめ出て置くなり。…(中略)…いひてよからず思ふことあらんに、端にても用あらむ詞を置かば、猶いへるに等しくなりぬべく、然りとてうつたへにいはざれば、句の數足らねば、わざと無用の詞をおくなり。此故に上古に冠をおかれたる所は必ずいひてよからずと思はれたる心のこもりてあるべければ、その無用なるが却りて有用の詞にもいたくまさるわざなり。』

と、こは中世に於ける狀態に就きていへるものにて、長明が無明抄に見えたる半臂の句の說に基くか。

又橘守部は、文章撰格中に、枕詞は稱言の一種にして、調の爲にも置き、又對句などの取合にも置くといへり。これ秋成の說に基き、更に對句のことを附加せるものなり。高橋殘夢の如きは、『體にまれ用にまれ、事の故を頭に置きて云ひ出づるもの』といひつつ、浦ぐはし・花ぐはしの類をば別に稱詞と名づけ、枕詞と分ちたり。

土子金四郎氏は洒落哲學の中に枕詞は滑稽の詞なりと釋せり。こは井上淑蔭が歌格新論中に『酒席の戲言に一杯のみの宿禰、一つのめの若草などいふが如く興を催し頤を解く』といへると歸を同じうす。これも一面を見て

他面を適せるなり。

チャンバレイン氏は、意義なき詞にして同格語（アッポジイション）と成立を同じうすと說けり。意義なき詞といふは北邊隨筆などの說によりたるが如し。

以上諸說區々たりといへども、その主とする所を要約すれば、性質より說くものと、目的よりいふものと、効用よりいふものとの三つに分つべし。次の詞を引き發すといひ、他に諷ふるといふは性質說にして、調を整ふといひ、詞の裝をなすといふは目的說と稱すべし。婉曲の表出の爲といひ、韻律を助くといふが如きは効用說と名づくべし。各見る所ありといへど一方に偏したり。諸說を打つて一丸となすを以て却りて優れりと信ず。曰く、

枕詞は上下相關的の措辭にして、その上半は通常五音節より成り下半の爲に從屬の地位に立ちて、或はその修飾となり、或は聲調を助け、以て讀者に明晰深甚の印象を與へ、或は匂劇の變化によりて心意を製しましむるものなり。

と結ばむ。

第三章　枕詞の形式

枕詞は通常五音節より成る語句を指せどもその形式に就きて、尙考究すべきことあり。仙覺の諷詞といへるには、これより長きものをも加へ、長流の燭明抄にも一二の長き句を入れたり。特に上田秋成はその範圍を擴め、

三言より二十四言までの例を擧げたり。冠辭考續貂の序に、

足引玉鉾の五言のみには有らず、千葉の葛野は三言なり、新治筑波、野つ鳥雉子は四言なり。ことひ牛の三宅木のくれやみ卯月は六言にて、かきくらし雨ふる河は七言を詞の中に立ち入れたりき。我妹子に衣かすがのよしき川は八言、湊入りの蘆分小舟さはり多みは十二言なり。波間より見ゆる小島の濱ひさ木久しく成りぬといはむとて、本の句十七言全く冠らせたり。早稻田かりかねはやも鳴かなむ、河風さむし衣鹿脊山は三言を中に立ち入れたるなり。又わきも子が赤裳ひづちて植ゑし田を刈りて收めむ藏なしの濱とは、濱の名をかしとて二十四言の冠りなり。

と、この說たる、性質上よりいはば、一の非議すべき點なしといへども、斯くては萬葉の長篇に見ゆる十數句より成るものも枕詞と呼ばざるべからず。こは寧ろ序詞若しくは序句と名づけて兩者の間に區別を立つるを便とすべし。

國歌に序歌といふ一體あり。上に事を假構し、その意義又は音調を借りて、下にその主意を括出す。例へば伊勢灣口の的方の港の觀望頗る佳なるを言はむとて、的の字に緣を求め、『ますらをが、さつ矢たばさみ、向ひ立ち射る的方は、見るにさやけし』と詠み、又餘命を保ちて聖代に遭遇せむといふ意を、『ささなみの、長等の山の、ながらへて、君が八千代に、あふよしもがな』と諷へるが如き是なり。序歌はその淵源する所尙しく、繼體紀に鮪臣が『大君の御帶のしづはた結びたれ誰やし人も』と詠めるを始とし、孝德紀には、川原史滿がよめる、齊明紀の『繫ぐ川邊の若草』の歌、萬葉時代には、吹負刀自の『川上のいつもの花のいつもいつも』また坂門連の『巨

勢山のつらつら椿つらつらに』の類少からず。眞淵の新まなびには、序歌を釋して『木にくさ〲の事を擧げ、末にはただ一つ心をいふなれば即ち古の意なり』とも見えたり。この序歌の假構の部分を、序句又は序詞と名づけ、枕詞と區分するは學術上便益ならむか。但し先輩中には、別に吹風の目に見ぬ如く、大船のたゆたふの類を序と命ぜし人あれど、こは尋常の形容詞句となすか、或は枕詞に合して別に目を立てざるを善しとす。

然らば枕詞と序詞とを區別するの標準は、いかにといふに、古來國歌は多く五七の句を以て調となせば、その一句より成るを枕詞とし、二句以上より成るを序詞又は序句と命ずべし。即ち、長き春日にかくる音の根のは枕詞にして、長々しに掛くる山鳥の尾のしだり尾のは序となすが如し。

權田直助の國文學柱などには、五音を枕詞とし、それ以上を序詞と命けたれど、國歌は五音若くは七音にて一句をなすを常とすれば、最大の一句即ち七音以下を枕詞とし、以上を序となすを宜しとすべし。つばらつばらに掛くる梶のおとの及三宅潟に掛くることひうしの、卯月に冠する木のくれやみの如き六音のものも、古今の長歌に見ゆる長柄の橋のながらへて、伊香保の沼のいかにしての如き七音なるも、各一句にして枕詞と見做す方妥當なればなり。

枕詞は一句七音以下のものと定むるも、その多きは五音なること言ふまでもなし。されど四音のものあり。三音のものも極めて纔に存するを見る。即ち次の如し。

千葉の…　葛野　（應神記）

八百丹……杵築　（出雲國造神壽詞）

月の……桂の此方（大井河行幸和歌序）

春の……梅津より（同）

この他、衣かせ山、早稲田かりかねの如き言掛によりて挿める類は多少之あるべし。こは五七の格調の形式未だ確定せざりし時のもの及散文に稀に見る所なりとす。

次に四音より成るものは、次に示すが如き二十餘種あり。

日本紀に見ゆるもの

秋葱の……二こもり　　芦の根……ねもころ

うま酒……三輪　　しなてる……片岡山

つぎねふ……山代　　春日の……かすが

みかしほ……播摩速待　　百船の……度會

古事記に見ゆるもの

朝日の……ゑみ榮え　　おしてる……難波

さねさし……相模　　にひばり……筑波

野つ鳥……きぎし　　邊つ浪……磯にぬぎ棄て

萬葉集に見ゆるもの

打苧を……麻績王　　櫛笥の……二上山

空みつ……倭　　　　百しぬ……三野王

出雲風土記に見ゆるもの

はやさめ……くたみの山

倭姫命世紀に見ゆるもの

おすひを……飯高　　　　白濱……………貢那胡國

これらは古書にのみ見え、歌の格調が五七若しくは七五に一定せざりし時の事なり。されば萬葉時代には、之に尾辭若しくは接頭辭を加へ、五音に改めたり。春日の、打等を、椅箭のといふが如き句末に枕詞を具へたるは、その儘となし、他には、うま酒をうま酒のとし、しなてるを科てるやとし、おしてるを押照や、空みつを空にみつと改め、又野つ鳥をさぬつ鳥と改めたるが如し。萬葉以前の歌謠多く保存せられたらむには、尚多く四音の枕も見らるべかりしなり。

次に六音なるは前に擧げしかぢのおとの、ことひうしの、木のくれやみ、水の泡の等數種に過ぎず。七音のものは一層少しとす。

斯く枕詞が五音のもの多きは、我邦古代の韻文が五七調なりしに由ること云ふまでもなし。而して五七の二句は合して一聯をなし、始に起したる事を受け、これを治定するには、一聯の終に於いてし、更に事を起すには五音節の句より始むるが故に、枕詞の形式は自ら五音より成ることとはなれるなり。平安朝に至り、詠物などの關係より、漸く七五調の發生せむとするに方りては、他の詞と合せて、七音の句に枕詞を置くが如き變體を生ずるに

至れり。古今集卷十九貫之の長歌に『玉の緒の、短き心、思ひあへず、なほ荒玉の、年を經て』とある、なほ荒玉の如き是なり。斯くて後には『などしろたへの』又『いまあしびきの』などの句をも生じ、又壬生忠岑の長歌に見ゆるが如き『世々の古言、なかりせば、伊香保の沼の、いかにして、思ふ心を、のばへまし』又『斯くしつつ、長柄の橋の、ながらへて、難波の浦に立つ波』の如き純然たる七音の枕詞をも發生するに至れり。されども當時長篇は既に衰へ、短歌には枕詞よりも掛詞及緣語を尙ぶの風熾なりしかば、六音乃至七音の枕詞は發達せざりしなり。

第四章　枕詞の性質

枕詞は通常五音節より成る語句を指せども、嚴密にいふときは、單獨にてその用をなすべきものにあらず。必ず上下相待つべき性質のものなること、第三章の終に示せるが如し。例へば梓弓といひ、飛鳥のといふも、一の名詞又は之に助詞の加はれるに過ぎず。梓弓春と連ね、飛鳥の明日香と續くるによりて、始めて用をなすものなり。されば姑く舊慣に從ひ、その上半をいふこと多しといへども、正しくは上下を連ねて稱すべきものなり。故にここには上下連接の關繫を考へその性質を明めむとす。

第一　論理上より考察すれば、この上下の語句は、觀念の連合及伴生と思想の轉換との孰れかによりて連結せらるるものといふべし。觀念の連合には、類似の關繫に基くもの、區別の目的によるもの、部屬の關繫による

もの等あり。手腕の白きを葱の根に喩へ、或は根白の白き腕（ただむき）といひ、脆きをいはむとて水泡なすといひ、道上に橫る人のことをいはむとて、犬じもの道に臥すといふが如きは類似の關繫によるものなり。即ち上の四音若しくは五音節の句は下の觀念を顯著ならしめむが爲に比擬せられたるなり。

人物といはず、土地に限らず、事物にもあれ、その顯著なる性質光景を擧けて區別の目的となすは、八隅しし我大君、高光る日の皇子、葦が散る浪速、まこも刈る淀、蘐妙の藤の類なり。八隅ししは帝德の大なるを表し、高光るは皇孫の神聖なるを章す。一方より見ば讃辭にして、他方より見ば區別を示すなり。古浪速の浦には濱渚に芦荻生じ、その花の散るさま人目を惹き、淀のわたりは今も菰叢生す。初夏の候里人の小舟に乘りて之を刈るさま注目に値す。よりてその時ならざるもその地方に於ける顯著なる光景をとり出でて區別とせるなり。藤に掛くる荒栲には、織物の粗なる意を示して他に分つなり。

部屬の關繫とは、大名を擧げて小字を呼び起し、汎稱の語を置きて特稱の物を想起せしむるをいふ。家禽少き上代に於いては雞はその唯一のものたりしなるべし。斯くて庭つ鳥の汎稱の下に家雞と連ね、鶉鷄類中野生のものは雉子なるより、野つ鳥雉子と連ねたるが如し。

この他事物の緣由により、一の觀念より他の觀念を作生せしめて相連ぬるあり。三輪の大物主神が創めて美酒を釀せし傳說により、うまさけを置きて三輪と連續せしめ、饒速日命の磐樟船に乘りて大空より見給ひしといふ神話によりて、空みつ大和と連ぬるが如き是なり。

次に思想の轉換は讀者の注意を惹かしむるものにて、散文の上にも韻文の上にも共に必要なり。特に詩形の小

さくして、動もすれば、單調に陥り易きものにありては一層然りとす。故に古來衆多の歌人は多く之を用ふ。而して枕詞に於ける思想の轉換は甚だ匆劇にして、前の觀念の未だ消えやらざるに、早くも既に他に移る。例へば眞髮ふる櫛名田姬といふが如き、髮を梳ることと櫛との間には、思想の聯關ありといへども、その觀念の未だ心裡に浸徹せざるに方り、此の音をもてる人の名に轉移せるが如きなり。この轉換にも種類多し。ぬばたまの黑髮山の如く、上の五音は類似の關聯より黑きといふ觀念を生じ、それより直にこの音をもてる他物に移したるあり。又高ゆくや隼別命の如く、始に區別的の語を置き、その實體を思はしむる程もなく、別の物に移せるあり。この區別語は或は性質を示すことあり、或は習慣を示すことあり、或は光景を示すことあり、或は狀態を寫すことあり、その轉ずるに方りて、いづれにても殆ど關繫なきものを拈出し、人をして意外の感を生ぜしむるを常とす。玉櫛笥の如きは、二見浦とも、三室戸山とも、明けてとも續くること讀者の能く知れる所なり。こは櫛笥には蓋あり身あり又開閉するものなれば、上にこの語を置き、これに關聯せる觀念を作生せしめ、總てこれを他に轉じたるなり。又水鳥の鴨の氏人といへば、始に大名を置き、次にその部屬せる小名を出し、これより直ちに移したるなり。

この他音調の上より同音を反復し、他に轉換する一類あり。例へば吉野川よしや世の中といひ、足引山悪しかる咎といひ、濱楸久しくなりぬ、又唐衣頃も經ずといふが如き是なり。こは思想上に於いては毫も連絡の存することなく、單に音の類似より來りて直に轉ぜしめたるものなり。

凡そ轉移の用例最も多きは梓弓の枕詞に超ゆるは無かるべし。諸書に見えたるもの實に四十餘種に及べり。蓋し弓は古代の武器として普人の携へし所、尙武の國民にとりては劍と共に最も重ぜしこと言を俟たず。隨つて之

を枕詞に使用すること多し。その部分には弭あり、筈あり。筈に本末あり。押さへて弦を張り、矢を番へて引きて放つ。その射るや音あり、その勢や強し。そるといひ、かへるといひ、よるといふも皆之に因めることなり。これ等の部分名稱及作用を取りて轉義に用ひたれば、その數の多きに上ること理なりと謂ふべし。即ち弦の音より敦賀の山とも鶴の命とも續け、筈の音より面筈にかけて思はずに轉じ、末といふより末野の原といひ末の珠名（人名）とうつし、押してより小鹽山にかけ、張るといふより春又は遙に轉じ、矢といふより矢田の廣野、八十の港、八幡の神山、大和國、八島、彌生、屋蔭などやの音に廣く冠らせ、引くといふより引野、引津の野邊、引き豐國、引手の山などにうつし、射るといふより入佐の山、入野、磯部、磯間の浦、入江、一志の浦等に及ぼし、音といふより音に聞きつゝなどと續く。その他よらの山、歸る朝など列擧しがたきばかりなり。現代に於いても軍の庭とか印度洋などに冠らせて詠めるあり。以て枕詞かいかに多趣に轉移すべきかを窺ふべし。

第二　文法上より考へむに、枕詞は上下相關的のものたるに止まらず、上半は客想を表し、下半は主想を示すものなれば、上半部は常に從屬的の關繫を有すること是なり。而して客想の主想にかかるや、單に一語の上に止まることあり、一句の上に及べることあり。馬じもの繩とりつけての如きは後例にして、足引の山の如きは前例たり。又上半部は下半部の全體に關せずしてその一部分にのみ繫らしむるあり。月草のうつし心の如き、水たまる池田朝臣の如き是なり。この類は語若しくは句の全部にかかるものに比すれば、第二期に生成せしものにて、修辭學の說明を竢ちて、後、始めてその性質判明すべきものなり。

更に枕詞上下連接の關繫を考ふるに、上半の下半に於けるや、主言的の位置に立つあり。客語補語の關繫に置

かかるあり。修飾の目的に用ひらるるあり。茜さす日の如きは、上は體言にかかり、ぬば玉の黒きは用言にかかり、前者は形容詞的にして後者は副詞的なるが如し。又兒等が手を卷向山といひ、君が世に逢阪山といふが如きは客語若しくは補語の關係に基きて連ねたるもの、燈火の明石の浦の類は主語述語の如くに連ねたり。その他上半と下半とは同格の如きあり。

最後に枕詞の上半がかかる所の語は、如何なる品詞に多きかといふに、名詞を第一とし、動詞形容詞之に亞ぎ副詞は第三位にあり數詞は極めて少し。

第三　修辭上より考ふるに、類似の關係に基くもの、例へば雲居なす遠き、鴨じもの水に浮き居ての如きは比喩となれるものなり。又區別の關係に基くものの中、その特性をたたへ若しくはその顯著なる狀態を示すもの、例へばいすくはし鯨、青が散る難波の如きは、稱辭及況辭となる。次に部屬の關係より連ねたるもの、例へば沖つ島鴨、島つ鳥鵜の如きは汎稱といふべく、さ衣のを筑波、大鳥の羽がひの山の如きは轉義となれるなり。彼の音の節奏を旨とせるものの中、柞葉の母、ちちのみの父、有馬菅ありて後にもの如きは頭韻といふべく、眞菅吉蘇我の子、さゆり花ゆりも逢はむの如きは間韻といふべく、唐衣頃も經ず、花かつみかつ見るの如きは脚韻といふべし。又所緣の語又は音より他にうつるもの、例へば居待月明石、眞髮ふる櫛名田姬、若菰をかりぢの小野、君が代に逢阪山、眞鉋もて弓削の河原の如きは轉義により種々の構像を起さしむるものなり。後世に至りては上半部のみにて下半の意をも攝せしめたるもの、例へばなど世の中の玉襷なるに於けるが如きものをも生じたれど、上下二つ並びて用ふるを本義とす。

第五章　枕詞發生の起源

枕詞發生の起源に關し先輩の所說一樣ならず。その主要なるもの凡そ五つ。一には調を整ふる爲に設けたりとするもの、二には詞を裝はむが爲に置きたりとするもの、三には同音異義語を區別せむが爲に用ふとするもの、四には同格語を並べたりとするもの、五には雜語の重譯より來れりとするもの是なり。

中に就き重譯說は萬葉僻案抄の隱國の泊瀨の條に述べたるに始まり、近時某先輩も試に立てられたる所、あしびきの山といひ、あをによし奈良といふ、その上半は上古の語にして我等の祖先にも容易く了會しがたかりしより、當時の先覺が口碑その他により了解し易き語に對譯し二重に唱へ來れるを、さながら韻文散文中に挿入したるならむ。彼の千字文を讀むに天地あめつちと玄黃くろくきなり、宇宙おほぞら洪荒ひろくおほきなりと重讀するを合せ考ふべしとなり。この說たる極めて嶄新なりといへども輙く首肯すべからず。もしこの說をして正しとせば世に枕詞といふ五音の詞は我等の祖先の言語にあらで、その先住民或はその封疆を異にせる地方の言語とせざるべからず、吾人の淺學なる上代の他邦人の言語に斯の如きもののあるを耳にせず、又我が祖先が重譯せる他邦語を韻文に挿入して平然たりしが如きは上代人といへども有り得べからざる事情ならむと考ふればなり。近時木村鷹太郎氏が日本太古史中に二千餘の枕詞を希臘語として解釋したりしが如きはこの想像說に立脚したる結果ならむか。而もその說たる荒誕にして信を措くに足らざるなり。

次に同格語の並列となすはチャンバレイン氏の唱ふる所、あをによしと奈良は同格にして足引と山とも同格なりと說くが如し。但し何が故に同格語を首に置くかといふ說明なければ、起源說の一つとして擧ぐるは多少失當の嫌なき能はざれども、一般に用ふる同格語の義に照し見ば、重譯說とはその由る所を異にし、西洋の作辭學に見ゆるトートロジーとも起る所を同じくせず、唯形容的に置ける名詞を指すが如し。朝の形容に西歐の文士がオロノスに倣ひて、薔薇色の指と置く習あるが如き是ならむ。然らば第二說の一派と見るべきなり。

次に同音異義語の區別の爲にとは金澤博士の唱へし所、例へば漢字を區別するにショーの字音中に正月の正、大小の小などいひて區別するが如く、かけといふ語にも名詞の時は庭つ鳥鷄(かけ)といひ、動詞の時は玉襷掛けと分ち用ふるが如きを參照するが如き是なり。こも傾聽に値する說ながら、尙深く考ふるときは、我が國語には果して同音語多きか、同音語に別々に用ひたる枕詞は今に存在するもの多きか、又それらの枕詞を使用せるに際し、歌人の意向は果して如何なりしかといふが如き諸問を考量せざるべからず。今試に古言梯所載の語を檢するに千八百八十三語中同音語二百二十語あれば少しとすべからず。然れども枕詞の多くは平安朝以前の作なれば、倭名鈔など後の書籍より材料を採りたる彼書は幾分の控除を要すべし。朝鮮人が同音語を區別するに特殊の何な形容的に加へたる例は興富傳にも一二散見せるあり。我が古き枕詞には區別の爲に置きしものなしと云ふべからず。尤も同音語に各別に用ひたる枕詞は

ささがねの……蜘　　白妙の……雲　　あからびく……朝　　妹が干す……麻

うつせみの……世　　ぬば玉の……夜　　鳥つ鳥……鷄　　卯の花の……憂

たまくしげ……開く　芥火の………飽く　玉藻刈る……沖　朝霜の………起き

此等數例に過ぎず。歌人の枕詞を用ひし時の意向はと考ふるに、作家の自記なけれども、單に文法上の爲に置けるにあらで、修辭的技巧として用ひたるものの如し。さればこの區別の爲にといふ說は枕詞一部の起源としては可なるが如しといへども、全體の起因として認むべからざるに似たり。

次に諧調の爲に起れりとの考は賀茂眞淵・本居宣長・香川景樹等も又之を唱へざるなし。眞淵は『ただ歌の調の足はぬを整へるより起りて』といひ、宣長は『名所を歌枕といふも一句言葉の足らで明きたる所に置く山の名と聞ゆれば、枕詞といふもその讀にて云ひ始めけむかし』といひ、景樹は『調を整ふる音』といひ、內遠は『言の調の思ふままに緩急を得がたき時に言のあやとして立ち入る』といへり。その間に多少の差異ありとするも、一定の調の爲に置くといふは一なり。長歌には對句などの爲に殊更に枕詞を置きたりと見ゆるあり。短歌にも良少將の『たらちねはかかれとてしもぬば玉の我が黑髮を撫でずやありけむ』のぬば玉の如き調の爲に置きたること疑なきもの少からず、然れども韻文の形式は太始より一定せるものにあらず、最初は各人自由の格調（といひ得べくば）を以て謠ひしものなるべく、或は謠詠すべき事項によりても差異ありしならむ。そは各國の文字に通じて然りしことにて、支那の詩が七言及五言に一定せし以前には、三言あり、四言あり、六言ありしことは一部の詩經を繙きても知るべく、印度の古詩が一解十六言、一章三十二言に定まりし以前には種々さまざまの體ありきと聞く。國語に於ても同じく五七調に一定する以前には種々の異體ありしなり。否異體といふよりも一定せる形式なかりしといふを恰當とすべし。上古の人が殊更に形式に拘り諧調の爲に枕詞を要めしといふは眞淵の說にあら

ざるが如く、調の爲に用ひしは第二期の事ならむと思はるるなり。彼の同音を反覆せる『まそがよ蘇我の子ら』の如き『若草のわかく』の如きは諧調の爲に用ひたる枕詞なれども、その生成は推古紀以前には見えざれば枕詞原始時代には尙發生せざりしと見るべきなり。

次に詞を裝ふ爲にとの說は鹿持雅澄等の主張する所にして、美辭麗言を好むは上古よりの人々の傾向なれば、之が枕詞となりて表れたりとなすなり。やすみしし我が大君、高ひかる日の御子などの枕詞を檢し見ばこの說は大體に於いて可なるが如し。而も上古に於ける美辭麗言は枕詞の外に對句もあれば同句法もあり。されば、單に裝飾とのみにては未だ盡さざるなり。

管見によれば、枕詞はその內容複雜なるが故に、その起源に關しても一元說を固執する能はず、反つて多元說を主張すべしと信ずるなり。然り而してその多元なるが中にも自ら前後の順序あるべきなり。上代の人は猶小兒の如く、心裡に浮びたること、並に外界より入り來る景象を細かに秩序を立てて表出するを得ず、偶々心頭に浮び來る斷片的なるものを以て全體を聯想せしむるに過ぎず、これやがて枕詞の胚芽となる。而してこの胚芽は五音に定らず、短きあり、更に長きもあるべし。例へば八百丹杵築宮といふが如きはその原形に近きものならむ。出雲國造神壽詞に採る以前に、何人か彼の宮の造營にあたり八百土を用ひて土木の事ありし斷片的の事實より、宮のことを暗示的に示したるを、後人繼承して使用せるならむ。その暗示的の八百土と社の杵築とか合して一つに連ねられたるにもその古形たるを知るべく、之によしの二音を加へ八百土よし杵築と續くるは五七格調の定まりて後に成りたるを知るべし。

抑も言語は最初意義なき音聲が情意の動くままに外部に表出せらるるに始り、度を重ぬるに及びて意義を有するものとなり、感動的より意識的に、具象的より抽象的に進むべきこと世界何れの人種に於ても然らざるはなし。故に自然の光景偉大なる人物に接しても始は單に感歎詞などを發するに過ぎざりしものも、漸次に意識的に他の語と感歎詞とを組合せて用ふることとなる。神の名にくし又はうまし等の語を加へたるもその一例といふべく、或る花木を賞歎するにも、くし又うましと一群のくはしの語を用ひ、花ぐはし櫻、香ぐはし橘などの如き稱詞を加ふることも起りぬ。これ亦枕詞の一體をなすに至りたるなり。

智的作用の進歩に伴ひ、同音語は云ふまでもなく、或る語を明晰に示さむが爲に說明的の語句を加ふることも漸次行はれ來るべく、國語には關係代名詞の存在せざるが爲に之を或る語の上方に排置すべく、之がその用法及音數の約束によりて枕詞となる傾向を生ぜり。例へば若く勇しき軍人を見て瑞々し久米の子と最初は實事實況より表現したるを、次には若からぬものにても久米部の人には常套語の如く用ふるときは又一種の枕詞となるが如く、或は鄙の形容に天ざかると上に置くもこの類なるが如し。

次に瞑想も意識的になるにつれ、或る個體を示さむが爲に、まづ概念的の名辭を置き、その中に包容するものを想起せしめ、次に之に及ぶが如き方法によるあり。例へば庭つ鳥かけ、野つ鳥雉子に於けるが如し。

瞑想は更に進みて比喩的の表現を取らしむるに至りいよいよ枕詞を發達せしめたり。例へば翡翠の青き羽毛を以て人の青衣に比し、射干玉の實の黑きを以て黑髮に比し、刈菰を以て世の亂に喩へ、若草を以てしとやかなる妻に擬する類極めて多しとす。

次に智的作用に基づける說明的の語句は、更に作家の意匠により裝飾的傾向を有せしむることとなるは自然の徑路なり。例へば、袖振る乙女に蜻蛉の羽のと加へたるが如きは、說明的より進んで裝飾的に進みたるが如し。

更に音の反覆により調をととのふるが爲に起りたりと見ゆる一類あり。例へば『いくみ竹、い組みは寢ず』『さなかづら、さ寢ずば』の如き是なり。

此等の例によりて考察すればまづ瞑想によりて起りたることは論なきも、その起源を一つに定むるは却つて眞を遠かるものと謂ふべきなり。

第六章　枕詞の生命及轉用

言語は生命を有し、成長發達を遂げ、或は榮え、或は亡ぶ。枕詞の如き、日常の談話に使用せられし例は少しといへども、一種の言語としてその習には洩れず、大に盛に用ひられし時代あり、又之に反し、世の詞人に省みられで死語となりし時代あり。多くの枕詞中にも一たびか二たび用ひられて後殆ど世に忘られたるあり。又幾千百年に亘り詞壇に常用せらるるあり。日本武尊の御歌に見ゆる『久方の』の如きは爾來千幾百年間殆ど絕えず用ひられ、その接續の狀も天及天象に屬する月、空、雲、雨に掛け、それらの語をもてる天の川原、天の戶、天つ宮、天の香山、天の橋立、天つ御門、天つ瑞、天の金機、天路、雲井・雲の上、雲の通路、月夜、月の桂、月の衣、月人男、月毛駒、光、夜晝等多趣多樣に連ねられ、允恭天皇の御製の錦を修飾し給へる『ささらがた』の如き僞

後用例極めて少しとす。斯く生滅する所以のものは適者生存の理法に基くならむ。音調の雅正にして包容性廣く、若しくは他と相關の性質多きものは種々に連續し、然らざるものは自ら廢語となれるなり。梓弓の如きはその包容相關のもの甚大なるが故にその接續は最も多しとす。即ち

一、張る　二、引く　三、押す　四、射る　五、弦　六、筈

七、本末　八、轉る(かへ)　九、音　十、腹　十一、矢

名所(などころ)としては弦あり筈あり本末あり。人の之を使用する動作につきては、押す張る引く伏す寄す射る等の語あり。引きたる弓の轉る又よる等の作用あり。之に矢を番ひて放つことは云ふまでもなし。而して此等の語より種の同音異義語に轉ぜしむるが故にその接續極めて多くなるなり。例へば張るより春に又蓋にうつし、引くより引津引野に、引きとよもすより引豐國、引豐臣と重ねて續け、射るより入佐の山、入野、渡、磯部、磯間、入江、一志の浦、伊駒高嶺、猪名野、田舍、居待月に、矢より矢田の廣野、八十港、八幡、大和、八島、彌生、屋蔭、矢口渡等に轉ずること前にも云へるが如し。

斯の如く類似の音より轉義し易きものは世々の歌人が好み用ふるより彌々發展し、否らざるものは自ら使用に限度あり、殊に音調の宜しからざるもの、歌人の趣味に合せざるものは忘却せられ終に亡ぶるに至る。この轉義の最も盛に行はれたるは三代集時代にして、その以後は大に衰へ、後徳川時代に至り擬古文學の行はるるに及びて復一時盛に用ひられたり。尚轉義の多き枕詞五六種を擧ぐべし。

玉くしげ

身……三室の山、三室戸山、君が身、三河國

蓋……二上山、二見浦、二年、二村山、二たび、二屋、二名山

明……明け、開き、葦木河、

奥……奥

筥……箱の浦、函根山

烏玉の

黒……黒髪、黒髪山、黒田の里、黒牛潟

暗……闇、暗部山

夜……夜、夜の衣、今宵、横川、

夢……夢、夢殿

白栲の

衣……衣手、袖、下衣、麻衣、天領巾、紐、襷、

雪……白き月、月の光、鶴の毛衣

波……波路、濱の眞砂、濱名橋、

木綿……木綿附鳥、みてぐら

唐衣

着……着、奈良山、來、

裁……立田山、立つ日、立つ名、龍、

縫……ぬふ針河

裾……裾野

紐……日も

掛……掛けて、（心に）斯る、

袖……袖師の浦、

裏……裏見の山、美し

衣……頃も

千早ぶる

神……神代、神の忌垣、神の御阪、神垣山、神路山、神無月、神田、齋の宮、賀茂社、香椎宮、別雷、小鹽山、平野の松、神南備山、三上山、

人……人、我が大君、猛雄

稜威……宇治、宇治渡、金の御崎、

社……朱の玉垣

ますかがみ（まそかがみ）
見る…見ず、敏馬浦、三宅の主、
映る…移り、
對ふ…向の丘、
影…そこなる影
さざなみの（さざなみや）
志賀…志賀の大海、志賀の辛崎、志賀の子ら、志賀の花園
大津…大津の宮…長き橋、…大山守、…矢橋の渡
長等山 波麻山…小山…比良の高嶺…三井の古寺
波の紋…あやしき
寄る…より來る人、夜
劍太刀
身…身に添ふ妹、三とせ、
鞘…さやかに、
名…名の惜けく
結… 己が、平夜爾神社

磨……とぎし心
緣……日嗣の御子

以上の例に徵しても、弓、劍の如き男子の武器、櫛匣、唐衣、眞澄鏡、の如き女子の調度、大衆、黑白の色に關する原料等が枕詞として最も多樣に用ひられたることを知るべし。

但し以上の如き枕詞の發展に就きても、劍太刀に於ては柄、鐔等の部分あり、此等を利用して束の間もとも、つばらになどと連ね、或は猛きとか武夫などを想はしめてその用途を一層廣くなすが如き、眞澄鏡に於ては多、心、等の詞を聯想せしむるが如き、櫛笥には乙女などを聯想せしめて用ふるなど新しき用法を工夫するの道は必ず之あるべきなり。然るに中世の歌人は古を摸するのみにて、新樣を工夫することなく、終に枕詞を廢絶に歸せしむるに至れり。

次に枕詞の轉用を考ふるに、久しく慣用せるものは冠らすべき詞と修飾限定せらるべき下の語と同一に思考せらるることあるに至れり。例へば蘆に糠に釘といへば豆腐に鎹を思ひ浮べ、鬼も十八といへば番茶も二十と聯想せるが如く、足引といへば山を連想し、青丹よしといへば奈良を思ひ出づるが如し。萬葉に『足曳の、岩根こゞしみ』又『足引の木の間』云々、又『足引の嵐吹く夜は』云々などと見え、菅公の詠に『足引のこなた彼方に道はあれど』とあるが如きはいづれも足引を以て直に山に代へて用ひたるなり。伊勢の御が『久方の中に生ひたる』と詠み、小大君が『久方の身に添ふ影も』と詠ひ、惠慶法師が『久方の手にとるばかり』と詠じたるは月の義に轉用したるなり。源氏の桐壺に『百敷にゆき侍らむことは』とあるは直に大内の意に用ひたるにて、たらちねな

畏の義に用ひ、千早ぶるを神の意とし、ささかにを蜘のことに用ひたるが如く名詞に轉用したるものあり。

この類の錯覺より來るものには、上に冠らする文字を下に置きて修飾せらるる語の如く讀むものあり。春日をかすがと讀むは春日の香須我とあるより、飛鳥をあすかと讀むは飛鳥の明日香とあるより轉訛せるなり。小兒が宿根といふ字を書くに方り、宿の字を竹冠の下に根字を附して作るが如き心的作用に於ては相似たるものあらむか。

又動詞形容詞にかかる枕詞にして、その被修飾語に代用せるものあり。古今集の俳諧歌に『ことならば思はずとやはいひ果てぬなぞ世の中のたまだすきなる』とある玉襷の如き懸る（心に）の義に代用せるなり。大和物語に『白露のおきふし誰れをこひつらむ我は聞おはずいそのかみにて』とある石上の如きは古きに掛る枕詞なればその意に代用せるなり。後撰集十二にある『まちくらす日は菅の根におもほえて逢ふ夜しもなき玉の緒ならむ』の中、玉の緒は命に代用し、菅の根は長き義に轉用したるものなり。同書八卷の『よるならば月とぞ見まし我が宿の庭白妙に降りつもる雪』の歌中の白妙の如き、本は枕詞に用ひたるを、茲は副詞の如くに使用せるなり。

次に枕詞を置ける位置に關しても變轉を來せり。枕詞は多く五音より成れるが故に、その置かるる所は五の位にあるべきを、紀貫之の長歌には『なほ新玉の年を經て』と七の位に他の語と合せて置けり。定家の拾遺愚草に『うば玉の夜わたる月のすむ里はげに久かたの天の橋立』とあるが如きも貫之の顰に倣へるもの。而して久方に久しの意を兼ねしめたり。蓋し五七調のやうやく七五調にうつれる結果、斯る試を企てたるなるべく、その頃より七音の枕詞は多少用ひらるるに至れり。例へば壬生忠岑の長歌に『ながらの橋のながらへて』又『いかほの沼の、いかにして』とあるが如きは即ちその例なり。德川時代の長歌には斯かる類やや盛となれるが如し。

第二編　枕詞の研究（その二）

第一章　記紀時代の枕詞

爰に記紀時代といふは大化改新以前を指す。國初よりこの間に見えたる枕詞は凡百二十種。中に先人の一たび用ひたるを襲用せるもの十三種、その接續を變ぜるもの七種を除きて百種あり。その作者中之を創して使用せること多きは神武天皇・日本武尊・仁德天皇・磐之比賣・輕太子・雄略天皇・影比賣等とす。古事記に載せたる八千矛の神、沼河比賣、須勢理毘賣の長歌の如きは宣化天皇以後の作ならむかと思惟せらるれど、大化以前のものたるは疑なしとしてこの中に算したり。

この百種中種名を述べむが爲に、まづ大類の名稱を置きて聯想せしめたるものには、野つ鳥雉子、庭つ鳥家鷄、沖つ鳥鴨、島つ鳥鵜の四種あり。こは鳥類のみに用ゐられ、獸類その他には類例なし。祝詞に毛のあらもの、毛のにこもの、鰭のひろもの、鰭のさもの、の如き獸類魚類に對して區別語ありて、而も枕詞なきは名辭の音數と格調との關係もあるべけれど、又一方より見れば、上古我等の祖先が鳥類の多き地方に住しこれと親む傾向著しかりしにも由るならむか。

次に他類に比して優れたるものを細(くは)し等の賞詞を加へてあらはすものには、花ぐはし櫻、香ぐはし花橘、いす

ぐはし鯨の三つあり。實際植物に上代いかなるものありしかは之によりても知るを得べし。

區別の爲若しくはそれより進みて修飾的に用ひたるものはその數少からず。天にかくる久堅の枕詞の如き舊說によれば瓠形にて天の穹窿狀を喩へたるものといへど、或は唯日のさす方の義にて區別的に用ひたるならむ。兇暴なる神人に冠する『ちはやぶる』もいちはやぶるの意、治化洽き陛下の德を頌して『八隅しし』といひ、皇運隆昌にして聖德四方を照す狀より、高光る日の皇子といひ、玉佩うるはしく裝へる宮廷の大官を『玉きはる、內の朝臣』といふが如きも修飾的に言ひあらはせるものならむ。玉きはるは魂極まる命のうちの說は採るべからず。はるは若の意なるべし。人事に限らず、自然に於ても、彼の六田の淀（吉野）には蛙鳴きしきること多きより、萬葉歌人が蛙鳴く六田の淀と續けたる如く、記紀時代にても詞人は同じさまの修飾的枕詞を用ひたり。茅渟海深く灣入する所、蘆荻叢生して一岬の出でたるを覺そなはして仁德天皇の『おしてる浪速の崎』と詠じ給ひしも、聖德太子が山陵幾傾斜ある片岡山に『しなてる』と冠らせられしも、近江の大津附近の緩やかな傾斜地を『しなたゆふ篠並路』と詠ませられたるも同じく地形の形容より思しつかれたる枕詞ならむ。しなだゆふに是のたるき意といひ、しなだといふ布を篠につけて振ふといふ說もあれど採るべからず。木梨輕太子が大和の泊瀨の山に『こもりくの』と冠せられたるも、其の地形を觀れば、四方山に圍まれたるよりの創意なること著し。以上の如き固有名詞に限らず、『たたなづく青垣山』と日本武尊の御歌にあるも、樹木蓊茂して大和平原を圍繞せる諸山の互に蜿蜒委附せる狀よりいへるにて、足引の山と續くるが如きも山脚の長く引ける裾野の形容と見るを穩かなりとすべし。天ざかる鄙の如きも區別に基く枕詞の一として當時用ひられたるものなり。

顯著なる事項又は傳說を聯想して成せる枕詞あり。三輪の大物主神が酒を醸み給ひしにより『うま酒、三輪』と用ひたるが如きその好例なり。彼の『そらみつ大和』と續けたるは饒速日命が磐船に乘り國見をせられし故事に因み、『みかしほ播磨速待』は播磨より大なる鹽を出したりといふ說妥當なるべく、神風の伊勢の如き亦激しき風の吹きすさぶ磯の義ならむか。つぎねふ山城の如きはその地方に多き接骨草即ち二人靜の生ふる山背と連ねたるなり。異說少からざるあをによし奈良の如きその地より青丹の顏料を出したる等より言ひたるにあらざるか。

比喩に屬する枕詞は極めて多しとす。人の姿體に關して、婉柔なる婦女を若草に喩へ、悅色あるを『朝日のゑみさかえ』と比し、白き腕を根白の若しくは栲綱のと譬へ、若き人の胸のあたりを沫雪のといひ、貴人を『白玉の君』といひ、か弱き婦人は自ら『ぬえ草の妻』といひて萎れたる草に比し、服裝に關しては青衣をばそにどりに、黑衣をば射干の實の色にたくらぶ。その擬する所のものは我が祖先の生活せし四圍に存在し、日夕目に入るところのものを以てせり。同じ形容にても支那人のそれとは趣同じからず。詩經碩人の章に「手如柔荑」、「膚如凝脂」、「領如蝤蠐」、「齒如瓠犀」、とあり、又人口に膾炙せる沈魚落雁の如しなどいふ動物の成るものを比較に取るが如きは極めて少しとす。

比喩を示す枕詞には以上の如く、の。といふ助辭にて終るもの多し。『ささかねの蜘』の如きも『笹が根の蜘』など說く人もあれど蜘を小蟹に比したりとの說一般に行はる。名詞のみならで動詞にかかるものあり。亂れにかくる『刈薦の』燃ゆるに冠する『かぎろひの』潜くにかくる『にほ鳥の』迎へに冠する『山たづの』如きこれなり。山たづは山人の使用する鉞といふ說行はれ來りたれど、たづといふ灌木あればその葉の對生せる義と見るべきか。

四國の山中には山たづといふもの多しといふ。

のの外になすといふ助辭を句尾にもてるあり。例へば『眞玉なす吾が思ふ妹』『鏡なす吾が思ふ妻』に於けるが如し。この『なす』は如くの意なり。その一類にのすの助辭あり。例へば『多不のす枯木』に於けるが如し。なす、のす及のはいづれが古形なるか明かならず、用例少きのすが或は古形にして漸く亡び、それより二つに分れなすとのとを生じたるか、或は咏歎の爲に添へたるのの一音が比喩の如き意を示すよりなすとなり、のすと訛りたるか後の考を竢つ。又じものといふ語尾を有せる枕詞一種あり。『ししじもの水くへ隱り』と武烈紀に見ゆ。じものは狀之の意にて比喩を現す。鹿のやうに隱りと續けたりと見ゆ。萬葉集に至りてはこの類の枕詞も多少殖えたり。

この他聯想すべきものを置きて、なす、のす、の、じもの等の語助を借らず、喩へたるあり。例へば野葡萄の蔓の互に絡みつきたるを男女相携へたる狀に擬して『まさきづらあざなはり』と列ねたるが如き、岩石の崩れ落つるは危險にして恐るべきより『岩くやす畏くありとも』と重ねたるが如き暗比又は隱喩と見るべき一體あり。されどこの類は當時は少く後に至りて發達せり。

又に諧調より來る枕詞も數種あり。事象には必然的の關係なく唯頭韻を反覆して之に當てたるが如し。八千矛の神詠中に見ゆる『村鳥の我が群れいなば』『引け鳥の我が引けいなば』の如き、或は雄略天皇の『いくみ竹い組みは寢ねず』、『たしみ竹たしにはゐねず』の如き蘇我の一族に對し、推古天皇が『眞菅よ蘇我の子ら』と仰せられしが如き是なり。頭韻法は外邦文字にも古には多く用ひたるものにて、『ホーマー』も『ゾフオクレス』も『チ

ヨーサー』』も『ウイルヘルムヨルダン』も盛に用ひたり。彼の『カンタベリ』物語の作者が『Peter Piper picked a peck of papper off a pewter plate』の句は人口に膾炙せるところ、エッダアなどには毎句二部分より成り前部に二つの高音を後部に一つの高音を反覆せるを法とするが如く、一定の方式も定まりあれど、我が枕詞の上には別に法なく、唯世の進むに隨ひ、『若草のわかく』に於けるが如く、頭韻を用ふると同時に、妙齡の人を若草の嫩軟に比し比喩をも兼ねしめたるが如きものを發生せることとなりとす。

次に枕詞と其のかかる所の語とが互に緊密の關係を有せず、單に詞の韻より連ねて直に他に轉ずるもの、反言すれば轉義の枕詞も時代の進みと共に漸く多くなりぬ。例へば大空を渡る隼などに『高行くや』の五音を冠してるものは形容的修飾的たるに過ぎざれども、隼の語を人名の一部にもてる隼別命に冠らしむるときは、轉義の枕詞となるが如し。而してこの種の枕詞は人をしてその轉變の奇なるに喫驚せしめ快感を得しめ滑稽を感ぜしむるなり。かる鳧を形容して天飛ぶかると續くる習より、之を天たぶや輕の少女と人名に轉したる如き、髪を梳る櫛といふより眞髪ふる櫛名田姫と續くるが如き同じ類とす。地名にも同趣の綴方あり。蔦の這山に生ひたる石と連ぬる意にて、つぬさはふ磐之媛と續くるのみならで、つぬさはふ磐余(大和)と連ぬるが如き之なり。以上の如きはそのかかる所の語の一部を切放して考ふるときは事もなけれど、全體として考ふるによりて轉義となるなり。

前者よりも更に甚だしき轉義の枕詞あり。綜麻は編み且綜るものなるより、へその一字を利用して綜麻平群山(大和)と續くるが如き、霜に消ゆるものなるにより、消ゆの古言けの一字を利用して筑後の三池に冠らせて、朝霜のみけといへるが如き、春日はうち霞むより、かすむの音にたより、奈良の香須我にかくるに『春日の』を以てせ

る如き、夏草が三伏の炎威に壓されて互に相萎ゆるより臥したる狀を採つて伊東のあひねの濱に冠して『夏草の』といへるが如き、或は菰枕は高きものなるより高きといふ聯想より高階又は高瀨の淀と續くるが如き、眞木拆く刀といふより、まきさく檜の板戶、又まきさく日の御門といふが如き、さす竹の如き素といふより同音の君に轉じたるが如き皆この時代に成りたるものなり。又大宅といふ地名にものさはにと冠したる如き、千早ぶる宇治と連ぬる如きは西洋詩學にいへるトートロジーに近似せる所ありといふべきなり。この他語原の明かならざるものも學者の一說に從へばこの類に加ふべきもの若干あり。あらたまの年の如きも璞は砥にかけて美しくするものなれば、そのとの音よりとしに續くといふが如き、いなむしろ川添柳のいなは寢の義にて上古寢席には皮を敷く習なりしより皮の同音を利用して續けたりといひ、ししくしろ、うまいねしは繁々の釧は美しといふより熟睡の義にうつしたりと說く如き例尙二三あり。

要するに年所久しきに亙るが故に、誤寫脫字あるべきのみならで、滅亡して今に知られざるものも多かりしなるべく、記錄によりて某の枕詞は某の作と擧げたれど、その以前に創始者ありしも、その人とその句と共に逸したりと見ゆる如きあり。古人の考究乏しくして語原の解釋當を得ず分類の方を誤りたるもあるべし。古人の枕詞と定めたるが中にも然らざるものもあるべし。されども兎にも角にも各種の枕詞を發作し、年を逐うて大に發達せし跡は見るべきなり。

（作者）	（枕詞）	（接語）
八千矛命	さ野つ鳥……	雉子(きぎし)
	烏瑟の……．	黒き御衣(みけし)
	群鳥の………	我がむれいなば
	沖つ鳥………	胸見る
	庭つ鳥………	家雞(かけ)
	そに鳥の……	青き御衣
	ひけ鳥の……	我が引けいなば
	若草の………	妻のみこと
沼河比賣	ぬえ草の……	女(め)
	朝日の………	ゑみ榮え
	泡雪の………	若やる胸
	ぬば玉の……	夜
	栲(たく)づぬの……	白き腕(たゞむき)
須勢理比賣	若草の………	妻
豐玉比賣	白玉の………	君

（作者）	（枕詞）	（接語）
火々出見尊	沖つ島………	鴨
下照媛	天ざかる………	鄙(ひな)
神武天皇	いす細(くは)し……	鯨
	神風の………	伊勢
	島つ鳥………	鵜飼が伴(とも)
	立ちそばの……	實の少けく
	みづみづし……	久米の子
	たた並(な)めて……	伊那佐の山
	いち榊の………	實の多けく
崇神天皇の廷臣	うま酒………	三輪
筑紫の人	朝霜の………	みけ（御覧）
倭建尊	やつめさす……	出雲建
	ひさかたの……	天の香山
	たたみ薦………	平群(へぐり)の山
	さねさす………	相模(さがむ)の小野

たたなづく……青垣山

美夜受比賣　高ひかる……日の御子
あら玉の……年
八隅しし……我が大君
あら玉の……月

熊之凝　たまきはる……内の朝臣

忍熊王　鳰鳥の……潜ぐ

應神天皇　百傳ふ……角鹿(つぬが)（敦賀）
しなだゆふ……篠並路(ささなみぢ)
香ぐはし……花橘
みほ鳥の……潜ぎ
三栗の……中

吉野國栖　冬木のす……枯木

大山守命　千早ぶる……宇治の渡

稚郎子命　千早人……宇治の渡

仁德天皇　おしてる……難波の崎
肝むかふ……心
つぎねふ……山城
みなそこふ……臣の乙女
つぬさはふ……磐之媛
そらみつ……倭國

黑姬　隱り水(こもりづ)の……下よ延え

磐之媛皇后　百足らず……やそばの木
あをによし……奈良

女鳥王　高行くや……隼別命

隼別王　梯立(はしたて)の……倉梯山

播磨速待　みかしほ……播磨速待
岩くやす……畏く

履仲天皇　かぎろひの……燃ゆる家村

木梨輕皇子　足引の……山田
天だむ……輕の乙女
槻(つき)弓の……こやる（臥る）

鏡なす……我思ふ妹
苅薦の……みだれ
隠口の……泊瀬
眞玉なす……我思ふ妹

輕皇女
夏草の……あひ寝の濱
やまたづの……迎へ

允恭天皇
ささらがた……錦の紐
花ぐはし……櫻

衣通姫
ささがにの……蜘
いさなどり……海

雄略天皇
いくみ竹……い組み
白栲の……袖
高光る……日の宮人
ぬば玉の……甲斐の黒駒
たしみ竹……たしに
ももしきの……大宮

みなそそく……臣の乙女

三重采女
やほによし……い杵築の宮
ありきぬの……三重の子
まきさく……日の御門

顯宗天皇
大魚よし……鮪
いなむしろ……川添柳
百づたふ……鐸

影姫
いそのかみ……布留
物さはに……大宅
妻こもる……をさほ
みなそそぐ……鮪の若子
孤まくら……高階
春日の……春日
鹿じもの……水くへ隠り

宣化天皇
正木づら……あさはり
ししくしろ……うまい

眞木さく……檜の板戸

春日皇女　つぬさはふ…磐余の池

みなしたふ……魚

推古天皇　まそがよ……蘇我の子ら

厩戸皇子　しなてる……片岡山

さす竹の……君

齊明天皇　若草の……若し

舒明天皇　蜻島……大倭

第二章　萬葉集時代の枕詞

爰に萬葉時代といふは大化革新以降奈良朝の終までを稱す。此の間に於て、枕詞の新に作られたるもの二百十二種、之に上の五言は前時代に用ひしものと同じくしてその接續の方を異にせるもの百八種を加ふれば三百二十種となる。以上の新しき枕詞を始めて使ひしもの百二十五人。中に柿本人麿・大伴家持・阪上郎女・山上憶良を多しとし、人麿の如きは創始せるもの五十種、接續を新にせしもの二十種に及び、家持は創始せるもの二十三種、接續を變へたるもの十七種、阪上郎女の始めしもの十六種、憶良は十種に過ぎず。山部赤人・笠金村・大伴旅人等の知名の作家も枕詞を新作せるは少し。人麿は詞藻豊富にして各種の枕詞を創し、家持は『後瀬山後もあはむ』『菅の山すかなく』『さ百合花ゆりも逢はむ』『にこ草のにこよかに』に於けるが如く頭韻反覆を好み、阪上郎女は巾幗者流にふさはしき鏡玉の如き裝飾品色彩に關したる枕詞を多く用ひたり。例へば『まそ鏡とぎし心』『眞玉着くをちこち』『朝髪の思ひ亂れ』『くれなゐの色』『はねず色の移ひ易き』等に於けるが如し。憶良に擇詞に深く

心を染めざりし作家なれば特に意を用ひたる所ありや否やを知らず、唯作品に徵し見れば『犬じもの道に臥し』『もち鳥のかからはしも』『ぬえ鳥ののどよひ居る』『蜷の腸か黑き』『さ蠅なす騒く子』の如き動物に關したるもの多し。その他作家個々に就きては云ふべきなし。よつて通じてその種類の上より見るべし。

（一）音の反覆によるもの。記紀時代に萌芽を生じたる頭韻等の反覆はこの時代に至り盛に用ひられたり。即ち前代には僅々五六種に過ぎざりしが、この時代には七十一種に上れり。中に枕詞五音中、上半の音を重ねたるもの六十一種、下半を繰返したるもの十種。而して記紀時代に於ては群鳥の我が群れ往なばに於ける如く、一方より見ば比喩を兼ねたるが如き使用なりしが、萬葉に於ては全く同音關係のみによりて列ねたるに止まり、音韻以外には意義の連鎖なし。而して一つの語に對しても歌の趣きにより異りたる枕詞を用ひたり。例へばありに冠するにあり衣の、ありそ浪、ありち潟、有馬菅などを以てし、知るに冠するに白菅の、白つつじ、白浪の、知草のに於けるが如し。音韻反覆の中、國名地名を置きたるは二十種に殆し。例へば

芦穗山……惡しかる咎　菅の山……すがなく　龍田山……立ちても居ても　後瀨山……後も

眞土山……待つ　飛鳥川……明日も　いさや川……いざと答へ　能登川の……後も　野

洲川の……安寢も　吉城川……由も　淡路島……あはれと　栗島の……逢はに　在千潟

……有り慰めて　左太浦の……この沙汰すぎ　韓國の……辛くも

の如し。殘夢が三代枕詞例に國名を置けるもの、又同語を重ねたるは從來萬葉に異なりといへるは[illegible]の論にあらず、そは後章に述ぶべし。

（二）比喩に屬するもの。比喩に基く枕詞は記紀に三十幾種ありしが、この集には凡百八十種の多きに達せり。中にのの助詞にて終れるは百二十六種。のすにて終れるものは全く廢りて用ひられず、なすは十六種、じものにて終れるものは漸く增して八種となり、隱喩は三十種に殆し。

隱喩には男性的の立派なる精神を『眞木柱、太き心』『劍太刀、とぎし心』と喩へ、紅顔妙齢の男女を花に比して『躑躅花、匂へる君』『かきつばた、匂へる妹』といひ、或は『櫻花、榮ゆる少女』といひ、萬民の景仰せる人物を大旱に雨を待つに比して『天つ水、仰ぎて待つ』といひ、哀悼の涙とどめがたきを『庭たづみ、流るる涙』といひ、明月を『眞澄鏡』と比し、黑色を『蜷の腸』と喩へ、實なき事には『空せ貝』と擬き、時の間隔あることを『藤衣間遠に』といへる類ありて記紀時代よりも大に殖えたり。じものは多くは低き動物を捉へ來つて人事に用ひたり。例へば『鴨じもの、頸根つき』『鹿じもの、膝折りふせ』『鹿兒じもの、唯一人』『犬じもの、道に臥し』『馬じもの、繩とりつけ』『鴨じもの、水に浮居』『鳥じもの、朝立ちいまし』に於けるが如し。じものの狀之の樣なることは既にいへるが如し。なすは記紀に玉と鏡を二つに比したるに止まりしが、此の時代には事象により種々のものに喩へたり。『水鴨なす、二人並び』『鶉なす、い這ひ徘り』『さ蠅なす、騷ぐ子』『螢なす、ほのか』の如く動物を以てせるもの、『夕日なす、心ぐはし』『闇夜なす、思ひ迷ひ』『朝日なす、まぐはし』『入日なす、隱り』の如く天象に比したるもの『水泡なす、脆き命』の如き佛教的思想より導かれたるもの等にして植物に比したるは少し。このなすを語尾とせるものは後には成語の外は用ひざるに至れり。のにて比したるは種々の物に亙り、後世は優雅なるものを撰ぶに至れり。又一首の結構により、同一の語に掛くるにも、人によりて上の五言に種々

の形を以てす。例へば思ひ亂れには、玉の緒の、とき衣の、刈草の、芦垣の、菅の根の、朝霧の等を以てするが如し。

（三）眼前の風物を說明し若しくは事象の形容修飾を主とせるものは記紀に見えたる十數種の外に六十餘種を生じたり。朝日さす香具我の山、蛙鳴く吉野川、玉藻刈る辛荷の島、眞金ふく丹生の柚山、眞鳥すむ雲梯の杜の如き、作家が眼前の風色を描きたるものは尋常の形容詞句たりしが、後には時事に關せず漫然には言が散るよ冠し、雲梯（うなで）にはいつにても眞鳥栖むといふに至り枕詞となる。

（四）聯想によるもの。これも其の類少からず、鶏鳴晨を報じ東方より白むより『鳥が鳴くあづま』といひ、夏夜有明灣外に明滅する不知火により『知らぬ火の筑紫』といふが如き、往古旅の宿りには草を束ねて枕とせしより草枕といひて旅を思はしめ、道祖神に道の安全を祈る爲には幣帛を奉るより『手向くる峠』と續け、驛馬には鈴を着くるより『鈴が音のはゆま』といひ、勇悍なる隼人の住むより薩摩には隼人のと冠らせ、橘はその仙薬を謠ひて『とこ世もの橘』といひ、高麗製の劍には手上に鐶のあるよりわの音を呼ぶに『こまつるぎ』といひ、人の心は肝の中にありと思惟したるより『むら肝の心』と續けたるが如き簡單なる聯想によれる枕詞なり。『瑞籬の久し』と續くるは彼の榮えたる瑞籬宮の時代よりは年次の悠久なるを示し、卯月にかくる木のくれ闇の如きも聯想に基づけるものながら理智の勝ちたる造句なりとす。此類凡四十種あり。

（五）詞及事柄の緣によりて連ね若しくは轉義せるもの甚だ多し。例へば疊は草を編み薦を綴て作るより重の音に因みて『八重疊、平群山』と連ね、櫛笥及篋には身あり蓋あり、上下合ひて閉ぢ又開くるより『玉櫛笥明け』とも『玉がつま逢ふ』とも『玉くしげ二上山』などと續け、弓には本末等の名どころあるより『梓弓、すゑの

名』と人の名にかけ、舟は津即ち港を出入するより、大舟の、津守と人の名に續くるか如き是なり。

轉義せる枕詞を類によりて分てば、まづ『我心、清隅の池』『居待月、明石』『海人小舟、はつ瀨の山』に於けるが如く、上の五言は下の主語の如く、下の首部は清し、明し、泊つの如く主語の說明の狀をなして直ちに他の語に轉ぜるもの。作家は下の語を述べむが爲に殊更に斯かる技巧を用ひたるものなり。この類は萬葉集中に三十三種あり。次に『三栗の、那賀』『片垸の其許』『うまごりの、あやに』『川柳の、ねもころに』於けるが如く、上の五言は下の語の一部或は全部に亙りて、一面には文法上の領格の如く、一面に於ては他の同音異義語に轉移せるもの。猶詳言すれば三顆の栗の實の中の音より常陸の地名の那賀にうつし、垸の底といふより汝の意なるそこにうつし、美しく織り成せる綾といふ綾より副詞のあやにといふにうつし、川柳の根といふよりねの音を載ける懇にといふ副詞にうつしたるなり。この類は凡そ三十種あり。次に燒太刀を、『礪波の浦』『我妹子に、逢阪山』『山の間ゆ、出雲の子ら』に於けるが如く、上の五言は客語補語の如き位置にありて、そが下に來るべき說明語が言掛の狀にて他の異義語に轉ずるものあり。この類は約四十七種あり。次には『直鉋もち、弓削の川原』『射部立てて、遠見の岡部』『けふけふと、飛鳥に』に於けるが如く、上の五言が副詞又は副詞句の如き位置に立ちて、その下に續きて起るべき動作を示す語より、直に他の同音異義語に轉ずるものにて、この類は僅に六種あり。又數に因める詞を枕詞とし轉義せるあり。一つ二つと數よむ有樣より『かき數ふ、二上山』といひ、大凡に計算する意にて、『そらかぞふ、大津の子』と列ね、又古は一丈の長さを一つゑと呼び、八尺をやさかといひしより、歎息の意に『つゑ足らす、やさかの歎き』といふか如し。記紀時代に用ひたる『百足らす』を五十の音にとりて

『筏』に冠らせ、或は『百足らず、八十隅阪』といふよりやの音にとりて山田の道と續け、『百傳ふ、五十』といふより『百傳ふ、磐余』と連ぬるが如き接續を恣にせり。此等は數に關したる聯想より轉義せるものなるが理智的傾向甚だしく滑稽を帶びたるものとす。

（六）くはし又はよしの語辭をもてる稱詞的の枕詞は『名細し、吉野』『浦ぐはし、布勢の國』『玉藻よし、讚岐』『麻裳よし、木人』等數種に過ぎず。記紀時代に用ひたる花細しは佳人に冠らせ、『花細し、相見し子』と轉なる接續を採れり。玉藻よしは玉藻よと呼びかけ、麻裳よしも麻裳よと呼びて、しは助詞となす説もあれど今は一説による。

（七）枕詞中上下の語間に語を省略したりと見ゆるが如きあり。例へば『あらかねの、地』『うぐひすの、春』『霜露の、秋』『ますらをの、手結が浦』の如き之なり。此の類は聯想によりても理解せられざるにあらずといへども、格調の關係上、之を入れざりしならむ。前諸例に於て出づる、鳴く、置く、着くるの語を補ひ見ば其の義明晰たるべし。斯かる類十一二種あり。

この他五七格調の統一につれ、記紀時代に四音より成りし枕詞に一音を加へて五音となせるあり。そらみつ大倭をそらにみつ大和とし、野つ鳥雉子をさ野鳥雉子と改めたるが如し。古き枕詞の中一二の文字を改めたるあり、庭つ鳥を家つ鳥とし、『天だむ、輕』を『天飛ぶや、輕』と改補したるが如き是なり。又古き枕詞を用ひて全く新しき接續をなせるあり。ししくしろは紀にはうましと續けたるを、この集の作者は黄泉と續け、たまきはるは古くは內の朝臣と續けたるを、この時代には命と續けたるが如し。さす竹の君と古續けたりしをさす竹の大宮

人ミ連ね「あら玉の、年、月」を五とせなどと連ぬる如き轉用の例は極めて多しとす。

萬葉時代の枕詞と創始者

(作者)	(枕詞)	(接語)
軍王	村肝の	心
	玉だすき	かけ
	草枕	旅
	鵼子鳥	うらなけ居れば
	遠つ神	我大君
	燒鹽の	思ぞやくる
間人連老	玉きはる	内の大野
倭姫大后	玉かづら	影
	いさなどり	近江の海
石川夫人	神樂浪の(さゝなみ)	大山守
額田女王	茜さす	紫野
藤原鎌足	玉くしげ	三室の山

(作者)	(枕詞)	(接語)
天武天皇	狹名葛(さなかづら)	さ寢
	むらさきの	匂へる妹
氷上大刀自	燒太刀の	利心
麻續王	空蟬の	命
長皇子	霰うつ	あられ松原
	吾妹子を	早見濱風
弓削皇子	御食(みけ)むかふ	南淵山
大津皇子	大船の	津守(うら)が占(うら)
	百傳ふ	磐余(いはれ)の池
持統天皇	白妙の	衣
	荒妙の	衣の袖
	飛鳥の	明日香(あすか)

大來皇女　うつそみの……命
日並皇子の舍人　庭たづみ……流る涙
　毛衣を……春
　眞木柱……太き
志貴皇子　石走る……垂水
　いち柴の……いつしか
春日藏首老　在根よし……對島
高市連黒人　さゝなみの……國つ御神
當麻眞人麿の妻　沖つ藻の……なばりの山
石上朝臣麿　わきも子を……いざみの山
調首淡海　麻裳よき……木人
置始連東人　大伴の……高師の濱
身人部王　大伴の……御津の濱
石川郎女　み薦刈る……信濃
　蘆葺の……足なへ
大伴宿禰安麿　打なびく……春

　夏草の……繁く
博通法師　はたすすき……久米の若子
桉作村主益人　梓弓……ひき豐國
滿誓沙彌　知らぬ火……筑紫の海
　まそ鏡……見飽かぬ君
　鳥ぶさ立て……足柄山
舍人親王　大口の……眞神原
　春草を……馬咋山
湯原王　玉くしげ……奧に
　燒太刀の……門うち放つ
　蜻蛉の……袖
娘子　ぬば玉の……夢
　燒太刀の……へつかふ
長田王　隼人の……薩摩
石川朝臣老　玉鉾の……道
山前王　延ふ葛の……いや遠長く

刑部直垂麿　百足らす……八十隅阪
縣犬養宿禰人上　紅葉々の……うつり
大伴宿禰旅人　芦田鶴の……たづ〳〵し
枕づく……妻屋
水莖の……水城
にほ鳥の……二人並び
青丹よし……國中(くぬち)
さし墨の……栗栖の小野
金明軍　蘆田鶴の……哭(ね)
菅の根の……懇(ねもころ)
元正天皇　旗すすき……尾花
柿本朝臣人麿　玉たすき……畝火の山
空にみつ……倭
樂波の……大津宮
劍つく……手節の崎
旗すすき……篠

玉藻なす……寄り寢し
夏草の……思ひ萎えて
言さへぐ……辛の崎
深みるの……深めて
大船の……渡の山
大船の……たゆたふ
敷栲の……衣手枕
望月の……たゞはし
天つ水……仰ぎて待つ
烏瑟の……夕
劍太刀……身
高麗つるぎ……和蹔(わざみ)が原
千早ぶる……人
行く鳥の……爭ふ
白栲の……天領巾(ひれ)
衾路を……引手の山

なよ竹の……とをよる子
梓弓……音に
玉藻よし……讚岐
乙女等が……袖ふる山
珠衣の……さゐ〱
鹿じもの……い這ひ拜み
夏草の……野島が崎
燈火の……明石
雪じもの……ゆき來
八雲立つ……出雲の子
麻裳よき……木上(きのへ)の宮
ぬえ鳥の……片戀しつつ
夕星の……か往き斯くゆき
天飛ぶや……輕路
かぎろひの……夕
奧つ藻の……靡きし妹

鳥じもの……朝立ち
男じもの……腋ばさみ
樛の木の……いや繼ぎ〱
石走の……淡海
石走る……瀧の都
阪鳥の……朝越え
紅葉々の……過ぎにし
露霜の……おきて、消
つぬさはふ……石見の海
言さへぐ……百濟の原
延ふ蔦の……別れ
大船の……思ひ憑み
蜷こもる……屋上の山
春花の……貴し
望月の……いや珍し
茜刺す……日

たたなづく……柔肌
玉垂の……越智の大野
鳥が鳴く……東
大雪の……亂れて
木綿花の……榮ゆる
大鳥の……羽易の山
秋山の……したべる妹
たくづぬの……長き命
天かぞふ……大津の子
名ぐはし……佐岑の島
水垣の……久し
若薦を……獵路の小野
鶉なす……い這ひ
葦桙の……蘆江の浦
春草の……いや珍し
山の際ゆ……出雲の子

阪上郎女

春鳥の……さまよふ
あぢさはふ……めごとも
朝鳥の……かよはす
御食向ふ……木の瓱の宮
さねかづら……後も逢はむ
たまかぎる……磐垣淵
玉梓の……使
入日なす……隱り
白髪つく……木綿
栲つぬの……新羅
泣く兒なす……慕ひ
山菅の……實ならぬ
まそかゞみ……磨ぎ
はねず色の……移ひ易く
くれなゐの……色に
朝髪の……思亂れて

妹が目を……迹見の崎
沖つ浪……とをむ眉引
鹿じもの……膝折り
內日さす……都
敷栲の……家
月草の……移ひ易く
赤らびく……日も
眞玉着く……をちこち
二鞘の……家を隔て
木綿たたみ……手向の山
しなざかる……越路
大船の……ゆくら〳〵

人麿の妻

君が家に……我住阪

丹比眞人笠麿

栲領巾の……かけ
田鶴の音の……哭
いなび妻……浦箕

さにづらふ……紐とき
青旗の……葛城山
鳥じもの……なづさひ

鴨君足人

あもりつく……天の香山

大伴宿奈麿

打日さす……宮

笠朝臣金村

天雲の……よそ
玉かづら……絶ゆる
績麻なす……長柄の宮
ますらをが……手結の浦
蘆垣の……古りぬる里
沖つ鳥……味生の原

車持朝臣千年

うまごりの……あやに

賀茂女王

大伴の……見つ
茜さす……照れる月夜

笠女郎

衣手を……打廻の里
うつせみの……人目

山口女王
境部宿禰老麿
刀理宣令
山上憶良

水無瀬川……下ゆ
白鳥の……鳥羽山
石ばしの……間近き
劍太刀……名の惜し
たたなめて……泉の河
もののふの……石瀬の杜
黏鳥の……かからはしも
たまきはる……命
遠つ人……松浦佐用姫
犬じもの……道に臥し
あてかをし……値嘉(ちか)の崎
荒たへの……布肩衣
しづたまき……數にもあらぬ
天飛ぶや……領巾
むらさきの……粉滷の海
蜷のわた……か黑き

和田の底……沖つ深江
たらちしや……母
ぬえ鳥の……のどよひ
さ蠅なす……騒ぐ子
水泡なす……脆き命
ゆふづつの……夕
かぎろひの……灰に
聖武天皇　降る雪の……消
大伴宿禰駿河麿　春かすみ……春日の里
霞立つ……春日の里
大伴宿禰三中　玉葛の……いや遠長に
つつじ花……匂へる
丹生王　杉村の……思過ぐ
玉梓の……人
さにづらふ……我大君
石川足人朝臣　剌竹の……大宮人

安倍廣庭　玉きはる……短き命
藤原八束　妹が着る……三笠の山
石上乙麿　馬じもの……繩取り附け
　古ころも……待乳山
　鹿じもの……弓矢圍みて
　草づつみ……病
橘奈良麿　降雪の……古り
大伴宿禰像見　いそのかみ……降る
　逝く水の……後も逢はむ
安倍朝臣蟲麿　雨こもり……三笠の山
中臣郎女　女郎花……咲澤
　菅の根の……思亂れ
　花かつみ……嘗て
栗田娘子　片もひの……其許に
丹波娘子　垣穂なす……人言
壹岐目村氏彼方　春柳……かつらに

山部赤人　御食つ國……野島
　味さはふ……妹が
　名告藻の……其名宣らじ
　高座の……御蓋山
　荒妙の……藤江の浦
　御食向ふ……淡路の島
　春日を……香須賀
　雲居なす……心いさよひ
高橋蟲麿　白雲の……立田山
　ことひ牛の……三宅潟
　仇まもる……筑紫
大伴宿禰家持　足引の……石根・尾上
　うつせみの……假の身
　露霜の……秋
　久方の……雨
　玉きはる……幾世

大君の………三笠の山
鶉なく………ふるし
玉くしげ………二上山
かき數ふ………二上山
常世もの………この橘
燒太刀を………礪波の關
紐の緒の………いつがり合ひ
物部の………八十の乙女
柞葉の………母又 母(みも)の命
木のくれ闇………卯月
花橘の………かぐはし
にこ草の………にこよかに
あぢ村の………さわぎ
足引の………をてもこのもに
水鴨なす………二人並ひ
後瀬山………後も逢はむ

ぬば玉の………昨夜(きぞ)
御食つ國………志摩
まそかがみ………清き月
遠つ人………雁
浦ぐはし………布勢の海
菅の山………すがなく
梶の音の………つばら〳〵
さ百合花………ゆりも
かつらかけ………香ぐはし君
ちちの實の………父
梓弓………末ふり起し
茜さす………晝
漁り火の………仄か
蘆か散る………難波
鹿兒じもの………唯一人

大伴宿禰稱公

射部立てて………跡見

大伴田村娘　沫雪の……消ぬ
小治田朝臣廣耳　卯の花の……憂き
丹比朝臣大夫　行く水の……歸らぬ
　吹く風の……見えぬ
六人部連鯖麿　から國の……辛く
中臣朝臣宅守　塵ひぢの……數にもあらぬ
　我妹子に……逢坂山
　ありきぬの……有りて
　まそかがみ……掛けて
狹野茅上娘子　玉くしげ……明けて
　白妙の……我が下衣
大神朝臣奥守　水たまる……池田の朝臣
橘宿禰諸兄　降る雪の……白髮
田邊福麿　眞そ鏡……敏馬の浦
　みもろつく……鹿背山
　現つ神……我が大君
　春花の……うつろひ
　御食向ふ……味原の宮
　さにつらふ……紅葉
　かぎろひの……春
　群鳥の……朝立ちゆけば
大伴宿禰池主　朝霧の……亂るる
生玉部足國　百世草……百代
牛　麿　水鳥の……立ちの急ぎ
生部道麿　疊けめ……むらじが磯
丈部足麿　たちばなの……みえりの里
春日部麿　うちえする……駿河
丈部足麿　たちこもの……立ちの騒
大舍人部千文　霰ふり……鹿島の神
倭文部可良麿　馬の爪……筑紫
刑部志加麿　むら玉の……樞

第三章　三代集時代の枕詞

平安奠都の後は漢文學の流行に壓せられて國風振はず、やゝ時を經て宇多天皇の頃より斯道再び盛ならむとし延喜の御代に至り、古今集の撰成り、尋いで天暦の御宇に後撰集成り、寛弘の頃に至り拾遺集成り、茲に所謂三代集を生ず。歌數合せて三千八百餘首。後の歌人の範とする所、然れどもその形式に於て、思想に於て萬葉の雄渾なく眞摯なし。長歌は古今集に唯五篇を收むるのみ。その格調の下れること共に比すべきにあらず、三代集は短歌の隆昌時代なりしなり。措辭に力をこめし時代なりしなり。枕詞は萬葉時代に行はれたるものを精選し、優雅なるものを襲用し、或は接續の法をかへ、新規のものにありても、前後に緣語を置きて一首を構成するをこの時代の特徴とす。石上枕詞例に「古今の頃に至りては古事記・日本紀・萬葉集中に最多なる枕詞を十に九を捨て、足引の、久方の、百敷の、たらちねの、うつせみの等雅びたるを纔に擇り出でて、最も巧にも雅にも用ひなせるいよよまぐはひなるを好まれたるなり」とあるは至言と謂ふべし。三代集に見ゆる新しき枕詞は作者の知られたるもの凡そ百三十種、未詳のもの百四十種に垂かるべし。中に貫之の作最も多く躬恒・忠岑・友則・能宣之に亞げども、貫之・躬恒の外は新規のもの十種にも滿たず。(こは撰集のみならず家集をも通じての數なりとす。)

この時代の枕詞中最も多きは比喩に屬するものにて、その數六十九種に及べり。中にのの助辭にて終るもの六十種、隱喩の如きもの九種。じものにて終るものは全く廢りて用ひられず、なすは萬葉に用ひたる垣穗なす、さ

蠅なすの二つあるのみ。その他萬葉に用ひたる枕詞をさながら襲用せるは菅の根の長き、漁火のほのかの如二十一種、接續の異なれるは次の五六種に過ぎず。

(枕詞)	(萬葉)	(三代集)	(枕詞)	(萬葉)	(三代集)
蘆垣の、	思亂れて	間近けれども	水の泡の、	うたかた人	消えて憂き身
白雲の、	絶えにし	立ちわかれ	群鳥の、	朝立ちゆけば	己が散りぐ\
三日月の、	さやかに	われて思ふ	さ蠅なす、	騒ぐ子ら	荒ぶる神

その時代の特徴とも見るべきは枕詞に緣語を伴はしむることその一なり。例へば、『瀧つ瀬のはやき心を何しかも人目づつみのせき止むるらむ』(古今十三) に於て瀧つ瀬のはやきにかかる枕詞にして、堰塞きは之が緣語たるが如し。又枕詞はその一部分に於て秀句をなし、他の說明語たるが如き關係に置かるることその二なり。『影たえておぼつかなさのます鏡見ずば我身のうさも知られじ』(拾遺) に於て、見るにかかる眞澄鏡は覺束なさの增すと秀句になれるが如し。この二例の如きは當代の作家の措志しし句法なりしなり。尙枕詞が一語一句のみにかかるにあらで、一首全體に及べるが如きその三なり。例へば、『下の帶の道はかたがた別るともゆき廻りても逢はむとぞ思ふ』(古今) の歌の下の帶のが全首にかかるが如きこれなり。

隱喩の中には夏衣、うすく(人情) 白眞弓、心强く、濱千鳥、行方も知らず、朝水、とくる(心) の如きもの及花薄、ほに出づる、ゆふ欅、かけて(心に) の如く緣によりて比したるものあり。直喩隱喩に論なく、萬葉には枕詞をなす五言に就きても、三二、二三、二一一二の如き形式相離れども、三代集にては僅に一例を除くの外は

すべて二三の形式に一定せることも吾人の注目に値す。

次に同音反復の枕詞は三十四種あり。中に水なれ棹見馴れぬの如き頭韻によるもの二十九種、唐衣頃も經ずの如き脚尾韻によるの五種、その他萬葉に見えし有馬菅、ありて、白波の知らずの如き類をさながら襲用せしもの六種あり。類韻反覆の中には『岩瀬山、言はで』『音羽山、音に聞き』『かへる山、かへるがへるも』『眞土山、待つ程』『いさや川、いざ』『木幡川、こは誰が言ひし』『白川の、知らず』『淀川の、よどむと』『吉野川、よしや』『なには潟、何も』『稲見野の、否とも』の如く地名を置きたるもの多しとす。この類の枕詞に於ても、緣語秀句を以て技巧的に一首を仕立てたることは比喩に等しとす。即ち、『難波潟なににもあらず澪標ふかき心のしるしばかりは』（後撰十六）『逢ふことをいざほに出なむしの薄忍びはつべきものならくに』（後撰十一）『ほのかにも我をみしまの芥火のあくとや人の音づれもせぬ』（拾遺十三）始の歌にては難波潟の枕詞を用ひたる故に彼の地にて著名の澪標を緣語とし、中の歌にては篠薄しのびと重ね之に對するほに出るといふ語を上に置きて對とし、終の歌は序歌の體にして言掛けと反覆とを以て珠を盤上に走らしめたる如く一首を成せるが如し。

次に形容的修飾句的の枕詞は新に剏められたるもの少し。唯古きものを新に續くる方を案じたるか、或は轉義したるか、の二つあり。『千早ぶる神無月』『眞金ふく、吉備の中山』『茜さす、あすの春日』『足引の、嵐』の如き之なり。又『しなてる、片岡山』と古く續け來りしを『しなてるや、片岡山』とし『ささなみの近江』と用ひ來りしを『ささなみや、近江』『神風の、伊勢』と用ひしを『神風や……』と何を切りて用ふる傾向多くなれるが如し。大小の地名を重ね、その上位の地名の終にやの字を加ふることも行はれぬ。例へば『更科や、姨捨山』

『大原や、小鹽の山』等に於けるが如し。此時代に新に作られたる形容詞的句より轉義せる枕詞は『岩根はふ、うき』(沼より憂にうつす)『妹が績む、をつの浦』(麻苧の一番より越へうつす)『君がさす、御笠山』『貫つむ、大藏山』『しもと結ぶ、葛城山』の五種あるに過ぎず。

次に聯想により或はそれより轉義したるものは三十餘種あり。又萬葉時代に用ひし枕詞にして、標榜を新にせし類を合すれば約四十種あり。『八橋の、蜘手に思ふ』といひ『五月まつ、花橘』といふが如きは單なる聯想に基く例にして、それより轉義せるものは、例へば古代に於て神を祀る所をみもろといひしより『神垣の、三室山』といひ、禊祓は名越の祓ともいひて六月に行はるるより『水無月の、名越山』と續け、田蓑島に冠するに田ごろもを以てし、ほのかに掛くるに花すすきを以てするが如き是なり。『筑紫櫛、指して』『唐衣、ひもゆふ暮』『片糸の、よりより』『さねかづら、來る』の如きは刺すを指すに、紐結ふを日も夕に、撚り撚りを時々に、繰るを、來るに轉じたるなり。『新玉の、春』といひ、『草枕、この度』といふが如きは古き枕詞を新しく續けなしたる例なり。この種類の枕詞にも秀句及縁語を以て相照繊せしめたることは他類の枕詞に同じとす。例へば、『うら渡し長き心は八橋の蜘手に思ふことは絶えせじ』(後撰九)に於て、八橋蜘手は伊勢物語より聯想し來る枕詞にして、橋とあるに對し渡しといふ縁語を利かせたるなり。又、『唐衣ひもゆふ暮になるときは返す〳〵ぞ人は戀しき』(古今十一)に於て、衣とあるにより返すといふ縁語がふさはしきなるべし。又、『別るれば心をのみぞ筑紫櫛さして逢ふべき方を知らねば』(拾遺六)に於て、つくし櫛は一方に於ては心をつくしと秀句に取りなしたるが如し。

次に事象に直接の連鎖あるにあらずして、唯言詞上の續きより、轉訛せる同音異義語若しくはそれに類似の音

を語の一部分にもてる語に轉する枕詞は當代の歌人の好んで使用する所たりしが如し。中に就き『筑紫嶺の、みねども』に於ける如く、上の五音と下の若干音とはの（希にはなる）といふ助辭によりて連結せる一成語なるを上下切り放して、下の音をもてる同音異義語に轉ぜるもの最も多く、その數四十一種あり。これに萬葉にありて接續を轉ぜるもの四種を加ふれば四十五種となる。萬葉に『青柳の、かつら城山』と續けしを、ここには『青柳の、いとつれなく』とし、彼には『隱り沼の、みず』と水に不見を掛けしを、此には『隱り沼の、其許』とし、彼には『玉垂の、小簾』とかけしを、此には『玉垂の、見す』とも『小瓶』とも連ね、或は好ける心と續くるが如き變易を來せり。而して萬葉にありては一を除くの外は悉く名詞に掛けたるを、三代集にあつては動詞に掛くるもの十八種に上れり。蓋し次の如く上に固有名詞を置きたるが故なり。

大島のなるとはなしに	鳴門に成るを掛く	津の國のなには思はず	浪速に何はをかく
柏木のもりやしにけむ	杜に洩りを掛く	津の國のなには違はず	浪速に名にはをかく
小餘綾のいそぎて	磯に急ぎを掛く	津の國のながす	長洲に哭かすをかく
鹽釜のうら淋しく	浦に心をかく	春日野のとぶひありやと	飛火に訪ふ日をかく
白山のゆき見るべく	雪に往をかく	山城のとはに相見む	鳥羽に常をかく
住の江のまつともいはじ	松に待つをかく	逢阪のせきとめらる	關に塞きをかく
高砂のまつといひつつ	同	陸奥のこまほしく	駒に來まほしをかく
筑波根のみねども	峯に見ねをかく	浪速なるみつとも	御津に見つをかく

此の類に於ても、秀句及緣語を用ふるは他に異ならず。例へば、「音に聞く人に心をつくば根の見ねども思ふ思はんや君」（拾遺十一）に於ける筑波根のは心を着くと秀句になせるが如し。

次には『白雲の、かかる空言』に於ける如く、上の五言が下の語の主語の如く、下の体語の縁るといふより、斯るといふ同音語に轉じたるが如き類二十三種あり。春雨の、ふるといふより、經るに甲斐ある、又ふりはへて、ふり出でて泣く、古人等と轉じ、朝露の置くといふより晩稲（おくて）の山田に冠らせ、秋霧の立つといふより立野の駒と連ね、秋風の吹くといふより吹上に掛け、白露のおきといふより起臥しに連ね、置く露の離るより斯かるに轉ずるが如き、又池水の杙（いひ）を出づといふより言ひ出づるにうつし、滿汐の流れ干る間といふより晝間にかけ、白波の寄るを夜にかけ、逢ふことは難しといふを片覽と轉じたるが如き今一々擧けず。

この時代の枕詞の傾向は既に述べたれば再說せざれども、枕詞が秀句と緣語と相絡みて歌の技巧を旨としたるものにて、その數に於ても及ばざるも、異常の發達をなしたること此の時代より熾なるものあるなし。『津の國のなには思はず山城のとはに相見むことをのみこそ』（古今十四）『池水のそこにはあらでねぬ繩くる人もなし待つ人もなし』（拾遺十九）の如きは一首中に二つの枕詞を置きて一首の傾向となしたるに徴して、當時枕詞がいかに歌人に取扱はれしかを知るべきなり。

三代集時代の枕詞と創作者

（作者）	（枕詞）	（接語）	（作者）	（枕詞）	（接語）
紀有朋	相見まく……	星	寵	青つゞら……	人は來れども

在原業平　いそのかみ……………ふりにし
朝露の…………………おきゐな
唐衣…………………來つつ
白玉の…………………一日も經れば
僧正遍照　むば玉の…………我が黑髮
小野小町　漕ぐ舟の…………ほに
うたかたの……憂き身
露草の……………つゆの命
いきの松原……行き
誰をかも………待乳の山
あやめ草………人にねたゆ
浮雲の…………うける我身
まろこ菅……しげさ
長柄の橋の……ながらへて
紅葉せぬ………常盤の山
藤原仲平　花すすき…………ほに出で

在原棟梁　歸山……………かへる〴〵も
藤原敏行　久方の……………雲の上
ふる雪の……………みの白衣
玉垂の……………小瓶
千早ぶる……賀茂の社
菁澄春風女　逢阪の……………せき止めらる
菅公　秋風の……………吹上に
水引の……………白糸
紀友則　久方の……………光
夏衣……………うすく
唐衣……………かけて
蟬の羽の…………夜の衣
片糸を……………駿河
唐錦……………立田の山
隱沼の……………下に忍び
水の泡の………消えて

凡河内躬恒

我を君……思・筑波
下帯の……かた／＼別る
白妙の……あまの濡衣
月影の……おぼろげ
玉くしげ……二見の山
足引の……深山
青柳の……いと目も見えず
五月雨に……みだれて
草枕……道行く
夏衣……うす紫
棚機の……たてぬきに
初雁の……はつか
白山の……行き
吉野川……よしや
浮草の……うきこと　　紀長谷雄
白樫の……知らじ　　藤原兼茂

今日くれて……飛鳥川
唐衣……ぬふ・針河
沖つ浪……立よりて
久方の……空
千早振……神垣山
花すすき……ほのかに
卯の花の……うき世
あやめ草……あやなし
白妙の……白き月
千早ぶる……神無月
冬草の……離れにし
竹の子の……うき節
蟬の羽の……偏にうすき
花あやめ……かりにも
忘れ草……わする
渡つ海の……そこのありか

大伴黒主　漕ぐ舟の……浮きたる戀
清原深養父　滿干の流れ……豐間
君を思ひ……沖つの濱
藤原忠房　秋霧の……立野の駒
鳴く田鶴の……尋ね
隱れ沼に……忍び
兼覽王　はふ葛の……尋ね
藤原兼輔　藤浪の……立ちも
葦づつの……一重に
ます鏡……見る
泣く涙……ふりにし年
源宗于　春の日の……長く
梓弓……入佐の山
坂上是則　ふかみどり……常磐
呉竹の……一夜
藤原敦忠　しのすすき……忍び

藤衣……霧る
元良親王　逢事は……遠山摺
浪速なる……身を盡し
紀貫之　玉鉾の……道觸の神
うば玉の……夜河
春の日の……長き心
青柳の……いと(最)
秋の田の……ほに
唐衣……千歳をかけて
石の上……降る
あやめ草……根長き命
春の田を……返す〴〵
白妙の……濱の眞砂子
さす棹の……長く
朝露の……晩手
しづ機に……亂れて

玉かづら……葛城山
玉くしげ……明暮
乙女子が……袖振山
落髪の……亂れて
吾妹子が……鏡山
我せこが衣……春雨
君がさす……御蓋の山
玉鉾の……手向の神
木綿だすき……かけて
行く水の……深き心
草枕……この度
唐衣……頃も
千早ぶる……淺間の山
たらちねの……親子
赤紐の……長く
白妙の……卯の花

伊勢

白妙の……浪路
白雲の……行觸り
白眞弓……起臥
玉かづら……長き形見
白露の……起きて
沖つ浪……高砂の濱
白糸の……來る人
山の井の……飽かで
夕月夜……小倉の山
雨により……田蓑島
天雲の……背嶺山
沖つ浪……荒れ
玉葛……つらき
久方の……中に生ひ
百敷の……人の心
水の泡の……うたかた人

遣水の……出づる涙

素性法師

音にのみ……菊の
高砂の……尾上の櫻
秋の田の……寢ね
石の上……ふるき
玉垂の……見ずば

紀内親王

津の國の……名には

藤原公忠

玉くしげ……二年

源　等

濱千鳥……行方も知らぬ

在原元方

音羽山……音に聞き
立田川……立ち（名）
逢ふことの……渚

壬生忠見

石の上……珍しげなき

壬生忠岑

梓弓……春雨
浮草の……うきたる戀
雨ふれば……笠取山

音羽の瀧の……音に
伊香保の沼の……いかに
莫島の……からき別
名取川……なき名とり
空蟬の……からに
吉野山……よし（縱）
君が世に……逢阪山
立浪の……並のわざ
芦の根の……あした
ねぬ繩の……寢ぬ名
白山の……白く

小野好古

玉くしげ……身の後

藤原伊平

隱れ沼の……そこの心
逢ふことの……遠市の里

源　順

菊の花……開く
梓弓……いま

竹川の……夜々
ささがにの……いと斯く

大江朝綱　足引の……病
早舟の……はやく

恵慶法師　難波江の……蘆の花毛

平兼盛　宇土濱の……うとき
沼水の……ゆく方もなき
なよ竹の……世
澤水の……あさましき
逢ふ事は……片ゐざり

清原元輔　住吉の……來(き)し
千歳ふる……松か崎
沖つ浪……うちかけ

藤原兼家　つぼすみれ……罪
山川の……皆下(みなしも)なり

中務　白川の瀧の……いと見まほし

檜垣嫗　白川の……みづはぐむまで

大中臣能宣　君が代の……長柄の山
千早ぶる……三上の山・平野の松
鹽釜の……うら淋し
梓弓……はるかに
浮島の……うき沈
長柄山……長らへ
貫つむ……大藏山
印南野の……否
朝氷……疾く／＼
那須の湯の……たぎる胸

良岑秀岳　白雲の……立別れ

小野春風　蘆の根の……夜の短く

平貞文　葛の根の……うらみて

藤原高經　敷妙の……牀

藤原治方　逢ふ事の……涙

源　師　明　置霜の……………曉かる
藤原定方　さねかづら……來る
清原諸實　くれはどり……あやに
源　巨　城　空蟬の……………唐衣
平中興の女　墨染の……………鞍馬山
坂上常蔭　鏡山……………あけて
藤原成國　秋の田の………かりそめぶし
承香殿中納言　來ぬ人を………松の枝
藤原爲世　逢事を……………交野
大江玉淵女　難波潟……………何にも
倭　　子　なら柴の…………ならし顔
藤原遠基の女　君をのみ………忍ぶの里
村上天皇　黄楊ぐし…………さして逢ふ
明日香采女　池水の……………そこ（其許）

ねぬ繩の………來る
齋宮女御　鈴鹿山……………成る
東宮女藏人左近　柏木の………洩りや
藤原國持　手斧の音………ほと〳〵しく
源　景　明　梓弓……………おもはす
藤原實方　五月やみ………倉橋山
藤原國章　爪つくり…………となりかくなる
女藏人兵庫　あやめ草…………哭(ね)こそ泣かるれ
藤原爲頼　なき名のみ……立田の山
八條の大君　なき名のみ……高雄の山
小貳命婦　こゆるぎの……急ぎ
藤原長能　さばへなす……荒ぶる神
からなづな……なづさはまく
藤原公任　うぐひすの……初子

第四章　三代集以後と枕詞

詞藻は新奇を尙び流行を趁ひ易きものなれば、枕詞もこの命數を免れず、三代集時代には秀句、縁語の盛に使用せられ、枕詞も大に發達を遂げしも、新に創造するにあらで、舊來のものを撰びて轉義するを學としたれば、終には意匠も枯凋するの時あるべく、又秀句とも枕詞とも分ちがたきものも數多生じて、後には言開の方流行し、枕詞は大に衰へ、後拾遺以降に於ては只慣用に隨ひ無意識的に用ふるに過ぎず。能因の歌枕に、道はたまぼこといひふ、夜はぬばたまといふ、山はあしびきとも又しなてるやともいふ等と擧げたるを見れば、此等も歌人の間には半ば忘られたるを知るべし。清輔の初學抄、及び顯註密勘にも同樣のことあり。鴨長明が無名抄には腰句に置ける枕詞を半臂に比したり。即ち僧正遍照が歌に「『垂乳根は斯かれとてしもうばたまの我が黑髮を撫でずやありけむ』この歌の中にいづれの言葉か特に勝れたる。覺えむままに宣へといふ。予曰くかかれとてしもといひて烏羽玉のとやすめたる程こそ特にめでたく侍れといふ云々。それにとりて月といはむとて久方と置き、山と云はむとて足曳といふ常の事なり。されど初の五文字にてはさせる興なし。腰の句によく續けて言葉の休めに置きたるは甚じく歌の品も出で來、振舞かけずらひともなるなり。古き人これを半臂句とぞいひ侍りける。半臂はさせる用なきものなれど裝束の中に備となるものなり」云々。と是れ一面には枕詞の價値をたたへたれど、一面には只裝飾の爲の半臂に比す。當時の歌人が罕に之を使用せるの證左たるなり。

萬葉、古今に對し和歌史上一時期を劃する新古今時代に見るに、全集二十卷千九百七十八首中、枕詞を使用せるは百三首にして、その多くは萬葉及三代集歌人の什に屬し、當代歌人の作には二十三首に詠み入れたるに過ぎず。そも久方、玉鉾、神風、唐衣、玉の緒、足曳の類にて、新作のものとしては、慈圓の有明の、つきせぬ、秀能

の夕煙、立つ名等一二あるのみ。當代歌人の冠冕たる京極黄門の作に徴するに『久の嵐も雲もすみはてて空の外なる秋の夜の月』の歌の久方は嵐にかかるか、雲にかかるか、空にかかるか、或は大空の意に轉用したるか、朦朧として明かならず、その他推して知るべきなり。

以下十三代集・新葉集を始め家々の集に至るも新しき枕詞を用ひたるを見ず。足利氏時代に及びて謠曲起り、古文學を切り取りて刺繡的文字をなすに及びて、古き枕詞の復活を見、また其の中に新しきもの、或は接續を革めたるものの散見するに至れり。『田村』の中にかげろふの石山寺といひ、白糸のくりかへしとあるが如きは接續の新なるもの、浦浪の粟津の森、上見ぬ鷲尾寺の如きは全部新規のものたるが如し。『熊野』の中に賴む命は白玉のをたぎの寺、又何の恨かあり明のつき鐘こそはなどの接續あり。二百幾番の謠曲には斯かる類多少ありぬべし。徹書記が草根集、三條西實隆の雪玉などにも接續の新なるは少しく之あらむ。雪玉集に『出づる日もけふ新玉の男山さかゆく春の光さやけし』の如きあり。新玉にあらたまる意を秀句とし、玉の緒のをの音より男山にかけたるなど堂上風の作ながらその例とすべし。

徳川氏時代

徳川幕府の始に方り林道春等と和漢十題會を催しし文殊院立詮は數十篇の長歌を詠みしが、範を古今集に取りたるが故に、新しき枕詞を工夫するに至らず。元祿の頃に至り圓珠庵契冲出て、古學を復興し長歌をものするに及び多少枕詞の復活を來たし、後春滿門下の賀茂眞淵出でて古歌古文を奬勵するに至り、枕詞の使用も多く韻文

に散文に之を使用せり。中に就き新しき枕詞を案じたるもの、若しくは舊き枕詞にして新しき捏造を工夫せしものは眞淵を第一とし、本居宣長・同大平・齋藤彦麿・荒木田久老・加藤千蔭・加納諸平・和田厳足・鹿持雅澄・六人部是香等之に次ぐ。而して下河邊長流・契沖以下眞淵・魚彦・平高保・秋成・季鷹・雅澄等の人々によりて之が研究を繼續せられ、その結果としても之を用ふるもの多きに至りしなり。而してこの時代の長歌には三句より成る序を挿入すること漸く盛大となりしに似たり。

古學者以外の人特に淨瑠璃作家の秦斗近松巣林子の如きもその戯曲中に時々枕詞を使用せり。出世景清に白旗の源氏の大將とあるが如き、新創の枕詞中面白きもの。本朝三國志に千早ぶる、神田丸と字音にて捏造せしが如き、又天網島には神に紙をもぢり、枕詞を逆に置き、その語の一部分より轉義して巧に用ひたり。即ち『福德に天滿つ神の名をすぐに天神橋とゆふべかよふ所も神の御前町、營む業も紙店に、紙屋治兵衞と名をつけて千早ふるほど買に來る』に於けるが如し。その他の戯作者に於ても道行と唱ふる文中には往々之を用ふるを見る。唯上代に於けるが如く單純に孤立的に使用せず、多くは緣語と共に用ひ、或は言掛けになしてその巧を恣にするを常とす。

德川氏時代の枕詞と創作者

(作者)	(枕詞)	(接語)	(作者)	(枕詞)	(接語)
下河邊長流	小車の	賀茂		たましひの	入野
	我が心	名草の濱	契沖	よつの時	御津の濱風

人ごころ……有磯の濱松
さ牡鹿の……高圓山
あらがひの……荒き心　高橋秀倉
柘の木の……罪といふ罪　小野古道
したゞみの……老舌だみ　村田春郷
いかるがの……怒
小田卷の……めぐる
岡谷の……高き卑しき
しら眞弓……小幡の里　源信鎰
枕太刀……たちの急ぎ　賀茂眞淵
島つ島……うたて
唐衣……うらやまし
櫻の木の……稱
口なしの……岩手の杜
姫島の……ひめおきし
さるさはの……生けらん

逃水の……にげも
手まの關……手さへ
物の部の……弓削の町
天ざかる……鄙居の大人
白玉の……多摩の横山
こまつるぎ……和久島
水鳥の……賀茂の翁
沖つ島……むき見る
いつ貫川の……いつしかに
あをによし……平の宮
ふぢ衣……あら蝦夷
ことさやぐ……樺太島
たまぼこの……たま〳〵
百足らず……五十連の聲
茜さす……大宮（又日高見國）
檜の抓（つま）……手

稚柴の……誣ひ
君が世の……長月の
かへる山……省ふ
天傳ふ……日の入國
百つかさ……利根
はし立の……秀倉
ぬなはなす……長く
春花の……うらぐはし
千早ぶる……あげの玉垣
いつはた山の……いつ將た
かきかぞふ……四の時
いはゞしる……多紀の郡
にぎたへの……にぎ蝦夷
駒の爪……津輕の浦
白まなご……濱松
春日野の……烽火

富士谷成章

行水の……すみだ川
難波江の……よしやあしや
かき數ふ……五の柵
栗の實の……三つ
白山の……白髪
秋の水……隅田川原
物さはに……公の仕
あらぢの關……あらじ
三河なる……しかすがに
行く牛の……おそき翁
千早ぶる……神のみ坂
いかし支の……直き大和手風
うば玉の……くらぶの里
ましみづの……淨見原
さいぐさの……三草山
嵩さくら……高津の山

かしの實の……一つの品
立ち勝る……八雲の御教
春の山田の……好ける心
花すすき……まそほの袖
三栗の……中の務
玉光る……日の御子
常世の波の……高き御名
海人の捨舟……さし放たれ

加藤枝直

あもりつく……不二の山
天とぶや……鶴が岡
辛崎の……待つ
かきかぞふ……三の世
ことさへぐ……他し國
千早ぶる……猛雄
ゆく水の……三河國

本居宣長

みなそそぐ……魚町
春がすみ……井むらの里
小松おふ……小野の君
たくぶすま……白子のうら
うみをなす……長田の里
白雲の……栗田の山
打日さす……宮川
金とかし……石凝姥
風波の……若草
青淵の……深き
磯部の波の……夜晝
いろこなす……家なみ立
鳥なすや……さへづる國
大船の……渡邊の子
春の夜の……おほろげならず
となみ張る……阪なゐ川
蟹がゆき……横瀧山

一

よの子

高本順

荒木田久老

あし田鶴の……村田の君
母子草……ははこ
若菰を……假なる宮
たくぶすま……白川渡
眞玉つく……小幡の神
はじ弓の……始の
百國の……大國主
春の日の……長きことの葉
山田の早苗……とりわきて
はたすすき……菩日の命（ほひみこと）
ま鴨よ……賀茂の大人
玉島の……玉のことのは
淺香山……あさく
初時雨……ふりにし
速日別……はやくも
雲井なす……た遠き國

加藤千蔭

消霜の……はやく消え
大君の……高倉山
あしづつの……あしき
八十隈の……熊内
眞菅よし……須賀の山
水沫まく……貢淵
梓弓……伊駒高根
み心を……安田のをち
水莖の……岡田の吾兄
うみをなす……長嶺の道
石走る……水内あがた
白波の……濱田の里
堅鹽の……からく
天傳ふ……姫みこ
玉鉾の……長ちはの神
あくらの酒の…偸く

上田秋成
村田春海
栗田土滿

庭遠の……おもひ上り
劍太刀……三とせ
ひなざかる……都
曲玉の……まがる
和歌の浦和の…若かりし
春の海……奈呉の浦
汐干の……荷田（かた）の氏人
松風の……音羽山
神ごとの……たゝに
黄昏の……あさましき
雨に着る……箕面（みのも）の山
埋火の……すみつき難き
さしむしろ……加茂の翁
しなが鳥……あはの山
春風の……名古屋
みづみづし……瑞穗の國

本居大平

玉くしげ……三河の國
天照す……ひるめの尊
夏の日の……熱田
沖つ浪……荒井
玉垂の……尾張國
鳥じもの……はぐくみ
ふちに住む……龜山の里
刈萱の……つかさの人
こむらさき……元結
むしぶすま……名古屋
おる機の……羽田
芦垣の……垣内の里
芦垣の……よそぢ
安達太郎の……足（た）らし
こがひよき……桑名
沖つ藻の……もなく

まそかがみ……三宅のぬし
うまごりの……怪しき
白縫……肥の道の口
玉だれの……岡野の君
飛ぶ鳥の……村田の君
葎生の……賤しき屋
いさや川……諫め
白玉の……尾張
藤波の……紫の子
玉だれの……小倭
引さらす……布引山
浪よする……五十路
みさごゐる……濱田の御城
月かがやく……金子の君
ゆ種まく……小田の若子
ものさはに……大垣の里

香川景樹
齋藤彦麿

霰ふり……橿日の宮
にはたづみ……俄病
さいくさの……三河の國
青海の……うづまさ(太秦)
青にぎて……總の國
朝がすみ……鹿の嶺
あら妙の……麻布の寺
いくみ竹……世の長人
入間地の……入りて見れば
大御代の……平の宮々平の朝臣
國の名の……賞きて
ことさへぐ……おさる夷
ことさかの……土佐の朝臣
栲ぶすま……白栗毛
劍太刀……世にぬけ出でし
春草の……若かりし代に

はし鷹の………狩野の翁
はる風の………名古屋
細ちなす………切剌き
もののふの……武甕槌
百船の…………津輕の濱 又八島のうら
若蘆の…………つかみ拉かむ
披上の…………本間武雄
天づたふ………神籬(ひもろぎ)
天がける………鳥羽の聖
いくみ竹………幾萬代も
射る矢なす……矢口の川
有漏地より……室の湊に
かきかぞふ…八釣の宮 又やぐらのとの
薦だたみ………熟く
こまつるぎ……和氣の朝臣 又わかの浦
しな田ゆふ……たむの浦

加納諸平

空かぞふ………大内山 又大まつりごと
たしみ竹………世の遠人
鳥網はる………鳥取の君
花すすき………穗阪の御牧
飛驒人の………木挽と負へる町
二荒山…………二たび
三栗の…………中臣ぬし
百鳥を…………狩野の翁
燒鎌の…………利根の下つ瀨
若艸の…………新田の御墟
語り合ふ………友が島
をしね刈る……鎌倉
たか鞆の………巴が嶽
沖つ鳥…………安治川
しれ人の………俄羅斯
丹生の川………鈍くして

ふる柳…………ふりぬとも
百舟の…………船津
たたみ菰…………戸田の干潟
あち潟の…………かた／＼
大麻を…………引本
こもりづの……爽しさびして
飾磨の川の……しかすがに
爪ぐりの…………つまづく
冬草の…………下田の浦
むらさきの……木津
山畑の…………將や今年も

和田巖足

味さはふ…………女島
いぬじ物…………おぞき爽
獺じもの…………隱り入ぬれ
鯨魚の…………いさましく
千曳なし…………大石の朝臣

浪の寄る…………磯田の朝臣
もち鳥の…………かけて留めて
味むらの…………さ渡る人
おく霜の…………霜野の原
そに鳥の…………青葉がくれ
鳥網張る…………さかしら
廣鰭の…………將思ひ出て
梓弓…………はらみの山
大鳥の…………羽山の里
大舟の…………津野命
こも枕…………高瀬
玉くしげ…………二名山
夏草の…………野市の里
ひなざかる……隱岐の國
ものさはに……大島山ゝ大津の田井
吾妹か…………苧の山

鹿持雅澄

足引の………岩戸の關
大島の………羽毛山
高麗劍………和食の浦
玉垂の………をても此面もゝを春乙女
島津島………宇佐の浦
はたすすき……浦戸の崎
むし衾………名護屋
八重だたみ……扇の山
あぶさはす……いらなけく
朝かがみ……向の宮
牛じもの………我つかなくに
うらかす………ぅなかぶし
驊馬なす………人に厭はゆ
栗の實の………ゑみ咲ひ

六人部是香

すが〳〵し……菅原の朝臣
玉鉾の………みちびき
廣幡の………八幡
茜さす………氷上の
沫雪の………若狹國
をしね刈る……宇田の吾兄
おち瀧ぎつ……多紀の小國
川の瀬の………そこに思出
ことひ如す……人に怖ぢられ
澄み渡る…　…水戸の社
てる月の………清き心
みかごしの……君が御手

第五章　明治時代

明治維新後に於ては歐化主義の全盛につれて、國語國文界は萎靡振はず、斯道の研究久しく起らざりしこと前編既に縷述せるが如し。國學者中には長歌を詠ずるものも多少これありしも、新に枕詞を創するが如きは殆どこれなく、ひとり村岡良弼氏はこの語に對する愛着や深かりけむ。その紀行、甲信紀程中には新古の枕詞を使用すること實に八十有餘に及べり。中に舊慣のもの二十種、接續の新なるもの六十餘種にて、いづれも甲信上毛武藏の地名に冠らせたるものなり。例へば天翔る都留の郡、神まつる杵淵の村、さし櫛の赤羽、した衝の嶺の站、取りならす笛吹川、たつくりを更科の郡、放ち飼ふ駒木野の關に於けるか如く轉義に出るもの多しとす。明治時代に於て枕詞を好んで用ひたること、恐らくは氏の右に出づるは無かるべし。尚汎くあさり索めば多少はこれあらむも今は省きたり。

次に氏の使用せし枕詞を擧ぐべし。中に詞の上に小圈を附せるは氏の新製のものとす。

(作者)	(枕詞)	(接語)	(枕詞)	(接語)
邨岡良弼	あられふり	鹿島立	三つ栗の	中野
	秋霧の	立川の站	日かがやく	多摩川
	赤良引く	日野の站	賢小舟	八王子

○放ち飼ふ………駒木野の關
○天翔る…………都留の郡
角さはふ………岩殿山
○捨ごろも………鹽山の站
○とり鳴らす……笛吹川
○鵜飼人…………浮び
入紐の…………うちとけて
若草の……………韮崎
菅の根の………長阪
淺茅原…………茅野の站
みさご居る……諏訪
久堅の…………天龍川
○淺茅生の………小野の站
○常磐なる………松本
鴨頭草の………ここに遷して
○根芹つむ………田澤の站

○羽かはす………鳥澤
○三叫ぶや………猿橋
椎柴の…………初狩の里
打ち靡く………日下部
○玉ひりふ………石和
ぬばたまの……四かの日
薪こる…………釜無川
五百枝さす……武田の村
級たゆふ………篠尾
味酒を…………上諏訪
青丹よし………平城天皇
なき名のみ……立野の站
三栗の…………中山道
かるかやの……束間の里
玉ぼこの………陸奥
風の音の………東條

○調布(たつくり)を……更級郡
御篶刈る……篠井
三枝の……犀川
物さはに……大屋の站
○根芹つむ……田中の里
赤良びく……淺間の嶽
朝鳥の……烏川
飛鳥の……板鼻の宿
こも枕……高崎
すみ染の……倉賀野
夏草の……新町
吾こころ……赤城の山
さ泥さし……武藏國
三日潮の……榛澤郡
階(はし)立ての……熊谷
秣刈る……荒川

○刈り積むや……稲荷山
○神祭る……杵淵の村
鳰鳥なす……長野の站
勇魚捕……海野
○玉篠の……小諸(こもろ)
なよ竹の……横川(よこかは)
白まゆみ……磯部の站
襲衣を……假塚
○瓦ふき……寺尾の城
雪崩く……烏川
水馴棹……緑野郡
千磐破る……神流川
味酒を……甘樂郡
深海松の……淺谷
物さはに……多胡郡
背さす……村岡

菅刺す…………終日
刺竹の…………大宮の站
。したもえの……蕨の站
あら玉の………豐島郡
穗波よる………田端
わか草の………日暮里

高崎正風

青幡の…………忍(おし)の城
漕ぐ舟の………浦和の站
劍太刀…………戸田(とだ)川
さし櫛の………赤羽
うら白の………志田の出湯
汐なわの………ころしか島

序に先きに云ひ洩したる枕詞の釋義に關し、木村鷹太郎の所說を附載すべし。氏は明治四十四年に世界的研究に基ける日本太古史中に冠辭の一章を設け、世の國學者が冠辭に對する態度の冷淡なるを尤め、從來の研究の無能力を指斥し、冠辭考の如きも牽强附會の說のみにて、殆ど何の用をもなさずとし、自家の希臘羅典語的語原學によつて解釋せむとせり。例へば、八雲立つ出雲は猶太經典のヤコモとイドムの兄弟の名に當るといひ、天にかかる久堅は希臘語にて源泉滾々と湧出する義といひ、うば玉のやみは葡萄の實ウバの玉と云へるならんと說き、土に掛くるあらがねは希臘語エルガネより轉じたるもの。農耕の業を敎へ、女子の爲すべき種々の業務を導くアテーナの女神をエルガネといふより、農耕の義は土に關係ありといひ、奇稻田姬にかかる眞髮ふるのマガは、英語のマジックの語原及マジの宗敎等と同一義なる希臘語マガノオ、或はマガノンにふるといふ形容的語尾を加へたるものにて、妖術不可思議を意味し、もとはアヤ國の妖術を行ふ王女メデア姬の形容に用ひたるを、昔の似た

るよいイナダ姫に誤用せしならむといひ、茜さす紫につきては、あかねはフェニシャ語の轉訛にて赤蝶のことならむといひ、同國古代の名産は海の介殻より得たる紫(緋色)なれば、その所縁にて續くとし、そらみつ倭のそらみつは、日光過多を意味せる希臘語ソルニミスより來る。さればそらみつよりもそらにみつを正しとすべしといひ、つぎねふ山代川のつぎねふは双生を意味せるスンゲネスといふ希臘語にして、山代川は埃及にありとし、新治つくばのひばりは印度のネパールにて雲の義とし、なまよみの甲斐のなまよみは姫河の義にて羅馬の淵南河のこととし、青丹よし奈良のあをによしは、希臘の酒神バッコスの別名アオニオシの轉となすが如き枚擧に遑あらず。

邦語に同化せられし外來語は比較言語學により新に解釋すべく、不可解の枕詞の中には或は他國語の交りたるも無しとすべからず。木村氏のこの企は大に壯とすべし。されど語の時代を顧みず、言語傳播の跡を究めず、唯音の近似により、すべてを解釋せむとするは、學術上極めて危險なる結果を將來すべきなり。吾人は希臘羅典語に通ぜざるが故にとかくの評は下しがたきも、江戸時代に發生せし語、例へば花川戸とか助六などをも彼國の語にて解釋し、江戸最初の殖民はシシリヤ人となし、助六はシシリヤ人を羅典語に呼ぶシケリクスの轉訛とし、待乳山聖天は羅馬の門戸の神たるマツチヌスなりと說くが如き、吾人の共鳴し能はざるところなりとす。

研究年表

天慶　六年　矢田部宿禰公望の日本紀私記に發語の稱を用ふ。

文永　六年　仙覺律師萬葉注釋を著し、中に諷詞の稱を用ふ。

正安三年前　卜部懷賢釋日本紀を著す。

貞治　五年　釋由阿、詞林采葉抄を著す。

天文　六年　三條西實隆薨ず。和歌枕詞一卷を著す。

寛文　十年　下河邊長流枕詞燭明抄三卷を著す。上梓。

貞享　四年　契沖詞草正採抄一卷を著す。

契沖萬葉代匠記枕詞二卷を著す。

元祿　六年　下河邊長流の作と傳ふる萬葉集冠辭拾要の寫本あり。

年月　未詳　二條家御秘傳枕詞一卷あり。

元文　元年　荷田春滿歿す。枕詞を冠辭と改む。

元文　三年　壺苗庵能東岐の書せる萬葉和歌稱事一卷あり。

寶暦　七年　賀茂眞淵の冠辭考十卷上梓。

明和　七年　楫取魚彦續冠辭考一卷を著す。

明和　八年　田安宗武薨す。

明和　九年　建部綾足詞草小苑一卷成る。安永二年上板、享和四年再板。

安永　二年　深澤薫類聚冠辭略解九卷成る。

安永　四年　服部高保の續冠辭考二卷成る。

同　　　　　同人の續冠辭考別記一卷成る。

安永　六年　賀茂季鷹の枕辭一言抄一卷成る。

安永　六年　田安宗武の摘要冠辭考五卷淨寫成る。

安永　八年　楫取魚彦の冠辭懸緒一卷成る。

同　　　　　源義亮いそのかみ一卷を著す。寛政十年出板。

安永　九年　庫光寺爲祥和歌詞訂二卷を著す。

安永　九年　富士谷御杖の歌袋六卷成る。

　　　　　　無名氏の冒頭一卷成る。

天明　四年　雨引山東岳の枕辭略註三卷成る。

同　　　　　藤原武良山の枕詞證歌附八卷成る。

寛政　五年　富士谷成章の歌道非唯抄附錄上梓。

寛政　八年　上田秋成冠辭考續貂十卷を著す。上刻。

寛政　十年　尾崎雅嘉和歌枕詞補註二卷を著す。上木。

同　加藤景範みやびごと玉かづら一折を上板。

享和　元年　荒木田久老の信濃漫錄成る。

享和　二年　松山貞主の冠辭例一卷上木。

文化　九年　犬飼戸次冠辭補几帳一卷上木。

文化　五年　本居大平の神風伊勢考成る。外に枕詞考一篇あり。

同　石原正明の年々隨筆成る。中に冠辭考斥非に關するものあり。

文化十二年　高橋庸その師深澤薫の類聚冠辭略解に筆を加ふ。

文政　三年　道湛平寫の萬葉集枕詞一卷存す。

文政　四年　岡本秀壽の冠辭考撮要成る。

文政　五年　衣紗舍の冠言並古言辨一卷成る。

同　鹿持雅澄の萬葉枕詞解五卷成る。

文政　九年　度會政方の双樹の落葉出板。

年代　未詳　伴信友玉鯖考の著あり。弘化四年上木の比古婆衣に載す。

鹿持雅澄玉鯖考を著す。

文政十一年　安藤躬盤の冠辭考略一卷成る。

天保　二年　推易堂の舊詞考三卷成る。

年月　未詳　推易堂の萬葉枕詞考一卷成る。

推易堂の萬葉枕詞考續篇一卷成る。

弘化　元年　高橋殘夢の石上枕詞例五卷成る。

同　同人の三代枕詞例三卷成る。

安政　四年　加納諸平歿す。山多豆考の著あり。

安政　六年　井上文雄の伊勢家苞刊行。枕詞論及枕詞轉用の說あり。

年月　未詳　草鹿砥宣隆の冠辭鶴音一卷上版。

同　友挍冠辭考一卷。

明治　十年　チャンバレイン氏の On the use of pillow-words and play upon Words in Japanese poetry といふ論文亞細亞協會雜誌に登載。

年月　未詳　佐佐木弘綱の枕詞早見といふ表成る。

同　黑川眞賴の冠辭考書入拾卷。

同　同人の古今集冠辭考一卷あり。

明治二十四年　佐佐木弘綱假名遣枕詞辭典刊行。

同　　　　岡野伊平枕詞集覽一卷刊行。

同　　　　高橋納亭の冠辭初學一卷刊行。

同　　　　末松房泰の冠辭例歌集一卷刊行。

明治三十三年　ディッケン氏の Makura-kotoba of Primitive Japanese Verse 一卷亞細亞協會雜誌の一本として出版。

明治四十四年　木村鷹太郎の世界的研究に基づける日本太古史刊行。中に冠辭の一項あり。

存否不明並に未管見の枕詞に關する書

三條實隆の枕詞二卷　燭明抄並に尾崎雅嘉の和歌枕詞詞補註に見ゆ。

建部綾足の詞草大苑　建部綾足の詞草小苑に記したれど成上せざりしか。

富士谷成章のかぶり本抄　富士谷御杖の歌袋に記したれど脫稿せざりしか。

松平康定の冠辭考　立綱が増補せしものありたるよし物に見えたれど所見なし。

大寂庵立綱の玉挿頭一卷　濱田侯松平康定の冠辭考及詞草小苑に洩れたるを拾ひ集めしもの。火災にかかりしといふ。

大神景井の非冠辭考　鹿持雅澄の萬葉古義に引したれども稿本谷子爵家にも存せず。

中村守臣の冠辭追考一卷　中村孝氏がしがらみ草紙に載せたる守臣の著書目錄に擧げたれど、未だ管見に觸れず。

大國隆正の冠辭考附說三卷　慶長以來國學者著述目錄に載せたれど、未だ管見に觸れず。

村井長央の枕詞轉用例　井上文雄の伊勢の家苞にその著ありと見えたれど、未だ管見に觸れず。

保田光則の冠辭考存疑　その著雅語例に擧げたれど、未だ管見に觸れず。

鈴木新の枕詞目安　その隨筆に編著のこと見えたれど未だ管見に觸れず。

年　表　終り

人名書名事項索引

（人名の上に○印を冠したるものは枕詞の創始者なり）

あの部

いの部

おの部

きの部

くの部

けの部

この部

さの部

しの部

すの部

せの部

その部

たの部

ちの部

つの部

ての部

との部

なの部

にの部

ふの部

ほの部

まの部

みの部

わの部

人名書名事項索引　終り

枕詞索引

あの部

いの部

うの部

おの部

きの部

くの部

けの部

この部

しの部

すの部

せの部

その部

たの部

ちの部

つの部

ての部

との部

なの部

にの部

ぬの部

ねの部

のの部

はの部

ひの部

ふの部

への部

ほの部

まの部

まそかがみ　四九九
まそがよ　五〇一
またまつく　五〇一
またまづら　五〇二
またまなす　五〇二
またみるの　五〇二
まつかへの　五〇二
まつかぜの　五〇三
まつがねの　五〇三
まつかへり　五〇四
まつちやま　五〇五
まついはの　五〇五
まつひとの　五〇六
まつやまの　五〇六
まとりすむ　五〇六
まなこがの　五〇八
まなごづち　五〇八
まよびきの　五〇八
まろこすげ　五〇九
まをこもの　五〇九

みの部

みかしほ　五一一
みかづきの　五一二
みかはなる　五一三
みかもなす　五一三
みくさかる　五一三
みくしげの　五一四
みけむかふ　五一四
みけつくに　五一五
みこころを　五一六
みこもかる　五一六
みさごゐる　五一八
みすずかる　五一九
みさけぶや　五二〇
みちしばの　五二〇
みちのくの　五二〇
みづがきの　五二一
みつぎつむ　五二三
みづぐきの　五二三
みつぐりの　五二五
みつしほの　五二五
みづたでを　五二六
みづたで　五二六
みづたまる　五二六

むの部

もの部

やの部

ゆの部

ゆふづつみ　六〇一
ゆふはたの　六〇一
ゆふばなの　六〇一
ゆふひなす　六〇一

よの部

よごもりい　六〇二
よしきがは　六〇二
よしのがは　六〇二
よしのやま　六〇三
よするなみ　六〇三
よつのさき　六〇三
よどがはの　六〇三
よとともに　六〇三
よぶこどり　六〇四
よるふねの　六〇四

わの部

わかあしの　六〇五
わがいのちを　六〇五
わかくさの　六〇五
わがこころ　六〇八
わがこひに　六〇八
わかごもを　六〇八
わがせこを　六〇九
わがたたみ　六〇九
わかひさぎ　六一〇
わかれては　六一〇
わかれぢを　六一〇
わきがみの　六一〇
わぎもこが　六一一
わぎもこに　六一一
わぎもこを　六一二
わくごの　六一三
わしのすむ　六一三
わすれがひ　六一四
わすれみづ　六一四
わすれぐさ　六一四
わだつみの　六一五
わだのそこ　六一五
わたりがは　六一六
われぶねの　六一六

ゐの部

ゐまちづき　六一七

をの部

索引終

枕詞釋義

あの部

あが心 淸隅の池萬十三明石の浦萬十五筑紫の山萬十三

あがは我がの古言、心は淸きとか赤きとかを貴びたるより、萬葉十三の長歌には淸隅の池、十五には明石の浦へ掛け、吾心を盡すといふより同十三の長歌にはその音をもてる筑紫の山に冠らせたり。明石浦は播磨、淸隅池は大和國添上郡高樋村にあり。

吾たゝみ 三重の川原萬九

萬葉九に『吾疊三重の川原のいそのうらに斯くしもがもと鳴く蛙かも』とあり。吾疊はあがたたみとよむべきか、又わがたたみとよむべきか、いづれとも見らるべし。昔貴き人は疊を重ねて用ひたるものにて、こゝは疊は一重二重などいふより伊勢の三重てふ地名へかけたり。

あかねさす 日萬二 晝萬二 照れる月萬四 紫野萬二 君か情萬十六 朝日の里新古七 日置の里名寄 日高見國無居集 大宮同上 氷上山雪集

朝日の上る時、東の空まづ赤く紅さしたる如き光景を茜の色に喩へて日に冠らせたるを始にて、其にも掛け、又

轉じては照れる月にも掛く。さすとは色のさし出づるをいふ。赤色彩の關繫より紫に掛け、その語をもてる紫野といふ地名にも冠らす。近世のものにては藤居集には日高見國及大宮へ冠らせたり。大宮へ續けたるは日の御門の意に通はせて用ひたるならむ。萬葉に茜刺とも赤根指とも記したるより、赤き日と說く說もあれど、ホーマーの詩に朝日の色を薔薇色の手の如しと喩へたると相似て、茜染に喩へたりと見るべし。茜草は方莖中空の蔓草にて、葉は節ごとに四枚あり、眞夏の頃淡黃色の總狀花を着く。その根を採りて染料となす。之を茜染といふ。◇『茜刺す日は照らせれど烏玉の夜渡る月のかくらく惜しも』萬四『はつせの弓槻がもとにあがかくせる妻茜さすてれる月夜に人見てむかも』萬二『茜さす紫野ゆきしめ野ゆき野守は見ずや君が袖ふる』萬二『晝はめどうまくもあらず、あるけれど安くもあらず、茜さす君が心し忘れかねつも』萬十六『茜さす朝日の里の日かげ草とよのあかりのかざしなるべし』新古今『茜さす日還の里を見渡せば卯花さきてなつかしきかな』名寄

【童】あかねさす赤き光さすといへるなり。

【仙】紫は根を用とす。その根赤きものなれば茜さす紫と續く。

【管】あかねさす紫野。野をほめて紫野といふ。名所の紫野にあらず。あかねさす君とは、その形のてりかがやく心をいへり。

【代】月日の光赤きをも云ひ、又紅顏の匂へるをもいふ。又紫は、赤黑相交りてうるはしき色なれば、それを褒めて茜刺とはいひ出せり。

【考】赤き氣の指す日と續けたり。あかねのかねの反けなり。故に約めてはあけと云ひ、延べてはあかねと云へ

り。又晝と掛けたるは明き意にて續けしならむ。紫も赤き氣の匂ふなれば續けたり。

【詞】詩經の秦風に顏如渥丹、其君也哉とありて、あかねは渥丹なり。くとかと通じ序と根と通ず。刺すとは射の字にて、しやはさとなる。渥丹の光の人を射る意なり。

【解】赤根のねは唯添へたる言にて、赤指す日といふなるべし。物は異れども島根、草根、眉根などいふと同じく根の言に意なし。さすは篝火さすなどのさすにて、光かがやくことなり。

【石】赤根刺すといふ義なり。日は赤色の根なり。よつて日に續く。

【檜】茜根等の字は借字にて、赤丹刺日とかけり。赤羅引く日と續けたるに合せて知るべし。紫の色は氣のにほふものなれば置けるなり。

【萬燈】茜草指はあかきものの冠なり。されば日にも冠らするものなり。紫は今の紫にあらず。いはゆるあけを戀ふ紫のことなり。紅顏のことを紫によせたる歌多きを思ふべし。

【黑】あかねさすは明照發なり。

赤紐の 長く 貫之集

貫之集に長くと續けたり『山藍もてすれる衣の赤紐のながくぞ我は神につかへん』に於けるが如く序歌の第三句とも續紹に擧げたり。蓋し古の神事裝束に長き赤紐のありたるより年月永くの意に用ひたるなり。

【紹】山藍摺の小忌衣の肩の赤紐は長ければ、鮑に結び置きて手襷に掛くる時端を引きて用ひる故長きとはかけたり。さて神に長く仕へむとなり。

あか星の　あくる朝萬五　飽かぬ心六帖

曉の空に觀音の星は早く消え失する時、唯獨の明星のみはなほ殘れるより、萬葉五卷長歌に明くる朝と續けたり。眼前の風物をかりて枕とせるなり。さるを六帖には『月影に見かくれにけりあか星のあかぬ心に出でて惜しき』と飽かぬ心と連ねたるは唯同音を重ねて調をととのへたるなり。

【冠】白浪の濱松が枝と續くる類にて明くると云はん爲めに置けり。

【貂】六帖なるは唯飽かぬといはんとて何のよせなきを詞にかけしのみ。

【解】萬五卷、明くると云ふに掛けたるにはあらず、朝と續けたるにて明星の照る朝といふなるべし。

あからびく　朝萬十一　日萬四　月萬十　肌萬十　色妙の子萬十

朝とも日とも續け又妙齡の佳人の美しき肌に掛け轉じては色妙の子とも續けたり。萬葉には赤羅引、又朱引とも記したり。語義は紅日の光のさすといふことならむ。あからは光明に同じ、色妙は代匠記精撰本にあるいろたへと訓む說宜しきか、◇『ぬば玉のこの夜な明けそ朱らびく朝ゆく君を待てば苦しも』、『あからびく肌もふれずて寢ねたれどもけしき心をあが思はなくに』、『あからびく色妙の子をしば見ればひとづまゆゑにあれ戀ひぬべし』

【管】あから引朝ゆく君、紅の裳を引きていにたる君なり、

【代】赤根刺に意同じ、

【考】赤き氣の引くてふ意にして日とも朝ともつゞけたり。常にも光の刺すを明りのさすとも、明りの引くともいひ、そのりをらと音の同じければあかりひくてふことなり。色妙と續けたるは敷栲の妹といふに同じく敷細布

てふ意なり。さてそのしくは物の繁くうつくしきをいひ女のうつくしくして和なるに喩へたり。

【解】あからのらは赤根の類にて唯添へたる辭、引は借字にて光なるべし。かるの切くなればなり。されば赤光る日とつゞけたるなり。又赤光る子又は君、肌といひかけたり。

【石上】赤生引といふ義なり。あはかの餘韻にあり。

【義】あかねさすと同じく赤き羅にもかけたるか。

【說】八雲御抄一、あから引は赤き心なり。いろたへの子は好色ものといへり。

【燕】あからびくは明めくに同じ。あからべくの轉なり。あかひきといふも明べきなり。色妙子はいろたへのこにて紅もて扮裝したる皃なるべきか。

あきがしは　うるわ川萬十一　うるは川萬十一

萬葉十一に秋柏潤和川(あきかしはうるはがは)とも朝柏潤八河とも續けたり。「秋柏潤和川邊のしぬのめの人にしねへば君にたへなく」『朝柏潤八川邊のしぬのめの忍びてぬれば夢に見えけり』あきがしはと訓む說と、あさかしはと區別して訓む說とあり。あきと訓む中にも秋の義とするもの、明りの義とするもの、商の義とするものあり。諸說區々にして明ならず。唯秋日の紅葉したる柏の色の美はしと云ふ心より、川の名のうるはに掛けたるにあらざるか。

【代】秋の柏は夜霧朝露にぬるる意に潤和川とつゞく。飛彈の益田郡秋秀(阿佐比久)この郷の名に秋をあさとよめる例あれば、今の秋柏をも下の朝柏と同じくもよむべきか。

【考】秋も朝も借字にて商柏を賣るとかゝれり。昔の賣には鄉を必ず用ふれば商へる柏は常に多かりなむ。故に

賣るとつゞけたりと見ゆ。

【摘】秋柏の秋は正字にて朝柏の朝は假字なり。朝は明の意にて、あきと訓むはもとよりなり。ほし柏は乾し用つるものなれば、賣りもて歩くも專ら此時也。因て秋柏うるとは續けたるなり。

【尾】秋色つきし柏なり。秋の柏の東雲の潤色うつくし。

【解】秋は借字にて明柏なるべし。明りとは淸淨なるをいひ、あからは荒木田の說の如く淸くて明らかなる意なれば淸淨柏といふに同じ。うるわ、うるはは共にいかがはし、こはうるひの誤ならむか。

【冠】あき柏は明柏なり豐の明の時用ゐる柏なる故におかりかしはといふなり。あき柏は大淸柏なり。潤きかしはをいふ。何れもうるはしきものなれば美葉とかけたり。

秋　風　の　　山吹の瀨萬九　吹上古五　千江の浦萬五

秋風の野といはず山といはず吹き荒ぶより山吹の瀨（山城國宇治）又は吹上濱（紀伊）にかけたり。千江の浦（石見）にも掛けたるは吹くといふ語を省きたる格か。或は風のことを古語にちともいへばそれを匂はせたるか。

◇『秋風の山吹の瀨のとよむなべ天雲かけり雁渡るかも』『秋風の吹上にたてる白菊は花かあらぬか浪のよするか』『秋風の千江の浦みの木積なす心はよりぬ後は知らねど』

【管】風は常に吹けども、秋風は木毎に當りて吹くものなれば、秋風の千枝とは續けたり。近江の名所なり。

【代】萬葉十一に冷風之千江之浦廻云々。冷風とおける意知り難し。若し千江を千枝になして秋風は木々に觸れ間ゆればかくいへるか。

【服】秋風を待ち得といふ語を千江の浦にいひかけたり云々。蓋しまの言を上略せるなり。その上略の例はうま酒をみわといふは釀みのかを略せるにて、はしつまといふは委しまのくを略し、ちまたは道面にてみを略せると同じことなるべし。板本に秋風之とあるは秋風乎の誤なるべし。或人の考に風なはやちなどもいへれば、知は風の名にて秋風のちと受けたるかといへれど、風を始めよりちといひ出る例なし。はやちといふは風のはやりはやるをはやつといふべき理なり。

【解】大神景井云々。これはちの一言にかゝる枕言葉なるべし。ちは物の用をいふことなるべし。これに當る字發起などの字や近からむといへり。

【石】千江と續けし義いかにとも知りがたし。ちの一聲にわたして滿ち通ふといふ義か。ちは滿るの實、通ふの義ある聲なり。

あきゝの　ふたごもり紀

仁德紀に見えていやふたごもりと續けたり。女の歌なれば厨庖に用ふる秋葱（蔬菜）を喩りてその莖が一の皮に包まれたるを二人同棲の比喩となしたり。

【紹】葱の子の二つづゝ皮ごもりしていや生りなるを見て、常には斯くさまに副ひ居りしをと、この物をみるにうたてさのいや增すとなり。

【通】葱は二莖とも一葉の如く皮に包まれたるを、異母兄弟にして夫婦となる故に双納りと云へり。

秋霧の　立ち出で古八　たたまく惜しき新四　立野の駒續七　はるゝ時なく古十二　おぼ

つかなさを風雅九　籬の島の隔てゆゑ新續古五

霧の立ち籠むるときは咫尺を分かず心ふさぐものなれば晴るゝ時なくと續け、又おぼつかなさを喩へ、又その生ずるを立つといふより立ち出でし、又名の立つ意など人事にうつし、又轉義して立野と云ふ武藏の地名にも冠らせたり。又立つ霧は垣の如く見ゆるより霧のまがきといふ成語を生じ、それより陸前の籬(まがき)の島にも冠らせたり。古今に『秋霧のはるゝ時なき心にはたちゐの空もおもほえなくに』『秋霧のともに立ちいでて別れなば晴れぬ思ひにこひやわたらむ』後撰に『秋霧の立野の駒をひくときは心にのりて君ぞこひしき』風雅集に『旅衣はるかに立てば秋霧のおぼつかなさをいかに眺めむ』新續古今に『秋霧のまがきの島のへだてゆゑそことも見えぬちかの鹽釜』

【證】古今『秋霧のはるゝ時なき心には』云々これは秋霧の晴るゝときまでかけて、時なきにはかからず、霧は野山に立ふさがりても晴てはあらぬなり。又立野云々和名鈔に都筑郡に立野(たちの)といふ郷見ゆ。そこなるべし。さては秋霧のたち野とよむべきを普通へばたつ野とよむか。

秋　草　の　結　びし　紐萬八

萬葉に『神さぶと否にはあらず秋草のむすびし紐を解かば悲しも』の如く結びし紐と續けたり。こは古草結といふ契をかくる習俗ありて、それを指していへるか。片田舍にては今も子供は車前草(おほばこ)の穗などをぬき草結の遊をなせり。萬葉の歌も子供の時契の遊びをなししことを指していへるが如し。

【服】秋の草の美しくむすぼほれたるに喩へていへり。

【解】古草結といひて草を結び契をかくるいはひ事のありしから、結びといはんとて、秋草のといへるなり。さ

てそは秋草に限りたるにはあらねど、語の調べの爲にいへるのみ。

あきつ神　吾大君萬六

我大君にかく。あきつは現つの意にて、天皇は現に生きておはします神なれば、八隅しし吾大君高ひかる日の御子と同じく稱詞として用ひたり。

【續考】明（あき）は借字にて顯の意なり。天皇は卽ち現なる神にてませば、宣命にも顯神と申し、萬葉にも現神吾大王又大王は神にしませばともよめり。遠つ神とは常の人には靈にて遠々ます神となり。

【服】明（あきら）けき神てふ語かともいふべけれど、さる語の例未だ考へよせず、これはあきつ洲の神てふ語と心得べし

あきつ島　やまと萬一、十一・十三、二十　紀

磯城島の倭と同じく都の名を國名に掛けたるなるべし。蜻蛉島は大和の葛城郡室の古名にて昔孝安天皇の都せさせられし地なり。

【傳】秋津島倭と續けいふ。倭は京をさしていへるにて、本は秋つ島の京といはんが如し。さればあきつ島は京の名をいへるにて國名にはあらず。

【解】こは神武天皇の詔より起れる名なり。さて孝安天皇の百餘年久しく敷きまし・京師の名なるから遂に大和一國の名となり、なほ天下の總名ともなれること、卽倭といふ名のもと一國より出でて、天下の總名となれるが如し。

あきつばの　袖ふる妹萬三

袖と續けたり。蜻蛉を古くはあきつといへばその羽の如く薄く涼しき夏衣などを喩へていふなるべし。◇『秋つ羽の袖ふる妹を玉くしげおきに思ふを見給へわ君』

【側】あきつばはとんぼうの羽なり。嬋娟たる乙女などのしなやかなる袖のけしきによそふるなり。

【服】あきつばは秋葉にて紅葉をいふ。紅のこと〻取るべし。

【比】秋津葉に染めたるうるはしき衣の袖をいへる意ときこえたり。秋の木の葉のもみぢたるさまにうるはしく染めたる衣をいふ。

秋の田の　ほに古十一　いね古十五、後九　かりそめぶし後十二　因幡の山玉吟

古今十一には『ほにこそ人を』とあり。田面に抽き出でたる穗といふ詞より同音異義語なるあらはにといふ意の副詞に續けたり。同書十五及後撰九にいねてふと連ねたり。稻の音を往ねの義に轉ぜしめたるなり。又後撰十二にはかりそめぶしと續けたり。秋田を刈るといふより苟且臥しと轉用せるなり。玉吟集には因幡の山に冠らせたり。『秋の田のいねてふこともかけなくに何をうしとか人のかるらむ』『秋の田のかりそめぶしもしてけるかいたづらいねを何につままし』『秋の田のほにこそ人をこひざらめなどか心に忘れしもせむ』

秋の田を　かりほ萬十

田を刈るといふより假るの音にうつし假庵に掛けたり。假庵とは、旅人或は田守などが暫し宿る爲めに小屋掛の如き假屋を作るをいふ。

【服】旅はすべて都を歩行くなれば山に臥し野に臥すを即いほりするといふなり。それは假の庵なれば假庵とい

ひて田を刈るてふ語に言ひかけて續けたり。◇「秋の田をかりいほ作り庵してあるらむ君をみむよしも哉」

あきのはの　匂に照れる萬十九

秋の紅葉の色のかゞやくほど立派にと比したるなり。にほひは古くは色容の文もさしていへり。

【解】こは秋の紅葉の如く紅顔身の壯といふ意につゞけたり。

秋の水　隅田川原縣居

縣居翁集に秋の水隅田川原と續けたり。水の澄むといふより武藏の隅田川へ懸けたり。

秋の夜の　長き思古四

古今集四に長き思と續けたり。秋の夜の長きといひかけたり。◇「きりぎりすいたくな鳴きそ秋の夜の長き思は我ぞまされる」こゝは有心の序の體なり。

秋萩の　しなび萬十五　花野萬十　うつる古十五

萬葉にはしなびてあらむと續け、又花野のすゝきと連ね、古今には移りも行くかと見えたり。花の色變りゆくも散り落つるをも移るといへば、心の續なくして變るに比し、又花の露などにしなえ撓む様を佳人の婀娜なるに喩へ、又秋の野の飾と見るは桔梗、萱、女郎花等種々あれど殊に萩を賞するより秋萩の花といふ續けにて花野といふ地名に冠らせたり。なほ靄の靡と延せるに似たり。◇「吹きまよふ野風をさむみ秋萩のうつりもゆくか人の心の」「いさゝめに今も見がほし秋萩のしなびてあらむ妹が姿を」「秋萩の花野のすゝき穂には出でず我が戀ひわたるこもりづまはも」

【眼】花野の薄と續けしは薄は秋の千種の花に交りて有るものなれば、唯花野薄といふべきを秋萩のと置けるは秋の野の花は專らは萩が美しければ取出でたるにて外に深き意はなし。

秋山のしたべる妹萬二　したび萬十

萬葉にしたべる妹又したびが下にと續けたり。したびは下映の義ならむか。滿山紅葉の錦を飾りて林樹の下日ら紅に映ずるを紅顏の乙女に比したるならん。但したべるは俗言のやうに聞え、したぶると訓じたき心地す。◇萬葉卷二柿本人麿の長歌に『秋山のしたべる妹、なよ竹のとをよる子らは』云々『あき山のしたびが下に鳴く鳥の聲だに聞かばなにか嘆かむ』

【代】したべるはしなへるなり。た°と°なとは語音相通なり。

【考】人麿が采女の紅顏を秋山の紅葉に譬へたるにて、したべるはしなぶるてふ語にて、秋の葉は萎び落んする頃に、もみづるもの故にしたべるといひて色なること、せしなり。或說にしたべるはしなへるなり。た°と°なと通へり云々。こはいとあら〲しく見ていへるなり。

【摘】したびとは下染のそを省きてみ°を°びに通はしめたれば濁るなり。

【傳】三十四卷にしたびは諸木の變紅したる秋山の色をいふ。此言の本の意は朝備（あしび）といふことにて秋山の色の赤葉ににほへるが、赤根さす朝日の天の如くなる由なり。

【補】記傳の說はさる意と聞こえたり。唯朝びといへるはいかが。

【石】下べるはしなぶと冠辭考にいへれど、したは葉の義にて、秋山の露けき形勢の、もの慕ふ妹のしをれたる姿

に似たりと比して慕振といふ義なるを、ふりをびと約めてそのびをべに轉じてしたぺる妹といへり。ぺはひえの約にて慕ひ得たる妹といふ義なり。

【證】萬十三に秋山の色なつかしきとつゞけたり。

【異】したぶはしなぶに同じ。しなぶは丹靡(しなぶ)なり。赤くなることなり。又云ふ丹照にてさにつらひなるべし。

芥火の　飽く拾十二

拾遺及古今六帖に『ほのかにも人をみしまの芥火のあくとや人のおとづれもせぬ』と見えて序歌の第三句にすゑ芥火の飽くと頭音反覆の法によりて續けたり。芥火は塵芥をもやす火をいふ。

【解】芥火とは稻葉草根などを刈積みて燒きて灰となしその灰を陸田の培養にするなり。畑かたに置排けしなり。

あくらの濱　飽く　末が花

千蔭の末か花にあくら濱あくと同音を兼ねたり。飽等の濱は紀伊の田倉崎のほとりにあり。萬葉にも木の國のあくらの濱の忘貝云々とよめり。

あけごろも　明けなば後十五

後撰に『ぬば玉のこよひばかりはあけ衣あけなば人をよそにこそ見め』とあり。古くは朱をあけといふよりあけなばと同音を重ねて枕となしたり。あけ衣即ち朱衣は五位の朝服なり。藏人の六位は麴塵とてみどりの衣を着け五位に進めば朱衣を着るを得れども殿上をさがる習なりしより、その境遇を詠みたりしものならむ。

【解】朱衣は淺深ともに五位の服色なり。禁色の緋衣はうへのきぬにあらず云々。

朝かがみ　向の宮　鶯のゆふしで

六人部是香の鶯の夫傍草に朝かがみ向の宮とあり。朝起き出でては鏡に向ひ姿をつくろふものなれば斯く續けたり。向の宮は山城向日町にあり。六人部氏世々その祠官たり。

あさ霞　ほのかに萬十二　八重山こえて萬十　春日の暮萬十　かび屋が下萬十　辰の鼓蓬

霞の立ち罩むるときはさやかに見えぬものなれば、ほのかにと喩へていふ。八重山と續けたるは霞は幾重にも立ち重なるものなれば幾重にも立つ八重山と轉じたるなり。春日の暮に冠らせたることは或は霞立春日とありしを書違へたるにやと覺ゆ。もし然らずば霞の張るなどの縁語より轉じたるか。次にかびと續けたるはその義明かならず。かひやは魚を捕る爲めにふしづけなどを設け、これを見張る人のゐるところか、或は鹿猪などを防ぐ爲めに山田の畔に設くる小屋をいふか。いづれにても賤が假庵などより幽に立ち上る煙の打ち靡く樣は朝の霞に似たれば假喩にとりなしたるか。◇『朝霞鹿火屋が下に鳴く蛙聲だに聞かば我戀ひめやも』『朝霞香火屋が下に鳴く蛙しぬびつゝありと告げむ子もがも』齋藤彥麿が蓬壺集に辰の鼓と續けたるは霞の立つといふより辰の刻に轉じたるなり。

【貞】かびやとは田舍に魚とるとてすることなり。川若しくは江などに簀といふものを立て廻して口を一つあけて其内に柴の枝をどろなどを取置きたれば、あたゝまりにつれて魚の集るをとるなり。鳥など入りぬれば魚の驚きて失すればその上に高く屋を作り蔽ひて、み守とて人を居へて鳥をも追はせ、又食物をうちまきなどしてこの魚を飼つけさすれば、この屋をかひ屋とはいふ。朝霞は春のものには限らず。

【仙】かひやのかひといふ假名の詞にあかき火といふ心こもりたれば、このかひをいひ出でん爲めに朝霞とおけるなり。朝霞には日の色の赤く見ゆる故なり。

【考】朝霞のかをるといふ義なるを略きてかの一言に云ひかけしなり。古は雲、霞、煙、霧などの登るをかをるといひつればなり。鹿火屋は二義あり。一は深き山里にては猪鹿を追ふべき假庵に賤が入り居て引板を鳴し聲をも立て且夜もすがら樹を燒き草などをくゆらするに、人ある事を知りて獸の田によりて來ぬなり。又引板は水に構り火をも徒にくゆらせ置きて、人有りげに見する田所もあり。斯くてとり／＼に火を置くなれば鹿火屋と書けるを正しとすべし。一は蚊火屋と思へど備前の方によるべく覺ゆ。

【摘】かびやとは猪鹿の田荒すを防がむ料に、假庵作りて夜もすがら蓬からなどを燻らせ引鳴ならして守るなり。夜もすがら燻ゆれば夜あけても其遺はうち霞みて見ゆるからに朝かすむとは冠らせたるなり。

【解】朝霞霧あひといふ意なるをきらひはかひと約まればかく續けたるならむ云々。鹿火屋の事冠辭考の說は極めて大非なり。仙覺が註釋に魚捕らむとて江の瀬川の岸などに作りかけたる庵をいふといへる叶ひて聞ゆ。即水の下にふしづけなどいふものをして魚を寄ひつけむ爲めに米などを蒔けば魚集るなり。さて飼屋といふ。委しきは袖中抄に奥儀抄を引きていへる所を見るべし。

【眼】春日の暮と續けたるは春は朝專ら霞立つもの故、春と云はむとて冠らせたるなり。

【石】日光くもりて不貫徹といふ義を蚊遣鹿火等の名に轉じて續けたるなり。

【黑】春は朝深く霞の棚曳なれば朝霞と續けたり。かびやは氣ふりの約なり。かをりとかほりとは異なり。かを

りほ氣ぶりなり。かびはけぶりなり。神樂歌に『いそらがさきにかほりあふ』とあるを此には引くべし。靄の玉ぐしにかびやがもとよめるぞ善き。

あさがほの　ほには開き出でぬ萬十四

萬にいふあさがほは今の朝顔ならで槿花か、或は大伴憶良の七草の歌によめるが如き桔梗をいふか。明ならず。ほとは人目につくばかりあらはにといふ義なれば、ここに比喩として用ひたるなり。ほには咲きまでにかかる◇

『言に出でていはばゆゆしみ朝顔のほには咲き出ぬこひもするかも』

【解】槿花は著く咲き出づるもの故秀の咲くといひ續けたり。

【評】朝顔は朝夙く咲くの謂にはあらざるべし。他花と違ひ萎むことの疾きをいふなり。

朝髮の　思亂れて萬四

寢起きて未だ梳らざる間の髮の如く心のとり亂れたるに比したるなり。

淺香山　淺く菅根集

近世長歌菅根集に淺香山淺くと同音を重ねて續けたり。あさか山は安積山にて磐城國にあり。

朝霧の　おほに萬四　ほのかに萬十　思ひ惑ひ萬十三　亂るゝ心萬十三　八重山越えて萬十　黄幡の神社延喜式　立ちにし日より續拾九

朝霧の深く籠すときは少し隔りたる所は茫として明かならず。よりて萬葉の長歌には大凡の意にておほにと續け又ほのかにとも連ね、或は思ひ惑ひてとも思ひ亂るとも喩へたり。延喜式に黄幡神社と續けたるは霧の淺き濃き

といふことといふ一言へかけて轉義となしたるなるべし。萬葉十及續拾遺に八重山と續けたるは朝霧の八重に立つの義にて連ね、續拾遺には霧の立つを人の旅立つにかけたり。◇萬四に『朝霧のおほにあひ見し人ゆゑに命死ぬべく戀わたるかも』萬葉十に『朝霧の八重山こえて、呼子鳥鳴きや汝が來るやどもあらなくに』續拾遺に『秋風の寒くしなれば朝霧のやへ山こえて雁も來にけり』續拾遺に『あさぎりの立ちにし日より旅衣やゝ肌さむく雁も鳴くなり』

【詔】黄幡に續けたるは朝立つ霧の時方の靡きを小幡と見なしていふなり。萬葉に豐旗と云ふは大幡の見立てなり。雲霧の靡き立つその形の大小に就きていふのみ。

あさぐつの　あさましき

篤の木綿垂に淺沓のあさましきと同音を重ねて調となす。淺沓は古裝束着用の時常に用ふる沓にて桐をはりて作り。外を漆にて塗り内に絹布又紙を貼りたるもの

朝ごほり　さけず拾四　さくさく能宣　さくる間も拾十二

氷の融くといふより心のうち釋けぬことに通せ、又これを同音異義語の狹く／＼に轉じ用ひたり。◇『霜の上にふる初雪の朝氷とけずも物をおもふ頃かな』『朝氷とく／＼けふは暮ななむ空にものもふ身をば任せて』『朝氷とくる間もなき君によりなどてそほつる袂なるらむ』

朝霜の　消なば萬二、萬十一　消易き命萬七　起き萬七　みけの棹橋景行紀

霜露の消易きを果敢なき人生に喩ふることは世界いづれの國に於ても古くより行はれたれば、こゝにも相化した

ろなり。又同音の生ずるを避くといへば同音異義語の迅くに轉じて連ぬ。紀に見えたる阿佐志毛能御木(みけ)とあるみけ。は筑後の地名にて今は三毛郡某といふ。みの一言を隔ててけと續けたりと私記に見えたり。或は朝霜のおける眼前の光景を言へるにあらざるか。或はあさしもといふ地名ありて石上布留などと同じ續にあらざるか。◇『阿佐志毛のみけのさをばし前つぎみい渡らすもみけのさをばし』

あさち原　つばらつばらに萬三　小野に萬十一、十二

あさちとは淺茅とかきて小さき草をいふ。古言には詳かといふことをつばらといへり。音の類似によりて連ねたり。又野に一面に茅の生ふるものなるより小野に冠らせたり。淺とにおせと同義にて細く小さきをいふならむ。淺茅の穗を茅花といふ。白くして穗狀をなす。兒女のままごとになすもの。◇『淺茅原つばら〳〵にものもへば故里しおもほゆるかも』

【石】淺茅が穗をつばなといへば働かせて具(つば)ら〳〵と續けしなり。

【黑】あさちはらは明清茅原にて茅原は繁原なり。

朝づく日　向の山萬七　向ふ黃楊櫛萬十一

人起くればまづ朝日に向ひ、婦女は櫛笥に向ふものなれば櫛とも續けたり。朝日の方より此方へ向ひ來るといふは近き流きか。づくは名詞につきて動詞を作成する語尾、もと附くの言よりいで、その方に成るといふ義に轉ぜり。夕づく日のづくに同じ。黃楊は常綠の灌木、質高堅くして櫛又枕その他器物に作る。◇『朝づく日向の山に月立てる見ゆ遠妻をもたらん人し見つつ忍ばむ』『朝づく日向ふ黃楊櫛ふりぬれど何しか君が見るに飽かざらむ』

【宣】朝づく日はただ朝日なり。つくはみもろつく三輪山などよめるつくの字の心なり。

【考】朝日影は此方へ向ひ來るものなれば向ふといはんとて冠せたるなり。紀に日向國の名とせしも然かなり。日出づる方を東てふも此なり。さて朝の方によりたる日を朝づく日といへること夕陽日秋附きてなどいふ類なり。櫛は匣を開て朝にまづ向ひとるものなれば向ふと續けたり。こは女の歌なれば殊に櫛をいふことうべなりけり。

【解】旭の山端出るときは直ちに打向はるるものなればかくつづけたるなり。向ふつげぐしとは櫛は頭に向ひ刺すものなればいへるなり。

【石】朝づく日は朝に付日といふ義にて曉より己の時までの日をいふ。夕づく日となかへて言へるを思ふべし。朝日山に出づれば人各相對ひて拜むは古の習なり。よりて向ひといふことの枕詞に朝づく日といへり。女人各が業に向ふが故に向ひと續けしなり。向ふつげくしと續けたるも頓て女のすべき業に向ふなり。

朝づく夜　さやかに萬一

朝月夜をあさづくよと訓む。在明の月の朝方まで殘れる時をいふ。これはの如くと比したるなり。

【石】こは在明月夜にていとさやかなるものなればさやかに見ればと續けたり。

朝露の　消易き命萬九、消なば萬十三　我身萬十一　命萬十二　置きて古八、古十二、六帖

起きて萬、古二　おくての山田古十九　けさは起きゐむ後撰十一

霜と同じく消易きものなれば、消え易き命とか、消なば消ぬべくとか、或は消易き我身とか、單に命とも置きと

も比していへり。冠辭考及枕詞解に例歌あまた擧げたり。古今集には置くといふ音のみにかけて人を殘しおきての意にかけ、或は起きて別れしとか、或は晩熟の稻をおく手といへば晩手の山田とさへ巧にかけたり。◎「朝露のおくての山田かりそめにうき世の中を思ひぬるかな」「かにかくに物は思はず朝露の吾身一つは君がまに〳〵」

朝　鳥　の　ゆきかはす君萬二　朝立ちしつゝ萬九　ねのみ泣きつゝ萬三

鳥は早曉塒より飛び出でて啼きもし立ち去りもするより、これを人事に喩へて朝立しとも往來す君とも哭のみ泣くとも連ねたり。

【考】萬二の朝鳥乃往來爲はゆきかよひしとよむべし。

【講】これは詩經の晨風をよめるならむ。和名あさなきどりといふ、鶻(はいたか)をいふと思はる。

朝　日　さ　し　まぎらはし萬十四　そがひに見ゆる萬十七

萬葉十四にまぎらはしと續け、十七にそがひに見ゆると連ねたるを枕詞解にあげたり。これは枕詞にあらず。

朝　日　さ　す　春日萬十

萬葉十に春日の山にとも、春日の小野とも續けたるを枕詞解にあげたれど、これは枕詞にあらず。

朝　日　て　る　佐太乃岡邊萬二

萬葉二に佐太乃岡邊と續きたるあり。清水氏云、枕詞にてさだといふにかかれり。さだは時といふが如しと云々。されどこれは枕詞にあらず。

朝　日　な　す　まぐはしも萬十三

朝日の如くと比したり。まぐはしは物のとゝのひたるを褒めたる詞、まは美稱。

【續考】なすは如くといふに同じ。くはしは物を褒めたる辭、微妙麗などの字をも訓めり。目細しは目の見る所を以ていふ。又目は借字にて眞細しか。

【解】この目細は目もうるはしく思はるゝ意。朝日夕日のさしかがやくはよにすがすがしく、目も心もすみわたりてうるはしきものなればかく續けたり。

朝日の　ゑみ榮え 記

朝日の如く笑み榮えてと續けたり。

【石】こはいと早き枕にて沼河姫の御歌に見えたり。萬葉には見えず。

朝びらき　漕ぎでて 萬九、十五　漕ぎにし 萬三　入江こぐなる 萬十八

萬葉に漕ぐと續けたり。延喜式に遣唐使開舶居祭ともあり。湊に泊せし船の朝に出てゆくを朝開きといふよりかく續けたるなり。但しこれは朝湊出の舟の有樣をいふにて枕詞にあらざるか。萬三の『世の中を何に喩へむ朝びらき漕ぎにし船のあとなきが如』拾遺集に『朝ぼらけ漕ぎゆく』と續けたるは、萬葉三の歌を改めたるなるべし。

【考】朝に湊を舟出するを朝開きと云へり。萬葉十七家持の歌に珠洲の海に朝開きして漕ぎ來れば云々とて證すべし。

【摘】用語にて冠辭にあらず。

【解】泊てにし舟の朝明早く、舟壺の御前掃き清めて、その日の遊燕からしむる由祈きつついはひ出づるなり。(下ら。のほぼにて、目掃きしてなり。

【石】(上略)中古には朝ぼらけといひて曉の事とせり。そは枕にあらず。

【參】仙覺が説にあさぼらけは朝明の語の轉じたるなりといへど、萬葉集に皆船の事にのみよめれば、別の辭なりといへり。

朝はぶり　波の音萬六

萬葉に波と續けたり。古は吹くといふことをふりといひしなるべし。波の狀勢をあげて修飾の句となしたるなり。

【石】朝風にはふり來る浪の形勢にて、はふるは開延る振といふ義なり。

淺みどり　糸よりかけて古一　野邊のかすみ拾一、六帖

これは淺緑色の糸とか淺緑色の野邊といふ形容句を辭を略し、五音に切めて續けたるなり。三代集枕詞例に名を枕におきて、用語へ續くる例としてあげたり。◇『淺緑糸よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か』『淺緑野邊のかすみは包めどもこぼれて匂ふ春の御か』

あさもよし　木人萬一　木上宮萬二　木道に萬四　木方ゆく萬九　紀の川上明玉集　きのふ永正

御到着

この枕詞萬葉に朝毛吉、朝裳吉、麻裳吉と書かれ古より諸說紛々たれども、契沖のいへるが如く古紀伊國よりは善き麻裳を出したるより、玉藻よし讃岐の類と同じく、紀國に掛けしを始に、同音をもてる城上宮にもかけ、後

世にはきのふとさへ連ぬるに至りたるなり。この枕詞、中世にはあさもよいと訓めり、あさもよしを正しとす。あさものもは裳のことにて腰にはくものなり。◇『あさもよし木人乏しも待乳山ゆきくと見らむ木人ともしも』

『あさもよし紀へゆく君が眞土山こゆらむ今日ぞ雨なふりそね』

【仙】朝にもえてよき木とつゞく。

【栄】雪朝などは爐邊を離れず諸々の獸の形を炭にて作り紅火となしてあたること和漢の世俗なり。然るに吉き薪をたくこと最上なり。この故に朝燃を吉き木といふ詞なりと先達の常の儀なり云々。

【契】武部石川卿說、古俗語、朝炊飯謂二之安佐母與比一也、紀薪也云々。然れば朝に燃す木といふ心にていひつづけたるなり。或說に朝もよひは朝催なり。朝に飯炊くとてまづ薪々催す心なりと云々されど前說を信用すべきか。

【管】今案ずるにあさもとは麻布の裳なり。よいはよきなり。麻裳よし衣に着んといふ心にかく續けたると聞えたるにや。

【匠】萬葉四卷に『麻裳吉木道爾入立眞土山』と續けてよめるを正しき文字として、心は麻衣のよき紀の國といふ心に續けたるなるべし。昔は紀の國よりよき麻衣を出せるなるべし。然れば王昭君讀歌とつゞくるが如く、名物を以て呼んで木といふ字に付ておける詞にはあらぬなり。城上宮におけるは大作のみつとは云はじ、石上ふるとも市になどつゞけたる如く、木と城と詞の通へば移し來て借ておけるなり。

【冠】石川卿の說に云々この說道理至極にも聞えず。文昌魏文の徒に聞ゆれば却りて正說なるべし、然れども吉

の字よしとよむべし云々。

【考】こは淺葱てふ色のことなるを、上に淺よといひて葱と續けしならむか。古、葱の類を特に愛でて神武の大御歌を始としてその他にも見ゆ。さてもとしは唯助辭のみ。よは呼び出す辭なり。

式說に集中に『麻衣着れば懷し木の國の妹背の山に麻蒔け吾妹と詠める』と、又眞間の娘子をよめる歌に、ひたさ麻を裳には織り着てなど有るをもて、紀國より古き麻裳を出せし故によめりといへど、總て國つ物を以て冠辭とせしは無し云々。

【摘】麻裳とかけるぞ正字にて、裳は着るものなれば、きの一字に冠らせたるなり。淺葱のことといへるあり。延喜縫殿式に淺黄とあるは黃色のうすきことその染草をもて知るべし。

【信】これは麻もて作れる裳にて萬葉九『ひたさを裳にはおり着て』とある是なり。よは呼かけたる言、しは助語にて、麻裳よ着といふ言にかかれる發語なり。

【冠】宮地春樹が說に吉は助辭にて麻裳を着と續けたる枕詞なるべしといへるよろし。

【高燈】もよしの三字は脚結にて麻を着るとかけたるなるべし。麻を衣に織て着るなり。

【新】朝霧によせて朝きと一言かけて云ふなるべし。名に負ふ木の國朝霧深ければいともふさはしかりけり。

【選】紀人は麻裳を着る故にいふか、そはともあれ麻裳よそれ着と掛れるなり。

蘆　垣　の

古りぬる里萬六　思亂れて萬九　外萬十七　間近けれども古今一　ひまなく念

吉野續後撰　垣内の里　よそぢ藤垣內集

芦垣は蘆を束ねたる粗末なる垣にて假初に設くるものなれば萬葉には難波の國は芦垣の古りぬる里と續け、林生きの入り亂れたれば、思ひ亂れてと人事に比し、又垣は内外の隔に設くるもの故ほかとも續け、又垣には多少の隙間あるものなれば、古今集には間近けれどもと連ね、金葉にはひまなくと續けたり。この三の續は垣といふ詞を主要として芦は唯添へたるなり。『芦垣のひまなくかかる蜘のいのものむつかしくしげる我戀』又續後撰に吉野に冠せしめたるは蘆葦の意によりてあしといふよりよしといふに連ね、轉義によりて地名にうつしたるなり。『見てもなほ奥ぞゆかしき芦垣の吉野の山の花のさかりは』『藤垣内集には同音を反覆して垣内の里とつゞけ、又よそぢと年にかけたり。外の音より四十に轉じたるなり。

【考】難波之國は葦垣之古郷跡。こは昔は名高き都なりしも、頽くふるされては民の住處となりて、芦垣などして有りし習なれば、故里といはん料に冠らせたり。

【苑】芦垣の外とは蘆垣は穗ながら結びこむるものなれば、蘆垣のほといひて外と續けたり。

【解】蘆垣のふりにし里云々。これはひめ垣たか垣などのいかめしきと反對にて物ふりて見ゆるものなれば、ふりにしといはんとてかく云へるなり。思ひ亂れて云々。これは蘆垣は末の方わわけ亂れてあるものなれば、然かつゞけたり。外に云々。これは垣は内外の隔にするものにて自ら内外の稱あれば垣の外とつゞけたり。蘆垣のはといひて外と續けたりとの説は覺束なし。

【石】蘆垣の古りぬるに古里又は身のふりぬるを比したるなり。よそ外など續けしは隔る義なればなり。八ツ尾ふりこえと續けしはさやかならず。

【界】蘆垣の家居となりてふりぬといふなり。これは冠辭にはあらず。

蘆 が 散 る　難波萬二十

古、難波海は蘆が茂りたるところ、その白花の雪の如く散る實況をとりて冠らせたるなり。
【考】安康記に射出之矢如二蘆花散一とあるによるに、浪速の風に葦の穗花の降雪の如く散るを以てこの處に冠せしなるべし。
【石】これは實詞なり枕詞にあらず。
【冨】蘆がちるは散るにはあらず蘆が立(て)るるなり。

あ し か び の　足痛萬二

萬葉に葦若末乃足痛と續けたり。上をあしかびと訓む說とあしのうれのと訓む說とあり。神代紀に葦牙とあるによりて今あしかびと訓めり。下をあなやむともあしひくともあなへぐとも訓む說あり。あなへぐが古しとす、いづれにても同韻反覆として用ひたるなり。◇「吾聞きし耳によく似つ葦若末乃足痛わが兄(せ)つとめたぶべし」
【仙】葦かびは葦のつのぐみたるなり。あなへぐは足痛みて引くなり。
【考】葦芽は葦の若芽にて、そは即葦の苗なれば、蘆芽の葦苗てふ意にて、人の寒に轉じいひかけたるか。又は葦若末はあしなへと訓みて葦の若き葉末の靡きしなべるを寒にいひかけしにもや待らむ。
【燈】葦芽はさしくさとも、あしつつとも云ふか。ひは匕の字にてさじとよむ、弱は弱と同じくいとけなきをいふ故、老人小兒などをあしないといふ。

【琴】若芽とある本によらばアシカヒと訓むべし。葦の若芽は堅からずなよなよとしたるものゆゑ、足痛に寄せつらむ。又未は末の誤にもあるべし。そはアシノウレと讀むべし。云々

【攷】足痛は新撰字鏡に蹇足奈戸久馬とあり。

【解】葦若末之足と重ねたる樣にも聞ゆれど、なほさにはあらず。必痛といふへ懸れることなり。萬葉十に渚沙鳥あなやむとあるに同じ。

蘆鴨の　打ち群れて土佐日記

紀貫之の土佐を去るに臨み、別を惜む人々の群集せることを、みづから比喩としたるなり。蘆邊にすむ小さき鴨の如くといふ意なり。◇『をしと思ふ人や止まると蘆鴨の打むれてこそ我は來にけれ』

【琴】蘆鴨は蘆田鴨に同じ。今一種の小鴨に呼べり。頰に巴の紋あるものなり。

蘆田鶴の　たづくし萬四　思亂れて鳴古十一　尋ね古十七　村田の君鈴屋集

萬葉にあなたづたづしと語を隔てて續けたり。たつたづしとは覺束なき意なり。古今の尋ねもこれと同じく同音反覆によりて連ねたり。◇『草香江の入江にあさるあし田鶴のあなたづたづし友なしにして』。古今に『思ひ亂れて泣かぬ日はなし』と續けたるは鶴の鳴くといふを人の泣くに比したるなり。三代枕詞例には思ひ亂れてへかかると說きたるは誤なり。本居宣長の長歌には村田の君に冠らせたり。田鶴の群といふより民へうつしたり。

あしづつの　ひとへに後十

後撰にひとへもと續けたり。蘆の筒の中に極めて薄き紙樣のものあり。これをあしづつといふ。よりていふうか

とか一重などの意に續けたるなり。續貂には蘆つとのと出てたり。誤なるべし。◇『難波潟かりつむ蘆のあしつつのひとへも君を我や隔つる』

【栞】奥儀抄に蘆の節の内にうすやうの如き皮ありこれなり。顯昭說に蘆筒なり。漢書王莽傳、臣莽上與二陛下一有二葭莩之故一師古註に葭蘆也、莩者其筒裏白皮也。言其輕薄而附着也。故以爲レ喩。とあり。又葭莩之親とも見えたり

【貂】蘆つとのは蘆の葉もて作りたる苞苴の一重なるを、一方に思ふ心によせていふなり。

蘆 の 根 の　ねもころ萬七　夜の短くて後撰十二　わきても人に逢はむ後撰十

今いふ懇といふ語を古くはネモコロといへり。萬葉のは根といふも音を反覆して懇といふ語の頭の音に掛け、夜なるは蘆の根の節よといふより夜の短くてと續けたるなるべし。終なるは蘆の根の分れたるが又相合ふより人事に比したるなり。

◇『蘆の根のねもころもひて結びてし玉緒といへば人はとがめじ』『難波江にみつとはなしに蘆の根の夜の短くて明くるわびしさ』『深くのみ思ふ心は蘆の根のわきても人に逢はんとぞ思ふ』

【例】蘆の根のわきて深さに準へて分てもといふ詞に續けたり。

蘆 根 ば ふ　うきは拾十四　下にのみ拾十四

古語に泥の浮洲をうきといへり。蘆の根生ふ泥土といふより同音の憂きにかけ、又心のことをしたにといふ。よりて地の下といふより心の下にうつして用ひたり。◇『蘆根ばふうきは上こそつれなけれ下はえならず思ふ心を』

【例】下は底なり。蘆の根の下はふ如く、心の底に思沈むといふ義にて續け、又蘆根はへる沼といふ義を憂にう

つし續けたり。うきは沼の大なるものなり。

蘆原の　水穗國萬二、九、十二、十八

蘆原の水穗國と連ねたるところ多し。形容的の句にて枕詞とすべからず。

足引の　山田記　この片山紀　山の雫萬二　山邊萬三　山椿萬七　山橘萬七　山櫻花萬八　荒山中萬九　山片づきて萬十　山下萬十一　山澤人萬十四　山下水古十三　山郭公後撰四　山田のそほづ後十三　やつをの雉子六帖　病傳十　やまさこさひ六帖　山下風拾十三　山藍拾十七　岩根萬三　嵐萬三　深山萬六　尾上萬十九　野ゆき山ゆき萬十二　片山雉子萬十二　こなたかなた大鏡　葛城山拾十七　笛吹山夫木　耳なし山堀河百首　遠山櫻心敬百首

昔より多く用ひらるる枕詞にして語義につきては諸說區々なれども、その始めて見えたるは木梨輕皇子の歌にして『足曳の山田をつくり』とあるに徴し、山の裾の長く引き延えたる義にて、古くは山、若くは山に因めるもののみに冠らせしが、夙く萬葉の頃より山の換稱となりて、直ちに岩根とも木の間とも嵐とも續け、又後撰の頃よりは音の相似に從ひ、やまの音より病とも大和とも連ねたり。拾遺集以下には葛城山など固有名詞にも冠らするに至れり。◇『足日木の山の雫に妹まつと吾が立ちぬれぬ山の雫に』『あし檜木の荒山中に送りおきてかへらふ見れば心苦しも』『あしびきの山櫻花日並べてかく咲たらばいとも戀めやも』『あしびきの山下水のみがくれてたぎつ心をせきぞかねつる』『足引のやつをの雉子なきとよむ朝けの霞見れば悲しも』『あしびきの病はすともふみ通ふあ

とをも見ぬは苦しきものを』『あしびきの大和ことひの牛なればおも白くこそけふは引きけれ』『あしびきの岩根こごしみ菅の根をひけばかたみとしめのみぞ結ふ』『悪ごしに月さし入りて足引の嵐ふく夜は君をしぞおもふ』『あしびきの深山もさやに落たぎつ吉野の川の川のせの』『けふの爲と思ひてしばし足引の尾上の櫻かく咲きにけり』『玉鉾の道に出でたちあし引の野ゆき山ゆきひたす川云々』『足曳のかた山雉子立ゆかん君に後れてうつしけめやも』『あしびきのこなたかなたに道はあれど都へいざといふ人のなき』『あしびきの葛城山にゐる雲の立ちてもゐても君をこそ思へ』『あしひきの耳なし山に立つ鹿もいま戀すらし聞く人なしに』『足引の笛吹山の松風によろづ世の秋しらべこそすれ』

【私】山行には足を引きて歩するを以てなり。

【仙】山のやと云ふは高き義。まといふはまろむる義なり。山齋（あしび）といふ木は殊に榮へたる木なり。この木は背箕波の方に多かりけり。山をいひ出でむとする諷詞にあしひきと置けるなり。

【釆】天竺の一角仙人山路の悪しかりけるに足を傷ひて引しによりてなり。委しきは智度論十七を見よ。

【短】古き說に、三方沙彌、雪の日山道に迷ひて歌よみたることとあり。旅立つ日には吉日を撰ぶことなるに悪き日出行して難にあへり。されば悪日來といふ心とも云へり。又我邦の初は葦原生茂りて人住むべき地のなかりければその蘆を引きすててその跡に人も家居しけり。その捨てたる蘆の積りて山となりければ蘆引の山といふ。又天地剖判れてわが國未だ泥濕の乾かざりける程、人皆山によりて住みけり。然れば人跡の山に留りて見えける心にて、我邦をば足引の山遠國とは名づけたり。それよりあしひきの山とはいひそめたり。

【匠】顯註密勘を見るに定家卿の傳へ給へるは蘆引の說なりと見えたり。後撰十に大江朝綱のよめる『足引の病はすともふみかよふ跡をも見ぬは苦しきものを』の歌あり。この歌によりあしひきは足の氣即ち足の病のことならむ（節略）

【考】神代紀に足は醜山祇となりぬとあり醜山は借字にて繁木山てふ意なり。然ればあしびきのしびきは繁木の謂なり。さて山は樣々あれども木繁きをめづれば、すべて山の冠辭とせしならむ。且つその繁木の上のあてふ語には數多の說あり。その一には天の繁木山といふ意なるか。二には青繁木山の意なるか。三にはかの足より成りつるしぎ山なれば繁木山といふか。（後考）萬葉十四に於布之毛等このもと山の眞柴にし云々、こは生る繁木のこのもと山にて、木とは木だちをいふ。この生ふ繁木の山てふ言を以てあしびきの山といひて、冠辭とせしなり。しもとは繁木にてあしびきの繁木と同じければなり。

【譚】萬葉に足狹、足病とかけり。山の麓よりよぢ登るの意にて山といふに續くるか。

【緒】萬葉に足日木、足引と多く書く。又偶足檜木、足檜、惡水、蘆木など書いて彼の集には借字多けれども、又正字もあり。足日木とあるによれば足は借字にて朝の意にて、あさのさを同音にて志に通はすか。又あしたのたを略きたるにてもあるべし。記に曰く朝日之直刺國、夕日之日照國とある意にて、朝日刺木の山てふ詞を略きてあしひきの山といふか。或は麓の引きはへたる山の意にてもあるべし。

【某】一說に足繁木の義、本は山足に繁くて、しび、しひと通へりといへり。

【傳】三十九卷云、足を引きたる城の山といふ意なり。葛城とあるもその邑の地山上なるを以て、城といふ名

は負けられたるなり云々

【一言】いづれの山も麓を長く引くものなれば日本紀註にいへるが如し。

【枝】あは發語にて、しひきは繁木の意なり。元克按ずるに、麓をも山の足といへば麓の引延べてある山てふ意にて續けしならん。

【解】あしはいかしにて（いかの反あ）茂檜木之といふなるべし。茂とは茂穂、茂彌木生、また重日、嚴矛、伊加之御世などのいかにして、ここは檜の木の茂み榮えたるを褒めて茂檜木とはいへるならむ。かくて檜をば今世に檜之木とのみ呼べど、古はひきとぞいひけむ。つばきといへる例をも合せ思ふべし。山に續くは茂檜木の生ひ立ちたる山といふ意にいひかけたるなり。

【石】足引の山といふ義にて山の形勢なり。中古より岑、麓、谷、坂等につづくるは山よりうつれるなり。石龜と續けたるをも山よりうつれるなりといへるは非なり。石も龜も足引くものなれば、山と同じく足引を枕とせるなり。

【考證】あしひきのあは歎息の辭にてしひきは茂繁木なり。

【黒】神樂諸入綾云今生美樹の山なり云々。又大茂木の山か。攷ふべし。

あしびなす　榮えし君　萬七

あしびの如く榮えしと比したるなり。馬醉木は灌木にて高さ四五尺、初夏の頃壺の如く總狀花を着く。奈良の御蓋山につづける山にはこの木多し。俗にアセミともアセボともいふ。葉に毒ありて馬喰はず。この葉を灰汁にて煎出し野菜の害蟲を驅除するを得。この變種には花の丹色なるあり。丹つつじの如し。もと野生なれど今は盆栽

にも用ゆ。これを木瓜といふは誤なり。◇「あしびなす榮えし君が掘りし井の石井の水はのめどあかぬかも」

【考】花の照り匂ふ色とも蘭に似たるさまによめるを思へば木瓜にぞあるべき。故はそのもけは字音にて、ここの語ならず。東人のしとみといひて且つ馬の毒なりとするものぞこれなる。さてこれを馬の喰へば醉ひて足なへとなるべし。そのあしびともしとみともいふ語を考ふるに、病にしひたみあり。目にしただみあり。草に毒だみといふ。たみは病のことなり。さてそのたみとどみと音の通ふによるに、しどみは足たみのあを略き、あしびはあしだみのだを略けるなり。

【摘】あしびきは今云ふしとみなり、あせぼといふは誤なり。

【解】あしびは馬醉木の花、冠辭考は謬說なり。

蘆　穗　山　惡しかる咎萬十四

萬葉に蘆穗山惡しと頭音反覆法によりつづけたり。蘆穗山は常陸にあり、筑波嶺の西北に位せり。この山を讀に下野とせるは宜しからず。◇「筑波嶺のそがひに見ゆるあしほ山惡しかるとがもさね見えなくに」

飛　鳥　川　明日萬十一

あすか川のあすといふ音より明日に續けたり。頭音反覆によること石上枕詞例にいへるが如し。川は大和にあり淵瀨定まらぬを以て古來名高し。◇「あすか川明日も渡らむ石走の遠き心はおもほえぬかも」石上枕詞例に萬葉二の飛鳥川あすだに見むを擧げたれどそれは枕詞にあらず。

あたへゆく　をすての山萬七

萬葉七に『安太部去小爲手の山の眞木の葉も久しく見ねば苔おひにけり』とあり。安太部去はをすての山に懸るか。冠辭はあたべゆくとよみたれど、あたは紀伊の英多、をすては推手といふ紀伊の地名なるか。小爲手と推手とはをの假名異なれど、後世混用せし後に文字も改めたるもあるべし。江戸へゆく品川といはん類か、尙後考を俟つ。

【冠】安太部は魚簗をうち鵜を養ひなどするものの名なり。神武紀に阿太養鸕部始祖也云々とも。萬葉十一にも『安太人のやなうちわたす瀨をはやみ』とよめり。をすての山も前後の續によるに紀伊國なり。安太氏のものの通へはかく續けたり。

【燈】和名抄に紀伊名草郡誰戸とあり。安太部は是ならむか。さらば部を濁るべし。

【解】和名抄に紀伊國在田郡英多と見えてその英多へ行くといふなり。へは物へ行くなどいふへなり。

あたまもる　つくし萬六萬二十

ここにあたといへるは外敵をさす。筑紫には夙くより水城を築きなどして防人を派して守らしめたるより然か續けたり。

【續考】古は筑紫に防人を置きて異國の賊を守らせ給ひしによりてこの冠辭を置けり。

あぢさはふ　目には萬十二　目が欲る萬十一　目ごと萬二　妹が目萬六　夜晝萬九　女島戰足集

萬葉に味澤相と書けるにより鹿持氏はうまさはふと改訓したれど、眞淵の如くあぢさはふと讀むべきか。あぢは小鴨の類にて、頭は青綠にして黃赤を帶び翅は灰色背は灰白にして腹白く、俗にともえかもと云ふ。萬葉三に味村さわぎともある如く多く群れとぶものなれば、その多く居るといふより、群れの約なるめといふへ冠らせ、目

には飽けどもとも、目が欲る君とも、妹が目とも、目ごとも（見ることとも）とも續け、又味鳧の互に相寄るといふより、同音の夜晝いはずといふへ掛けたり。◇「朝戸やりを早くな開けそ味澤相目がほる君がこよひ來ませり」和田巖足の集には女鳥にかけたり。めの一音よりうつしたるなり。

【考】味鳧の多に群れわたる意なるを、その群の語を下へ廻して、且つむれの反めなれば、めを經めと續けたるなり。多とは多きてふ古語、經は經渡るをいへり。又その群を目といひかけしは既にいへる如くむれを約めたる語なれば、群る鳥どもにめと云ふぞ多き。雀、燕、しめ・鷗などなり。

又凡の鳥は日の間のみ飛びかふを味鳧は晝夜となく群經る故に夜晝いはずと喩ふ。

【解】味澤相はうまさはふと訓み味莱生の義なるべし。莱生は今俗に莱畠と云ふに同じ。目とかかるは群生といふ意なるべし。むらの切ま、はえの切へにて、そのまへを縮むればめとなれり、莱はあるが中にも群りて生殖するものなれば、かく續けたるならむ。……中略……宵晝を續けたること覺束なし。故、按に此はこの味澤相の下に目辭毛絶而烏玉之など、二句脱ちたるにやあらむ。

【石】夜晝いはずとはこの鳥の群れ來る形勢に比したるなり。

あぢのすむ　渚沙の入江萬十一、萬十四

萬葉十一及十四に渚沙の入江と連ねたり。渚沙の入江は今兵庫にあり。古は味鳧の多く栖みしよりかくは用ひたるべけれど、枕詞にはあらざるべし。契沖及鹿持は枕詞とせり。

あぢ群の　騷ぎ競ふ萬二十　去來者萬四　さをよる海萬七　さ渡る人巖足集

味鳧の群居して喧囂するより萬葉には人の騒ぎ競ふに比し、又去來者行けどと連ねたり。この去來者の三字を考にはいざとはと訓み、枕詞解にはさわぎと訓みたり。こは考の說正しかるべし。又この鳥の寄り集るといふよりとをよる海と連ねたり。和田職足の集にはさ渡る人と續けたり。

【仙】あぢむらは鳧なり。いざとは行けどとは、むら鳥の立羽音ざと聞ゆればいふ。

【考】人の群れ行くを味鳧の友誘ひて群れつつ飛行くに喩へたり。

【行】十緣海とは波の撓み寄り來る海といふ義なり。

梓弓

音に聞きつゝ萬二　引き萬十三　引津の野邊萬七　ひき豐國萬三　引手の山夫木　射るまさ
つま引く萬四、六帖　春萬十　遥に拾九　おして春雨古一　小鹽山夫木　射るまさ
がた躬恒集　入佐の山後七　入野風雅　入江草根集　磯邊の小松古十七　一志の
浦新勅　猪名野園草　居待月後花園院月次　田舍雪玉集　歸る後拾遺、金葉　伏見里
後拾遺　心強く元文當座　よらの山萬十四　末萬十二、十四　末野萬十一　周淮の珠
名萬九　鶴の命六帖　敦賀の山夫木　思はずに拾九　矢田の廣野玉葉　矢野の
神山續拾遺　八十の湊草根集　八幡老槐集　大和國鷗巢初集　八島の外雪玉集　彌
生實隆百首　矢蔭の里名寄　伊駒高根久老集　はらみの山山齋集

梓の木にて作れるを梓弓といふ。梓はあかめかしはとも、きささげといひ來りしが、白井博士によれば樺木科の植物にてみづめともよぐそみねばりともいひ、甲信地方に多しといふ。枕詞中最も多く續け方を異にせるは梓弓

に及ぶものなし。その緣語にて音に聞きつゝとも、引きてとも、筑前なる引津の野邊とも、引野のつゞらとも、引き豐國とも引手の山とも、又張ると同音なる春とも、春の彌生とも、轉じては遙々とも、或はおして春日とも、類音なる小鹽山とも續け、又射るといふより射る的方とも入佐の山とも入野とも入江とも、轉じては磯部の小松とも、磯部の山とも、磯間の浦とも、一志の浦ともいくさとも猪名野とも、居待月とも、田舍のとも連ね、又歸るとも、心强くとも、よらの山とも、末はとも、末野とも、周淮の珠名（人名）とも冠らせ、又その部分の弭末筈より鶴の命とも敦賀の山とも、思はずしてとも轉義に接し、又その關繫する矢と同音の詞なる矢田の廣野とも、八十の港とも、矢幡の神山とも、大和國とも、八島の外とも、八幡の峰とも、彌生とも、屋蔭の里とも連ね、又伏す、伏見などと續けたり。拾遺集の十六に「梓弓えやはとどめぬ春の形見に」とあるを、石上枕詞例には母胎にかかるとせり。但しこれは隔てて春へかくるならん。荒木田久老の集には伊駒高根に冠らせたり。射の一字よりうつしたるなり。山齋集にははらみの山と續けたり。これは弓腹といふことより轉じたるなり。

「梓弓音にききては言はんすべせんすべ知らに」萬二 「梓弓引きてゆるさずあらませばかかる戀には逢はざらましを」萬十三 『梓弓引津のべなるなのりその花摘むまでに逢はざらめやも』萬七 『梓弓ひき豐國の鏡山見ず久ならば戀しけむかも』萬三 『あづさ弓引手の山の時鳥雲を宿とやなして入りけむ』夫木 『梓弓爪引く夜のおとほとにも君か御幸をきくがうれしさ』萬四 『梓弓春山ちかく家居してつぎて聞くらむ鶯の聲』萬十 『梓弓はるかに見ゆる山の端をいかでか月のさして入るらむ』拾九 『梓弓おしてはる雨けふふりぬ明日さへふらば若菜つみてん』古一 『神無月はれみはれずみ梓弓小鹽の山はしぐれてぞ行く』夫木 『梓弓いる的方にみつしほの音あ

ひがたみ夜をこそ待て』躬恒集『あづさ弓入佐の山は秋霧のあたる毎にや色まさるらん』後七『梓弓入野の草の深ければ朝ゆく人の袖ぞつゆけき』風雅『更けにけり月のかけたる梓弓入江漕こすおきつ汐風』草根『梓弓礒部の小松誰が世にか萬代かねて種をまきけむ』古『梓弓礒間の浦に引く網の目にかけ乍ら逢はぬ戀かな』新後拾遺『あづさ弓一志の浦の春の月海人のたく繩夜もひくなり』新勅『ささ枕一夜やからん梓弓猪名野の原に狩し暮さば』岡草『梓弓居待月も出でにけり近きまもりの引分くるらん』後花園院御月次『うしや人誰に引かれて梓弓心づよくも我になびかぬ』元文當座『梓弓よらの山べのしげかくにいもろを立ててさねど掃ふも』萬十四『梓弓末野はら對に鳥狩する君が弓弦のたえんと思ふや』萬十一『あつさ弓鶴の命もかたらなむ君をたとへに人は引くとも』六帖『梓弓つるがの山を春こえて歸れる雁は今ぞつくなる』夫木『梓弓矢田の廣野の草しげみ分入る人や道惑ふらん』玉葉『あづさ弓八十湊の海人小舟をしてさざ波けさぞ霞める』草根集『梓弓矢野の神山春かけて霞は空にたなびきにけり』續拾遺『あづさ弓倭の國はおしなべて治まる道に春や來ぬらん』『梓弓八島の外もおしなべて治めしる世の道仰ぐらし』續拾遺『梓弓八幡の峯は秋立ちぬ年の半らもいるが如くに』老槐集『引とむる君もあれな梓弓彌生もけふに暮るる名殘を』百首『うらやましいる身ともがな梓弓伏見の里の花のまとゐに』後拾遺『闇までは入るとはすれど梓弓臥さではなぞや歸るなるらん』久安百首『梓弓おもはずにして入りにしをさもねたく引留めてぞ臥すべかりける』拾遺

【考】引豐國と續くるは、弓を引きたよむるてふ語を略き通はせてひきとよとは續けたるなり。

【槻】引く音といふを引豐國と續けたるなり。

【解】ひきとよは大原惠敝いへる如くが引響むといふ意なるべし。

【黒】ひきとよはひき撓むると心得べし。よらは射るの意なるべし。よの一言にいひかけたり。イをヨといふは東訛なり。

あぢかをし　智可の岬萬五

萬葉五の好去好來の長歌に見えて智可の岬へ列ねたり、阿庭可遠志とも阿遲可遠志ともあり。これは頭韻反覆の法によりて用ひたる枕詞と聞えたり。されど上の五言の義明かならず、智可の岬は筑前にあり。試にいはば阿庭可は一本阿遲加とある方正しく或は海驢のことならんか。海驢は古くみちといひ、その皮を八重敷きて火火出見尊をその上にすゑまつりし事神代紀に見えたり。この動物は石見より筑前の海へ時々群をなして島に寄ることあり。これの寄り集るよりあぢか島と名に負ひたるところあり。をしは本居氏の說の如くよしの義なれば、智可の岬にもこの海獸の夥しくうちよりてその名聞えたるなどより斯く冠らせたるにあらざるか。尙後考を竢つ。

あてかをし　ちかの岬萬五

【管】あてかひしといふ詞なり。罪繩をば木のもとと末へかけてあてかふなり。

【解】本居氏の說にあちか、ちかと言の重れる枕詞なりといへり云々。

粟島の　逢はじ萬二十

逢はじまた逢はぬものからとら續けたり。頭音を反覆して他へ轉じたるなり。『波の間ゆ雲井に見ゆる粟島のあはじものゆゑ吾によする子ら』粟島は紀伊名草郡にあり。又阿波も島國なればそれかと。

あ の 部

淡 路 島 あはれ萬十二

「住吉の岸にむかへるあはぢ島あはれと君をいはぬ日はなし」の如く頭音反復法によりて列ぬ。

逢 ふ 事 の かた糸六帖、後九 かたがひ拾遺十四

逢ふ事の難しといふ意を片糸、又片飼に兼ねしめたる枕詞なり。片絲とはより合せぬ糸をいひ、片飼とは飼方のよく行きとどかざるをいふ。三代集の頃には「逢ふことのかた糸ぞとは知り乍ら玉の緒ばかり何によりけむ」に掛くるが如く、かた糸といひて下に玉の緒といひ、よるといふ緣語にて仕立つる風流行せり。◇「逢ふことの片絲なれば白玉のをやまぬ春のながめをぞする」『逢ふことの片飼したるみちのくのこまほしくのみおもほゆるかな」

逢 ふ 事 は かたゐざりする後

逢ふことの難しといふ意を片躄と兼ねしめたり。片躄とは小兒などの片膝にて纔にはひ行くをいふ。◇『逢ふことのかたゐざりするみどりごのたたん月なく逢はじとやする』に於けるが如し。

逢 阪 の せきも止めぬ後 せきとめらる後十三

逢阪は近江にあり。有名なる關所のあるところ、逢阪の關といひ下して、それを塞き止むる意の動詞に用ひたり。◇『守る人のありとは聞けど逢阪のせきも止めぬ我淚かな』

あ ぶ さ は ず いらなけく 鶩のゆふしで

六人部是香の鶩の木綿垂にいらなけくに冠らせたり。いらけなしはいらなしに同じく苛しきの義、このことを云はんが爲にあまさずといふ語の古言なるあぶさはずを冠らせたるなり。

あま雲の　たゆたひ來れば萬十五　たゆたふ心萬十一　ゆくら〳〵に萬十三　ゆきかへり萬十九　ゆきのまに〳〵萬十二　別れしゆけば萬九　晴るゝ時なく古十九　浮きたること後十六　たどきも知らず萬十七　奥かも知らず萬十二　よそ萬四、古十五　雷の上萬三

あま雲は天雲なり。雲は中空に浮き漂ふものなれば遠き船路を搖られながら漂ひくることに喩へ、又心のかれこれと思ふ意より『うらぶれて物な思ひそ天雲のたゆたふ心我がもはなくに』の如くたゆたふ心と連ね、或はゆくらゆくらと續けて物思ふ心の様に喩へ、又雲の行きては歸る有様を以て、人の往きかへりともゆきのまにまにとも別れしゆけばとも喩へ、三代集には心の晴るゝ時なくとも浮たることをとも比したり。又黑く雲の立ち塞りたるときは咫尺を辨せずして恐怖の念を生じ易きものなればたどき（たよりといふ意）も知らずとも、奥がも知らずとも連ぬ ◇『大船の上にしをれば天雲のたどきも知らずうたがた我がせ』『思ひ出てすべなきときは天雲のおくがも知らず戀ひつつぞ居る』又近く見ゆる雲の忽ち去りて外に行くものなれば、よそにも人のなりゆくかとも、よそなる念とも續け、又雷は天の雲間より聞ゆるものなれば、これを山の名なる雷岳のうへにも冠らせたり。

【黑】萬十一上にはよりあひとほみと續けたり。

雨ごもり　三笠の山萬六

雨に隱る笠といふより同音の三笠山に掛けたり。◇『雨ごもり三笠の山を高みかも月のいでこぬ夜は更けにつつ』

【紹】雨に隱（こもり）かなるは大笠なるべし。大笠は和名抄に簦笠に柄ありといふ。傘のことなり。

雨ごろも　田蓑の島古十七　笠きて爲家集

古今を始めとしてその他にも田蓑の島に冠らせたる例多し。◇「難波潟しほみち來らし雨衣田蓑の島にたづ鳴きわたる」一首には蓑笠を用ふる習なれば、まづ雨衣と汎稱をあげて、その中の田蓑を思はせ、それを難波の島名に冠らせたるなり。田蓑とは農夫の田などに出て働くときに着る蓑をいふ。田蓑は寛平菊合にもよみたり。上田秋成の績貂には齋宮女御集の『もしほやく煙になるるあま衣うきめを包む袖にやあるらむ』を擧げたれど、これは枕詞にあらず。

【補考】たみのの島といふを蓑によせて、雨の衣なる蓑と續けなしたり。

【例】雨衣太蓑とつづけたるなり。

天ざかる　ひなつめ紀　ひな萬一、三、十三　向津媛命紀　縣居の大人菅根集

こは古くより用ひられ鄙とも、ひなの都とも、ひなの荒野とも、鄙つ女とも續け、又神功紀には向津媛命とも連ね、近世菅根集には縣居の大人に冠らせたり。萬葉『天ざかるひなの長路をこひ來れば明石の門より倭島みゆ』天とは白石の東雅にいへる如く種々の義あれど、ここは都のことならむ。さかるは離るなり即天都を遠ざかる鄙と冠らせたるなり。天下るといふ說もあれどいかが。又向津媛と續けたるは都より隔りたる地に向ふといふより人の名に連ねたるか。縣居と續けたるは縣とは地方なれば鄙の心にて冠らせたるなり。

【仙】ひの一字を云ひ當てむ爲に用ゆ、日の空を離り給ふこと髮筋一つおきける程も淀み給ふことなく長時不斷に空をさかりゆき給へばなり。

【季】ひなの都は諸國の國府なり。これ田舍の都なり。國司のある所なる故申すなり。

【燭】天さかるは天の低く下れる義なり。その心は王城は國のみ中にて天も高きに、遠き田舍の國々は天も下れる義なり。又天離、天放とかきてあまさかるとよめるを思へば、帝都に遠ざかりたる國といふとも聞えたり。

【匠】天離、天放、天疎など書きたれば、ひなとは帝都に遠ざかりたる國といふ心なり。凡そ方角をいふに王城を元としていふこと常なり。神代紀にも見えて久しき時より用ひたる詞なり。顯昭法師は遠國ならではよむまじきよし申されたれど、萬葉一卷人麿の歌に近江をも然かいひたれば畿内を出でばいづくにもよむべし。

【考】都方より鄙の國を望めば、天と共に遠放りて見ゆる山にて冠らせたり。ひなとは田居中なり。そのたゐなかの上下を略き且つゐひを通はせていへり。又遙けき空は常に向ひ見やらるるもの故に向津姫命に冠らせしなり。

【摘】神功紀に天疎向津媛命とふを眞淵が冠辭考に擧げたれど、ここは都より伊勢の大神に奉られ給ひし比賣命の宣ひしなれば用語なり。冠辭に非ず、

【信】天に放りますます日といふ意にて、ひの一言にかかる發語なり。天照大御神の宣りませし大御言に、天陽向津姫と宣り給はせしは即日の御事なるを思ふべし。

【石】天は遠く放れる日といふ義なり。

【几】ひなは天氣に遠ざかれば日無（ひな）といふ義なり。

【萬燈】遠き所は天もここと一つの天にあらざるやうなれば也。から國にも各天といふが如し。ひなの冠なり。ひなとは都に對へていふ。

【考略】ひなはへのかにて邊所の意、ゐなかはへのかの轉と鈴屋翁の說なり。
【解】ひの一言へかかる。天にさかる日といふ意なりと、高橋正元が言へるぞよく叶ひたる。
【思】大宮を遠ざかるひなといふなり。ひなざかるは廣離るなり。

天しるや　日の御蔭萬一

日の活きを擧げて稱詞の如くに用ひたり。やは詠歎の助辭。高知るや日の御蔭、天知るや日の御蔭と用ひたり。
【續考】萬葉及式祝詞云、日の御蔭とは皇の御舍を申すなり。
【石】天領るや日とその義理を指したるなり。

あまだむ　輕の小女記

輕の小女と續けたり。尙天とぶやの條に委し。

天傳ふ　日笠の浦萬七　日の入國縣家居集　姬みこ久老集　ひもろぎ彥麿集

天空を渡る日といふより日笠の浦にかけたり。推古紀に赤石の檜笠の岡といふ地名見ゆ。そのあたりなるべし。
◇『印南野は往き過ぎぬらし天傳ふ日笠の浦に波立てる見ゆ』萬葉二の『天傳ふ入日さしぬれ』を考には擧げたれど、そは枕詞にあらず。尙近世に於ては眞淵は天傳ふ日の入國と詠み、荒木田久老は日の一字をうつして姬みことも連ねたり。又齋藤彥麿は神籬に冠らせたり。これは日の音より轉じたるなり。
【考略】天路をつたひゆく日といふ意に冠らしめたり。

雨つゝみ　さまりし萬十一

萬葉に『室なしと人には言ひて雨づつみとまりし君が姿しおもほゆ』を服部高保の續冠辭考に擧げたれど、枕詞にあらず。

【服】雨づつみとは雨障にて、つつむといふはすべて障ひ病など憚はしきことをいへば、ここも出歩なしで一夜泊れるなり。

天つ水　仰ぎて待つ萬二、十八

大旱に降雨を望むが如く、皇子の世に出で政を執りまさんことを望む意に比したり。

【續考】天つ水は雨をいふ。旱の時に雨を待つ如くといふなり。

天てるや　日の氣に萬十六

日の活きを擧げて普通の形容詞句の如くに用ひたり。枕詞解に擧げたれども稱詞といふべきものか。

天とぶや　輕の道萬二　輕の社萬十一　雁萬十五　領巾かたしきて萬八　鶴ヶ岡菅根集

記には天だむ輕の少女と續け、萬葉には天飛ぶや輕の路とも輕の社とも領巾かた敷きとも、又拾遺集には雁の使とも連ねたり。天だむは天とぶに同じくして、天路を飛ぶ雁といふより頭音なる輕といふ大和高市郡の地名へ冠らせたるなるべし。領巾と續けたるは明かならざれど、天傳ふ日笠の浦の類にて、天飛ぶ日といふ一音よりひれのひへ掛けたるか、或は漂へる雲をうち振る領巾の形に喩ふるより、ここは直の領巾ながら雲の如くに譬へていへるか、後考を待つ。菅根集加藤枝直が歌には天とぶや鶴が岡とつらねたり。萬『天飛ぶや輕の社のいはひ欟幾世まであらむこもりづまぞも』

【冠】鴨の中なるかるてふものは雁に似てあれば記紀などに川雁てふものは是を云ふならし。その名の長ければ川を除きてもかりともかるとも云ひしと見えたり。

【續考】天飛ぶや領巾かた貫きて云々。天飛とは雲のことにて云へればなり。領巾は倭名鈔云婦人項上飾也と、萬葉二の天領巾は雲を領巾に喩へたり。

【石】天飛ぶや云々。その業を指せるなり。領巾片敷きてと續けしは鳥の翅を領巾として鳥の名を省きしなるべし。

【三】拾遺集六に雁の使と續けたり。彼れが業をまづ指して雁の使といへり。蘇武が故事によれるなり。

【語】たむは飛なり。とびをたびと云ふも轉なり。つぶ石をたびしと云ふ。靈異記に礫をたびしと讀めり。

【古義】これはみごもり草とよみ、水の分流するところに生ずる草なり。

天 に ぎ し　天つ彦火瓊々杵尊紀

紀に天にぎし國にぎし天つ彦火瓊々杵尊とあり。神の御名ながら天にぎはすと稱詞を加へ奉りたるなり。

天 の 原　富士の芝山萬十四

萬葉に『天の原富士の芝山このくれの時ゆつりなばあはずかもあらむ』の歌あり。燭明抄に擧げたり。かの山の高く天に沖せるよりその位置をあげて枕詞とせり。

【冠】かの山の極めて高ければその頂の天に及ぶ心とていへるなり。

天 の か は　水かげ草萬葉十

萬葉に『天の川水かげ草の秋風に靡くを見れば時來るらし』の歌あり。仙覺の萬葉抄には諷詞とせり。水かげ草は天の川の水かげに生ふる草か。されば枕詞にあらず。

【仙】輕は所の名、鳥にかるといふ鳥あればかの鳥によそへて續けたり。

【仙】水かげ草は稻の名なり。空の色は綠なるに天の川の白きは白波の浮びたるやうにも見ゆれば、水のかげのうつりて見ゆるによそへたり。

天彦の　音羽の山古十九　訪れ古十八　音羽瀧夫木

天彦は大空の響をいふ。よりて音といふより他へ轉じたるなり。◇『水上や雲居なるらむ天彦の音羽の瀧ぞ空にきこゆる』

【脈】山彦の類にて音と續きたるにて深き意なし。天の神をいふならむ。

【詔】天彦は人語の響、物の音の空中にも、山谷林などにも響き合ひて答をなすをいふなり。又山谷のみには山彦といへり。

【三】天彦は音の空に響くをいふ。山に響くを山彦といふに同じ。天ひびき音といふ義なるを、ひを一つ略きてきおをこと約めたり。

あまを舟　泊瀬の山萬十　二十日の月家隆　はつかに雪玉集　初雪閑亭師集　法に金葉

舟の泊るを古語にはつるといへり。海人小舟はつるといふを初瀬にかけ、後には僅の義なるはつかにと連ね、初雪とか、二十日にもかけ、舟に乘るといふ縁語より佛法の御法に續けたり。中世以降泊瀬をとませと誤り、新撰

六帖にはあま小舟とませの山とよめるあり。この類は取るに足らず。◇『あま小舟はつせの山にふる雪のけながくこひし君が音ぞする』『海人小舟はつかの月の山の端にいざよふまでも見えぬ君かな』『うき身をしわたすと聞けば海人小舟法に心をかけぬ日ぞなき』

【冠】初瀬とは此川をば首瀬川といふ名あり、長谷詣に渡る所は最初の瀬なるが故なるべし。

【燈】舟のとまりをはつるといふ義にてかやうに續けたるなり。後にはこれをとませと詠める歌多し。されど誤によみ習したると心得べし。

天くしつ　大久米紀

紀に天槵津大久米といふ神あり。大來目をたたへて天奇し稜威と置きたるなり。みづみづし久米と同じ類なり。

天地の　いや遠長く萬二

萬葉二の長釋にいや遠長くと比したり。服部氏の續考にも擧げたり。

天なる又天なるや　ひめす川原萬七　さゝらの小野萬三

萬葉七にひめすがはらと續け、又同三にはさゝらの小野とも續けたり。共に天上の地名ならば枕詞にあらず。されど冠淵に隨へば比賣菅原はこの邦の地名なりといへり。さらば天なる日といふより比賣菅原のひの一音に連ねて直ちに轉じたるなり。◇『天なるひめすが原の草な刈りそね、みなのわたか黑き髮に芥し附くも』さゝらの小野と續けたるは枕詞にあらず。

【管】『天なるやひとつ棚橋いかで行くらむ。』云々。これは天にある日といひかけたるなり。又云、又となき橋

なれば一つたな橋とはよめるなり。

【考】萬七に云々。こは天なる日と續けて、比賣菅原はここにある所の名なるべし。

【摘】ささらの小野云々。神樂を古くはささといへり。神樂はもつぱら皇の御遊なれば天在神樂といひかけたり。

【冠】天なるや神樂良の小野云々。こは枕にあらず。駿河なると等しく、そのある所を指していへるなり。

【枝】ささらの小野とつゞけしは元亮按ずるに、月を左々良榎壯子といへば、ささらは月の異名にて、天なる月てふ意にて云ひかけしならむ。

雨に着る　箕面つづらぶみ

上田秋成の藤簍冊子には雨に着る箕面と續けたり。箕といふより、その音をもてる攝津の箕面山にかけたり。箕面は紅葉をもてあらはる。

雨により　田簔島古十七

古今に『雨により田簔島をけふゆけば名にはかくれぬものにぞありける』と續けたり。雨により田簔を着るといふに續けたり。續貂に擧げたれど完全なる枕詞ならず。

【貂】田簔島、今の尼が崎の東南に方りて、大和田といふ里あり。ここを百年許り以前の物に、簔輪田と記せし事見ゆ。これや田簔の潟といひしが、やや言の略けて今は大和田とのみ呼ぶこととなりしか。

あもりつく　天の香山萬三　鹿背山萬六　不二の山菅根集

大和のあまのかぐ山は太古の時天より降り落ちたりといふ傳説あれば、その故をいひて枕詞とせるなり。天下著

りあおのもと約まりたるなり。近世曾根集加藤枝直の歌には不二の山にも冠らせたり。萬葉六にある『三諸着鹿背山のまに』とあるを眞淵は天諸着の誤と見なしたれど、近世はみもろづくと訓む人多し。それに從ふべきか。みもろつくの條を參照すべし

【仙】あもりつくとは天降り著くと云ふ詞なり。天の香山と續けたることは空の香のかほり來れば天もりつくともよめると心得べし。

【考】風土記に天上有㆑山分而墮㆑地、一片爲㆓伊與國之天山㆒、一片爲㆓大和國之香山㆒。といへり。思ふに神代紀に美濃國の喪山は天より墮ちたるてふ類に、これも上つ代より然か言傳へしなるべし。さてあもりつくはあまくだりつくてふ語なるを約め略きていふなり。

【信】三諸着鹿背山。師說には天降就の誤として冠辭考にもあの部に連ねられたり。こは誤字にあらず。三諸は精交りの酒の名、みは酒の實をいふ。諸はもろ〳〵と濁れるをいふ。就は輕く添へたる言の着くか、又は造るか。鹿背山に掛るは食稻（けしね）の意、けとかの通音しねの反なり。

【考略】あもりつく。こは初國しらしし時より皇宮の鎭ともいはひ給ふからに、ことにたふとみて冠らせしならべし。天降を古言にあもりと云へり。今落雷を神鳴かあまると俗にいふが如し。と長瀨眞幸翁はいはれき。

【攷】神の鎭座ますかぐ山といふなり。神は天降ましましてここに居付きますゆゑにあもりつくとは續けたるなり。

【右】香山は天より下りしといふ傳あるによりて、その傳をいへるのみなれば枕詞とはいひがたし。

【存】萬葉略解云、天諸著鹿背山は或說、生緒の誤なるべし。さらばうみをつく積と續けたるなり。生緒は績麻の借字なり。宣長は著は繫の誤にて績麻かくの誤ならむといへり。

【黑】山は皆下り著きたるものなればかく云ふ。

あや垣の　ふはやが下記

あや垣とは寢所の隔に用ふる文ある帳をいふ。ふはやが下とは帳の風をはらみてフウワリとしたるをいふ。下とは內の義。こは高保及殘夢は枕詞として擧げたれどさにあらず。

【服】賀茂大人云、あや垣は閨門の垣にて、くみ垣の類、文に組みたるなるべし。土佐國にては垣する柴木をあや木といふ。さてふはやが下とは閨の內のことにて含屋之裏なるべし云々と云へり。

【石】あや垣は絹布にて人目を隔てむ爲にかくるものなり。今の帳に等しかるべし　人目隔つるが故に垣といへり。そが形勢の絕えず風に靡きてふはふはするが故にふはやといひ出でむが爲に置きたるなり。

あやめ草　あやめも知らぬ古十一　あやなき身拾　假りにも拾十二　ねながき命六帖

古今にはあやめも知らぬと續け、拾遺にはあやなき身にもと連ねたり。同音をうち重ねて文理即道理も知らぬとか、文飾なき卑しき身と連接せしめたるなり。古今に「郭公なくや五月のあやめ草あやめも知らぬ戀もするかな」又拾遺に借りにもと續けたるは、刈るといふ音と同音異義語に轉じたるにて、貫之集には、ねながき命と比したり。『おふれども駒もすさめぬあやめ草かりにも人の來ぬがわびしさ』

あやめの草の　ねに立てゝ拾遺

拾点になにたてて鳴くと連ねたり。こは續貂にもいへる如く、根を時鳥の鳴く音にとりなしたるなり。序の體なり。

荒垣の　よそ萬十一

萬葉によそにやと續けたり。垣には内外あれば外と續けたり。『里人のことよせ妻を荒垣のよそにや吾見む憎しからなくに』

【考】よそといはむとて、物隔つる垣を冠らせしのみ。且つ荒垣とはあらあらとしたるをいへり。

あらがひの　荒き漫吟集

契沖の漫吟集に荒きと同音を列ねたり。あらがひは競爭の義。

あらかねの　つち古　つちの下菅家萬葉

古今序には、あらかねの地にしてはと續け、菅家萬葉にはつちの下にてと連ねたり。土中より鑛の出づる緣を以て挽積せしめたることなほ鶯の春になるらしに於けるが如し。◇『あらがねのつちの下にてへしものをけふのうらてに逢ふ女郎花』

【燭】あら金とは未だ吹かざる前の金をいふなり。吹かざる金は未だ土なりにて荒金の地とはいふなり。

【考】金はもと土の下に年經てあるものなれば、土の下といへるまで掛れるなるべし。或人、金は土に生ふるからに、土に冠らせたりといふはこと足らず。

【栞】生金の義、俗になまがねといへり。後轉じて荒金とす。土中の鑛をいふ。よりて荒金之土と續けたり。眞金に對していへるなり。

【緒】金はもと土にあるものなれば、生金の意にていへり。

【詩】淮南子に齊俗訓云、天之圓也不レ得レ規、地之方也不レ得レ矩、又同假眞訓云、能戴ニ大圓一者履ニ大方一とありて、荒は大なりと註し、方は矩なれば、合せて考ふるに大方をあらがねとはよむべきにや。

【辨】こは地のすべてへかけての冠なれども、いふ心在家根(あらかね)の地といふに始まり、地は家の下にあればねといふ。下つ國を根の國、底の國といふ。斯れば地も下留りといふにて天の下の留りなり。

【年】年々隨筆三卷に、あらかねはもとは金は土中より生ずる故の義とせしにや。さらば金生のなどぞ言はまし。用語を先にいふこと皇國にはなきことなり。すべて金銀銅鐵何かねにもあれ皆岩山の巖の中に生じて、土より出づるものならねば、かゝりたる義事違へり。松阪様には舍根(あらがね)の義として說かれたれど、根も穩かならず思ふにあら金はいまだ鍛はざる金なり。そは鎚もて鍛ふ故つちとかかるなり。

【石】荒金は猶土なりと金の上を理れるなり。下とまでにかかれるにはあらず。

あらたへの　藤原萬一　藤井が原萬一　藤江の浦萬三　衣萬五　麻布の寺蓬廬集

萬葉一に藤原が上に又藤井が原にとも、同じく三には藤江の浦にとも又衣とも布衣とも連ねたり。たへは栲、妙、等の字を用ひ來れど、正しくは栲の字をよしとす。たへは古の織物の名にて、これに精妙なると粗末なるとの別あり。藤布はあらたへなるより、ふぢといふ音をもてる地名に冠らせたるなり。蓬廬集には麻布の寺と續けたり。麻は藤ほどになきも目のあらきよりかく連ねたるなり。

【仙】藤の花はいたく濃にもあらぬものから、美しければあらたへのふぢといへり。

【燈】荒き布の藤といふ心より續けたるなり。藤衣とは藤にて荒く織りたる布なり。

【致】荒妙の衣の袖云々、枕詞にあらず。荒妙の衣とつゞきては喪服なり。古今三に『思ふどち一人一人がこひ死なば誰によそへて藤衣きん』云々とよめるも必ず藤にて織りたる布ならねど、喪衣はあらあらしきものなれば藤衣の名を借りたるなり。集中枕詞に荒妙の藤とつゞくるにても藤衣はあらあらしきものなるを知るべし。

【考】あらとは麁く惡しきをいふ。たへを妙とかくは借字にて栲とあるは正しきなり。且つたへは總布をすべていふ名にて藤布はもとよりのことなり。

【黑】あらたへは麁美靈（あらたひ）なり。

あ ら 玉 の

年記　月記、萬四、十　五年萬十一　一夜もおちず萬十二　きへの林萬十四　春忠見集

景行記に、年が來經ればとも月は消えゆくとも續けたるを始めにて、萬葉には年の緒長く、年ふるまでに、年の經行けば、五年ふれどなどと連ね、又月が經ぬれど、月を重ねて、たつ月ごとに、月日も消えぬとも接ぎ、又夜も落ちずと冠らせ、來經ゆくともきへの林とも連ね、三代集の頃には春とも連ねたるあり。きへの林にかかるあらたまは遠江の地名なるか、さらば枕詞にあらず。この枕詞古來諸說あれども接續の意明かならず。『我が形見みつつ忍ばせ荒珠の年の緒長く我もしぬばむ』『たゞ一夜へだてしからに荒玉の月か經ぬると心さやりぬ』『今更にねめや我が背子あらたまの一夜もおちず夢に見えこそ』『かくのみや息づきをらむあらたまのきへゆく年の限知られず』『あらたまの寸戸か竹垣編目よも妹し見えなばあれ戀めやも』『あらたまの春をも知らでふる里は立田の山の霞をぞ見る』古說の中にては、あらたまは地より掘り出でたるばかりの玉にて、磨ぎみがくものなれば磨ぎの頭音なる月にか

掛けそれより年又日等に及ぼしたるか、又荒魂といふ義か。荒魂・和魂といふ語は古く神功紀にも見えたれば上古にもさる語のありしならむ。大年神は穀の神と記傳などにも記したれど、季節と穀物とは大なる關繫あれば、やがて年月日時を司る神となりしならむ、古事記によれば、須佐之男命が神大市比賣に娶ひて生み給ひし御子は、大年神と宇迦之御魂神二柱なり。宇迦の神は穀を司る神なること世に定說あり。次に大年神が伊怒比賣に娶ひて生み給ひし五柱の神の中には、向日の神と聖神とあり。記傳には名義明かならずとあれど、恐らくは日に向ひ日をはかり日を知る神なるべし。又大年の神が香用比賣に娶ひて生みませる二柱の神の中に御年神といふあり。とにもかくにも年時に關係ある神なるべし。もしくはこれの神の荒魂が年月を司り、和魂が穀を司りしことなどありしよりかく用ひしにあらざるか。

【仙】あらたまは改るといふ心なり。又萬十四にきへと續けたる麁玉は遠江國の郡名なり。

【燭】年とも春とも月日とも續けたり。これは年も月も日も改るものの故なり。又萬第十一あら玉の寸戸が竹垣云々、これは新しく作りかへたる寸戸を詠めるか。又十四にあら玉のきへの林にとあるは遠江國に麁玉郡あり。そこを詠めるにて枕詞にあらず。

【考】麁玉・未玉・璞などは例の借字なり。さて寶とは皆明玉の意なるを思へばたかあら玉のたがを下へとりて明玉の貴してふ意にて、年に云ひかけしなるべし。たかを約め省きてとといふも例あり。月日と續けしは年と續けし事久しく成りて、後にはあら玉といへば頓て年のことを含みてある據に轉りたるなり。璞の寸戸我竹垣・八麁玉の伎倍の林などいへるは遠江國麁玉郡伎倍郷をいへるにて冠辭ならず。

【傳】二十八卷 あたら、あたらまの約りたるなり。萬葉二十に年月はあたらあたらにとあり。あたらは年月日時の移りもて行くをいふ。あらたまはかのあたらあたらの上のあたらを切めてあらといひ、下を切めて多といへるにて、まは間にて程といふに同じ。又きへゆく年のとも、寸戸が竹垣とも、伎倍の林などよめるも、伎倍は地名ながら枕詞の續は來經往(きへゆく)意なり。

【苑】あらたもの月の義、まるの反む、むもの反もなり。よりてあらたまのといふ詞となるなり。

【發】璞、和名抄に阿良太萬、玉未理也とありて、生れたるままの玉といふなり。されば砥にかけて磨ぐものなればなり。の文字少し心ゆかぬやうなれど、穩なればこれに依る。こは鶯家卿の說なり。

【考略】久老は凡て新をあたらしといふも今の世になりて訛れるにて正しくはあらたしなり。故に萬葉にては皆あたらと訓べきなりといへり。

【辨】神玉(あらたま)にて年と續けしは、乏しといふとの一言にかけたり。月と掛けしは艷といふつのみによせたり。

【年】眞淵はあら玉は明玉、年はてらしの約などいへど、例の强言なり。明をあらといふ事あるべくもなし。未だ磨かざる玉は砥を以て磨く故ともかかる。

【守】雅言考に更開の義とせり。

【解】こはあらたまといふにや。たさの切たなればなり。さてそのあらたは新世、新夜などいふ新と同言にて、年月日夜の新々に改りへかはる由の意なり。さまは古今集に、かへるさまには、又榮花に參るさまに得知らでなどあるは、歸る時參る時といふ意なれば、本は年月日夜に亙りていふ言なるべしと思ひしかど、なほさまの言穩な

らず。大神景井云、あらたまのてふ言にて、あらたは改る意、たまのは田物か、田實之かの意にて稲種をいふならむ。今も稲種の中に赤きが有るを、あかだまといふはたまたま古言の殘れるにやとぞ思はるゝ云々。さて穀をとしといふと本居氏の云はれしによりて思へば、あら玉のとしといふは新穀の田寄（とし）といふ積なるべく聞ゆ。

【槩】あらたまは新見（あらたみ）なり。新に見ることなり。それを年にいひかけたり。それをうつして月日夜などにもいひかけ、また來經へも云ひかけたるにて古事記傳に新間といへるは取らず。

あらちの關　あらじ縣居集

縣居集にあらちの關あらじと同音を重ねて調とせり。あらちは愛發とかき越前にありし日本重要なる古の關所なり。

洗ひ衣　鳥飼川萬十二

洗ひたる衣を取り替への意より顫音をもてる地名に轉じて冠らせたるなり。『洗衣とりかひ川の川淀によどまむ心思ひかねつも』鳥飼川は攝津にあり。今の味生のあたりを流るゝ神崎川の一派ならむ。

【續考】こは洗ひたる衣は取替へて着るといふ意に冠らしめつ。取替川は和名鈔に大和國添下郡鳥貝と有る所の川なり。

【紹】鳥飼川は攝津川邊郡にあるをよしとす。

霰うつ　あらら松原萬二

萬葉に『霰うつあらら松原住吉のをとひ乙女と見れどあかぬかも』とあり。頭音を反覆して霰打の音をもてる攝

名に冠らせたり。但しあられ松原はもとあらら松原といひたり。霰うつが實景なれば普通の形容詞句にして枕詞にあらざれど、ここは音調の爲におきたる枕詞なるが如し。尙あらら松原はもと疎に生ひたる松林の義にて名つけしならんも、ここにては一つの地名と見るを當れりとす。

【補考】安良禮松原、師說、禮は羅の誤にてあらら松原ならむ。その故は神功紀に烏知箇多能阿邏々摩菟麼邏とあるに等しく、疎々と立ちたる松原をいふ。あららを、あららといふは、うらうらをうらら、つらつらをつららといふ類なり。

【會別】あられ松原、住吉と堺との間に大和川の落入るところあり。是れ津國和泉兩國の境なり。その川の落入る向の岸にありし松原なり。高野紀行に云々と見ゆ。

【解】こは塁みいひたる枕詞なり。

霰　な　す　そちよりくれば萬二

萬葉二の長歌の一本に、そちよりくればと連ねたりと枕詞辨に載せたり。

霰　ふ　り　杵島が岳萬三　鹿島の崎萬七　鹿島の神萬二十　とほつ近江萬七　とほつ大浦萬十一　櫃日藤垣內集

霰降る音は喧しきものなるより、類音なる鹿島といふ地名に轉じて冠らせしなり。きしみが岳と連ねたるも、打つ音を取りて冠せしもの。遠江と續け、遠つ大浦と連ねたるも、同じく霰打つ音のたふたふなどいふ類音より地名に冠らせたるなり。藤垣內集に橿日の宮に冠らせたるは、かしましのかしの音より轉じたるなり。◇「霰ふり

鹿島の崎を浪高み過ぎてやゆかむ戀しきものを』『あられ降りきしみが岳を險しみと草とりかねて妹が手を取る』『あられふり遠つあふみのあど川楊刈れどもまた生ちふあど川柳』『霰ふり遠つ大浦によする浪よしもよすとも憎からなくに』

【燭】霰降る音のかしましきといふ心にて續けたり。又きしみが嶽とよめる歌も同じ心なり。

【考】遠江及び遠津大浦と續けたり。允恭紀に『篠葉にうつゝ霰のたしたしにゐねてむ後は』てふは、霰の篠葉打つ音はたし/\とも、てしてしとも、はしはしとも聞ゆるを、女君と偕に相寢することにいひよせ譬へり。これに依るに今は霰降りたしといふ意にて、遠つとは言ひ掛けしと見ゆ。遠しとたしと自ら音の通ふなり。

【信】門人御薗常言朝臣云、日本靈異記に近江國坂田郡遠江の里とあるを見れば、坂田郡と高島郡とはもと同郡にてあと川は兩郡に跨れる川にてやありけむ。

【解】遠つと續けたるは、霰降り飛びうつといふ意に續けたるなるべし。霰の降るは飛虫の打ちつくる如くなれば斯くいふならむ。さて飛打のびうの切ふなればとふつとなるを、ふをはに轉じて遠つといひ掛けたるなるべし。

【石】遠と續けしも音のおを略けるなりと聞ゆ。

【莊】遠江とつゞけしは音をとり、略きいふ例あればあられふるおと、と續けたるにや。

【黑】囂然(かしみ)に續けたり。かしみは四段活用言なり。きしみは音の荒しきなり。かしましといふは轉なり。とほつのとほは俗にトボ/\といふに同じ。

荒小田を

返す/\も 貫之集

貫之集に『春にのみ年はあらなん荒小田を返す返すも花は見るべく』と連ねたり。田は鋤き返すものゆゑ返すもといふ副詞へうつしたるなり。續貂に『荒小田をあらすきかへしかへしても人の心を見てこそやまめ』の歌を擧げたり。これは上三句は序なれど枕詞と見るべきにあらず。

有明のつれなく 古十三　つきせぬ 金葉、新古今

古今の『有明のつれなく見えし別より曉ばかり憂きものはなし』を服部氏の續冠辭考並に三代枕詞例に擧げたれど、これは枕詞にあらず。金葉及新古今につきせぬと續けたるは月といふより音の似たる盡きせぬへかけたる枕詞なり。『夜な夜なはまどろむまでのみ有明のつきせず物を思ふ頃かな』

【服】人心のつれなくと云はむ爲に有明のと冠辭をおけり。有明とは月の在りながら夜明くるをいふ。月は照れるに夜の明くる故有明のつれなくと續けたり。

【三】女のつれなかりしを在明のつれなくと續けたり。

ありきぬの 三重の子 雄畧記　寶の子 萬十六　さゐさゐしづみ 萬十四　ありて後にも 萬十五

ありぎぬは蟻衣と書きたるを正字とす。和名抄に蛾は蟻と同じく蠶の初生をいふとあり。字鏡に蟻は安利比々留とあり。されば守部のいへる如く蠶衣をいふなるべし。三重の子と續けたるはその女の常用せしによりて上に置きたるなり。自ら美衣をまとふと褒めたる意なるべし。寶の子と續けたるも褒めたるなり。さゐさゐと續けたるはその衣の物に觸れて、さやさやと音を發するより、騷ぎの古言なるさゐざゐ又はさゑざゑに掛けたること古說にあるが如し。ありての後にもと續けたるは同音をかさねたるなり。萬『ありぎぬのさゑさゑしづみ家の妹に物

いはず來にて思ひかねつも」萬『命をし全くあらばありぎぬのありての後にも逢はましものを』

【匠】三重の子云々三つ重ね着る意に續くなるべし。

【考】あり衣は珠衣なり。三重は三重の勾玉にて、即ち寶の玉なれば曦衣の寶児といふに同じ。その寶石をつけし衣てふ意にて三重とは續けしなり。又美しき玉着けたる衣を寶の衣といふを例の下へ組らして寶の子とは續けしなり。又さゐさゐしづみのさゐさゐはさゑさゑてふ語にて、妻の歎きさやめくを靜めむとて、物をしもよく言はで別れ來て今更思ひ堪へ難しと、その泣きさやめくを、多く玉を着けたる衣は、玉の相觸れてさやさやと鳴るに喩へたるなり。珠をありといふはあらみ玉てふことなるを、そのらみの反りなれば、ありといひて、玉の語は省きたり。さてそのあらはあきらのきを略き、みはまに通ひて明眞玉てふ語なり。

【摘】衣はうら表具したるは常にてそが上に珠をつけたれば三重とつゞけたるなり。或説にありぎぬは三重勾玉なり云々いといたき謬言なり。

【玉】玉勝間六にありぎぬは鮮なる衣なり。ありは鮮なるをいふ。俗言に物の鮮かに見ゆるをありありと見ゆといふも是なり。又月に有明といふも、雲に月の在りて夜の明くる意にはあらず。夜の明方には月影の殊に鮮に見ゆるものなれば、鮮にて明るよしにて有明の月とはいふなり。欽明紀に鮮輝をありかもと訓るも鮮かなるよしなり。萬四卷には珠衣のとあるを、師はそれをもありぎぬと訓みて、ありきぬを珠のことに解かれたれども、四卷なるはたまきぬにて裳に玉裳といふ類なり。寶の枕詞にいへるは、鮮なるよき衣を寶とする意に續けたるなり。

【講】ありきぬは明衣なり。りとらと通ふ。荒碾をありそといふが如し。禮に齋必有明衣」といへり。明衣布衣

なり。洗ひての後にも着るものといふにや。

【解】三重と續く意は表と裏と中重か。又たゞ何となく三重か。本居氏のあゝとは鮮かなるをいふといへり。いかが。大町桂月云、珠衣とあるは蟻衣の誤なるべし。珠と蟻と草書相似たり。さて蟻は借字にて績衣なり。上代には麁衣と皮衣と並べ用ひしかば、皮衣に對へて織衣といふなり云々。さておりと通ふ據は、欽明紀に罷匠をありかもと訓みて天武紀に罷をありがもと訓めるにて曉るべし云々。鹿持云、さゐさゐと續くは、舊説に、さゐさゐは衣の音なひの、さわさわとする心なりといへり。さゐさゐとあるも同じ。衣の音のさわさわといふより妹がさわさわと騒ぎ合ふ意にいへり。

【栞】袖中抄に織絹なりと云へり。新衣にやともいへり。

【枕言】ありきぬのは蟻衣之にて繭衣の一名なり。和名抄に蚰三滴反、和名與レ蟻同、蚕初生也。字鏡に蛾蛭也。實蟻也。安利比々留とあるを以て知レ之、蚕子の虫の一名を蟻とも云ひし故に蠶衣をもありきぬと云ひしなり。實の子らと受けたるは繭をほめたるにて集中珠衣とかけると同じ心ばへなり。又さゐ／＼沈みとは、繭衣のしなやかにしてさやぎつつ續にたれしづみつくを、防人の別ををしむ人の泣きさやぎて、愁に沈むに譬へたるにこそあれ云々。

【雅】ありぎぬは在衣にて着て在る衣をいふ。それを珠衣と書けるは古、身の飾ひにかくる玉は身に着て後無るものなる意を以て珠衣とは書けるなるべし。身に着たる衣は立居につきてさらさらと音なひ鳴るもののゆゑにさゐさゐともさゐさゐとも續けたるなり。

【黑】ありはあかりざぬの約なり。孝德紀大化二年三月の條に無施王稱王押とあり云々。

ありそ浪　ありても　萬十三

萬葉に有りても見むと頭音反覆の法によりて連ねたり。ありてもは存へてもの意、ありそ浪とは荒磯浪の約りたるなり。（石上及解にも擧げたり。）

ありそ松　吾を待つ　萬十一

萬葉に『あぢの住む須佐の入江のありそ松あをまつ人はたゞひとりのみ』とあり。ありそ松は荒磯松にて荒き浪風に吹きゆがめられたる松をいふ。荒磯松青松と並べ、これを頭音の我を待つにかけて諧調を整へたるなり。

【貂】青松のかかりにて、ありそ松吾を待つといふなり。

ありち瀉　あり慰めて　萬十二

萬葉に『在千方有り慰めて行かめども家なる妹はいぶかしみせむ』とあり。頭音を反復して連ねたり。在千方はあらち瀉とよむべきか。

【解】言の同じきを重ねいひたるなり。こは旅中の歌なれば、在千方の邊を行く時、轍て地名を枕とせるなり。

在根良　對島　萬一

萬一に『在根良對島の渡のわた中に幣とりむけて早かへりこね』の歌の在根良につき古來諸說あり。ましねよくとも、ありねよしとも、あらねよしとも訓み、或は舟はつるの誤ならむなどの說あり。あらねよしと訓むべきか。對島に有明山といふ高山あり、舟人の目標とせり。よりてあり嶺よと呼びかけて次に島の名を出したるか。

【管】對島は、唐土へ渡る船路に此國の有るに、舟をつけて日よりをも待つ故に此島をよしとほめたるなりっつしまの高根とて山のあれば有根よしとつづけたり。

【僻】在根良をましねよくと訓む。在(まし)とは汝(いまし)といふ古語なり。いましともましとも云ふなり。

【考】ありねよしと訓しは必あるまじきことなれば、二種の考をしつ。その一つは百船能、今一つは百津船を誤りしにや。百船の津とつゞくるならむ。

【檜嬬】對馬國在明山を指させるなり。そは實に高山なりければ、異國船の御國に入るにもこの山を目當とし、御國より異國へ渡るにもまづこの山を目あてとして出る故に、在嶺よ津島と呼び出させるなり。云々

【詔】彼國にゆきし人に問へば在明山と云ひて國に二つなき高嶺あり。昔は在嶺といひしが在明山と呼びかはれるか。この島根は巖石をつみて化(なし)たる、かしこ根の國なればなり。根は酋長を稱する辭なり。大兄宿禰阿婦(ね)などいふ類にてしるべし。良とは歎示辭にて、老が三野連に結句に早かへり來ねといふにかけ合たる詞なり。

【荒】在嶺よといふ言なり。諸注誤字とするは非也。

【攷】在は借字にて、荒る意にて荒磯といふと同じく、荒根にて根は島根岩根などの根にて、次に對島といへば、ここには島字を省きて唯ねとのみいひて島根のごとし。良は吉にて荒たる島根のけしきをよしといへるならむか。

有　馬　菅　有りつつ萬十一　有りて後に萬十二、拾十四

菅は笠などに用ふる草にて、攝津の有馬より出づるもの古來名あり。因つて有りといふ詞をいはんが爲にこれを置きて調を整へたるなり。萬に『大君のみ笠にぬへる有馬菅ありつつ見れど事なし我妹』

【紹】津國有馬に生ふる山菅は笠に縫ふに宜しかりしにこそ。昔は大嘗會の御笠を、津國の笠縫氏より調進せしこと延喜式の内匠式に見えたり。

あわ雪の　若やる胸記　消ぬべき萬八　若狹の國鶯乃木綿重

あわ雪は春雪をいふ。年若き女の白き胸の喩として、記にはあわ雪の若やる胸と續けたり。若やるは若やぐに同じ。萬葉のは雪の消ゆるより、人命の消ゆるに比したり。六人部是香の長歌には若狹國に冠らせたり。若やるより思ひつきたるなり。

【服】雪の如く白く若やる肌といふ義なり。若やるは若やぐなり。るとくとはよく通へり。萬葉に山吹を山振とあまた書けり。

【解】本居氏云、わかしといふ言の本は、物の未だ成り固らぬ意より轉りて柔なるをいふ。泡雪より速く消は脆くして固からぬ方なり。

【石】人身の白き肌を沫雪に比したるなり。こは若得生（わかえまれ）といふ義なるを、えあをやと約めて若やるといへり。

青海の　うづまさ桂園一枝

香川景樹はうづまさに掛けたり。うづまさは山城の地名、太秦と記す。秦河勝の建てし廣隆寺のあるところ、青海の潟といふより同音をもてる地名に冠らせたるなり。

青雲の　白肩（しらかた）の津紀　出で來萬十四　志樂（しらく）丹後風土記

萬葉に「汝が母にこられ吾はゆく青雲のいでこわぎもこ相見てゆかむ」とあり。こは青雲の出づるが如く吾妹子

も出で來れと比したるなり。神武紀の白肩の津に連ねたるは古來諸說あれども、祈年祭祝詞に青雲の靄く極み、白雲のおり居むか伏す限りなど、見えたる如く、白肩津は難波より遙に隔りて、眺むるに青雲の彼方に位すれば、その青雲のたなびく白肩の津といふを、たなびくといふ詞を略きて續けたるならむか。固より青の字と白の字とは互に對映して文字の文飾をなすことはいふまでもなけれど、考の說の如き、青は白の中に含まるといふが如きは近代の思想にて古意に叶はず。白肩は河內國草香に屬す。今の枚方はその舊跡ならむ。丹後風土記のは白といふ音を志樂といふ地名にかけたるなり。

【考】青雲は本白雲なれば、白てふ語に冠らせたり。いと晴れたる蒼空にある白雲は青く見ゆるものなれば、即見るまゝに青雲とはいふなり。

【摘】青雲に白雲の所々あなるは常のことなり。青地の白文の織物のごとなれば、青雲の白肩津とはつゞけたり。

【冊】出で來といはん爲に青雲のと云へり。雲は山岫などより立ち出づる物ゆゑ冠らせつ。青雲てふは白馬をあを馬といふ如く白雲なり。出來てふ語までかかりたるなるべし。又青雲の星離去とは青雲の星と續くるに非ず離るてふへ續くなり。

【傳】青雲のは白の枕詞なり。青色の雲はなきものなれども、たゞ大虛空の蒼く見ゆるを、しかいふなり。さて白とは凡て物の鮮かなるをいふ。いち白し、達白しなどのしろもこれなり。霽れたる虛空の蒼き色は鮮明なるもの故に、青雲の白とは續けいふなるべし。

【補】青きものは、白きに含まれたればかく續くるなり。

【解】本居氏說云、さて出て來の枕詞としたるは曇りて雨ふる時など、晴間を待ちて青き空の見えむことを願ふ意なり。

【石】こは青雲の如く出て來、またしらと續けしにて、しらはしろあといふ義なるをろあをらと約めてしらといふなれば、青雲の如く白く顯るると比して、白肩の津と續けしなり。

【瑩】青雲は大雲にて唯雲といはんが如し。雲は白きものなれば白肩といひ續けたり。青雲の棚曳くは大雲の合く霧り渡れるをいふ。青雲にはあらず。丹後風土記には青雲の志樂の國と續けたり。

青　つ　ゞ　ら　來れども古　來る人拾十二

青葛は防已科の植物にて、その蔓を人の手繰るものなれば、そのくるといふ言より人の來るに轉じたり。青つゞらはしじらふぢともいふ。蔓草にて莖に毛茸あり。互生葉長き葉柄をもてり。夏日淡綠の小花を着く。古今『山がつの垣根にはへる青つゞら人は來れども言づてもなし』

青　に　ぎ　て　總の國蓬農集

齋藤彥麿の蓬農集に青幣(あをにぎて)ふさと續けたり。ふさは總の古言、よりて今の上總下總を合せ稱へし總の國と掛けたり。

あ　を　に　よ　し　奈良記、紀　奈良の山萬一　楢の都萬　平城の明日香萬六　平山(ならやま)萬十三　平の宮萬

居家集

仁德記磐之媛命の歌を始とし萬葉には數多奈良と續け、又同書五卷には國中(くぬち)ことごとと連ね、近古の歌には同音反覆の法により並べてとも重ねたり。◇『籠の馬も今も得てしが青丹よし奈良の都にゆきて來むため』『惜しか

も斯く知らませば青に青くぬちことごと見せましものを』あをに。には萬葉に青丹、青土及綠青の字をあて或は假字を用ひたり。この枕詞も古來諸說ありて明かならざれど、玉藻よし讃岐の類にて、古この地より好き青土を出したるより稱詞の如く冠らせたるなるべし。國中とは奈良の國といふ義に用ひたれば、足引のこなたかなたの如く、屢用ひらるる詞によりて修飾せらるべき詞の音數に制限せられて自ら省略せられたるなるべし。縣居家集には平の宮へ冠らせたり。彌百土をならすといふ意より平へ轉じたるなり。

【冠】物の色をいふには丹・青を旨とするなり。されば畫圖は色々あれど丹青といふなり。黃色は丹が色の淡きなり。黑・紫は青色の濃きなり。而して奈良の新都のめでたきを褒めむとて青丹よし奈良とはいふなり。

【仙】昔締がくに丹の青土を奈良阪にて取りけり。外の青土より善かりければかく云ふ。又あをには青帛なり。この帛はならならと鳴るものなればあをによし奈良とはいへるなり。然るに楢の木は若枝若葉何れの木よりもしなやかにて自ら風吹き來ればまとはり易ければ、あをによしならとは續るなり。

【栞】一說に青幣平(あをにぎてを)は青き帛なり。黃色は丹が色の淡きなり。かの青帛はならならと鳴はるる物なれば青帛を奈良といへるを、聞きよきに付けてあをによしといふなり。故に萬葉十三卷には帛を奈良より出でてとあり。

【燭】萬葉抄云奈良坂に昔は青き土の有りけるを、取りて繪書く丹に用ひけるに、善かりければ斯くいふと。顯昭云埴安彥を討つ時忌瓮(いむべ)を和珥(わに)の武鐰(たけすき)坂の上に鎭坐めて、精兵を率て進んで、奈良山に登りて軍たつ時に、官軍屯聚(いはみ)て草木をふみならす。よりてその山を那羅山といふなり。この忌瓮は青瓮なり。よりて青瓮吉幣羅(あをによしなら)といふべきなり。青丹吉とは訛なり。私云、この青丹よし奈良と續けたる詞は、奈良の京よりなほ先に見えたり。山上憶良

が『青丹よしくぬちことゞゞ』と詠めるは國土悉くといふ義なり。青丹よし奈良の國といはむを、青丹よしは頓て奈良の義なればかく連ねたり。

【匠】十三卷の長歌に、あをによし奈良山過ぎてとよめるに、緑青吉と書きたれば、玉藻よき讃岐國、眞菅よき蘇我の河原など名物を枕詞としてよめる如く、昔の奈良よりよき緑青を出したれば、かくは續くると見えたり。

【辭】古來說々多し。皆丹の字に泥みていへり。その說信用するに足らず。丹は助語辭にして唯青き色をよしと稱する辭と見るべし。ならは木の名の楢の冠辭なり。楢の木はその葉ひろく見る色うるはしきを稱する義なり。一傳に青瓊といふ義あり。

【考】大宮など建てらるる地をば、幾重も土を積みて杵築平す物なる心にて、彌百の土を平すといひかけしなるべし。記にやほによしいきづきの宮云々、出雲神賀詞に八百丹杵築宮ともいへり。この二をあをによしと云ふに對へ見れば全く同じ意なり。吉と書くは借字にて、八百土と呼び出す辭。しは助辭のみなり。

【緒】東麿云へらく、楢には青玉の如くなる子のあれば青瓊楢と續くなるべしと、いと易く聞ゆ。よは呼び出す辭、しは助辭なり。

【傳】卅六青土は青き土なり。明宮段の大御歌にわにさのにを云々と有るも、眉畫の料なれば青土なるを思ふべし。よは呼出す辭にて、しは助辭なり。契沖は萬葉十三に緑青吉と書けるに依て、古、奈良より好き緑青を出しける故なるべしと云れど、緑青と見るは惡し。奈良と續くるは、崇神天皇の御世に御軍士の、その青土を蹈平し地といふ意に續くなるべし。

【[illegible]】青土吉は阿那邇夜志と同言にやと岡村重浪いへり。阿奈は何事にまれ切に思ふ時歎の言なり。邇夜斯は爾の助辭に夜斯の言を添へたるにて、よしゑやし、はしけやしなどいへるなり。そのやとよとは常通ふ言なればあなにやしとあをによしとは全く同言なり。奈良に續けたるはその土地を切に思ひて冠らせられしなり。

【[illegible]】奈良の奈は遇也、良は善なり賢なりと註せし文字あり。故に青丹吉は即ち奈良といふことにて、人君師友の賢良なるは遇によしといふ意なるべし。

【解】あをによしは青土黏しといふ意なり。ねやすは字鏡に埏謂作泥物也、彌也須とあり。神武紀に土を取る處を埴安とあるも埴黏といふよしなり。さて土黏の爾禰を約めて爾といひ、也を與に通はしてあをによしと云へるなり。

【石】萬葉集種々に出でたる中に、青丹吉とかけるぞ正義なるべき。又木路に入り立ち、又國中ことごとと續けしはいかなることぞとも聞き知りがたし。強ひて試にいはば青丹吉奈良山を踰え紀路に入るといふ義なるを、奈良の詞を省きて木路に入りといはれしにやあらむ。さらば枕詞にあらず。

【檜抓】青土は蒼土なり。蒼土とは只なべての土をいひて地は黃といふ類なり。綠青などの事にはあらず。奈良と連ねたるは地を平して都を開かれたるよしなり。大和國風土記殘篇に云『此國者往昔山岳多而平地少矣云々。是當昔鑿レ山平鄕故鑿レ山開レ谷爲二平夷一』とあるは一國のことなれど、神名帳に奈良に奈良豆比古神社鎭坐る。都を開き給ひし功の神を祭れるなるべし。云々。

【黑】大土よしなり。都をつくるには大土を平すよりいふ言なれば元は奈良に限らざりしなるべし。但し祟神紀

の軍人のならししより出でたりと定むべし。

青はたの　木旗の上萬一　忍阪山萬三　葛木山萬四

この枕詞も接續の義明かならねど、古くは青葉繁りて取り圍める山を青垣山といひたれば、廣ごりたる山の青々と繁りたるを旗に見立てて、これを山城の木幡山、大和の忍阪山、河内の葛木山に冠らせて比喩となしたるなるべし。

【仙】かつらの木に這ひかかりて手の長く繁くしてかかりたるは青旗に似たれば、葛城山と續くるなり。青旗とは、葬具に侍るにや。

【管】青旗の木はた。天子、皇子等の葬禮に旗をささげて御送仕うまつる、其旗をよめるか。木幡とは木にそのはたをつくることなり。又木にかつらのはひ上りて、その末の其木にはひあまりてなびく體の、旗の手のやうなれば青旗の葛木山とつゞけたり。

【匠】青丹吉、隱來の奈良・泊瀬に限りたるやうの枕詞にはあらで、木の茂り葛のはひのぼれるが青き旗をたてたるやうに見ゆるを喩へてよめる心なるべし。

【考】青幡之忍坂山は云々、試にいはゞまづ青旗といふを思へば推古紀に旗に書き繪ふとあるは、佛の國の青旗の如くて且襲をも着けたるか。忍坂はもとおし坂を略ける語なれば青旗の襲と續けしにや。木旗の上云々、木は小の誤とす。そはさが嶺の小嶺、玉匣の小筐などの例よいへり。青旗はいづれも白き旗のことなり。

【摘】木旗は小旗にて、小旗はいと多し。さて小旗の色は緋と黄なるをよしと貞觀儀式に記せり。但しこれは帝

の後のことにて、それより前は青きを用ひけむ。さるを多くもておし行くなれば、青旗の押の意にて續けたるにや。又青旗乃と今本に當てたる此弭字は陽字の誤なり。

【補】こは青葉葛にてつらの反た、青葉葛といふ。よりて葛木にかけ、その木より木幡もて木葉葛と續け、忍坂にかけしはおを略きて放りといふによせてなり。

【解】こは綾織の羅服といふ意に忍坂に續けたるなるべし。そきとさかと音通へばなり。又一考には青幡は青陸田の義ならむ。青は青山、青山垣など多くいへる青にて、蔬菜の類の青々としたる陸田をいふならむか。さて忍坂と續くは青陸田の榮といふ言に阪の言にかかれるならむか。大神景井云、出雲風土記に大草郷云々、須佐乎命御子青幡佐久佐日古命坐故云二大草一。又高麻山郡云々、古老傳云、神須佐乎命御子神幡佐草昭命、是山上麻蒔祖故云二高麻山一云々。この神名も青幡佐草と續き又大草と云ひしことと麻蒔と云へるなどを合思ふに、青幡は青陸田なることしるければ今をも准へ知るべし。さて忍阪山の青々と繁り榮えたるを青陸田の如き忍阪山といふにやといへり。

雅澄云、青旗の葛木山云々、こは綾織の義ならむ。さるは古綾を青とも通はしいへりしかと思はるるは、神代紀に吾屋惶根尊又青橿城根尊とあればなり。南部巖男云、綾織の華青とつづけたるならむといへり。さるよしにてもあらむか。景井云舊本に青旗とある旗は弦の誤にて青弦の葛と續けたるにやといへり。

【石】忍阪云々。こはおさの二聲にかけて、青旗の如く外に發り擴る山と續けしなるべし。おは外に發の靈、外を結ぶ義なり。さは擴り騒ぐの靈なり。

【攷】青旗は考に白旗といふとあれど、實に青き旗なるべし。常陸風土記に〈葬儀具〉現に赤旗青旗とあるをいかで誤と定めん。又木幡の木は小の借字にて小き旗なり。

【黑】あをはたは大旗なり。こばたは田舍にてこばたといふ。これは高旗に對する名なり。

【美】青旗乃は諸註いづれも旗の字を正字として孝德紀の葬制と常陸風土記とを引きたれど、そは仙覺抄の說に誤られたるものにて非なり。又考にこれを殯宮に立たる白旗なりといひ、又木は小の誤にて、小の發語を置て重ねいふ古歌の文なりといへるもいかゞ、白馬を青馬といへるなどは故あることにて別事なり。代匠記に云々とあるに從ふべし。

青淵の　深き　鈴屋集

本居翁の鈴屋集に青ぶちの深きと續けたり。青き淵は底深ければ人の心の深きに比したることかくれなし。

あをみづら　依網（よさみ）の原　萬七

萬葉に「青角髮（みづら）依網の原に人も逢はぬかもいは走（ばし）る近江あかたの物語せむ」の如く青みづらよさみと連ねたり。これも諸說あれども角髮即みづらは上古男子の結びたる髮にて後世の總角（あげまき）の類なるべし。あをとは淺稚に稚、翠髮になどある翠の意にて色黑々と麗しき髮を褒めたる詞なるべし。而して髮はよせて束ぬるより依網（よさみ）池に冠らせたるか。

【管】青みづらとは青きかつらなり。依網が原は名所なり。髮をみづらとはいへどもここは青きかづらなり。かづらの長くはひよりて網をあむが如くになればかくいふなり。

【考】依網原は河内國丹比郡の依羅をいふなるべし。角髪は訓を借りたるのみにて蔓のことなり。こは神代紀に天の青葛を生むとありて、このよさづらは匏の葛にて葉も華も青ければ、青みづらともいひて、よさみとはいひかけたり。

【摘】青角髪は假字にて青水蔓なり。青水蔓は川菜にてぬなはのことならむ。天のよさづらとあるもこれなるべし。

【一言】青は髪の麗しきをいふ。髻は髪をよするものなれば、よさと掛けたり。

【解】集中に若草を髪にたくらむと詠めるを思ひ合はすれば、古は髻には若草などを結び付くることにして、そを青角髪と云へるなるべし。さればその若草を青髻に依羅むといふ意にて依網にいひ掛けたるなるべし。南部嚴男云、こはよさみは三河國碧海郡にあれば角髪と書けるは借字にて碧海面、依網といへるにはあらじか。

【石】みづらは束髪にて、青は褒詞なり。色の青く麗しきみづらをいふ。よさは善の詞の働くよさなり。青束髪善しといふ義なるを與謝見の地名に續けたり。

【旋附】青角髪は美とかけたるなり。青の阿は宇波の約なれば、上緒にて髪を緒もて揚げ結ぶ意なり。又美豆良は結揚げたる髪の邊をいふ。今の鬢づらといふもこれなり。男子は總角の頭ぞさかりに花やぎて美しかりければ、その結ひ揚げたる容貌をほめて青髪美といふを依網に冠らせたり。

【黒】青海面なり。依網とつゞく。又青眞蔓吉と云ひかけたるなるべし。

【折】あをみといふのが植物の名で、つらは蔓草の總名に用ひるのが常で、その草に出來るよさ（瓢、よさづら）

といふところからよさみと續けたのではあるまいか。

青　柳　の　葛木山萬四、新古一　細き眉根萬十九　いと絶えず古今序　いとつれなくも後二　いと定めなき拾十三　いとど新古今八　はる路川萬十四

古俗青柳を鬘にする風ありしより同音異義の葛木山に冠らせ、又佳人の形容に柳眉などいふより細き眉に比し、三代の頃には柳の糸といふより、これを最の意なる副詞のいとに轉じ新古今にはいとどとも用ひたり。萬葉十四の東歌は波良路可波刀と續けたるは波良路とは地名と聞ゆ。鹿持の萬葉名所考にいへる如く下總の印旛郡の原とすべきか、或ははらぢと訓むべきか明ならず。青柳の春といふを類似の音をもてる地名にかけたるか。萬葉「排花くれなゐ色に匂ひたる面輪の中に青柳の細き眉根を云々」新古今「白雲のたえまに靡く青柳の葛城山に春風ぞ吹く」後撰「青柳のいとつれなくもなりゆくかいかなるすぢに思ひよらまし」新古今に「君なくてよるかたもなき青柳のいとど浮世ぞ思ひみだるる」萬葉「あをやぎの波良路可波刀（はらぢかはと）に汝を待つとせみどはくますたち戸鳴すも」

【仙】柳はかつらに似たれば青柳の葛城山と續けたり。

【考】柳の鬘の義にて續く。柳のかつらとは柳の條して造りて頭にかくる鬘をいへり。

【解】萬葉十四に「青柳のはらろ河門（かはと）に」と續けしは、柳の芽の張るといふ意をはらの音にいひかく。波良路（はらろ）は地名、又はらろは張有（はれる）にてもあるべし。若し然らばたゞに柳の芽の張る河門にて枕詞にあらず。

【石】青柳の葛木とは青柳は即ち葛なりと續けしにて、青柳の葛といふにあらず。

いの部

いかご山　いかが萬十三

萬葉に「いかが我せむと續けたり。同音を重ねて調をなさむが爲に置けるなり。伊香胡山は近江伊香郡にあり。◇「劍太刀鞘ゆぬけいでていかご山いかがわがせむ行へ知らずて」

いかりおろし　いかにして萬十一

萬葉に「大船のたゆとふ海に碇おろし如何にしてかも我こひやまむ」とあり。頭音を反覆して連ねたり。こは序歌の第三句にして、一方に於いては強き情熱を抑ふるに、重石(いかり)を下して船を止めむとするが如くせむと自ら奮鬪の意を利かせたり。

いかり繩　苦しき拾十一

拾遺に『湊出づる蜑の小舟の碇綱苦しきものと戀を知りぬる』とあり。ここの碇綱は序歌の第三句にして、それを手繰るといふくるの音を、情緒の苦しきに轉じたるなり。

【解】舟泊して下せし碇綱を、出船には又手繰り上ぐるを戀の苦しきに云ひ掛けしなり。

いかるかの　因可(とるか)の池萬十二　怒る漫吟集

萬葉に斑鳩(いかるか)の因可の池と續けたり。斑鳩は大和の法隆寺境内なる地名なり。契沖及び綾足は枕詞として擧げたれ

ど唯大字小字によりて地名を並べ擧げたるものならむ。近世のものにては畏神の六首長歌に『いかるがの怒り』とあり。鳥の名より人の怒ると頭音反覆の法によりて連ねたり。

【紹】此鳥己が友どち、よりて遊ぶをもて円可(よるか)の池にいひかけしか。又池は斑鳩の鄕にありて冠言にはあらぬか。円可の池の宜しきと續けたるは冠言なり。八雲御抄によるかの池津の國なりとあるは、鳥飼川の次に出でしを誤にや。

池水の　言ひいづる後十五　そこに拾十九

後撰には『池水のいひ出づることの難ければみごもりながら年ぞへにける』とあり。拾遺には『池水のそこにはあらでねぬなはの來る人もなし待つ人もなし』とあり。拾遺のは池水の底と云ふより同音異義語の其許(そこ)に轉じたるもの、後撰のは、上田秋成は、何を隔ててみごもりへかけたりと言ひ、殘學は『池の械(いひ)』とかけたりといへり、思ふに水を引きて他に流し出すところを古は械(いひ)と呼びたれば池水の械(いひ)を出づるといふを、詞を言ひ出づると掛けたる說佳なるべし。但し水隱(こも)りといふも緣語なることは勿論なりとす。

いさなどり　近海の海紀、萬二　海萬一、六　濱邊萬六　ひぢきの灘萬十七

允恭紀には海に冠らせ、萬葉二には淡海の海とも、海邊を指してとも連ね、同六には海かたづけてとも濱邊を淸みとも續け、同十七にはひぢきの灘とも連接せり。紀『とこしへに君もあへやもいさなどり海の濱ものよる時々を』『きのふこそ船出はせしかいさなどりひぢきの灘をけふ見つるかも』萬葉には鯨魚取とも、勇魚取とも、伊佐魚取とも、不知魚とも記したり。古くは鯨魚取はくぢらとりと訓みたれ

ど、すべていさなどりと訓むべし。鯨をいさと訓みたること壹岐の地名にあり。魚を古くなといへり。よりて鯨魚取海と續けたりといふ說あり。又考ふるに海川に限らで波の立つ所をいそと呼べり。されば磯魚捕るの義にて、海、河、湖、沼などのいづれにも掛けたりとも見らるべし。又漁火、漁場などのいさといふは、あさると同じく誘ふと同根の語なれば魚を誘ひ捕る義とも解せらるべし。この三說中磯魚捕の說正しきか。

【仙】いさなどりといふは捕魚の詞なり。海と續けたり。捕魚の義なるが故に鵜の字を諷頌す。

【[illegible]】鯨とる海とは鯨の海を領する心なり。淮南子に鯨鯢魚之王也云々。魚中の王にて海を取る心なり。世を取り國を取るなどいふに同じ心なり。亦いさな取る海と詠めるも鯨の名なり。鯨取と書きたるところをいさなとると訓みても同じことなり。鯨伏といふ所壹岐にあり。又淡海の海と續けたるは鯨鯢は總じて魚の王ならむには、萬の魚のあらむ所は、水海にてもなほ領すといふほどの義なるべし。

【厚】鯨取をもとは鯨取とよみけるを、仙覺抄にはいさなどりとよめり。されど捕魚の詞なり。いさりといふが如しと註しあるは誤なり。さる意ならばまづいさなとると點ぜらるべきを、衣通姫の歌にいさなとりとあれば、さはえ點ぜられざりしなり。

【考】勇魚は鯨を賞めたる詞にて、且つ海つ物の中、かの魚の王たる鯨を取るを以て大海の稱として冠らせしなるべし。それより轉じて濱とも灘とも云ふは冠辭の例なり。近江の海と續けたるは海と云ふへ續くなり。

【摘】鯨を取るには他魚を捕るに違ひて、多く舟に乘り鯨子を以て勇みて取るにより勇魚取とはかけるなり。鯨の勇むなどといふ意にあらず。又いさなどり、ひぢきの灘、これは磯菜とり、ひぢき藻とりと續けたるなり。

【一言】考の説の如きか。又一説にさとそと通ひ、なはのにて、磯の鳥獵とかかるといふ。

【守】山彦册子にいは發語、さなとりは潛魚取なり。すなどりと云ふもいさなどりのいを省けるにてなはこの借魚なり。即ちいは發語、さなとりはすなどりと通ひて漁る海と續けしたり。

【石】いさなどりは漁魚(いすな)といふ義なるを、すなをさと約めたるにて、なは魚なり。こは枕詞にあらず。浦、濱、灘等海人の魚獵する處をとりいでて續けたるなり。

【美】いさなどり。考の説に從ふべし。然るに荒木田久老の日本紀歌解又萬葉集槻落葉、信濃漫録又は橘守部の山彦册子、稜威言別などにいとむづかしき説あれど皆わろし。

【通】磯魚取にて海の枕詞なり。

いさなの　勇しく

和田巖足の集には鯨魚の勇しくと同音を重ねたり。

いさや川　いさ萬十一、古今墨滅　いさめて藤垣内集

萬葉及古今にいさと連ねたり。「犬上のとこの山なるいさや川いさと答へて我名もらすな」とあり。いさは不知の字に當る。同音反復の法によりて連ねたるものなり。藤垣内集には之を轉じて諫めと續けたり。

【留】いさや川いさとかけん爲にのみ。いさとは字に不知、事、去來等と書きて、事の據(わけ)なく進み立ちて行くを云ふなり。

いざり火の　ほのかに萬十二、十九、後撰、拾十二

萬葉、後撰及拾遺にはほのかにと續けたり。遙に漁火を望めば忽ち明く忽ち暗くしていと仄かなるより、これを人事に比したるなり。拾遺のは『志可の蜑の釣にともせるいさり火のほのかに妹をみるよしもがな』に於けるが如く序歌の第三句なり。

【吉】はとは火光なり。漁火の火光の如く、上に露れ出でなむと比したるなり。

いしたぶや　天馳使（あまはせづかひ）記

古事記八千矛神の歌の末章にいしたぶや天走使云々と見えたり。天馳使は急使なり。いしたぶは石つぶての古言やは助辭。されば礫の飛ぶが如き早き使と續けたるか。古史部とあるは馬使部のこと。天馳使とあるもその義ならん。

【厚】たとと通ずれば石飛礫にて飛礫の事か。……(中略)……かく宣ひかはす詞は譬ばつぶての如く空飛使也と宣ふにや。

【重】隔てたる嶮道をも言間にも飛鳥の空飛如と譬へたるか。

【傳】いしたぶやは拍子の詞なり。或は急ぎ飛ぶ義とも云々。

【冠】石たぶやは天走使ともいはむ冠言なり。天走使は神代に事の俄かなる時、御使ざねの空を飛び翔りてゆきけむ、それを云ふなるべし。その空ゆく樣は、石をつぶてに投ぐるに等しとや喩へけむ。たぶてはつぶてといふ。音自ら通へり。

石まくら　苔むすまで萬十三

萬葉卷十三に石枕苔むすまでとあるを石上枕詞例に、の如くと比したりといへり。但しこは枕詞にあらず。

いすくはし 鯨記

神武記に鯨に冠らせたり。いすは魚の義、くはしは花細し、浦細しなど物に優る意にて褒むる詞。古は鯨は魚のすぐれたるものと思惟したればかく賞詞を置きたるなり。

【考】鯨は鰐などの如く畏しげにあらねど、淮南子にこれを魚王なりとも云へる如く、大魚の長なれば褒めて勇魚といふなるべし。くはしとは名細し花細しといふ類なり。

【補】磯にみてる鯨と續けたり。すとそと通へばいすは磯なり。細しはすべて物のくまもおちぬるをいへり。されば細やかなる心もあり。又廣く滿てる心もあり。

【守】山彦册子一に云、厚顏抄にすとさと普通へばいすくはしは『勇細し』なり。鯨を勇魚といふ云々。日本紀解には稜威細なり。つとすと普通へり。と思ふにいすくはしのいは發語、すくはしは潜魚細しなり。この續てふ語の例を考ふるに、香細、名細、花細などの如く皆體言より續けたれば勇細、稜細などはいふべからず。

【苑】勇むことのくはしき鯨といふ續にて、さむの反すなり。

【石】いすは魚の總名なり。魚の中にてよろづ調へる鯨と置きたる賞詞なり。

いそ貝の 片戀に萬十一

萬葉に片戀にと續けたり。磯邊に打寄する貝は多く壞れて片々なるが常なれば思の成就せぬ戀に比したるなり。

『水くぐる玉にまじれる磯貝の片戀のみに年は經につつ』

【考】こは何の貝にまれ、割れて片貝となれるが磯波の中に玉に交りてあるをいひて、片戀に冠らせたり。

磯松の常にいまさね 萬二十

松の常磐堅磐と比したる意にて恒にいまさねと續けたり。枕詞解に擧げたり。『はしきよしけふのあるじは磯松の常にいまさね今も見るごと』

いそのかみ

降る萬四　ふるの命萬六　古りにし古十九　古き行幸千二十　ふりはつる詞一　珍しげなき拾遺　ふるの中道古十四　ふるから小野古十七　古巣丹後守家百首

武烈紀に布留を過ぎと連ね、又萬葉に布留の里、ふるの神杉、ふるの高階など續けたるは、大和の國山邊郡石上鄕の内なる布留といひ下したるものなれば枕詞にあらず。萬葉にふるとも雨にと云ひ、ふるの命といひ、古今にふるき都ともふりにし戀とも云ひ下したるは、布留といふ地名を降る、古るに轉じたれば枕詞なり。千載二十に古き行幸と續け、詞華にふりはつるとも連ねたる類多し。又拾遺には翻案して珍しげなきとも續けたり。◇『石上降るとも雨にさはらめや妹に逢はむと言ひてしものを』『いそのかみ古き都の時鳥聲ばかりこそ昔なりけれ』『春くればまづぞ打見る石上珍しげなき山田なれども』『散花もあはれと見ずやいそのかみふりはつるまで惜む心を。』

【仙】いそのかみと云ふはそのかみと云ふによそふるなり。いは發語の詞なり。

【栄】布留云々、古この川にて女の布を洗ひけるに、水上より劍の流れたりけるが、當る土石草木たまらず切けるに、この布に纏れて留りたるより名づく云々。

【考】布留てふ所の名を以て、雨のふるに云ひかけたり。振てふ名の始を思ふに、天の神高倉下が夢中に劍を降

し賜ふ條に見えたる布留御魂の劍の、石上の神宮に坐すが故に、そこを布都ともいひけむ。後には語の通ふまゝに布留とは云ふなり。

【南】大和の石上にふるてふ地名あればかく續けたり。一說にいは發語にて昔時舊なりといへり。

【補】今案、契沖云、石上布留と續くる時もいそのかみを枕詞といひ習へり。但しそれは片岡の朝の原などいふごとく、石上といふ所に布留はあれば、梓弓とて春とも磯部とも續くるには變るなるべし云々。

いちさかき　肉の多けく記

神武天皇御製の長歌に『いちさかき肉の多けく』と連ねさせたり。いちさかきは守部のいへる如く常磐樹にて、比さかきのことなり。赤黒く紫ばみたる實の多くなるゆゑに鯨の肉の多くと喩へたるなり。

いち柴の　いつしか萬

萬葉にいつしかと連ねたり。類音を打重ねて枕詞としたること續貂にいへるが如し。いち柴とは櫟の柴を云ふなり。◇『大原のこのいち柴のいつしかと我思妹にこよひ逢へるかも。』

いつしば原の　いつもいつも萬

萬葉に『道の邊のいつ柴原のいつもいつも』と連ねたり。續貂に擧げたれど序と見るべきか。

いとのきだ　短き萬五

萬葉五貧窮問答に、短きと續けたりと冠辭考に擧げ、糸の段短しの義と說けり。こはいとのきて（即ちいと特別にの義）といふ副詞句を誤りたるなるべし。

いなのめの　明け萬十

萬葉に明けゆきにけりと續けたり。寢の目の明くと比したり。◇「相見まく飽きたらねども稻の目の明けゆきにけり船出せむ妹」

【童】いなのめとは曉をいふなり。

【管】いなのめは曉なり。稻のほに出そむるをいなの目といふ。それに夜のほのぼのとあくるを喩へたり。

【考】いなのめはあしたの目てふ語なり。目のあくを夜の明くるにことよせたり。神武記にあさめよくとあるを紀にはねさめたるあしたとあり。これ共に同事を云へるにて、且あさとあしたとは同語なり。あしたのあしを反せばいとなり、たとなとは輔通へり。然らばこは、あしたの目てふ意なり。又寢目明くとも心得べし。

【摘】或説に旦の目といひ又寢の目ともいへど、さは冠辭の例に違へり。試に云はば犬楓の色の緋なれば、いなのめのあけとは續けしにや。犬楓の名は傳らねど、犬蓼、犬薊の例にて、春紅く秋紅葉せぬ楓を云ふなるべく、その芽の紅きとかけたるなり。

【講】稻目はかなの通にて東雲といふことなりと。又はいなと寐といひ通はし目といふより明行くと續くるか。

【解】稻の芽といふなるべし。目とは群の切、さて明くとかかるは熟らむといふ意にいひかけたるなるべし。稻の熟するをあからむと云ふは古言にて日本紀にあり。

【燈】いなのめは寢の眼なり。しののめは眞寢の眼なり。しぬはさぬに同じ。

【折】いなのめ云々、篠の間といふことがあるから此も稻の間であらう。

稻舟の 否萬十九 心輕く後十二

古今の十九には同音を重ねて否と續け、後撰十二には心輕くもに比したり。稻舟とは稻を積みたる舟をいふ。古多く最上川によめり。◇『最上川のぼれば下る稻舟のいなにはあらずこの月ばかり。』『最上川深きにもあへずいな舟の心輕くもかへるなるかな。』

いなみづま又いなびつま 浦箕(うらみ)萬四 辛荷(からに)の島萬六

萬集四には『稻目都麻浦箕をすぎ』と續け、同六には辛荷の島に冠らせたり。稻日都麻を千蔭の萬葉略解にはいなみづまと訓み、石上にはいなびつまと訓めり。又萬葉十五には白波高みと連ねたり。いなびつまは夫の心を酌まぬ妻を云ふか。されば恨のあるべきより古見の里にかけ、又辛き情といふより辛荷の島にかけたり。辛荷の島は播磨の室(むろ)の西南一里にあり。今は訛りて辛味の島といへり。古見は備前國誌に所載せるとは異りて播磨の内なるべし。

【略解】いなみは播磨の印南にて、つは助辭まは島の略なりと爺いはれき。或人云、好忠集にいなきつまといふことあり。こは近江の地名なり。さればつまは其邊といふことかと云へり。地名と見る時はこの說よろし。

【石】いなびつま、否び妻は我につらき夫をいふ。そは必ず恨あるが故に浦箕といふ地名に續けたり。又否び夫を思ふはいと辛きものゆゑこの義を辛荷の地名に續けたり。

いなみ野の 否と拾六

拾遺に『をみなべし我に宿かせいなみ野の否といふとも』と同音を反復して用ひたり。いなみ野は播磨にあり。

今は印南といへり。

いなむしろ　川添柳紀　川萬八　しきて萬十一　伏見の里月清　敷津の浦歌合

顯宗紀には川添柳と續け、萬葉八には川に向ふき立ちと連ねたり。又萬葉十一にしきても君を見むと連ね、新古今には折り敷くとも、月清集には伏見の里とも、住吉歌合に清輔朝臣は敷津の浦とも延らせたり。結の續は古來諸說ありて明かならざれど、荷田春滿のいへる如く、稻莚(いなむしろ)は古は皮にて作りたれば同音の川に續けたるか。或は革にて作りたる綏室川の敷物のかば〳〵と鳴る音によれ續けたるか。その他のは席の緣語にて敷くといふより、敷津といふ攝津の地名へかけ、又切りにといふ副詞のしきてもといひ下し、或は臥すといふより山城の伏見の里へ轉じたるなり。◇『いなむしろ川添柳水ゆけば靡きおりたちその根はうせず』『いなむしろ敷津の浦の松風はもりくるをりぞ時雨ともしる』『秋の霜しくとは見れどいなむしろ伏見の里は月のみぞすむ』

【私記】師說稻之莚ㇾ推二于水一折臥之形似ㇾ敷ㇾ席故、云二稻席一。又曰假爾須呂乎云。又曰俗編ㇾ柳作ㇾ席乾ㇾ稻之備故云、

【管】いなうしろ河にむきたちのいなうしろはいなむしろなり。日本紀に云々、柳の枝の水に靡き臥したる稻の筵を敷きたるに似たれば斯くいふと云々。さて後々の歌に岸の柳のいなむしろなど詠めり。然れば河柳をいはん爲にいなむしろとはいひ出ると聞えたり。ここの歌の詞は柳といふ詞なくて只河にいひかけたり。先賢の說に水の底に石の敷る如くなるをみなむしろといふとも云へり。亦水の底に生たる藻の稻むしろに似たる故にいなむしろ川とはつゞくともいふ。これら皆心々に思寄りたる所を釋するものなり。

【契】以上いづれも覺束なし。是は只河とのみ續けて偏に河の枕詞なり。河と續くるに二義あるべし。一つには

河の面の青やかにて平なるを稲筵をしけるに似たりとていふか。二つには出雲國造神賀詞に彼方古川席、此方古川席云々とあり。下に別に藻とも草とも云はで生立といへり。その處にも香の生ひしくをば羅席とよめり。殊に川の面に生る香なればそれを稲席に似せて河とは續けたるにや。

【考】荷田大人のいはく、寢席皮といふを川にいひかけたりと實に然り。寢る席といふ語を約めて下へいひうつすとていなむしろとは云へり。又萬十一のは皮とは續けねど、寢筵を敷くといひかけたるに、右の歌どもを對へて皮席とは知らるる。

【摘】貞觀儀式に輔射物以二牛皮一爲レ之とあり。延喜式、掃部式には之を射席と書ければ、射物とかけるもいなむしろとよむ事明なり。此は席あからさまに上に立て射る料だに牛皮もて作りたれば、まして常寢るときの席をば古くは皮を以て作れることを知るべし。

【辨】秋の青藻にて織り編みしより、稲の香のいとかをるといふか。の一香もて川と續けたるなり。

【解】稲筵なり。河と續くるは南部巖男云「こは強といふ意にとりなして續けつらむ。稲筵は靡ばれるものなればなり」と然るべし。

【稜言】寢席かはと係たるは交すと掛るなり。交すとは夫婦寢席を今俗に比翼御座といふ物の狀に剌合せて用ひしをいふ。さる故に床の筵を常に多く狭莚とよめり。さむしろは剌筵の義にて幅三尺の筵を二枚綴合せたるを云へり。古き繪卷物の御座によく見ゆめり云々。萬葉十一に『いなむしろしきても君をみんよしもがも』と續けたるもあれば疊の上に敷用ひしなるべし。

【冠】契沖の說にいなうしろはいなむしろに同じ。稻莚は稾莚なり。川と續くるは河苔の生ひ靡きたるが、稻莚を敷きたるやうなればなり。式に古川席といふはこれなり。古今物名にかはな草とあるもこれなるべし。

【思】稻席かはと續けたり。かはは鳴る音なり。たくぶすまさやぐが下とあるを思ふべし。

いにしへの　しづのをだまき古十七

古今に『古の賤の苧環賤しきもよきもさかりはありしものなり』とあるを殘夢は枕詞として三代枕詞例に擧げたれど然にあらざるべし。

【三】古民のなべて着たる倭文布の苧玉といひ下して賤しきもと受けたり。

犬じもの　道に臥して萬五　おぞき夷嚴足集

萬葉五の長歌に『道に臥してや命すぎなむ』と連ねたり。じものは本居大平のいへるが如く狀之の意にて、の如くといふに同じかるべし。和田嚴足の集におぞき夷と喩へたり。

【考】犬は道のまゝに打臥も死もするものなるを、旅路ながら死ぬことに譬へたり。さて犬じ物とは鵜じもの、馬じものなどの類にて、犬なるもの、犬といふものなどいふ意なり。

【記】大平云、自物は狀之なるべし。ざまとじもと音通へり。鹿自物は鹿狀之にてこの類皆同じ。

【荒】犬じものは犬じくものにて、思へりしくも、玉拾之久などあるしくに同じく、そのさまをいふ言なれば始の音に近し。

【辨】こは犬間物にて、ざかの約ざ、ざひの約じなり。よて犬間物といふ。鳥自物、鵜自物、男自物など讀めり。

各間の義なり。人間といふに等しく夫々の物にはそれが間あり。かくていふ心は夫とあるものといふが如し。

【一言】じものは如しといふに同じ。

【解】じものといふは言の本義は詳ならず。如くといふ意と同じこころばえの詞かとも思ひしかども然らず。さては萬葉十一の『男士物屋こひつつをらむ』又續紀聖武天皇詔に愚士物とも畏自物云々などいふ。枕詞にあらぬをは如何にともすべからず。

岩くやす　畏くありとも紀

仁德紀に畏くありともと連ねたり。岩石を崩すが如くと人事の畏きを比したるなり。『みかしは播摩速待岩くやす畏くありとも吾養はむ』

【考】高山の岩根のくえて今落ちぬべき様なるを、仰ぎ見れば心消えて恐しきものなるを、畏しといふに喩へたるなり。

【石】こは岩崩なすといふ義なるを、えあをやと約めたるなり。石崩の崩はれ来るが如く怖しくよも比したるなり。

【燕】こやすは然する言なれば、岩がみづから臥(こや)すにて、倒るる意か、然らば岩くやすは岩こやすの意なり。

岩く江の　悔ゆべき萬十四

萬葉十四に『鎌倉のみこしの崎の岩くえの君が悔ゆべき心はもたじ』とあり。岩の崩れの意あるくえの語よも君がと詞を隔てて、悔といふ類音へ轉じて冠らせたるなり。

いはしみづ　言はで古十二

古今に『逢坂の關に流るる岩淸水いはで心に思ひこそすれ』と連ねたり。いはしみづは序歌の第三句にして、一首の上よりいはば比喩に用ひたる外に、頭音いはを反覆して云にうつしたるなり。

岩　瀨　山　言はで六帖三

古今六帖三にいはでながらのと續けたり。頭音反覆の法による。『岩瀨山いはでながらの身のはては思ひしごとく誰か告げまし』

岩そゝぐ　岸萬七

萬葉七に『石灑岸の浦廻による浪の』とあり。眞淵は灑は際の字の誤とし、いそがくれ岸と訓み。服部高保はいはそそぐと訓めり。浪の岩に灑ぐ浦といふ續にて枕詞ならざるが如し。

【眼】岸の浦てふは地名なり。そそぐといふは水にて岩をすすぐことなり。岸はここは小涯のきしと心得べし。

いはたゝす　少名御神記

記に石立たす少名御神と續けたり。岩たたすは神の御像を石に訓して建つるをいふ。少名神は醫藥その他人間の爲に盡されたること多ければ、到るところに石を立てて祀りしより掛けたり。但し立たすは神の遊ばす意に書けり。

【石】こは齋ひ立たす少名御神といふ義にて稱言なり。

【紹】神功紀に常世にいます岩たたす少名御神とあれば（たたすは立つを延べていふのみ）今も常世國に常磐如

立たせましますへ神ごとの義なり。

岩つゝじ　言はねば　古十一

古今に『思ひいづる常磐の山の岩つゝじ、いはねばこそあれ戀しきものを』とあり。四音を反復して續けたり。序歌の第三句なれば、續貂には上三句即思出づる常磐の山の岩つゞじ十七言を冠とせり。

岩づなの　をちかへり　萬六

萬葉に石綱乃又變若反と見ゆ。考には岩づなの又若かへりと訓み、荒木田久老は又をちかへりと訓みたり。石綱とは契沖のいへる如く、石に生ずる蔦なるべく、蔦類は蔓這ひ延びては又本に歸るゆゑ、老齡の又若かへらむと比したるなるべし。◇「石綱の又をちかへり青丹よし奈良の都をまた見なむかも」

【考】石綱は石羅（いはつた）のことにて、集中につぬさはふ石とよめるに同じ物なり。顯宗紀の室壽の御詞に築立稚室葛根（つきたつるわかむろかづらね）とあるも、式の大殿祭祝詞に下津綱根てふに同じことなるを、葛とも綱とも書きたり。さてその蔓の這ひ別れては又這ひ歸るものなるを、人の老いて又若がへらむ例にいひ冠らせたり。

【解】石綱は契沖の說の如く、又變若反は荒木田の說の如し。

【石】いはづなは石に生ずる苔の名なり。

岩にふり　われて物思ふ　萬十一

萬葉十一のわれて物思ふと續けたる序歌を續貂にあげたれど枕詞にあらず。「高山ゆ出でくる水の岩に觸りわれて物思ふ妹に逢はぬ夜は」

いはゞしの　近江萬一、七　間近き萬四　神南備山萬十三　遠き心はおもほえぬ萬十一

萬葉には近江國とも、近江縣の物語とも、間近き君にとも、間々に生ひたる貌花のとも、遠き心は思ほえぬかもとも續け、又甘南備山とも連ねたり。石橋とは小川の中に所々巨石を並べ置きて里人の渡るに便せるものをいふ。よりて石と石との間なるより間々とも間近きとも連ぬ。遠きと續けたるはこれに反するが如くなれど、こは石上珍しげなきに於けるが如く、遠き心はおもほえぬかもまでに掛れるなるべし。甘南備山に續けたるは眞淵のいふ如く語を隔てて並みと續けたるか。近江と續けたるは、契沖の說の如く石走はいはばしると訓みて、岩上を走る水は泡沫を生ずるより、泡といふ音を淡海に掛けたるならむか。◇『青みづらよさみの原に人も逢はぬかも石走る淡海あがたの物語せむ』『飛鳥川あすも渡らむ石走の遠き心はおもほえぬかも』『うつせみの人目をしげみ石走の間近き君に戀わたるかも』

【燭】近江と續けたるは、彼の湖の水、勢田より出て、田上を過ぎて宇治へ流れ下るに、石を走りて流れゆけばかくよめるなり。(僻案抄はこの說による、)

【代】石を走る水は沫となれば、その意にて淡海とも續くるなるべし。あはうみといふべきをはうの切ふなれば改めてあふみといふなり。

【燭】かんなび山に續くるは、神の猛き力は磐をも裂きて行通るなり。道速振の義なり。よつて石走る神なびとは續けたるなり。亦獅子虎狼の類は獸の中の神といふなり。かやうの猛獸は岩蔭をも容易く踏み通ふなれば、これをも石ばしる神とはいふべし。

【考】石ばしとは川に石を並おきて渡るをいへり。さればその石々の間の近きを以て、君と我住所の近きに譬へ又近きといふことの裏を反して、遠き心は思えぬといふ。又甘南備山に云々、こは神の語を隔てて並と續けたるにや。淡海に續けたるは、間近しとも間ともいへるに同じ字にて、石橋の間（あはひ）といふを淡海のあはにいひ掛けしなるべし。

【解】近江と續けたるは、石を走る溢水といふ意に續くるなるべし。水の多く沸ち流るるは、石上を迸れば溢水といふべし。間近きと續けたるは石橋の心なり。又かんなびと續くるは、石走といふに頼て瀧つ瀬の意を寄ませて瀬音の雷鳴（かんなり）振といふ意にて續きたるか。

南部嚴男云、かんなびは組並にて、石を疊むことを組むともいへば、石を疊みたる意にいひかけたり。又あふみとつづく石走は石橋の意にして足蹤の音を近江に掛けたるなるべし。

【補抓】山河などの渡瀬に手ごろの石を置き並べて、そを踏て渡るをいふ。故に間近しとも遠きとも續けたるなり。萬十九天河いしなみ置かば云々このいしなみを石走ともいふ。

【石】谷川の流に人の飛び渡るべく居きたる石を石橋といふ。そは石を對へ合せたれば間有り。よて間と續く。近江と續くるは合の轉用なり。石橋は石相向ひたればなり。神なびと續けしは嚙並といふ義にはたらかせたるなり。石橋は嚙合ひたるが如き形勢なり。

【黑】いはばしるに二種あり。石橋と石階となり。石橋は石並ともいへり。石橋の間（は）と續けたり。あははあひだの約言なり。

いはばしのままに生ひたる貌花とあるは石階なるべし。又石橋のとあるは南備山をいふか。されば冠辭にあらず。

いはばしる　瀧萬一、十五　垂水萬八、二十　多紀の郡縣居家集　水内あがた久老集

萬葉には瀧の都とも、瀧もとどろにとも、垂水とも續け、古今一には瀧なくもがなと連ねたり。山より落ちて岩上を走る水の瀧といふより、瀧の都とも垂水とも地名に轉じ冠らせたるなり。「石走る垂水(たるみ)の上の早蕨の萌出づる春になりにけるかも」縣居家集には瀧といふ意より丹波の多紀の郡に冠らせ、荒木田久老の集には信濃の水内縣と連ねたり。これは岩走る水とかかりて地名にうつせるなり。

【仙】神は岩根のゆゆしき所をも容易く走り通ひ給へばかみといひ出でん、諷詞におく。

【仙】岩走る水はあわの立つものなれば淡海につづく。

【考】瀧のさまをいひ冠らしむるのみ。

【一言】瀧は岩を走り落れば、瀧、垂水、近江と續けたり。垂水も頓て瀧のことなり。淡海とはみの字に掛れり。

【冠】いはばしるは大走ることなり。

【折】近江の枕詞としたのは恐らくはいはばしの轉で、足踏みとかかつたのだらう。流れあふと說くのは不可である。

いはひつき　幾代まで萬

萬葉に「天飛やかるの社の齋槻幾代まであらむこもりづまぞも」とあるを續紹に枕詞となせど、こは上三句は序詞にて枕にあらず。

いはぶちの こもる萬十一

石にて圍ひたる淵の如く家に閉ぢこもりてと比したり。◇『神南備のをりたむ崎の石淵のこもりてのみや我戀をらむ』

いは ほ 菅 懇萬十一

菅の根は長きものゆゑ、ねといふ一音を縁として懇（ねもころ）といふ副詞に掛けたり。いはほ菅は岩上の菅の義にて特別の種類あるにあらず。◇『見わたしの三室の山の岩小菅ねもころ我は片思ぞする』

いはほなす 常盤にいませ萬六

年月經ともかはらぬ巖の如くと比したり。◇『春草は後ちりやすし岩ほなすときはにいませ貴き我君』

石 見 潟 恨ぞ深き拾十六、六帖

石見潟は石見の海をいふ。その海岸に浦見などの里ありて地名を掛けたるか。拾遺に『つらけれど人には言はず石見潟恨ぞ深き心ひとつに』とあり。六帖に『石見潟うらみに深み沖つ浪うちよする藻に埋るる身は』とあり。潟といふにつけ。同じ部類の浦といふ詞の所縁によりて連ねたる義もあるべし。

【鉊】石見の浦邊は船泊りすべき便なく、唯深き荒磯邊なれば、浦潟などいふべき所なきをよせとして、恨ぞ深きとはいふ。うらびをうらみに通はせて、恨にいひよせたり。

家 つ 鳥 かけ萬十三

萬葉十三に鷄（かけ）も鳴くと冠らせたり。まづ汎稱を擧げて次にそれに屬するものを示す。記に庭つ鳥と冠らせたると

同じ。野つ鳥、鳥つ鳥などに對して家に飼ふ鳥と置きたるなり。

【考】神樂歌に庭つ鳥はかけろと鳴きぬと謠ふによるに、彼の鳴聲もてかけとは呼ぶなり。

いほえさす　竹田の國　儀式帳

儀式帳に五百枝刺竹田の國と出づ。竹の葉いや茂りて多き意を形容として地名に冠らせたり。ここに國とは後世にいふとは甚狹くして郡に當るほどの地域をいふ。竹田は伊勢の多氣郡にあり。

【補考】竹は枝の繁くさすものなれば、五百枝刺とは冠らしめしなり。竹田國は伊勢多氣郡にあるべし。神名式に同郡竹神社あり。又度會郡に高田あり。これをたけだといふか。

いほへ　浪　起ちても居ても　萬四

五百重も重る浪の立つといふより人の起ちても坐りてもと比したるなり。◇『三崎廻の荒磯に寄する五百重波たちてもゐても我思へる君』

いめ立てゝ　跡見の丘　萬八

射目立てて、跡見の丘と連ねたり。射目と書けるは借字にて射部の義なり。即ち射手の人數を狩場に立たしめて、獸の跡を見しむるとの意より、轉義して大和の地名に掛く。跡見は磯城郡にあり。今外山と記す。◇『いめ立てて、とみの丘邊の撫子の花、ふさたをり吾はもちいなむ奈良人のため』

【管】射目とは弓射るものの眼にたてて鳥を見るといふ心にかくは續けたり。

【燭】狩人の山に入りて鹿を窺ふには、まぶしさすといひて、柴の枝など折かけて、その中に隠れゐて鹿の行か

よふ跡を見て射取るなり。よつてかく續く。鳥見は跡の轉訛なり。

【考】御獵人を立てて、鳥獸の跡所をとめて射さする意なり。射目は射部なり。目と部との語の通ひて且その目は群なり。凡御狩には鷹飼部、犬飼部、射部、跡見部、山守部、野守部などの部々あるべし」かくて射目と跡見は、別なれば、萬葉六に野上には跡見すゑ置き御山には射目立て渡しと分ちてよみ、ここには此の二つ相離れぬことにて、鳥獸の跡處を目とめて射るものなればかくも續けしなるべし。

【年】年々隨筆五卷に考の說を難じて、射目、跡見部各一部の人ならば、跡見の枕詞に射目をいふべくもなし。思ふにいめは後にまぶしといふもの、狩人の隱れ居て鳥獸を射るものなり。いめのいは射、めは目にて、その隙より鳥獸を見るべく構へたるものなり。まぶしのまも目なり。ふしは柴なり。小柴など折り圍ひて身を隱すやうにしたるなり。文選雉賦に射翳とありて翳は隱るる意、まぶしに隱れて鳥をも射たりしかば、射翳構て鳥見と續きたるなり。

【石】いめ人の鳥射むとて構へたる所を射目立つるといふ。めは境なり。守人の各境を極めたる故に射目といふ。俗に、境目といへり。とみは鳥見の轉用なり。

射目人の　伏見萬九

萬葉に伏見が田居にと連ねたり。射部人の鳥獸を狙ふには、己が姿を見せじとて伏し居て見るより、同音なる山城の地名にいひかけたり。◇『巨椋の入江とよむなり射目人の伏見の田居に雁わたるなり』

【燭】いめ人は夢人なり。夢に見ゆる人なり。夢は臥して見る心なりと古人の說皆かくの如し。されど集には射

目人と書けり。射目たてて跡見の岡べと讀めるに同じ義なるべし。

【考】射部人の日伏をさして、臥し隱れゐて狙ひ居るゆゑに、伏見に續けしなり。或説に弓人の伏と續けたりといふは、弓に起伏することと有るを思へるか。されど弓とる人をゆみびとといふべくもなし。まぶしさすとは日伏の斜に柴などをさして隱れ居るをいふ。

【年】射翳の陰なる人の柴より鳥を見るといふ續きなり。

【折】射部即職人を大勢立たして射とめさせるといふ心持で跡見の枕詞とした。

いもが家に　いくりの森 萬十七

妹が家に行くといふより同音を續ける伊久利の森といふ地名に冠らせしなり。◇『妹が家にいくりの森の藤花今来む春も常斯くし見む』

【[illegible]】南部の邊に伊久理といふ神社あり。その森をいふならむ。

【[illegible]】和名抄に山城久世郡に殖栗郷あり。そこなる神の森か。伊久利、恵久利、古書には音通ふを、假名の法則にほださるる人は伊と恵は通はずとす、和名抄に犬を恵ぬといふ。又恵の子とは今も云なり。

妹がうむ　小津の浦 土佐日記

績人の績む苧といふより、をの音を續ける小津の浦と續けたり。小津は今和泉國泉北郡宇多大津の地なり。◇『行けど〳〵ゆきやられぬは妹がうむをつの崎なる岸の松原』

妹がかど　泉川 萬九　入野川 萬七

萬葉九には入出見河とかけたり。こは妹が門即ち妻の家に入り出でといふより山城の泉河に冠らせたるなり。又七卷には出入乃川と續けたり。考には出で入るといふより山城乙訓郡の入野河とつゞけたるかといへり。◇「妹が門出入乃川の瀨をはやみ吾馬つまづく家思ふらし」

【存】略解の說は、出入乃河は卷九。入出見川にむかつて、入出水河とありしを、出入と顚倒し、水と乃に誤るなりといへり。

妹が髮　上小竹葉野 萬十一

萬葉十一に上小竹葉野のと續けたり。上小竹葉野の訓明かならず。あげさゝばのとせば、童女の年頃となれば、今までの振分髮を搔き上ぐる習なるより、髮上げといふあげを上笹葉野といふ地名へ冠らせたるなるべし。源俊賴の「網引するみつの濱邊にさわがれてあげさゝば野へたつ歸るなり」の歌によれば、攝津にあるが如し。◇「妹が髮上小竹葉の放駒あらびにけらしあはぬ思へば」

【考】これは髮をあげると掛れるのみ……（中略）……よき程に生成ては、ひたひを上へかきあげて中を結びて末をばすべしぬると見ゆ。これを髮をあぐとも結ふとも振入ともいふなるべし。小竹葉野にしぬばのとも訓まるれど暫今の訓によりつ。

【新】髮をあぐると續けたり。古の女童の髮はうなじにかきたれて、成長りては巧にとり上げて一の髻をなせり。冠辭考に此髮のことあらぬこと書けり。

【信】このあけさゝばのといふ地名他に見ゆることなく、續きざまも穩かならず。門人鈴戶千楯がいひけるは、是

はあげたか草野とよみて、あげたがぬといふ意にかかる詞とすべしといへり。巻一に『たけばぬれ、たかねば長き妹が髪この頃見ぬにかきれつらむか』と見えたり。云々

【解】強ひて云はば上小竹葉野は上末葉野の寫し誤か。城戸千楯の説にあげたかばぬと訓むべしといへど無稽なり云々。

妹が着る　三笠の山萬六

妹が着る笠といふより三笠山に冠らせたり。◇『まちがてにおかする月は妹がきる三笠山にかくれたりけり』おほぎみの御笠山、君がきる三笠山これら同意なり。

妹が袖　巻來（まきき）の山萬十

袖を巻くといふより巻來の山に續けたり。◇『妹が袖巻來の山の朝露に匂ふ紅葉の散らまく惜しも』

【考】妹が袖を纏ひ寢て歸り來るてふ意にて續けたり。まききの山、物にも見えず、思ふに奈良山を唐衣きなら山といふ如く、紀山のことならむ。さらば太宰府にあるべし。

【解】巻來乃山は巻牟の誤にて大和纏向山なるべし。

【一言】妹が袖を巻き來とつづく。

【冠】捲き着と續けしなり。

妹が手を　とろしの池萬十

手を取るといふよりとろしの池に掛けたり。取石池は和泉國泉北郡にあり。日下部村に屬す。◇『妹が手をとろ

しの池の浪間より鳥が音になく秋過ぎぬらし」

【考】聖武紀に和泉國所石頓宮とあると同所なるべし。

妹がひも　結八河内萬七

紐を結ふといふより吉野の遊川(ゆふ)といふ地名にかけたるなるべし。遊川は又遊八川ともいふ。河内とは河にてとりかこまれたるところをいふ。◇『妹が紐ゆふは河内をいにしへのよき人見つとここを誰か知る」

【服】妹が衣の紐を我が手して結ぶてふ詞を以てゆふは川とよめり。

【沼】ゆふば川、大和の國中にて何處なりや。歌に見れば面白き川邊なるべく思ゆ。ゆふばかふちは清き河内に同じく河の廣き見わたしなり。

妹が目を　跡見の崎萬八

萬葉八に跡見の崎と續け、十二には見まく堀江のと連ねたり。妹が顔を疾く見むといふより大和礒城郡跡見といふ地名へ掛け、又見まく欲りといふより堀江に轉じて連ねたり。◇『妹が目をとみの崎なる秋萩はこの月ごろは散りこすなゆめ』『妹が目を見まく堀江のさゞれ波しきてこひつつ有りと告げこそ』跡見が崎は萬葉には跡見之崎と書けるより契沖ははつみがさきと訓み、眞淵はみそめのさきと訓みたり。されど又歌の端書により跡見の讀かといひて未だ決せず。鹿持雅澄は跡見の誤なりとせり。

【考】みそめの崎てふ所は覺束なかれど、助けていはば稱德紀に三輪朝臣てふ此をみそめと訓むか。昔の氏は多く地の名なればさいふ所あるにや。又端書によれば跡見の莊邊などありしを誤れるにや。

妹がとこ　今木の嶺萬九

萬葉九に妹等許今木の嶺とあり。妹が床に今來るといふを今木の嶺に轉じかけたり。今木嶺は今吉野の入口に當る葛の邊にあり。「妹等許今木の嶺にしみ立てるつま松の木は古人見けむ」但し考には妹等許をいもらがりと訓み枕詞解にはいもがりと訓ぜり。

【考】今木嶺は大和高市郡にて、欽明紀には今來郡といひ、雄略紀には新漢と書けり。

妹にこひ　吾乃松原萬六

萬葉に「妹に戀吾乃松原見渡せば汐干のかたに田鶴なきわたる」とあり。吾乃松原を長流はわかの松原と訓み、眞淵はあごの松原といひ、宣長は乃は日の誤にて吾が松原ゆと訓みて地名にあらずとせり。試にいはば吾の下に濃字脫ちたるか。さらば伊勢の阿濃郡松原を指すべし。なほ續きさまを考ふるに妹に戀ひ松原見渡せばと續くにて枕詞にあらざるか。

【燭】妹に戀ひて吾が待といふ心にて續けるなり。己がせこにあが松原と同じ心なり。

【考】之は妹に戀ひ明すてふ意にて志摩國英虞の松原にいひかけたり。

【石】枕詞にもあらず、賞詞にもあらず。

いゆししの又いるししの　心を痛み萬九　行きも死なむ萬十三

いゆししとは射らるる鹿の義なり。されば萬葉九にはそのやうに心を痛みと人事に比し、同十三には手負鹿の嚮逃るとも、終に行き仆るる有樣を、死したる人を悲むに當り。已も往きて死なむと比するなり。

【摘】ここにししといへるは猪也。猪てふものは荒きものなれば、射られても走りゆくめればかく續けたり。

入日なす　隱れにし萬二、三

入日の沒するが如くと人の死を喩へたり

いれひもの　同じ心に結び古十一　指して來つ六帖五

古今には同じ心にいざ結びてむと比し、六帖には指して來つれどと續けたり。入紐とは袍直衣狩衣など左右の紐にて一方を結び玉にして雄紐といひ、一方を輪にして雌紐といひ、雄紐を雌紐の中にさし入れ結ぶよりその名起れり。互相似たるより同じと續け、且紐といふ縁にて結ぶといひ下したるなり。さし入るるのさしを目指しの意に轉義して用ひたり。◇『よそにして戀れば苦しいれ紐の同じ心にいざ結びてむ』『入紐のさして來つれど唐衣からくいひてもかへしつるかな』

【契沖】云、入紐は裝束に雄紐雌紐あり。雌紐に雄紐をさし入れて結へば入紐といふ。二つ取合せてこすものなれば、同じ心に結ばむとはよめるなり云々。

【服】この入紐は裝束の紐にはあらず下紐なり。別記云、入紐は衣の左右に著て、袖の下に穴ありて、そこより引きいるるをいふべく思ふ。同じと續けしは數人紐は左右に同じ程の長さに比すべければ、しか續けたりと知らる。

【貂】こは裝束の首がみの紐にて雌雄の名あり。それを互にさし入れて結ぶ故に入紐といふ。さしてもとも、心に入れてもといふ。左右の長短を同じ心にともいふ。

入間路の　入りて　蓬廬集

齋藤彦麿の蓬廬集には入間路の入りてと續けたり。入間は武藏にあり、同音を重ねて詞となす。

射る矢なす　矢口の渡　蓬廬集

蓬廬集に矢口の渡につづけたり。武藏の地名の矢口の矢に冠らせたり。

いろこなす　家並立ち　鈴屋集

鈴屋集にいろこなす家並立ちとあり。いろこは鱗なり。なすはの如くの義。瓦屋根の魚鱗の如くなるに比したり

うの部

うかねらふ　跡見山萬十

うかねらふはいめ立てての條にいへる如く薩人(さつびと)が鳥獸を捕らむとするときは、その足跡を見て窺ひ狙ふより、跡見といふ大和の地名に被らししなり。◇『うかねらふ跡見山雪のいちしろく戀ひば妹が名人知らむかも』この歌はうかねらふは跡見にかかり、とみ山雪のはいちしろくの序に置けるなり。

【續考】うかは窺ひの略なり。跡見を鳥見の意になして、鳥を捕らむとて窺ひ狙ふといふなり。鳥をとのみいふは鳥狩をとがり、鳥立をとだちなどいふが如し。

浮き草の　浮きたる戀古十二　憂き古十八

古今には浮きたる戀、六帖には浮きてもあるぞと同音を重ね且つ比喩とせるなり。枕詞解には、萬葉十一卷十三丁の浮沙生とあるを、浮き草の浮きてもと訓みたり。

又古今十八にうきことあれやと連ねたり。これは浮きと同音なる憂きに轉用せるなり。◇『水の面に生ふるさつきの浮草の憂きことあれや根をたえてこぬ』

うき島の　浮き沈み能宣集

能宣集に『宿るらん方し知らねばうき島の浮き沈みたる戀もするかな』の歌あり。同じ音を打ち重ねたるなり。

浮島は常陸の信太郡にあり。

うきたから　船紀

紀に舟に冠らせたりと冠言辨にいへり。但し日本紀纂疏に浮寶舟を指すといへるばかりにて本文になければそのかみは枕詞にあらず。後世に至りて枕詞に用ふ。

うきぬなは　邊にも沖にも萬七

萬葉に「浮蓴(うきぬなは)邊にも沖にもよりがてましを」とあるを石上枕詞例に擧げて比喩の枕詞とせり。但し邊にも沖にもにかかるにあらで、全句に亙るものなり。ぬなはは今じゆんさいといふ。池澤に生じ楕圓形の厚き葉を水上に浮ぶ。春の頃採りて羮にす。

うき舟の　焦れて拾九

拾遺の長歌に「我のみひとり浮舟の焦れて世をば渡るらむ」と續けたり。舟の漕がれといふより焦れに轉じて用ひたるなり。

うぐひすの　春になるらし萬十

萬葉に「鶯の春になるらし春日山かすみたなびく夜目に見れども」の歌あり。これは古義にいへる如く鶯の鳴く春といふ續なるか。更に考ふるに、古今の一に「春くると人はいへども鶯の鳴かぬかぎりはあらじとぞ思ふ」の歌の如く、鶯は春の景物中最上のものなれば、特に鶯を揭げて春を聯想せしめたるものなるべし。のは唯調の爲に用ひたるのみ。

うけのを 浮びかゆかむ萬十

萬葉に浮びか行かむと續けたり。うけのをとは網具の中に泛子(うけ)といふあり。それに附せる緒なるべし。その緒の如く浮れてあらむと比したるなり。◇『住の江の津守網引のうけの緒の浮びかゆかん戀ひつつあらずば』

【紹】浮びゆくとは心も空なるといふに等しく、心一つに定めかねるも同じ理ながら、浮子の風に動くなも魚の餌を呑むかとすずろ心なるを兼ねしにや。

うごきなき 拾十

拾遺集神樂歌に岩倉山と續けたり。大なる岩は動ぬより山城の岩倉山にかく。◇『動きなき岩倉山に君が代を運びおきつつ千代をこそつめ』

【袋】石もて造れる倉は動くべからぬ心に續きたり。

うさゆづる 絶えま繼がむ紀

仁德紀に『うま人の立つる言だてうさゆづるたえま繼がむに並べてもかも』とあり。うさゆづるは敢め弓弦の略言にて、一たび張りたる弦の絶えたらむには、この掛替の弓弦にて補はむとの意にて、絶えばつがむと連ねたり。

【紹】うさゆづるは藏弓弦なり。儲張の字を用ふ。前に張りたる弦の絶たらむ時はと設け置くなり。

うしの子の 三宅萬

【摘】三宅に通らせたる牡牛は、犢牛の誤なりとて、牛の子とよむべしといへり。ことひ牛の條參照すべし。

うじもの うな根つき延喜式

式祝詞に鵜自物うなねつきぬきとあり。うなねは頸をいふ。じものは犬じものの條にいへる如く、狀之の轉にて鵜の如くと言ひ下したり。鵜の水中に入る時は首をまげてつき入るを人の敬ひて頭を下ぐるに喩ふ。

うすらひの　うすき心 萬二十

萬葉に薄ら氷のうすき心と頭音を重ね、且これを輕薄の心に比したり。◇「佐保川の氷り渡れるうすらひの薄き心を我思はなくに」

うたかたの　消えて 後十三　憂き 小町集

後撰には消えてはかなき世と續け、小町集には憂き身と連らねたり。うたかたとは空の形の義にて水の泡沫をいふ。消え易きより人事に比し、又浮ぶもののゆゑ浮きと同音なる憂き身に冠らせたり。◇「降りやめばあとだに見えぬうたかたの消えてはかなき世をいかにせむ」

【紹】和名抄に雨潦上沫起若二覆盆一。これはその凝りたる形をいふ。又遊仙窟に未必と書きてうたかたと訓むは、形あれども消易きをいふ義訓か。さて歌には消えてはかなきといひ、浮き流るるを憂にいひよせたり。

【存】和名抄雲雨類に、沫雨、淮南子註云、沫雨潦上沫起若覆盆。和名宇太加太とあり。遊仙窟云々は長流の說なり云々。

【詞】うたかたは浮漚の文字なるべし。うたは浮をいふか。かたは漚の字にて方をいふなるべし。

うそじもの　隱れ入ぬれ 巖足集

和田巖足集にうそじもの隱れ入ぬれと續けたり。河獺のやうにと比したるなり。じものは狀之義。

うちそかけ　倦む時なしに萬十二

萬葉に『をとめらが績む苧のたたり打麻かけ倦むときなしに戀ひ渡るかも』とあるを積絽には倦む時なしにかかる枕詞とせり。こは序歌にして枕詞と見るべからず。

【絽】績麻を絡架に掛けて績みなすを倦時なしといひかけしたり。絡架は俗にわくと云ひて絲を繰りたたむ具なり。

うちそを　麻績のおほきみ萬一

萬葉に打麻乎麻績の王と續けたり。苧を績むといふより、類音なる人名に冠らせしなり。王が苧を績みますにあらざることといふまでもなし。このうちそとは麻を灰汁にて煮蕩し、水にて粗皮を去りたるものをいふ。麻はそのまま績むことなく、打ち麻即ち白麻となして後に績むなり。さればうつといふは字の如き義を有するなり。うちは美しの意に說くはいかが。己が故里の但馬地方にては今もうちそといへり。蓋し古言の存するなり。◇『打麻を麻績の大きみ藍なれや伊良胡が島の玉藻刈ります』

【仙】うちとは物をほむる詞の隨一なり。よき麻をといふことばなり。

【管】うつ麻をおみの大君云々、苧麻のうつくしきをいはんとてうつ麻といひ、それを麻にうむとつづけていへるなり。

【解】打麻乎のうちは、うつはた、うつ袴、うつ剣のうつにて全麻なるべし。苧はのと通ふこと、水製苧はつみのといへるに同じ。さて枕詞のかかりは全麻之麻績とかかれるなり。

うちそはし　麻績（ヲミ）の兒 萬十六

萬葉に「打十八為麻績兒等」とあり。うちそはし、をみのこらと訓みて、打麻者し績むといふより麻績の兒に續けたること打麻をに同じ。但しし字は助辭なるのみ。

【考】打十八為の四つは借字にて打麻者志の意なり。（しは助辭）卷四に今者てふことを今時者四（いましはし）とよめる類なり。

【解】打十八為はうちそやしと訓むべし。八為はよしゑやし、はしきやし、などのやしに同じく助辭なり。平春海が八為は鳥の一字の誤なりといへるは強ひたる説なり。

うちたをり　多武の山 萬九

萬葉に多武の山と續けたり。たをるとは撓むの意にて大和多武峯の形勢をいひて上に冠らせしなり。うちたをると訓むべきか。山口縣には峠のことを今もたをといへり。蓋し古言の存せるなり。多武の山名の起りもここに基きしなるべし。◇「うちた折多武の山霧しげきかも細川の瀬に波のさわげる」

【仙】たむとはめぐると云ふ詞なり。

【管】うち手折手と續けたるなり。たむの山は和州塔の峯なり。

【冠】このうちは言起す詞、手折（たをり）は折れ撓めるをいふ。萬十九に山のたをりに、垂仁紀に山多和などいへる即これにて、多武の山の多和を撓む心にとりて斯くは續けたるなり。

【解】うちは發語、手も例の如く添へたるなり。折は道の前を折れ曲るをいふ。さて多武とは手觸るといふ謂に

かけたるなり。

うちなびく 春萬三　春の柳萬五　草香山萬八　黑髮萬二

萬葉には春さりくればとも春の柳とも連ね、又草香山に冠らせ、我が黑髮の上に置けり。考にいへる如く打靡くものに髮にも草木にも冠らせたり。春は草木のなよやかに靡くによる。又蜻蜓と打靡きたる河内の草香山に冠らせたり。◇『打靡く春の柳と我宿の梅の花といかにかわかむ』

【苑】打靡く葉といふ一言にかかり轉じて春にかく。

【石】こは賞詞にて打靡きたる事物の上に置く例なり。冠詞といふにはあらず。梓弓春と續くるは三春にわたし、かぎろひの春といへるは、三月ばかりの春の盛の空の形勢なり。打靡く春と續けしは、二月ばかりの野山の景色稍うち靡き霞うららかに立ち靡きたる形勢を賞めていふなり。

【黑】打なびくといへるは冠辭にはあらざるべし。春へかけたるは霞立つ春といふに等し。

うちのぼる又**うちあぐる** 佐保の川萬八

萬葉に打上佐保の川原と續けたり。打上を長流はうちあぐると訓み、眞淵はうちのぼるといひ、雅澄は兩樣におもはるといへり。うちのぼるを正しとすべきか。唯川上へ舟にてのぼるをいへるならむ。最初は佐保へ船にて上りしをそのままあらはしたるが、後には佐保に限れる如く思はれしならむ。◇『打上る佐保の川原の青柳は今は春べとなりにけるかも』

【蜀】機を織る梭をはさといふなり。さを投ぐる間といふは、その梭を彼方此方にとりわたす間のなきを、光陰

の短きに譬ふるなり。うちあぐるはうち投ぐるなり。あとなとは五音の通へるなり。

【考】佐保道は山川に添ひて斜なる道をゆく所ならむ。さるからに佐保にはのぼるてふ語の常ある故に冠らせしにや。或る說にさの字を隔てて打のぼる火と受けたるか。火はのぼるものなればと侍るも、事もなくて古めかしき意侍り。

【補】うちあぐるとは投矢とて矢もて遠くに投わざあり。遠投といふ。投矢といふは集中に君が負ひ來し投矢し思ほゆとあり。その矢うち上るは遠投してなり。矢の古名さといふ。よて佐保川にかけたり。

【解】こは二種に思はるることなり。一には舊本にうちあぐると訓みたるによれば、揭ぐる眞帆といふ意にて、うちは發語、さは眞といふに通ふなり。又うちのぼると訓めば登る眞穗といふにて、うちは發語、のぼるとは穗の張り出づるに隨ひてすぐすぐと立のぼるよしなり。

【石】佐保川の川上遠きを棹さすに比していへるなり。

【黑】うちのぼる（上ル）といへる說よろし。

打橋の　つめの遊紀

天智紀につめの遊びにと連ねたり。つめの遊は集の遊なり。橋の端の音を集にうつしたるなり。

うちひさす　宮萬四、五　京萬三　宮の舍人萬十三　宮路萬七　都の人萬二十　宮川鈴屋集

萬葉四には宮にゆく子とも、五には宮にのぼるとも、同十三には大宮仕とも又三には京とも、二十には都の人とも、十三には宮の舍人とも、七には宮路をとも、連ねたり。いづれも宮といふより接續せり。うちはうつの轉に

て宮殿は古も土民の居と異り、構造大なれば家の隅々まで日光の能く照射する意にて全日の射し入る宮といふより都へも續けたるべきか。本居翁は宮川に冠らせて用ひたり。全檜にて建つといふ說も亦趣ありて面白く聞ゆ。

◇『打日さす宮にゆく子をまがなしみ留むれば苦しやればすべなし』『うち日さす宮路をゆくに吾裳はやれぬ玉緒の思亂れて家にあらましを』

【袋】神代紀上、檜可₂以爲₁瑞宮之材₁とあるを見れば、うつくしき檜を立つる宮といふにや。さすとたつと相通ふことは八雲刺は八雲立つなどの類なり。

【管】大宮作りのてりかがやくやうなるをほめ申すことばに、内に日のさす宮といふ心なり。

【匠】宮殿の構高ければ、日さす宮と續けたるなり。仙覺抄の說さまざまにかける中に内日刺とかけるが謂の文字なるべし。それも刺すは射の字なるべきか。文選班孟堅が西都賦曰、上反宇以蓋戴激₂日景₁以納₁光と、これらの意なり。

【考】麗しき日のさす宮と續けしなり。うつくしのつしを反せばちとなる故に、略きてうちといへり。記には朝日のただざす國夕日の日照國なり云々、又卷向の日代の宮は朝日の日照宮夕日の日陰る宮云々、この外にも日影を以て宮を褒めたる多きを思ふべし。

【燈】こは全日刺にて日よくあたる所をいふ。その宜しく視ゐる方なきを全といふ。

【鐘】全檜建宮と係けたる詞ならんか。全とは神代紀に全剝などある全にて俗に丸ぞ檜木といふ意なり。大宮には元より他材を不用皆檜にて作奉る例なれば全檜といふべきものなり。刺と立つとは通はす例なり。

【解】内は現の義なるべし。つしの切ち、玉きはるうちの限のうちに同じ。さて宮に續きたるは、宮殿は高く秀でて物の障なければ、現しく日光の指し輝く宮といふなるべし。

【石】内日といふは日の字にて、朝日夕日といふに等し。そのうは動き發るといふ義、ちは滿ち通り續くといふ義にて、日の照します天地の限を内といふが故に、内日といふ。その内日の照しませる如く、照り輝ける宮と稱へたるにて枕詞にあらず。

【想】うち日さすは美日刺なり。朝日のたゞさす國とは異れり。

【折】木檜娃といふ意味で宮殿の壯大な樣である。或はうち養たす身とかけたのかと思はれる。美日さすの意だと解くのはいけない。

うちひさつ　三宅の原萬十三　宮の瀬川萬十四

萬葉には三宅の原とも宮の瀬川とも續けたり。さつはさすの轉にて、うちひさすと同じ。よりて宮といふより同音を頭にもてる地名にも冠らせたり。

【考】萬の十三打久津は須の誤、宇知比佐都の都は數の誤といへるは宜しからず。◇「うちひさす宮の瀬川のかほ花の戀ひてかあらむきぞも今宵も」

うちよするゝうちえする　駿河の國萬三　するがの嶺萬二十

萬葉にうちよする駿河の國とも、うちえする駿河の嶺らはとも連ねたり。うちえするはうちゆするの訛なり。かの國には富士・安倍・大井の三大河なり。いづれも急流にして激浪の音高く打ち響するより駿河に冠らせしなるべし。

駿河といふもするどき河の義なるべし。◇「わきめこと二人我が見しうちえする駿河の嶺らはくぶしくめあるか」

【仙】するがのすを海の洲によそへたるなり」洲は浪のうちよする物なれば洲をいひ出でんとする諷詞にうちよすると置けるなり。

【燭】風土記に云、國に富士河あり。その水極めて猛く疾し。よつて駿河の國と名づくと云々。然ればその川の早くして浪打寄するがといふ心にや。

【考】打泔る泔る髪てふ意に續けなしけむ。髪を梳梳るとき用ふる水をゆするといへばなり。さて此國はいよはや川あるゆゑにする河とはいふらめど、今ゆするかみのゆとみを略けるが如くいひなすは冠辭なり

【摘】源清良云へらく、富士てふ山は又なき山にて、いづくにも見ゆれども、田子の浦より見るは比ぶ所なく、且つ三穗の浦、浮島ヶ原などさへあなれば、近き國の人等そこらゆく旅人などもうちよせて見けめ。さるなかの國の人の面目あるやうに思ひていひ始めつらむと、是れ安らかなり。

【諺】するがは峻何にて峻岳比類あるまじの義。うちゆするうちえする共に依の字なるべし。依は狩を請く屏風にて、漢書には之を罘罳と記せり。不二山の峻くして衆山に秀でたるより續けたるか。

【解】大神景井がいふ如く、駿河といふ名義は動河か。若は此國風土記にいへる蘆河にてもあるべし。蘆河者依其河流蘆々而不レ知ニ淀溜一也。所謂志通波他河、不二河、大壞何使とあるが如し。

【行】考の說信じがたし。按ずるに打寄する洲と續けたるにて、すの聲にかけたるならむ。波うちよする洲といふ義なるべし。

【界】打響る直河と心得べし。岩根ゆすりて行く水などもいふべし。

【折】意味には關聯せずして同音を重ねて、するをよび起したのだと見るが正しい。

うちわたす　やがはえなす紀　竹田の原萬四　遠かた人に古十九　みづの入江夫木
阿濃の湊名寄

仁德紀にやがはえなすと續け、萬葉には、竹田の原に冠らせ、古今には遠方人に、その他みつの入江、阿濃の松原とも連ねたり。紀の本文耶麼波曳儺須とあるを契沖は耶を那と見て長延えなすと說きたれど、やがはえを宜しとす。やがはえは彌孫生の義か。若しくは彌木榮えの義か。今は前說に據らむ。その他はただ山にても野にても長く連りたるを見渡すをいふにて、特に枕詞と見ざるも宜しきか。◇一打渡す竹田の原に鳴く田鶴の間なく時なしわがこふらくは一

【考】打は例の發語、わたすとは長く遠き意にて冠らせたり。又竹田原は遠廣きによりて冠らせしなるべし。又遠きてふ語を納めては、たけともいはるる故に、ただ打渡す遠きと續けしにて、この原の遠き意にはあらぬにやと覺ゆ。

【摘】物乾しなどするには、竹を打渡すものなれば、竹田の原につづく。又打渡す遠方人は遠く見渡す意にて冠辭にあらず。

【傳】卅六打渡すは向を見渡すことなり。打渡す竹田の原に、打渡す彼方人になど皆然り。やがはえなすを紀にながはえなすとかけるは誤なり。やぐはえは彌木榮なり。樹のいやが上に生ひ茂り榮ゆるをいふ。御供人等の多

く盛に茂きことを譬へたるなり。契沖の長延(ながはえ)といふ說は叶はず。

【袋】打渡す云々、或說に續さま枕詞のやうにしてさならずといへり。げにさることなり。

【稜言】やがはえなすは彌孫生如(やごはえなす)なり。彌孫生如とは植木を代取る時はその株より孫枝どもの彌が上に生出るをいふ。

【黑】うちは添言。わたすは見渡しの遠く又廣きことなり。

うつせ　實なきこと萬十一

萬葉に『住吉の濱によるちふ空せ貝實なきこともちあれ戀めやも』とあり。介貝は俗にすがひといひ、うつは空の義、この貝殼の如く誠なきと譬へたるなり。但し萬葉には序歌の第三句に用ひられたり

【考】空になりたる石花貝の身無きを以て實なきことにいひかけたり。さてせがひは和名抄に尨蹄子(俗名勢)貌似犬蹄、而附石者也　兼名苑注云、石花二三月皆紫舒花、附石而生故以名之といふ。貝の空になりたるを虛石花貝(うつせがひ)といふべし。

【摘】何貝にまれ實なくなりたる貝のことなり。

【石】空なる貝の如く實なしと續けたり。うつせ貝は空曲る貝といふ義にて、その殼なるもの皆うつせ貝なり

うつせみの又うつそみ　命萬一　世萬三　惜しき世萬三　人萬四　人目萬十二　假の身萬五　うつし心萬十二　妹萬十一　世の人古今　八十言のへ萬十四　骸古十　殼後十二　空しき殼後十三　侘しきもの菅萬　空しき戀新古今

萬葉には命、世、惜しき世、人、人目、假の身、うつし心、妹等と連ね、古今にも世とも世の人とも、骸とも、後撰には殼とも、空しき殼又空しき骨とも、菅家萬葉には侘しきものとも、新古今には空しき戀とも連ねたり。萬葉には空蟬又打蟬とも鬱蟬とも記したるもあれど、皆借字にて顯身の義、よりて命とも世とも身とも人とも連ね、また頭韻反覆の法によりてうつし心とも續けたり。うつせみは幽界に對する顯界のことより起りたるを、中世には人世を蟬殼の義に考へ、殼、空しき殼とも冥界のことに比するに至れり。妹に冠らせたるは女の鬢の美しきを、蟬娟兩鬢秋蟬翼といへる詩の句により裝飾的に形容したるかとも思はるれど、尙顯界即ち生きたりし時の義にて冠らせたるなるべし。うつそみはうつせみの轉なり。後世にはうつせみを直ちに世といふ義に用ひ、うつせみの常の辭とか、うつせみの八十伴男などと連ねたるは足引をやがて山の義に用ひたると同じ。◇萬『空蟬の命を惜しみ浪にひで伊良胡の島の玉藻刈り食す』萬『虛蟬の世は常なしと知るものを秋風さむみ忍びつるかも』萬『心にはもえて思へどうつせみの人目をしげみ妹に逢はぬかも』萬『うつせみの現し心も吾はなし妹を相見ずて年の經ぬれば』萬『ともし火の影にかがよふうつ蟬の妹がゑめりし俤に見ゆ』古『うつせみはからを見つつも慰めつ深草の山けぶりだに立て』後『うつせみの空しきからになるまでに忘れむと思ふ我ならなくに』後『あら玉の年の三とせをうつせみの空しき哭をや鳴きて暮さむ』萬『うつせみの八十ことのへは繁くとも爭ひかねて吾をことなすな』菅萬『うつせみの侘しきものは夏草のつゆにかかれる身にこそありけれ』

【燭】空蟬は蟬の蛻殼をいふ。よりて空蟬の空しき殼とも讀みたり。或說にうつくしき蟬といふ心にてよみたり。

【匠】うつせみは蟬のもぬけたるをいふ。空つせ貝といふ類なり。うつほ木、うつむろなどいふ類皆中の空しき

をいへり。蟬の殼を留めて行く方知られぬに喩へて、人の世の果敢なきをいへる心なり。莊子に蟪蛄不レ知ニ春秋一とあり。註に蟪蛄は寒蟬なり。春生れて夏死し、夏生れて秋死すといへり。命短かきものなれば、それに人の身をも喩へてうつせみの命ともいへり。妹と續けたるは蟬鬢をあげて美貌を褒むるなり。

【考】現しき身の命、顯の身の世と續けたるなり。集中に空蟬・虚蟬など書きしは借字なるを、後人は空蟬の字に泥みて蟬蛻のことと思へり。さてうつしみとも、うつそみともよみてうつせみのといはず。そのうつしみは顯しき身てふ意にて正しきを、うつそみ、うつせみなどいふは音の轉びしものなり。後古今の比に下りては蟬の殼に譬へてはかなき意にもいひなしたり。

【摘】虚蟬、空蟬、鬱蟾などかけるは借字にて顯なり。これを日本紀にうつしとよめり。さて詞の心は明けきが本にて、おほきなる事にも、現在てふことにも通ひて、人にも世にも冠らせ、またうつりては現在の人にも現在の世にも冠らせたり。

【謂】顯の露といふに似たれば、はかなきことによめるも誤にはあらじ。

【服】萬八に命畏みと續けたるは、金村（人名）を指して空蟬の世人なればといふ意にて、天皇の命を畏み奉り他國へ旅行すといふなり。よりて空蟬の命と續けるにはあらず。

【解】顯青身といふ意にてもあらむか。しあをの三言はそに約れば、うつそみといふ。そのそを轉にてうつせみともいへるなるべし。さて青とは記にうつしき青人草、紀に顯見蒼生などある青にやあらむ。

【石】うつは空なり、現なり。そは外に添ひ身に添ふなり。みは身なり。空現内外に添ふ身といふ義なり。後世

に轉じてうつせみといへり。せは迫るの意にて、空も、現も、迫る身といふ義とす。此詞もとはうつしみといへり。うつしみは現容を領るといふ義にて、よて命、人、世、身、妹と續けたり。妹といへるは人の轉用なり。うつし心と續けるは身より轉ぜるなり。これ心は身に隨ふものなればなり。常なきといへるは生物上定めなきが故なり。命畏みと續けしは訝しきものなり。强ひていはゞ身を轉ぜしにやあらむ。

うつゆふの　まさき國紀　こもりて萬九

神武紀にまさき國と連ね、萬葉には籠りて居ればと續けたり。うつは空しき義、ゆふとは繭のことなるべし。されば繭の空洞の狹きよりまさき國と比し、又蠶の繭の中に籠るが如く、妙齡の處女の家の奧深く籠り居ることに喩へたるなり。

【管】虛木綿のかくれては、うつゆふと讀むべし。日本紀に内木綿といへり。これうつくしきゆふといふ心なり。隱れてと續くるは木綿をば懸るものなればなり。

【考】紀には大和國は靑垣四周といひて、まゆふの内の虛なるが如く眞迮き國なりといふ意にて、萬葉のは家に深く籠りてのみ居るを、繭の内に蠶のこもりてあるに譬へて冠らせたり。うつゆふは野蠶をいふ。神代紀に眉上生蠶云々。されば大神の眉上に生ひたるをもて、蠶をまゆふとはいひたるなり。さて後にはまゆふのまを略きてゆふとも呼ぶなり。後に楮の木の皮もて造るをもゆふといへるは、眉上の糸綿に似たればなり。さるをその穀のゆふは多ければそれに奪れて、眉生をは眞木綿などいひ分る樣になりぬ。

【解】うつゆふのゆふは苧木綿のことにて、そはかの苧手卷(をだまき)といひて、丸く內方をうつろに卷きたる、それを虛

木綿といふならむ。

【通】或說に內木綿はうつの皮を丸むきに拔きたる皮をいふといへり。

【黑】うつゆふは美忌儀なり。山繭をいふ。ゆふは糸になるべきものの惣稱なり。まゆは眞木綿の約なり。

うづらなく 古りにし里萬四、八　人の古屋萬十一　古し萬十七

鶉は草深く荒れたるところに棲むものなれば、古といふに冠らせしなり。◇『鶉なくふりにし里と思へども何ぞも妹に逢ふよしもなき』『人言をしげみと君を鶉なく人の古家に語らひてやりつ』『鶉鳴ふるしと人は思へれど花橘の匂ふこの宿』終の歌なるは枕詞と見ざるを可とするか。

【考】鶉は里のいと荒れて野となる所に棲むものなれば冠らせたり。十七のは鄕てふ語を省きたるなり。

【解】萬葉十七のは鶉なきと訓むべし。

【石】古りにし里、古き都、又古家の上に列ねたるは、住み捨て荒れぬる樣をいへるなれば枕詞にあらず。

うづらなす いはひもとほり萬二、三

鶉の如くはひさまよふと喩へたり。いは接頭辭、もとほりは徘徊の義。

うど濱の 疎く能宣集　うとき兼盛集

有度濱は駿河にあり。久能山の外をかこめる一帶の海をいふ。地名を擧げて同音の疎きに連ねたり。◇『あやしくも駿河の守といひしよりなどうど濱のうとくなりぬる』能宣集『うど濱のうときにはあらず田子の浦にこひしからんとかねて思へば』兼盛集

【解】こは辣きといふに國からの所の名をまづとり出でたるなり。

うの花の　憂き萬十　浮世の中古三　憂く後四

萬葉にはうきことあれや、古今には浮き世の中に、後撰には憂くもと頭音を反復して連ねたり。◇『鶯のかよふ垣根の卯の花のうきことあれや君が來まさぬ』『時鳥我とはなしに卯の花浮世の中になきわたるらむ』

【語】卯花はうつきといふなれば、つの字を省きてう來といふ詞に通じたるならむ。

【行】卯の花の憂きことあれやは卯花の憂と續けたるにてのは調なり。

うば玉の　夜の衣古十　我黑髮後十五、十七　黑髮山續古　黑田の里夫木　こよひ拾十五　夢古十　夢の浮橋新後撰　横河の水童蒙抄　夢殿雪玉集　暗部の里縣居集

古今には夜の衣と續け、後撰には我が黑髮とも、拾遺には今宵とも、續古今には黑髮山とも、新後撰には夢の浮橋とも、夫木には黑田の里とも、童蒙抄には横河の水とも、風雅にはこよひの夢とも、雪玉集には夢殿とも連ねたり。うば玉はぬば玉の轉訛にて、烏扇の實の黑きより髮の黑きに比し轉じて黑髮山に冠らせ、黑田の里と續くるのみならず。夜は暗きものにてこの暗と黑と相似たるより夜にも連ね、よの音を戴ける地名に冠らせ、夢は夜寢ねて見るものなれば、これにもかけ、又夢殿とさへ接續せしめたるなり。縣居翁集には暗部の里にかけたり。暗部は山城の地名なり。ぬば玉の條を見よ。

うまごりの　あやに萬二、六　怪しき賀茂垣内集

萬葉二及六にあやに悲しきと連ねたり。あやにとはあなにと同じく非常になどいふ意の副詞にて、悲しとは珍ら

しく尊き義なり。さてうまごりは美く織りの約にて、美しき織物の綾といふより同音異義のあやにと轉じたるなり。藤垣内集には怪しきと連ねたり。

【管】うまこりはよきことの集りよれるを味凝といふ。

【考】こは美織の綾てふ語なり。そを痛に珍しきといふに冠らせしなりと荷田大人はいはれき。紀に漢織吳織といふことを吳織穴織とも書きたればあなとあやとは同音なり。

【解】この枕詞いづくにもの字を添へて書かざればうまごりと四言によむべし。

うまざけ又**うまざけの**又**うまざけを**　三輪紀、萬　餌香の市紀　三室の山萬七　神南備山萬十三　鈴鹿國儀式帳

崇神紀にはうまざけ三輪の殿戸とも顯宗紀にはうまざけゑがの市とも連ね、萬葉一にはうまざけ三輪の山とも、十七にはうまざけ三室の山と續け、萬葉十一にはうまざけの三毛呂の山とも、四にはうまざけを三輪の祝がとも、十三にはうまざけを神南備山とも連ね、儀式帳にはうまざけ鈴鹿の國とも續けたり。うまさけは美酒にて、三輪大物主神が酒を作らしめられしより、所謂の語をもて三輪に冠らせ、三室の山は三輪山の一名なれば、かの山にも掛け、酒を作ることを釀むといふより神南備山にかけ、又美酒には芳香あるものなれば香と音の類似せる餌我といふ町名に冠らせたり。鈴鹿につゞけたるは甘酒をすするといふより列ねたりといふ說もあれど覺束なし。原本誤脫なしとせば應神紀に須々許理がかみしみきに我醉にけりとあるに基づき音の類似より重ねたるか。うまさけを燭明抄にはうまさかのと訓み、枕詞解にはあぢざけとよめる共に非なり。◇『うまさけみわの殿の朝戸にも出

でて行かな三輪の殿戸を」『我衣いろにしめなむ味酒三室の山はもみぢしにけり』『味酒をみわの祝が忌ふ杉手ふりし罪か君にあひがたき』

【釋】私記曰、師說、高麗人來住佃香市二釀二旨酒一、時人競以二高價一買飮故云とあり。

【通】名物を以て處の名に冠らせたるは旨酒三輪、旨酒神南備山の例なり。

【栞】うまさかのみと續くるは、酒に藤花と云ふ名あり。春を經て熟したる酒に白き實の浮びて色の赤きは藤の花の姿に似たる故に酒の實と續くるなり。

【燈】うまさかのみわと續けたるを、或說にうまさかは甘酒なり。甘酒には實の浮きてあれば甘酒の實といふ心なり云々。この說誤か。すべて神に奉る酒をはみわと申すなり。それを三輪に同じ詞なれば、むき酒の三輪と續けたるなり。神なび山と續くるは酒を釀することをば酒をかむといへば、その心にて續けたりとも聞ゆ。又神なび山も三輪山の名なれば、三輪より事起りてよめる心か。

【匠】うまさけのと讀むべし。三輪と續けたる心は神に奉る酒とかきてみわとといへば、旨酒を甕に居ゑて奉るといふ心にて續けたり。三室山も三輪山の別名なれば、三輪より起りて續くるなるべし。又神南備山と續くるはこの山にも三輪の神ましますなるべし。

【考】美酒を釀むといひかけ、さてその釀のかを省きて三輪三室などのみの語にも續けしなり。味酒のとあるの字覺束なし。をの誤なるべし。

【摘】みわは神酒なり。神酒にはうまざけをするものなればうまさけみわと連ねたり。三室と續けたるは釀室の

詞をそぎてみむろといふなり。

【紀解】うまさけは醋酒にて、今俗に云ふあま酒のことなり。三輪はこの醋酒を甕ながら神に奉る稱にて、其は糟交の酒を云、輪は洏事なり。今も酒造にその浮き上るを洏くと云へり。故、甕なる醋酒の熟せるをみわとは云なり。三諸と續けしもその洏酒の實諸の意なるを辨へて知るべし。

【續考】儀式帳うまざけ鈴鹿國云々。かく續きたる意さだかならず。强ひて思ふに酒は淸を尊み濁を卑しめ、味酒淸といふ言か。すむ反すなり。よつて鈴鹿とすの一語にかけたるか。

【紹】鈴鹿云々これは美酒を嗳りて飮むといふ冠なり。うまざけ御香市とあるは美酒の好しといふにや。又醉のゑにかけて香まではかからぬか。

【一言】美酒の御酒と續けたり云々。

【解】神に供ふる酒をみわといふ故に、美酒の神酒といふ意に續けたり。うまざけなともあるはなはのに通ふ言にて例多し。三諸と續けたるは、美酒の實もろのといふ意にて、實甘味といはむが如し。神名火山と續けたるはかみの一言にかかりたるにて、甘酒之醇美といふ義なるべし。

【石】うま酒は熟酒なり。酒をみわともいふが故にはたらかせて三輪と續けたり。酒をみわといふは實を縛り寄せ縛り定めたるものといふ義なり。名義考に委し。のは調なり。

【冠】大物主神亦名を櫛甕玉命とたたへたるも奇甕賜の義にて、甕はここは直に酒をさせるなりければ、即ち御社に掌酒を奉置て、大物主神より奇き御酒を所賜て聞しめすなり。…中略…かかればその賜ることの酒を指て美

酒三輪とは續け、その三輪を常に三諸とも神奈備とも申す故に、共に三諸にも神南備にも續けるにぞあるべき。

【語】みわは御瓶なり。瓶は丸なり。圓あるよりいふなり。よろひをかわといふわも同じ。みかはみかわの約なるべし。みわを省きてみもろへも續けたり。

うまさはふ　めごと萬二

味さはふとあるを管見抄並に枕詞解に擧げたり。こはあぢさはふとよむを正しとす。あぢさはふの條を見よ。

馬じもの　繩とりつけ萬六　立ちてつまづき萬十三

萬葉の長歌には馬じもの繩とり付けてとも、立ちて躓きとも連ねたり。じものは狀之の義、の如くと同じ。罪人の繩目を受くる有樣に喩へ、又人の躓くに比したり。

【考】犯人をば馬を引くに手綱つくるか如く、銜り禁めてゐて行くめれば譬へて冠らせたり。萬十三のは馬の躓き違ゆくに喩へて、妹に別れて嘆きつつ來る道のことをいふ。

【解】爪つくといふに二あり。一は動もすれば、馬は躓き易きものなればいふ。又馬は常に爪をつきて步むものなれば、そを人の躓くにうつしていひかけたるか。

うましもの　あべ橘萬十一

萬葉十一にはあべ橘のと連ねたり。あべ橘とは甘橘といふに同じく、漢名香橘今俗にくねんぼといふものならむ、大和の安倍の里より出すよりその名に負へるか。その用方は、甘しものとまづ賞詞を擧げて、次にその物名を連ねたり。◇『吾妹子に逢はず久しもうましもの安倍橘に苔のむすまで』石上枕詞例には萬葉十六の『うましもの

いづく飽かじを阪門等し角のふくれにしぐひあひにけむ」を擧げたれど、こは枕詞にあらず。

【管】爾雅云、橙和名安倍太知波奈、似柚小者也と云々。馬じものと云ひかけたるは馬は常に立つと考ふるものなり。あべとは堪へたりといふ詞なり。たへて立つといふ心にかくは云ひかけたり。

【考】味甘甘橘といふなり。あべの濁とあめの清と通ふは古語の習なり。

【摘】あべたちばなとは今いふ柑子てふものにぞあらん。例の橘よりは甘ければ甘橘の意なるにや。又阿部氏なる人のこと國よりもてまうで來て植始つれば、頓てあべ橘といふにや。

【解】一種の橘の名にやあらむ。考に甘橘といへるは推當なり。

【語】本草、橙、今だいだいといふ。翠山按に嬰々筆語に阿部橘を蜜柑とす。非なり。

【石】熟し物あべ橘といふ義にて、これは賞詞なり。いつくあかぬをの續心得がたし。翫びて執留るものは飽かずといへる義にて、枕詞にあらざらむか。

【黑】常の蜜柑よりも大きく味も殊に宜しきが、大和の阿倍の里より出るより、うましもの阿倍橘といへるならむ。和名抄の橙の字あべたちばなとよめるはあたらず。

馬のつめ　筑紫萬二十

萬葉二十の長歌に筑紫に冠らせたり。馬は爪を突くもの故筑紫と轉じて枕とせり。

【考】馬は爪を衝きて步むによりてなり。

うみをなす　長柄の宮萬六　長門の浦萬十三　長田の里鈴屋集　長畝の道八雲集

萬葉六の長歌に長柄の宮にとも、同十三には『をとめらが苧笥にたれたるうみをなす長門の浦』にとも序の體に連ねたり。績みたる苧の如く長きといふより、長の字を頭にもてる地名へかけたり。本居宣長の長歌には長田の里、荒木田久老の歌には長峽の道と連ねたり。

梅の花　すきものと古二十

古今二十に『梅花咲きての後のみなればやすき物とのみ人のいふらむ』とあるを續貂に擧げたれど、こは梅の實の酸きを好色にかねたるにて、枕詞にあらず。梅の實の好きと續くれば枕詞となるべし。

うもれ木の　下よぞ戀ふる萬十一　あらはるまじき萬七　人知れぬ古今序

萬葉に下よぞ戀ふると續けたり。埋木は地下にあるもののゆゑ、下てふ語によせあり。表には出さずも内心には戀ふるといふことに喩ふ。◇『あまたあらぬ名をしも惜しみ埋木の下よぞ戀ふるゆくへ知らずも』又あらはるまじきと續けたり。『眞鉋もち弓削の河原の埋木のあらはるまじきことにあらなくに』又古今の序には人知れぬとも比し用ひたり。

うろ路より　むろの泊元可法師集　むろの湊蓬廬集

元可集には『有漏路より入りしむろ路の泊舟法にもとまる心はなれよ』と見え、蓬廬集にはうろ路より室の湊に續けたり。有漏は梵語この世をいひ、無漏は煩惱の繫根をたちたることにて、始のはうろにむろを對として序となし、次なるはこれを播磨の室の湊に轉じたるなり。

うりつくり　となりかくなり拾九

拾遺集雜部にとなりかくなりなる心かなと連ねたり。瓜の彼方にも此方にも生るといふ序として心の右へ左へまよひうつるに喩へたるなり。瓜作りは作り瓜といふべきを語調の上より轉倒したるなり。『音にきく狛のわたりの瓜つくりとなりかくなりなる我が心かな』序詞と見るべし。

【解】瓜の生りたる形は蔓の匍ひ歩くままに、右生り左生りて所定めぬを思ふ人の定なき心によせて恨みしなり。

うらかす　うなかぶし鶯の木綿垂

六人部是香の鶯の木綿垂にうなかぶしに冠らせたり。うらかすは心を浮き立たすこと、うなかぶしは頭を傾くること、諧調の爲に重ねたり。

うら白の　志田の出湯

高崎正風が中村秋香の冬より春にかけて駿河の志田溫泉へ赴けるに送る歌に、うら白の志田と續けたり。正月かざりに着くる裏白は羊齒科の植物なれば、そのいひかかりより地名にかけたるなり。

浦ぐはし　布施の湖萬十七

萬葉十七に布施の湖に冠らせたり。布施湖は越中氷見郡にあり。浦ぐはしはよき浦との義なれば、賞詞とす。

おの部

おきつ鳥　胸見る記　鴨どく島記　鴨ちふ船萬十六　味經の原萬六　むき見る菅根集　安治川柿園詠草

記には胸見るときはと比し、又鴨どく島にと連ね、萬葉六の長歌には味經の原とも、同十六には鴨ちふ船とも續けたり。鴨は河湖の澳に遊ぶものゆゑ、庭つ鳥野つ鳥にかけるが如く、まづ概括せる名稱を擧げて特殊の鳥名に冠らせたるなり。即ち鴨どく島は鴨の着く島の義にて鴨までへかかり、鴨ちふ船とは船の名の鴨丸などいひしに轉じ、又鴨の一種に味鳧といふがあれば、攝津の味經の原にかけたり。柿園詠草には安治川にかけたるも同じ。又古事記八千矛の神の詠に胸見る時と比し、菅根集、村田春郷の長歌にはむき見ると比したり。◇『沖つ鳥かもどく島に我がゐるねし妹は忘れじよのことごとに』『沖つ鳥鴨ちふ船の歸りこばやらのさき守早く告げこそ』

【考】味鳧てふ水鳥のあれば沖つ鳥あぢふの宮にかけたり。

【續考】澳に遊ぶ水鳥は胸を出して行くものなれば、人の胸見ると比したるなり。

【石】鴨どく島は鴨の住むなる所を定めていへるのみにて、比したる義なければ枕詞にあらず。

おきつ浪　しきて萬十一　間なくかけても後十二　競ひこぎ萬十三　とをむ眉引萬十九　荒のみまさる都古二十　荒井の渡圓舍歌集　高師の濱古十七　置きて古　八十島か

けて續拾九　かくる心新續古十八　立別れても新十七

おきつ浪は沖の方より寄せ來る浪をいふ。浪は一波來れば又一波といふ如く後より絶えずつぎつぎに寄するものなれば、萬葉には頻りにといふ古言のしきてと連ね、後撰には間なくかけても思ふと喩へ、又萬葉十三にはその如く競ひ漕ぎと喩へたり。次に浪の曲線をなせる狀を美人の眉に喩へてとをゐ眉引とも萬葉十九の長歌には連ねたり。とをむは撓むの意、まよびきは眉をいふ。又浪の荒るるといふより荒磯に臨したる都の狀にうつしていひ或はその荒るといふを地名にうつして遠江の荒井渡に冠らせ、浪の高さといふより和泉の高師の濱に冠らせ、或は沖つ浪の頻頻を重ねて置きてと連ねたり。その他浪の緣語にて立ち別るとか、八十島かけて、かかる心などと轉じたる例少からず。◇『慰むる心はなしに沖つ浪しきてのみやも戀ひ渡るらし』『住吉の岸に來よする沖つ浪まなくかけてもおもほゆるかな』『沖つ浪高師の濱のはま松の名にこそ君を待ち渡りつれ』『淡海の海邊たは人知る沖つ浪君をおきては知る人もなし』『沖つ波八十島かけて通ふとも住みこし浦をいかがわすれむ』『沖つ浪立ち別るとも音にきく長居の浦に船とどめすな』『住吉の松のしづ枝のおきつ浪かくる心をあはれとは知れ』

【考】波は重々（しきしき）に立ち寄るものなるを以て、重々に人戀ふるにいひかけ、又波の横に撓むを眉のさまにかけたり。こは山の眉といはむが如し。遊仙窟に嬌々橫波成眼尾これも似たることなり。

沖つ藻の　靡きし妹萬二　靡きし君萬十一　隱山萬、　奧なく萬葉内集

沖つ藻のは祝詞に沖つもはとあると同じく深海にある海草をいふ。それが浪に靡く狀を人の我に從ひつく意に喩へて靡きし妹に連ね、又藻は水中に隱れたるより隱れの古言なばるを名にもてる伊賀の名張山にいひかけ、又奧

世のものにては末のもの一韻をとりて喪なくと諧調の爲にも用ひたり。もなくとは不吉のことのなきをいふ古言なり。このおきつものを沖つ物と見るは宜しからず。萬葉に隱の山とあるを眞淵はかくれの山と訓を改めたれど、契沖の訓める如くなばりの山とよむを宜しとす。◇『吾がせこはいづく行くらむおきつもの隱の山を今日かこゆらむ』『さねかねば誰ともねめど沖つ藻のなびきし君がことまつ吾を』

【冠】沖つ藻はかくれたる物なればかくれの山とよそへ續く。

【考】奥なる物は隱れてある意にて、隱るてふ山に冠らしめたり。隱の山、隱の野は同じく伊勢國にあるべし。

【續貂】隱れの山とよみては掛けし詞明かならず。名張山は伊賀にあり。宇陀郡の吉隱をよなばりとよむ例にて據所確かなり。さてこの隱の字をなばりと讀む義は知りがたし。おきつ物とは海の物にて、繩菜繩簸等の名あればなはとまでかけて名張とはいふか。又繩菜ならば沖つ藻の意か。

【管】おきつもの隱の山云々。おきつものは奥つ藻の也。この奥は邊に對へて奥つ方をいふには非ず。水鳥を奥つ鳥と云ふ如く、陸に對へて水中をいふ。水深き底の藻の隱れて見えぬよしの連けなり。

【石】なばりは見え隱れて一方ならぬをいふ。なは無なり。ばは大に開延るなり。沖つ藻の形勢然るものなり。隱山は高山にてある時は雲に隱れ、ある時は空にあらはるるが故に然か號く。よりて沖つ藻の如くと比したり。

おく蚊火の　下こがれのみ萬十一

おく蚊火は蚊遣火をいふ。蚊やり火は上には能く燃えずして下に焦るるを萬葉には人の表面にいひ顯さず内心に戀ひ焦るるに比したるなり。◇『足日木の山田守るおぢが置く蚊火の下こがれのみ吾戀をらく』

おく霜の　消萬十二　曉起き後十一　振分髪新葉　裳白衣新葉

萬葉十二には消なば共にもとも、消ぬべき我が身とも、同十九には消ぬるが如くとも比し、後撰には曉起きと連ねたり。こは霜の生ずるを置くといふより、同音異義なる起にかけたり。又新葉には振分髪とも、裳白衣とも連ねたるは霜の降るを振に轉じ、霜の白きを裳白衣にかけたるなり。◇『おくしもの曉起きを思はずば君が夜どのによがれせましや』『あはれなり我が元結におく霜の振分髪はきのふと思ふに』『山里は夜さむ重ねておくしもの裳白衣いまや打つらむ』

【袋】露は曉方に深くおくものなれば、後撰には朝起き出づるにかけて續けたり。おくの字上下にあれば心得がたきやうなれども、上は體にいひなし下に從へり。

おく露の　消萬十　斯る後十　たまさかに金八　玉城の宮新千載

萬葉十にはいちしろくとも、消ぬべくとも消かも死なましとも連ね、後撰十にはかかるものとはと續け、金葉八にはたまさかにとも、新千載には玉城の宮にとも接續せしめたり。霜の消え易きを人の亡せ易きに喩へ、又露の玉といふよりたまの音をもてる詞に轉じ、又露の色いと白きを著くにかけ、その玉の滴りかかるを斯かる義にかけたり。その露の緣にて連ねたるものわからず、◇『おくつゆのかかるものとは思へども枯せぬものは撫子の花』『こころざしあさ茅が末におく露のたまさかにとふ人はたのまじ』

おく山の　深き心萬十一　眞木の板戸萬十一、十四

萬葉には奥山の深き心と比し、又眞木の板戸とも連ねたり。眞木とは檜のことにて、檜は多く奥山に生ずるより

所謂の語を冠らせたるなり。◇『奥山の眞木の板戸をおしひらきしゑやいでこね後はいかにせむ』
【注】眞木は檜のことにて、もはら深山の木なる故に眞木といはむとて奥山を冠らせたるなり。
【參】催馬樂に眞木さく檜の板戸とあるに同じ。すべてよき木は奥山に多ければかく續けたり。

おしてるヽおしてるや　難波記、萬　千重の白波堀河百首　興謝の海喜撰式

仁徳記におしてる難波の崎にと見えたるを始とし萬葉には三にも四にも六にも二十にも難波を續けたり。又萬葉にはおしてるやと五言にいへる所も少からず。こはもと四言なりしを萬葉時代に至り五七調の定るにつれ一音を加ふるに至りたるなり。おしてるの義は諸説紛々として一定せず。日本紀抄の説によれば御の押出る義なりといひ、長流は潮照るの義とし、契沖は君の御幸ありて押照の義なりといひ、眞淵は浪の競ひ立つ義とし、宗武は平なる地を日の押照す義とし、久老は海上の照り光る義といひ、尹祥は君德四海に光被する義と說き、秋成は食国菜といふより難波の頭の一音にかけたりとし、雅澄は押光る浪の花の義といひ、その他にも說あり。後考を竢つ。
【考】難波浦は水淺くごろ深くして舟を出すときは押し出づるといふ詞と見えたり。
【標】紀抄によれば難波崎の海に押し出でたる心なり。萬葉二十には難波の海おしてる宮とよめり。かくあれば押照は難波に限るべく聞えたるを、喜撰式に難海おしてるといふ。能因歌枕もこれに同じ。よつて後々の歌にはよさの濱とも千重の白波とも續けて、難海の總名に詠じたり。
【冠】おしてるは潮照なり。汐海をいふ枕詞なり。水海をば潮てるといふなり。照は物をほむる詞にそへたり。難波に多くよめるは此海をほめてなり。

【匠】古くより押出或は潮照の兩義あり。まづ押出の義はいふに足らず。うしほ照るといふ心ならばしほてるとこそいふべけれ。今案ずるに應神天皇輕島豐明宮に天下を知召し、又難波にも大隅宮を造りてより／＼御幸せさせ玉へり。されば押照の義ならむ。

【考】私記に難波三埼如推出也といふも、又或人萬葉に押照臨照などかきたるに就きて天下に君臨したまふことゝ思へるも共に誤なり。こは神武紀に方到難波碕會有奔潮太急因以名爲浪速國亦曰浪華今謂難波訛也とある古語によるに、襲立浪急之崎てふ意にておしてるなにはの崎とはよませ玉ひしなり。さておしてるのおしはおそひなり。そひの反しなれば約めておしといへり。てるは立てるの略けるなり。萬葉二十なるは轉用なり。

【摘】押照の二字は假字ともいはめ。押光、臨照はよしもて書けるにあらでなぞや。是は浪花は打開きたる所なれば、日の押し照す謂なり。萬六、超草香山時の歌により、難波の海のよく見ゆるさまをほめていへるなり。

【傳】(三十) 浪に押すといへる例は、難波の枕詞におしてるといふを、師說に襲ひ立る浪と續けたるなりとあり。おしをおそひの約りたりといはれたるは惡し。ただに押なり。

【槻】海上の照光るをいふ。難波に續けしは和庭(なごには)の意、庭とは海上の平かなるをいふ。萬六によめる意は草香の山道より西方を遙に見渡せば、天雲のそぎへのきはみ、海上はただ一面に平かに押照れば、この山道にして古人の押照難波とは名づけ始めけるなるべし。

【諺】おしてるのおしは覆ふの義、てるは光るの字。尙書の光被四表といへるに基き、天子南面して朝に立つといふによりて南面と難波と音韻の通ふゆゑ續けたるにや。

【袋】あとより押しあぐるやうに立つ浪はやと續けたり。紀に押齒といふが如し。

【鉛】斉潮太皇をおしてるなにはと訓みて說かれたるは私の甚しきものなり。今の日本紀訓點は養老の撰者達の讀法にはあらで、代々の博士達の古訓を失ひてよみ改めしものなり。おしてるは仁德天皇の天か下に押足はすと臣民の賓へ申せし庶業の德音にて、ただこの難波の宮に限りいへるにやと覺ゆるはいかに云々。さるは臨照の字につきて押し照すなりといはれしも、語義は相似たるを猶難波のみに冠らするいはれなきか。又思ふ琴酒をといふ歌は美酒を食足るといふにかけて垂見野に冠らせしなり。さらば難波の奈の一言にかけて食足栄とまでかけたるかとも思ゆ。

【解】浪花はもと日本紀に見えたる如く、本は浪速と浪華ともいひしを、その浪華とある方につきて、その本義に立かへりて、この枕詞におけるなり。華には光といふが常なれば押並て光、浪の華といふ意に續けたり。

【三】天が下なべてに渡り照しますといふ義にて、仁德天皇の御代の御光の天が下押なべ照しませる事を仰ぎ稱へて、おしてるやなにはの宮と歌ひそめしを本にて、後は浪速の枕辭の如くいひならひたるなり。

【黑】おしてるは大し立有るなり。大しは力を大きく入るる意なり。押もその意なり。浪華とよむべし。

【辭】萬葉時代には既に原義がたどられなくなつてゐたものと見える。直越の道で作つた歌におしてる海と名づけけらしもとある。これは月おしてるなどと同じ意に奈良人は考へてゐたのである。

おすひを　飯高の國世記

倭姫命世紀に飯高國と連ねたり。おすひとは頭より被りて裾に至る衣にて後世のかつぎの如きものなり。これに

紐などの着きたるより、結ひといふより類音のいひにかけ轉じて伊勢の飯高の枕とせしなるべし。

【貂】押帶を結ぶその結目の高きとかけしなり。ゆひといひと音通へり。押帶名のみ傳りてその物を見ず。

おち髪の　亂れて物を思ふ拾十一

拾遺に亂れて物を思ふと續けたり。女の脫けたる髮の如く心の亂れてと比したるなり。『朝な〳〵けづればつもる落髮の亂れて物を思ふ頃かな』

【貂】落髮は每朝櫛けづりすれば末のやつれ落つるをいふ。落髮の亂を思ひ亂るるによせしなり。

おちたぎつ　たきの都萬一　多紀の小國山齋集

萬葉一に珠水激たきの都とあるを枕詞解にはおちたぎつとよみて枕詞としたれどこは石走るとよむべきか。山齋集に多紀の小國に冠らせたり。同音を反覆して川ふ。

【解】珠水激云々を舊訓たまみづと訓むは論ずるに足らず。考にいはゞしると訓めるは瀧の言への續はさることとながら、珠水をいかでかいはと訓むべき。按ふに珠は隕字の誤字なるべし。珠と隕と草字似たればなり。卷七に隕田寸津走井とあるを思合すべし。

おとにのみ　菊古十一　企救の濱松續拾遺十四

古今十一には菊の白露と連ね、續拾遺十四には企救の濱松と續けたり。聲に聞くといふより同音異義の菊及企救に轉ぜしなり。企救は豐前の地名。この歌は音に聞くといふ意をも下句を利かせたり。◇『音にのみ菊の白露夜は起き晝は思にあへず消ぬべし』

音　羽　山　音に聞きつつ古十一

古今十一に「音羽山音にききつつ」と同音を重ねて用ひたり。◇『音羽山音にききつつ逢坂の關のこなたに年をふるかな』

おふしもと　木のもと山萬十四

萬葉に『おふしもと。このもと。山の眞柴にものらぬ妹が名かたに出せかも』とあり。接續の意明かならざれど、しもと生ふ木の下山といふ義ならむか。楚は大木の根より叢生するものなれば、その意にて連ねたるなるべし。

【冠】このもと山は地名なるべし。木の下には若生の生づるものなれば、生若木木下といふ語にしらべたる畳語なるべし。

おほあさを　引本柿園詠草

柿園詠草の長歌には大麻を引本とつゞけたり。引本は志摩國の地名、麻を引くとかけたるなり。

【石】負楚は罪人の身に負ふ楚なり。そのしもとは木本と續けたるなり。

おほきみの　三笠の山萬七、八　高倉山久老集

萬葉に三笠の山に冠らせたり。蓋は、和名きぬがさとよびて、長柄の傘の如くにて、めぐりに絹を垂れたり。一名を御笠といふ。大君の御後よりさし翳す具なり。よりて大君の御笠といふを轉じて直に大和の山名にかけたり。荒木田久老集には高倉山に連ねたり。こは高御座の意より轉じて列ねたるなり。

【補】には萬葉十に天の川原と續けたるを枕とせり。曰く、大君の御名一名天子天皇など申し奉るによりて、大

君の夫とは續けたるなり。

【考】ここは高御座の御蓋とは異にて、綱さしたる御蓋をいふなるべし、

おほぐちの　眞神が原萬八、十三

萬葉に眞神が原に冠らせたり。昔大和國明日香の地に狼ありて人を噛み殺ししより、そのわたりを眞神が原と呼べり　蓋し狼は勢猛きものなれば神とはいへるなり。さて狼は巨口を有するものなれば大口のと冠らせたるなり。

◇『大口の眞神が原にふる雪はいたくなふりそ家もあらなくに』

【管】眞神が原は和州にあり。口にものをかむといふ心にかくは續けたり。

【燭】風土記云、昔明日香の地に老狼ありて多く人を食ふ。土民畏れて大口の神といふ。その住む所を名けて大口の眞神の原といふ。

【考】狼は猛きものなれば、畏みて眞神といひならひ、且かれが口は殊に大にしあれば、かくいひかけたり。かかる類を神といふは、萬十六にから國の虎ちふ神を、又神代紀に素戔嗚尊、蛇をかしこき神とのたまへり。

【壽】大口のくちは空地なり。空は天をいひ、天は百神の宗なれば眞神といふならむ。

【石】大口馬嚙といふ義なるを、うを略きてまかみと名づく。うまは馬なり。嚙は牛馬をも嚙むものなり。よて大口のと冠らせたり。俗におほかみといふも大嚙といふ義なり。

おほしまの　成ると後九

後撰に「人知れず思ふ心は大島のなるとはなしになげく頃かな」と續けたり。周防の大島と本國との間に鳴門あ

るより、物の成就の意なる成るといふに轉じたるなり。

おほともの　みつの濱萬一　高師の濱萬一　見つとは萬四

萬葉一には御津の濱とも高師の濱とも連ね、同四には見つともいはじと續けたり。こは大伴の御津と續け馴れたるより、同音異義の見つに轉じたるなり。この他三津の濱松とか御津の泊などいふ接續は少からず。御津は難波の地名。名の起原は舟の泊る津に接頭語みを加へてたたへたるか。高師の濱は和泉にあり。尙攝津には大伴といふ郷あり、昔大伴氏の住みしところより名を得たらなるべし。さて接續に關し次の如く諸說あれども昔大伴氏の勢盛にして攝津和泉の邊を領せしより、頓て大伴の名は彼地方の名稱となりたるを、石上布留の類にて大字小字の關係にて續けたりと見るべきか。御津と高師濱と同所といへる說は誤れり。高師の名は姓氏錄に見ゆる大伴の讀士の作所たりしより所の名となれるか。

【燈】大伴のみつといふみつは瑞の義なり。物を褒むる詞なり。神武天皇の御歌にみづみづし來目の子らとあり。これは東征の時大伴道臣命大將として、大來目部を率して凶賊悉く平ぎぬ。よりて大伴の瑞と褒めたる心にて續けたる詞なり。又難波の津を御津と名付くることは、仁德天皇の后磐姬豐明の御爲の御綱柏を投棄させ給ふ故にいふと古事記、風土記に見えたり。

【考】とかくすれど、意を得ねばくさぐさ擧げつ。大伴のみづみづしてふ意にて御津の濱に冠らせたるや。高師と有るは大伴の神つ祖の健きといひかけしにや。武を下へいひ續くるには、たか云々ともいふべきは、竹をたか葉、たか筵などいふ類なり。又姓氏錄の大伴大田宿禰の次に佐伯日奉造、天押日命十一世孫、談士連之後也、

云々これら大伴氏の別れにて、ここの高師に住みしより高志氏といふと見ゆれば、その山にて大伴の高師の濱と續けしにや。又神代紀に臂著₌稜威之高鞆₌といふ意にて、大鞆の高にいひかけしにや。見つとはいはじとあるは、石上ふるとも雨になど働きたる類なり。

【傳】三十六大伴の御津と續くるは稜威の意に續くるなり。いとみと通ふ例、建御雷神の下にいへるが如し。又稜威のつは清音なり。冠辭考の說も宜しからず。又冠辭考にこの御津を住吉の津と一の如くいはれたるもたがへり。

【辨】鞆の浦御津と所を疊みてなり。

【紹】大伴氏は代々大連の重職にありて、この攝河の兩國を食地にや領せられけむ。欽明紀に大伴金村大連居₌住吉宅₌稱ㇾ疾而不ㇾ朝といふこと見え、靈異記にも推古御時に大伴野稱古といふ人居₌難波宅₌而卒と見ゆ。又攝津風土記に菅野は雄伴郡にありと見え、又法隆寺資財帳に攝津國雄伴郡宇治郷うな五丘地壹と見えたり。和名抄にはこの郡名なきは、淳和天皇の御諱を大伴と申し奉りしかば大伴氏を伴氏と改めし時、大伴郡を八田部と改めけむ。又大伴の高石ともよみたるを思ひて、攝河の二國は大伴氏の食地ならむかとはいふなり。さて大伴は（おほとも）雄伴（をとも）音を略して唱へしなるべし。

【一言】みつの濱、高師の濱同地ゆゑいひかけたり。高師濱は後世和泉に屬す。古攝津の大伴と同所なればいへるなるべし。

【解】みつみつし久米とあるみづ。にとりなして續けしなり。さてこのみつは才德勇威あるをいふ詞なり。記には

才叉伎の字をみつとよめり。

【石】大伴氏の盛なるを賞て滿つと續け叉その功高しと續けたるにや。

【春】大伴の高師と續きたるは枕詞より直につづけたるなり。

【黒】大伴家金村の居宅を占有せしより住吉の邊を汎く大伴といへりしなるべし。

おほ鳥の　羽易山萬二　羽毛山山齋集

萬葉二の長歌には羽易の山と續けたり。鳥の羽といふより羽を頭にもてる地名にかけたるなり。山齋集には羽毛の里とも、羽毛山とも連ねたり。

【考】大鳥は鶴をいふか。又鷲などを指していふか。若し鷲をいはば羽を易ふるを待ちて矢に用ふるなれば、羽易の字の意とすべし。

【解】和名鈔はおほとりといへど、ここは何となく只大きなる鳥といふなるべし。ただ大鳥の羽と續けたり。

おほぬさの　引手あまた古十四

古今に「大幣の引く手あまたになりぬれば思へどえこそたのまざりけれ」とあり。大祓の時大幣にあまたの人の手をかくるより喩に取りたるなり。

【考】こは川邊に大祓する時人々集ひて大きなる幣に手をふれつつ引きて祓のわざすめるさまを、あだ人の引かた多きに譬へて冠らしめたるなり。

おほ舟の　渡の山萬二　津守が古萬二　香取の海萬十一　ゆくらゆくらに萬十三

たのめる萬十三　たゆたふ見れば萬二　思たのみて萬二　もそろ／＼出雲風土記

ゆたのたゆた古　渡邊の子鈴屋集　津野命出雲風

大舟の海上を渡るといふより筑前の渡の山にかけ、舟の泊る津といひ下して、そのかみ卜事に明かなる津守（人名）にかけ又津野命に冠らせ、船には數多の楫取の居るより、そのかとりの音を下總の香取海にうつし、又船の緣語の渡るといふより渡邊と人の姓氏にかけ、又荒海の上を渡るときには、大船にひとへに依賴せらるべきものなれば、これを人事に比し、行末の賴まるるに喩へ、又船は海上にゆらゆらと搖るるより、心の彼方此方に搖ぐことに譬へて、ゆくらゆくらとも、ゆたのたゆにともいへるなり。大船の徐々に進むさまをとりてもそろもそろと續けたり。◇『大船の津守が卜にのらむとはまさしく知りて我が二人寢し』『大船の香取海に碇おろしいかなる人か物おもはざらむ』『海原の道にのりてや大船のゆたに有るらむ人の子ゆゑに』『いで我が人な兒めそ大船のゆたのたゆたに物おもふ頃』

【考】荒海の上はただ大船を憑もしものにて渡るを、末をかねて思ひ憑まるるに喩へ、又船のよる處を津といへば、大船の津守へ從五位下津守連通といひかけ、舟のゆらゆらと搖ぐを物思ふ心に喩へてゆくらゆくらにといひ、香取海といひては船の楫取るにいひかけたり。渡の山と續けたるは明けし。

【袋】楫取の楫をかとのみいふは、八十梶かけといふ類なり。船の歩の遅きをいふか。又我妹渡の河崎濟ぐにも、海を渡るにも、梶取等が語にようそろといふは、日よく波風なきをよく候ふと譯訓するか。又舟の川端にさはらで行くをようそろといふか。風土記のは歩のおそろといふ意に叶きなでるなり。

おほみよの　平の宮　平の朝臣

著聞集に大御世の平の宮と連ね又平の朝臣とも續けたり。御代の平かにと祈る詞よりうつしたるなり。

おほ雪の　亂れて來れ萬二

萬葉二の長歌に矢の繁りに飛び來るを大雪の亂れて來れと比したり。

おほよどの　仰言源順集

源順集に『白波の知らぬ身なれば大淀のおほせごとをばいかで頼まむ』とあり。大淀浦は伊勢多氣郡にあり。大瀨といふを仰にうつしたり。上に知らぬといはむ爲に白波のと置きたるをもて、波にゆかりある大淀浦を點出し、これにおほよその意を兼ねしめ、さて大淀の大瀨といふよりおほせに轉じたるなり。

【招】大淀の仰言とは上の白浪の知らずといふよりして、よせある地の名をとり合せ、大淀のおほ瀨とかけたるなり。

おほをよし　鮪（しび）記

古事記顯宗天皇の御歌に大魚よし鮪つく海人よと連ねさせられたり。ここに鮪といふは人の名なれど、鮪は大魚なれば大魚よと呼びかけたるなり。しは助辭。

織るはたの　羽田藤垣內集

本居內遠の藤垣內集には織る機の羽田と同音を反覆して續けたり。

かの部

かがみなす　見る萬二、十三　御津の濱萬四、十六　我が思ふ妻記

古事記には吾が思ふ妻、萬葉二の長歌には見れども飽かずと比し、同四及十六には御津の濱と連ね、十三には吾が見し妻とも、十八には斯くし常見むと語句を隔てて續けたり。鏡は常に見るもの故見ると比し、又見つと同音なる御津の濱に轉じたるなり。なすは似すの義、の如くの意なり。後世のものには鏡なす池、鏡なす水などと續けたり。かかる時には池清く澄める水をいふ。

かがり火の　影古十一

古今に『かがり火の影となる身の詫びしきは流れて下にもゆるなりけり』とあり。ここに篝火といふは鵜川などにさすかがり火にて、影となる身とは人に思はれてままならぬ身を指す。火の影といひ下して、果なき陰の身と續けたるなり。一首全く此の體なり。

【服】人の影てふものは、有りと見れども無くてはかなきものなれば、身もおぼろかになるを、影となる身とよめり。さてその影といはむとて篝火と冠らせたり。

【鉛】鵜川のかがり火なり。火影の水底に燃えて見ゆるをいふ。

かきかぞふ　二上山萬十七　四つの時藤原宝集　五の神國　三世東歌　八釣の宮萬葉集

やぐらの殿蓬萊集

萬葉十七の長歌には二上山に冠らせたり。かきは打ちと同じく下の語を強むる詞、數は一つ二つとよむより二上といふ山名に冠らしむ。縣居翁集には四の時とも又五つの種とも連ね、加藤枝直は三世に冠らせ、蓬萊集には八鈞の宮ともやぐらの殿とも連ねたり。

【考】一つ二つより十までは數少ければ、ことなう打數ふる意にてかき數ふ二つとは續けしなり。日本紀に『かかなへて夜には九の夜、日には十日を』といひしも似たる意なり。

【行】かぞふは數追といふ義なるを、すおをぞと約めてかぞふ。

かきつばた　匂へる妹萬十　匂へる君萬十　佐紀沼萬十　咲澤萬十二

萬葉に匂へる妹とも匂へる君とも續け、又佐紀沼とも、開澤とも連ねたり。かきつばたは、今いふ燕子花といふ說と垣根に生ずる朱蘭といふ說とあり。いづれにもあれ、前の二つは、の如くと比し、後の二つはその花が咲きといふより、同音異義の大和の佐紀といふ地にある沼又澤にかけしなり。◇『吾のみや斯く戀すらん、かきつばた丹頰合妹はいかにあるらむ』『かきつばた丹頰經君をいささめに思出でつつ嘆きつるかも』『かきつばたさきぬの菅を笠に縫ひ着む日を待つに年ぞ經にける』

【考】匂へるといへるは、古は何にても色の餘光をいひて香と聲には稀にいへり。垣津旗は借字にて荷田大人は翔燕花といふ意とぞ言はれし。

【服】さき澤てふ所をいひ出でむ爲にかきつばたといへり。何の花をいひても宜しからむに、この花をしも取出

たるは、その澤に燕子花ありと心得べし。

【解】萬十及十一に丹頰合を匂へるとよめるは甚しき僻言にて、必につらふと訓むべきなり。につらふは丹著ふといふに同意なり。つらふはあげつらふと同じく、その形容をいふ時添ふる言なり。開澤開沼は燕子花の咲くと續けたるなり。

【黒】かきつはたは翅羽(かきつはた)なり。

かきこゆる　犬萬七

萬葉七の旋頭歌に「垣こゆる犬よびこせて鳥狩する公、青山の葉繁き山邊に馬やすめ君」とあり。犬は垣越ゆることと常なればかく續けたるなり。

【存】宣長云、垣こゆるはただ犬といはむ枕詞なり。歌の意にはかかはらず。

かきほなす　人言きゝて萬四　人のよこ言萬九　人の誂ふ萬九　人はいふとも萬十二

垣穗の如く人を隔つる言又人の中を隔てしむる曲言といふ意に續け、又垣穗の如く數多くいふ意に用ひたり。

◇「垣ほなす人のよこごと繁きかも逢はぬ日多く月の經ぬらむ」「垣穗なす人はいへども狛錦紐ときあけし君ならなくに」

【石】垣穗の物隔つるが如く、君と我が中隔てむとする人言ききて、人の曲言又は人のさかしらとも訛したるなり。

かぎろひの又かげろひの　春萬六　心燃えつゝ萬九

履仲紀には燃ゆる家群とも、萬葉二の長歌には燃ゆる荒野にとも、同十には燃ゆる春べとも、同書六の長歌には春にしなればとも、同九には心燃えつつとも連ねたり。」◇ 紀『埴生阪我が立ち見ればかぎろひの燃ゆる家村つまが家のあたり』 萬『今更に雪ふらめやも蜻火のもゆる春部となりにしものを』 かぎろひとは燃ろ火の義、履仲紀のは家の燒くる火、萬葉二のは葬火をいへるにて、枕詞にあらず。かぎろひのより直に春につづけたるは陽炎の燃ゆる春といふ義。心もえつつとは自然を以て人事に比したるなり。

又萬葉八の『玉蜻ほのかに見えて別れなばもとなや戀ひむ逢ふ時までは』萬葉十の『はたすすき穂には咲き出ぬ戀をする玉蜻ただ一目のみ見し人ゆゑに』同『玉蜻夕さり來ればさつ人の弓月が嶽に霞たなびく』同十三の長歌玉限日もかさなりて云々。同十一の『まそ鏡見ともいはめや玉限石垣淵のこもりたる妹』『玉蜻の石垣淵のこもりには伏して死ぬとも汝が名は告らじ』に於けるほのかに、一目のみ見し、夕さり來れば、石垣淵にかかれるを、從來かぎろひのと訓み來りたりしが、伴信友の玉蜻考、鹿持雅澄の玉蜻考によりてたまかぎると訓むべしとなすべし。尙次に抄出せるそれらの諸說並に萬葉美夫君志の條を參考すべし。

【意】かげろふもゆとは、かげろふの文字ひの文字に通へる故に引かれて燃ゆるとはよめるなるべし。

【燭】かげろふの燃ゆる春といふを略して、單に春ともかく。かげろふに二種あり。ここは陽炎なり。春の陽氣の發して空に火の氣の如く燃ゆるものなり。これをば野馬とも名付く。遊絲といふも同じものなり。火をばふともいへば、かげろひ、かげろふ同じことなり。かげろふの石と續くるは、石火とて石より火は出づるものなればいふか。夕と續くるは、夕陽のかげろふといはなとて、かげろふの夕さり來ればと詠めるか。亦かげろふは蜻蛉と

いふ蟲なり。この虫夕暮に飛びかふものなれば續くるか。古今集にかげろふのそれかあらぬかといへるは、顯昭法師が註にも、この虫の有るかなきかに飛ぶものなれば、かくいふといへり。この蜻蛉といふ虫は俗にゑんばといふなり。黑えんば赤えんば青えんばなど色々あり。その中に赤えんばは火の色なればそをかげろふと名づけたるを、おしなべて蜻蛉の名とするかともいふべし。

【匠】ほのかに見えて又一目みしは、彼が飛翻るほどの、それかあらぬかと思ふばかりにほのめければなり。火燃ゆる焔もその如くなれば、喩へて蜻火といふならむ。又石かきぶちといへるは、石とのみ續きしこと見えねば、こは石垣こもる淵は青ければ青き淵に續くるか。云々。

【考】かぎろひは春の空に絲の如くかげろひつつ見ゆるものをいふ。さてこれぞ實にうらうらと晴れたる春のきまなれば、專ら春に冠らせていふならむ。されどこの語の本は、火影のきらめくより出でて、かの空に靡べる絲などは譬へてかぎろひといふなり。ほのかといふは火影の闇に見えたるに譬ふ。夕といひ日といふは日の氣のきらめくをいへり。夕日は殊に火影の如くなれば譬へつ、云々。

【摘】冠辭考には虫を分けず皆立のぼる氣の事とせるより併かねて、香切火の借字によしなづけてかけり。

【解】燃ゆる家村と續けたるは焼火の意にて、夕と續きたるは燃ゆる夕といふべきを略したるなり。云々。

【稜言】かぎろひは火にまれ日にまれ赫を云てかぎ、かぐ、かげ、かがと活ける皆同言なり。されば常にかぎろひの春と連くるは、うららかなる春の空に糸を引き靡かすがごと見ゆるものを云なれども、それも本は陽炎のきらめきて然か見ゆるなればその意同じ。又かぎろひの岩垣淵などよめるも、岩の崎ちて俗に云ふ日だまりの水上は

殊に日の氣のきらめくものなれば然つづくるなり。又かぎろひの夕と續けたるは夕日は特にきらめて影のもゆるが如く見ゆればなり。萬葉に蜻蛉とも書けるはこの虫常に日影を求めて遊ぶものなれば、かぎろひ虫といひけむ故に書を借りて書けるなり。

【比古】萬葉に玉蜻蜓、玉蜻、珠蜻など書るはタマカギロとよみて、今俗にヤンマと呼ぶものなるべし。玉とは頭の大なる目ごめにあるが、透徹りて玉の如く日に立ちて見ゆる故に玉カギロと呼たるなるべし。玉かぎるほのかに見えて、はろかに見えて、ほのだにも見えずと續けたるは、蜻蛉の中空を飛ぶさまによりて髣髴又遙になどいへるなり。玉かぎる夕さりくれば云々、蜻蜓は夕になれば多く中空を飛びめぐるものなれば然かいへるにて夕さりにかけたる枕辭なり。玉かぎる石垣淵のこもりと續けたるは、蜻は水上に集きて萍などに下りつつ飛びめぐるものなるを、これは磐垣の淵に在る上を云ひて人目の遠きに譬へたるなり。次に玉かぎるただ一目のみには、蜻の空中を須臾の間に飛び過ぎたるさまに譬へたるなり。さてこの虫の中天を微に飛びちがふさまを陽炎に喩へてカギロヒといひ又カギルともいひ、そをまたカギロとも轉じいへるにて、カゲロフといへるもカギロヒを轉じていへるなるべし。もゆる春べ、春にしなれば、もゆる荒野に、心もえつつ、もゆる家村に冠らせたるはかぎろひのとよむべし。(節略大要)

【玉蜻考】玉蜻、珠蜻、玉蜻蜓など書きて乃の字をも火の字をも添へざるはたまかぎると訓むべく、その他はかぎろひのと訓むべし。このたまかぎるのかぎるは耀の意なるべし。たまは美はしくさやかなるをたたへいふ稱なり。磐垣淵とつづくは深き淵は青くすきとほるやうなれば玉炫といへり。夕と續けたるは夕日の清明に炫く夕といふ

意につづきたるか、又日とつづきたるは清明に光り輝く日といふならんか。さてほのかとつづくは、明珠の光はほのかにはるはると炫くよしにてつづきたるが、はるかと續けたるも同義なり。直一日とつづくも明珠の光は直一日見ても灼(いちしる)きよしの續か。

【美】磐垣淵とつづきたるは卷六にいそ隱りかがよふ珠を、卷七になちこちの磯の中なる白玉をなどありて、玉はもと石また磐などの中に交りてあるものなれば、玉炫る磐とつづけたるか。または卷二に水底の玉さへさやに、又味村のとをよる海に船うけて白珠取らむと、わだの底しづく白玉等ありて、玉はすべて水中にあるよしなれば淵とつどけたるにてもあるべし。かかれば玉炫(かぎ)る淵とつづけたるなるべし。髣髴(ほのか)とつづくはとあるはほのかに見えてまでかかるなるべし。又は火の意につづけたるにてもあるべし。かくてこの枕詞のつづきやうを圖示せば左の如し。

玉蜻蜓
玉蜻
玉限
玉垣入
……
いはがきぶち
ほのかに見えて
夕ざりくれば
ただ一日
日

蜻蜓火之
蜻火之
香切火之
炎之
……
もゆる
はる

【石】かぎろひは陽炎にて日氣なり火氣なり。その日氣の發り來るは、春日長閑なる虚なれば春と續けしなり。花の春などいへると同じ。燃ゆるほのか等續くるはかぎろひの形勢なり。日夕と續けしは上に燃ゆるの詞を略け

ろなり。唯一日のみと續けしは、陽炎は見ゆる頃て消えゆくが故に比していへり。

【旌解】火影のほのかに見ゆるに譬へしにて、遠くきらめきたる火影のほのかに見えしをただ一日と重らせたり。すべてかぎろとは火にまれ日にまれその餘光をいふ。

【黒】のどかに照る日をかぎろひ日といふ。再云、氣隔日(かきらひ)なり。此說從ふべし。氣の立ち隔つる日をいふ。岩垣淵と續けたるは、氣隔日の五百隱なり。いはかくりは深く隱るるなり。

かくなわに 又 かくなはに　思ひ亂れて 古今

古今長歌に行水のたゆる時なくかくなわに思ひ亂れてと續けたり。かくなわは古の菓子の名、形曲りくねりたれば、譬に取りて心亂れてと比したるなり。かくなわは香の沫の義か。油にて揚げたるもの。

【服】菓子の名なり。あわ結のやうに結び亂らかしたれば、亂れてといふ語へ續くべし。俗にくもでかぐなわともいひて、くもでもあやに紊きさまをいひ、かぐなわもあやに亂るるさまをいひしなり。

【彥】云にあわ緒とはあや緒なるべきか。あや緒とは今世の言に絲に捲(より)をかくるを、あやをかくるといふが如し云云。和名抄にかくのあわとあるあわも、その結ばりたる貌の古の泡緒に似たる故の名ならむ。鈴木保章間。古今雜長歌かくなはに思ひ亂れても假字はかくなわにて、上句の水の沫といふよりかのあわ緒に思ひよせて、結果(かくのあわ)のよられ結ばれたる形の比喩にいへるにあらじかの答。しかならむ。

【貂】和名抄果餅の中に結果(かくのあわ)、形如結緒、和名かくのあわと見えたり。かぐのあわを約めてかくなわと云ふ。かぐは香ばしきなり。

【袋】蛛かかる形したるものなれば亂ると續けたり。

かくもぐさ　斯くのみ六帖

六帖六に「我宿にかくもを植ゑてかくも草斯くのみ戀ひば我はせぬべし」とあり。同音を重ねたるなり。かくもぐさは黄蓮の異名なりといへり。

かけはしの　危き道後十

後撰十に危き道はと續けたり。棧道の上を行かば物怖しき心地するより、危き道と人事に比したり。「人づまに心あやうくかけはしの危き道は戀にぞありける」但しここにては枕詞は上二句を承け、人に心を掛けるといふ意を兼ねたり。

【紹】山路の棧道をわたり、或は寶庫の階梯にのぼるに喩へて、人妻に想をかくる心の、わりなくて危しとかこち言するなり。

かけろふの　それかあらぬか古十四　あるかなきか古十五、後十八　ほのかに見えし後四　ほのめきつれば後十二　ありやあらずや新古今

古今十四にはそれかあらぬかとも、十五にはあるかなきかとも、後撰四にはほのかに見えしとも、同十八にはあるかなきかの程とも、十二にはほのめきつればとも續けたり。かけろふはかぎろひの轉、かねつけ蜻蛉のことなり。その蜻蛉の生命の短きより喩とせしなり。◇古「かげろふのそれかあらぬか春雨のふる人見れば袖ぞぬれける」古「あはれとも憂しとも云はじかげろふのあるかなきかに消ぬる身なれば」後「夢よりもはかなきものはかげ

ろふのほのかに見えし影にぞありける」後「かけろふのほのめきつれば夕暮れの夢かとのみぞ身をたどりける」

新古今「夕ぐれに命かけたるかげろふのありやあらずやとふもはかなし」

かごじもの　ひとり萬九、廿

萬葉九の長歌には吾ひとり子のと續け、同二十にはたゞひとりしてとも連ねたり。かごは鹿の子にて、じものは狀(ざま)のなり。多くの動物は一たびに多く子を生むものなるに、鹿の子は一度に一頭なればこれをひとりの人に比したり。

かしのみの　ひとり萬九　一つの品富士谷成章集

萬葉九の長歌に一人か寢らむと續けたり。毬果の中にても櫧の實は一毬の裡に唯一子を有するものなれば、一人と喩へたるなり。富士谷成章家集には一つの品と續けたり。親王の位に言ひ轉じたるなり。

【考】椎の實などには、聚り結ぶを櫧は疎く一つづつなるもの故なり。かごじもの我一人子とよめる類なり。

かしはぎの　洩り拾十九

拾遺十九に「人知れずたのしめしことは柏木の洩りやしにけむ世にふりにけり」とあり。近江の名所の一つなる柏木の森といふを洩りに轉じたるなり。源氏には柏木の卷あり。月卿雲客を擬ふるに右衞門督を柏木によそへ、歌にもよめり。枕草子に兵衞佐尉などいふらむもをかしとありて、ここなる歌は、右近といふ女が右兵衞へ送りし歌なれば、かしたきといふにも、よせありといふべし。

【紹】柏木は茂りあひて森なす木なれば洩りてとかけしなり。柏木の杜といふが有るにはあらず。

かすが野の 訪ふ日六帖 烽火(とぶひ)縣居家集

六帖二に訪ふ日ありやと續けたり。大和春日野の中には飛火野といふあり。古今にも春日野の飛火の野守出て見よともあれば、とぶひをとふひと類音に轉じてかけたるなり。◇『忘らるる時しなければ春日野の訪ふ日ありやと待つぞ詫しき』眞淵の長歌には烽火に冠らせたり。

風浪の 名草鈴屋集

本居宣長の長歌には風浪の名草と續けたり。名草は紀伊の地名。風浪のなぐといふより地名へうしつたるなり。

かぜの音の 遠き我妹萬十四

萬葉にとほき吾妹と續けたり。風の音は遠くより聞ゆるものなれば、遠方にある我妻と比したり。◇『風の音の遠きわぎもが着せし衣たもとのくだりまよひきにけり』

【考】記に下照比賣之哭聲與風響到天てふによりて、風の音の遠きとは續けたるか。さなくとも、物の音は風により遠く響くものなれば、たゞ遠きといはん料の冠か。

【標】風の音はとをと聞ゆれば遠きに冠らせたり。

【行】の。は調ののなり。の如くにあらず。この音は音信にて音信遠き我妹子といふ義なり。

かた絲の よりより古今序 夜續後撰、新千載、新續古今 因香の池玉吟 來る新後撰 緒絶えの橋新後拾遺 伏見新續古今

古今序によりよりにと續け、絲を拔るといふを時々(よりより)の意に轉じ、續後撰には夜鳴く虫のとも、新千載には夜たによ

も、新續古今には夜の衣とも、玉吟集には因香(よるか)の浪とも連ねたり。いづれも絲を撚るといふより、同音異義語に轉じたり。◇續後撰『夢路にも逢ふとし見ればかた糸の夜だに安くねなましものを』玉吟『かた糸の因香の池のねぬなはのねぬ夜は波の下に苦しき』

この他新後撰には來る夜まれにとも、新千載には栗栖の小野とも、續古今にあはでの浦とも、新後拾遺には緒絶えの橋とも、新續古今には伏見の里とも續けたり。いづれも絲の緣語なる縒る、合ふ、緒、節等を他の同音異義語に轉じて冠らせたるなり。◇『かた糸の栗栖の小野の一すぢに逢ふべきふしや思ひたえなむ』『かた糸のあはでの浦の波高みこなたかなたによる舟もなし』『かた糸の伏見の里は名のみして逢見ぬ戀は夜ぞくるしき』

かたいとを　よりかけて　古十一

古今に『かた絲をこなたかなたによりかけて、逢はずば何を玉の緒にせむ』とあるを三代枕詞例に舉げてこなたかなたに掛るとせり。よりかけては絲に撚をかけるを人に言ひよりかけると轉じたるなれど、全首が此の歌にて枕詞と見るべからず。

かたしほの　からくうけらが花

千蔭のうけらが花には堅鹽の辛くと續けたり。人事にうつしたるなり。

かたもひの　其許(そこ)萬四

萬葉に『思ひやるすべの知らねば片もひのそこにぞ我は戀ひなりにける』と續けたり。もひとは椀の古言にて、椀の底といふを同音異義の其許てふ語にうつしたるなり。かたは、かた絲のかたの如く、一方にて揃はぬをいふな

れば、椀の蓋なきを指すなり而してかたもひに片思をよせたり。

【續考】埦とは椀の類なり。和名抄、瓦器類云、盌（字亦作椀、末里俗云毛比）小盌也と。此の片といへるは蓋のなきなり。底にそといはむとて上に片埦のと設け置けるなり。主水式云々、蓋あるを合といひ、蓋なきを口といふ。

【攷】埦の字は字書の上にてはもひと訓べき義史に見えざれど、貞觀儀式に片埦とあり、字鏡集に埦塊もひとあれば上古の椀なるべし。底は限りの意にてここは深き意なるを埦の底にいひかけたり。

かたりあふ　友が島 榛園詠草

加納諸平が詠草には紀伊の友が島にかくるに、語りあふを以てせり。地名へ轉じたるなり。

かぢの音の　つばらつばら 萬十八

萬葉につばらつばらにと續けたり。かぢとは今の櫂をいふ。それにて漕ぐときつぶつぶと音するが故に類音なるつばらつばらにかけたり。つばらとは極めて詳にといふ古言なり。◇『朝開き入江こぐなる楫の音のつばらつばらに我家しおもほゆ』

【考】淺茅原つばらつばらといふに同じ。驛宿わたり、ゆきかふ舟の櫓どもの、船縁にすれるつばつばと鳴りつつ暇なきなり。かぢは今の櫓のことなり。

かづのきの　かづさね 萬十四

萬葉十四の東歌に『足柄の吾をかけ山のかづの木の吾をかづさねもかづさかずとも』とあり。かづの木は穀の木

を方言にて訛りていへるならん。かづさねとは冠辭によればかどはしゆけの義。類音を重ねて詞をなす。

【解】かつの音を重ねたる枕なり。かつの木は穀の木なりと契沖いへり。

かつらかけ かぐはし 萬十八

萬葉十八に「見まくほり思ひしなべにかつらかけかぐはし君をあひ見つるかも」とあり。かつらかけは日蔭かづらをいふ。日蔭かづらは神事にも用ひ、古人のめでたるより香ぐはしの枕詞とせりといへり。かつらかけは別の芳草の類にあらざるか。女の髮にその粘汁をつくるさなかづらなどをいふにあらざるか。

【解】本居氏云、かつらかけは蘿なり。さて古ひかげは賞貴みたるものなるが故にかぐはしの枕詞とせるなり。

かにが往き 横瀧山 鈴屋集

本居宣長の長歌には横瀧山に冠らしむるに蟹がゆきを以てせり。蟹の横にはふが故にかくつづけたり。

かねとかし 石凝姥命 菅根集

菅根集に石ごりとめの命に冠らするに金とかしを以てせり。石のこりかたまるといふに對し、金をとかすと置きたるなり。

かはぎしの 待つ 後十三

後撰に「來ずやあらむ來やせむとのみ川岸のまつの心を思ひやらなむ」とあり。河岸の松といふより、同音異義なる待つへ轉じたるなり。三代枕詞例にも採りたり。

かはなみの 並に 萬五

萬葉五に『並にしおもはば』と同音を重ねて用ひたり。右上枕詞例にあぐ。

かはやぎの　懇萬九

萬葉九にねもころ見れどと續けたり。柳には殊に根の延ぶるより、川柳の根といひて、直ちにねの音を頭に續ける懇にかけたり。◇『蛙鳴く六田の淀の川柳のねもころ見れど飽かぬかも』枕詞解に採りたれど序歌の第二句なること例歌にて知るべし。

かへる山　かへるがへるも古十七　省み縣居家集

古今に『白雪の八重ふりしける歸山かへるがへるも老にけるかな』との詠あり。越前の山の名を假りて反すと同義の副詞にかけたり。縣居翁集には省みと連ねたり。歸山は越前南條郡鹿蒜郷にあり。今の鉢伏山といふはその頂なるべし。

かほばなの　寢らむ萬十四

萬葉十四に『內日さつ宮の瀨川のかほばなの戀ひてかぬらむきぞも今宵も』とあり。かほばなは歡林權輿にはかきつばたといひ、眞淵は面高（澤瀉）といひ、雅澄は晝顏といひ一定せず。萬葉に見えたるは水草と見えたり。或は睡蓮などをいふにあらざるか。その花の夕に至り萎みて恰も眠りたるが如きを人の上に擬へて喩へたり。第五句は下の句へかかる。

【解】晝顏の花は日中はよく咲きて、暮方に眠り萎むものなれば、戀ひて眠といはむ枕となせるならむ。

中山嚴水云、かほはこひと音通へばかほ花のこひと受けたるなるべし。

かみがきの 御室の山古二十

古今に『神垣の御室の山の榊葉は神のみまへに繁りあひにけり』とあり。古語に神を祀りたる所を三諸といふ。よりて神垣のみもろといふを、大和の御室山に轉じたり。御室の山は三輪山の一名なり。

かみつけの まぐはしまど萬十四

萬葉十四の『かみつけぬまぐはしまとに朝日さしまぎらはしもな在りつつ見れば』の上二句を諷詞とせり。雙沖は目細し窓といひ、眞淵は眞桑島門と聞ゆといひ、宣長はまどは眞門ときこゆといひ、諸說區々。或は上野の地名に窓をかけたるか。後考を俟つ。

【仙】窓は明りの爲なれば、垣壁の牛らより、紙によりてしたるがよければ、上野のまぐはしまどとよそへ續けたり。

かんかぜの 伊勢記萬

古事記及萬葉十三には伊勢の海とも、日本紀十三には伊勢の野のとも、萬葉一には伊勢少女どもとも、同二には伊勢の國とも、八には伊勢の濱荻とも連ねたり。その接續の理由は次の條を見よ。

かんかぜや 五十鈴の川新古十九　山田の原新古十九　御裳濯川同　内外の宮續拾遺二十　豊みてぐら新古十九　玉串の葉新古十九　朝日の宮玉葉二十　二つの宮新續古今二十

新古今には五十鈴の川とも。山田の原とも、御裳濯川とも、玉串の葉とも、とよみてぐらとも、玉葉には朝日の宮とも、續拾遺には内外の宮とも、新續古今には二つの宮とも、藻鹽草には三綱柏にとも續けたり。神風は奇しき風なるべけれど伊勢と續くること古來諸說ありて一定せず。試に云はば人麿の長歌にも『神風にいぶき惑はし』

の語あり伊勢の神風といふ語は古書には見えねど古くよりありしなるべし。伊勢灣頭に吹く風は他地方と異りてその方向とか風の強さなどに於て異常なるものあり、夙くより神風と呼びならはしたるならむ。伊勢の國名は磯の國即ち海添の國の義なるべく、その海岸に時々奇しき風の吹きすさぶより神風と負はせたるなるべし。風土記にいへる伊勢津彦の傳説もかかる天然現象よりいひ出でたるならんか。神風伊勢の續きは神武の御製に見えたれど唯奇しき風の吹く見做さば事もなからむ。この枕詞は伊勢のみに冠らせたるを、新古今の頃より神風のを神風やと改め、伊勢の神都はいふまでもなく、はては内外兩宮の神事に用ふるものにも掛くるに至れり。

【奥】かんかぜのいせ樣々に申あひたり。或は御裳濯川に神が瀬といふ瀬あり。或は神の惠をいふなりと。又倭姫大神の敎のまにまにそのまつりを伊勢の國に立つ。よりて齋宮を五十鈴川の上におこす。之をいそのみやと云ふ是より申すことにてこそ。

【燭】神風とは神風の惠の廣き風に喩へていふよし先賢の說なり。大方この如し。この國大神の垂跡させ給ふ國なれば、その神德を褒めて、神風の伊勢と申さむこと理なり。又伊勢風土記によれば、伊勢津彦の風を起したる故に神風伊勢といふと聞えたり。萬葉二、人麿よめる長歌に『度會のいつきの宮に神風にい吹き惑はし天雲を日のめも見せず常闇に覆ひ給ひて』と云々、この歌にては天照大神の起させ給ふ風にやと聞えたり。

【匠】風土記の說疑なきにあらず。神武紀戊午冬十月八十梟師を國見丘にうち給ふ時の御製に『かむ風のいせの海の大石に』云々、菟田縣に至り給へるは、同年七月なるに、それより天日別命東に入ること數百里にして、伊勢津彦を平げ給へるを十月に至りて、天皇のやがて神風の伊勢とよませ給はんこと信じがたし

【考】こは神風の息といふべきを略きて、いの一語にいひかけたり。神代紀に我所レ生之國、唯有二朝霧一而薫滿之哉、乃吹撥レ之氣化爲レ神、號曰二級長戸邊命一、亦曰二級長津彦命一、是風神也。といひて風は天つ神の御息なれば神風のいきとはいふべきなり。

仙覺は風土記を引きて、伊勢津彦の神風を起して信濃國へ去りしより神風の伊勢とはいふといへりしを、契沖は日本紀の歌を引きて信じかたきよし論へるは、げにさることなり云々。

【補】神風のいやせるてふ意にて、やを省きて冠らせ始め給へるにや。彼伊弉諾尊の朝霧吹き拂はせ給ひしも國の病いやさせ給ひしにて、大祓の詞に氣吹戸主止云神、根國底之國爾氣吹放弖牟といへるは諸の罪科を除くことにて、此も人の穢あるをいやせるなり。

【燭】神風といふは神武の謂にして威勢といふことならむ。よりていせにかく。

【信】考に風は神の御息なれば、神風の息といふ意にて、いの一言に續けたる詞なりとあれど、さてはのの助語に違へり。さることならば、神息の風といはではあらぬ語格なり。思ふに神風は假字、神饌稲（かむけしね）にて飯米（けしね）といふにかかる言なり。門人信濃國田村小泉好平がいひけるは、かの里人飯米をけしねといふといへり。これは上世の言の遺りしものにて古言なり。次に伊勢の國號も飯稲（いけしね）ならむと覺ゆるは、郡名に飯高、飯野など飯によしあること多かりけり。云々。

【大平】伊勢の國は餘國にかはりて風の強く又度々吹く國なり。風土記云々、萬葉卷二の長歌に云々、諺にも伊勢の神風などいふことあり。この風の靈異なること世人あまねく知れり。斯れば神風の伊勢とは八雲立出雲、知らぬ

ぬ火筑紫などの例にて、その國の性質を表して冠らせたるなり。伊勢の國の方言に海上に風のあらく吹くをしけがするといひ、又山里或は國中にても雨に風交りて横さまに降るをもしけぶりといふ。これらの方言につけて考ふるに、風は氣志計（けしけ）といふ意なるべし。さて伊勢といふも息志計なるべし。志計とは吹くと同音の言にて風の吹きゆくをいふ言なるべし。

【解】こは二種に思はる。まづその一には、風は借字にて神下瀨のといふ。くだの切かなり。かの國に神の下り給ふことその傳あり。瀨は唯川瀨といふことならず。今の世の言にせば神下場といはむが如し。苦瀨・渡り瀨・逢ふ瀨・ここをせにせむ。又後に内裏樣などいふ樣も本同言なり。かくて伊勢といふも五十鈴も磯も、もと同言のうつろひにて、五十鈴河による名ならむ。その二には神風は字意にして、伊勢と受けたるは、いすかし、いすすきなどと同じく物の平穩ならず甚しきをいふ。いすけしといふ詞のすけを約めて伊勢となしたるならむ。

【通】守部云、仙覺萬葉抄に引ける風土記云、伊勢津彥云々。啓曰、吾以今夜起八風、吹海水、乘波浪將東天ニ云々。又倭姬命世紀に伊勢加佐波夜波國云々。又其國に風神靈生て靈驗新なり。是に彼大武天皇御時の神風、又蒙古が襲ひし時の御風等を合せて上の代をも思やるべし。

【石】神風伊勢といふ義にて、のは調なり。かみ風をかむ風といふは、かみうのみうをむと約めたるにて、神風發る風といふ義なり。文手をふむで、弓手をゆむ手といふに同じ。いは否り止るの類、せは迫るの意、神氣至り止り迫るをいふ義なり。神風の吹發るは神氣の怒至り止り迫り來るが故なりと比して、神風のいせとは稱くるならむ。

【評】神風は奇び風なり。風の猛きをいふ。いせは息近なり。すせりひめのすせに同じ。

神ごとの　たゝりつゞら冊子

上田秋成のつゞら冊子には神ごとのたたりと續けたり。神の祟りといふより絲繰るたたりといふ辭に轉じたるなり。

かやり火の　悔ゆる拾　下もえ古十一　そこに焦るゝ後十四

拾遺の長歌に悔ゆる心と續けたり。蚊遣火の燻ゆるといふより同音異義の悔に轉じたるなり。又蚊遣火は上にのぼらで下の方にて、燃ゆるにより心の内にて燃ゆるといふ意、又底にて焦げゆくより其許に焦ると轉じて用ひたり。◇『夏なれば宿にふすぶる蚊遣火のいつまで我身下もえにせん』『上にのみおろかに燃ゆる蚊遣火の世にもそこにも思ひこがれじ』

からくにの　辛く萬六、十五

萬葉六及十五に辛くもと同音を重ねて用ゐたり。から國は韓國をいふなるべし。◇『昔よりいひけることのから國の辛くもここに別れぬるかな』

からごろも　きならの里萬六　立田の山萬十　すその逢はぬ萬十四　立つ古、拾、後　龍拾　日もゆふぐれ古一　きつゝなれにし古九　なれは古十五　かけて後十一　かくる拾遺愚草　袖師の浦後拾遺　針河躬恒集　返す〴〵もうつほ　うらみの山夫木　頃も古十四　からくも六帖　美し漫吟集

から衣は外つ國ぶりの珍らしき衣をいふ。萬葉には着ならの里とも、たつたの山とも、すそのあはずてとも、すそのうちかへ逢はねどもとも連ねたり。衣を着馴らすといふより奈良へかけ、衣を裁つといふより龍田山にかけ衣の裾の合はぬを人の逢はぬに比したり。うちかへとは打違ひにとの義なるべし。三代集時代に於てもしばしば用ひられ、裁つといふより古今八には立つ日は聞かじ、後撰十四には立つ日を、拾遺十一には出立つを惜みし、同九には立つ名のみと續け、拾遺十八には龍より出づる水ならでと連ねたり。

又古今には衣の紐をゆふといふを川も夕暮にと轉じ、衣を着るといふより、來つつとも、後撰九及十には、來て歸りにしとも、來て徒に歸るとも、古今十五には褻より汝にうつし、又衣は衣桁などに掛くるより、後撰十一にはかけて賴まぬ時ぞなきとも、拾遺愚草にはかくる伊香保の沼と續け、後拾遺には衣の緣語を以て袖師の浦とも躬恒集にはぬふ針河といひ下し、うつぼ物語には返す返すもと連ね、夫木集にはうら見の山とも續け、契沖は六道の歌にうらといふより美ましといふへうつし連ねたり、又古今十四には同音反覆の法により、頭も著くしてと重ね、六帖五にはからくいひてもと頭音を反覆して川ひたり。

◇萬『から衣着奈良の里の島松に玉をしつけむよき人もがな』萬六『かりがねの來鳴きしなべにから衣立田の山にもみぢそめたり』萬『朝影に吾身はなりぬから衣裾のあはずて久しくなれば』拾『見始めずてあらましものをから衣立つ名のみしてきるよなきかな』古『から衣ひもゆふぐれになるときは返す返すぞ人はこひしき』古『から衣きつつなれにし妻しあればはる〴〵きぬる旅をしぞ思ふ』古『から衣なれば身にこそまつはれめかけてのみやはこひん思ひし』後『から衣かけてたのまぬ時ぞなき人のつまとは思ふものから』拾遺愚草『から衣あくるや

かほの沼水にけふは玉ぬくあやめをぞひく」 後拾遺「から衣袖師の浦のうつせ貝空しき戀に年のへぬらん」 躬恒集「から衣ぬふ針河の青柳の糸よりかくる春は来にけり」 うつぼ「幾度か夜にかへすらむから衣かへすがへすもうらみらるるは」 夫木「たちぬはぬ錦とぞ見るから衣うらみの山の秋のもみぢ葉」 古「敷島の大和にはあらぬから衣頃もへずして逢ふよしもがな」 六帖「入紐のさしてもくれどから衣からくいひてもかへしつるかな」

【釋】から衣は韓衣なり。又云、著る衣なり。きなら云々は著とのみにかかる。

唐 崎 の　待つ菅根集

菅根集には待つといふに唐崎のと冠らせたり。唐崎の松は名高きより待つにうつしたるなり。

か ら な づ な　なづさはむ拾十六

拾遺に「雪をうすみ垣根に摘めるからなづななづさはまくのほしき君かな」とあり。唐薺は備馬藥には好き菜なりと見え、薺は春の七草の一。ぺんぺん草の異名。なづさふとは馴れ親むといふ意なれば、ただ類音を重ねて調をなせるのみ。

【釋】からなづなは泥さふと掛けしのみ。なづさふは泥むなり。ここは行きなづむなり。からなづなは薺蒿の大葉なるをばいふともいへり。

か ら に し き　立たまく古十一　立田の山古十九、後七

古今十七には起たまく惜しきと連ね同十九及後撰七には立田の山とも、同十卷には惜しき我名は立らはてでと句を隔てて續けたり。錦を裁つといふを座を起つ、浮き名の立つ及立田の山と同音異義の語に轉じたるなり。

◇古『思ふどちまとゐせる夜は唐錦立たまく惜しき物にぞありける』後『からにしき惜しき我名は立ちはてていかにせよとか今はつれなき』古『からにしき龍田の山は欲暮のあたるごとにや色まさるらむ』

かりがねの　來つぎ萬六

萬葉六に來つぎと連ねたり。武士の數多來り續けるを行雁に喩へたるなり。但し原文には折木四哭之、來繼皆石此續常にありせば云々と見えたり。これを契沖はかりかねの來つぎて皆しここにつきと訓み、春滿は哭は喪、皆は背の誤とし、をりふしもゆきかよひせしと訓み、眞淵は皆を比日の訓とし、きつぎ並びしと訓み、宣長は皆は比日の二字を一字に誤り、石は如の誤にて、かりがねの來つぎ、この頃かくつぎてとよむべしといひ諸說區々たり。

かりごもの　亂れ記、萬、古　心もしぬに萬十三

記には『かりごもの亂れば亂れ、さ寢しさねては』と續け、萬葉には亂れて思ふとも、思ひ亂れてとも亂れて見ゆるとも、多く用ひられたり。こもは菅薦をこもといひ、多く沼澤に生じ高さ三四尺秋二尺ばかりの穗を生ず。葉はあやめに似たり。その刈りたるは亂れ易きものなれば、物の入り亂れたる又は心の亂れたるなどに譬とす。萬葉十三の長歌に心もしぬにと續けたるは悄然たる心情を刈薦の萎えたるに比したるなり。◇萬『氣比の海の庭よくあらし刈薦の亂れて見ゆる蜑の釣舟』萬『かりごもの思ひ亂れて我戀ふと妹しるらめや人し告げずば』

○

【考】刈りたる蔣（こも）のまだ編まぬは、亂れ易ければいふのみ。

【釋】心もしぬにと續けたるは、刈りたる蔣の萎えといふ意にて、しぬてふ言にかかれるなり。

【右】むもしぬと續けしは上の二音に續けて亘々といふ義に轉用せしか。又隔句にて薦の莚と續けたるにもあらむか。

かりごろも　かけて古十二　きて後十　日もゆふぐれ新古十　褶野新勅六　立ち憂き玉葉八

かりごろもは狩に着る衣をいふ。衣の縁にて着る・裁つ・掛け・褶・紐等の語より懸けて思はぬとか、來てはかひなきとか、日もゆふぐれ、褶野、立ち憂きなどと連ねたり。◇古「よひ〳〵に脱ぎて我がぬる狩衣かけて思はぬ時のまもなし」後「逢ふことは遠山ずりの狩衣きてしかひなきねをのみぞ泣く」新古「いづくにかこよひは宿をかり衣ひもゆふぐれの嶺のあらしに」新勅「狩衣すそ野も深しはし鷹のとがへる山の峰の白雲」玉葉「かり衣たちうき花の蔭にきてゆくすゑ暮す春の旅人」

かるかやの　思ひ亂れ萬十二　束の間萬二　ほに出て六帖　司の人藤垣内集

苅萱は亂れ易きものなれば、萬葉には思ひ亂れてと比し、又刈りたる萱は繩又は葛にて束ぬるよりその音をうつしてつかの間もと續け、又萱の穗といふよりほに出てとも連ねたり。近世のものの中、藤垣内集には束の音より司の人と轉じて連ねたり。◇「かるかやの穗に出てて物をいはねども靡く草葉はあはれとぞ見し」

かるくさの　つかの間萬二

萬二に刈草束間毛とあるを、萬葉美夫君志には『かるかやのつかのあひだとよめるは悪し。かるくさのと訓むべし』とあり。◇「紅のあさはの野らに刈草の束の間も吾を忘らすな」

きの部

菊の花　開くに　順集

源順の集に『けふと見て後こそ知らめ菊の花開くにたがはぬしるしありとは』とあり、菊より開くと同音を重ねて他にうつしたり。續紹にはこの他に後撰の菊の花うつる色の歌を擧げたれど、そは枕詞と見ざるを可とす。

【紹】後撰に『いまはとてうつりはてにし菊の花うつる色とはたれか見るべき』これは菊は黄白ともに霜を經て後は紅にうつるを、人の心のかはりはて、歸るまじきに譬へしなり。

君が家に　吾住阪　萬四

萬葉に『君が家に吾住む阪の家路をも吾は忘れじ命死なずば』とあり。君が家に我住みといふといひかけて大和の墨坂に冠らせたり。

【服】別記に住阪は大和國宇陀郡にあり云々。

君が着る　三笠の山　萬十一

萬葉に三笠の山と續けたり。大君の着る御笠といふを大和の地名へ轉じ冠らせたり。◇『君が着る三笠の山にゐる雲の立てばつがるる戀もするかも』

君がさす　三笠の山　古十七

古今に御笠の山と連ねたり。大君の召し給ふ御蓋は近臣の後よりさしかくるを以て、前の如く續けたるなり。

◇『君がさす三笠の山のもみぢ葉の色、神無月しぐれの雨のそめるなりけり』

君が代に 古十九

古今に『君が代に逢阪山の岩淸水こがくれたりと思ひけるかな』とあり。擧世に逢ふといふを近江の逢阪山にいひかけたるなり。こは韓冠辭考及續貂、三代枕詞例に擧げたれど、掛詞にて枕詞と見ざるをよしとす。

君が世の ながらの山拾遺　長月縣居家集

拾遺集に長等の山と連ねたり。君が世長しといふを、近江國大津なる長等山に轉ぜしなり。◇『君が代のながらの山のかひありとのどけき雲のゐる時ぞ見る』近世のものにては縣居翁の集には長月に冠らせたり。

君とわれ 妹背の山後七

後撰秋部に『君と我れ妹背の山も秋くれば色かはりゆくものにぞありける』の歌あり。雜歌ならば君と我は枕詞にあらず、唯秋景を詠ぜるものならば君と我は妹背の山にかかる枕詞となる。妹背山は紀伊にあり。

【貂】こは秋部に入りたれば、君と我は冠のみ。いもせ山は紀の國の妹背山と古歌に詠みたれば、紛ふことなし吉野の川の邊にありとするは、詐言なり。

君により 立つ古十四

古今に『君により我名は花に春霞野にも山にも立ちみちにけり』とあるを續貂に擧げたれど、君により我名は立つとかかれるにて枕詞にあらず。かかる接續は萬の十七にもあり。

【貂】花にと云ふより山にといふまでは裝にて、名の立ちみちぬと續くなり。

君をおきて　生田の浦齋宮女御集

齋宮女御集に『君をおきて生田の浦による浪のしづ心やはあらむとすらむ』の歌あり。續貂に擇りたれど君を置きて遠きに往くといふより攝津の地名にかけたり。發詞にして、枕詞と見ざるをよしとするか。但し生田の浦の實景のみを見て詠ぜしならば枕詞となすべし。

きもむかふ　心をいたみ萬二　心くだけて萬九

萬葉二には心をいたみと連ね、同九には心碎けてと續けたり。又仁德紀には心をだにと續けたり。契沖がいへる如く古くより心肝と連ねていひ、且心は臟にあらずして腹の肝の中にありと思ひたるべければ、肝に對ふ心といふ續なるべし。

【管】もの思なげく時肝と心との二つの臟をいたましむるといふ心なり。むかふは對偶の心なり。

【傳】三十六肝向ふ心の枕詞なり。上代には五臟六腑の類をすべてきもといひしなり。さて腹中に多くのきもの相對ひて、集りありて凝々(こりこり)しといふ意にこころとは連くなり。凝をこころともいへば、心はころころにて凝々なり。海菜の心太(こころぶと)も凝る意の名、書紀神代卷に田心(たごり)姫、萬葉二十に妹が心を妹がこころとあるなどを具て曉るべし。

【冠】群り物、多(ここら)と續けたり。かりの反ぎにて、むらがり物は取りひろごりたるものなり。心こころ相通ひたればかく續く

【石】肝に向ふ心といふ續なり。

【思】錦の川に中る心といふなり。心きもは、肝ぎものはたらきのまとまりて、心きもがそのはたらきを助けて言語に傳ふる故にきもむかふ心といふ。

消霜の　はやく消え

菁根集に消霜のはやく消えと天然現象より人事にうつして用ひたり。

くの部

くさかげの　荒藺の崎萬十二　安奴奈萬十四　安濃儀式帳

萬葉十二には荒藺(あらゐ)の崎とも、同十四には安奴奈(あぬな)ゆかむとも、儀式帳には安濃國とも連ねたり。○『草蔭の荒藺の崎の笠島を見つつか君を山路こゆらむ』『くさかげのあぬなゆかむと墾りし道あぬはゆかずてあらくさだちぬ』草蔭は草深き意か。土地の形勢をいへるたらむか。田舍に住するをかかる草がくれに生ひたちてなどいふことも古物語に見ゆれば片田舍といふ義ならむ。

【續考】この草蔭といふに、荒とも安奴とも續けたるを思ふに、卷一に眞草刈荒野とある如く、草蔭荒と續くるなり。卷十四の歌『くさかげの安奴奈ゆかむと墾りし道安ぬは行かずて荒草立ちぬ』とあり。あらの反あなり。安奴は荒野なるべし。安奴奈のなはの又ぬに通へば安奴はその地の名として安奴の野といへるならむ。

【貂】草蔭とは草ごもりし荒れたるをいふにて荒藺とは續けたるか。倭姫命世紀に草蔭阿野國といふなかつて知らるるなり。阿野は荒野を省みていふにはあらで、阿は虛辭、草ごもりの野といふなるべし。阿野國は伊勢の安濃郡なり。云々。

【折】草が蓬々と茂つて荒れはててゐるといふ意味で、あらに續けたのであらうか。又藺にかかる說といふ。あら、あぬなど、受けるのは音轉であると說く。又思ふに單にあの一語にかかるのかと思ふ。

くさづゝみ　病萬六

萬葉六に『草菅見病あらせず速にかへしたまはねもとの國べに』とあり。くさは瘡と同じく、旅などする時は沐も思ふまゝならで汗の爲に小きはれものを生じ痒きものなり。和名抄にこれを熱沸瘡（あせも）と記せり。つゝみは病をいふ。されば旅の病にといふ義ならむ。

【考】頻なく早く歸りませといふに、旅の草席にありてふ虫の名を冠らしめたり。草つゝみは說文に恙蟲名、入レ腹食二人心一。古人草居被二此害一故相問無レ恙乎てふより出でて、巻五には『つゝみなく、さきくいまして、はやかへりませ』とも、又集中に、つゝかなくと訓める所に、無恙と書きたればこれなり。

【摘】つゝは蟲の名、みは蟲の約めにて、つゝむしてふに同じければつゝみなくとも、つゝがなくともいふなりけり。

【石】考說はいかが。もしさる義ならむには、草つゞかといふべし。思ふにこは種愼みといふ義なるを、愼しみのしを略きたるなり。つつしみのつつは一つ一つ愼むにて人身の上に發り來る事業を、一つ一つ身に領納り止るといふ義なり。旅にては何事もよく愼みて、病あらせず、疾く歸りませと曉していへるにて、枕詞にあらず。

【物】くさづつみは草を席にして臥すことにて、草の上には蟻といふ虫のより來ることもあれば、ありにかけていふとぞ、又草上に居れば、恙といふ虫の災もあれば病あらせずにかけていふともいへり。

【黒】瘡づつみなり。くさはかさに同じ。くさといふは草に觸れて起るものか。

草まくら　旅萬　このたび後十　夕風新古十　かりそめに蜻蛉日記

萬葉には一卷を首として旅と續けたる歌、數十首あり。又同十四には多胡の入野と連ね、後撰十にはこの度とも同二十にはゆふ手ばかりはとも、新古今十には貫之の歌とて夕風さむくとも、蜻蛉日記にはかりそめにとも、新古今十五には結び定めむ方知らずと連ねたり。古は旅舍の設なければ、野に宿りては草を引き結びて枕とせし習あるより旅に冠らせたり。萬葉五卷に道の隈びに草手折り柴とりしきとてあるを證とす。斯くて後には同音異義語のこの度にかけ、又草を刈るとか結ぶとかいふより結ふ手、夕風、夕山陰など連ねたり。かく常に用ふるより唯草枕といひて旅の義に用ひたるは足引といひて山の換名とせるに同じ。多胡の入野に冠らせたるは旅しての義に用ひたるなるべし。◇萬『草枕たびゆく人をいはひ島いく世ふるまでいはひ來にけむ』萬『我戀はまさかも悲し草枕多胡の入野のおくもかなしも』後『草枕このたび經つる年月のうきは歸りて嬉しかるらむ』新古今『草枕ゆふ風寒くなりにけり衣うつなる宿やからまし』

【仙】たびと云ふは高く久しき心なり。常のすみかを立離れて萬づに思の高き心なるべし。高きをたかともたけともいふはたの字高しと云ふ義なり。たけたこ同内相通にて上野の多胡をたびによそへてよめるなり。

【考】草引き結びて枕とする意にて旅には冠らするなり。萬十四のは既にいひなれて、草枕を旅の事とせしなるべし。青丹よし國内などいふが如し。又は旅には、はたごてふ物をもて行く故に、そのはを略きしたごと續けしにや。

【結】旅は草を結びて枕とする意なり。欽明紀云、劬勞疆埸[illegible]とあるに同じ。

【解】草枕は蒿苫の類は更にて、何にまれすべて草もて作れる枕をいへるにて、旅と續くるは把ぬてふ言にいひ

續けしならむか。さるは草を把ね結びてつくる故しかいへるにやあらむ。

【冠】多胡とかけたるは薦枕(こもまくら)高とつづくると同例にてたがぬる意なり。

【石】こは旅の詫しきをいへるにて、げに草を結びてねしにはあらず。野山の中の旅の宿の詫しきを比していへるなり。出家の旅には苔枕岩枕などもいへり。又舟路の旅には浪枕楫枕磯枕などいへるを思ふべし。

くしがみの　二上山萬七

精紹に擧ぐ。次のくしげの條を見よ。

くしげの　二上山萬七

萬葉七に『紀路にこそ妹山ありとへ櫛上の二上山も妹こそありけれ』と見えたり。櫛上のを、くしがみと訓みて、奇し神の二神山といふ說と、くしげのと訓みて、櫛筒の蓋といふより、二上山へかけたりとの兩說あり。後說可なるか。

【紹】或人の靈奇神の二神とかけしなりと訓めるはよし。くし神の二神は大名持少名彦の二神なり。二上と書きて二神の事とよむべき例は、台記の壽詞に神漏岐神漏美乃二上とあるなり。葛城郡の二上山とも神の二峰に立ませるといふ名義なり。

【石】くしげは櫛筒なり。古今に玉くしげ二見の浦と續けしに同じく櫛筒と續けたり。

くしろつく　手節の崎萬一

萬葉一に手節の埼に冠らせたり。釧(くしろ)は古の服飾具にして左手に巻きたること九卷の歌に見えたり。釧着くる手と

いふより、手節崎の地名にかけたり。手節は志摩の地名にて今答志(たふし)とかけると同所なるべし。◇『釧着手節の崎に今もかも大宮人の玉藻刈るらむ』

【僻】この歌、釧を劍に誤りしよりたちはきのと訓みたり。古文字の違も校へずして訛のままに訓をつけてあらぬ傳言の義をなせる説その數を知らず。作者のなげきなるべし。今くしろつくと訓む。くしろは臂の上にある物なれば手節の冠辭かなへり。

【考】釧は手な臂(た)に纒く物にて、この臂は手の節なれば釧を着くる手節とはいひかけたり云々と、荷田大人はいはれしなり。説文に釧、臂鐶也、此外異國の書に見ゆるは數へがたし。手節崎は和名抄に志摩國答志郡に答志郷あり。

【摘】くしろは手頸の節の上につくるなり。腕はたぶしともよむなり。臂はただむきにて、ひぢは肘なるを臑(源)は臂をひぢと思ひてひぢまきの名としひて付けたるを東麿も違はされたるならん。

【解】着巻草書まがひ易ければ、釧著はくしろまくなるべきか。

【黑】くしろの名義莖占有(くしろ)なり。

くずの葉の　恨み古十五　うらこがるねに拾四　うら淋し能宣集

古今十五に恨みてとも拾遺四にはうらこがるねにとも、能宣集にはうらさびしげにとも續けたり。葛の葉は風に吹かれて裏の白きが見ゆるより、うらと同音なる心に轉じ、又は恨みてとも連ねたり。但し古今のは序の語なり。◇古『秋風のうら吹かへす葛の葉の恨みても猶うらみしきかな』拾『神無月しぐれしぬらし葛の葉のうらこがる

ねに濡もなきけり」能宣集「男鹿臥すしげみに生へる葛の葉のうら淋しげに見ゆる山里」

【貂】葛の葉の秋に逢へば凋むとてまづ裏かへるを、心の裏にかけて恨にも心さびしきにもいへり。このうら反るは必秋も半より後なるべし。

くずの根の　いや遠ながに萬三

萬葉の長歌にいや遠ながにと比したり。かの根は長く伸びたるより人の世の永きに喩ふ。

くそかづら　絶ゆることなく萬十六

萬葉十六に絶ゆることなくと續けたり。和名抄に細子草をくそかづらと訓めり。茜草科の植物にて牛皮凍とも書す。心臟形の葉對生す。四五月の頃筒狀花を開く。花及葉に惡臭あり。因て名とす。この葛の長く續きたるを人事に比したり。◇『葛花にはひおほどれるくそかづら絶ゆることなく宮仕せむ』但し序歌の第三句なり。

くまつづら　つらし六帖

古今六帖に『みちのくのつゞしが岡の熊つづらつらしと妹をけふぞ知りぬる』とあり。つゞらの音より類音のつらしに掛けたり。續貂に舉げたれど序歌なり。

【貂】和名抄に馬鞭草、其穗類二鞭鞘一、故以名レ之。俗に葉の大なるを熊葛熊いちごなどいふ。

くもとりの　あやに千載十八、風雅十二

千載十八の長歌に雲鳥のあやに叶はぬと續け、風雅十二にもあやに戀しきと連ね、大和物語には綾の色目をとも掛けたり。古綾には雲鳥を交へて織りたれば綾と同音なるあやにといふ副詞へ冠らせしなり。但し綾の色と續け

たるは枕詞にあらず。◇『夕暮は思亂れてくも鳥のあやに戀しき人の面影』

くものいの　心細さ齋宮女御集

齋宮女御集に『大空に風待つほどの蜘のいの心細さを思ひやらなん』とあり。いとは蜘の巣の細絲をいふ。よりて人の心細さに喩ふ。續貂にくものゐと書けるは假字の誤なり。

くもり日の　影と古今十四

古今十四に『くもり日の影としなれる我なれば目にこそ見えね身をば離れず』とあり。人の痩せ衰へたるをも、己が願の叶はずして思に痩せたるをも、影なしとも影となるともいへば、曇り日の陰といふより續けたるなり。續冠辭考及三代枕詞例に採りたれど、上三句は譬喩と見て枕詞とせざるもよし。

【服】戀の歌に影となる身てふ語は、あこがれし我身の朧げに成りて、形あれども無きが如く空しといはむとてなり。人影てふものは有りと見えながら空しければいふなり。

【三】篝火の影と同じくのは常ののなり。

くもり夜の　惑へる萬十三　たどきも知らず萬十二　下ばへ萬十四

萬葉十三の長歌には惑へる程にと喩へ、十二にはたどきも知らずと連ね、十四には吾が下ばへと續けたり。曇りたる夜は便も知られず打惑ふよりかく比したるなり。したばへとは心に籠めて深く慕はしく思ふをいへば、星夜のさやかならぬを以て喩に取りたるなり。◇萬『くもり夜のたどきも知らず山こえていますす君をばいつとか待たむ』萬『足柄のみさか畏みくもり夜の吾が下ばへをこちでつるかも』

【服】たどきはたづきにて、便りも知らぬなり。曇りたる夜ゆゑ物の別なくたづき知らぬといふを、たづき知らぬ山路にいひ續けたるにて、夜の山道といふにあらず。只冠辭のみなり。又曇りたる夜は何も眼に遮らねば、心の下にのみ宛はへてある物故、したばへといふ語の冠と成りたり。

【續考】曇り夜は下に隱せるを言はむとて置ける冠辭なり。下ばへとは下意に隱しつることなり。こちては言出なり。といの反ちなり。

くもゐなす　心いざよひ萬三　遠萬三

雲居なすは雲の如くにといふ義。隨つて遠きに冠らせ、又心のためらひて決しがたきを中空に漂ふ雲に比して心いざよひと比ぶ。『隼人のさつまの迫門(せと)を雲井なす遠くも我はけふ見つるかも』。又萬葉十七の長歌には夕されば雲居なす心もしぬにと續けたり。心もしぬにとは勇氣なく悄然たるさまをいふ。雲の如く遠きは心細き感あるものなれば續けたるか。

【解】十七には雲の如くしらぬにと續きたるにて、しぬは雲霧の棚曳きてしめりあひたる意なり。

くらげなす　漂へる記

古事記神代卷にくらげなすたゞよへると續けたり。水母(くらげ)は水上に浮き漂へるより地殻のいまだ固らざりしに喩へたり。

【續考】國の始の時は油の水に浮るが如く、水母の海に浮へる如くといへるなり。

くるべきに　掛けて寄らむ萬四

くるべきは縲を繰る具、和名抄には反轉の字をあてたり。この具に糸を掛けて捲らむといふを、情をかけてその人を近寄せむといふ意に喩へたり。◇『我妹子に戀ひて亂ればくるべきにかけてよせむと我が戀ひそめし』

栗の實の　三つ 縣居家集　ゑみ笑ひ すゞのゆふしで

縣居翁集には栗の實の三つと續け、六人部是香の鈴の木綿垂にはゑみ笑ひと續けたり。栗は一毬に多くは三つ入れるより、その他のもの三つをいはんとてこれを冠らせたること欅の實の一つと相似たり。又栗の毬の熟して割目をあらはすことをゑむといふより人の笑ひに言ひかけたるなり。

くれ竹の　世々 古序　一夜 後二　夜は 拾十三　ふし 後十　憂きふし 古序　伏し沈む 金　伏見の里 新古七　空し 千載十九

古今の序及二十に世々にとも、後撰二には一夜の程にとも、同十三には世にとも連ね、拾遺十三には夜はとも又古今序には憂きふしとも、後撰十にはふしの數なきとも、金葉には伏し沈むとも、新古今七には伏見の里とも、千載の十九には空しと詠けると續けたり。呉竹は淡竹の異名。竹には節あるより同音異義の臥、伏、などと轉じて連ね、又竹の節と節との間をよといへば、世間の意なる世、歴代の意なる世々、又一夜などと續け、又その中の空洞なるを佛家のいはゆる空しといふ語へ冠らせたり。◇古『思ふてふことこそうけれ呉竹の世にふる人のいはぬなければ』後『櫻花けふよく見てむ呉竹の一夜の程にちりもこそすれ』後『逢ふことの世々を隔つる呉竹のふしの數なき戀もするかな』古『くれ竹のうきふしを人にいひ云々』金『呉竹のふし沈みぬる露の身もとふことのはに起きぞゐらるる』新千『呉竹の伏見の田井のかりのよに思ひ知らでやもり明すらむ』千『呉竹の空しと說

ける言の葉は三世の佛の母とこそ聞け」

【釋】竹のよといひふしといふ共に節の字を用ふ。和名抄篁竹をくれ竹とよむ。漢語抄に吳竹也。又文字集略云、似葦而節茂葉疏精也。

くれなゐの　うつし心萬七　色に萬四　淺葉の野萬十一　末摘花萬十　ふりいで古十三　あく拾十六

萬葉七にはうつし心とも同四には色にとも、十一には淺葉の野らとも、十には末摘花のとも、古今十三にはふりいでつゝとも、拾遺十六には人をあくにはかへらざりけりとも續けたり。紅花は末より摘み取るものなれば、末摘花といひ、うるはしき色なるより轉じて容色にも用ひ、又紅はふり立てて色を出すを血淚をそそぐに喩へ、灰汁もて洗へば色の褪めうつるより、人を倦くにいひかけ、うつし心とも連ね、又色の濃き淡きといふより、淺羽の野にも冠らせたり。淺羽野は遠江國磐田郡袋井の附近にあり。◇萬「こちたくばかもかくせむを紅のうつし心や妹に逢はざらむ」萬「ものいひのかしこき國ぞ紅の色にな出でそ思ひ死ぬとも」萬「紅の淺葉の野らに刈草の束の間も吾を忘らすな」萬「よそにのみ見つつを戀ひむ紅の末摘花の色に出でずとも」古「紅のふりいでつつ泣く淚には袂のみこそ色まさりけれ」拾「限なく思ひそめてし紅の人を飽くにぞかへらざりける」

【考】紅には淺きがあるも常なれば淺葉の野と續けたり。紫のこがたの海といへるは濃きとかかれるを打かへして見よ。

【年】紅の淺葉とつゞけたるは紅の薄染衣とよみたると同じく、うす紅にて後世一斤染といふ。深紅もめでたき

色なれど、淺きも世にめでし色なれば淺葉とつゞけしなり。

くれはどり　あやに後十一　あやし金七　あやにく新勅撰十三

後撰十一にあやに戀しくと續けたり。又金葉七には怪しやとも、新勅選十三にはあやにくに待つとも連ねたり。はとりは機織の約、古へ應神・雄略の御時呉の國より織女來りて、うるはしき綾を織りたるより、あやを頭にもてる他の語に冠らせたり。あやにとはあなにと同じくあゝとか切にとかいふ義なり。新勅選のは枕詞がうへは暮の意をかねたり。◇後『くれはどりあやに戀しくありしかば二村山もこえずなりにき』金『逢見むとたのめばこそくれはとり怪しやいかゞ立ちかへる可き』新勅撰『戀ひ〳〵てたのむるけふのくれはどりあやにくに待つ程ぞ久しき』

【考】呉のはたおり物の綾といひかけたり。さてあやに戀しくとはいと深く戀なげかるるをいふ。

くろさやの　まさつ子我妹紀

まさつ子我妹と仁徳紀に續けたるを、石上枕詞例に擧げたり。紀には久漏邪夜能とかけるを、儀本には久を文と書したれば、契沖は諸精の義とし、眞淵は邪の字なき本により對屈の義にてまの冠辭となし、宣長は久漏邪岐の誤となして備中小田郡の地名となせるなど諸說一定せざれば枕詞とせむもいかゞ。

【傳】三十五 諸本みな久字を文に誤れり。今改む。紀中に文を假字に用ひたる例なければなり。久漏は黑にて必二の黑姬（歌によまれたる人）の名に由あることと聞ゆ。邪夜は詳ならず。今備中小田郡に黑崎といふ處あれば、若くは夜の字は岐を誤れるにて黑崎のか。さらばこの地本郷にて黑姬といふ名もこの地より負へるなるべし。本

さつこは眞佐照子ならむか、尙よく考ふべし。契沖が上句を諸鞘と見たるまゝに、この句を眞鋤津子として推古の御歌の如く、大刀ならば眞鋤の如く思召すといへるは甚物違し。又師は正つ子なり。まな子などいふ類なりといはれしかど、いかが。

【石】くろさやは黑鞘なり。まさつ子と續けし義知られず。强ひていはゞ、黑姫の吉備に歸るとき詠み給ひし御歌なれば、黑姫を比してくろさやと詔へるなるべし。まさつこは正に泊る子といふ義なるべし。

けの部

けごろもを　春萬二

萬葉二に春冬かたまけてと續けたり。毛裘を張るといふを同音の春に轉じてかけたるなるべし。◇『毛衣を春冬かたまけて出でましし宇陀の大野はおもほえぬかも』

【解】御狩にはもはら毛衣を用ひ給ひしならむ。さるからに頓てその物もて衣を張るといふより春の枕となせり。

けふけふと　飛鳥萬十六

萬葉十六に飛鳥に到りと續けたり。明日は今日に續くより、大和の明日香といふ地名にかけたり。

この部

こがらしの　秋の初風 六帖

六帖一に「こがらしの秋の初風吹きぬるをなどか雲居に雁のこゑせぬ」とあるを、殘夢は秋の初風にかかる枕詞とせり。木枯は秋末吹く風の名なれば、その風の如くと比したるか。

【三】この續心得がたし。試にいはば風の如きいと寒き秋風の義にや。秋の初風は寫し誤にて秋の嵐などにやありつらむ。

こぐ舟の　浮きたる戀 後十一　ほに出で 小町集　ほの見し 新拾遺

船及船具の緣により後撰には浮きたる戀とも連ね、小町集にはほにこそ出でぬとも、新勅選にはほには出でずとも、新拾遺にはほの見し人にとも續けたり。ほに出るとは、あらはにといふ意、ほのみしは、幽に見る意、共に帆の詞よりうつす。◇「玉つ島深き入江をこぐ舟のうきたる戀も我はするかな」後「逢ふことは浪路はるかにこぐ舟のほのみし人に戀や渡らむ」新拾遺 この他服部氏の續冠辭考には萬ノ十四「なやましげ人妻かもよ漕ぐ舟の忘れはせなないや思ひますに」の歌を擧げ、忘るる間なき心を漕ぐ船に喩へたりといへり。

【解】浮きたる戀とは心空なるをいふ。舟は楫取の心に任する物なるが、それだにえとりがたくする風波の惡しきに喩へて、わりなき戀に苦むをいへり。

こしほその　すがる少女萬九

萬葉九にすがる少女と續けたり。すがるとは俗にじか蜂といひて、腰細きものなれば、御腰の美人に比したるなり。萬葉八には『とびかけるすがるの如き腰細に』ともよみたり。

【考】雄略紀に蜾蠃此云須我屢(すがる)とありて、常には似我蜂といへり。この蜂ことに腰細ければ、女の腰の細きに譬へていふ。

こづみなす　心はよりぬ萬十一

萬葉十一に『秋風の千江の浦まの木積なす心はよりぬ後は知らねど』とあり。木積は契沖によれば木片なり。そが波の爲に一所に寄るを心の靡きよるに比したり。

【貂】こずみは木屑にて薪柴の類をつまほといふに同じく、すべて物の端をつまといふは古言なり。こは海上に流れ漂ふ朽木などの類の波によせられて、渚に打よせらるるを心のよるにかけしなり。

ことさへぐ　百濟の原萬二　唐の崎萬二　辛荷の崎萬五　他し國東歌　樺太島縣居家集

おろさ夷蓬廬集

萬葉二の長歌には百濟の原とも唐の崎とも連ね、同五には辛荷(からに)の崎とも續けたり。ことさへぐとは言の通じかたきの意にて、外國人の言語は鳥語の如く聞きなさるるものなれば、韓唐人の言語を形容せるに始り、からといふ言をもてる地名物名に冠らせ、終には韓地の一部分なる百濟と同名の地名にも冠らせたり。さへは朝鮮語にして、ぐは動詞の語尾か。縣居家集には樺太島にもかけ、加藤枝直は他し國と連ね、齋藤彥麿はおろさ夷に冠らせ

たり。

【仙】言葉のさへらるるなり。詞のさだかにも聞えぬ心なり。

【考】から人の言語は、ここの人の耳には分かず、さへぎてのみ聞ゆれば言へり。景行紀にいへる佐伯氏もその本蝦夷の喧嘩(さへぎ)より出でたれば、皆言の聞き分ちがたきをいふめり。辛の崎は石見にあり。

【摘】ことさへぐは、ここの語はここに聞えねば、語の間にものを隔てたることなるをもていへり。さへぐはさへぎるを約めたるなり。

【講】さへぐは遮るなり。言葉の譯を隔てて通ふをいふ。

【黑】ことさへぐは言進(さへ)ぐなり。

こと酒を　押垂小野萬十六

萬葉十六に『押垂小野ゆ出づる水ぬるくは出でず』云々とあり。酒をおし滴らすといふをおしたれといふ野の名に冠らせたるか。琴酒のことの義明ならず。眞淵のいへる如く美酒の誤か。

【燭】琴をば押さへ酒をば垂るるものなるによりて、斯く續けたるなり。琴と酒は賢人の友とするものにて、相並べてはいふなり。押垂小野ある所未勘。

【服】この野に出づる水を褒めて、夫によせて他事をよめり。暑き時など泉をくみて飲みなどすれば、心澄みてけやけくなるに、琴も酒もこれには如かずといふ意を序によめり。琴をも酒をもおす程の冷水となり、琴と酒に耽りて欝を散じ心をけやすくする例、唐土の聖賢はもとよりにて誰の人もある事ゆゑ、その琴酒をおし勝つ程の

淸水といひて冠辭をしらべたり。眞淵いはれしは東鑑に押垂左衛門あればその地名かと。

【石】押垂は推柴の誤。ここは辛酒を强ふといふ義を推柴小野の名に續けたり。

ことさがの　土佐の朝臣　蓬廬集

蓬廬集には土佐守にかくるにことさがのと置きたり。事に敏しと稱詞をおきつつ句中の音とさの二音を反覆して調をそへたるなり。

ことだまの　八十のちまた　萬十一

萬葉十一に八十の衢と續けたり。この續明かならざれど、試にいはばことだまとは言語の靈にして、もとは單純なるもその應用は極めて廣ければ八十と連ねたるならむ。

【石】言靈は淸濁七十五聲に及ぶが故に、八十の衢と續けしなり。

ことひ牛の　三宅の潟　萬九

萬葉九の長歌に牡牛の三宅のかたにさし向ふ鹿島の崎に云々と見えたり。古來ことひ牛は三宅の潟にかかる枕詞といへり。管見抄に三宅の潟を身燒の酒と訓めるは誤なり。考には大牛は宮に飼ふものなればかく續けたりと論じたれど、もしさる意ならむには牡牛といふより黃牛といはまほし。愚考するに、こは常陸鹿島郡刈野橋にて別を惜む歌なれば、旅ゆく人の荷を運び來れる牡牛の、たまたま對岸なる三宅の潟の方へさしむかひたるを見て、その光景を詠ひて序となせるなるべし。又考ふるに、犢牛のは三宅の潟にかかるに非ずして、鹿島の崎の地形が牡牛の如く突き出でたる如きより比したるにあらざるか。地形を動物に譬ふることは、古く神武天皇が大和國を

蜻蛉に比し給ひしこともあれば、かくも見らるべし。

【管】牛は熱きことを苦むものなれば、酒をくらひては、身のやくるやうにいきつきすたくなり。よつてみやけ酒とはいふなり。さて酒をば盃とりては人に對ひてさすによりてさし向ふとはいふ。

【考】倭名抄に特牛（古度比）頭大牛也といひ、萬葉十六にも事負牛と書きたるなどをもて見るに、大牛にて物を殊に多く負ふ故に殊負牛（ことおひうし）といふか。さて廐牧令馬寮式などを考ふるに、諸國の牧より細馬は閑よりにて、よき牛をも公に奉れり。且播飼、繫飼、寮飼、國飼、野飼などあるが中に、寮飼は左右馬寮にて飼ふなれば、それをみやけがひともみやがひともいふべし。さればここは犢牛の宮飼といふ意にて三宅てふ地にかけしなるべし。

【摘】牡牛をのみみやけ飼にすることは令及式などにも見えず。牡牛の二字は犢の字を誤れるにて、牛の子のみやけならむ。廐牧令に凡在レ牧駒犢至二二歳一者毎年九月國司共牧長對以二官字印一印二左髀上一、犢印二右髀上一とあり。官をみやけとよめば此意にて冠らせたりと思ふ。

【一言】牛の重き荷を引きて身の苦みやけるといふより三宅へかけしにや。

【解】ことひの牛とは許多物負（ここだものおひ）牛といふなるべし。ここはこに縮まり、たものはとと縮まり、おひのおはとの餘韻に含まれたればなり。さて三宅とかかれるは髯毛（みかげ）といふにかけたるなるべし。みかとは甕栗みか蜂などいふみかに同じ。かとやとは同韻にて通へば、みやけをみかけの意にとりていひかけしなるべし。

このくれの　繁き思萬十九

萬葉十九に繁き思と比したり。このくれとは木の暗（くれ）にて茂りたる木蔭のを暗きをいふ。よりて人事に喩へたるな

り。

ことひなす 人に怖ぢられすゞのゆふしで

薦の木綿垂には犢牛のやうに、人におぢられと比して用ひたり。

このくれやみ 卯月萬十九

萬葉十九の長歌に卯月に冠らせたり。木の暗闇は、木の暗に同じ。木立の繁りて、か暗くなるは、多く四月頃なれば卯の花月に被らせたり。

【考】夏の來て若葉の蔭の暗きを、木の下闇といふに同じ。

【石】卯月は木の茂りゆく月なれば、木のくれ闇は時の形勢をいへり。枕詞にあらず。

この芽はる 春後六

後撰六に春の山田と續けたり。富士谷氏の歌袋に、時の有様をもて冠とするなりとあり。◇「木の芽はる春の山田をうちかへし思ひやみにし人ぞこひしき」

木幡川 こは誰がいひし拾十二

拾遺にこは誰がいひしと同音を重ねて調をなしたり。木幡川は宇治より伏見に至る間にあり。◇「木幡川こは誰がいひし言の葉ぞなき名そそがむ瀧つ瀬もなし。」

こひごろも 奈良の山萬十二

萬葉十二にきならの山と續けたり。衣を着馴らすといふを、きの一音を隔てて奈良山にかけたり。「戀衣とて別にき

るものなければ、眞淵がいへる唐衣か、鹿持がいへる舊衣などの誤なるべし。

小　松　お　ふ　小野の君鈴屋集

鈴屋集には小野といふ人名に小松生ふとかけたり。小野には小松の生ふるものなればなり。これに因める古歌多し。今一々擧げず。

こ　ま　つ　く　る　土師萬十六

萬葉十六に土師の志婢麿に冠らせたり。土師氏の祖野見宿禰が埴輪を作りしより、駒つくる土師と續けたり。

◇「駒つくる土師の志婢麿白なればうべ欲しからむその黑色を」

【續考】この意は垂仁紀に、土師氏の祖は、埴土もてさまざまの形を作りたること見ゆ。よりて駒つくる土師とはいへるなり。歌にもその意あり。

こ　ま　つ　る　ぎ　和射見が原萬二　我が萬十二　和久の島村田春郷集　和食の浦山齋集　和氣朝臣蓬廬集　和歌の浦蓬廬集

萬葉二には和射見が原と連ね、十二は我がと續けたり。高麗の古劍には柄頭に大きなる環を着けたれば、わの一音にかけ、美濃の和射見原に冠らせ又我とも連ねしなり。上代の發掘品にも環の附きたるあり證とすべし。村田春郷の長歌には和久の島にかけ、山齋集には和食の浦にかけ、蓬廬集に和氣の朝臣又和歌の浦と續けたり。いづれもわの一音よりうつしたるなり。

【他】高麗の劍はほこさきに枝ありてわざ〳〵しければ、高麗つるぎわざみと續けたるなるべし。

【燭】劍には鐔といふ物の出來る故にて、わざみが原とはさびといふ心にて續けたるか。或說には高麗人の劍には鐔などはなくて輪をかけたり。わといふ詞續けむとてかくいへるか。

【考】高麗劍の環と續けて、即ち刀の手がみ環なり。すべて他國のには環の有りてふを、これは高麗人のによりて續けしのみ。又萬十二に已之景迹故と續けたるを、今本にさがかげと訓みしは、この次に劍大刀名之惜毛、卷九に劍太刀已之心柄などいへるによりつらぬど、そは別なり。今は右のわざみと續けたると同じ冠辭より續きたれば、已之をわがとよみて劍の環といひかけたりとすべし。

【標】刀の鍔にからつば、葵鍔、しどき鍔などあれど、是等には輪はなきに輪付たる詞一様あり。高麗より渡りし劍にありしをうつせるにて、こまつるぎわとつらねしなり。

【解】谷川氏云ふ、藻鹽草にも狛劍は柄長くて輪のあるなりと見えたり。十二に已が景迹と續けたるは、高麗には用なくて、たゞ劍の心と續けたるなるべし。劍の心とは中心をいふなるべし。

【黒】輪劍と續けたり。さみは進にて劍へかかれり。

こまにしき　紐萬十一、十四

萬葉十一及十四に紐ときあけしとも紐ときさけてとも、萬十二には紐の緒とも連ねたり。こは十六の竹取翁の歌に「紫の大綾の衣、住の江の遠里小野の眞榛もてにほし衣に、こまにしき紐にぬひつけ」とあるが如く、古は高麗錦をもて衣の紐にも多く作りたるより斯く續けしか。これは高麗錦の紐ならば枕詞にあらず。紐を起す詞ならば枕詞とすべし。◇「狛にしき紐ときあけて夕だに知らざる命戀ひつつあらむ」

【イ】高麗の錦は、令制にては必紐になして用ひしが故に、紐と續けたるか。又高麗の錦はもはら紺色なりしが故に紺の一聲に續けたるか。

こむらさき　元結

藤垣内集には元結にかくるに濃紫を以てせり。古髻を結ぶに濃紫の糸を用ひしよりかくつゞく。

こもだゝみ　平群の朝臣萬十六　熱き蓬廬集

萬葉十六に平群の朝臣に冠らせたり。八重疊平群山と連ねたると同じく、疊は一ひら二ひらと數ふることを、古く一重二重といひしより、への一音にかけて、をかしく續けたるなり。蓬廬集には熱くと連ねたり。疊の厚さを熱きにうつしたり。◇「いつくぞ眞そほ掘る丘こもだたみ平群の朝臣が鼻の上をほれ」

【考】こは編みたる薦の疊を幾重も隔て重ぬる意にてへの一音にいひかけたり。

【解】へとは編みたたみたるが、幾重にもある意にて重といふ。

こもまくら　高階紀　多珂國常陸風土記　高瀬の淀神樂歌　高御産栖日神三代實錄　高津山藏玉集　高阪山夫木集　相まきし萬七

武烈紀には高階過ぎとも、常陸風土記には多珂國とも、神樂歌には高瀬の淀とも、三代實錄には高御産栖日神社とも續け、萬葉七には相まきし子とも連ねたり。古は菰を捲きたがねて枕を作りたるより、高といふ語を頭にもてる地名にかけ、又枕するといふことをまくといふより相枕きしとも重ねて用ひたり。たがねは萬葉に用例見え後には轉じてつかねといふ。◇「こもまくら高せの淀にや誰がにへ人ぞ、鴫つきのぼる網おろし、さ手さしのぼる」

この枕詞近世に至りては高津山と續け、鹿持雅澄は高岡といふ土佐の地名へかけたり。

【燭】菰を卷きて枕にするをこもまくらといふなり。世の常の枕よりは高きものなれば、六帖には高瀨の淀と續けたるなり。

【考】高と續くることは、日本紀私記に師說古以薦爲枕云。高三之眼目頂流故欲高之稱有此言乎といへり。さらば床の上に枕は特に高くするものなれば、事もなく高しといふにやあらむ。

【信】釋紀にいへるによりて高きに續く言とのみ云へるは菅といふ言無のことなれり。木枕にても手枕にても眼目は高くすべければなり。これもたがねといふ言にかかる。たがねは束ねの古言。菅はとり束ねて枕とすればなり。

【釋】こは薦枕をたぐといふ意にいひかけたるなるべし。たぐとは總べ束ぬるをいふ古言なり。

こもりえの　はつせ續古今、續後拾遺

こもりぐを中世誤りてこもり江とよむ。次の條を見よ。續古今に『こもり江の泊瀨の山は色づきぬ時雨のあめは降りにけらしな』續後拾遺に『しぐれゆく秋にしられぬこもり江の泊瀨の山の峯の椎柴』などあり。

こもりぐの　泊瀨萬一、二　豐泊瀨路萬十一　初雪通茂百首　したび國儀式帳

記紀萬葉等に泊瀨と續けたる甚多し。萬葉十一には豐泊瀨と續け、近世のものには初雪とさへ連ねたり。とよとは褒むる詞なり。皇太神儀式帳には許母理國志多備國と連ねたり。こもりくとは、山をもて圍まれたる地といふ義なれば、泊瀨及伊勢の志多備の地形をあげて枕とせるか。又考ふるに人の隱るところ即ち墓といふ義か。はつせ

は人の籠る谷、したびは下邊にて黄土のことをいふか。後考をまつ。こもり口の枕とつゞくといひ、或は未嘗思などいへるはいかがあらむ。後世に至りては隱口と書きたるを思ひ誤りて、隱り江となし、續拾遺には「こもり江の杉の緑は變らねば泊瀬の山は色づきにけり」とさへ詠み、いよいよ誤りては隱口をかくらぐと訓み、泊瀬をとませとよむに至れり。これらは論ずるまでもなし。

【栄】隱口、この訓かくらく、かくれぐ、こもりえ、こもりく先達の古訓かくの如く區々なり。所詮此所は山の口より入て奥深き故に籠口の初瀬といふ。

【燭】泊瀬の境地、四方に山の立ち圍りて、口の籠れる所なり。よつてこもりぐとも、かくらぐともいふなり。然るを後々の歌に隱り江の泊瀬とよみたるは、顯昭が云ふ口の字江の字に似たればよみ誤れるなりと云々。紀をはじめ萬葉の歌數首皆こもりぐなれば、こもり江といふべき由來あるべきにあらず。

【匠】或説に商は口にこもりたるものなれば隱口のはといふ意といふ説は用ふべからず。泊瀬は四方へ山の立ちめぐりて口の籠りたる所なり。長谷とかけるも口の心なり。世にかくれ里などいふ如く、隱れ國といふ心にもあるべし。

【辭】隱口籠國等は皆借訓にて字義によらず。唯地名とす。泊瀬の名は雄略天皇の御世より記れば、上古の名にあらず。されば此地の舊名をこもりぐといへるなるべし。古歌に多く舊名を冠辭とする例證あればなり。

【考】隱國と書けるぞ正字ならむ。國をくとよむは吉野の久孺を國栖と書くが如し。

【槻】久老云、隱城之終といふ意にて、隱城は墓のことなり云々。

【續考】志多備國とも續く。ここも初瀨の如く廻りに山ありて打こもりたる所ならむ、その意は考に委し。志多備國は伊勢にあるべし。神名帳に、度會郡志等美神社あり。もしはこれか。

【諸】こもりぐは昆倉の謂なるべし。泊瀨の地形堂の造りなどによりていふが如し。昆はこも倉はりぐとよむべし。

【解】この山（泊瀨）木立繁く盛りなれば隱國・隱口・隱久・隱來などかきたるは皆借字にして、木靈屋之隱香とはいふなるべし。

【石】こは隱口齒續くと比したるにて、隱口といへるが正義なり。つは續の畧、算ふるの義、泊るの詞なり。齒は口にこもりて口裏に續き、かずあるものにて、口裏に泊たるものなり。よて隱口はつせと訓ませたるなり。これものは詞なり。

【黑】こもりくは隱處なり。國にはあらず所の義なり。

こもりごひ　いきづき萬二十

萬葉二十に『こもりごひいきづき渡り下思になげかふ我か兄』と續けたり。こもりごひとは言に出でず、一人内々にて思に沈めるをいふ。この歌は家持の都戀しき有樣なるを池主が想ひやりていへるなれば、嘆息する意なるいきづくへ冠らせて比となしたるか。服部氏の續冠斷考にも採りたり。

こもりづの　下よはへ紀

仁德紀に「倭べにゆくは誰が妻、こもりづの下よはへつつ行くは誰が妻」とあり。こもりづは隱り水か。春雨が

くれなどの水は上には見えて、下ゆくものなれば、下といふへ冠らするなり。下よばへとは忍びて妻どひするをいふ。

【考】こもりづは隱り水なり。草などにこもりて下ゆく水に忍ぶ意を譬へて冠辭とせり。

【傳】三十五 みづを省きてはみとこそいへ、づといへる例を知らず。さればこもりづのづも泉の省きたるなるべし。

こもりぬの　行方を知らず萬二　した萬、古　其許拾遺　あないきづかし萬十四

こもりぬは草木に掩はれてそのいづくへ流れゆくか明ならざる沼をいふ。よりて萬葉には『こもりぬの行へも知らず舍人はまよひ』に於ける如く、思案にくれたる狀に喩ふ。又その水は表面は動かぬやうにて下より流れゆくものなれば、心の中にて戀ふるに比して、下に戀ふとか、下ゆ戀ふ、下に通ひて、又下ばへおきてなどと續け、拾遺集には底といふより其許の義にうつして用ふ。◇萬『隱り沼の下に戀ふるは飽なくて人に語りつ忌ましきものを』『隱り沼のそこの心ぞ恨めしき、いかにせよとか、つれなかるらむ』又萬葉十四には『あぢの棲む須佐の入江の隱り沼のあないきづかし見ず久さにして』の歌あり。訓方につき諸說あり。水の久しく停滯してゐる如く相見ぬこと久しき爲めに心に溜息のつかるといふ意にも聞ゆれど、續は隱り沼の水の穴より流れいくといふ意にていひ下したるにあらざるか。

【服】隱沼の水は上べは長閑に見ゆれど、流れゆくべき方なく、底の心に思ひ咽びつつある樣なるを、さる戀の心に類へて下に戀ふれば、下ゆ戀ゆてふ語に冠らしめたり。こもり沼といふに心の裏に戀のこもり有るをかねた

りと見べし。

【解】十四なるは何を隔てて、不レ見といふへかかれり。見ずとは草どの生ひ茂りてかくりたる沼のおのづから日の光、物のかげなど見ぬよしの續なり。

【石】あな息づかしと續けしは、水のをみの滞るに、歎息の滞るを比したるべし。

こゆるぎの　いそぎ拾、金、源氏、續千

拾遺十四にはいそぎ出でてもと連ね、同十九には急ぎて來つるとも續けたり。又源氏空蟬にも金葉十にも續千載の六にも急ぎと連ねたり。相模の大磯の邊は古餘綾の磯とて歌枕に入れる名所なりければ、小餘綾の磯といふよりいそぎといふ詞に轉じたるなり。◇拾「こゆるぎの急ぎて來つるかひもなく又こそ立てれ沖つ白波」拾「いかにして今日を暮さむこゆるぎの急ぎいでてもかひなかりけり」

【紹】和名抄、相模國餘綾郡伊蘇の郷あり。後に大磯小磯といふ所なり。萬葉にはよろぎの濱とよみたり。磯部なれば貝石などのあるを思ひて、かひなきの詞にもかけたり。

こらが手を　巻向山萬七、十

萬葉七及十に巻向山に冠らせたり。巻向山は大和城上郡にあり。手を枕にすといふよりうつしたり。◇「兒等が手を巻向山は常なれど過にし人にゆきまかめやも」「兒等が手をまきむく山に春されば木の葉しぬぎて霞たなびく」

【考】兒らとは女をいふ。さてそれが手をまとひて相寢るてふ事をこの山の名にいひかけつ。記及紀に妹が手を我にまかしめ、己が手を妹に巻かしめと詠めるが如し。

こ の 部

ころもての　田上川萬一　常陸國萬九　名木の川邊萬九　春雨萬九　眞若の浦萬十二　かへるも知らず萬十三

萬葉一には田上川とも、九にも常陸國とも、名木の川邊とも、十二には眞若の浦とも、十三にはかへるも知らずとも、大分青馬とも續けたり。衣手とは袖をいふ。田上と續けたるは古の袖は細長かりしかば、手上にまつはるるより類音なる田上山又田上川にもうつし冠らせたるか。たなのなはのの轉なり。袖には襞摺の付けらるること常なれば、その縁にて常陸の國に轉じ掛けたるか。名木川と續けたる理由明かならず。次句の春雨に掛けたりとせば衣の縫の張るを春にうつしたりともいふべけれど、接續の狀訝しく或は誤字などにあらざるか。（試にいへば名は多の誤とせば多木河となり、衣をたぐといふ縁をもつべし。名木を泣とし衣の縫と見る說も從ひがたし）眞若の浦いつことも知り難く接續の理由も明かならず。これらは衣手といふ地名にあらざるか、大分青駒もおしげの駒とよむべきか、その讀方並に接續の由も詳ならず。かへるも知らずとは衣袖の翻へるといふを、人の歸るにうつしたるなり。◇萬「石ばしる淡海の國の衣手の田上山のまきさく日のつま手を云々」萬「衣手のひたちの國ふたなみの筑波の山を見まくほり君が來ますと云々」萬「衣手の名木の河邊を春雨にあれ立ちぬると家おもふらんか」萬「ぬば玉の夜霧ぞ立てる衣手の高屋のうへにたなびくまでに」萬「衣手の眞若の浦のまなご地のまなく時なしあが戀ふらくは」

【仙】衣手の田上と續けたるは、衣の袖は手の上にかかればよそへたるなり。又人の裝束を調へきるには衣文をきたるが浪の立重ねるに似たれば、衣手のなき（浪來）とつゞくるなり。又曰、衣の袖は衣文を引き結びたをさ

ぬもゝなれば衣手のひだちと續けたり。ひだちのひはよしといふ詞なれば、よくたつといふに通へり。又萬十三に衣手のあしげと續けたることは衣の色は樣々なれども、白きを本とせる故にしろたへの衣などよめるなり。

【燭】田上山云々これは衣手の手といふ字よりたなといひ續けむ爲なり。手にはたな心、たなうらといふ故にかく言ひかけたり。名木と續くるは、人の泣く時袖を用ふるの心にて續けたるなり。我衣手を泣ぬらし、袖泣きぬらしなど詠みたるにて心得べし。まわかの浦云々、衣手は袖なり。袖をば眞袖といふ詞を以てかくは續けたり。ま袖とは左右の袖をいふなり。物調りたるをまといひ、不調を片といふ常のことなり。まわかの浦眞若浦とかけり。もし若の浦に眞の字を加へていへる心か。熊野の浦をまくまのの浦、古よりよめる同じやうの儀か。大分青駒云々衣手の色はもとより白妙なり。然れば衣手ゝ色のあしげと續けたる心なり。あしげを芦の花毛ともよめり。

【管】衣手の高屋の上。衣手の手と續く詞なり衣手のたな上山といへるが如し。高屋は和州高野原よりいふ所なり。

【考】常陸國云々、こは在滿がいへる襞と續けたらむと、今考るに古の袖は幅の狹くてたけの長ければ、手襁にも事を爲すにも、袂の行りをたぐる故に襞多かるべし。依て右の說をよしとす。田上山云々こは二の意あり。一つには衣手のた長きてふ意にて田上にいひかけたるか。その古は式の祝詞に手長能大御世、手長乃御壽などいひて發語なるもあれど、ここは袖とは衣が手なる心にていへば、即ち衣手の手長と重ねしにや。古の狹く長き袖は常にたぐるべければ、たたなはる襞の多かるべきなり。さてたたなのた一つを略きていふもなほ、とゞまるをとまる、すすみのぼるをすみのぼるなどいふ類なり。名木の川云々これも長きといひかけたるか。なきのはぎなれば、約めてなぎといふべし。又袖はことになれてなゆるものなれば和といへるか。眞若浦云々、或說に左右の手を具して

眞手といふなれば、袖も同じく相具したるものゆゑに眞と續けたるかと、思ふに碩群に手てふ語は籠りてあれば、眞手の意にて眞とのみ續けむこともありぬべし。大分青馬云々、景行紀到二碩田國一、其地廣大亦麗、因名二碩田一也（此云二於保岐陀一）又豐後風土記に碩田郡とあるを、和名抄に同國の同郡を大分郡と書けり。この三書を合せ思へば、共に大きなりといふのみ。さればここの大分青も大きに白きてふ事をかく書きしは、古人の例の筆ずさみなるを知りぬ。さて大分青はましろと訓むべし。大白と眞白は意異ならねばなり。衣手よりは眞一言にかかるなり。

【標】ひだと續くるに、考にひだめのことをいへど否らず。袖てふものは手にひたひたとつくものなれば冠らせたり。田上と續くるは袖は手の上にあれば、衣手の手の上と冠らせたるのみならん。たなのなの字はのに通ふなり。名木の川に續くるは、袖はことに馴れてなゆるものなれば和といへるよりうつせるなり。眞若と續くるは袖は袂をぬはせたれば、袖口の輪のごとにて、左右にあれば衣手の左右の意にて冠らせたり。左右手とかきてまでとよむ例なり。大分青馬と續くるは、なべての青ぶちにはあらで、白き所の迦あれば、まだら青馬を名づけたる、大分青馬とかき、まの字にかけたり。

【信】大分青駒これを今本にあしげの駒は衣手の言のかかる由なし。さるを訝みて師の眞白と讀まれたるも如何なり。青と白とを一つ言のやうに師は常にいはれしかども、さるは白馬の節に限れることにて他に例なし。右の一條師說はすべて強ひ言にてうけがたし。この歌は三野王を葬れる折の歌の反歌にて、その長歌に金にしのうまや廐、角ひがしのうまや廐と書きて、西東とよめる書ざまを思ふに、青も東の意に假れるならん。然らば大分の二字も秦の字を誤れるものにて、秦は爾雅に西風を秦風といふと見えたれば、秦は西の意に假りたるか。さて西は右、東は左なれば、右の

既ひだのうまや云々、衣手のみぎひだの既と訓むべし。左をひだとのみいふは、右のをみぎとのみいふに同じ。
【諺】衣手のひだといふは、狩衣の袖をゆびしてひだとれるをいふ。衣手とは衣の袖をいふなり。
【苑】大分青馬はあしげの駒とも、ひだをの駒ともいへど、ひたをの駒ともいふべきか。疑しければ末勘として部外に出すべし。
【解】田上山云々袖の手長と續け、名木の川邊を春雨には三句の春にかかり、眞若の浦とは衣袖の眞刷といふ意にいひかけたるなり。大分青駒とかかれるは衣袖を襲着といへるなるべし。おとあと通ふ。
【黒】ひだ襞積は火だにてふくだの意、たながみは甚長までかかる。又眞若とつづけたるは眞赤なり。赤とわかと通ず。萬十三に衣手のま白の駒といへるとも同じ例なり。

ころもでを　打廻の里萬四　高屋萬九　敷津の浦新拾

萬葉四に打廻の里とも、九には高屋の上にとも、新拾遺には敷津の浦とも連ねたり。袖を下に敷くといふを敷津に轉じ、又衣手を寄せたぐるといふを高屋といふ山の名にかけ、又衣手を打つといふより打廻の里に冠らせたり。
◇萬『衣手を打廻の里にある吾を知らずぞ人は待てど來ずける』但し打廻里を長流はうち和の里と訓し、本居宣長はをりたむ里と訓むべしといへり。
【管】衣をうちといひかけたるなり。うちわの里山城といへり。
【考】今按に衣手は袖なり、衣うつといふといふ意に續けば唐衣などいひ書くべくや。打廻の里とかけるは縫などにふりまはす意にても續けたるか、高屋と續けたるは袖をたぐると續けしなるべし。ぐり反ぎなれば約めてたぎ

といへり。さてここはそのきぬがに通してたかと續けたるは例の冠辭のいひかけなり。

【摘】後世舞の手に袖肘をすじかひを打とも袖を打ともいへば、昔も斯樣に廻り舞ひけむ。又舞人が手をうちて舞ふこと袖打合せつつ舞廻りもしけむ。いか樣にも袖打て、舞めぐる事の常にありつれば斯く續けるなめり。高屋と續けたるは衣手のたけと續けたるなり。

【冊】打廻の里は、本居氏いふ。をりたむの里と讀むべし云々。

【石】衣手を打つといふ義なるを團扇の里とはたらかせたるなり。

さの部

坂こえて　阿部の田の面萬十四

萬葉十四に『阪こえて阿部の田面に居る田鶴の乏しき君は明日さへもがも』とあり。服部氏の稜威詳考に據りて阪こえて喘ぐ意より阿部にうつしたりとせり。これは阪踰えて田面に下りゐる田鶴の動作と見て枕詞とせざるかた正しからむ。阿部は駿河の地名なり。

さか鳥の　朝越えまして萬一

萬葉一の長歌に朝越えましてと續けたり。さか鳥とは坂を飛び越ゆる鳥といへり。供奉の人々の疾くうち群れ阪を踰ゆるに比したり。因に云く、日本紀に冠をさかと訓ぜり。雞鳥か何か冠ある一つの鳥にあらざるか。後考を竢つ。

【考】谷の木暗などに宿れる鳥どもの、朝には群りて山の撓める所などを飛越えゆくものなるを、供奉の諸人の山路おし踰ゆるに譬へたり。坂路は山のたわにありて鳥もその邊りを飛び踰ゆるものなれば、坂鳥といふ。

【諺】阪鳥は山鳥といふに對して野雉をさしていふ。阪鳥のさかは鶏冠の冠にて雉の類の戴ける故に冠にいひ通はしたり。

さきぐさの　中に萬五　三つば四つば催馬樂

萬葉五の長歌には中にと連ね、又催馬樂に三つば四つばに冠せたり。さきぐさは山百合とも瑞草とも三枝ともいへり。さきぐさは一莖に三枝を生ずるより三つといふ語の喩となす。三つばとは古代建築上三棟の義といふ。◇「この殿はむべもとみけりさきぐさの三つば四つばの中に殿つくりせり」中と續けたるは、三葉の中といふ續きに同じ。

【考】さき草は福草のことにて一莖の末に三枝あり。さて三あるものは、中あることわりなれば、集中に三栗の中ともいひかけたるに同じ。又年々率川(いさ)の祭に用ふる三枝花(さいぐさ)は、さゆり花なるべし。といへり。さ百合は一本の末に三枝等の福草に擬へて用ふるならむと覺ゆ。宮殿は檜もて造ることとなるに依て、さき草の三つば四つばてふさき草は檜をいふなりといふは、やや古のことをも語をも忘れゆきたる頃のをこ說なり。

【入證】岡山人三枝蒴歸云、吾鄕にてさきぐさと云ものは灌木の類にして草に近く、枝每に三枝を分ち、夏月三枝の末に房の如き花さくなり。江戸にては三俣(みつまた)と云るものなり云々。今按、治部式等に福草(さきくさ)は瑞草也、朱草別名也云々。和名抄に葛、和名佐木久佐、又草類に薺苨、和名佐木久佐、一云、美乃奈などあり。然ればそのかみさきくさといひしもの、一名にして二三種ありけるが皆混淆して紛はしくなりしにやあらむ。顯宗天皇の朝に瑞草朱草と稱して姓を賜ひ、三枝部造(さいくさべのみやつこ)を置かれしは靈芝の種類ならざりしか。大和の三枝祭に酒樽を飾りし山由(ゆ)といひし草も、これらに似たる故に擬へて三枝とは稱へしか。又それより和名抄にいはゆる薺苨の類をも准へ云

て逢に、三枝なる草木にはかの三俣の類にもその名の遺れるか云々（取要）

さき竹の　そがひに萬七　さをを〳〵記

萬葉七にそがひにねしくと連ねたり。さき竹は割たる竹をいふ。そがひは背向の古言、ねしくは寢ねたる義、割竹は數多重ぬとも舊の如く相合ふものなく、一本の外側と他の內側と相擁するが如く、背中合せに寢たるに喩へたり。◇『吾背子をいづち行かめとさき竹のそがひにねしく今し悔しも』この他古事記上に打竹のとををとををに天の眞魚咋（まなぐひ）たてまつらむとあるを、本居宣長は打は折の誤とし、さき竹のとををとををに掛る枕詞とせり。とををとををは撓む意、割竹の撓み易きより然か續けたりとせり。ねしくは記傳に見ゆ。

【仙】さき竹は割りたる竹なり。わりつれば背中合せになればそがひにねしくとよそへよめり。

【考】さきとそがひ、語の通へば重ね冠らせたり。さとそは固よりにてきもかひの反なれば、さきとそがひと通ふなり。萬十四に山菅のそがひにねしくと有るも、右と同じ歌なり。辟竹は割りたる竹なり。そがひは後向きといふに同じ。

【講】小竹の先と先とを合せて結ぶをいふなるべし。田家にて稻などを束ぬるに、梢の先を合せてゆふをすがひをゆふといふ。そがひの轉なり。

【解】大原重徳が說に、割りたる竹の後向なるが如く、面を合せず寢たるとの意なるべし。

さくぐしろ　五十鈴宮記

古事記に五十鈴宮に冠らせたり。釧とは玉を緒に貫き或は銅又石にても作り、腕輪の如く臂に卷きて飾となせる

もの。劒には五六の鈴を着けたるもの多し。このさくはせくと同じく、しじの變化にて、析せく數多き義と聞ゆ。よりて五十鈴宮に掛く。倘次のさく鈴の條を參照すべし。

【異】折劒なり。さくるくしろにはあらず。さく鈴の劒といふべきを、さくぐしろといひて五十鈴のすゞに續けたり。

さく鈴の　五十鈴宮紀

神功紀に五十鈴宮と連ねたり。さく鈴は數多き鈴をいふ。すずといふ同音を重ねて枕とせり。

【釋】私記曰、師說、鈴口サケタリ、故云、折鈴。

【考】鈴には今も見る如くさけたる口ある故に折鈴とはいふか。さくくしろの劒は臂の環なれば、鐵具もてまつひ著けむ物にて、折くといふ由なからむか。こを思へばここは久志呂と鈴を一つ物にいひしにやあらむ。劒には鈴をつくる物にしあれば、その鈴の方によりて、さくぐしろ五十鈴とも續けしにや。

【補】このさくくしろは唐土の劒のことにて金の輪なるべし。但其中に玉を入れて鳴するからに、外のめぐりを細くきたればさくぐしろといふなるべし。いすゞのいは發語なり。冠辭考にししぐしろ等をも是に合せたれど似もつかぬことなり。

【傳】劒とは小き鈴を多く緒に貫きて臂にまくをいへる名にて、その鈴を除て別に體はなきものと聞えて、履仲紀にもこれをたゞに手鈴と云へり。然れば劒の鈴一種有りて劒即ち鈴なる故に裂劒とは云なるべし。五十鈴とつゞく故は繁劒ともある如く、此か鈴は繁く貫くを以て五十と數々の鈴といふ意なり。又伊勢の書どもに宇治と云

にも續け云へるは五十鈴より轉れる後のことなり。

【石】咲釧は諸人の神に奉りしを、神のみ前にかけ飾れるをいふにて、掛けたる釧の多かるを當て、五十鈴の宮と續けしなり。そのさくくしろは頓て鈴の如しと比したるなり。

【黒】折鈴なり。さくるくしろにはあらず。さく鈴の釧といふべきなさくぐしろといひて五十鈴のすゞに續けたり。

さく花の　うつろひ 萬五

萬葉五の長歌に「常なりしゑまひ眉引き咲く花の移ひにけり」と比したり。花の散るをうつろふともいへば、これを人の老衰若しくは死滅に喩ふ。

さくら麻の　苧生（をふ）萬十一　をふの浦波 新古今十六　かりふの原 新勅四

萬葉十一には苧原の下草とも、十二には苧生の下草とも續け、新古今十六にはをふの浦波とも、新勅撰四にはかりふの原とも連ねたり。萬葉に櫻麻とあるを、さくらをと訓む說、さくらあさとよむ說とかにはをと讀む說とあり、いづれか正しきを知らず。俚言集覽にはさくらあさは雄麻の異名とあれどいかがならむ。もしは古佐倉といふ地より良麻を出したるより一種の名となりしにあらざるか。又考ふるに宗武卿の說の如くさくらをと訓みて阿波の地名と見るべきか。いづれにもあれ、麻といふより麻苧の義にてその音を頭にもてる詞にかけたるなるべし。倘後勘を待つ。新勅選にかりふと續けたるは、山の草木を刈りて夏の頃それを燒きて畠となし、種を下すところを今も刈生といへり。その義よりかりふといふ地名に掛たるならむ。○「櫻麻のをふの下草露しあれはあかしす

い往け見は知るとも』『櫻麻のかりふの原をけふ見れば外山かたかげ秋風ぞ吹く』

【仙】さくらあさとは櫻色の麻のあるなり。

【槻】さくら麻とは麻の名なり。萬葉に櫻麻の苧原の下草とよめり。麻の生ひたる畠をを゚ぷとこそは古くはよみたりけるを。おふの浦に續けたるは俊頼の始めてよめるか。

【冠】今さくらあさと訓めども、古今六帖にさくらをとあるをよしとす。をふと重ねむ料なればなり。さてさくらといふ所より出づる麻なればしかいふか。苧原は麻の生ふる畠をいふ。桂山は櫻麻をかにはをと訓まむか云々。これも據ありてなかしき說なり。

【摘】倭名鈔、阿波國名方西郡の鄕名に櫻間（佐久良萬）とあり。彼歌はそこの人がよめるにて櫻麻之の三字をばさ゚く゚ら゚ま゚とよむにぞありける。地名を冠らせたるなれば冠辭にあらず。

【石】をふの下草と續けたれば、地名にはあらで、古き世に櫻麻と賞する一種ありしなるべし。をふは苧生なればその櫻皮の如き苧生（地名）と續けしなるべし。

【宗】地名か。又櫻皮か。さらばかには生じたつる處をを゚ぷといふべし。

さくら花　さかえ乙女萬十三

萬葉十三の長歌にさかえ乙女にと連ねたり。つつじ花匂へる乙女と同じく花を以て美しき妙齢の女に喩ふ。

【解】さかゆる乙女とは、咲き榮にてうるはしき女をいへり。

さこぐしろ　伊須々乃川上儀式帳　宇治儀式帳

儀式帳に佐吉久志留伊須々乃川上又佐吉久志呂、宇治家田田上宮云々とあり。共にさくくしろの棒なるべし。宇治とかけたるは同じ神域の内なれば通用せるなり。

【續考】同書に佐吉久志留伊須々乃川上とも有り。留も同音ながら猶呂を誤るか。いすゞとあるを思へば、前の考のさくぐしろと同じ。くこ同音なり。宇治とかかる意分かたけれども、釧は手に卷くもの故に語を隔てて田上を手の上云々にとるか。

宇治家田田上は倭名抄云、伊勢國度會郡宇治又田部（多乃倍）これなり。神名式に度會郡田乃家神社又田上大水神社あり。家田は田家の誤りならむか。

さごろもの　を筑波萬十四

萬葉十四にをつくばねろと連ねたり。ねろとは嶺といふ常陸の古方言、枕詞のさもをも共に發語にて、衣に紐の緒を著くといふを筑波嶺にかけたり。〈さごろものを筑波嶺ろの山のさき忘らえとばこそ汝をかけなはめ〉

【仙】みどり子の衣にはをびを着けたれば、さ衣のを筑波とよそへたり。

【燭】衣の紐の緒つくるといふ心にて、さ衣のを筑波ねろと續けたるなり。根をねろといふは重從の詞なり。を筑波は小筑波といふ義か。比叡の山を小ひえともいふ。同じ心かと云々。

【考】衣の緒著くといひかけたり。今は衣には紐をのみいへど、古は紐はしといふ。又鈴の緒などもいふ。を筑嶺とあるをは、を泊瀬小佐保の類、疊語なり。

【冠】さころもは狭衣にて、前にて合せて紐にてゆひかたむる衣なるべし。古義に緊衣とするは悪し。

さゝがにの又さゝがねの　蜘紀　雲新拾遺　雲田の村草根集　曇らぬ後拾遺十七　いと拾十七　いづく後拾遺十四　命後拾遺十三　今は金一　いかさまに金七　いづこかげろふ

允恭記にはさゝがねの蜘蛛のおこなひと續け、古今墨滅歌にては同じ歌を蜘のふるまひと出し、拾遺十七にはいと斯くばかりとも、後拾遺の十四にはいづくにとも、同十三には命とも、十七には曇らぬ空とも、金葉一には今はとも、同七にはいかさまにせばとも、蜻蛉日記にはいづこともなくとも、新後拾遺七には雲の旗手とも連ね、草根集には雲田の村とも續けたり。

◇紀『我がせこが來ぬべき宵なりさしがねの蜘のおこなひかねてしるしも』拾『棚機はそらに知るらむささがにのいとかくばかり祭る心を』後拾遺『ささがにのいづくに人はありとだに心細くもしらでふるかな』『空になる人の心はささがにのいかでけふまた斯くて暮さむ』金『かきたえて程もへぬるをささがにの今は心にかからずもかな』後拾遺『ささがにのいづくともなく吹く風はかくてあまたになりぞすらしも』草根『草も木も糸に玉ぬくささがにの雲田の村の夕立の空』後拾遺『思ひやる我衣手はささがにのくもらぬ空に雨のみぞ降る』『蜘手さへかきたえにけるささがにの命の今はなにゝかけまし』

さゝは小さき義なれば小さき蟹の如き蜘蛛と比したるを本にて、同音の雲又曇らぬ或は雲田の村などと轉じて用ひ又蛛のかくる巣をいといふより、いの音を頭にもてるいづこ、いづく、いのち、いま、いかにせばなどにかけたり。最もといふ意なるいとといふ副詞に掛くる例は甚多しとす。さゝがねを蟹と見る説、笹が根の蜘又篠が根の組の轉とする説はあまりに穿ちたるか。

【考】こは私記にささがねは蜘蛛の別名なり。言はその體貌の如くて篠原に住むが故にいふてふ如し。さて彼が狀をいへる一の名なれば冠らせてよめるなり。又古は蟹をかねともいひつらむ。人の聞くがにといふ詞を萬葉に人之聞金とも書きたり。

【摘】こは小竹が下(ね)蜘蛛にて、くもは篠原などに住むものなれば冠らせしなるべし。

【續考】我友長谷島麿云、こは篠の根の組といひて蜘蛛にいひかけたらむと、げに篠の根は數多くて、彼方此方へ組む如くあるものなれば、斯かるぞ中々に古意なるべく覺ゆる。

【一言】私記にささがねは蜘の別名云々。或說には山の名にてその山の雲のおこなひなり。

【黒】篠が廉(ね)の籠るといひかけたるなり。又云、根といはんも妨なし。又小小蟹なり。

さゝ竹の　大宮人散木　大内山拾遺愚草

さす竹といふを篠竹の義にとりて中世の歌人これをよめり。◇「いく千代の秋をばふともささ竹の大内宮は色もかはらず」俊頼「散もせじ衣にすれるささ竹の大宮人のかざす櫻は」定家

さゞなみの　志賀萬一、二　大津の宮萬一　大山守萬二　浪倉山萬七　平山風萬九　長等の山拾

十　故き都萬五　あやしき金　より來る千十八　夜新葉

萬葉一には志賀の大海とも、しがの辛崎(からさき)とも、大津の宮とも連ね、二には、志賀の子らとも、しがさゞれ浪のとも、大山守とも、五には故き都とも、七にはなみくら山とも、九には平山風とも續け、拾遺十には長等の山のながらへてとも、金葉戀の部にはあやしきとも、千載十八の長歌には寄り來る人とも、新葉には夜とさへ續けたり。

滋賀郡上中らぐ小き波を以てその沿岸の地に冠らせたるを始めとして、後には波の寄るといふ上の人の集るにうつし、或は同音の夜にかけ、又波には文色あるを以て怪しきに轉じたるなり。志賀、大津、比良山、連庫山、長等等皆その沿岸にあり。大津には天智天皇の都ありしより故き都といひ、萬葉一には國つ御神と續けたり。こはあをによし國内といふに等しく、ささ波を以て直ちに近江の義となして續けたるなり。◇萬『ささなみの志賀の大わだよどむとも昔の人にまた逢はめやも』 拾『ささなみの長等の山のながらへて樂しかるべき君が御代かな』

萬『ささなみのひら山風の海ふけば釣する海人の袖かへる見ゆ』 萬『ささ波の大山守はたが爲か山にしめゆふ君もまさなくに』 萬『ささ浪の國つみ神のうらさびてあれたる京見れば悲しも』 金『水鳥の羽風にさわぐささ波のあやしきまでもぬるる袖かな』

【米】志賀山に昔一人の優婆塞あり。天智天皇そこに行幸ありて、山の名を問はせ給ふに、仙の靈窟伏藏の地ささなみ長等の山といひて失せぬ。よりてそこに伽藍を建てらる。それよりいひそめけるなりと。（眞備抄の說による）

【燭】淺海は水海の心なり。深海に對して淺き海といふ義なり。ささ浪とは小浪なり。かの水海大海の如く大浪の立つこと無ければ、只ささ浪の淺海といふ心なり。よりてささ浪の國とばかりも名づくるなり。さればこの國の名所ならむにはいづくにも置くべき詞なり。

【冠】樂浪は地名也。

【考】近江志賀郡にある樂なみてふ地にて、そこの大名なる故にその邊の所には冠らせたり。さてそのささは小

竹なり。浪は借字にて靡の意なり。よりて靡くものにはつけていへり。篠なみを神樂聲浪とかきしは、古神樂にさる謠物のありし故なるべし。

【摘】さゝなみは近江の地名にてそこの大名なること冠辭考にいへるが如し。されば冠辭にはあらず。

【貂】萬葉に神樂聲浪、又神樂浪、樂浪とかけるは、神功の御歌に岩たゝすすくな御神の云々末章にあきずをせ。さゝ、又武内の臣の皇太子に代り奉りて應へまつりし歌の末にもあやに歌たぬしさゝと見ゆ。これは神語のはやし詞にて、崇神のみわの殿の御歌の末章に、いくひさしと謡ひ給ふへる類なれば神樂聲と書きてさゝとはよむべき戯言なるとは、當時の人はよみ遊得て興せしなるべし。よて略には神樂浪又樂浪とのみも書きしことと思ゆ。

【服】猿猴いふ。神樂には必篠を用ふるものなれば、神樂聲をさゝといふなり。竹をさゝといふも、その聲より名づけたるなり。それ畧して神樂字をいはずして樂浪、神樂浪などもいふなり。

【拾別】近江風土記云。淡海國者以淡海爲國號。故一名云細浪國。所以目前觀湖上之漣漪也とあり。されば本湖上の小波より出でたる號にて弘く湖の邊の地に云ひつゞけしにこそ。萬葉に樂浪乃國都美神とあるもこの國を樂浪國といひしによる云々（採要）

さゝなみや　近江の宮拾八　志賀萬二十　三井の古寺夫木　矢橋の渡夫木

拾遺八には近江の宮とも同二十には志賀の浦風ともしがのてこらがともよめり。千載には長等の山のとも、比良の高根とも、志賀の花園とも、夫木には三井の古寺とも、矢橋の渡しとも續けたり。

古くさゝなみのといひしを、この頃よりや文字に代へて用ひたるなり。押照るをおしてるやといふが如し。

さゝのくま　檜（ひ）の隈（くま）古二十

古今二十に檜の隈川に冠らせたり。こは萬葉にさ檜のくま檜の隈川とあるを誤りたるにて、さは接頭語なれば檜隈といふ同音を重ねたるなり。詞の上より來りたるにて枕詞といふほどの事もなし。

【考】これは萬葉七及五にもさひのくま、ひのくま川と詠み、又三にはさひのくまわともよみて、檜の隈を重ねてよめるにて、さは添へていへるなり。いつの頃よりかこれを誤りて、古今集今本にさゝのくまとあるより篠の隈の義とするは萬葉に委しからず。

さゝの葉の　さやぐ霜夜古十九

古今十九に『さかしらに夏は人まねさゝの葉のさやぐ霜夜をひとり我ぬる』とあるを服部氏の續冠辭考に擧げたれど、唯冬景をいふなれば枕詞にあらず。

【服】さやぐ霜夜とはいと寒き冬の夜なり。寒きといふ事を冴ゆるともさやぐともいひ、篠の葉などの常にさら〳〵と音のするをもさやぐといふ「その篠の葉の音のさやぐを冬夜のさやぐてふへ言かけて冠辭を調べたるなり。よつて篠の葉のさやぐといふまでは、篠の葉の夏冬さやさやとさやぐ音の義にて、さてさやぐ霜夜といふときは寒くさやぐといふ語となるなり。

さゝらがた　錦紐

允恭紀に錦の紐に冠らせたり。古製には小き車形模樣などありしよりその形質をあげて枕となせしなり。

【考】こは帶なれば小文の錦をいふべし。さて小きことをさゝらといふは、萬葉に月を山の端のさゝら壯男とい

ひ、小波をさざら浪とよめるが如し。かたとは文をいふ。式に菱形錦、車形錦てふが如し。

【摘】こは小文錦の紐のことにて冠辭にあらず。

【石】さゝらがたは小生形（さゝられがた）の義。

【槊】さゝらは月か。再云、さゝらは月をいふにあらず。天つ國のさゝらの小野と見されば叶はず。又云さゝらは月にてあるをさゝらの小野に云かけたりとすべし。さゝらはさららと同名か。天の川も河内なれば同國なり。

さゝら浪　まなく萬

『日ぐらしに雨布留川のさざら波まなくも君をおほゆるかも』を引きて積絽にあげたり。

さゞれ浪　しきて萬四　いそ巨勢路（こせぢ）萬三　間なく萬十二　起ちて居ても萬十三

萬葉四にはしきて縁ひつつとも、十二には間なくもとも十三には止む時もなしとも、起ちても居てもとつづけ、又三にはいそこせぢと續けたり。こは小浪の磯越すといふをいその詞を隔て大和なる巨勢路にかけたるなり。◇萬「妹が目を見まくほり江のさざれ波しきて戀ひつつありと告げこそ」萬『さざれ波いそこせぢなる能登湍川（のとせ）の音のさやけきたきつ瀬ごとに』

【考】こはさゝなみとは異にて下のさを濁るなり。小波の磯をこす巨勢といひかけつ。

【石】さゝあれなみといふべきを、あはさの餘韻に含めてさゝなみといふ。

【通】織體記にさゝらのみ帶とあり。袖中抄にこの御製を引て小車のとあり。書紀記に車形錦といふあり。されば小形は小車の形したる錦の事なり。

さゞら川　あながまと伊勢集

伊勢の集にあながまと續けたり。さざら川とはかち渡らるる淺瀨の川をいふ。あながまとは嗚呼喧しの義なり。ささら川の水音の如く世の中の喧しと比したるを枕詞にあげたれど、序歌の體なれば序詞とせざるも可なり。

◇『音なしの山の下ゆくささら川あながま我もおもふ心あり』

さしずみのゝさしすぎの　栗栖の小野萬六

萬葉六に『指進乃栗栖の小野の萩花ちらむ時にしゆきて手向けむ』とある指進を拾穗抄にはさしすぎのと訓べ、考にはさしすみとよめり。又考の一説に摺墨の誤とし、枕詞解にはさしすすなと改めたり。さしずみとは大工のもてる墨斗(すみさし)のことなるべく、繰りて墨繩を出すものなれば、その類音なる栗栖といふ大和の地名にかけたり。續千載の四にはこの旅人卿の同じ歌なさしすきのと出したれど讀みひがめたるならべし。

【燭】さしすぎは指し通すの心なり。くるすは栗のいがをいふなり。

【管】さしすぎのくるすの小野。さしすぎは刺つくといふ詞なり。栗のいがをいふ。栗のいがは針の如くとがりてさしつくといふ心にかけたり。

【考】荷田大人曰はく、さしずみのくるるといひ掛けたるならむと、考ふるに、和名抄工匠具に墨斗(須美都保)また墨窓、切韻云、以墨窓畫曰之(和名須美佐之)云々、このすみさしを以てさす故に墨壺なる墨をさし墨ともいふべく、且墨斗に墨繩を卷き伸ふるくるめきの有る故に、さし墨のくるとはいひかけたらむ。

又この頃我が友橘常樹がいへるは、指は摺を誤れるか、然らば、する墨の黒といひかけたるならべしと、げに草

の手にては誤るべく、さてはいと易く宜しきなり。

【摘】こは指墨なり。源清良が曰ふ。萬の物に墨さすときは黒くなれば、さる意につゞけたるならんと

【諺】さしは柞子なるべし又皂斗ともいふ。栗も皂よりの名。すゝは棲なり。皂斗柄の栗部柄といふの意なり。

【解】考及冨樹が説はいかゞ。思ふに指進乃の乃は六か貳かの誤なるべし。さらば指むすむは刺竄むといふに同じ。さらば逆立刺の刺荒むといふに云ひかけたるならむか。又指荷むには杜王の宗字の誤なるにてもあるべきか。又按ずるに履仲紀に掖上(かきはみ)の栗林(くるす)といふ地名あれば、其実なりけむを枝さを指進と云ひ掛けけむ。

【行】指進の字によらば、さし進み來ると續けしなり。さる時はのは調なり。

さしならぶ 隣の君 萬九

萬葉九の長歌に指並隣の君と續けたり。さし並ぶ隣と續けたるなり。

【續考】隣といはむに言の足らぬときは、冠らせつべしと云ひつ。

【解】閉し並ぶ戸と言掛たるか。指並は枕詞なり。又直に指並でる隣家といひたるか。さる時は枕詞にあらず。

さしむしろ 偏に 歌合 加茂の齋宮集

日吉社歌合にはひとへにに連ね、近世者根集には加茂の齋に冠らせたり。さしむしろとは疊の上に更に重ねたる上疊の稱にて、表裏兩面を同じくして裏の方を下の疊にさしつけ端々を綴るなり。貴人の着坐するもの。疊又は席は一重二重などいふより偏にかけ、又疊を古はかもと呼びしより同音の賀茂に續けたるなり。◇一日へだてたる身もいたづきのさしむしろ偏に續ふる心求てぞ。

拾遺十七に長くやと連ねたり。遠淺の海に櫂に代へてさす棹の長きといふを、年月長きの意にうつし比したり。
◇『玉藻刈る蜑のゆきがたさす竿の長くや人をうらみ渡らむ』

さすさをの 長く拾十七

さす竹の 君紀、萬　大宮萬　舍人男萬十六

推古紀聖德太子の歌には君と續け、萬葉六及十五には大宮人とも大宮とも連ね、十六の長歌には舍人男と接けたり。この枕詞も義明ならず。さす竹は矢のことといひ、或は篠竹といひ、或は立竹といひ、刺す竹といひ、或は孰虛竹にて黍のことといふ。試にいはゞ、さすは瑞枝さすなどのさすにて、さす竹は丈のよく伸びたる竹即ち脩竹をいふならむ。天秤棒を古くさすといひ、長脚鐺をさすまたといふさすに同じかるべし。而して黍は竹の一種に似たれば、さす竹の如き黍といふを君にかけたるか。黍は今一般にきびといへど和名抄などにもきみとあり、房總地方にては今もきみといへり。或は萬葉歌人はてしといふ假字に義之の字を宛てたるなれば、これに晉の王之獻が竹をさしてこの君といへる故事などを思はせて竹の君と續けたるを本とし、それより君の居處即大宮にもかけ、大宮人にも冠らしむるより、轉じては宮仕せる舍人にまでも被らしめたるならむ。◇『さす竹の大宮人の家とすむ佐保の山をば思ふやも君』『さす竹の舍人男もしのぶらひかへらひ見つつ』云々、

【燭】刺竹は或說に矢のことなり。矢の數の多きによりて大宮人とは續けたり。近衞司なるものは、禁中の守にて、常に弓箭を帶してあれば、それをさす竹の大宮人ともいふか。或抄にさす竹は垣などにさす竹なり。多くさし並ぶる心にて大宮人と續けたりと、後の歌にはささ竹の大宮人とぞよみ習はしたる。私考、萬十一に刺竹の葉

かくれにある『我背子が我がりし來ずは我れ戀ひめやも』とあり。この歌にては刺竹は唯竹のことと聞えたるか。

【管】さす竹の大宮人。さす竹は植る竹の心なり。刺揷といふが如し。植ふるも地にさす心なり。

【匠】推古紀私記師說に謂矢也、言以矢刺身之事甚可畏懼、故欲言君之發語有此詞云々一切捨するに刺竹といふは本竹の名か。萬十一にさす竹の葉にかくれたる云々とあるにて知るべし。後の歌にさす竹は篠竹のなりと心得て、定家卿も衣にすれるささ竹の大宮人と詠み給へり。さとすとは音通すれば誠にさすはささにても侍るべし。

【考】試にいはゞ立竹のくみといふべきを轉じて君といひかけたるにや。古事記に『やまのかひに、たちさかゆる、葉廣くま櫟もとにはいくみ竹おひ』云々このいくみ竹は上の葉櫟のくまに等しくて葉の繁ければ組竹といふを約めて、昔はくみ竹といへりけむ。さてそのくみ竹のくみを下へ廻して且音の通ふままにきみと續くるは、冠辭の常なり。君と續けしより君がます宮にも冠らするなるべし。舍人男と續けたるは右の大宮と續けたるに關れて、刺竹を即ち大宮の事としたるなり。

【苑】舍人云々、さす竹の遠く根ばふ心にかけて、遠根をとねの詞によせたり。

【[illegible]】刺竹のさすは吹と通ず。されば吹竹は律管をいふ。律志に黃鐘爲宮爲衆聲之本也。故宮音爲君これ刺竹の大宮とよみ又刺竹のきみとよむの基づく所なり。又刺竹舍人とよめるは、音といひとねりと續けたるか。なれ〻なりと續くも鳴の意による根延の宮と續けたるも竹の音と根に通じたるにや。

【[illegible]】さす竹は狹虛竹の義にて黍の別名を然いひしならむ。そのもとは、その幹をさす竹といひ、その實を黃實

といひしより起れる名にやと思はるるなり。さて秦は萬十六卷の歌に寸三(きみ)と見え、和名抄にも木実(きみ)と見えて、吉きみといひしなれば、さす竹の秦といふより、君にかけ、かくて皇子を續け又君のいます大宮と續け、又うつりて大宮の舍人といふ意にかけたり。

【通】冠辭考に佐須竹のさすは殖竹の殖(たつ)と同じく相刺殖りて生榮えあるをいふ　芽さし出でたる若竹の枝さし葉さし榮えゆく意にて君とも大宮ともつづけ云ふにはあらざるかといへり。さることなるべし。

【冠】大宮云々竹の宮とかけてなり。親王の大宮は竹の園生とて、竹つゑしなることかねてなり。

【右】こは漢文に竹をさして此君といへる故事によりてかくは續けたり。

【見】きみは樹茂(きみ)にて、かきもりなり。

【秦】神の宮を造るに四方に竹を地にさし立て注連縄を延えしより刺竹の宮と續くるにはあらざるか。

【九】さす竹とは立竹叢りあうて立つ竹といふのであらうと思はれる。その竹の繁りあうてゐるといふ意味で葉ごもりに且こもと音の相通ずるきみに言ひかけたのではあるまいか。

さすやなぎ　ねばる梓萬十三

萬葉十三の長歌にねばる梓をと續けたり。こは枝を切りて地に挿したる梓は、よく根を張るより、粘る梓と轉じたり。梓はねばり強き木なり。

【考】楊の枝を土にさすに、いとよく根を張りて榮ゆれば、根張るといふを、張梓り續けしなり。梓は弓に作る木の中に專としていひもなれつれば、弓といはでもそれと聞ゆ。

さたの浦の　このさた過ぎて萬十一

萬葉十一にこのさた過ぎてと同音を重ね、時期(さだ)といふ意にうつしたり。◇「沖つ波へつ波のきよるさたの浦のこのさた過ぎて後戀ひむかも。」貞の浦は枝成は筑紫にありといひ雅澄は土佐といへり。但馬にも佐田浦あり、いづこなるか明かならず。

【冠】さたとは年の意なり。

【貂】さだとは事を定むるなり。この定すぎてとは、親の名づけ定めて後に相思はむといふか。貞の浦筑紫にありといふ。

【標】このさたとはこの時節といふが如し。佐備山後もといふに同じ。

さつきまつ　花橘古四　山郭公古四

古今四に花橘のとも山郭公とも續けたり。橘の花開くは五月にて、郭公の初音を聞くも同じ頃なれば、いづれも五月を待てるが如きよりかく冠らせたり。◇「さつき待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」「五月まつ山郭公うちはぶき今もなかなむこぞの古聲」

【眼】郭公は五月をもはらに鳴くものゆゑ、人の心にも郭公の為には、五月の待たるるものゆゑ、何となう郭公が待つごとくに續けたり。花橘と續けたるも同理なり。

【三】この花この鳥の五月待ちて、己が時と咲き立ち、鳴きいづるが故に五月まつと續けるなり。

さつきやみ　くらはし山拾二　鞍馬山新葉集

闇はいつとても暗きものなれど、五月闇は特に文目も分かぬものなれば、くらしといふを、くらの音をもてる倉椅山鞍馬山などの地名に冠らせたり。されど二首ながら闇に郭公鳴き渡りたることをこめたり。◇「さつきやみ倉はし山の郭公おぼつかなくもなき渡るかな」「五月やみ鞍馬の山の郭公おぼつかなしや夜半の一聲」

さつ人の　弓づきが岳萬十

萬葉十に弓槻が岳に冠らせたり。さつ人とは獵人をいふ。よて獵人のもてる弓とか弓柄（ゆつか）とかいふより、類音なる大和纏向の弓槻が岳に冠らせしなり。◇「かぎろひの夕さりくればさつ人の弓槻が岳に霞たなびく」

【獨】さつ人の弓に切る槻といふ意にて續けたり。或云、雄略天皇この山にて弓をつき給ひしよりいふなりともそれは弓を杖つき給ふ義なるべし。

【考】火照理命兄弟の幸弓のことより、始りて弓矢もて山の鳥獸を狩る人を、山のさつ人、山のさつをなどいふなれば、さつ人の弓とはいひかけたるなり。

【解】さつ人の取り持つ弓束といふ意に弓槻てふ意にかけたり。

【行】獵人弓衞と續けたるなり。ゆづきは弓槻の略、のは詞なり。

さつ矢ぬき　筑紫萬二十

萬葉二十防人の歌に、『天地の神を祈りてさつ矢ぬき筑紫の島をさしていく我は』とあり。服部氏はさつ矢ぬきは筑紫へかかるとして取出でたり。されど古は發途に臨みて、その方へ向き矢をぬきて祈をなす習ありければ、ここは枕詞にあらで、拔き挿すなどの語を緣として、下の指していくと對映せしめたるなり。

【服】筑紫と續けしは、箭を弓に矯ぐてふ詞をなせり。常も矢をつがふといへり。がふの反くにて則矢をつくたり。眞淵いはれしは、こは防人が筑紫へ出て立つに、先彼方に向ひて、矢を放ちて祝咀して立出づる事のさまなり。金村が佐渡へ行くとき、山路にて箭を抜きしことあり云々といへりも面白し云々。さつやぬきは筑紫てふへ冠らせし冠辭ながら、下のさしていくてふ語までへかかれり。

さての崎　さてはへし子萬四

萬葉四にさてはへし子と連ねたり。さての崎は伊勢の名所なり。同音を重ねて調となす。さてはへし子とは人に言ひ騒がれし女と下河邊長流の管見抄に見ゆ。

さなかづら又さねかづら　さ寝ずば萬二　後もあはむ萬　來る後十一

萬葉二にはさ寝ずばと同音を重ねて調をなし、又二、十一、十二、十三には後も逢はむと續け、後撰十一にはては來るをとも、來るよしもがなとも連ねたり。葛は蔓の延びてもまた末は行き遇ふより、人の一時別れても後逢ふに比し、又葛は人の繰るものゆゑ、來ると同音異義語へうつしたるなり。さなかづらは粘り強く女の頭髮につくるものにて和名抄には五味と書けり。中古よりは多くさねかづらと詠みたり。◇萬「玉くしげみむろの山のさなかづらさ寝ずはつひにありがてましじ」萬「ゆふたたみ白月山のさなかづら後も必ず逢はむとぞおもふ」後撰「名にしおはば逢山阪のさねかづら人に知られで來るよしもがな」

【考】かづらの長くはひ別れては、末のまたはひ合へるに喩へたり。和名抄に五味（佐禰加豆良）皮肉甘酸。核中辛苦、都有二鹹味一、故名五味云々。

【註】五味子は木にして草にあらず。和名アマナシといひ河原センダンともいふものの實に似たり。和名抄に五味子といふは陸氏が說の菁菌を誤れるならむ。和歌に詠ずる所のさねかづらは詩經の蔓なり。俗名きづたといふものなり。

【石】さなかづらは五味葛なり。樫葛といふ名義なり。その名を枕として、さ寢ずばと續けたり。

【石】萬葉別記一さねかづら、さなかづらとも轉じいふにて、眞かづらの意と思へりしは未だしかりき。これは冠辭考にいへるが如く、滑汁あれば、さは發語、なとねは音の轉にて、實はぬかづらなり。ぬはぬるぬると滑かなる汁あるをいふなり。池のぬなは、海のぬのりも同じ。

さにづらふ　吾大君萬三　妹萬十　をとめ萬十一　黃葉萬六　色萬十一　紐萬十二

萬葉三の長歌に吾大君とも十三には君が名とも、十には妹をとも、十一にはをとめとも、又六には黃葉とも、十一には色にはとも、十二には紐とも續けたり。さは接頭語、には丹さをいふ。つらふとは、有樣をいふ辭なれば、紅顏、紅葉、紅色、色、紅色の紐、などに冠らせたり。

【考】さはこと發す詞、丹つらふは丹著くるといふに同じ。音を通はし延べてにつらふとはいふ。さて艷やかに色つける顏ばせをいひて、他國に紅顏といふが如し。又紅なる色には黃葉、色、紐などにもいへり。

【解】さは美稱、には丹の意、つらふはあげつらふ、ひこづらふ、いひつらふなどいふつらふに同じくて、その樣をいふ詞なり。

【石】さは冠詞、には丹、つらふは頰生ふにて、面色に紅色生擴り匂ぐといふ義なり。こは實詞にて枕にあらず。

【黒】眞丹照(さにつる)なり。つるはてるの轉なり。

【仟】萬七雉豆臚漢女乎(さにつらふ)座而(すゑて)云々は誤なるよし、關氏の借字例にいへり。さひつるや、からめと改めたり。これ宜し。

さ ぬ つ 鳥　雉子 記

古事記上には雉子はとよみと續けたり。雉子は野の鳥なれば、庭つ鳥雞(かけ)、島つ鳥鵜と同じ續けなり。さは接頭語、野を古はぬといひたり。つはのに同じ。又萬葉十六にさ野つ鳥雉きかげらふと續けたるは、枕詞を以て直て雉子の意になしたること、足引を以て直ちに山に代ふるが如し。

【石】さは冠辭、つぬどりは野に泊る鳥と定めたるにて、十六の歌は菜の一聲に續けたるなり。

さ ね が や の　なごや 萬十四

萬葉十四に『岡によせ我刈る茅のさねがやのまことなごやはねろとへなかも』とあるを枕詞解に擧げたり。さねがやのさは接頭辭、根の附きたるままの茅をいふ。和やかにかかる。

【解】さはまに通ふ詞、佐禰蘆(さねかや)はさねかづらといふに同じ。さてそのかやのなごやといひ續けたり。

さ ね さ し　相模(さがむ) 記

古事記中にさがむの小野にと連ねたり。枕詞と見ゆれど接續の定則ならず。試にいはば、さはまに同じく發語なる詞にて、ねは嶺、さしは立つの義ならむ。記に八雲立つを八雲さすとあるを證とすべし。眞嶺立つ嶺とみと續けて國名に轉じたるか。喜田博士の說の如く、さしはアイヌ語のチヤシの轉にて山城の義とし、この例に青山的多

かりしよりいひ出でたりとすべきか。尚考ふべし。

【冠】さがむのをぬは相模小野なり。舊事本紀第十にも相武國造とあり。上句意得ねども枕詞と見ゆれば、ここに出せり。

【[illegible]】さねさし武藏と續く。實匕（さねさし）の實（み）さしと同語を轉じてむさしといふ地名へ掛く。さねとはすべて器中にあるものをいふ。蟲とは亂に似て葉大きく和名さじ草といふものなり。

【續考】さねさしのさは發語にて泥佐斯は武藏ならむ。佐賀牟は相模。武藏相模もとは同國にて、いまだ二國とならざる時、かくいへるか。袁怒は小野なり。されば冠辭ともなけれども相模にはさねさしと冠らしめつべし。

【采】相模は、さがはさうの轉、みはもの轉なり。相樂をさがらとよむも同じ。もと坂見の義にて、足柄箱根より見下す國なる故なりといへり。又牟佐下のむを略したるなり。むさしに對へていふともいへり。

【枝】元亮按るにさねさしに狹嶺立なり。狹嶺は小さき嶺なり。相模武藏のあたりは小山多に連り立てり。さしは立にて立つゞく意なり。

【存】記傳廿七にさねさしは相模の枕詞と聞ゆれども、いかなることとも未だ考へず、試に強ひていはゞ、さしは國名にて、さねは眞と同じく褒めたる言ならむか云々。萬葉十四萱をさねかやとも讀めり。さしといふ國を褒めてさねさしとはいふならむ。さて、さしを國名といふは、駿河相模武藏の地をすべて本はさしの國といひけむ云々。

さ は へ な す

生く記　騷ぐ萬三、九　荒ぶる神拾二

記上にはみなわきと比し、萬葉三には騷ぐ子らとも騷ぐ舍人とも、九には騷ぐ子らと續け、拾遺二には荒ぶる神

ともに連なり。五月頃數多生ひ出づる蠅の如くと喩へたるなり。『さばへなす荒ぶる神もおしなべて今日はなごしの祓なりけり』

【諺】さばへは詩經の青蠅ならん、せとさと通ず。

【石】さは冠詞にて攪り騷ぐといふ義なり。五月は蠅の盛に生ひ來る時なればかりて書きたり。

さは水の　淺ましく兼盛集

兼盛集に淺ましくと續けたり。水の緣なる深き淺きといふより、人事の淺ましきに轉じたるなり。『さゞれ石の上はかくれぬ澤水の淺ましくのみなりまさるかな』但しこの歌は序の第三句に置きたれば、且喩の如くなれり。續詞花に後撰の『を止みせず雨さへふれば澤水のまさるらんともおもほゆるかな』の歌を引きてまさるにかかるとせり。されどこは枕詞にあらず。

さひづるや　から碓萬十六　から女萬七

萬葉十六の長歌にから碓と續け、同七にはから女と連ねたり。唐人のものいふは鳥の囀づるが如く聞きなしたれば、からといふ音をもてる詞に被らせたり。やは語調の爲に置く。ことさへぐの稱にいへるが如し。

【考】和名抄に碓(賀良宇須)踏舂具也といへり。ことさへぐからと續けたるに同じ。

【存】萬七雜豆臘漢女を舊には、さにつらふ、をとめ、今借字例の說により、さひづるや、からめと訓むべし。關設方の借字例にいふ。雜は澤歲の雜なればまみむめもの行なり。なにぬねのには諾かぬ故なり。鉢山の轍なればなら二行に渉く。

友按、萬葉用字格に鐔をさにと訓むは鋤をさに、市をさひとよむ類といへり。市も鋤も同樣なれば、さひとよむは鐔をさひとよむも同じ。友又按、日本紀(欽明)韓女用ニ韓語一言云々などあり。

さ ゆ り 花　ゆり萬十八

萬葉十八にゆりも逢はむと同音を重ねて枕とせり。さは接頭語、ゆりは百合なり。下のゆりはゆるりの意か。或はよりといふことをゆりともいへば、後の義か。或は物の一ゆりなどの類にて短き時をいふか。今はまづ中の說によらむ。◇『ともし火の光に見ゆるさ百合花ゆりも逢はむと思ひそめてき』

【仙】こはゆりといふ名につけて續けぬべき上に、かの花は他花よりも大きらかに重きによりて、風など聊も吹くときはゆられたちたればゆりもあはんとよそへるなり。

【貂】百合の花は五月に咲くものにて、さゆりといへり。さてゆりも逢はむとは、今はゆるりと語りし、ゆらゆら步みしなどいふを、そのかみはゆりといひしなるべし。

【解】ゆりは後といはむが如し。

【石】さは冠詞にて花の搖り騷ぎたる形。ゆりも逢はむのゆりは寛緩(ゆるゐ)といふ義なるを、ゐるをりと約めてゆりといへば、今ならずとも後ゆりに逢はむと續けしなるべし。

さ ら し 井 の　たえず通はむ萬九

萬葉九に絕えず通はむと續けたり。晒井は常陸那珂郡水戸の北三里にあり。井水の絕えず湧き出づるを、月日絕えず通はむと、絕えずの語を取りて比したり。◇『三栗の那珂に向へる曝井のたえず通はむそこに妻もが』

【貂】那賀郡曝井の歌と題にあれば、その所によき泉のあるを愛でてよみたり。郡名は紀伊石見伊豆にあるを、これは紀伊ならむといへり。都近ければしかいふなるべし。

さるさはの　いけらん 漫吟集

漫吟集に猿澤の生けらんとつゞけたり。奈良の猿澤の池といふより生けるの詞にうつしたるなり。

さをしかの　入野萬十　膝折りふせて 續日本後紀　高角山 契沖

萬葉十に入野と續けたり。『さを鹿の入身のすすき初尾花いつしか妹が手をまくらがむ』續日本後紀には膝なりかへしと連ねたり。さは接頭語、牡鹿の分け入る野といふ心にて山城の乙訓郡の入野といふ地名にかけ、又後なるは、の如くと崇敬を表する人の様子に比したり。契沖の六六歌仙讃には高角山に冠らせたり。高角は今高津とかきて石見國の名所なり。

【續考】續日本後紀に云々、こは鹿じもの膝折りふせてと有るに同じく敬ひて膝折ることに冠らしめつ。

【解】鹿類の山林に籠るを入るといふ故に入の言に續けたるなり。契沖はさを鹿の分入野といふ心に續けたりといへり。

しの部

飾磨の川　しかすがに

柿園詠草にしかすがにの副詞に冠らするにしかまの川のとおけり。しかま川は播磨にあり。

しきしまの　大和記、萬　人萬十九

紀及萬葉の九、十三、二十等に大和國と連ね、風雅には大和島根とも、新葉には大和言の葉とも續けたり。崇神欽明兩天皇の都は大和の磯城島にありて、共に名高き御代なりければ、その附近の地名には大字小字の關繫にて相連ねたりしを、後には大和一國の上に冠らせ、終には日本全國にも冠らするに至れり。又萬十九にはこの枕詞を大和のことゝして直ちに人と續けたり。こは轉用なり。◇『志貴島の大和國はことだまの助くる國ぞまさきくありこそ』『立別れ君がいまさば敷島の人はわれにくいはひて待たむ』

【釋】式島とは大和の國の名所なり。皇居のありたれば、大和といふも同じ詞なるべきか。大和は我朝の惣名なれども、又一國の名なり。されば只重ねたる言なるべし。

【考】崇神・欽明二代ながら殊に數多年おはしまして名高ければ、さる頃より自ら大和の國の今一名の如く成りにけむ。仍て後に他處の都となりても、猶大和といふに冠らせてよめるならむ。さて都し給ふ所の名の一國の如くもなれるは、譬へば大和は一國の名なるが、すべての皇國の名の如くなりつるも、古はもはら大和に都し給ひつれ

ばなり。

【宣】國號考、師木島はもと欽明天皇の都の地名なるを、萬葉集の歌どもに、しきしまのやまとの國と詠めり。かく續けいへるは、もとは大和一國をさしてにはあらず。京都をさしてやまとといへるにて敷島の都といはんが如し。

しきしまや

大和島根後鳥羽院　高圓山土御門院　ふるの都按納言集　三室の山才槐集　玉井の沼良玉集　三輪の社曾丹集　山とびこえて新後撰

後鳥羽院御集には大和島根とも土御門院のには高圓山のとも、中納言長方はふるの都とも、中院亞相はみなあの山とも、良玉集相模の歌には玉井の沼とも、曾丹集の序には三輪の社とも、新拾遺には日本唐土とも、新後撰には山とびこえてとも連ねたり。敷島ののの字をやに改め、大和地名にさまざまに掛け、やまとといふより同音異義の山飛とさへ續けたるなり。◇『しきしまやふるの都は埋れてならしの岡にみゆきふるなり』『しきしまや高まど山の木の間より光さしそふ弓張の月』

しきたへの

衣萬二、十一　袖萬十七　袂萬二　枕萬二　手枕萬二　床萬五　床の山續後撰十八　床の浦續古　黒髮敷きて萬四　家萬三　塵掃ふ後四　臥さず拾

萬葉二には衣の袖とも妹が袂とも、十一には袖かへし子とも衣手かれてとも、十七には袖かへしとも連ね、同二には手枕まきてとも枕とまきてとも、四、五、十一、十二、十八にも枕とも手枕とも續け、又同方には床のへ人も、三には家とも、四には黑髮しきてとも、後撰四には塵はらふとも、拾遺の長歌には臥さすやすまずとも、續

後撰十三には床の山風とも、續古今五には床の浦とも連ねたり。萬葉にはかなかきの外、敷栲・敷妙・敷細・敷白・布栲・布細・色妙の文字を用ひたれど敷栲を正字とすべし。しくといふ義に關し、眞淵等の如く織目の繁き意とする說もあれど下に敷くを正しとすべきか。栲は古、衣服に用ひしもの、楮の皮の纎維より取る。よりて衣とも袂とも袖とも衣手とも續くるはいふまでもなく、下に敷く栲は夜の衣に續くるを本として、第二義的に枕とも小枕も手枕とも或は床とも連ね、後には床の詞をもてる地名床の浦鳥籠(とこ)の山などとも轉じて冠らせ、又しきたへを、やがて夜床の意となし、その上に積める塵を掃ふなどともいへり。家とも續けたるは常に寢ぬるに夜床のある義よりうつりて用ひしなり。しきたへの枕など續けしは或は上流の女子の換へ語として用ひしものより起りたるか。黑髮しきてとは敷きといふ同音を重ねつつ夜床といふことを匂はしめたるなり。

◇萬『ますらをと思へる我も敷妙の衣の袖はとほりて濡れぬ』萬『沖つ浪きよる荒礒を色妙の枕とまきてなせる君かも』『しきたへの手枕まきて』云々　萬『しきたへの床のへさらず』云々、　續後撰『敷妙の鳥籠の山風あやにくにひとりぬる夜は吹まさるなり』　續古『敷妙の枕の浦和の波枕やどるや月の浮寢なるらむ』　萬『とどめえぬ命にしあれば敷細の家ゆは出てて雲がくりにき』　後『夏の夜はあふ名のみしてしきたへの塵はらふまに明ぞしにける』　拾『長き夜な夜な敷妙の臥さずやすまず明けくらし云々』　萬『おきていなば妹こひむかも敷細の黑髮しきて長きこの夜を』

【蠋】常に敷きて寢ぬるものをしきたへといへり。敷き馴れたる心なり。旅寢などにて一夜の枕などをしきたへとはよむべからず。

【僻】敷妙の枕。枕には用ゐる物によりてその名を呼ぶ。薦にてするをこも枕といひ、黄楊にてするをつげの枕といひ、栲にてするを敷妙の枕とはいふなり。敷は稱美の辭。敷妙は枕の冠辭也。

【考】敷細布とて專ら寢衣の類に冠らしむることは、古事記に『むしぶすま、にこやが下に、たくぶすま、さやぐが下に』云々。萬葉にも『蒸被なごやが下に寢たれども』といへり。然れば夜の物はなごやかに身に親しきを用ふる故に、和らかなる服てふ意にて、敷栲の夜の衣といふより、袖枕床とも續くるなり。神祇令の集解に敷和者宇都波多也といへる、敷は細布の織目の繁きまで、和はなごやかなる謂なれば、美織なりといへるを思へ。敷を下にしくこととのみ思ふはかたくななり。夜の衣袖に冠らせ、夜の枕に續け、夜床にいひかけ、又一轉して寢所宿家にもかけ、黒髪しきて長きこの夜とは、皆夜床のさまなればすべてに冠らせたり。

【摘】栲をうちて氈のごと、柔に織りたるを敷氈に對へてしきたへといひ、その柔なるはぬる時の物とせるより、夜の具に冠らするなるべし。敷細黒髪とあるは細の下に爾の字落ちたるなるべし。

【年々】敷妙の衣といふは衣といふ字までかけて義をなす詞にて枕詞にあらず。敷たへの夜と續きたるは衣の字をかけて義をなす。夜の衣は下に敷く物なれば敷たへといふ名はあり。云々。

【繹】藉布の意にて、夜の衣袖は敷きて寢るよしにいひ、うつりては夜の枕に續け、夜床にいひかけたり。敷細の黒髪しきてはうば玉の黒髪の誤などにはあらざるか。宮地水溪云、こは黒髪を隔てて敷きてにかかると

【石】敷妙は敷栲にて夜床なり。敷きてぬる栲といふ義なり。よて床枕と續けていへり。夜床の枕と續くるに等し。衣袖と續くるはねまき衣の上にかかれるなり。家と續けしは寢の一隅にかかりて續けしなり。猶もいへの一階

にかかる。「黒髪しきて」と續けしは、妹とねし夜床の形勢にて枕詞にいへるにはあらず。
【冠】重袴はうつくしきものなれば、うつくしき家といふべきを、省きて家と續けたり。黒髪とつゞけたるもうつくしきを省きたるなり。又重袴の五十重とつゞけて家にかかれるか。

しきもあふ　いへ萬二

冠辭考に一つの枕詞として擧げたれど、こは萬葉卷二人麿の長歌をよみ誤りたるにて枕詞にあらず。荒木田久老の信濃漫錄を參照すべし。
『つるぎ太刀　身にそへて寢ねば　うばたまの　夜床もあるらむ。そこゆゑに　なぐさめかねて　氣田敷藻　相屋常念ひて』とある中、田の字舊本留となれるにより氣留を上につけ、敷藻二字を次の句の相と合せて敷藻あふとし、屋をいへと訓じたれど、こは疑しくも逢ふやと思ひてと訓すべく、枕詞にあらず。
【考】この敷は下に敷くなり。藻は借字にて妻を略きてもともいふなり。屋と續けたるは、集中に枕付嬬屋といへる如く、夫婦はかもふ敷き續けて寢ればなり。
【槻】しきもは敷物のことなり。夫婦の敷物はつぎ並みて敷くからに夫婦すむ家といへるなり。
【信】しきもあふやど。こは師のひが訓なるべし云々。劍刀、於身副不寢者、烏玉之、夜床母荒良無、所虛故、名具鮫魚天、氣多敷藻（今本多を留に作りて、けるとよめるはひが言なり）相屋常念而玉垂の越乃大野之云々、かくよむべし。十七ににけだしくもあふことありやと云々。
【石】敷宴會といふ義にて、男女同床にぬるをいふ。よつて宿家と續くるなり。比したる義なければ枕にあらず。

しきもなす はしきにとりしき萬十六

萬葉十六の長歌にはしきにとりしきと續けたり。敷莚の如く敷くといふに、愛する意なるはしきと同音を重ねたるなり。石上にはしきにとりなしといへるは訓み誤ならむ。

【石】はしきと續けしは閑延平かにしくといふ義なり。はは閑延の靈、平かなる義なり。敷莚を敷き成す如く、はしきにとりしきと比したるない。

しき波の しば／＼萬十二

萬葉十二にしばしば君を見むよしもがもと續けたり。敷波は次々に追ひしき來る波をいふ。よつて屢々と人事にうつし用ひたり。

しくなみの しく／＼萬十一

萬葉十一にしくしく妹を見るよしもがもと同音を重ねて連ねたり。◇『この川の瀬々の敷波しくしくに妹が心にのりにけるかも』

ししぐしろ うまい紀 よみ萬九

繼體紀の長歌にうまいねしとに冠らせ、萬葉九の長歌には黃泉に待たむと連ねたり。この詞仙覺・契沖・眞淵・み老・守部・雅澄・殘夢皆説を異にす。紀と萬葉のとは語義異なるか。紀のしゝくしろは若の説の如く繁釧なるべし。それより熟寢につゞく義聞えがたく、隨つて諸家の想像說起りたれど、或はその間に落句ある二首か。上代の歌のつゞき詞しきところは落句若しくは誤字あるによることも多し。試にいはゞ『背のまやけく、うましもの』な

どの二句ありしならんか。上に『妹が手を我に捲かしめ、我が手をば妹にまかしめ、眞佐木づらたたきあざはり』とあればその手腕につけたる纏釧の鈴の音のゆら／＼と聞えて、心地よく眠れるよと見ば上下のつゞきは自ら明かなるべし。但し内容より試にいへるに過ぎず。萬葉の『しづたまき、賤しき吾故に、ますらをの爭ふ見れば、生けりともあるべくあれや、宍串呂黄泉にまたむ』といへる續きも覺束なし。死を決せる處女の黄泉に待つといふに、滑稽なる修飾を加ふべき理なし。誤字もあらむか。試にいはゞ宍は實の誤、呂は乃の誤にて實串乃にて、むきくしの又うてくしのと訓み伊弉諾尊の黄泉にて櫛の齒をかきて投棄てられし故事などいへるにあらざるか。後助を待つべし。尙次に擧ぐる諸家の説を參照せよ。

【仙】よみと云へるよの字よしと云ふ詞に通へれば、諷詞にしじくしろと置けり。鹿宍は氣味すぐれたりといへば内奇よしとよそへ續くるなり。

【管】しゝくしろは鹿の肉を串刺にして燒きたるものなり。ろは助詞。味のよきによりてよみとは續けたり。よみは黄泉冥途のことなり。しゝくしろうまいねしとに云々、味ひむましといふ心なり。

【厚】是に兩義あるべし。一つには仙覺の萬葉の義は、串さして炙なる肉はうまきものなれば味のよしとつゞくる意といへり。これは肉串にて呂は助語なり。和名集云、唐韻云串炙肉串也とさへあれば、かけるやうに付て此説いはれあることなり。二つには今案に萬葉の纂の字密の字をししとよめば密櫛か、宍串とはかりて書けるか。呂は節の如し。櫛は繁きをよしとすればよみとつゞくるか。又伊弉諾尊の黄泉にて櫛を投げさせ給へることあれば云へるか。うまきとつゞくるは萬づによきことをうましと云へばよみと續くると同じ義か。

【考】この宍串呂は借字にて繁釧のことなるべし。さて紀には繁釧美しと褒むる詞を熟寝し時てふにいひかけ、萬葉には同じ釧を好しとほむるを黄泉にいひ續けつと見ゆ。

【荒】ししぐしろは啜酒呂ならん。

【解】宍は借字にて繁の意か。串呂も借字にて藥なるべし。さて藥は酒のことなり。酒を古にきといひくきといひつるもくすりの縮れる言なり。くすりのすりを切めてくしといひ、それを約めてきといへるにて皆一つなり。さてくすりといふ言義は穎汁なるべし。穎は稲實にて米なり。米の汁は酒なり。穎はきと切ればきしるといふべきを、きをくに通し、るをろに通してくしろといひ、又くすりと通していへりと聞ゆ。かくて上古には酒もて藥とせしことなれば、藥と酒は同物なり。よみに續くは美實といふなるべし。紀にあるは、繁酒甘美といふ意に續けたり。

【稜言】姑く考の説に從ふべし。余先に肉串煎にて燒鳥燒魚の類を云ふか。宍は肉の古字、煎を盧と云ふは式に鰹煎を加都遠伊呂理とあるに據りて也。かくては美とかかるも好とかかるも理りはいと宜しかれど、欠口と目の濁れる少し叶ひがたし。肉串と云ふ具の濁音を上に轉じたる古の音便にもあるにや。番具久と云ふたぐひの例もあればよく考へてよ。

【石】ししは領るなり。くしろは釧なり。釧は手に着くるものなり。著くればその所を締領るが故にししぐしろといふ。しは締領るの意なるが故に、しじと重ねてその義を強くいへり。その釧の如く、男女我ものよりに留て、手をさしかはしうまいねし時と比したるなり。よみに待たむと續けしは手に付くる數よみないと義との意と

は、はたらかせたるなるべし。

【通】これは甞酒呂味とかかれるなるべし。酒を古言にくしと云は藥の爲に作れるものなればいひ、ゐは助辭、すすは啜り飮むものなればいふ。さてさてその味のうまきを味といひ、又萬葉に黄泉につづけたるは美水の意なるべし。

【黒】ししくしろは重々に手にまくくしろなり。よきものなればうましとも續くるなり。

ししじもの　い這ひ萬二　膝折りふせ萬十六　弓矢かくみて萬六

萬葉二にはい這ひ伏しても、同三にはい這ひをろがみとも、十六には膝折りふせてとも、又同六には、弓矢かくみてとも連ねたり。ししは鹿をいふ。じものは狀之の轉。鹿の如く這ひ伏し、或は膝つきて、君に敬意を表するに喩へたり。い這のいは接頭辭なり。弓矢圍みとは狩場に於て鹿などを見出したるとき弓矢をもてとり圍むが如くと、流人警固の狀に比したるなり。武烈紀にはししじもの、みづくへこもりと續けたり。このししは猪なるべく、みづくへこもりは水の潤ふあたりへ隱れゐる義、鮪の臣を狙ふ人に喩へたり。

【厚】ししは猪なり。じもの、鳥自物、犬自物などこの類の詞多し。みづくへこもるは水潤邊隱るか。へは邊にて汀をいふか。

【考】鹿の膝を折りて伏し居るを、人の伏拜むさまに譬へたり。弓矢云々、狩場に鹿を見つけて、逃さじとする情に喩へて流人をまもり率て行くをいへり。武烈紀のは猪の谷水に漬き隱れ居て鮪を狙ひ求めて捕へよといひて、猪に金村連、鮪に鮪臣を添へたり。猪は水に入るべからず。鮪も谷水にすむものならねどかかりの譬のみ。みづく

へこもりは水漬隱りの意なるを、氣を延てくへとはいふ。

【石】鹿の身に領する如く、我も伏し這ひ拜み、膝折り伏せ、弓矢に圍まれてと比したるなり。いはひのいは冠詞なり。

ししゆく　あさかの國　倭姫命世紀

倭姫命世紀に宍往。碧鹿の國とあり。あさかは伊勢國壹志郡にあり。今阿阪と記せり。義明らず。試にいはば、壹志國祖神なる碧鹿の答へ奉りし詞なれば宍往は宍の往む碧鹿の國と答へたるにあらざるか。然らんには宍は鹿の義、人も住まず、鹿の住める國と自謙したるにや。

【鉊】宍往と書きてあらそひゆくと點せしはいかにぞや。こはさ男鹿の朝立つ小野とよめるに同じく、鹿ゆく朝とかけし冠言なり。

したのおびの　めぐりてあへる　六帖

六帖にはめぐりてあへると連ねたり。下の帶は裝束の下、小袖の上に締むる帶をいふ。左右よりゆきめぐるを互に逢へる妻に喩ふ。◇『契りけむことやはたがふ下の帶のめぐりてあへる妻や何なる』古今八には『下の帶のみちはかた〳〵別るともゆき廻りても逢はむとぞおもふ』といふ歌あり。この下の帶は一首の上にかかるが如し。

【鉊】裝束の下重の帶を廻らせて結べば、今別るとも必ゆきめぐりて逢ふべくともいひかけたり。

しただみの　老舌だみ　漫吟集

漫吟集には老舌だみと同音を重ねて調とせり。したたみは細螺をいふ。舌だみは舌の訛りてさえざるをいふ。

したひもの　下ゆ戀ふる萬十五　土岐の郡仲文集

萬葉には下ゆ戀ふると言ひ下して同音を重ねて調とせり。下紐は下裳又は下袴の紐をいふ。下ゆのゆはよりの古言。而に妻はさて心の中に戀ふるの義。◇萬『物もふと人には見えじ下紐の下ゆ戀ふるに月ぞ經にける』。仲文集には土岐の郡にかけたり。『結びおきし人や解くらむ下紐の土岐の郡に旅寢しつるは』とは紐をときといふより同音の美濃の地名に轉じたるなり。昔は男女契りて結びおきたる下紐は又逢ふまでは解かざる習ありしなり。

【釋】これは裝束の下重の紐を、相寢の別の日、女の手して結びて逢ふまで解くなと結び固むること古の習なり。

したびやま　下ゆく水萬九

萬葉の長歌に下ゆく水のと重ねたり。下樋山は攝津にあり、同音を重ねて調とす。而も樋と水とは緣語たり。

【證】下樋山津の國にあり。彼の國風土記云、昔有㆓大神㆒云㆓天津鰐㆒化㆓爲㆑鷲而下㆓止此山㆒、十人往者五人去、五人留、有㆓久波乎㆒者、此山伏㆓下樋㆒而屆㆓於神許㆒從㆓此樋内㆒通而禱、由㆑是曰㆓下樋㆒云々、下樋をふせたる山なれば下行水ともよめるなり。

したもえの　蕨の站

甲信紀行には武藏の蕨の驛にかくるに下萠のを以てせり。下より萠え出づる蕨と續けたるなり。

しづたまき　數にもあらぬ萬四、五　賤しき萬九

萬葉四及五には數にもあらぬと續け、九には賤しき我と連ねたり。しづたまきとは古の織物にしどりといふあり。切めてしづとも呼べり。それを織る料の苧環といふなるべし。さて下賤のものを、しづといふことも古くより見え

たり、されば織物の倭文布といひて同音の賤を思はせ、又その意にて賤しきとも數にもあらぬ身とも續けたるなるべし。しづたまきは賤しく下品なる手にまく玉といふ說はいかゞならむ。◇『賤手纏數にもあらぬ命もて何かもここだ我戀わたる』『倭文たまきいやしき我身ゆゑ』云々。

【管】たまきは手にまつふ玉の名、賤が手まきなれば數にもあらぬと云ふなり。

【考】こは倭文てふ布を織らむ料の苧環は、數多きもののゆゑに數と續けて我身の人數ならぬをいへり。且倭文と賤と語の通ふままにさる意をも兼ねて冠らしめたるなるべし。又數ともいはで、直ちに倭文の語を賤に借りて、賤しき我身と詠みたり。然か解くことは古今に古の倭文の苧環いやしきもとあるを思ひむかへてなり。倭文は古の文布にて、賤の着るもの故の名にはあらねど、右の歌どもは語をとりて賤に冠らせたるなり。手纏は右の古今集にをだまきといひ、伊勢物語にもしづのをだまきくりかへしといへるに依るに、かの倭文布を織らん料の紡麻は、內を虛に外を圓に卷きたる物ゆゑに苧環といふなりけり。これをへそともいふ。古事記に以二閇蘇紡麻一貫二針刺一其衣襴一云々、和名抄に卷子（閇蘇）閇卷所レ傳績麻圓卷名也てふを合せ見よ。

【補】しづは雜糸に色々の糸を加ふるものなれば、そを織るには、彼の手纏も多く要るなり。由て數とは續けしなり。萬九に賤者とあるも數と續けしに同じくいやといふのみ。さるをいやしきてふをもしづといへば賤く聞けしといへるは淺見たる說なり。手纏は板などに糸を卷きたるが、外より糸のとけゆくなれば、板ながら用ふるものにて、へそとは黑白の差違あり。

【攷】倭文は賤しきものならねど、手纏は玉などにてしたるが貴く、倭文布などにてしたるは賤しければ當には

あらねども、いやしともつゞけしにて、賤しとは手纏に付けていへることにて倭文をいやしといふにはあらず。
【冠】倭文は借字にて賤手纏といふなるべし。賤といへるはその品の賤しく下れるをいふなるべし。手纏は手環卷子の類をいふに非ず。わだつみの手纏のたまなどあるたまきなり。
【燭】しづたまきは筋糸を卷く糸卷なり。すぢとしづとはかはりしなり。筋の緒手卷これなり。こは筋糸數ありて色一ならず。それを數の糸卷にまくなり。
【石】倭文緒玉捲といふ義なるををとまの二言を略きて、しづたまきといへり。倭文布に織るべき糸を卷くしたるものなり。倭文布は賤しき人の着るものなれば右のごとく續けたり。
【黒】いやしきは彌重（いやしき）なり。

しづはたに　亂れ貫之集、後撰十三　經つる後十四

貫之集には亂れてぞ思ふと連ね、後撰十三には思ひ亂れてとも、十四には經つるほどなりと續けたり。しづは倭文布にて、機とは織物の義、にはの如くにの意なり。倭文布には樣々の文（あや）ありて、ふと見れば入り交りて亂れたるが如し。よりて心の亂に比したるなり。へつると續けしは機糸を綜るといふに、時を經るをかけたり。
◇貫之集「しづはたに亂れてぞ思ふ戀しさをたてぬきにしておれる我戀」後「しづはたに思ひ亂れて秋の夜のあくるも知らずなげきつるかな」後「しづはたに經つる程なり白糸のたえぬるぞとは思はざらなむ」
【貂】倭文布は神代よりあるものなり。神代紀に倭文織の遠祖健羽槌命織二文布一と見えたり。釋日本紀に大藏寮の古布に青白を織りまぜたる麻布あり。これ古のしづ布なりといふこと見ゆ。亂るるにかけしは經緯の文のみな

らず菱殻家作りの文にも縅なしけむ。さるは糸筋の亂れたる如く見えたらむもて亂るゝとはかけしなり。

しとみ山　おろしの風六帖

六帖の『しとみ山おろしの風の寒ければ風には常になきてこそふれ』のしとみ山を冠辭として、枕詞にあげたれどこは山下ろしといふ續けにて枕にはあらじ。この山は備前文獻前とも記せり。蔀に上げ下すなどいふは縁語なれど、まのあたり、その山より吹き下すなれば枕詞にあらで、嶺山下しの風と續けたりと見るべし。何處となく下ろしの風といふならば蔀山は枕詞となるべし。

しなが鳥　安房萬九　猪名野萬七　おははの山岡屋集

萬葉九に安房につぎたるとも、七には居名野とも、十一には居名山とも、ゐなの湊とも、十には猪名の伏原とも續けたり。近世の集にはこれをおははの山に冠らせたり。おははの山は播磨にあり。この枕も明かならず。中に就き安房に冠らせたるは水長鳥と書きたるにより、古くはみながとりと讀みたれど、仙覺以來これをもしなが鳥とよめり。しなが鳥の義明かならず、猪といひ丈夫といひ、尾長鳥といひ、みさごといひ、かいつぶりといひ諸說定らず。試にいはゞ、一方は水長鳥としるし、又古語には風及息をしといひたるが如くなればしなが鳥は息長鳥の義にて、水中に潜きて息の長く續く鳥をいふべし。而してこは庭つ鳥、野つ鳥、島つ鳥に於けるが如く、水上に浮ぶ鳥の總名ならむか。さてその類は鵜、鳰鳥はいふまでもなくその他を竝せ稱へしならむ。それ等の鳥は潮立つ浪をくゞりて魚を捕るより類音の安房といふ地名へ掛けたるか、居名とつゞけたるはそれらの水鳥のゐるを掛けたるならんか。尙後考を竢つ。◇萬『水長鳥安房につぎたる梓弓』云々。萬『志長鳥居名野を來れば有馬山の

よきり立ちぬ宿はなくして」萬「大海に嵐なふきそしなが鳥ゐなの湊に船はつるまで」

【僻】僻案云、昔雄略天皇その野にて狩し給ひけるに、白き鹿のししの限にて、猪のししは無かりければ、いひ初めたるなり。しながとりとは白き鹿のししの限取られたればいひ、猪名野とは猪のししの無かりければいふなりとぞ。居るに狩衣の尻の長ければ、土につけじとて、その尻をとれば、しながとりと申す人もあり。それは見苦し。

【補】顯昭云、しながどりゐなといふ所の名なるべし。

【枕】しながとりとはますらををいふ。ますらをは伴類多く引き連れたるものなれば、ゐなと續くるなり。ゐなのなは男、ゐは率といふ意なれば猪名といはん爲に置く。又曰、弓のはずには金玉を著く。その玉をあはくつきたれば、落ちりて無きによそへて、しながとりあはにつきたると續けたり。

【栞】景行記、日本武尊、信乃國伊那郡にて、白鹿を取り給ふことをしながとりゐなのと云ひ續けけるを、今の世には津の國の猪名野にとりよせて諷詞とするにこそ。又水長鳥安房につきたるといふことは、梓弓とは安房につき上總弓といふ詞なり。弓は彼國の貢調なり。倭武尊の蒜の泡にて白鹿をとり給ふことを申すといふ。

【燈】水長鳥は水に長く居る鳥といふ心にて、鴫などをいふか。鴫は水の泡に似て波に浮べば、みなか鳥泡といふ心にて續けたるか。又しなが鳥は俊頼朝臣無名抄云々、奥儀抄云々、二抄少し相違あれども、白鹿のとられて猪の無しといふ義は同じ。されば、この義を用ふべきにや。能因歌枕にはしながとり白き猪を云、綺語抄に源頼綱朝臣の説も猪を志長鳥と云。

【匠】安房と續くるは景行紀五十三年冬十月至二上總國一從二海路一渡二淡ノ水門一、是時聞二覺賀鳥之聲一欲レ見二其鳥

彤二、尋而出二海中一、仍得二白蛤一云々。覺賀鳥はみさごの古語なり。みさごを又しなが鳥といひけるか。されば淺水門を渡り給ふ時、みさごの聲の聞えければ、これを事のもとにてしなが鳥安房とは續けたるなるべし。次に居名と續くることはみさごは洲崎などを離れず居るものなれば、その下り居るといふ心にて非の字を設けて猪にかくは續けしなるべし。

【考】こはにほ鳥の率と續けて、率とは雌雄率るをいふならむ。猪名とも書きしによりて、猪の事なりなどいふは萬葉思はぬ人の說なり。志長鳥と息長鳥とは同じ物にして、息長鳥は鸊鷉のことなり。萬二十ににほ鳥のおきなが川、古事記にみほ鳥のかづきいきづき云々。この息長河と潜ぎ息づきとを對へ見ば知らるべし。水長鳥安房云々。(水は式類の切なれば、縋の音に用ひ、卷十に白玉を水良玉とも書きつ)こも息長鳥なれば、人の長嘆息するには聲を引きて嗚呼といふに譬へてあの一語に續けしなるべし。又思ふに欽明紀に鸕鳥皇女でふありき云々。志長は嘴長の略か、その群れ遊ぶ故に率と續け、その名おとりなれば、安房ともいひかけしにや。

【摘】しなが鳥は尻長鳥なり。今尾長鳥といふ。しりをしと約めいふは名にせればなり。ゐなとかけたるは上のゐのみにかけたり。此鳥友を率て歩くものなればなり。又安房とかけたるは上のあにのみかけたり。此の鳥の鳴き聲あといふがとなればなり。

【解】鴫の類に尾の長きがあるを、今世に尾長といへり。しなが鳥は尻長鳥にて、そをいふにやあらむ。さてその尾長の鴫は雌雄いと睦じくして、必率て双び居るものなれば、率寢といふ意にて居名といふ地にいひかけたるなるべし。あはと續けたるは、強ひて考ふれば、尻長鳥背割といふ意か。

【石】考の說は覺束なし。こは領ること長しといふ義にて水鳥の總名なるべく覺ゆ。ゐは居、あは顯はるるなり。水鳥の水底に沈居又水上に顯れ出づる形勢、その所を領て長きものなり。よて枕に置きて、ゐ、あと續けしなるべし。

しなさかる　越萬十七、十九

萬葉十七の長歌には越を治めにとも、十四には越の君とも、十九には越路をさしてとも。越に住めばとも、越に五年とも連ねたり。しなは階の義、さかるは天離ると同じく、隔り離るる意、越國は都より幾山坂を隔て離るといふ續か。或は段々となれる坂有るの義か。◇「しなさかる越の君のとかくしこそ柳かつらぎ樂しく遊ばめ」

【仙】邊土は人の振舞事柄の品なければ、しなさがるといふ。

【匠】科坂在越。此字の如くしなじなの坂ある意にや。もし假て書けるならば、正字は級放るにや。欽明紀に塔の九重をここのこしと點ぜるを以て准へて思ふに、階の級をもこしと云ふべし。されば階を下るには一重二重と放りゆく意か。又しとひと同韻にて通ずれば夷離國といふ意にや。

【考】夷離てふ語は廣く諸國に冠らしめ、この科坂有は唯越の國のみにいへり。されば右の科坂有と書きしを正訓として、階阪ある越の國てふ意とすべし。京に往反するに、愛發の關を始めとしてすべても階阪多き國なり。

【言】しなは級の字、卽次第の義、さかるは放るの謂なり。三越は次第せずしてその間に加賀の國をまじふるより云ふ。

【一言】しなさかるとはひなさかるといふを横訛りていふ。

【解】しなとは尋級の意にて、層に一層一層の級々あれば級々離る層といふにて、離るは北の方より南の方に高く段々にさかるをいふにやあらむ。

【石】階放るにて都より路遠に遠く離れたるをいふ。こは枕詞にあらず。

【黒】夷離の往來言かとも思へど、猶撓阪在なり。しなたゆふのしなに同じ。志那の木のある野といふはとらず。

しなだてる　筑摩さぬ方萬

代匠記にはしなてると別にこれを擧げたり。しなてるの條を參酌せよ。

しなたゆふ　さゝなみ路記　埴の浦蓬廬集　篠尾甲信紀補

記にさきなみ路に冠らせたり。樂浪路の上り下り一樣ならざるを以て形容したるか。しなは階にてたゆふはたなむといふに同じかるべし。蓬廬集には埴浦に、甲信紀程には甲斐の篠尾にかけたり。これも地形によれるなるべし。◇『みほ鳥のかづき息づきしたたゆふさきなみ路をすぐ〳〵と我行けば』云々。

【厚】浪の段々に立依來るを級と宣ふか。ふとむと同韻なればたゆふはたゆむにや。さき浪は小浪なれば師よりつづく浪の遲き意か。凡又ふとるとも同韻なれば幾斷ゆるにて、さき浪の續きでもよせねばかくは置かせたまへるか。

【考】これはしなやかにたゆぶ小竹と續けたるなり。たゆみたゆむなどいふを、たゆびたゆふといふも例の清濁の通なり。萬葉に夏草の萎えうらぶれ、なゆ竹のとをよる妹など詠みたるを思ふべし。

【傳】卅二に、しなは坂路のこと、たゆふは平かならずて、高く低く上り下りつつ行く阪路のさまにて、たゆた

ふと同言なり。流涼のたゆたふ浪に、又天雲のたゆたふ心など多くいへる皆常居定まらざるをいふ。陸路のたゆふも平に定りたる道ならで高くも低くもありて、上りもし下りもしつつ定らざる意同じことなり。

【冠】しなたゆふは足の劣(たゆ)く行くにて、波路は砂にあと戻りて足疲る。よて足之劣(しなたゆ)といふに波路をよせたり。

【石】しなは階、たは地なり田なり平かなるなり。ゆふは結なり。階平かなる田のこの路に結はれたるを當ていへるにて、枕にあらず。

【黒】神樂歌新釋五にいふ。しなだとは東國にて布の名なり。まだの木といふ木の皮を以て織る。この木綿をしなだへの木綿といふか。それを篠につけて振る意によせてしなたゆふさざなみ路とつづけたるか。

しなてる又しなてるや　片岡山紀　片足羽河萬九　筑摩萬九

紀には片岡山にとも萬葉九には片足羽河と連ね、十三にはつくまさぬ方と續け、拾遺二十に紀の歌をしなてるや片岡山にと、や文字を添へて出せり。しなは前にいへる如く山の階(しな)にて山阪の段々になれるをいふ。てるは立てるの意か。さてはその地方の土地高低一ならざるを形容して冠らせたるならん。仙覺抄にはしなたてる筑摩とよめり。河海抄『しなてるやにほの湖にこぐ舟のまほにも妹に相見えしがな』を擧げたり。

【仙】しなだてるとはしなひたてるなり。筑摩は所の名。

【栞】しなはしなぶ心なり。てるは月なり。かたおすはとはかた下りなるそばといふ詞なり。片下りなる山には日影の殊にあたたかにあたるなり。

【燭】しなてるは段照(しなてる)なり。級は階のきざみなり。照は襃めたる詞なり。宮殿の階は照り輝く心なり。片岡山と

續けたるは、その階のきざみの片さがりなるやうに、片岡山の段々に下れる所なれば續く。

【厚】萬十三師名立都久麻左野方云々。筑摩は近江國阪田郡にあれば級立さざなみの筑摩と續くる意か。然らば是は段々に立つ小浪といふなるべし。源氏のしなてるや鳰の水海は日本紀・萬葉の級照にあらず。水海をばにほてるといふよし喜撰が和歌式にあれば、志那陀山布のしなににほてるのてるを合せていへるか。

【考】級立つるものは斜に片たへなる意にて、片と續くるならむ。神武紀に磐余の地舊名片居、亦曰片立といひ、山城の山階てふ所と阪路によりて階といひ、越の國に科坂在てふ冠辭のあるも、險しき愛發の坂などの階立てる故とおぼし。照は借字にて立つるてふ辭なるを省きててるといふなり。つくまも山階ある地なる故に、かの片と續けしよりうつりてかくもいふらむ。

【解】しなは嫋の意、てるはさひづるなどいふつると同言にて、然ある形容をいふ時附けていふ言なるべし。さて片と續くは肩の義にて、嫋々と嫋ぐ肩といふ意にいひかけたるなるべし。萬十三の師名立都久麻左野方は立は光の字の誤にて、しなてるなり。これは言を隔てて方といふにかかる。

【石】しなは階なる品なり。てるは照なり。日の照します所、帝の照します所、階ある品あり。さればその照します限の地にわたしたる稱詞なり。かたは方にて、かは天なり。たは地なり。天地はかたの約なり。東西南北は天地の一方なり。よてかたといふ。かく天地東西南北の相むかひたるものの、物はなれ分れたるを片といふ。是も天地の一方なればなり。よて片足・片岡にかく。

【黒】山のしなひ立てるを撓立布といふ。

しなびねぶ　忍び萬十一

萬葉に忍びえずと同音を重ねて調とせり。『吾妹子をきき都賀野邊のしなびねぶ吾は忍び得ず間なくし思へば』合歡木は夕刻になれば日の間開きたる葉のしなび眠るが如く閉つるものなるより、堪へ忍ぶといはむとて置けるなり。和名抄に棔は合歡木、其葉朝舒、暮斂者也云々とあり。このねぶの木はねむといふ。地方によりてかあかと呼ぶは合歡を音讀にせるもの。

しぬのめの　忍び萬十一

萬葉十一に忍びて寢ればとも、人に忍べばとも續けたり。しぬのめとは小竹の芽をいふ。同音を重ねて調となす。

◇『秋柏うるは川邊のしぬのめの忍びてぬれば夢に見えつつ』

【考】こはその川邊に生ふる篠群てふ意なるを、むれ反めなれば、小竹の目といひて、しのびと重ねん料におけり。

しのすすき　忍び後十一

後撰十一に忍びはつべきと同音を重ねて調となせり。『逢ふことをいさほに出なむしのすすき忍びはつべき物ならなくに』萬葉にはしぬすすきとも、しぬぶともいひしを、三代集の頃よりぬをのと改めて呼べり。しのすすきは穗を出さぬ薄。ここの忍ぶは堪へ忍ぶの意。上句にほに出なむといへる縁語を置けり。

【仙】しのすすきはほに出でぬ薄をいふ。しのは忍ぶと云ふ詞、くめとはこむといふ詞なればくめといはん爲の諷詞なり。

【品】幹長くて細竹の如くなるを俗に高萱といへり。これが蕪鐵の如く株高く立ちて、その上に葉の叢生するな

一本薄といふと小野博がいへり。しぬすすきはその類ならむ。又篠芒といはむが如く、只おしなべての芒をいへるにもあらむ。

【存】月詣集戀下、廣言が歌に『秋も來ぬいざほに出ししの薄しのばてだにもつゆにぬればや』とあり。

しののめの　明け古十三

古今には明けと續けたり。『しののめのほがら〳〵と明けゆけばおのがきぬ〴〵なるぞ悲しき』しののめはしぬのめの轉。芽を人の目にうつし、明けと掛けたり。この枕詞は曉といふ意に用ひられたり。重之集に『しののめに朝の原をこえくれば』とあるが如きそれなり。高橋残夢は死の目のあくと掛るとせり。

【三】死の目といふ義なるを、のに轉じてしののめといへり。人の寐たる程は死にたるが如し。その死の目の覺むるは曉なれば、死の目と枕に置きて、曉、明けゆく等はいひ習へるより、頓てしののめといふ枕を曉のことゝして、ほがらほがらと續けたり。

しのぶぐさ　忍ぶ金、千

金葉九に忍ぶかたがたとも、千載十四には忍びもあへずと同音を重ねて調をなしたり。『軍廬のをがやの軒のしのぶ草忍びもあへずしげる思に』この忍草はのきしのぶといふ。和名抄垣衣一名烏韭、軒或は築牆の皮及梢等に生じ一根に叢生す。葱又萱草を指せるしのぶとは異なり。

しばのの　しば〳〵萬十

しばしばと續けたり。しまの野の條を見よ。

しひしばの　誣ひ藤原家集　初狩の里甲信紀程

拾遺に葉がへはすともと續けたるを、續貂に擧げたれど枕詞にあらず。眞淵は誣ひといふへ冠らせたり。こは同音を重ねて調となすなり。甲信紀程には柴を刈るといふより甲斐の初狩野にかけたり。

【私】椎柴の木は枯れて後に青き色かふるにや。拾遺に『はし鷹のとがへる山の椎柴の葉がへはすとも我はかへせじ』後撰に『これをだにかたみと思ふを都をば葉がへやしつるしひ柴の袖』いづれも心がへ所がへのことに用ふ。故ありげにきこゆ。

しほがまの　うら淋し古、拾　恨み新古今四

古今十六及拾遺の長歌にはうら淋しくとも、新古今四には恨みなはてそとも續けたり。陸前鹽釜の浦はその名高ければ、心といふことをいはむとて、浦といふより轉じて用ひたり。但し古今及新古今のは一は六條河原に鹽釜浦を模したる源融を惜む意の歌にて、一は鹽釜浦秋月をよめるなれば、有心序といふべきものなり。

しほけだつ　ありそ萬九

萬葉九に鹽氣立荒磯にあれどと續けたるを、楫取魚彦の續冠辭考にとりたれど、唯實景をいへるにて枕詞にあらず。

【備考】海に潮の滿ち來る時、氣の立つを鹽氣立つとはいふなり。

しほなわの　こるしか島田鶴舍集

高崎正風の歌に奈翁の生れしコルシカ島にかくるにしほなわのを以てせり。しほなわは祝詞などに見ゆる古語に

て潮泡をいふ。その凝るといふ詞より同音をもてる伊太利のころしか島へ轉じたるなり。

しほひの 荷田の大人つづら冊子

上田秋成のつづら冊子には荷田の大人に冠らするにしほひのを以てせり。こは汐干の潟といふをかたの音より人の姓にうつしたるなり。

しほ舟の 並べて萬十四　起かれば萬十四

萬葉十四に並べて見ればともおかれば悲しとも續けたり。鹽などを積みたる舟の帆を並べて西國よりのぼり來るを見習ひて、人を並べて甲乙を較べ見る喩に用ふ。又その舟の互に後れじと競ふ有樣などもて、後れ先だつなどいふ後れを起くれば悲しと轉じて用ひたるならむ。起くればを起かればといへるは東國の方言なり。

【仙】しほ舟のとは辛き思に喩ふ。

【匠】しを船は鹽船なり。東歌なるゆゑにしほをしをと書けり。ならべてはもやふをいふ。それを比ぶる心にそへたり。

【考】湊には數多の船並びてあるものなれば、並べてふ語に冠らせたり。

【服】しほ舟のおかれば云々。しほ舟とは海舟のことなり。おかれとは沖へ離ればといふ語にて、沖放れてふを約めたるなり。舟は渚より沖へ離れゆく物なればいへり。萬二十に『しほぶねのへこそ白浪にはしくも仰たまふか思はへなくに』とあり。その道をいつしかに辭知らぬといふなり。經といはむとて舟を取り出でたり。舟の舳とかかれる故冠辭なり。

【解】湊の潮には數多の舟の居並べてあるものなれば、かくおけるなり。しほ舟とは鹽を渡る舟なるべし。又船を來らすして湊にゐてあるを置くといへば、潮舟の置かれればと續けたるなるべし。この歌は女を率寢ずして徒におく由なり。千屋茂國云ふ、「おかればは起くればなるを、東語にかくいへるなり」鹿苑院嚴島詣記に、汐の滿ち來て、御船おきぬとて參れり。又召して漕かせ給ふ。『うきねする沖つ泊を急げとや、あけぬ夜汐に舟におくらむ」潮の干て居たるに、船の潮みちて浮ぶをばおくるといふこそ」とあり。後のことながら、古よりいへることなるべし。さて此二句は起ればにて、女に別れむとて、起れば悲しとなり。

しまぬの　しば〳〵萬十

萬葉の十に「國栖らが春菜つまんと司馬の野のしばしば君を思ふ頃かな」と見えたり。續貂にはしばの野のと調み、枕詞解にはしまののと讀みたり。屢々といはむ爲に同音を重ねて調をなしたるなり。司馬の野は大和の吉野の地名なり。

【語】野は吉野の國栖郷のあたりに在るべし。

【解】しほとしばと親しく通ふ故、能登川の後と續けたるに同じ。

島つ鳥　鵜紀、萬　うたて漫吟集　うさの浦山齋集

神武紀に鵜飼が伴と連ね、萬葉十七には鵜養ともなへと續けたり。鵜といふへ掛けんが爲に島の鳥と汎き名をまづ置きたるなり。庭つ鳥かけ、野つ鳥雉子と續くると同じ。鵜飼とは鵜をつかふ人にて膳部にも副りたるが如し。契沖の漫吟集にはうの一字よりうたてといふ詞へかけ、山齋集には宇佐の浦へ冠らせたり。

【考】こは島の鳥の鵜と續きたるのみ。

【石】島に泊る鳥は鵜と定めたるなり。

しもとゆふ 葛城山古、金、千　まさきのつな新續古今

古今二十には葛城山と續けたり。しもととは楚即若木の枝をいふ。葛にて結び束ぬるより、河内の葛城山へかけ新續古今にはまさきの綱と連ねたり。◇「しもとゆふ葛城山にふる雪のまなく時なくおもほゆるかな」

【燭】顯昭註正月の卯の日は杖を奉る。これを楚(しもと)といふ。杖をはかつらにて結べば、しもと結ふ葛城山とは續くるなり。

【匠】日本紀に茂林とも弱木林とも書きてしもとばらと訓めるは木の細くて長きなり。それを薪に刈る時葛をなりそにして結へば斯くは續けたるなるべし。

【詔】若木の林を、しもと原といふ。うつしては木の秀(ほ)づゑの小枝をもいふ。

しら糸の たえ後十四　來る拾十四　苦し新後撰、新續古今　とけぬ恨續後拾遺

後撰十四には絕えぬる身と續け、拾遺十四には今來る人とも連ね、又新後撰九には苦しき筋とも續後拾遺にはとけぬ恨とも、新續古今には苦しやとも接續せしめたり。糸の切れること、解くること、及繰るといふことを、同音異義の語に轉して、來るとも、苦しきとも、心釋けざる恨とも、交の中絶の意にもかけたるなり。◇「たつはたに織れる頃なり白糸のたえぬる身とは思はざらなむ」「憂かりけるふしをば捨てて白糸の今來る人と思ひなさなむ」

しらかしの 知らじ後十五

後撰十五には知らじに冠らせたり。同音を重ねて調をなせるのみ。◇「足引の山に生ひたる白樫の知らじな人を朽木なりとも」

【貂】白樫あから柏その木の色にいふ。

しらがつく　ゆふ萬三、十九

萬葉三には木棉（ゆふ）とりつけてとも、十二には木棉はとも、十九には我裳の裾にとも連らねたり。白髮の如き木綿とかけたり。◇「白香付ゆふは花かもことこそはいつのまさかも常忘られぬ」

【考】この木棉は白髮に似たるものなれば、白髮づくと冠らせたるなり。づくはその物に似付てふ語なり。

【摘】白香は借字にて後結（うしろかり）なり。うしろかりの上下の詞をそぎたるにて、くくるをかりともいふは古例なり。服飾管見に委しく記す。

【大】しらがは白紙にて、白紙を添へつくる木綿の義にて枕詞にあらず。

【按】木綿はしら髮に似たればかくいへり。又説、神祭するは月經の絶たる老女をもてする故に即白髮の形になぞらふるものか。よてゆふのことをうちつけにいふならむ。

【石】考の説は強言なるべし。もしその説の如く見むには、白髮なすといふべきなり。思ふにこの白香つくといふ付は賞詞にて、白顯れ身染付くといふ義にて、木棉の花白きを褒めて白が付といへるなるべし。しらはしあの約にてがは身に染の義ある聲なり。

【黑】白嚴（いつく）なり。白くうつくしくするをいふ。又白嚴美（しらがづく）なるべし。

しらかとり 猪名萬七

しながとり猪名と續けたるを、童蒙抄にしらかとりとし、白鹿取と日本武尊の信濃阪こえましし時の故事の如くいへるは誤なり。

しら川の 知らず古十三 みづはぐむ後十八

古今十三に知らずともいはじと同音を重ね、後撰十八にはみづはぐむまでと續けたり。みづはぐむとは瑞齒ぐむにて老年に至り若齒の再生するをいふ。このみづはぐむは近古のものにはみづわぐむと訓みて釋せる説あれど誤なり。この歌は檜垣嫗が筑前白川の邊にありて貴人に水を進むるときに詠みし歌にて、白川の水といふより瑞齒ぐむと轉じてかけしなり。この頃の歌には枕詞が一首の上に相關したるもの多しとす。◇『白川の知らずとも云はじ底きよみ流れて世々にすまむと思へば』『年ふれば我黒髪もしら川のみづはぐむまで老いにけるかな』

しら菊の 知らず拾二十

拾遺二十に『けふかとも明日とも知らぬ白菊のしらず幾世をふべき我かは』と同音を重ねて調となせり。

しら雲の 立ち別れ古八 立田山萬、古 斯かる拾遺 絶え萬、新古今 ぬしなき宿後二十 一村後十三 粟田山鈴屋集

萬葉六及九には立田山に、同十四には絶えにし妹に、古今八には立別れなばとも、こなたかなたに立別れとも、後撰十三には皆一村にとも續けたり。雲の生ずるを立つといふより、人の旅立にうつし或は袂を分ちて彼方此方に別るるに比し、或は大和の立田山に冠らせ、又雲は山などに掛りもし又今まで見えたる雲の絶えもするより、

同音異義の斯かるにも掛け、交の中絶にも比し、絶えてといふ副詞にもかけ、又その疊語にて人の一群にたとへ、本居宣長の長歌には粟田の山と續けたり。白雲の泡たつといふ意よりの續なるか。或は白雲のかかる粟田山の意なるべし。◇古『白雲のこなたかなたに立ち別れ心を幣とくだく旅かな』拾『白雲のかかる空言する人を山のふもとによせてけるかな』古『風吹けば峯に別るる白雲のたえてつれなき君が心か』後『君がいにしかたやいづこぞ白雲の主なき宿と見るぞ悲しき』

しら鷺の　ぬれ衣忠岑集

忠岑集に『雨ふれば湊をいでぬ白鷺のぬれぎぬをだに着せむとぞおもふ』とあり。白鷺は水に游ぶものにて、常に羽毛の濡れたるより濡衣にかけたり。濡衣をきるとは亡き名を蒙るをいふ。白鷺の濡衣などよまむ類か。

【栞】亡き名立つを濡衣きると古くいひ習へり。繼母のまま娘に亡き名は負せて濡衣をかつげし事なりといへり。按ずるに日本紀に、濡をかつぐと訓み、今もなき名を負するをかづけるといへり。さればかづく海人は、皆ぬれ衣きたれば、汚名を被ふるなどいふ意に、海人のかつぎによせて、ぬれ衣とはいひ染めたるなるべし。故事にはあらじ。

【紹】白鷺のぬれぬれとして立ちたる樣をぬれ衣といふことに冠らせたり。

しらすげの　知られむ萬十一　眞野の榛原萬十一

萬葉十一に知られむと同音を重ね又同書三及七には眞野の榛原と續けたり。こは白菅の生ふる眞野の義なるべし、眞野は攝津にあり ◇『葦田鶴のさわぐ入江の白菅の知られむ爲とこちわたるかも』『白菅の眞野のはり原ゆ

くさくさ君こそ見らめ眞野のはり原』
【燭】白菅眞野とは、菅をば眞菅といふ故に續けたるなりと。私云、菅は眞野といふ所の名物か。
【槻】白菅の眞野の榛原云々。契沖云、菅は干すままに白くなる故に白菅といふ。眞野と續けたるは眞菅といへば、眞の一言へ續くなりといへり。或人は眞野は菅に名ある所なれば白菅の眞野と續けたりといへり。この說に從ふべし。さて榛原を師の波藝(はぎ)原ぞといはれしは僻言なりけり。榛は波里(はり)といへる木なり。
【諺】白菅は白茅に似たりとあり。茅は夏花、菅は秋花、萬葉に茅子とかくも茅苗をいふにや。

しらたまの

君記　我子萬五　涙後九　をやまぬ六帖　をたえの橋續後撰　緒捨の山續後撰　姥捨山續後拾　多摩の横山菅根集　尾張藤垣内集

記の上には君が装と比し、萬葉五には我子とも、九には人のその名とも、十九には見がほし君とも、後撰九には涙とも連ね、六帖一には止まぬ春のながめと續け、續後撰には緒絶(をだえ)の橋とも、續後拾遺には姥捨山とも連ねたり。菅根集に村田春郷は多摩の横山とかさね、藤垣内集には尾張と續けたり。緒の音より轉じたるなり。白玉は人の貴ぶものなれば、愛する我子に比し、敬する人に喩へ、見ることを欲する友になぞらへ、又形によりはらはらと出づる涙にたぐへ、後には玉を貫く緒といふより轉じて雨の小止むとも、陸前の緒絶の橋にも、又信濃なる姥捨山に冠らせたるなり。◇記『赤珠は緒さへ光れど白玉の君がよそひし貴くありけり』萬『白玉の人のその名を中々にことのをのべず』云々　六帖『逢ふことのかた絲なれば白玉のをやまぬ春のながめをぞする』續後撰『白玉の緒だえの橋の名もつらし碎けて落る袖の涙に』

【眼】子を愛しみて、白玉は珍しきものなれば、それに譬へていへる冠辭なり。又白玉の人のその名とは、貴なき高き人の名といふなり。又十九のは白玉の如くうるはしき人をいふ。

【紹】白玉は磨きなして照りとほれるをいふ。思ひ子、思ひ妻、親をも、友をも、いつくしと思ふをば、喩ふる上なきを白玉といふ。

しらつつじ　知らぬこともて萬十

萬葉十に知らぬこともてと同音反復して調をなす。白躑躅は丹つつじに對していふ。◇『女郎花さき野に生ふる白つつじ知らぬこともていはれし吾兄』

しらつゆの　消萬　起き古十一、後九　置く後十三　奥後九、十三　たま〳〵金七　玉江新勅三　玉の緒新葉　玉串新葉　知らず新古下

萬葉には五、八、十、十二等に消ぬべくとも、消易きとも續けて露を以て人生の脆さに比し、古今十一には起くとはなげきとも、後撰九には起きむ朝とも、十二には起きてとも、十には起きてもねてもと連ねて、露の置くといふを同音の起きに轉じ、又後撰十三には人に心を置かじと句を隔てて續け、同九には奥に數多の聲すればとも、十三には奥にも外にもとも、又起き臥しとも續けて、同音異義語を呼び起し、又金葉七にはたま〳〵來てはとも、新勅撰三には玉江の芦とも、新葉には、玉の緒とも玉串とも連ねたり。これは露の玉といふより、たまの音をもてる語にうつしたるなり。又新古今一には知らず幾世のと頭韻を反復して調をなしたり。中古の歌には白露といふ枕詞にして上句の事は知らずといふ意を兼ねさせたるもの少からず、◇後『夕暮はまつにぞかかる白露の起

きむ朝や消えははつらむ」後『白露の奥にあまたの聲すれば花の色々ありと知らなむ」後『つらしとや言ひはてまし白露の人に心を置かじと思ふと」金『おもひ草葉末にむすぶ白露のたま／＼きては手にも溜らず」新勅『白露の玉江の芦のよひ／＼に秋風ちかく行く螢かな」新古今『青柳の糸に玉ぬく白露のしらず幾世の春かへぬらむ」

しらとほふ　をにひた山萬十四　雄の山石園集

萬葉十四にをにひた山に冠らせたり。上野國の歌なれば新田山のことなるか。しからばをはを筑波などのをに同じかるべし。「志良登保布をにひた山のもる山のうらがれせななとこはにもがも」意義明かならず、もしくは宮地春樹の說の如く保布は保留の誤にて、白砥ほる小新田山と掛けたるにあらざるか。

【仙】しらとほふはほむる詞のその一つなり。新しきをほむる詞に白とはふ新といふなり。

【匠】試に今案を廻すに白珠とほす緖と續けたるにや。をにひた山は小新田山なり。

【考】小新田なるべし。大和の佐保をさほといふが如し。

【苑】白く綜たる麻、新とつづくなり。らとの反ろ、ほふの反ふなればなり。

【解】宮地春樹翁いふ。しらとゝは白礪にやあらむ。本居氏へいひなりしに、げにさる事なり、尚それに付きて考ふるに布は留の誤かといはれたりと。

【辨】白玉にほふといふなり。たまの反たなるを、とにいふは、この國言なり。その玉の緖とかけて小新田によせたり。

【石】强ひて考ふるに、すべて小と冠らせたる山には大と冠らせたる方必あるものなり。大木曾、小木曾、大川

枝、小日枝、大泊瀬、小泊瀬等の例なり。されば小新田山にも大新田山ありて、おほのほを略きておにひた山といふ。よりて鬼といふ義にとりなして、しらとほふと枕にいへり。しらはしりあの約、しりは後なり。あは闇るなり。とほふは、とびおふのひおをほと約めて、とほふといへるにて、四言を合せて一語とせしなり。鬼は幽鬼にて、頓て幽魂なれば、なくなりし後にも跡吊迎ものなりと比したるか。

【黒】後闇經(しらとほ)るなり。什處(しりと)にてもあるべし。新田山は山背を官道にて往來するが故にしらとほふといふ。齋ふをほふといふは往來言なり。

【折】しらとほふはにひ或は寧ろにに續くのであること、風俗諺曰白遠新治之國（常陸風土記）とあるを見ても知られる。

しら鳥の　鷺阪山萬九　飛羽山萬四　眞野園倭姫命世紀　さきの世夫木

萬葉九には鷺坂山と連ね、同四には飛羽山と續け、倭姫命世紀には眞野園とも續けたり。夫木には約家の歌にさきの世とも續けたり。白鳥とは羽毛の白き鳥の總名にして、その中には白鷺もあれば鷺と續け、同音を頭にもてる山城の鷺坂山に冠らせ、義を異にせる先の世とも轉じ、又鳥の飛ぶといふより鳥羽山に冠らせたり。白鳥の眞野と續けしは義明かならず。白鳥の飛ぶ眞野と見るべきか。儀式帳に見ゆる枕詞は義の通せざるもの多し。

◇　萬九「白鳥の鷺阪山の松蔭に宿りて行かず夜もふけゆくを」　萬四「白鳥の飛羽山松のまちつつぞ吾が戀ひわたるこの月頃を」

【考】鷺坂山云々とは隱れたることなし。飛羽山云々飛ぶと續けて鳥羽とかけしにはあらず。

白波の

いちしろく萬十二　面知る萬十二　知らず古、拾　濱松が枝萬一　濱田の里市がね　よるよる後九　なごり後十二　うちしきり拾十四　うち騒がれ拾十六　荒井の崎續後撰　打出の濱續拾遺　かけし契新續古今　彌奈和神社神名帳

萬葉十二にはいちしろくとも、面知る君とも、古今十一及拾遺十二には知らずや人をとも連ねたり。これらは白の類音しろ、しるを重ねて、著(いちしろ)くとも面知るとも轉じたるなり。又萬一には濱松が枝と續けたり。こは白波のよする濱といふより續けたるなるべし。加藤千蔭は濱田の里と地名にうつし連ねたり。後撰九にはよるよると連ねて、夜々と寄る寄るとを兼ねしめ、同十には歸る折にはとも、十一には立歸りてとも續けて波の歸ることを人の歸るに比し、後撰十二にはなごりとも、拾遺十四にはうちしきりとも、十六にはうちさわがれてとも連ねて別るる時の餘情とか、切にとか、繁かる等の意に轉じ用ひたり。又續後撰には荒井の崎とも、續後拾遺には打出の濱とも、新續古今にはかけし契とも連ねたり。波の荒きとか、打つとか、よせかくる等の語を神名及人事に轉じたるなり。神名帳には彌奈和神社にかけたり。こは白波水泡といふ義にて續けたるならむ。◇萬「白波の濱松ヶ枝の手向草いく世までにか年の經ぬらむ」萬「こもり沼の下ゆ戀ひあまり白波のいちしろく出でぬ人の知るべく」萬「神のごと聞ゆる瀧の白浪の面知る君が見えぬこの頃」拾「葦鴨のさわぐ入江の白波の知らずや人を斯く戀ひむとは」後「白波のよる〱岸に立よりてねもみしものを住吉の松」拾「白浪のうち騒がれて立ちしかば身を憂しほにぞ袖は濡れにし」續拾遺「にほの海は氷とくらし白波の打出の濱に春風ぞ吹く」續後撰「白浪の荒井の崎のそなれ松かはらぬ色の人ぞつれなき」

【仙】濱のはは白き義、まは廻れることばなり。さらば白く廻りたりと云ふ心にて白波の濱と續けたり。

【冠】白波の濱松が枝の手向草云々、眞淵はこの枝の字は根の誤なるべしと。高保思ふ、これは見ゆる松を手向種とよみ給ひ、その松老木なるべければ、則幾代へぬらむとよみ給ふなり云々。白波のてふ冠辭に濱てふ語へのみ續けしなり。天雲のいかづちと詠める續の類なり。

【紹】白波の知らずとかけ、浪の寄するを夜にかけ、浪の寄せかへるを往き通ふによせたり。又なごり云々、なごりとは義もて餘波と書く。波の淵濱に殘りたるをいふ。さて別の後をうしろめだに思ふなり。神名帳に伊豆國田方郡白波之彌奈和神社といふも、白波は水泡の冠言なり。

【解】白波の濱松ケ枝云々、白浪のよする濱といふ意に續けたり。又一に白波の穗といふ意にもかけたるにもあるべし。ほとはとは近く通ふ言なればなり。いちしろく云々、浪はそれといちしろく立つものなる故に續け、面しろ君とは面の著き君といふ意にて前なると同じく、知らずや云々は重ねたるなり。

しらぬ國　巨勢路萬一

萬一の長歌によりこせ路と連ねたり。しらぬ國は遠きひとの國をいふ。巨勢は大和の地名。よりを隔て歸化人がより越すと續けたり。

【解】知らぬ外國の皇化に服ひて歸來よしもて、巨勢道へいひかけたるにて、依るといふまでは、ただ巨勢といはむ料のみ。

しらぬひ又しらぬひの　筑紫萬　肥の道の口藤垣集

萬葉三、五及二十に筑紫に冠らせたり。肥後の近海には、景行紀に見えたる如く、今も知らぬ火の夏の頃海上に漂ふこと人の普く知る所なり。よりてそのかみ夙く知らぬ火火國といへりしを、筑紫といふ名が九州一圓の名となり、火國もその中に包まれたれば、かく轉じて續けたり。藤垣內集には肥の道にと連ねたり。萬三『白縫筑紫乃綿者身爾つけて未だ着ねど暖に見ゆ』荷附けて云ふ。萬葉三には白縫と書き、五には思良農比と書き、二十には之良奴日とかけり。古人は皆不知火とせり。最近栗原荒野氏は國語と國文學誌上に、萬葉集の枕詞しらぬひについてと題する論文を載せ、白縫を正字とする說を立てたり。從來不知火說、白日別說、白野火說、白縫說、新羅繡說を紹介し、萬葉假名の書風より打消には不の字を用ひ、又一字名の字には火日等書分くる習字より說き、萬葉卷三の歌は白縫は筑紫にかからず綿にかかるとし、一首の上も味ありと云々と說けり。

【仙】知らぬ火のつくしといふべし。九州をつくしといふ名は此島の形狀木菟に似、紫(し)は助といふ詞なり

【燭】しらぬひは不知火といふ義なり。景行紀に從二葦北一發レ船到二火國一、於是日沒也、夜冥不レ知二著岸一、遙見二火光一、天皇詔二挾杪者一曰、直指二火處一、因指レ火往之即得レ著レ岸、天皇問二其火光處一曰何謂邑也、國人對曰是八代縣豐村、亦尋二其火一是誰人之火也、然不レ得レ主、茲知レ非二人火一、故名二其國一曰二火國一と云々。その火の主を知らねば知らぬ火の筑紫とはいへるなり。火の國とは今の肥の國の二州なり。

【匠】白縫は假字なり。

【考】筑紫に冠らするは、景行紀に云々このいはれなり。古事記上に筑紫國謂二白日別一豐國謂二豐日別一肥國謂二建日別一云々によりて、知らぬ日ならむてふ說あり。實よしあるべきことなれど、暫思ひ定めぬ事ありて紀の旨によ

るのみ。

【冊】強ひて考ふるに、白野火といふべきか。白とは御火白く燒けなどいふ白にて、明く灼き意なり。野火は春野を燒く野火なり。さて火には著くといふ縁語あれば、野火のつくといふ意に筑の言にいひかけたるか。又神代に筑紫國を白日別といひしによれば、斯良農比は筑紫の古名にて、白日別とも白與日別とも語り傳へつらんか。

【檜】白縫云々、不知火乃也。それを縫とかけるはなむと云ふに當字を書きたる類にて、古くは縫なも借に筆火と唱へし故なり。

【石】こは不知火付くと續けしなり。のは訓なり。

【愚】火の神道路の神ヘルメースを一名『シレネー』といふ。その訛りしもの是不知火なるべし。希臘のエリス國の海岸の地名にあり。景行天皇の御船のつきしはこの地點なるや明かなり。

しらはたの　源氏の大將

近松の淨瑠璃に白旗の源氏の大將とつゞけたり。旗を以て象徴せるもの。

しらはま　眞那胡國倭姫命世紀

倭姫命世紀に伊勢國白濱眞那胡國見ゆ。細かき砂をまさごとも、まなごともいへば、白濱は白砂の滿ちたる所なるより、かく頭音のまなごといふ地名へ冠らせたるなるべし。續紹にはしらはまのとして擧げたり。或は白濱といふ大字の内にある眞那胡といふ小字地にて枕詞にあらざるか。

しらまなご　御津萬十一　濱松縣居家集

萬葉十一には御津の埴生と續けたり。しらまなごは白眞砂子をいふ。御津は攝津にあり。擧居翁集には濱ゆうつゞけたり。白眞砂のあるといふ意にて濱へかけたるなるべし。『白まなごみつの埴生の色に出ていはなくのみぞ我戀らくは』

【服】眞砂はすべて濱づらなどには、少しの地もおかず滿みてあるものゆゑ、三津といふ所をいはん爲の冠辭となせり。しらまなごとは打寄する浪にて打晒されたれば、白く成りゆきたる眞砂なり。

【石】白ますなごのすを略けるなり。

しらまゆみ 今春山萬十 磯邊の山萬十一 斐太の細江萬十二 おきふしよるは古十二 心こはくも拾十四 末の御法に新續古今 入佐の山夫木 敦賀の舟路夫木 出雲の山家持集 小幡田漫吟集

萬葉十には、今春山にとも、十一には磯部の山とも、十二には斐太の細江とも連ね、古今十二にはおきふしよるはいこそねられねと續け、拾遺十四には序歌の體にて心こはくもと比したり。又新續古今に顯阿法師がよめる長歌には末の御法に生れきてとも續けたり。夫木には入佐の山とも、敦賀の舟路とも、家持集には出雲の山と續けたりと枕詞補註に載せたり。しらまゆみとは檀の白木にて作りたる弓のことにて、弓は引き張りて射るものなれば、引く張る射る等の音をもてる詞に冠らせ、又その部分には末・本・末若・末撓あれば、つる・すゑなどの音をもてる詞に冠らせたるなり。契沖の漫吟集には小幡田の里と續けたり。こは弓幡しとの義にて冠らせたるなり。

◇萬『白檀弓今春山にゆく雲のゆきや別れむ戀しきものを』 萬『白まゆみ磯部の山の常磐木なる命なれやも戀つ

つ居らむ』 萬『しらまゆみ斐太の細江の菅鳥の妹に戀ふれやいをねかねつる』 古『手もふれで月日へにける白眞弓おきふしよるはいこそねられね』 夫木『しらまゆみ敦賀の舟路夜もなほをしてひきこす波のかげかは』 家持集『しらまゆみ出雲の山のときはなる命かあやな戀つつあらむ』

【考】今春山云々、語を隔て張ると續け、礒邊の山云々、射ると續け、斐太の細江云々、弓を引くを略きてひといひかけたり。檀の木は弓にいと宜しければ、則眞弓てふ名を負ひたるなるべし。さてその木の名にま弓は負ふてあれば、歌にはま弓の弓とはす。

【摘】はじ・あづさ・さつきなどは、撓めて弓にはすなるを檀木はねばきものから、ためずに弓となれば、その弓をま弓とはいふなるべし。

【眞】白眞弓とは檀の木にて、削りたる白木の丸木弓なり。古歌などにしらま弓とよみたるはこの事なり。又流鏑馬に用ゐる白眞弓は白卷弓なり。しら卷きを略してしらまゆみといふ。白卷とは黒塗の弓に白き籐を卷きたるなり。

【詞】斐太と續くるは、吳越春秋に弓生二於彈一とあり。生はふとよみ、ふは斐と通ふ。故にしらま弓彈より生ずるといふ心をとりて續けとせるにや。

しら山の 往き見る古八　白髮縣居家集

古今八に『よそにのみ戀ひや渡らむ白山のゆき見るべくもあらぬ吾身は』とあり。加賀の白山には雪の降り積みてあれば、白山の雪といふを同音異義語の往きへうつしたり。但し越へ歸る人に送る歌なればその地方にある名山を

とり出で、且はその山の雪を見るともかかれり。縣居翁の集には白髮と同音反覆の上に比喩をもたせて續けたり。
【服】後より慕ひ行きて見るべくもなき我といふを、越國には白山の行見るべくも續けたり。かかる趣向の時にあらずは、この冠辭はすべては置きがたかるべし。

しら雪の　いちしろく萬十六　ふりはへて後八　積る思萬十四　一日も經れば拾十一　布留の中道續千

萬葉十六にいちしろくとも、後撰八にはふりはへてとも續け、同十四には積る思とも比したり。又拾遺十一には下に消えつつなほも經るかなとも、十二には一日も經ればとも、新古今一には古りにし里とも、續千載には布留の中道とも連ねたり。雪の降るといふを同音の經る、布留（大和の地名）古ると轉用し、ふるといふ語をもてるふりはへてにかけたり。ふりはへとはわざわざにといふが如し。又雪の積るを積る思に比し、その色の白きを著きと同音を重ねて調をなせり。◇萬『よなばりの軒にふりおほふ白雪のいちしろくも戀ひむあれかも』後『白雪のふりはへてこそ訪はざらめとくる便を過さざらなむ』拾『かからでもありにしものを白雪の一日もふれば佗しかりけり』續千『白雪の布留の中道なかなかに訪ふ人つらきあとぞのこれる』
【解】萬に白雪のいちしろく云々、雪の降れるはこと更に著きものなれば、かく續けたり。

しり草の　知り萬十一

萬葉十一に『湊葦にまじれる草の知草の人皆知りぬ吾が下おもひ』と同音を重ねて用ひたり。知り草は藺心草の異名。

【仙】しりくさとは鷺尻刺といふ草なり。莞に似て細く堅し。席となすべしといへり。

しれ人の　俄羅斯

柿園詠草におろしやに冠するにしれ人のを以てせり、尊王攘夷論の盛なる頃の作なれば痴人と貶していへるなり。

しろたへの　衣萬　袖萬　襷萬　袂萬　天領巾萬　紐緒萬　雲萬　波路土佐　濱のまさご後撰　幣拾　白き月拾　富士の高根新古今　ゆふつけ鳥新勅　鶴の毛衣新千載

萬葉には衣とも、衣手とも、袖とも、下衣とも、寢衣とも、天領巾とも、紐の緒とも襷とも、君が手枕とも、又雲とも雪とも連ねたり。衣は古へ栲にて作りしよりかく衣類に關繫するものに汎く冠らせ、又色の類似より雲雪にも被らせたり。古今十四には波と續け、同集卷一には袖ふりはへてとも、土佐日記には波路とも、後撰十には濱のまさごとも、拾遺二にはみてぐらとも、九には白き月をとも連ね、新古今には富士の高根とも、新勅選五には月の光とも、ゆふつけ鳥とも、同十九には濱名の橋とも、二十には雪にとも、新千載十六には鶴の毛衣とも續けたり。波にもあれ波路即海路にもあれ、白砂敷ける濱邊にまれ、若しくは月光にても雪にても幣帛にても白きものには皆冠らせて比となしたるなり。袖ふりはへとは白妙の衣を振るといふより、わざ〳〵の意なるふりはへに轉じたるなり。みてぐらとは神に捧ぐる幣帛をいふ。その色白ければ上の如く續け、又棉をつくる鳥の義にて鷄にも冠らせたるなり。◇萬『春過ぎて夏來るらし白妙の衣ほしたり天の香具山』　萬『白栲の君が下紐吾さへに今日に結ひてな逢はむ日のため』　萬『まそかがみ照るべき月を白妙の雲か隱せる天つ霧かも』　土佐『白妙の波路をとほく行きかひて我に似べきは誰ならなくに』　拾『神まつる宿の木の花白妙のみてぐらかとぞ誤またれける』

新勅『白妙の月の光におく霜をいく夜かさねて衣うつらむ』『白栲のゆふつけ鳥も思ひわび鳴くや立田の山の初霜』 新千『しろたへの鶴の毛衣きて見れば田蓑の島に鶴ぞなきける』

【考】白布(しろたへ)の衣といふより、袖はもとよりにて、襷も領巾も布もてすれば續けたり。且たへは絹布をすべていふ名なるが中に、白たへといふときは穀(ゆふ)もて織れる布をいふ。こは殊に白きものなればなり。

【摘】白き物して作れる衣と續けしなり。たへは絹布糸綿の類に渡れる大名なれば、眞の字に之に當れるかなきに由て詞を借りて白妙と書き、絹布は糸の細きをめづれば白細と書きぬ。之が一種なれば白栲・白木綿・白細布などかきてしろたへとよませたり。

【三】拾遺九に白き月をもと續けたるは、白の語を重ねたるにて香具山當と續けたると同じ。

【攷】白妙之天領巾隱。天領巾の説區々なり。まづ古説をあげて後に予が説をいはん。考に是れ大喪禮にて遊きをいふ。卷七に『秋風に吹き漂はす白雲は棚機つめの天つ領巾かも』ともありと云はれたるは代匠記の説と同じ。宣長云、白妙の天ひれがくりは葬送の旗をいふ。柩の前後左右に旗をたて持行くさまなり。これらの説心ゆかず云々。茲に天領巾隱といふはすべて、失せし人は天に上るよしにいへること集中の常にて、ここは未だ葬のほどなれども、はや失せしかば天女にとりなして、天つ領巾にかくるよしいへるにて、領巾は長も幅もゆたかなるものなれば、これを裹おほはば容も半ばは隱れぬべければ天領巾がくりとはいへるなるべし。白妙の天領巾とつづくるは枕詞に栲領巾乃白濱浪、細比禮乃鷺阪山なども續けて、この領巾てふものは白きものなれば白妙をそへさせたり。

しわかみ又しわのへの　秀眞國紀

神武紀に磯輪上秀眞國云々と見えたり。磯輪上を楫取魚彦はしわのへのと訓み、宣長はしわのほると訓み、共にほつまの國の枕詞とせり。又しわかみと四言によむあり。飯田武郷はいそわかみと訓めり。しわはいそわの約にて、うへはその位置をいふ詞と見えたり。秀眞國は我が國の古名の一、ほは優る意、つはのの義、まは美辭といへり。然れは磯に沿へる秀靈なる國と續きたるなり。

【積考】この磯輪上は四面に海廻りて磯輪の上にありといふ意なり。秀眞國の秀を保といふは古訓なり。つは助辭、眞は美辭なり。記紀萬葉等國の眞中なる國のまほろ又國のまほらといへり。呂も良も助辭にて眞秀といふなり。

【宣】國號考に磯輪上は枕詞と聞えたれども、いかにいへるにか。いと心得がたし。されど強ひていはば、しわは皺にて波をいへるか。古今集なる壬生忠岑が長歌に『立浪の浪の皺にやおほぼれむ』とよめるも、若しくはもとより浪を皺といへることのありし故にやと思はるればなり。もしさもあらば上は浪の立のぼるなり。かくいふ心は浪の立つを波の秀といへること書紀萬葉などに見えたれば、波立のぼる秀といふ意に續きたるなり。ほつま國は唯畿内の大和國をほめてかくの玉へるのみ。

【通】これはいそわと訓むべし。磯のめぐりたる地、上は土地の高き處をいふ。井上池上などの上に同じ。大日本の土地は海中に高く磯を回らし、萬國に秀て、猥りに異國の舶のよりつきがたく、いはば天險とも云べき境なるを神の見行して詔へる御詞なり。

すの部

すがすがし　菅原の朝臣蓍の木綿垂

六人部是香は菅原の朝臣に冠するにすが／＼しを以てせり。清々しと言詞をおき、且同音を疊みて調をなせり。

すがの根の　思亂れて萬四　戀萬四、十一　たゆ萬十二　長き春日萬十、拾　ながらの山續古今　長峰山夫木　長月の夜新續古今　すがなきこそ儲忠集　長阪甲信紀程

萬葉四には思ひ亂れてとも、四及十一にはねもころとも、十二には絶ゆとも續け、萬の十には長き春日とも、續古今及拾鏡には長等の山とも、夫木には長峰山とも、新續古今には長月の夜とも、拾遺の十には長き春日とも、催馬樂には菅なきこととも連ねたり。菅の根は長きもの故うららなる永き春日に喩へ、又長てふ語をもてる地名月名等に轉用し、根の入り亂れたるを人の思に逢ひ亂れたるに比し、或は根は絶つといふ語より、人の交情の絶ゆるにかけ、同音を重ねてすがなきともねもころとも連ねて調をなせり。すがなくは便なきの意、ねもころのもころは如くの意か。◇萬「おぼほしく君を相見て菅の根の長き春日を戀ひ渡るかも」「足引の山に生ひたる菅の根のねもころ見まく欲き君かも」續古今「菅の根の長等の山の峰の松吹きくる風も萬代の聲」新續古「菅の根の長月の夜のあけたてば露けさ優る秋萩の花」萬「否といはばしひむや吾兄菅の根の思亂れて戀ひつつもあらむ」

【考】こは山菅なり。糸の如き根の多く長く這ひ亂るるものなれば、長き春日とも思ひ亂れてといふ語に冠ら

せ、萬十一及十二にねもころといへるは唯根とのみ重ねつとするはこと定らず。根も凝とこそ續けたれ。山菅は和名鈔に麥門冬てふにて、集中にすげとのみよめるも多くは山菅なり

【眼】萬十二菅根のたゆとや云々。こは菅根は長きものゆゑ、集中に菅根長き云々と多くよめり。長き草の如き物なる故絶ると續けたり。而してここには菅の根に寢をかけたり。

【燈】拾遺に日は菅の根におもほえてとあるは、菅の根を頓て長きことになしてよめるなり。又後には菅の根の春の日くらしなどはたらかしてもよめり。

【黒】ねもころに二種あり。親直凝と撓直凝となり。ここは後の方にて葉の茂くしなへてよりいふ。

すがの山　すがなく萬十八

萬葉十八にすがなくと續けたり。すがなしとは心中樂まぬをいふ。同音を重ねて調をなす。菅の山は越國にあるべし。『心には思ふものからすがの山すがなくのみや戀わたりなむ』

【貂】すがなくはよすがなくの略語なり。すげなしといふは通音同義なり。菅の山出雲の國か、伊勢國須賀、河内國菅生の郷等あり。いづこなるべき。

【解】すがの音を重ねたるなり。すがなくは字鏡に嗜囉は心中不二悅樂一貌とあり。

すぎむらの　思ひすぐべき萬三

萬葉三に思ひ過ぐべきと語を隔てて續けたり。同音を反覆して調を爲す。即杉の群らといふは過ぐといはむ爲に設くるなり。◇『石上布留の山なる杉村の思ひすぐべき君にあらなくに』

すぐろくの　拾十九

拾遺十九に市場と續けたり。双六の賽には一より六までの目あれば、その目の一といふを同音異義の市場に轉じたるか。◇『すぐろくの市場に立てる人つまにあはで止みなん物にやはあらぬ』

【燭】すぐろくの目には一より六まで有り。盤の上には一はなどいふ詞あれば、それを市の庭にいひかけたり。

【紹】雙陸と書けど四五六の義なり。四五六の一とかけて市場といふ。

鈴がねの　はゆま萬十四

萬葉十四にはゆま驛と續けたり。はゆまは早馬なり。急使の往來する驛には、定めの馬ありてそがゆく時は轡などに著けたる鈴の音の鳴りゆく習なるより、驛路の光景を示さむとて枕におきたり。驛鈴の制もあれど、ここは唯馬につけたる鈴の音と見るべきか。◇『鈴が音のはゆまうまやの堤井の水を賜へな妹がたゞ手よ』

【服】鈴の音の榮るといふ語にかけて、驛路の井をよめり。又鈴の山などいへるありて、鈴の峰とよめるから思ひしに、それまでもなく、たゞ鈴の音のはゆとかけたるに、幸に驛には鈴の音よむべき理ゆゑ、鈴の音のとおけりと見ゆ。

【續考】はゆまうまやとは驛をいふ　はゆまは早馬なり、やうの反ゆなり。古驛路には鈴を賜へり。よりて鈴が音の驛とはいふなり。驛路鈴聲夜過山といふ是なり。

すがはらや　伏見の里古十八

古今雜下に菅原や伏見の里と續けたるを、富士谷氏は枕としたれど、こは大和國の生駒郡の大字と小字とにて連

ねたるものなれば枕詞にあらず。菅原は今は伏見村に屬す。

【僻】菅はいと臥し易きものなれば、しか冠らせたり。但しこれは大和の伏見の里に限れる枕詞なり。

すゞか山　伊勢後十一　成らむ六帖

後撰十一には伊勢をの蜑と續け、古今六帖には『成らむ方こそ聞かまほしけれ』と連ねたり。◇『鈴鹿山伊勢男のあまの捨衣汐なれたりと人や見るらむ』『もののふのたつといふなる鈴鹿山ならん方こそ聞かまほしけれ』六帖のは鈴の鳴るといふを行末いかに成りゆくの成りへ轉じたるにて、後撰十一のは接續の意明かならねど、名高き鈴鹿山のある伊勢といふへかかりたるか。全部の代に一部分の名を以てすることとさへあれば、著しきその一事一物をあげて次に全體の事物へ及ぼしたりと見ゆ。續貂には後撰の『越えぬてふ名をな恨みそ鈴鹿山いとゞ間近くならんとすらむ』とあるをも擧げたり。これは下のならむといふに縁あれど一首の上より見て枕詞と見るべからず。

【貂】鳴るを成るによせたり云々。古は御使にも任に下るにもその驛路の鈴をたまへり。これを鳴らすれば、行きふる所々の里人等出で迎へて提みつつ事承り御送りも仕りしなり。

【仔】友云、後撰戀三すゞか山いせをの蜑の云々、季吟いふ、鈴鹿山は伊勢男といはんとてなり。東麿いふ、一二句の續心得ず。鈴鹿川とあらば、この川は瀬の多ければ、五十瀬といふ國の名にかけたるか。

すてころも　汐なれ後十一　鹽の山甲信紀程

後撰十一に『鈴鹿山伊勢男の蜑の捨衣汐なれたりと人や見るらむ』とあるを續貂に擧げたれど枕詞にあらず。甲

信紀程にはこれに基きて甲斐の鹽山にかけて枕とせり。

【紹】鈴鹿山いせ男の蜑のつづけは昔より海邊の近かりけむ。男の蜑なれば汐なれたる衣をばかづきする時濱にぬぎ捨てや海に入りけむ。この端文に女のもとに衣をぬぎ置きたるをとりに遣したるにとあればただ褻れすぎたる衣に喩へしなり。

すみその　夕古十八　たそがれ時六帖　夕陰草草根集　鞍馬山後撰　くらぶ山義孝集　頃も榮華物語　倉賀野甲信紀程

古今の長歌には夕になればとも、古今六帖五にはたそがれ時とも連ね、草根集にはゆふかけ草、後撰十には鞍馬山とも、類聚和歌集にはくらぶの山とも甲信紀程には倉賀野に接續せしめたり。夕或は黄昏（たそがれ）はもの暗きより墨染のと比し、夕といふより轉じては夕かげ草といひ、又暗しといふよりくらの音を頭にもちて鞍馬、暗部山倉賀野と續けたるなり。鞍馬山及暗部山は山城にあり。倉賀野は甲斐にあり。この他榮華には頃もうき世と連ねたり。こは墨染の衣といふに頃もと兼ねしめたり。◇六帖『墨染のたそがれ時の朧夜にありこし君にさやにあひ見つ』後『すみ染の鞍馬の山に入る人はたどる〳〵ぞ歸り來ななん』草根『すみぞめの夕陰草の色もなし光にてらす花のこのもと』義孝集『墨染の暗部の山の深ければ鳥のあとさへ見えずも有かな』

すみの江の　松古十五　來し後、拾

古今十五には待つは苦しきとも、待つほど久さにとも連ね、後撰十五には岸といふに來しを兼ね、拾遺十には來しもせざらむと續けたり。攝津の住吉は古より歌枕に入りたる地にて、そこの岸邊に生ひ並ずる松は代々數によ

まれたれば、住吉の岸又松といふより、同音異義の來し又待つと轉用せるなり。◇『久しくもなりにけるかな住吉のまつは苦しきものにぞありける』―『住の江のきしもせざらん物ゆゑにねたくや人を待つといはれむ』

【眼】住の江の松は、何れの歌にも久しくよめり。爰に久しく戀ふるが苦しきてふ心を、松もてその逢はん時をまつてふ事にかねて、住の江とは冠らせたり。

【謬】拾遺に『住の江のきしもせざらん物ゆゑに』云々。來もせざるにて、しものしは助語なるを岸にかけ、松を待つによせ、根を寢くにとりなしたり。住吉はすみの江とよむべきが古言なること、先學のいはれたり。古事記に墨江と書す、住墨ともに假訓、萬葉に清江と書きたるがあり、正訓なるべし。和名抄に住吉とかきてすみよしとよめるが誤の始なり。

すみわたる　水戸の社

六人部是香の鶯の木綿垂にはすみわたる水戸の社と續けたり。水の澄みわたるといふ義をうつして水戸にかけたり。

せの部

せみの羽の　ひとへにうすき古十九　夜の衣古十七

古今に蟬の羽の如くうすきと比したり。◇「蟬の羽のひとへにうすき夏衣なればふりなむものにやはあらぬ」又古今十七の「蟬の羽の夜の衣はうすけれどうつり香こくも匂ひぬるかな」の歌を服部高保の續冠辭考に擧げて、これもうすきに掛るとせり。但しこれば蟬の羽のよりうすきには直接に懸らず。蟬の羽の如き夜の衣といひ下して、うすきはそれを説明したりと見るべし。

【服】古今集卷十七に云々、こは夜の衣はといふ七言を隔てうすけれどてふ語へかかれる冠辭なり。蟬の羽のよ冠辭せるも時のものをもて詠めるならむ。これはよると續くる冠辭ならねば今も詠まむにもうすきと續くべし。

【貂】ひとへにうすき云々、羅衣のひとへなるは綵のよりて破れまよふなり。それを相なれなば我より頼むべきに云ふなり。

その部

そじしの　むな國紀

紀に空國に續けたり。そは背の義、ししは肉の古言、人の脊の肉の少きが如くと不毛の國を喩へたるなり。

【參】脊宍也。脊上無レ肉、故稱ニ空國一、曰ニ脊肉(そし)一也、空國則不毛之地。

そに鳥の　青き御衣紀　青葉がくれ巖足集

紀上に青きみけしと續けたり。みけしとは御衣をいふ。そに鳥は翡鳥とも魚虎鳥とも書きて、羽毛の青き小鳥なれば、その如しと比したるなり。和田巖足集には青葉がくれと續たり。

【服】日本紀私記云、鴗（曾爾）爾雅集註、色青翠而食レ魚云々、或翡翠也ともいふ。然らは鳥の色の青きによりて冠らしめ給へり。

そめゆふの　染めし心萬十一

萬葉十一に染めし心と同音を重ねむ爲に置けり。ゆふは木棉と書きて古代の布、その色白ければ染めて用ふ。

◇『肥人のひたひ髮ゆふそめゆふの染めにし心我忘れめや』

そらかぞふ　大津の子萬二　大内山蓬廬集　大まつりごと蓬廬集

萬葉二に天數、大津の子とあり。天數を通常そらかぞふと訓みて、大津の枕詞とせり。空に數ふるものは、精密にあらで、大凡なるものといふより、大津の子に冠らせりといへり。蓬廬集には大内山又大まつりごとに連ねた

り。天數とあるを石上枕詞例にはあまかぞふと訓み、枕詞解にはさゝなみのゝ誤とし、萬葉檜爪にはそのまゝさなみと訓むべしとせり。但し徳川時代の人はそらかぞふとして用ひたり。

【考】物をさだかにせで、凡にそら量りをするを、そら數へといふを以て、大津の大を凡の意にとりなして冠らせたり。

【檜】天數、これをそらかぞふと訓て一つの枕詞としたれど、この歌の外に一首も例なきは覺束なし。按に佛說の天數にて兜率の三十三天を思へるなるべし。さらば三三並ぶ意にて、三三並とよまする義訓とすべし。

【解】こは天は左々或は樂かの誤にて、樂數とありしにや。考の說は甚じき誤なり。そは古くはそらといふ言は蒼天をのみいふことにて、今そら誦そら言などいふ類のそらは、むなとのみいひしなり。

【石】空に數ふといふ義にて、細かに測りがたきをいふ。おほは大なり。大數は算り知りかたき故に凡をいひ凡を知るべし。よて大津の子と比したり。つは算ふるの義なり。

【黑】古訓のままにあまかぞふとよむべし。大計なり。

そらみつ又空にみつ　倭紀、萬

仁德紀を始として、萬葉一、五、十三、十九等に倭又は倭國に冠らせたり。もとそらみつと四言なりしを人麿に至りそらにみつと五言に改めたり。さて接續の意明かならず。日本紀撰修時代には神武紀に見えたる如く饒速日命が天の磐船に乘りて大空を翔りゆき、この鄕を見て下られしにより船より見たる倭と考へられたり。古義にはそれに基き、そらみつは虛御津にて御船の泊りと釋し、守部は登高山とつゞけしといへり。攝河平原より東の空

を望んで連峰の高く聳立するをいひたるか、或は古き地名なるか後勘をまつ。

【匠】大和と續けり、空に見つと云ふも同じ。(榮葉燭明の說と同じ)集中一の雄略の御歌と十九の孝謙のはこの邦の總名に置かせ給へり。大和もと別名なり。これを總名とすれば、別を以て總に被らしむること然るべきなり。

【書】そらみつの義神武紀を引くも解けがたし。ここは天に地中を求めて磐石の國を置くてふことなり。磐船は蓋し月といふなるべし。

【解】そらみつは虚御津なり。みは美稱にて眞津といはむが如し。かくいふ所由は、まづ彼の饒速日命の天磐船に乘らして、大虚を榜ぎ翔らしし時、遂にこのやまとの國を見し給ひて天降りて、その磐船を泊て給ひし津なるよしにて、かくいふなり。舊說の如くならむには、空從見しとこそいふべきなれ。

【稜言】こはそそり滿つ山跡國なり。天に聳ゆる義なり。

【石】古說の如くならむには、空ゆ見つといふべし。そらみつといひて、空より見ゆることに爭でか聞ゆべき。この枕いつも四言なるに人丸の歌に天に滿つと、に文字を添へたるより考ふれば、空に滿る山といふ義なるべし。

【鷹】そらにみつとは羅典語、日光過多を意味せるソルニミスなり。天空より見ると云ふが如き在來の說明は全然誤謬なり。又そらみつよりもそらに見つを以て正しとなす。

【豐】大和は青山四周の地にして山々が屏を立てたる如く、四方の空にみちたれば、空にみつる山々と續けたるなるべし。山戸といふ語は川戸、水戸、島戸などに對せりと覺ゆ。

たの部

たかくらの 御笠の山萬三

萬葉三の長歌に御笠の山に冠らせたり。高座(くら)とは玉座をいふ。その上には錦の御蓋のつるされてあれば、これを假りて奈良の山名にかけたり。「高くらのみかさの山に鳴く鳥のやめば繼がるる戀もするかも」

【燭】天子御位に即かせ給ふ御座を高御座といふ。その上には天蓋のかかれるによりて高座の御かさと續けたるなり。亦大君のみかさの山とも詠めり。

【匠】御即位の時と蕃客朝拜の時と正月元日とに、大極殿に高御座を裝りその上に華蓋をかけて諸臣の拜謁を承て仰がれさせ給ふ。故にこのつゞきどもはあるなり。

【一言】考に云々、又或人いふ。高御座に蓋あることを知らず。唯地名をいひならべたるにや。

たかさごの 待つ後十二　尾上後、古

後撰にまつといひつつと續けたり。「高砂のまつといひつつ年をへて變らぬ色を我はたのまむ」播磨の高砂の松は古くより名高ければ、松に待つを兼ねさせたり。戀の歌ながら、實は松の常盤の色を頼むが如く、縁語にて一首を調べたり。此の如き類三代集時代の枕詞には例多し。又古今十七を始め代々の集に高砂の尾の上とも續けたるもの極めて多し。播磨印南郡高砂港の附近に尾上松林あり。高砂の尾上といふのは大字小字の關係により

て連ねたりしを、足引の山に於けるが如く後にはいづこの嶺にも尾にも冠らしたるに至れり。

【任】高砂のは友云、これは枕詞にあらぬか。後撰春中、素性『山守は云はゞいはなむ。高砂の尾上の櫻折りてかざさん』。奧義抄にこれは播磨國の高砂にはあらず。山の一名をたかさごといふなり。尾の上とは山の尾の上といふなり。此歌の山にて詠める歌ありと。標註新抄云、地名にあらず。たゞ山のことなり。高いさごの略りたるにて、舊說に山の總名なりといへる宜し。尾とは山のさきのなだらかに下る方をいふ。即峯のことにもいへり。

たかしるや　天の御陰萬一

萬葉に高知るや天の御蔭、天知るや日の御蔭云々。こは天の高く地は低く各司る所あれば、天の賞詞の如くに置きたり。魚彥の續冠辭考に採りたり。

【續考】天は高くして國を蔽ふを高知るや天のみかげとは云ふなり。

高　鞆　の　巴が岳柿園詠草

加納諸平の柿園詠草には巴が岳に冠するに高鞆のを以てせり。巴が岳は紀伊にあり。大台原山のつゞきなり。巴は鞆にかきたる繪なるよりこれを連ね且は同音を重ねて詞とせり。

たかひかる又たかてらす　日の御子紀、萬一、二、三、　日の御門萬五　日の宮人紀

景行紀には日の御子とも雄略紀には日の宮人とも、萬葉二には我が日の御子とも、同五には日の御門とも連ねたり。高光、高照兩樣に書きたるを契沖を始め高照の方はたかてらすと訓する說あり。天上高く光る日といふより、我が天皇、皇子は日神の御裔なれば、日の御子と續け、又日の朝庭にも掛け、後には朝廷に奉仕する宮人にも被

らせたり。◇萬「高光る我日のみこの萬代に國しらさまし島の宮はも」

【考】こは天高く光る日といふ意に續けて天皇を申すめり。日神の御嗣になれば、後にも日のみこ、日の御孫など申して、その御坐します所をも日の宮、日の御門などいへり。

【貂】前篇（考をさす）に古事記美夜須媛又雄略の御歌にも多加比迦流・比能美古と假名書せしを所謂として萬葉集中に高照・高光・高輝と書きたるを悉くたかひかると訓むべくいはれたり。思ふにこは今本の、點のままに、たかてらすとよむが古言なるべきか。天照大神と申す大名は、天に高くましまして、下津國を照しませるといふ義なれば、その御裔をも高てらす日の御子と申し奉るべきものぞ。高照らすは天照らすといふに同じく、照徹六合といふ語を、くぬちてらすとよみ、躑躅の花の色を出てらすといふも、その光艶を物に及ぼす用語なり。光る神、鳴はた少女、ともし火の光などは、その光艶の徳をいひたるにあらず。光るは行ひ及ぼす德、照らすは物に及ぼす德澤と心得べく思ふはいかに。

【解】本居氏いふ。高は天、光るは照ると同じければ高光るは天照るといふが如し。

【石】たかのたは天なり。かは地なり。地をも天をも照す日のみことたたへしにて、枕詞にあらず。

たかみくら　天つ日嗣萬十八

萬葉十八の長歌に天つ日嗣に知らせたり。高御座に王座をいふ。天つ日嗣即ち天皇のおはします御座なれば、擁緣の語を置きて、修飾とす。

たがみそぎ　木綿付鳥古十三　夕浪萬葉二　白ゆふ浪萬葉古今

古今雜下及大和物語にはゆふつけ鳥に冠らせ、新續古今には白ゆふ浪の立田川とも、新葉三には夕浪かけてと云ひ下したり。◇古『誰がみそぎゆふつけ鳥がから衣立田の山にをりはへて鳴く』新葉『たかみそぎゆふ浪かけて川の瀨の麻の葉ながし風ぞ涼しき』新續古今『たかみそぎ白ゆふ浪の立田川曉かけて通ふ秋風』古へ六月の末、淸き河瀨に至りて身を淸めて罪を祓ふ習俗あり。これをみそぎといふ。御禊祓には神の前に木綿を榊の枝などに付く。又雞に白木綿をつけて放つ神事あり。隨つて雞をゆふつけ鳥ともいふ。この鳥をいはんとて誰が身滌ぎかと掛けたるなり。後にはこれに基きゆふの音をもてる夕浪と轉じて用ひたり。

【袖】ゆふつけ鳥とは雞をいふなり。世の中騷しき時四境の祭りとて公のせさせ給ふに、雞に木綿つけて四方の關に至りてまつるなり。

【服】こは身そぎ祓などの神祭には、木綿を用ふるものなれば、ゆふ付鳥をいはん爲に身祓とは云ひ出でたり云々。『戀々てまれに今宵ぞ逢阪のゆふつけ鳥に鳴かずも有らなん』といふ歌によりて雞のこととするはよからず。かの都鳥などの名の如く、時に臨みて何鳥をもさしていふ付鳥といへるものなるべし。

たかゆくや　隼別命記

記に隼別命と續けたり。空高く飛ぶ隼といふを轉じて人名に冠らしめたり。又同書に高往鵠の音とあるは疑なく井手の玉川などに於ける如く、全くの形容詞句にて枕詞と見ざるをよしとす。

【考】すべての鳥にも高ゆくとはいふべけれど、鷹は深き山より出で來るに、天に沿ひて木葉の一つ飛ぶらんやうに見ゆるものなれば、特に高ゆくといふべく、これをたかと名づけしもさる意にや。和名抄鶚（八夜布佐）鷹屬

なりと。

【續考】古事記中卷に聞二高往鵠之音一云々、字鏡云久久比、和名同じ。高往くは飛ぶをいふ。

たきぎこる又**たきゞきり**　鎌倉萬十四　ほと／＼しく萬七

萬葉十四に鎌倉山に冠らせたり。「たき木こる鎌倉山の木たる木をつまと汝がいはゞ戀ひつゝやあらむ」こは薪を樵る鎌といふを轉じて地名にかけたり。同書卷七旋頭歌「みぬさとる神のはふりがいはふ杉原、燎木伐りほとほとしくも手斧取られぬ」とあるを服部高保は冠辭とし、ほと／＼しくに掛るとせり。ほと／＼しくは殆めて危しとの古言。斧の伐木の音をかけたりといふ。

【仙】こるといひ刈るといふは同じことなり。鎌といはん爲めの諷詞なり。

【服】萬葉七のは、祝部等が齋きまつる杉原なれば、神木なり。樵夫畏みて斧も打がたきといふ謂に、燎木伐と冠辭となせり。ほとほとと續けしは斧打音をかねたり。殆は或は何はかくやあらむと胸打騒ぐといふ意の事なり。右の歌は貴き人などを戀ふるに喩へてよめり。

瀧つ瀬の　早き心古十三　早く後拾遺

古今に早き心と比し、後拾遺にも早くと續けたり。◇「瀧つ瀬の早き心を何しかも人目つゝみのせきとむらむ」この時代の風として、人目つゝみのせき止むらむなど下に縁語を用ふる風多し。

瀧の水　かへりてすまば拾遺十九

拾遺集に操りて住まばと續けたり。一たび出でにし男の、再女の許に歸り住まばといふを、瀧の前にある風を見

て、その水の赤ちかへり下も濁らで澄むを住むにいひかけたり。◇「瀧の水かへりてすまばいなり山七日のぼれるしるしなるらむ」

【冠】瀧の水の流かへりて流るれど、軈て澄むを、歸りて住むといひて、出で往にし男の、又女の許に來て住む事にいひかけたり。

たくづぬの　白き腕(たゞむき)記上　白鬚萬二十　新羅國萬三　長き命萬二

記上には白きたゞむきと續け、萬葉二には長き命とも、同三には新羅國とも、二十には白鬚とも連ねたり。たくとは古の布にて、栲の字をあつべし。その色白ければ、腕(たゞむき)の白きに比し或は老人の白鬚に喩へ、又しらの音をもてる國名にも掛けつ。又海人の用ふる栲にて作れる綱は極めて長ければ、人の長命にたとへたり。綱をつぬといふは古言なり。

【僻】たへともたくとも云ふは共に物を裹むる詞にとりて白きを志していへる詞なり。

【音】たくづぬの白鬚。たくづのはたくひれといふに同じ。ひれは頭にかくるものなれば角ともいふ。たくは白きといふ詞なればしらひげと續けたり。

【考】たくは栲にて、つぬは綱なるを、音便にてつぬといへり。さて白き物なれば、白き肯白鬚といひ新羅とも續けたり。

【石】栲紲の紲は綱なり。

【黒】たくづぬは栲つ布にて、たくつにの義か。

たく繩の　長き萬、後撰　千尋繩、萬

萬葉四には長き命と比し、同五には千尋にとも又後撰九には長き心とも續けたり。栲にて綯へる繩の如く長くといふ意にて人の命の長きに譬ふ。◇萬「水泡なすもろき命もたく繩の千尋にもがとねがひ暮しつ」

【考】萬葉二に栲繩の長き命を云々。こは栲の絲してなへる繩をいふ。長きと續くは常のことなり。記にも栲繩之千尋繩打延爲釣海人之云々。紀にも千尋栲繩と書けり。

【石】たくなはは手繰り繩のりを省きたるなり。

たくひれの　懸け萬三　白濱萬十一　鷺阪山萬九

萬葉三に懸けまくとも、九には鷺坂山とも十一には白濱波のと連ねたり。九のは細比禮と記したるより、長流はほそひれと訓みたれど、考の說の如くたくひれとよむべし。たくは栲にてその色白ければ、白きものに喩へ、轉じて白濱とも續け、鷺の色白きより、鷺坂山ともかけたり。領巾は古婦人の頸にかけし布帛なり。よりて心に掛け、口にかけなどと用ふ。◇「たくひれの掛けまく欲しき妹が名をこの背の山にかけばいかにか」「たくひれの鷺阪山の白つつじ吾に匂はね妹に示さむ」

【仙】鷺の頭には長き毛の立あがりたるがあれば鷺といはん爲の諷詞にたくひれのと設けり。

【燭】ほそひれのは鷺坂山と續けたり。こは白鷺の頭に細き毛の長きが後に垂れ下れる、女の領巾といふものに似たれば、細ひれの鷺といふ心なり。この細領巾をたくひれともよめり。その時は白きひれといふ意なり。

【考】栲にてせし領巾は白ければ白濱とも續けたり。ひれは和名抄に領巾（日本紀私記云比禮）婦人項上飾也と

いひ、萬葉の織女の天つひれ、佐用姫がひれふるふ、式の祝詞にひれ懸くる伴緒などいへる皆同じ。又頸に懸くるものなれば、かけと續け、卷九に細比禮乃鷺坂山云々こは仙覺が本にたくひれと訓みしは、集中に栲布を書きて栲とのみ書きたる有るを、即たへとよみたり。且そのたへはたくに同じ物なるを意を得てよめるなり。

【尾】曾丹集には鷺坂岡とも續けたり云々。

【黑】たくひれのたくは照明又美明より轉じたるなり。

たくぶすま

新羅紀、萬十五　新羅の岬出雲風土記　白山風萬十四　白子の浦鈴屋集　白川の渡同　白栗毛蓬廬集

仲哀紀出雲風土記及萬葉十五には新羅と續け、萬の十四には白山風と連ねたり。栲にて作りたる衾は色白ければ、しらといふ音をもてる語に冠らせたり。本居宣長の長歌には白子の浦とも白川の渡ともかけ、蓬廬集には白栗毛ともつづけたり。◇『たくぶすま新羅へいます君が目をけふか明日かといはひてまたむ』『たくぶすま白山風のねなへどもころがおそきのあろこそえしも』

【考】栲布の衾の白きと續けたり。栲は木棉なる故に集中にしろたへといふ所に白栲と書けるもあり。且古事記にたくぶすま、さやぐが下云々。栲布の衾は爽やかなれば、さやぐが下とは詠み給へるなるべし。

【信】栲布の衾の白きといふ意にかかる發語なる由いへれど、然らば栲の穗とか、栲づぬとか云ひて事足りなむを、衾としも云へるは無益の言にあらずや。故、考ふるにしらとは領の字の意にて、萬葉卷の十六に商變領爲跡御法有者許曾云々。卷十に吾衣君に著せよと霍公鳥吾乎領袖備來居つつ。この領字を書けるを以て思ふに、新羅

へ續けたるは、領着の意なるべし。又卷十四にたくぶすま白山風のねなへども云々とあるは、栲衾は領着き寢されどもの意なるべし。

【解】出雲風土記にも意宇郡の條にたくぶすましらぎの岬云々とあり。

【石】栲衾の如く白と續けたり。又さやぐが下と見えたるは栲、衾の音の上を宣へりと聞ゆれば、枕詞にあらず。

竹川の 世々 順集

順の集に世々と續けたり。竹の節間をよといふよりこれを世々にかけて連ねたり。◇「神代より色もかはらで竹河の世々をば君にかぞへわたらん」

【紹】順集に神代より色もかはらで、竹河の云々。これも神樂の謡物なること、端文に見えたり。竹の節々とかけて數へ渡らむと言ほぎせしなり。

竹の子の うきふし 古十八

古今雜にうきふし繁きと連ねたり。竹には節多きものなれば、憂きこと多き意に續けたるなり。且端がきによれば、筍といふ中に子はといふ意をも利かせたり。◇「今さらに何をか思はん竹の子のうきふし繁き身とは知らずや」

【紹】幼き子の物思ひ氣なきを見るにも、今更にとは云へり。竹の子といふより、節の繁きをかけしなり。

たけまなす 人に厭はえ

六人部是香の篶の木綿垂に驛馬(たけま)なす人に厭はえと續けたり。厭はえは厭はれの古語。驛馬の如く人に嫌はるゝ比したるなり。

たしみ竹　世の遠人書紀集

書紀集にはたしみ竹世の遠人と續けたり。たしみ竹は古事記に見えたる語にて立ち繁み竹の義、竹の節と節との間をよといへば、これを世に轉じて用ひたるなり。

ただずまひ　往箕の里萬十一

往箕の里云々たもとほりの條を見よ。

たゝなづく　青垣山記、萬十二　柔肌萬二

記中及萬葉十二には青垣山とも、同六には青垣こもりと連ね、同二の長歌には柔肌と續けたり。柔肌を考にはやわはだと訓みたり。鹿持氏はにぎはだと訓めり。今考に隨ふ。◇萬『たたなづく青垣山のへだつればしば〳〵君をことどはぬかも』たゝなづくはたたなはりつくにて、山の蜿蜒たる形勢をもたたなはるといへば、樹木の生ひ茂りて疊席の如き山を形容するに、たたなづくと冠らす。又人の肥えて柔かなる膚は山のうねうねとしたるが如き狀なれば、これにも冠らせたり。このたたなづくのつくに膠附の義とする說と委附の說とあり。又黑川眞賴の如く美しと懷かしくとするあり。今委附の說による。

【燭】たたなはりつくといふ心なり。青垣山は青山の垣の如く、幾重にもたたなはりてあるをいふ。私云、萬事記に三室の山を青垣三室山といへり。これは三室の山の名か。

【匠】たたなはりつくにて委るといふに同じ。疊有と書ければ衣の襞などの疊まれたる如く、山の重れるをいふ。

【考】疊り著く山てふなるべし。前には古事記に、あをによし、奈良を過ぎ、をたて山大和を過ぎとあるは、山

を小楯といふ意の外なし。されば今も山は國護る藩屏ぞとて、青垣山といへば、その垣も楯のことわり同じき故に、楯の名附くてふ辭を冠らせしならんと覺え、神樂歌に四方山の守に賴む梓弓てふを引きしは用ひず。又やわ肌と續けたるは、柔らかなる單衣などの、身に親しく疊り付くを妹が肌に譬へたらむと覺ゆ。

【傳】たたなづくはたたなはりなづくの意にて、たたなはりは契沖、禮記に主佩垂則臣佩委と云を引たり。此委(たゝなはる)の意なり。つくを唯に附くと心得てたたなはり附くなりと云る説はこと足らず。又楯名著、楯並附など云る説も皆わろし。

【石】たたは平々なり當々なり、疊をたたみ、戰をたたかひと號けしたたに同じ。たたみは平かに納り止るといふ義戰は當々衆合といふ義なるを、きあをかと約めたるなり。なつくは並付なり。みを略きてたたなつくといへり。柔肌は女の膚をいふ。身體いづこも柔なる肌といはんとて、たたなづくと枕に云へるなり。青垣山とは春より夏へかけて綠なる山の形勢なり。

【黒】たたなづくのたたは美しきをいふ。なづくは備る意滿足の意もあれどここは好點なり。親愛せらるるなり。俗になづこい又ねづこいなど思ふべし。即ち美々しきを親愛するなり。

たゝなはる　青垣山萬一

萬葉一に青垣山に冠らせたり。青垣山は青く茂りて垣の如くめぐれる山を指す。ここはただの形容詞句なるべし。

【考】こは疊有とさへ書きたれば、今本の如く、たたなはると訓みてはよく疊る山の意とすべけれど、この一首のみにて、他皆多多なつくとあるからは、この疊は正字とし、有は付を誤れるものとす。

【右】こはたたなみ張るといふ義なるを、みを略きていへるなり。枕詞といひがたし。

たゝなめて　伊那佐の山紀　泉の川萬十七

神武紀には伊那佐の山と連ね、萬葉十七には泉の川と續けたり。燭明にはたてなべてと擧げたれど今考の説により改めたり。楯を並べて射るといふより、いの音を頭にもてる地名に云かけたり。伊那佐山は宣長は大和の墨阪の別名ならんといひ、大和志には宇佐郡内牧村の山路山を以てこれに充つ、泉川は山背川の一名、相樂郡にあり。

【燭】日本紀に崇神天皇の軍兵、武埴安彦が軍と、この川を隔てて戰を挑む。この川の名もとは輪韓川、それよりいどみ河と名づく。泉川といふは訛なりと云々（采葉抄の説に因る）たたなべては楯並と書けり。楯を並べて挑むの心なり。

【序】たたなめてに二つの意あるべし。一つには軍のことなれば、只楯をつき並べて戰へばと宣へるか。二つにはその意ながら、次の句の初のいを射になして、まづ楯の衝て敵の矢に當らぬやうに身を守て後を弓を射る意につゞけさせ給へるか。

【考】敵の矢を防ぐ料に楯を並立てて、且此方よりも弓射れば、射と一言に續けたるなるべし。伊奈佐は大和城上郡に、伊豆美乃川は山城相樂郡にあり。

【辨】直馴れ付くの意なり。

【右】考にいへる然ることなり。たたはたてあの約、たて驪し並べて射るといふ義なり。

【黑】整列ていゆきまもらひと續くにて冠辭にはあらず。又たたなめて挑むとかけたるにて、此の方は冠辭にな

していひかけなり。

たゝみけめ　むらじか磯萬二十

萬二十に『たたみけめむらじか磯のはなりその母を離れて往くが悲しさ』とあり。たたみけめは當時の關東方言にて、たたみごもの訛、接續に關しては次の條を參照せよ。

たゝみごも　平群の山記、紀　むらじか磯萬二十　戸田の干潟柿園詠草

景行記雄略記景行紀に平群の山に冠らせ、萬葉二十にはたたみけめ、むらじが磯と續けたり。眞淵は疊編むものにて、隨つてそを數ふるに一重三重などいふより、への一音と所縁とし大和の平群山に續け、又疊を數ふるに一枚を一むら二枚を二むらともいひ馴れたれば、駿河の群司が磯に冠らせたるなり。柿園詠草には戸田の干潟とへの音より轉じて續けたり。平群の語原につき吉田氏の地名辭書には小川氏の說をあげ重快の意なるべし云々と見ゆ。大和生駒郡にあり。

【燭】薦を編むには一符二符とあむなり。陸奧に十符の菅薦とよめるは、十符に編める薦なり。その符を一符づつ隔てて編めば平群の山と續けたるなり。萬葉十一に『疊薦隔てあむかず通ひせば』云々、薦を編むに薦槌といふものに絲を卷きて取りちがへ取りちがへして編むなり。その行かへりの隙なき如くに通はばの意なり。

【匠】への一文字にかかる。疊をしいて板敷簀子などを隔つる意なり。

【考】疊にせん料の薦を編むを隔つといひて、への一言に續けたるなり。又駿河國防人が歌にむらじか磯と續けたるはあむを略きてむと續けつと見えたり。

【傳】疊薦は帶に係れる枕詞なり。然續くる由は疊みたる薦重といへるなり。疊とは重ぬることにて薦を重ねて幾重もある意に重と云へり。

【宣】卷きたるものを一むら二むらといふは古語なり。こもは卷くものなれば、然か續く。

【解】考にあむを略きてむと續けつと見えたり。といひへるは、詞の主と體との差を辨へぬなるべし。從ふにむらじへかかれるは、宗徒(むらと)といふ意なるべし。むらとは親しく通へり。さて疊薦は室に敷くものなれば、かく續けたるらむ。

【石】薦は群れて生ふるものなればむらじと續けたり。

【黒】むらじとかかるは群すなるべし。むらすは多くの薦をあつまらしむるなり。厚く織るをむらすといふべし。むしろといふも茂好なり。

たちごもの　立ちのさわぎ萬二十

萬葉二十に「たちごもの立の騒ぎに相見えし妹か心は忘れせぬかも」と連ねたり。たちごもは防壁(たつごも)なりといふ説もあれど、東歌なれば立ち鴨の訛ならむ。飛び去る鴨の如く、旅出せむとていろいろ騒ぐをいふ。されば一方よりいへば相比したるものにて他方よりいへばたつといふ音を反復して調としたるなるべし。

【解】たちごもは立鴨のなるを東調にかく云へるなり、

【石】立薦は壁に添へて立つる薦なり。

たちそばの　すなけく記

神武天皇の御製に肉(み)のすなけくと連ねさせたり。立そばとは立抓稜の木にて、實の少きより肉の少きにかけさせたるなり。和名抄抓稜木又四方木含波桑、たちは植わりたるなり。

たちのしり　入野萬七　玉まく田井萬十

萬葉七に鞘にいり野と續け、同十には玉まく田井と連ねたり。劍の鋒の鞘に入るといふを轉じて、山城の入野といふへ懸けたり。唐衣ぬふ針川、古衣き奈良の里といふが如し。玉まく田井と續けたるは、古劍の拵鞘には玉を卷きて飾りとなせるより、斯く續けたりと聞ゆれども、玉といふを隔てて纏田といふ地名へかくるなるか。或は地名にあらずして穀種(たね)を蒔く田といふ意なるか明かならず。◇『たちのしり鞘に入野に葛ひく吾妹。眞袖もてきせてむとかも夏葛ひくも』『たちのしり玉まく田井にいつまでか妹を相見ず家に戀ひをらむ』

【考】七のは劍の先の鞘に入りといひかけたり。入野(いりの)は延喜神名式に山城國乙訓郡入野神社と有るに同じ所にて、かの入野の薄と詠めるもここなるべし。卷十のはたちのしりは鞘尻をいふ（上の歌は劍の身のさきをしりといふ）さてその鞘尻に玉を纏き飾るゆゑに、纏田居てふ地に玉まくといひかけたるなり。纏田居てふ地に玉まくといひ下すは舊衣著楢の里、我妹子を聞つが野邊など續けし類なり。凡まきたとも、まくたともいふ地多し。神武紀の頬枕田は磯城郡なり。上總の望陀郡も本は馬來田なり。この外にもあり。

【解】七のは劍を鞘に納るには鋒の方より入ればかく續けたり。十のはまづ玉まく田居とは稲種を蒔て田といふなるべし。さて劍後は鞘後にて、そのさやの後に、古は玉を蒔きかざりし故に、玉まく田といひ懸けしなり。

【黒】太刀の後は鞘なる故にかくいひたり。入るまではかからず。玉まきは玉眞置か。然らば玉を纏けしなり。

糸をまきたるなるべし。

たちはきの　手節の崎萬

くしろつく手節とあるを古訓に誤れるなり。

【僻】たは詞の上の助、ふしは物のふしといふことばなり。もののふは帶劍の器なればたちはきのたふしと續けたり。

たちばなの　三依の里萬二十　たち馴れし新拾遺　もりもの蜻蛉日記

萬葉二十に三依の里に、新拾遺の三にはたち馴れしに續けたり。◇『たちばなの三えりの里に父をおきて道の長路はゆきがてぬかも』『心には近きまもりの立花のたちなれし世ぞ遠ざかりゆく』この他萬葉十を始めその他にも蔭踏む道と續けたるを、石上には枕詞としたれど、そは誤なるべし。三依と續けたるは橘の實といふより、みを頭にもてる地名に轉じたるか、或は橘の實吉といふ意か、いづれかその一つならむ。もし三依里は橘といふ大里の中に屬する小部落の名とせば枕詞にあらず。下野にも三依といふ地名あり。三依は何を意味するか知らず。たち馴れしと連ねたるは同音を打重ねて調を爲したるなり。蜻蛉日記の立花のもりものと續けたるは橘を人の傷はぬ爲とて守りの人を定め置かれたるより、人が氣を付くるの意にて、貴き人若しくは才德優れたる人は、下の人々に守らるるが常なればなり。さて橘のと續けたるは、橘は古人の甚賞美せし植物にて他人の盜みもし又は傷ひもせんことを恐れ、守る人を定め置かれたるより、橘の如く守るものと比したるなり。尙たちばなの條を參照せよ。

【管】たち花のみえりの里。橘の實をゑるといふ心にいひかけたり。

たちばなを 守部の里萬十

萬葉十に「橘を守部の五十戸の門田早稻刈る時すぎぬ來じとすらしも」とありて、守部の里にかけたり。橘は昔の人のめでし菓にて人に盜まれ易きものゆゑ、守部を置きて守らしめたるより、かく連ねたり。五十戸とあるを冠辭考にはいへと訓したれどさとと訓むべし。

【考】萬十に橘乎守部乃五十戸之、門田早稻云々。こは守部氏なるものの門田といふに、橘守てふ氏もあるをもて語を延べてかくは冠らせつらん。さて守部連は河内の神別にて（姓氏錄）守部王といふもあり。（續日本紀）橘守は左京の諸蕃にてかの但馬日楢杵が孫、多遲麻毛理が常世の非時香菓を持ち來りしより、その裔子は橘守を氏とせしなり。紀にこの木のみを釋て、今謂橘是也とあるに依るに、そのもて來し人の名をもて、多治麻名とは後に呼びしなりけり。さればたぢばなはたぢま名なれば、橘守と書ける氏も、たぢまもりと訓むべきなり。橘を今も上總人南部人はちを濁りていへり。古はさ唱へけんかし。五十戸を里と讀まんにやと思へども、いへといふも謂しからねば、今は守部の家の門田早稻とよむ。

【續考】美衣利の里云々、こは橘の實とかかるのみなるべし。木の實多きが中に、上古愛でありし木の實は橘なればこれを取り出づ。

【解】橘實は人の盜み易きものなれば、守部をおきて守らするよしにて續けたるなるべし。三代實錄の五十戸にから橘を守るもの二人を置けること見えたり。守部の五十戸と書きたるは守部といふ里なるべし。そは戸令に凡

五十戸をもて里となすと見えたればなり。

【古】橘のかげふご原とも橘をもりべの里とも續けたり。こは橘にかげ橘といふものあり。よりて陰踏むと續けたり。植ゑならべたる橘の陰踏むとにては、枕にはならじ。橘を守部の家と續くるは橘を守るといふ義なればなを襲ひていへり。

【釋】橘を守ると言ひかけたり。守部とは橘を守る群にていふことなるべし。然らば冠辭といふべからず。美衣羽の里とかかれるは橘の實とかかるか又實れとかかれるかなるべし。

たちまさる　八雲の教

富士谷成章家集に八雲の道に冠らするにたちまさるを以てせり。八雲の道とは素盞嗚尊の神詠により和歌の道を指す。八雲といはんが爲に雲の立ちまさるといひしなり。

たぢま絲の　よれども逢はぬ　六帖

古今六帖に『但馬糸のよれどもあはぬ間をば何のたたりにつけてはたへん』とあり。但馬よりは古へより生絲を產したれば但馬絲といふ。絲は撚り合はすものゆゑ、人の寄れども逢はぬといひかけたり。たたり、は絲繰る具の絡垜に祟りをかけ、はたは機に將たとかけ、へは綜に經をかけたり。たたりはた及へは共に皆絲の緣。この頃の風として、二義をもたしめ、上下に緣語を置きて一首を整へたる例少からず。これもその一つなり。

【解】但馬の糸云々。糸を撚れどもふし有りてあはぬは、いかさまの絡垜に付けて綜むと、糸の上にいひ立てて、間よれど、出でて逢はぬは何事の祟りにつきてならむ。さては如何にして月日は經むと嘆くなり。はたは果然の

語をこれも機を織るにかけたるなり、網にかくいふは古歌にあらざりき。

立ち別れ 因幡の山古八

古今八に『立わかれ因幡山の峯におふる松とし聞かば今歸り來む』とあり別れ往なばといふより因幡山にいひかけたり。續貂に擧げたれど、傘詞にて枕詞と見えぬばかりなり。

【貂】立別れて行くを因幡國のいなば山にかけて、松を待つによせたり。是は在原卿の因幡守にて下られる時の事なれば、五年の任限あるを、我を待つとだに聞かば、只今も歸り來んとは歌の工なり。

たづがなき 蘆邊萬十五、二十

萬葉十五に蘆邊をさして飛び渡る、又同二十にたづがなく蘆邊も見えず、十八にたづがなく奈呉江のすゝとあるを服部高保は冠辭として續考に取り出でたれど枕詞にあらず。

立霧の 思ひ過ぐ萬三、十七　いちしろく萬十一

萬葉三にも十七にも思ひ過ぐと連ね、十一にはいちしろけむと續けたり。立てる霧の忽消ゆるが如く、我が思の消え過ぐると比し、又立てる霧のありありと見ゆるより著しと比したるなり。○『飛鳥川川淀さらず立つ霧の思過ぐべき戀にあらなくに』『川千鳥すむ澤の上に立霧のいちしろけむなあひいひそめては』

【解】霧のうつろひ消えゆくを過ぐるといふ故に、かく續け、又川面なる霧の一村立てるは、著きものなれば、著けむなあひ云ひそめてはと續けたるなり。

たつくりを 更科の郡甲信紀程

村岡良弼は信濃の更科に掛くるにたつくりを以てせり。たつくりは調布をいふ。布を晒すといふより轉す。

立田川　立ちなば後十四

浮名の立つといはんとて立田川と同音を重ぬ。◇『立田川立ちなば君が名を惜しみ岩瀨の森のいはじとぞ思ふ』

龍田山　立ちてもゐても萬十

立田川立ちなばと同じく、萬葉十には立田山とおきて同音の立ちてともつゞけたり。立ちても、ゐてもとは轉順反側といふに同じ。◇『秋さらば雁飛びこゆる龍田山たちてもゐても君をしぞ思ふ』

立つ鳥の　目ゆか汝を見む萬十四

萬葉十四東歌に『小筑波の繁き木の間ゆ立つ鳥の目ゆか汝を見むさねざらなくに』とあり。目ゆとは目よりとか、目のみとかいふ意にて、ここは目にのみ汝を見むかと歎くなり。立つ鳥の群れといふを約めてめともいへば、同音異義の目に轉じたるなり。序歌にして上に小筑波の繁き木の間ゆ立鳥のとあれば、目のみ見るもいともの遠き意を思はせたり。必枕詞となさざるも可なり。

立つ波の　しば〳〵萬十二　**夜**續後撰五

萬葉十二にはしばしば絕しと續け。續後撰五には夜ぞ短きと連ねたり。波の寄るといふを同音同義の夜に轉じ、又波の引きては寄するより屢々と喩へたり。◇『君來ずは明日は寂なみ立波のしばしばわびしかくて來じとや』

たどつくの　ぬかなへゆけば萬十四

萬葉の東歌にぬかなへゆけばと言ひ下したり。『うへこなはわぬに戀ふなもたどつくのぬかなへ行けば戀しかる

なも』たどつくとは立つ月の訛、ぬかなへはねかれの轉、即寢ぬることの離るる義なりといふ。月日の經過する如く、妹と相寢ることの遠ざかりゆけばと比したるなり。されど東國の方言なれば他には例となしがたし。

【服】こは立月の逝れゆけばなり。ぬかなへのなへの反はねにてれと同音なり。邊土の方言に隱れてといふ意、かくねてといふもあり。さればぬかなへは、ぬかれにて別離なり。立つ月の日を逝れ離れて行く如く、妹に日々に遠ざからむを慨く歌なり。

たはみづら 引かばぬる〳〵 萬十四

萬葉の東歌に、たはみづら引かばぬる〳〵と續けたり。◇『青尾ろの尾ろ田に生はるたはみづら引かばぬる〳〵吾をことな絶え』田食葛は田に這ひ蔓るものにて、人が引くときは、するすると我が方へ寄り來るものなれば、その如く招かば、汝も疾く靡けものいはむとて喩へたるなり。されどこは安房國の方言を用ひて記したれば、今は明かならざる所あり。

【解】たはみづらは蔓草の名なるべし。さて引かば靡々(ぬる〳〵)と續けたり。

たび人に 衣春日 續日本後紀十九

續後紀十九に旅人に宿春日奈流云々とあり。これは春日といはむとて旅人に宿を貸すといふ續にて、かくは續けるなり。川風寒し衣かせ山とか、唐衣ぬふ針河などいふの類なり。

【參考】これは萬葉十二に吾妹兒に衣借香之云々といふに同じ。借香は借字にて、大和の春日にかけたり。

たまがきの 御津の湊 曾丹集　内つ御國 紀

曾丹集に御津の濱と續けたり。玉垣は神社の垣をいふ。玉は褒むる詞、又瑞籬ともいふ。よりてそのみづの音を御津の濱に掛けたり。東雅の一說に垣に二三重あるときは內を瑞垣といひ外を玉垣といふとあり。如何。この他萩原元克は玉垣の內つ御國と續けたるを枕詞としたり。

【備】神の居垣をば玉垣といふ。亦みづ垣ともいふなり。玉垣の瑞といふ心にて續けたるなり。大伴の瑞といふ義もこれにてよく聞えたり。

【枝】玉牆を造りめぐらしたらん如くに山の周れる國といふ意にて、うちつみ國とつゞけて大和をいへり。

たまかぎる　ほのかに萬十一　はろかに靈異記　日萬　岩垣淵萬

萬葉十一にほのかに見えてと續け、靈異記上にははろかに見えてと續けたり。かぎろひの條に委しく說きたり。參照すべし。

【解】玉限は玉蜻の誤にてかぎろひのなりと考にいへり。されども靈異記の歌によりて、猶舊本のまゝ、玉限とあるを用ひていはゞ、玉耀（かぎろ）といふなるべし。かぎろはかぎろひ、かぎろふと同言にて光耀くことなり。さて玉耀は陽炎の玉の如くきらめくをいふべければ、日も重りてと續けたるは陽炎の輝く日氣といふ意なり。ほのかに及はろかに云々陽炎のほのかに又遙に輝き見ゆる山の績なり。

【美】別記玉限磐垣淵と續くは玉はもと石また磐などの中に交りてあるものなれば玉燿磐と續けたるか或は玉は水中にあるよしあれば淵と續けたるにもあるべし。夕及日と續けたるは朝夕の日かげは殊にきらめくものなれば玉の燿くになぞらへたるなり。ほのかとつゞくは下の見えてまでにかかるなり。一目と續くも明珠の餘光よそな

がらも目につくよしの續けなり。

たまかたま又**たまかつま**　逢はむ萬十二　安倍島山萬十二　島熊山萬十二

萬葉十二に逢はむとも安倍島山とも島熊山とも續けたり。たまは褒むる詞、かつまは籠のことにて、籠の身と蓋とを合はするを轉じて、逢はむともあべしま山と續け、又籠は紐などにて縛むるよりしまくま山に冠らせたり。しまにかくらに籠の目あらきより透間の意につゞけたりといふ說と、これに反し少間の說もあれど、今は締めの說による。◇『玉勝間逢はむといふは誰なるかあへる時さへ面かくしせす』『玉勝間安倍島山の夕つゆに旅寢はえずや長きこの夜を』『玉勝間島熊山の夕ぐれにひとりか君が山路こゆらむ』

【仙】玉かつまは玉くしげと云ふ詞なり。あべ島山のあの字明くと云ふ心なれば續く。又島熊山といふは築く巻くといふ心こもるべし。

【悉】玉かつまは櫛の古語なり。島熊山のしまは繁き言なり。櫛の齒のしげきと續くるなり。又あべ島山といふは玉匣あはんの義にて續けたるなり。

【管】案ずるに玉かつまは若し玉の緒をいふか。上に玉の緒の島心といへり。これは玉を緒にてしむるといふ心なり。また首の歌に共に島といふ字を詠みたるはその心なるべし。又々と續けたるは緒と結へる心によせたりと聞ゆ。玉かつまあはんといふは、玉の緒をば合するものなれば斯く續くべし。

【考】このかたまは大方のかたまに有らず蓋と身とある合せ笥なり。故に女に逢ふにいひかけたり。安倍と續けしも、阿部と合と音の通へば右と同じ意なり。島熊山云々。このかたまは大目麁籠は目の麁らければ、透間と續

けたるか。すきの切しなれば、すきまをしまといひかくべし。又目とのみも續くべし。

【燈】四十三（鮪臣の歌）やふしまり云々。萬葉十二に玉勝間島熊山と續けたるも、籠も目ひかたむる由なり。

【宣】あはむと續けたるは、考にいへる如く、他の二つは記傳にいへる、玉かつまは島にかかれる枕詞にて、籠の目を堅く結へるよしの續なりといへり。是によるべし。

【石】玉かたまは固き籠なり。かたまといふはかためあといふ義なるを、めあをまと約めてかたまと號く。固め閉はすといふ義なり。まと約めて廻り閉むの義とせり。籠は編み果つる所必合ふものなれば、合に比し、あはむにあへしま山と續けしなり。島はしめあといふ義なるを、めあをまと約めてしまと號く。まと約めてしまるの義とす。籠のこと縛顯はせる島と比して續けたり。

【雅】かたまは葛編の約りなり。

【黒】島熊山とつづくるは少間までにかかるなり。

玉かづら　かけぬ萬十二　かげ萬二　つらき後十二

萬葉十二にはかけぬ時なくとも同二には影に見えつつとも、後撰十二にはつらきながらもと續けたり。この玉かづらは玉縵にて玉を緒に貫き、頭にかけて飾とせるものなり。されば心にとむるといふ意なるかけぬ時なくとも續け又かけといふより類音のかげにも轉じ、又同音を反覆してつらしといふ意にかけたり。◇『玉かつら懸けぬ時なく戀ふれども何ぞも妹に逢ふ時もなき』『人はよし思ひやむとも玉かづらかげに見えつつ忘らえぬかも』『日をへてもかげに見ゆるは玉かづらつらきながらもたえぬなりけり』中の歌の玉かつらを本居宣長は山かづらの誤とせり。

【仙】玉かつらは冠の纓なり。

【考】玉を貫き垂れつつ頭に掛くる縵なり。よりてかけと續く。又玉縵を面にかくるといふを影にうつして續けたり。假字し違はねば、いひかくる語に清濁をきらはぬ例、照月のかけの湊などの如し。されど貫之の「かけて思ふ人しなければ、夕暮の面影たたぬ玉かづらかな」と詠めるによりて、玉かづらは頭にかけて面にもかかれば、面かげと續くらむともいふべけれど、右を思ふに貫之は右の萬葉にかけむ縵に轉じて面かげといひ下せしによりて、面影とはいひなせしなるべければ上にいへる如くなるべし。

【傳】この玉は山の誤、蘿（かげ）を山かづらといふ故にかげと續けるなり。影は面影なり。又玉勝間十三に五、影と續きたるを懸の意と心得たるは僻事なり。云々。

【解】考及記傳の說は非なり。影としも續く故は、玉縵は玉の光明のきらきらと照映ふものなる故に、玉縵（かげ）とはいへるなり。凡べてかぎ、かぐ、かげはもと皆同言にて輝ふ意の言なればなり。

【存】和名抄に髪をば唯かつらと訓みて髪少きものの助といふ。鬘をば花鬘也といふことなるを、後の歌などには詞りより來るままに花鬘をも髪をも玉かつらとよみたる多し。時世のさまと歌ことを辨ねて心得べし。この玉縵は古事記傳にも見えて君臣共に著けしものにて玉なり。

【黒】かげとは玉かづらを作りたる一かげ二かげといふ。面の際になるが故の名なり。

玉かづら

絕萬三、十、十二、十四　遠長く萬三　はへてし來れば萬十二　實ならぬ萬二　花のみさきて萬二　たのめ來る日拾十四　葛城山拾七　伊吹山拾雜春

萬葉三には絶ゆることなくとも、十には絶えぬものからとも、十二には絶えず行かさねとも、十四には絶えむの心とも連ね、萬葉三には遠永くとも、十二にははへてし來ればとも、同二には實ならぬとも、花のみさきてとも續けたり。又後撰五には絶えぬものからとも、同十五には今は絶ゆとやとも、十四には頼めくる日とも頼は絶えじとも、同七には葛城山とも、建保百首には伊吹山とも連ねたり。◇萬『玉葛實ならぬ木には千早振神ぞつくとふならぬ木ごとに』後『玉葛たのめくる日のあまたあればたえだえにてはかひなかりけり』萬『谷せばみ峯べに生へる玉葛はへてしあらば年に來ずとも』後『玉かづら葛城山の紅葉ばはおもかげにのみ見えわたるかも』こは玉葛の義にて、玉は褒むる詞。葛は長く延ひゆくものなれば、年月の遠長くと比し、人の引きよせむとては手にて繰るものなれば、來ると同音異義語に轉じ、引かれては切るることあれば、絶ゆとも或は絶えぬとも緣語にて連ね、又葛もて他のものを束ね結ふを、いふの音に似たれば伊吹山に冠らせ、かつらの音を反覆して葛城山と續けたるなり。又葛には實のあるあり。無きもあるより實の一字にかけて實ならぬ木と續け、又そが返歌には實ならぬ全體の意をとりて花のみ咲きてともいへるなり。この葛は蔓草の總稱なり。

【管】玉かつらは總じてかつらの類をほめていふ。

【匠】玉は玉松、玉椿など萬の物をほめて云ふ事多し。今もその心なり。葛は木によりてはひ、女は男によりて世をふるものなれば多く喩に取れり。木とは葛をさしていふ。和名云、葛數一名鹿豆（葛音割）和名(久須加豆良乃美）葛實名也云々。

【考】蔓は長く延びひろごれるものなれば、絶えぬとも長きともいへり。玉とは是も子あるものなればなり。

【服】萬二玉葛實ならぬ木には云々。こは妻どひの歌なり。みならぬとは戀の成らぬをいふ。葛の實とのみ掛かれり。みならぬまではかからず。

【貂】葛木山と續けたるは、下に面影といへば、頭のかざりの蘰なり。又賴みは絶えじと續けたるは、蔓草の葛にてたぐると懸け、たのみを子(み)にかけたり。その返歌にたのめくる日とあるは、玉蔓の蔓草をいふ。

【攷】考に玉とは實なるものなればといふといはれしは違へり。玉は美稱の詞なり。

【解】萬十二にはへてしあらばは葛の蔓ふと續けたり。

【例】賴みと續けしは如何なる義とも考へず。

たまぎぬの　さゐさゐ沈み萬四

萬葉四に珠衣のさゐさゐ沈みとあるを、石上枕詞例にはたまきぬのとよみたり。但しありきぬといふべきか。ありぎぬの條を見よ。

【石】珠衣は珠付けたる衣なるべし。その附きたる珠の往來するに音するが、さやかに聞ゆるが故に、さゐさゐと續けしならむか。さゐはさやいの約、やいはゐとなる。

たまきはる　内の朝臣紀　内の大野萬一　内の限萬五　命萬　短き命萬十五　世萬十一
幾世萬十七　吾山の邊萬十七　磯宮儀式帳　立ちかへるべき新勅十七
心も知らず新後拾遺

仁德紀に武内宿禰をさしてたまきはる内の朝臣と仰せられたること見え、萬葉一には内の大野に馬なめ、同五の長

歌に內の限とも續けたり。又萬葉四、五、八、十七、十九には命と續け、十五には短き命とも、十一には世まで定めてとも、十七には幾世とも連ね、十七には吾山の邊にとも、皇太神宮儀式帳には礒宮とも、新勅撰十七後鳥の歌には立ちかへるべき昔ならばとも、新後拾遺には心も知らずとも續けたり。この枕詞も明かならず。玉きはる內と續けたるは內裏の莊嚴きはまりなきをいふとの古說もあれどいかがあらむ。試にいはゞ、仁德紀の伎手纏着くの義か。和名抄にたまきは小手とあり。古語に振るをふくともいへば着くをはるともいひしならむ。內臣武內朝臣が玉纏即小手を着けたるを帝の御覽じて玉纏はる內の朝臣と宣ひしにあらざるか。これより轉じてうちの語をもてる內の大野とも、內の限とも續けたるか。或は十節錄にいへるが如く、和漢共に邪氣をはらふ歲事として玉の形をなせる木をうつ習慣古より行はれ、玉木打つといふことばあり。又うつといふことを俗にはるともいへば張ると打ちと同義語を並べ、そのうちを內の語に轉じたるか。或は手纏はく腕とかけたるを始とせるか。後勘を竢つ。但し奈良朝に至りては魂極るの義にて人の命に掛け、それより短き命・あだの命など轉用するものを生じ、うつりては世とも、幾世とも連ねたり。立ちかへる昔ならねばと云ひ下したるも人の命の上につきて云ひたるなるべし。吾山と連ねたるは春山の誤か。礒宮と續けたるは命又息のいの一音に掛けたるか。

【仙】たまきはるとは巖麗きはまるといふことばなり。內といはむ爲に諷へよめるなり。

【釆】一には玉極まれる內裏といふなり。莊嚴きはまるなり。內日さすとよめると同義なり云々。一には蚩尤涿鹿の野にて討たれし眼を、毬打の玉にして打つことを玉木はるうちと云ふなり。

【燭】玉きはる內の大野云々、顯昭云、これは玉き射る春といふことを射るの詞を略しけるか。十節錄云、黃帝與

蚩尤ト合ニ戰于坂泉之野一、蚩尤有ニ鐵身一、黄帝之箭不レ中。黄帝仰レ天祈之時、玉女降レ自レ天反、閉ニ蚩尤之身一卽自然被レ殺畢。仍收ニ蚩尤頭一毬之取レ而射レ之、今毬杖是也、以ニ被例ニ漢土年始以ニ件事一、國中除ニ凶事ニ云々。仍日本國學ニ其例ニ年始打ニ毬杖一、然則毬杖玉剋春（たまきはる）といふなり。と云々。さては毬杖の玉き春打つといふことに續けたりと聞ゆ。但し内の大野と詠めるに限らず、玉きはる命と續けたる歌萬葉に數百見えたり。憶良の長歌に玉剋内の限は平らけく云々、こは魂極まる内は、安く事もなく云々とよみたるなり。玉きはる命と詠める同じ例なり。されば内の大野も内といふ詞設けむとて、玉きはるは命きはまるの詞を假りてよめるかとぞ覺ゆる。或説に玉きはるは玉をきはむるとて、物を賞る詞といへどもその證まだ見ず。

【匠】一則爲レ壽運持爲レ命といへば、魂の極まる内の命といふ意にて内といふ詞には置けるなるべし。きはるはきはまるのまを略したる詞なり。とこしなへをとこしへといふが如し。靈剋とかけること萬葉の中六ヶ處あり然れば是正字なるべし。靈の字に命の意あれば、重ねて命といはざれども内とつゞくれば然聞えたり。年切世（としきはる）とも讀たれば限あるものとて幾世經にけむとも續けたるか。

【辭】玉剋春。打の冠辭なり。内と打とは同調なれば相通じて此冠辭を用るなり。古來諸説區々なれども十箇條の說古義に合へば是を一證とすべし。

【考】たまは魂なり。きはるは極るにて、人の生れしより有ふる涯を竝にかけていふ詞なり。故に内の限とも息（いき）内（ち）とも幾代とも續けたり。さるを後人命の今終る極みをいふとのみ思へるは、この冠辭の本の意にあらず云々。巻十に靈多寸春吾山之上に云々。こはかの玉きはる内の限は平らけく、たまきはる世までなど、君代を栗かけて

ふに馴れたる奈良人の歌にて、我命の限りは君がまにまに依り靡きてんてふ意を、省き約めていひ下せしなり。さてこの吾山は吾終の葬する山なり。又短き命云々。これも本は上にいへる如くなるを、その生の涯は程なき物にもあれば、奈良人に至りては斯く轉じていひなせり。

【精】打任せては命と續くこと萬葉に見ゆ。又内の限はとも、幾代など續けしあり。このいく代は魂極生と續けたるか。再思ふに息をいきといふ。いの一語にかかりて命いく杯と續くるか。記及萬に内と續けたるは息の内の意なるべし。

【續考】儀式帳に玉佐波流磯宮とあり。たまきはるといへる意は前の考にありて、命幾代などかけたるが如く、伊の一語にかけたるなるべし。命といふも息中の意なり。萬五に『大野山霧立わたる我がなげくおきその風に霧立ち渡る』この吾歎くおきその風といふおきそは息づきしをいふ。おきの反いなり。よりていそとかかりたるべし。

【范】いのちの反うち。うちとも續けたるはウチの反ィなればなり。

【傳】卅七あらたまはあたらあたらまの約りたるにて、あたらとは年月日時の移りもてゆくをいふ言にて、まは間にて程といふに同じ。かくてたまきはるはあらたま來經るにてこれも年月日のへゆくことにて、うちと續く意は顯現なり。うつし身うつし世などいふ。人の此世に生れてある程をいへり。吾山のへには云々。吾山は春山の誤作と吾と草字よく似たればなり。さて春と續く意は即ちあら玉の年とも月とも續くと同意なり。

【槻落】玉剋は程來經也。たまさかは程避る也、たまたまは程經て稀なるをいふ言也。云々。

【燭】靈留るといふ意にて、魂の人の身内に留り居るによりて内とけ續たり。

【解】たまきは手纒にて、上世に手腕の裝に帶しものなり。はるははくと同じ。るとくは背曲ふ。さて内と續くは腕の義なり。ちとてと普通へり。集中に長道を長手といへるなどその餘例多し。又云、たまきはる現世の中のものなる故に移りてかく續くなり。世と續くも同じ。

大神景井云、たまきはるは靈久美波流なるべし。人の生涯(いのちのかぎり)は靈の組み張りて絶えぬ意にて、靈くみ張る現と續くなるべし。くみは角ぐむ芽ぐむなどのくむに同じ。

【石】玉際有(たまきはる)るといふ義なり。際は限なり。あははの餘韻に含めたり。よりて命と續けたり。うちと續けしも命の内にいふ義なるを命の名を省きてうちと續けしなり。世、幾世と續けしも命の轉用なり。命は生の内、息の内といふ義なり。我と續けしも轉用なり。

【存】光房云、經るをはるといふ例なし。按ずるに程來經(たまき)去なり。去は春去來るなどの去にて、その時になることなり。さて十一に年切とあるも年を玉の誤と略解に定めたれども、義を以て年(たま)とかけるならむ。久老の說の如く、たまは年月の來經ゆく程をいふ詞なれば、年をたまとよませたるなり。あらたまのあらは新なり。あたたまは新年の義なり。たまは年月の年經去程をいふ語にて、頓て年月のことにもなるなり。

【集】萬十にたまきはる吾山のへに立霞とあるは立つ霞へかかれり。霞の棚曳けるはたまきはる如し。

【通】程來經(たまきふる)なりと或人の云るさることなり。程は時間(たゆ)のことなり。さてうちと續く意は記傳にも云はれし如く顯現(うつつ)なり。

【折】たまきはる吾が山のへに云々は輪にかけたるものであらう。又思ふ、玉に木靈(は)るの意にもあらうか。

たまくし　入彦嚴之事代主神紀

紀に玉籤入彦嚴之事代主神とあり。玉の如く奇しと容儀を稱詞とし神の名に附せるなり。

たまくしげ　三室の山萬二　三室戸の山萬七　身の後十五　三河國夫木集　二上山萬十　二見の浦古九　二年後十五　二聲新勅三　二村山續古今、　懸子金　二名山山家集　奥萬三　明け古十三　葦木河萬八　開く萬四、九　筥の浦波土佐日記　箱根山夫木

萬葉二には三室の山とも七には三室戸の山とも、後撰十五には身の徒にとも連ね、萬の七には二上山とも、古今九には二見の浦とも、後撰十五には二年(ふたとせ)逢はぬ君が身をあけながら云々とも、新勅撰三には二聲聞きてとも、續古今には二村山とも、榮花物語には二たびとも續け、金葉には懸子と續け、萬葉には覆乎安美明けて往なばとも古今十三にも明けぬれども、後撰四には明けつる程とも續け、又萬葉三には奥にとも、八には葦木の川とも、同四及九には開きあけつとも、少しひらくとも接續せしめたり。又土佐日記には筥の浦波とも、夫木には箱根山とも連ねたり。◇萬『玉くしげ三室の山のさなかづらさねずはつひに有りがてましを』萬『珠くしげ見諸戸の山を行きしかば面白くして古おもほゆ』後撰『あけながら年ふることは玉くしげ身のいたづらになればなりけり』萬『ぬば玉の夜はふけぬらしたまくしげ二上山に月傾きぬ』古今『夕月夜おほつかなきを玉くしげ二見の浦はあけてこそ見め』後撰『玉くしげ二とせ逢はぬ君が身をあけながらやは逢はむと思ひし』續古『ともしして今宵もあけぬ玉くしげ二村山の峯のよこ雲』金葉『玉くしげ懸子に塵もすゑざりし兩親ながらなき身とを知れ』萬『秋つ羽の袖ふる妹を珠くしげ奥に思ふを見たまへ我君』萬『玉くしげあけまく惜しきあたら夜を衣手かれてひとり

かもねむ」 土佐「玉くしげ筥の浦波立たぬ日はうらをかがみと誰れか見ざらむ」 夫木「玉くしげ箱根の山の峯深くみづうみ見えてすめる月影」 萬「玉くしげ葦木の川を今日見ればよろづ代までに忘られめやも」 萬「玉くしげ覆乎安美あけていなば君が名はあれど吾名し惜しも」 たまは褒むる辭、くしげは櫛笥にて、誰も身もあるより、人の身にも、又みといふ音をもてる三室山にも、ふたといふ音をもてる二年・二度・二村山・二見浦・二上山などへ轉じ、或はその川より夜の明くる意にも明暮れの義にも用ひ、又葦木川へかけたるは古義の說の如く、櫛笥の類音にて續けたるかと思へどもあくのあに掛る說をよしとするか。又櫛笥は筥なるより筥といふ語をもてる筥の浦、箱根山等にも冠らせ、又筥には深きも淺きもあるより、奧にとも續けたり。萬二に覆乎安美はかへるを喜みとよみ隔句に續くなるべし。この他岡舍歌集には身の音より轉じて三河國に冠らせ、鹿持雅澄は二名山と連ねたり。

【仙】玉くしげあしきと續けたるは、あしきとはあはあくる義。さはしげしといふ詞に聞ゆれば、同じくことしげしと云ふ諷詞におけるなり。

【考】玉匣は櫛を入るる箱なり。萬八に玉くしげ葦木河乎云々、こは櫛笥を開といひかけたり。或人開るを略きてあの一語にかかれりといへるは、今少し思はざりけり。かかる續の例二樣あり。一つは卷十一に小簾のすけきに入り通ひ來ぬとよめるは、簾の透より通へといふを、中にけの一語を添へて延べたるなり。卷一に心さみしと詠めるは、心淋しなるにまの語を加へたりと見ゆ。今も開きてふ語の中にしの一語を添へて延べたる類と心得べきなり。又の樣はいひかけの語には上の一言すら定かなれば、以下の語は音を通はして他に轉じ下すあり。今もこの類にて、開をあしきてふ語にも思はせたりとすべし。又覆乎安美云々、こは匣の蓋は開くるも覆ふも容易

きものなれば、覆ふを易しとして開くるといひなして、さて一二句は序なり。又みむろの山云々、こは玉櫛笥の身と受けたり。蓋懸子、身など、常にいふが如し。又實に思ふを云々、こは蓋懸子の下は深ければ、奥とはいひ續けたり。

【補考】これも前の考に出でたれど神功紀に玉籤入彥嚴之事代神云々、この玉籤入ると續くことは洩れたりき。（籤の下に笥などの字落ちたるか）

【解】覆乎安美云々は安の上に不の字を脱せるものにて、第二句かへるをいなみと訓むべし。さて玉匣は何を隔てて開くといふにかかれるなりと、細木瑞枝いへり。諸本河云々、葦木を淺笥の意によりて續けしなるべし。さけとしきと音通へり」種々ある笥の中、櫛笥は殊に淺き器なるよしもて櫛笥の淺笥といふ心に續けたるならむ。

【石】三室の山、三室戸山と續けしは、玉櫛笥身と轉じたるなり。二上山と續けしは蓋と轉じたり。明、開、覆等續けしは櫛笥取扱ふわざなり。奥は中にてくしげの深きに比したり。あしきと續けしはあの一聲に續けしか。

【黙】美匣（たまくしげ）なり。あしきへ續くは明の一言へかかれるなるべし。

玉くしろ　手に取もちて萬九　まきねし妹萬十二

萬葉九には手に取り持ちて云々、十二には、まきねし妹とも續けたり。◇『口息ます吾戀ふる子を玉くしろ手に取りもちて』『玉くしろまきねし妹を月もへず置きてや越えむとの山のさき』釧（くしろ）は手腕にとり卷くものなれば、その如く我子を手に抱きもつと比し、或は共に枕を交しし妹に喩へたり。古くは枕して寢ぬることを枕をまくとも單にまきともいひしなり。前の歌の取りは轉きの誤ともいふ。原文に玉釧とあるより契沖はたまつるぎと訓めり。

【考】手に取り持ちて云々、こは『我妹はくしろに有らなむ左手の吾奥手に纏きていなましを』てふ意に似て且釧は奥の手の節に纏ふものなる事を知るときは、手に取持ちてとは手にまくてふ意なり。されど、取持而と有るは覺束なければ、思ふに取は蒔を草の手より誤れるならむ。さらばまきもちてとよみて、蒔は借字、持は添へたる程の語なり。十二のは釧を手に纏を妹と手枕まとひて寢る事にいひかけたるなり。

たまくせ　清き川原萬十一

萬葉十一に『玉久世清河原に身そぎしていはふ命もいもなねの爲め』とあるを、楫取魚彦は玉くせは玉くしろの約りたるにて枕詞なりと說きたれど、こは玉は添へたる語にて、山城の久世川の清き河原といふ意なれば枕にあらざるべし。

【續考】今本たまくせのと訓みたれど、久世と假字にて有るを、のの辭は添へがたし。四言の例も多ければ、たまくせ清きとよむべし。この玉久世を或說に山城國に久世郡あればこれかといへど、然らば上に玉と置くべからず。思ふに玉久世は玉くしろを約めいへるならむ。志呂反曾をせに通はしたらむ。玉を飾れる釧は清く見ゆれば、清き川原と續けしならむ。

たまざさの　小諸甲信紀程

甲信紀程には信濃の小諸に掛けたり。篠のこみあひて生ずる意もて類似の音をもてる地名にうつしたり。

たましひの　入野晩花集

下河邊長流の晩花集にはたましひの入野と續けたり。佛作りて魂を入るなどの諺もあれば、魂を入るといふより

山城の大野といふ地名へ轉じたるなり。

鈴屋集には玉島の玉のことのはと同音を反複して調をなせり。玉島は備前にあり。

玉　島　の　玉の言の葉鈴屋集

たまだすき　かけ萬一、八　畝火の山萬一　誰れに結びて新六帖　雲ゐる山夫木

萬葉一にはかけの宜しくとも、同八を始めとしてかけぬ時なくとも、かけずとも、かけてとも續け、又卷一二四等には畝火の山と連ね、新六帖には誰に結びてと續けたり。手襁（たすき）は頸（うなじ）にかくるものゆゑ、心にかけてとも、詞にかけてとも續け、又頸（うなじ）にかくるよりうなと同音をもてる大和の畝火山に冠らせたるなり。畝火にかくるにつけ諸說あり。田を鋤きて畝をつくるよりといひ、襷をかくる采女といふより轉じたりといひ、襷を項（うなじ）に懸くるよりといひ、頸にかくる義よりといひ、又は襷をうなげるなどといへり。最後の說など妥當なるべきか。たまは例の美詞なり。夫木集に雲にかけたるは、萬葉に畝火を雲飛の山とかけるを誤讀して續けたるなるべし。◇『思ひあまりいともすべなみ玉手次畝火の山に吾かしめ結ひつ』『尋ねきて今ぞしめゆふ玉たすき雲ゐる山の初櫻花』

【采】玉とはほむるなり。畝は田を鋤く時は、畝のあるゆゑに、田すきうねといふなり。

【撮】畝火の山はうねみの山と讀むなり。玉襷と置くは襷は采女の衣裳なり。仍て玉たすき采女と續く心なり。

【管】玉たすきは田をほめて玉田を續くと云ふ心なり。畝は田にあるものなれば斯く續けたり。

【匠】玉襷かくる采女と續けしならむ。枕草子に采女八人馬に乘せて引き出でたり。青裾濃の裳、裙帶、領巾などの風に吹きやられたるいとおかしとあり云々。

【僻】玉をかざりにつけたる手繦は官女のかけるたすきにして賤女のかくるたすきにあらず。よりてうね火の冠辭とす。うねびは采女と音通へばいふなり。

【考】玉手次畝火の山云々、こは荷田在滿がいへる襷を項と續けつらね。神代紀にその頸に嬰げる五百個の御統の瓊又弟棚ばたのうながせる珠のみすまる云々ともあればなりと、げにがせの反げなれば、うなげるとも云ひ又そのなげの反はねなれば、うなげをうねともいひて約言の例叶へり。これに據るべし。

【解】考の說わろし。玉と書けるは借字にて、把襷といふなるべし。ばとまとは親しく通へり。さて把襷といふは、まづその結法の左右の袖により背へ通し、兩肩の正中頸の下に把ね縮めて結ぶを、今世に玉襷といへり。ふのも然せしをど云ひしならむ。さて畝火とかかれるは、いと辨へ難きを、せめて思へば、把襷頸根結といふならむ。式祝詞等に鵜じもの頸根つきぬきとも見えて、頸の下をいふ言なるを知るべし。さてうなねを約むれば、うねとなり、結びを約むればみとなれり。さてそのみとびとは親しく通へば、うねみうねびは全く同音なり。

【石】玉は賞詞、たすきは襷なり。畝火と續けたるは頂得といふ義をたえをねと約めて續けしなり。

【栗】たすきは腕を助くるものなればうねにいひかけたるか。うねはうでの轉なり。又たすきは襷手次なり。うなげへかかれりといへるは惡し。うなげならんには袖といはでは叶はず。されば腕結へかかると宜なるべし。

【豐】玉襷の形のうね／＼と屈曲せるより畝火に掛く。うねびといふ語は今阿波國山間部の方言に殘れり。同地方にては山の背のうねりたるところをうねといひ、夕日のうねの上に殘れるをうねびといへり。

たまだれの　越智萬二　小簾萬七、十一　小瓶古十七　見す六帖、後撰　すける心拾十一　誰れ拾十四

尾張岡舎集　岡野君麻垣内集　を春乙女山霞集　をてもこのもも山霞集

萬葉二には越智の大野とも越智野とも連ね、同七には小簾のまとほりとも、十一には小簾の垂簾とも小簾のすけきにとも續け、古今十七には小瓶とも、六帖には見すなとも、後撰九には見すばとも續け、拾遺十一にはすける心とも、同十四には誰れとも、新拾遺にはみ簾の中よりとも接續せしめたり。玉を貫き垂る緒といふよりをの音を頭にもてる他語に轉じ、又たれと同音を重ね、三代集の頃には御簾のこととなせるより見すと轉じ、簾は垂れるものなるより誰の音にうつし、又竹の間の透けるより好けると同音異義語にうつしたるなり。新拾遺及續古今には越をこすとよめり。小簾の義より轉じたるなるべし。栗田土滿の長歌には緒といふより尾張國とつづけ、木居大平は小倭と連ね、又岡野の君、鹿持雅澄はを春乙女とも、をても此面とも連ねたり。◇萬「敷妙の袖かへし君玉垂の越智野に過ぎぬまた逢はめやも」　萬「玉垂の小簾のまとほし獨りゐて見るしるしなき夕月夜かも」　萬『玉垂の小簾のすけきに入りかよひ來ね。垂乳根の母か問はさば風と申さむ』　古「玉だれの小瓶やいづらこよろぎの磯の浪分け沖に出でにけり」　六帖「我ならぬ人にや人に玉垂のみすなや見すなあらばなりとも」　後「君により我身ぞつらき玉垂の見すば戀しと思はましやは」　拾「玉垂のすける心と見てしよりつらしてふことかけぬ日はなし」　拾「内外なくなれもしなまし玉垂の簾とし月を隔てそめけむ」　拾「玉垂の糸のたえまに人を見しすける心は思ひそめてき」

【考】越野はをちのと訓みて大和高市郡にある地なり。さて玉は緒を貫きて物に掛け垂れて飾にするものなれば玉垂の緒といひかけたるなり。小簾云々。古は小字をことよむことは稀にて、大方はをといひて、即小き意なる

もはた借字もあり。ここは借字にて緒の意なり。簾は緒もてかくる故に然かいふべし。然るを後世の人はこゝと訓みて鈎簾の事と思へども鈎をこといふは字音なり。上つ世に字音はあらず。又古今に小瓶云々、右の如くもとはをがめとよむ故に小瓶など書きけんを、後に小簾をこすとよみ覺えたる人、さかしらにこがめと書きしならむと覺ゆ。

【鉊】後撰には御簾を不レ見にかけたり。拾遺に玉簾の糸の絶間に云々、簾を編む糸の絶間は、透きて物の見ゆるを、好心によせたり。又同書に玉垂のたれ年月を隔て初めけむ。これは珠簾を垂るといふを、誰人にかけ、且簾の内外を心のうらうへなき事によせたり。

たまちはふ　神萬十一

萬葉十一に神と續けたり。魂幸はふの約りたるにて、神の人に幸し給ふを稱へたるなり。◇「玉ちはふ神も吾をばうつてこそしゑや命のをしけくもなし」

【仙】たまちはふとは、神通は物を見そなはすこと迅早くおはしませば、魂みちはやき神の義なり。

【管】神はその靈死することましまさねばたまちはふといふ。ちはふはいはふ心。

【考】神代記に幸魂といへるにて、他の幸をなし給ふ神靈をいふ。ここはその詞を上下になして、たまちはふ神とはいひ下したるなり。たまちはふは美神をいふ。惡神ならばやぶるてふに對へて、これをも冠辭とす。さちはふのさを略きていふ故にぢと濁れり。

【彥】鈴屋翁説の、ちはやぶるてふ枕詞を忌み嫌ひて、常に神といはんには、玉ちはふとのみ詠まれたるよしの説

をなせり。これは人の命を幸ひ保ち給ふ神をいふなり。

【一云】魂を祝ふ神と續く。萬九に女の神もちはひ給ひてとあり。いとちと通ず。

【解】ちはふとは人物の爲に幸事をあらしむるをいふ。山彦冊子の說よろし。

【石】美幸經のさを略きて玉ちはふといへり。神實の奇しく人に幸はひ給ふを尊びて續けしなり。されば枕詞にあらず。

たまづさの　使萬二　妹萬七　通ふ新古今　絶えたる續古今

萬葉二を始として所々に使と續け、或は同十及十二には君が使とも連ね、三には玉梓を使のこととして直ちに事だに告げずとも人ぞいひつるとも、又七には妹は花かもとも、妹は珠かもともいひ下し、新古今十二には通ふばかりとも、續古今二にははては絶えたるとも接續せしめたり。◇萬「玉梓の君が使の手折けるこの秋萩は見れどあかぬかも」萬「玉梓の妹は花かも足引の清き山邊にまけば散りぬる」萬「いつしかと待つらむ妹に玉梓のことだに告げずいにし君かも」この枕詞も明かならず。試にいはば喜式古名つしだまともたまづしとも見えたれば、たまづさともいひけむ。古俗消息を通ずるには、この草などをしるしとして送りたるより使に冠らしむる枕詞となりたるにあらざるか。又思ふにたまづさは玉蔦の事ならんか。然らばたまは褒むる詞つたは這ひ傳ふものなれば、或る人の心の他に傳ふるよりかく續けしならむ。つさとつたと通ふ例は壁土の中に入るるものをすさともつたともいひ、細かく切ることをすたすたにともつたつたにともいへば、かく云ひしなるべし。それより轉じては玉づさを以て使の義となし、事だに告げずとも、人ぞいひけるとも連ね、後には書簡の意にも用ひたり。妹と續

けたるは何の義なりとも解せられず。薏苡は一名を芋珠ともいひて、その實小なれど、極めて光澤あれば人の目を惹く。たまづさの芋といふを妹にうつしたるにあらざるか。或は管見抄にいへる如く、常に思ふことを玉つさに書きかはしたる妹と續くる義なるか、或は高保説の如く、妹にかからで花にかかるか。後考を俟つ。

【匠】玉はほむる詞、梓は弓なるべし。書札をたまづさと云ふ、弓の矢を射遣る如く、思ふ意を書き遣れば譬へて云ふか。使も思ふ意を傳ふることをたとへていふか。書札を以て往來すればいふか。又梓弓は男の秘藏して手に執るものなるより、女に喩へて妹にかけていふ。

【考】強て思ふに、玉はほむることば、津は助の辭、佐は章の字音にや。何ぞといはば文章もて遠く傳ふることは本より皇朝の上つ代には聞えず、ただから文字を借にし世より後に出來しことなり。然ればこの古言はなかるべき理なり。

【小琴】上代には梓の木に玉を著たるを使の印に持てあるきしなるべし。そは思ひかけたる人の門に錦木を多くたてしと心ばへの似たることにて、凡て使を遣る音便の志を顯す印に玉付たる梓を持て行くなるべし。さて後に文字渡り來て書を通はす世になりて、消息文は使のもて來るものなる故に、かの玉梓に準へてそれをも、同じく玉つさと云ふなるべし。

【苑】玉瓜(たまづさ)はからすうりの小きものにて、麗しきものなれば、妹に喩へたり。

【槻】久老云、契沖が考に梓は弓をいふ言にて、玉をつけたる弓をいふなるべし。さて弓を引偕るといふより、使の枕詞となる云々。つらつら考ふるに、玉梓の二字は全く假名にて、飛鳥(とぶとり)の略轉なるべし。さるは古へ鳥を目

て使とせることの多ければ使の發語とも、直に使をいへる言ともなれるなるべし。さてその使をたまともいふはたむの轉にて、あまだむかるをとめとも見え、たむと、とぶとは一つ言にて、たむは飛の古言なるを知べし。そのたとまとは近く通ふ言なればたまともいへるなり。この趣は鳥總(とぶさ)と同言と思ふよしあれば、玉梓は多武鳥總(たむとぶさ)ともいふべし。かくて鳥をしも使の事とするは雉頓使を始として古例多し云々。

【服】ことだに告げず云々、こは玉梓は今いふ書册なり。それは口にいふ如き語を書き付けてやれば同言を書るといふなり。人ぞいひつる云々、玉梓の使といふ意にて、この人をば使のことと聞くべきなり。妹は珠かも云々妹は花かも云々、こは玉づさの妹と續けたるにはあらで、珠と續き花と續きたるなるべし。前のは玉づさの玉かとも聞き、後のは玉梓の木の花かとも聞くべきにや。文章を玉梓といへれども、その梓は木の名なるに依りて花ともいひ、又玉といふは實のことにあてていひしなるべし。

【解】萬葉考に玉は褒むる詞、つは助辭、地は章の字の草にやと。本居氏云、上代には梓の木に玉をつけたるをしるしにもて步きしなるべし。そは思かけたる人の門に錦木を多く立てしと、心ばえの似たることにて、すべて使を遣る者信の志をあらはす印に、玉つけたる梓をもて行きしなるべし。さて後に文字渡り來て、書をかはす世となりて、消息文は使のもて來るものなる故に、かの玉梓に準へて、それをも同じく玉づさといへるなるべし。

【鐘】たまづさは飛翔といふ言のばの省れるたり。礫をたぶてといふも飛打(とぶし)の義なると同じ、輕太子の御歌にあまだむとよみ給へる、このだむとたまと音の通へるも飛翔をたまづさといふべきこと知らる。さて此たまづさを使の枕詞につゞけ云ふは、かの八千矛神の高志國御娵の御歌に急飛天馳使と申なし給へると同じ心ばへにて、使は

偏に速行を旨とするものなるが故なり。故上ッ代鳥を以て使の名としたる多し。

【略解】に春海云、陸奥にて男女の懸想するに、玉づさといふものを互に送ることあり。ことに桃生郡玉造郡などの山里にては常にすることにて、厚紙を折りて結ぶさま五十種ばかりあり。その結やうにて事の故由を知るよ其國人の語るを聞けりといへり。千蔭も早く村井敬義が陸奥へ行きて歸りし時、そを見せてしか語れり。下總國十三山田高村が說參考すべし。讃岐國にては女をよばふに、菓を結びて送るわざあり。今世に草の實の名に玉づさといふがあるも件の結に似たり云々。

【美】十六夜日記殘月抄に師說に玉梓は玉豆志の通音なり。字鏡竹部に筥子は玉豆志、高玉豆志など見え、古語拾遺には古語以レ竹曰二都須一とあり。本草和名・和名抄などには都之太萬とよめり。今の世にもズヾダマといふものにて、その實一むらに附て生るが故に玉豆志の附合とつづけたり。妹と續けしは相親む心もて續けしなり。さてやがて使の事にも又使は文もて行かよふものなれば、文のことにも轉じていへり。

【黑】撓梓（たまづさ）の束と續けたるにやと思へど然にはあらざるべし。飛躍なり。鳥も使ぞといへるに同じ。妹と連ぬるは使の告ぐる妹といふべきを使を省きて續けたるなり。

たまのを

長き萬、新古　短き心古十九　絶えじ萬、古　思ひ亂れ萬、古　繼ぎ萬十二　間もおかず萬十一　現し心萬十一、十二　惜しき盛萬十九　存へて拾遺

萬葉十には長き春日とも、十二には長き命とも、新古今には長き例とも、古今十九には、短き心とも連ね、萬葉三及十一には絶えじとも、絶えたる戀とも、七及十一には思ひ亂れてとも續け、又十二には繼ぎてもいへども、

十一には間も置かず見まく欲りとも續けたり。以上のは玉を貫く緒の或は長く或は短きもあり。緒の切るることあり、繋ぐこともあり。或は玉をしげく貫きて間もなきより、かく續けて比喩となしたるなり。又萬葉十一及十二には現し心とも、十九の長歌には惜しき盛とも新拾遺には存へてとも續けたり。これらのたまのをは魂の緒の義にて、喩にあらず。◇萬「たは言や人のいひつる玉の緒の長くと君はいひてしものを」萬「あひ思はずあるらん子ゆゑに玉の緒の長き春日をおもひ暮さく」萬「天地のよりあひのきはみ玉の緒のたえじと思ふ妹があたり見つ」萬「内日さす宮路をゆく子我が裳はやれぬ玉の緒の思ひ亂れて家にあらましを」萬「玉の緒の間もおかず見まく欲り吾が思ふ妹は家とほくありて」萬「たまのをのうつし心ややそかかけ漕ぎでむ舟に後れてをらむ」

【考】玉を貫る緒につきて長きと續け、次に玉は用ふることに隨ひて緒の長きも短きもあるべければ、短きことにも冠らせ、又緒より絶えじともいへり。貫きたる緒の絶えて數の玉の亂るるを思の亂るるに冠らしめつ。又同じ緒に數の玉を間なく貫きたるもて間もおかずてふ語に冠らせたり。終には斷れて、絶えたる緒より新しき緒に移し貫くをいひて、移しを顯し心に云ひかけたり。（友云萬葉考には貫きたる玉の緒のままに、彼此うつるをいひて受けたる句は現心なりとあり。今按據此冠辭考の說を後改めしか。）

【意】玉の緒といふは心を指していふなるべし。人の心は言葉にも述べがたき糸のごとなるものにして、いかなる細密の物にも貫かざることなし。故に名付く。

【服】惜しき盛に云々、こは專ら玉の緒といふより惜しきことを言ふを重ね出でたるなり。挽歌なれば玉の緒で

ふをば魂の緒といふ語をこめて見るべし。息の緒に思へる妹などいへる類の緒なり。ひたすらに命の惜しき盛といふのみにはあらず。玉の緒のをと語を掛けたり。

【解】うつし心又惜しき盛と續けたるは、魂の緒にて命のことなれば枕詞にあらず。大神景井が說に魂の緒の斷してふ心なりと、緒は生の緒などいふ緒なり。たまのをを命のこととするはこれなり。

【例】この枕詞萬葉に見ゆるは皆衣につくる玉の緒に比していへるのみなり。三代集に見ゆる歌は玉の緒、魂の緒二種なり。

【黑】うつつとかかるは美しなり。

たまはやす　武庫萬十七

萬葉十七に武庫の邊と續けたり。玉ともてはやす聟、又玉を磨き映す椋より地名の武庫にうつしたりなどいふ諸說あれども、美しき貝の濱邊に寄せたるが、光映ゆるより、浦の光景を述べて冠らせたるならむか。貝を拾ふことを古くより玉拾ふなどいへり。◇「玉はやす武庫のわたりに天傳ふ日の暮れゆけば家をしぞ思ふ」

【童】珠はやすとは珠は海にあるものなれば、珠多かるといふ心にや。

【管】玉はやすは玉の林といふ心なり。むこの浦をほめて玉しきみてるわたりなりと詠めるなり。

【考】或說に聟と續きたるかと云へり。凡聟てふものは、古き物語などを見るに、女の家に仕せ工上の如、愛ではやせば、さ有るまじきこととも覺えず。然れども又思ふに玉の光添ふる椋といひかけたらむか。むこ、むく音の僅に轉じていひ下すは冠辭の常なり。はやすとは榮あらするてふ語を延阿の反やなれば、はやすといひて、ここは

玉の光増さしむるをいふ。

【傳】たまはやすは玉映といふことなり。ゆを述べてやすといふは古言の格なり。今は此由にはあらじ。さて武庫の枕詞とせるは玉映向かしきといふ續なり。玉の光るはめでたきものなればなり。

【雅】玉映愛しといふ意にや。

【一言】武庫は海邊なれば、玉生る武庫と續きしなるべし。

【石】玉畔棕と續けしなりといふは强言なり。玉もてはやす畢と續けしといふ說に從ふべし。

たまほこの

道萬　遠道拾十二　みちのおく新古九　里人萬十一　手向の神六帖
栞も知らぬ六帖　たま／＼縣居家集　長ちはの神久老集　導き山齋集

萬葉一を始として道と連ねたるもの甚多く、道來る人、道の神たち、道のくまみ、道の邊、道の行合、道行編等萬葉のみにても道と續けるもの三十餘首あり。拾遺十二には遠道とも、新古今九には、陸奥とも連ねたり。又萬葉十一には里人皆とも、六帖四には手向の神とも、同五には栞も知らぬとも續けたり。六帖二に使と連ねたるは玉桙のを玉棒と誤り見たるなるべし。縣居翁の集にはたまたまと同音をくりかへして用ひ、荒木田久老は長ちはの神に冠らせたり。山齋集には導きと續けたり。◇萬「玉桙の道ゆきつかれいむなしろしきても君を見むよしもがも」拾『玉桙の遠路をこそ人はゆくなど時のまも見ねばこひしき』新古今『遠くあれど君にぞ戀ふる玉鉾の里人皆に吾こひめやも』六帖『玉桙の手向の神も我が如く我がもふことを思へとぞおもふ』六帖『下紐はとけてやつけぬ玉鉾の栞もしらぬ空に誑ぶれば』新古今『見てだにも飽かぬ心を玉ほこのみちのおくまで人のゆくら

む』この枕詞接續の意明かならず。試にいはば、たまは玉の義、鉾は字の如くなれば、鉾の身といふよりみちと轉じたるか。或は道は直ぐなるを貴びたれば、玉を飾りたる鉾の如く直きと比したるか。尙考ふべし。陸奧は道の奧なる義にて連ね、里人とは沿道の里人といふ義にて續けたり。蓋し足引といふを以て、直ちに山の意となしたる如く、玉桙を以て直に道の義となし、沿道の里人とも、道のべの手向の神とも、道の某ともいふ意にて連ねたるなり。

【釆】一説に當集相傳には桙に鞘あり柄あり身あり。されば玉桙の身と受くるなり云々。里と續くるは鞘のさと受くるなり。

【燭】或說（仙覺）に鉾は兵器の第一なり。道に出て立つ人、まづ鉾を先立つるなり。道のしるべとなる心にていふなり。玉は萬のもの褒むる詞なりといへり。亦云、古は國々の境も未別れず。道の行末も慥かならざる間、山行く人は栞をし、野を行く人は草を結びなどしける世には、鉾を作りてそれに旗をかけて、是をはたほこと名付けて道の迷ふべき所々に高く立て置きて、そを見て道の知べにしけるなり。よりて玉鉾の道とは續くるなり。又鄕村のしるしにもこの旗桙を立てたり。されば玉鉾の里ともよめり。定家朝臣の說には、道の程をば一里二里などいへば、玉鉾の里と續けたるもその心かと侍り。亦或は道のゆがまずして行くを鉾の直ぐなるに喩へて玉鉾といひ、とく行くをば繩手といふなどいへる說もあり。

【匠】道と續けたり。今案ずるに、その中に玉は鉾をほむる詞、道の直くなるを鉾の直きに喩へて玉鉾の道といふを正說とすべし。その故は唐土にても道を多く直きものにいへり。毛詩小雅大東之篇云、周道如砥其直如矢

云々といへり。その他例多し。又なはてといふも縄手にて直きをいふ。潘安仁藉田賦云、遐阡繩直邇如レ矢これに準ずるに鉾は直なるものなれば喩へたるべし。（精撰本には二の意なるべしといひて、この説の外大己貴神の廣矛を執いて國々を廻らせ給へるより道の枕詞となるか等の説をあげたり。）又里と續けたるは、先達の説に道には一里二里などいへばかく續くるか。今按成務紀に五年秋九月令₂諸國₁以國郡立₂造長₁、縣邑置₂稲置₁、並賜₂楯矛₁以爲レ表。邑はむらとも さととも よめば、仍て玉矛の里といふか。

【考】ただ鉾の身と續きたらむ。その由は履仲紀に劍刀太子といふことを大空に叫びつるも、劍刀とてひの一言に續きて、ひは即身のことと見えたり。又崇神紀に出雲たけるが佩ける太刀、つづらさは巻きさ身なしにあはれ云々、されば刀に身てふこと古もいひしなり。且古事記に佐比持神云々てふを合せ見るに、鉾の身とも續くべき事なればなり。

【國】玉鉾の道といふは、は鉀にて添へたる言なれば、枕言は必ちへ係れり。さるは古戈の柄にちといふ處のありしなるべし。凡て手にとりて引きあぐべき料に付けたる物をちといふ例多し。今幕などに乳といふものこれなり。されば戈にても取持つ所を然はいへるなるべし。

【諺】玉ぼこは神鉾ならむ。

【燕】玉鉾の里と續けたるは鉾の身は狭く利きものなれば、狭利の詞にかけたり。

【辨】矛の双利といふを、との音をちにうつし、路と受けたるなり。みちは直路なればなり。

【轉】玉鉾の道とは両賜鉾之道と云ふつづけなるべし。古、道といひしに二つの意あり。その一つは今もいふ野

道山道などの道也。その二は朝廷より平に任たまへる道にて『大夫之去去道曾(ゆくらふみちぞ)おほらかにおもひてゆくなますらをの友』とある是なり。

【解】試にいはば玉鉾の圓(まと)といふならんか。みちとまとはもと通ひて同言なれば、道といふにいひかけたるなるべし。さて玉鉾といふ玉は例の美稱ともいふべけれど、なほさにはあらで、鉾を圓く石劍などいひしものの狀になして、さて木のかぎりして作れるがありけむ。さて古事記にも天鈿槍といふこと見えたれば、玉桙といふ一種の稱なりしを知るべし。

【服】玉桙の里人云々、こは玉鉾の里と續けるにはあらず、玉鉾の里々の人といふ意なり。足引の木間、烏玉の駒などいへるに對へて知るべし。

【黑】威靈(たまこ)桙の御稜威とかかれるなり。もののふの八十うぢと續くるうぢも同じ。みちはみいちなり。いちうち同じ。

【折】玉桙のみち、最初の形はち即路に接してゐたのがみちにうつしたものと考へる。ちは血で『くはしほこちたる國』も双物と血との聯想から千にかけてゐるのらしい。但し動物神靈をみちともいふから双物の精靈にもみちといふたのかも知れぬ。

たまみづの　瀧つ都拾

拾遺の長歌に玉水の瀧つ都は云々、これは萬葉に激水、多藝の都と書きて、いは走る瀧とよみしを、一本にたまみづの瀧の都とよみしによりてかくいへり。瀧の瀬を流るる水は玉をなすこと常なれば、かくもいふべけれど、

尙古の接續を誤りたりといふべし。

【解】たまみづといふ詞心得がたし。解案には珠水激の三字を一句と見て義訓にいはなみとよむなり。流水の岩にあたる貌を義訓にかきたる字と見たればなり。

たまもかる　沖萬一　敏馬萬三　處女萬三　唐荷の島萬六　あまりて新勅十三

萬葉一には沖べと續け、三には敏馬を過ぎてとも、同集一本には處女（地名）を過ぎとも、六には辛荷の島とも、十一には井堤とも連ね、新勅選十三にはあまりてうたてとも接續せしめたり。歌の上にてはその時玉藻を刈る義なけれども、菰刈る淀、芦が散る難波などの如くその土地の著しき光景を取りいでて枕とせるなり。新勅選のは玉藻刈る蜑の背をとりてあまりてと續けたるなり。刈るに離を兼ぬといふは當らず。◇萬「玉藻刈る沖邊は漕がじ敷妙の枕のあたり忘れかねつも」萬「玉もかる敏馬を過ぎて夏草の野島が崎に船近づきぬ」萬「玉もかる辛荷の島にあさりする鵜にしもあれや家思はざるらむ」萬『玉藻かる井手のしがらみうすきかも戀の淀める我心かも」萬『玉藻かるをとめを過ぎて夏草の野島が崎にいほりす吾れは」新勅『戀をのみすまの汐干に玉藻刈るあまりにうたて袖なぬらしそ」

【服】玉藻は沖にも磯にも寄れども、刈るといふ語を離の意に兼ねて、沖べは端よりは間離りたるものなれば、玉藻かる沖と續けし物なるべし。唐荷島と續けたるも辛荷を刈ると通はしたるなり。井出の河にても專ら玉藻刈りけむゆゑ玉藻かると冠らしたり。

【貂】玉藻刈る處女は、蜑をとめなるを處女といふ鄕の名に冠らせしなり。今菟原郡に遠明村といふ處に菟原處

女の塚あり。遠明はをとめの呼遠なるべし。

【解】玉藻はもはら海底にて刈るものなれば、藻を刈る海底といふ意にて沖津と續けたり。奥とは海底をもいへばなり。

たまもしづし　出雲紀

崇神紀に出雲と續けたり。玉藻沈く嚴藻（いつも）といふ義より出雲へ轉じたるなり。

【續考】玉菨鎭石出雲人祭眞種之甘美鏡云々、菨字註云水草也、可レ食。生二水中一草在二草端一と。鎭石は沈なり。萬葉にしづく白玉といふも沈むことなり。出雲と續くことは、萬葉四に河上乃伊都藻之花乃云々、さればいつ藻とて花咲く有るなり。右の玉菨しづしも、玉菨は冠辭にて出雲を掛けしなりけり。或說に玉菨鎭石は玉石なりと、さらば出雲人祭ると上にこそあらめ。

【勝】しづしはしづきを延べたる詞にて、玉藻沈き嚴藻といふ意に續きたる出雲の序なり。

【古】玉藻沈着（しづかし）なり。藻類は水底に沈着て生れるものなればなり。

たまもなす　浮べ流せれ萬一　よりねし妹萬二　靡き萬二

萬葉一に浮べ流せれとも、二にはより寢し妹とも靡き寢し子とも、かよりかくより靡かひし妻とも、十一には靡きか寢らむとも、十九には靡きこい臥しとも續けたり。玉藻の水に浮べるより、宮の用材を浮べ流すに比し、又藻は水に靡くより婦女の思ふ人に靡くに喩へたり。考及解などの說又これに同じ。◇萬『もののふの八十氏河に浮び流せれ』云々、萬『玉藻なすかよりかくよりなびかひし妻』云々、萬『敷妙の衣手かれて玉藻なす靡きかぬ

らむ吾をまちがてに』

たまもよしヌたまもよき　讃岐萬二

萬葉二長歌に讃岐國に冠らせたり。玉藻吉と記したるにより、燭明抄及代匠記にはたまもよきと訓し、考にはたまもよしとよみたり。考の訓に從ふべし。かの國の海藻のいと吉き國なれば賞詞として用ひしなり。よしを二つの助辭と見る說、たまもを珠裳と說く說などあり。これらの說はいかがあらむ。

【燭】玉藻とは藻をほめたる詞なり。海の藻ならねど、川にも池にもよめり。玉もよきとは讃岐の國海邊の國にて、殊に藻のよきを出す國にや。弘法大師の書かせ給ふ詞に、玉藻所レ歸之島橡樟蔽レ日之浦と云々。これさぬきの國のことなり。

【考】玉藻よといひてぬと續けたり。吉は例の借字にて、よは呼出す辭、しは助辭のみ。ぬとは玉藻の波にぬえ臥すをいふ。ぬえ草の女にしあれば、夏草の相寢の濱、夏草の野島か崎などいへるは草の臥すをいひつる中にぬとのみ續けしを思へ。玉藻とは藻の實玉の如くなれば云ふのみ。

【詞】珠裳吉刺脱とかかる。余案するに、讃はもと賛に作れり。瓚とも同じ。瓚は賜の最上なり。岐は詩經の周の國なるより、賜吉讃岐とかく。

【檜嬬】布裳よ着とかくる枕詞と合するに、是も玉裳よさしぬぐと掛けたるならん。

【補】玉もよし讃岐云々のもよし三言助けにて、玉直貫きと係りしなり。さぬきは貢八百棹を奉ニ調進一と式に見えて、さなの貢といふ意なり。

【枝】元亨按に玉を貫てふ意か。さは發語にて竹玉をしゞに貫たれなどよめる意ならむ。

【解】これに二説あり。一には讃岐と續くるは沈着といふ意なるべし。藻類は水底に沈着きて生るものなればなり。さてさとしは音親しく通へり。又ぬとつは韻通ふ上に垂仁紀に赤裸之伊といふ劒の名を、舊事記に赤花と見え、又金作を加太之ともいふ例を思合せて、な行とた行の濁音とは親しく通ふ例なるを思ふべし。二にはよしは借字にて、所歸なるべし。さて玉藻は古彼の國の名産にこそありけむ。故、續けたるなるべし。

【石】玉藻よしは賞詞なり。

【黒】玉藻よといひて眞靡とかかれるなり。

たまゆらぐ〆たまゆらの　きのふの夕見し萬十一　露新古八

萬葉十一に「玉響昨日の夕見しものを今日の朝に戀ふべきものか」とあり。石上枕詞例にはたまゆらぐと訓み、萬葉枕詞解には烏瑟の誤とせり。又新古今八には玉ゆらの露も涙もと續けたり。玉ゆらとは玉の搖ぎ觸れ合ふないふ。よりて暫しとも幽かにともいふ意となれり。萬葉十一のは見しへかかるにて枕にあらず。新古今のは露の有様をいへるなるべし。◇『玉ゆらの露も涙も止まらずなき人こふる宿の秋風』

【石】玉ゆらぐは玉のゆりあといふ義なるを、りあをらと約めてゆらぐといふ。この續けざま枕詞とは見ゆれども、昨日と續けたる義知りがたし。

たむけぐさ　幣萬十三

萬葉十三の長歌に『をとめらに逢坂山に手向草麻とりおきて我妹子に近江の海の』云々と續けたり。たむけ草と

は手向種の嚢にて草は借字なり。古は布帛を神に奉る習あり。この布帛をもぬさといひたれば、うましもの橘などいへる類にて連ねたり。菅公の歌にこの度はぬさも取りあへず手向山といふなど照し見るべし。

【考】こは手祭種の麻と續けたるなり。今本に絲とりおきてとあれど、古より手祭に絲を用ふることなく、理もなし。麻の草字を絲と思ひ誤りしこと明なり。手向草に種々あれども皆悪し。たゞ手向の色品をくさといふなり。

【石】幣は神に手向くる物の第一とするものなれば、かく續けたり。

たもとほる　往箕の里萬十一

萬葉十一に徘徊往箕之里爾云々。徘徊の二字を契沖はたちとまりと訓み、眞淵はたもとほると訓み、服部高保はたゞずまひとよみ、往箕の里にかかる冠辭とせり。◇「徘徊往箕の里に妹をおきて心そらなり土はふめども」古語に徘徊の二字をたもとほると讀めり。さてたもとほり往くといふを、往箕といふ里名に轉じてかけたるなり。

【服】この徘徊の二字を板本にはたちどまりと片點せり。眞淵よまれしはたもとほりと改められつ。高保考へてたたずまひとよむなり。こは佇みて雪を見るてふ語をゆき見の里にいひかけて冠辭となせり。たもとほり行くとは俗に廻り道といふことにて、この集中には回の字を想てたもとほりと讀むなり。たは發言、もとほりは廻なり。さて徘徊の二字はたゞずむとよむ字にて、たもとほるとは讀みがたし。字書に徘徊は彷徨なりといへり。彷は立ちやすらふと讀む字、徨はたたずむとよむ字にて、彷徨は不レ忍レ去とて同所に佇むことなり。同所に立ち廻る意にて他所へ廻り歩行にはあらず。ふる雪をたたずみ見るてふ語なり。

【[illegible]】たもとほりは猶豫なりと註し、又不進貌ともあるは同辭のいひなるべし。

【解】こは徘徊往回といふ意の續なり。もとほりの切はみとなる。往箕の里は衣手を折回里などいふに同じ類なり。

たらちねの又たらちしの　母萬　親古八、拾遺十四

萬葉三には母の命と連ね、同七には母が園なるとも、古今八には親の守りとも、拾遺十四には親の諫めしとも續け、又萬葉五及十六にはたらちしの母と接續せしめたり。その他母と續けたるは少からず。又たらちねはなどいひて直ちに親の義に用ひたるも少からず。たらちは垂乳の意、ねは尊稱。よりて初は母のみに冠らせしを後には父母兩親にもかくるに至れり。たらちしといふはこの轉訛なり。後にはたらちをたらちめ等の語も生ずるに至れり。◇萬『たらちねの母のみことの言なれば年の緒長くたのみすぎむや』萬『たらちねの母か園なる桑すらもねがへば衣にきるちふものを』萬『たらちしの母が目見ずておほほしくいづち向きてか我がわかるらむ』古『たらちねのおやの守とあひ添ふる心ばかりはせきな止めそ』

【管】たらちし、常にたらちねといふ詞なり。母の乳味を垂れて養ひ立てるによりていふ。しは助詞。

【匠】垂乳根とは母は乳味の恩を垂て緑兒を人となせばいふか。垂乳爲と云ふも乳を垂ることをする人なれば云ふにや。

【考】垂仁紀に詔何爲（いかにして）日足（ひたし）奉答曰取二御母一定二大湯坐若湯坐一宜二日足奉一、故曰、眉日以日足奉也とある如く、赤子を育ひつつ日月を足らしめ人と成すは母のわざなり。よりて日足根（ひたらしね）の母てふを日を省き、しとちと通はせ、ねてふほめ語を添へて、たらちねの母とはいふなり。天皇の御名にも皇子にも具足、仲足、五十日足など申すも、

その生ましなし奉る乳母の氏、或は育ちませる地の名などを付け申せしなり。且紀に治養、持養などの字をひたすとよむも日足らすを略ける語なるを思へ。卷五に多羅知斯能母が手はなれ云々、斯は爾の草の誤なり。十六に垂乳爲母にいだかへ云々、これも爲は泥の草を爲として爲を書きつらん、たらち泥とよむべきなり。後世に母をたらちめ父をたらちをといへるは好事の人のわざなり。

【言】嫡乳根の母といふなるべし。嫡は母なり。乳なりと註す。

【苑】たらちねのたらちは足なり。ねは則ち根にて、本といふ意を以て男女共に稱るなり。たらちしやは、養したりや母と云ふ程の詞なり。

【紹】女親にのみいふが古言なること前編（考）にいはれたり。されど日を足す義としては日といふことを略すべからず。母の乳に養れておひ立つ事といふ説、立かへりて宜しく見ゆ。垂乳根はかたち、足ちねは乳哺の養足れるなり。いづれにても思ふてよるべし。

【解】帶乳根、足常と書けるは借字にして、たらちのちはしに通ひて足らしの意にて賛辭なり。ねも例の尊稱なり。母は親しくことに貴きものなる所以に足根の母とはいふなり。又たらちしといへるしはちに通ふ言にて、手摩乳のちに同じく、親しみ崇むる言、たらちねのといふに全く同じと荒木田氏のいへるが如し。

【右】考の說は強言なり。日足しといふ義を約めむに、日を省きて貫くべきものか。云々。考ふるには垂乳根といふ義にて、たらは垂あといふ義にて、垂顯はるる乳といふ義なるべし。乳は母の垂顯はれしものなり。根は尊稱なり。のは詞にて垂乳根母といふ義なり。卷十六及同六にも垂乳爲母と書きたるぞ正義なるべき。垂乳爲は

垂懸乳領る母といふ義なり。さるが上に、この枕詞萬葉集中すべて母とのみ續けて轉用なし。

【旋解】小兒は乳ならでは育ひがたし。かかれば足乳といひしにて、小兒を乳子といふをも思ふべし。

【黒】たらちねは足し妹なり。足らしは日を足らす意にはあらで、圓滿の意にて母を賞稱せるなり。播磨風土記志深里の條に多良知志吉備鐵とあるは足らししき吉備の鐵の意なるにても、日を足らすに非るを見るべし。たらちしはたらししきの往來言なり。

たわやめの　思ひたわみて萬六

萬葉六の長歌に手弱女の思ひたわみてと比したり。服部氏はたをやめのと訓みたり。

【服】女はすべてたわやかなるもの故にしかかけたり。

たわらはの　ねのみ泣き萬四

萬葉四の長歌に手小童のねのみ泣きつつと連ねたり。ねになくとは聲を立てて泣くをいふ。童兒はよく泣くものなれば、ここは童子ならねど比したるなり。

附

たまひりふ　石和甲信紀程

村岡良弼の甲信紀程には甲斐の石和の里にかくろに玉拾ふを以てせり。玉を石又は砂の中より拾ひ取る義にて續けたりと見ゆ。

ちの部

ちゝつく　倭姫命紀

紀に千々衝倭姫命とあり。眞髪ふる奇名田姫に於ける如く、ちちつくは倭姫にかけたる枕詞なるが如し。但し語義明ならず。試にいはば千々に齋くの義か、人々の敬ひいつくをいふ。

ちゝのみの　父萬

萬葉十三及二十に父の命とも、同十九に父とも連ねたり。命は尊稱なり。ちちのみとは一葉の樹の實をいふ。母といはむ爲にははそ葉のといへる如く、同音を重ねて調をなさむとて置きたるなるべし。

【仙】ちちの木は葉は楊梅の木に似て、葉は胡桃の如し。熱する時色赤し。鴨好みてこれを食ふと。

【考】こはちちといふ木の實を以て父に重ねたるのみ。ちちてふ木の實は伊豆國大島などにありて楊梅に似つと武人の萬葉註にかきたれば、かの國の人に問ふに慥に無しといへり。後相模の箱根の人に問ひつれば、ちちの實は知らず。ちちの木とは今いてうといふ木を、これが老いたるは乳房の如き物の垂るればいふならむといへり。

【苑】ちちの實とは橡(とち)の實をいふ。

【考略】これに同じ。

ちどり鳴く　佐保萬　吉野の川萬六

萬葉四には佐保の川瀬とも、さほの川戸とも、古今七及六帖十一には佐保の川霧とも、萬六には三吉野の川とも續けたり。大和の佐保及吉野川は千鳥の名所ゆゑ、ここは實景を見て詠ぜし歌ならねど枕詞として冠らせたるなり。

◇萬「千鳥なく佐保の川門の瀬をひろみ打橋わたす汝が來とおもへば」六帖「千鳥なく佐保の川霧立ちかへりつれなき人を戀ひ渡るかな」萬「千鳥なく三吉野の川音なす止むときなしに思ほゆる君」

ちばの 葛野紀

應神紀に葛野と續けたり。「ちばのかづぬを見れば百千足やにはも見ゆ國のほも見ゆ」葛野は山城の地名なり。さて接續の意は、契沖のいへる如く、葛は葉の繁きより、千葉の葛といふを地名に轉じたるか、或は千葉は田庭の義にて葛野のあたり一面田園なるよりいへるか。或は千葉は鳥羽にて二つの地名を連ねたるか。

【考】こは或人の曰はく、千葉之か。葛は繁きものなれば、そを宣はんとての枕詞にや。下總國に千葉郡あるもさる意にて付けたるか。和名抄山城國葛野(加止乃)今加豆奴とあるは、かづらの下略、かどのはどとづと五音通へりと、この說從ふべし。

【石】千葉の色香は泊て知られざる野と續けたり。かは光輝の例なれば色の上をも匂の上をもいふ辭なり。づは泊不知之義なり。後にかど野といへり。

【黒】ちばは田庭(たには)の約なり。田庭の葛野といふことにて冠辭にはあらず。下總の千葉も田庭なり。

ちはや人 宇治紀、萬十一、七

應神紀及萬葉十一に宇治の渡とも、同七には宇治の川瀬とも續けたり。ちはや人とは強早き人といふ義、うぢは

嚴の義。」逸早き人は嚴といふを、うぢの音をもてる地名にうつしたるなり。◇『千早人氏の川波をきよみかも旅ゆく人の立がてにする』尙次の千早ぶる宇治を參照せよ。

【冠】ちはや人うぢとは路早く打出と續くる言なり。又千は滿數の義なり。早人は勇士なり。物武の打出て輕く早き姿なり。

【管】ちはや人宇治。うぢはもと菟路と書けり。菟の走る道なり。ちはやは道早しといふ心也なり。もののふの道とく走るものをばちはや人といふ。兎も路走ることの早きものなれば千早人を菟に喩へてかくは續くるなり。

【考】ちはやぶるちはや人といふは、いち早きことなり。宇治と續けられたる意は稱德紀に宇治方夜伎時に身命乎不レ惜之天云々、このうぢはやき時とは、人の心の甚惡く鋭き時をいふ。遊仙窟に逃遁二字をうちはやきてふ語の意を知り、且つ古語なることを思へ、さてその宇治と稜威と同じ音にて、いちも又通へば何れも同じ意なり。故にちはやぶる宇治のわたり、ちはや人うぢともいひ下し給ふなり。

【傳】三十三に、ちはやのちを稜威と一つに冠辭考に解かれたるは違へり。稜威は別言なり。

【石】千早人は逸早人にて武士をいふ。武夫は氏あるものなるが故に千早人と枕に置きて、氏の川波、氏の渡とはたらかせていへり。

ちはやふる

神萬　金の御崎萬七　宇治萬十三　淺間岳後撰　吾大君後撰　齋の宮千
別雷續拾遺　朱の玉垣無居集　猛雄東歌　神流川甲信紀程

萬葉二、三、四、十一には神とも、同十一には神の忌垣とも、廿には神の御坂とも、七には金の御崎とも、三に

は人をとも十三には宇治の渡とも連ね、古今五には神代とも同長歌には神無月とも、同五には神南備山とも、十一及二十には加茂の社とも、十七には宇治の橋守とも、後撰八には神垣山とも、拾遺九には平野の松とも、同十には、三上山とも、十一には淺間の岳とも、同長歌には吾が大君とも、千載十一には神田の里とも、齋の宮とも新古今十九には香椎宮とも、續古今五には神路山とも、續拾遺二十には別雷のとも、小鹽の山とも續けたり。縣居翁集には朱の玉垣と續け、加藤枝直が集には猛雄と連ねたり。◇萬『玉葛實ならぬ木には千磐破神ぞ著くとふ成らぬ木ごとに』萬『夜並べて君を來ませと千石振神の社を祈らぬ日はなし』萬『千葉破神の忌垣もこえぬべし今は我名の惜しけくもなし』萬『千磐破金の三崎を過ぎぬとも吾を忘れじ牡鹿のすめ神』後撰『千早ふる神無月こそ悲しけれ我身しぐれにふりぬと思へば』古今『千早振賀茂の社の姫小松萬代ふとも道はかはらじ』古今『千早振宇治の橋守汝れをしぞあはれと思ふ年のへぬれば』拾遺『千早振平野の松の葉をしげみ千代も八千代も色はかはらじ』拾遺『千早振神南備山のもみぢ葉に思はかけじうつろふものを』後拾遺『千早振松の尾山のかけ見ればけふぞ千とせの始なりける』六帖『千早振る糺の森の松にしてそらなきしつる郭公かな』夫木『千早振る五十鈴の宮のますかがみくもらぬ御世を照すとぞ聞く』後撰『千早振るかみにもあらぬわが中の雲井はるかになりもゆくかな』拾『いつとてか我戀やまん千早振淺間の岳の煙たゆとも』夫木『千早振田上川の清き瀬に千歳を祈る夏はらへして』新拾『千早振雪のしら山わきてなほ深きたのみは神ぞ知るらむ』ちはやぶるとはいちはやぶるの略。いちは進早くなどのいちにて勢の頻きをいふ。はやは敏捷なるの意、ぶるは神さび大人ぶるのびぶると同じ。されば書記には殘賊強暴と記していちはやぶると訓せり。よりて鋭き神人に冠らせたるを本として、後には我大

君とも連ね、又噴火せる淺間の岳にも冠らせ、神といふより轉じて神を祀れる地名に係け、或はかみといふ語をもてる地名かみなび山、みかみ山等に推積せしめ、又かみの類音なる金の御嶽などとも續け、又加茂社と續くるよりその祭神なる別雷命にも冠らせたり。又いちはやきことを古くはうぢ。ともいひしより山城の宇治の地名にかけたり。

【伯】ちはやふるとは神のこの國天降り給ふことなり。ちはやとは道早しといふ詞。ふるは天降り給ふ詞なり。

【米】ちはやふるうぢの渡しとは、道早く經る兎といふ言なりと、先達申したれども、日本紀を撿するに道早く降る宇宙といふ儀なり。

【燭】いろいろの說あり。萬葉に千劍破亦千磐破など書けるによつて、天照大神の千の劍を破り給ふこととも、亦千の磐を破り給ふ故など云へる說も有るにや。或は神は茅の葉葺たる屋に、世を經て住み給ふ故ともいひ、又或は巫の服に千はやといふものを着て、神の前にその袖をふる故などもいひたり。この說は皆異說にして證ならざるか。日本紀には殘賊強暴横惡之神と書きてちはやぶるあしきかみと訓めり。舊事紀、古事記には道速振荒振國神と書けり。是皆邪神のことをいへり。この義によりては惡しき神を指してちはやぶる神とこそいふべけれども、歌のならびは何となく神と續けむ枕詞に用ひて、總じて善き神惡しき神おしなべてちはやぶると續けよめるなり。後撰集にはなる神にも千早ぶるとおけり。又千はやぶる人ともあり。惡しき神をちはやぶると云ふに通はして賊のうへをもかやうによむなるべし。亦宇治とも續けたり。亦拾遺集には我大君と續けたり云々。

【匠】さまざま異說あれども信じがたければ、燭明抄に讓れり。日本紀には殘賊云々、このちはやぶるといふ言

薬の心を思ふに、舊事紀に道速振と書ける心は、振は詞の助にて、善神悪神ともに神通迅疾にして、一念の間に千里萬里を隔てても到る心に道振といへるを、日本紀には心を得て、殘賊強暴の文字に拘らず、ちはやぶると訓めるなるべし。

【考】ちはやぶる神云々、こはいちはやぶる神てふ語なるを略きていへり。古事記には借字にて道早振云々と書き、紀には、理を以て殘賊云々と書きたり。ちはやぶるのちはいちを略けり。そのいちはいつと音通ひて、嚴き勢をいふが故に、いづに稜威の字を紀には書きつ。はやとは古事記に伊登志和氣王といふ同じ王を、垂仁紀には膽武別命とかきたり。訓と義を相照し見るに、膽は伊都を略けることと右にいふが如し。としは捷きなり。はやきなり、武きなり。さればちはやのはやはその武く疾きに同じぞかし。俗に氣のはやき、氣の鋭きなどいふ即是なり。ぶるは辭にて、神さび、神さぶる、宮び宮ぶる、夷び夷ぶりなどのぶりに同じくその有様をいふなり。又千はやぶる人とも宇治とも續けたり。宇治と續けたるは千早人の條を見よ。又千磐破金之三崎を云々、こは奈良の朝の歌にて、古今集にちはやぶる加茂の社、その後にちはやぶる香椎宮などいふ如く、神のます所にはこの語を冠らしむることとなれるなり。金御崎、いと畏き地ゆゑに、自さるべき神をいはひ來れるにぞあらん。

【詞】神代より磐石の庭轉して限なきが如く代々をふるの義にて、賛りて千磐葉磐といふの意なるべし。

【解】宇治とかかれるは、うぢは俗にいち强きなどいふいちと同言にて、平穏ならず烈しき心なる言なる故に嚴速ぶる宇治と續けたり。ちはやふるのちはたぎの約れるにて、たぎは瀧又激るなどいふ同言にて猛く烈くて難しき意、はやふるは、はやは疾く強き心にて、ふるはその形容をいふ辭なり。神名に甕速日、勝速日・熯速日など

の速日も、はやぶりの意にて皆同言なり。なほ速てふ言は速秋つ日子、速須佐之男、速ぶさ別などの速と同じくて、俗に早り男などの早りの言に同じ、紀に殘賊強暴とかけるは、事實の趣を想ひてかけるのみにて、ちはやぶるの言の本義に當れるにはあらず。金の御崎と續けたるは、千早ぶる荒ぶる神とも、千早ぶる人ともいふよりうつりて、何にもあれ荒く恐きをいふの言となれるなり。金の岬の浪荒くて舟人の畏み危む故に千早ぶるといへり。

【彦】三　ちはやのちは稜威にもあらず。宇治にもあらず。最の義にていの言を省けるなり。そはいちしろきも最白きなり。宇治は物部のことを宇遲人といふうぢにて、畏れず、懼れずして、敵に向ふ意なり。天宇受賣命を拾須女とも申すなり。云々。

【美】考になし。但し千を稜威の意といへるは悪し。此は最速ぶるにてぶるは備の綴言なり。そのありさまをいふ。

【竈】ちはやぶるは南部埃及の古都チバイに關することを意味せる語にして、チバールなる羅典語に當れるが如し。ちばやぶる神とはチバヤブル族をいへるものの如し。日本の千葉及千早とはこの Thebai をうつせし名稱なり。語原はテオス（神）とバイノ（行步）との合成なり。

千曳なし　大石の朝臣嚴足集

和田嚴足の集に大石の朝臣に冠するに千引なしを以てせり。千人にてやうやく引く石を千引岩といふ。よりて千引の如き大石といふを姓にかけたり。

ちりひぢの 數にもあらぬ 五十萬

萬葉十五に數にもあらぬと續けたり。ちりひぢは塵泥なり。身の不束なるに喩ふ。「ちりひぢの數にもあらぬ我故に思ひわぶらむ妹が悲しさ』

ちゆゑさす 竹田國 倭姬命世紀

倭姬命世紀に千五百枝さす竹田國と見ゆ。竹は枝葉榮ゆるものなれば多くの枝のさし出づる竹といひて、竹田といふ地名へかけたり。ちゆゑの訓、續紹に據る。

【紹】竹田國は伊勢多氣郡櫛田川の邊なるべし。ちゆゑさすは竹の千枝に榮ゆるをいふ。

つ の 部

つがねども　桃花鳥野 萬十六

萬葉十六につかねどもつくぬに至りとあり。つくぬとは大和國桃花鳥野を指すなるべし。杖はつくものゆゑ、地名のつくぬをいはむとて、反對につかねどもと置きたり。地口めきたる枕詞なり。

つがの木の　いやつぎ〳〵に 萬

萬葉一、三、十九にいやつぎつぎにと續けたり。つがは黄楊との說（眞淵）もあれど、今の栂なるべし。この木常磐にて年を經て蘗々生ゆる故に、代々打續きて絕えざることに喩へたり。且、つがの頭音に類似のつぎと重ねたるは、音調の面白きより特にこの木をかりていへるなり。

【考】つぎつぎと云はん料に冠らせたり。且、つかの木は常葉にて宜しければ、いづれはあれど、かかる事に用ひたるなるべし。或人曰はく刀、都の字どもを書きたれば、なほとがと訓むべきなりと、今考ふるに……（中略）……常葉なる松杉を舉げて萬代を譬ふるは常多けれど、いや續々と續けしには、必都賀の木といへるも、となへの便あらしめん爲と見えたれば、かたがた、つがの木と訓むべきなめり。又今人栂の字を用ふる木を山城にてはとがといひ、田舍にてはつがといへり。人はこの木によりてとかく思へども、栂は樅の類なれば、古別に名あることなし。和名抄にも樅はあれどもつが・とがなどの名は舉げざるなり。されば萬葉に栂の字を用ひたるを思ふに、古につが

の木とよめるは黄楊の事ならむ。黄楊は常葉なれば嗣々てふ語に重ねて祝ふにも背かず。且樛木と書きしは俗に犬つげともびんかともいひて木も枝も曲れる木あり。是黄楊の類なれば、同じくつがといふべきものなり。

【講】これは詩經の樛木のことをよめるなり。南有樛木とあり云々は、螽斯の詩の如く子孫衆多なる義なれば、樛木のいやつぎ〳〵にといひ、あるは五百枝刺といひ、萬代といひ、繁生といふ類、世嗣多きをいふならむ。

【解】つがとつぎとは音の甚近く通ふ故に重ね續けたるなり。後世栂字を書きてとがと呼ぶものなるべし。

【石】栂の木には枝に階あるが故に、いやつぎつぎと續けたり。

【黑】とがは俗にとがまつ又こがまつともいふ。本草圖譜卷四十二にはつがもみとあり。

つき草の　移ひ易く萬四　消ぬ萬十　うつし心萬十二、古十四　假の命萬十一　花色の帶續拾遺

萬葉四には移ひ易くとも、十には消ぬべき戀とも、十一には假りなる命とも、同十二及古今十四にはうつし心とも、續拾遺には花色の帶とも續けたり。鴨頭草(つきくさ)の花はその色青く他に染みて移り易きゆゑに、人の心の移るに比し、花の色の消え易きより果敢なき戀に喩へ、又色うつるより現し心に續け、又これより假の命とも連ね、花といふより花田色の帶にかけたり。◇萬「月草のうつろひ易くおもへかも吾がもふ人のことも告げこぬ」萬「あした咲き夕は消ぬる月草の消ぬべき戀もあれはするかも」萬「月草のかりなる命なる人をいかに知りてか後もあはむちふ」古「うち日さす宮にはあれど月草のうつし心は吾がもはなくに」續拾遺「つき草の花田の帶はとけそめぬかへらぬ色を誰にとはまし」

【管】月草のかりなる命。月草は實草なればかりなる命といへり。

【考】月草の花、色たやすく物にうつろひ付くを、他し人に心のうつるに喩へたり。古今に月草の移し心は色ことにしてとよめるも同じ。又これを現心と轉じていひかけたり。又月草のうつろひ易く云々、こは衣にすりつけたるが、頓て色の變り易きをもて、人の心の移ふに喩へたり。上のは物にうつるをいひ、これのは色の變り易きをいふ。ことわり別なり。又この花の朝に咲き夕に萎むにより、消ゆとも、かりとも續けたり。和名抄に鴨頭草(都佞久佐)とあり。月草は借字なり。衣を摺るにつき易きによりて、つき草ともいふなるべし。

【言】此花にて染めたる色はいかなる術にても止まらず。水雫かかれば忽に散失する物なり。又さなきにも暫にして色渝るものなり。是譬は月の圓缺の一日一日消長して自若ならざるに似たるよりして月草と呼び侍るにや。

【石】月草のうつし心云々、このうつは空なり。しは領るの靈にて助辭なり。あだなる心を空領心といふなり。月草は露草にて散ることもろく、花色の物にうつり易きが故に比喩へていへるなり。

つきさかき　いかし御魂紀　又いづし紀

神功紀に撞賢木嚴之御魂と見ゆ。つきさかきは齋き榊の義にて、神事に缺くべからざるものなれば嚴之御魂といはむが爲に冠らす。嚴之を魚彥はいかしと訓み守部はいづと訓めり。

【釋】兼方案之、撞賢木者立榊之義。

【續考】こは記に伊都加斯賀母登(いつかしがもと)とあるを、垂仁紀に嚴橿之本といふ意にて、撞は借字、齋のいを略けるならむ。嚴橿は齋橿なるべし。こは神木をいふなり。依りて嚴は字注威也、敬也猶ゝ尊とその意なり。

【雅】こは齋賢木にて伊豆の枕詞なり。神祭る賢木は忌清むるものなるゆゑに續く。伊豆は清きことなり。

つぎてくる　中の湊萬二

萬葉二の長歌に中の水門と續けたり。こを契沖枕詞としたれど、百船の續き來るといふ意なれば、枕詞にあらず。

つぎねふ又つぎねふや　山背記、紀

記紀共に仁徳天皇の條に山代川とも山代女とも連ね、萬葉十三には山背道（やましろぢ）と續けたり。こは解しがたき枕にて、古より諸說定らず。愚考によれば、つきねふと清音に呼びて、つきね草生ふ山背と續けたるなるべし。和名抄防己（豆木禰久佐）と見え、我が邦到る處に生じ特に畿內地方の陰地に多し。每春一尺ばかりの莖、古根より叢生す。花は圓く小くして白色なり。實の形によりて後世には二人靜と呼ぶ。さておふなふといふは叢生、芝生、豆生、苑生などいふに同じ。山城の地この草多きよりかく續けしならむ。やは呼びかけたる詞なるのみ。萬葉に次嶺經とかけるにより次々に嶺を經る山と續くと說くが如き、又續苗生山と續くと說くが如きは誤なるべし。

【燭】萬葉に次嶺經と書けり。山の嶺々次ぎたりといふ意なり。山城の國は外の國に優れて山なみのうるはしく續ける國なり。云々。山城の國は山背國とかけり。これは近江國を山の前にして山の後の國といふ稱なり。

【考】山外（やまと）の國より山背の國へは數多續きたる嶺々を踰過て至る故に、この冠辭はあるなり。（冠記の說に據る）

【傳】三十六　つぎねふやは續苗生なり。やはことといはむが如し。歌ひ出したる辭なり。なへを切めてねといへり。續苗とは山の樹を伐り取りたる跡に、又續ぎて樹を生し立てむ料に植うる苗をいふ。生はその苗をかねて蒔き生する田を苗代といふ如く、かの山の樹の續苗を生する地を山代といふなるべし。凡て山の用は材を出すを主とする故に、即材を伐り取ることを山といふて、これはその伐り出すべき材の續苗を生ずる地なるを以て山代と

いへり。萬葉に開木代とも書けるはこの義なり。さればこの枕詞は續苗生之山代といふ意に續けたるなり。

【[illegible]】山は産の事にて、能生萬物といふ。又城は成也人産城といふ、子を産するにとる。さればば山城は生々不窮の意にして不窮生山城の國とはいふにや。

【[illegible]】山背はもと家座代の意なれば、繼土丹やましろと續けたるならむ。

【解】こは續木根生にや。つぎきはつぎと約れり。つぎとはつづき連れるよしなり。きねとはただ木のことなり。ふは原といふに同じ。さて山代とは、苗代のしろにて樹林のさかひありて、一構かこみたるをいふ言なり。

【石】こは次々山根歴といふ義にて、山代路の形勢なり。枕詞にはあらず。

【解】大神景井がいはく。續根生知母（やまし）と續きたるならむか。續根は和名抄に及己豆木爾久佐とも見えたる同言にて、年々にその根その根に續々と根の生へかはるをいふ。さて知母は和名抄に本草兒草、和名、夜萬之とあり。新撰字鏡、康頼本草擬などには、山止古呂（やまところ）とありて、根のやや古りゆくままに、新根の生へつくを取りて、藥種に用ふるものなり。故に續根生知母（やまし）といふ意に山背にいひかけたる枕詞なり。

【臆】つぎねふ山城川とは双生を意味せる希臘語スングネスの『ツギネス』となり、語尾『ス』の『フ』と訛りしものなるべし。埃及の山城川の冠詞にして意ふにアポローン神話に起りし地名なるが如し。

つ き 弓 の

こやりこやる記　思かへさぬ新續古今

古事記に槻弓のこやるこやりと見ゆ。こやるは臥すといふ古言、槻にて作りたる弓は、伏射とて横にこかして射ることありければ、人の起臥の臥に喩へたるなり。新しき世のものながら、新續古今の十五には『引くかたに人

の心はつき弓の思ひかへさぬ中ぞ苦しき」と見ゆ。こは槻弓といふに人の心は着くと兼詞になし、下は弓の縁語にてかへさぬに續けたり。

【紹】古事記に槻弓のこやるこやり、梓弓立てり立てりも云々、弓を立ふせして射る用をもていひよせしなり。臥をこやすといふも古言なり。轉（ころが）せるの義ときこゆ。展轉をこひまろびとよむ。こけまろびといふに同じ。古製の弓は尺短くて伏射とて弓をころがしふせて射しとなり。歌は立居起臥に思ふといふなり。

【石】弓には起臥あるが故に、起方をたてり。臥方をこやるといふ。是も槻弓の如くと比したるなり。

つくし櫛　さして 拾六

拾遺六にさして逢ふべきと連ねたり。櫛は頭に挿すより日を指して逢ふといふへ轉じたり。『別るれば心をのみぞつくし櫛さして逢ふべき方を知らねば』而して上句は別るれば心をのみぞつくし櫛とあれば、筑紫櫛は枕詞にして、上二句を承け、心を盡しての兼詞になしたり。

つくばねの　見ねども 拾十一　この裳 後十六

拾遺十一に『音にきく人に心を筑波嶺のみねども思ふ思はんや君』とあり。筑波嶺の峯に見ねといひかけたり。且枕詞自らも心を着くと筑と兼ねたり。これと同じ續けは風雅又續拾遺にも見えたり。又後撰十六にはこの裳と續けたり。こは萬葉十七に筑波嶺のをてもこの面と見え、古今賀部に、筑波根のこの面かの面とあるを據として、この面といふよりこの裳と轉じたるなり。◇『限なく思ふ心はつくばねのこの裳やいかにならむとすらむ』

つくば山又つくばの山の　つくづく 拾

清輔集に『つくば山つくづく物を思ふかな君を見ざらむほどの心を』とあり。又拾遺の長歌には、筑波の山のつくづくにとも連ねたり。同音反覆の法によりてつくづくといふ副詞へかけしなり。

つゝじ花　匂へる君萬三　匂へる妹萬十三

萬葉三の長歌に匂へる君とも、十三には匂へる妹とも續けたり。花の色うるはしきを人のかほよきに喩へたるなり。にほひといふは、古くは香のみにあらで色にもいひたり。ここは色につきていふ。

つなじとる　氷見の江萬

萬葉十七に氷見の江と續けたり。越中氷見浦のほとりは、つなじといふ魚の名高き産地なりしより、かく冠らせたり。つなじは魚の小き程の名といへり。

綱手繩　苦しき新古　たゆたふ源氏

新古今には苦しきと續け、源氏にはたゆたふと連ねたり。綱手繩とは船の引綱をいふ。引綱を手繰るのくるの音より苦しきにうつし、綱は絶もするよりたゆたふに轉じたり。◇『川舟の上りわづらふ綱手なは苦しくてのみ世を渡るかな』『琴の音に引きとめらるるつな手なはたゆたふ心君しるらめや』

つなて引く　海萬十一

萬葉十一に海と續けたり。綱手とは長き綱をいふ。海上にては海人が長き綱を引けるよりその狀をあげたるなり。代匠記に出したり。

つねならぬ又**つねしらぬ**　人國山萬七

萬葉七に常不人國山云々。管見抄にはつねならぬ人國山と續けたりといひ、枕詞解には不の字下に知字落ちたるかといふ說に基きて、つねしらぬと訓みたり。いづれにても人國山へ冠らせたるにて、この山は大和吉野川の上にあり。接續の意は人の國、即ち外國は常に馴れてあらぬよりかく連ぬ。◇『常しらぬ人國山の秋つぬのかきつばたをし夢に見てしかも』

【管】つねならぬは人といはん爲なり。人間世の無常なる心にてかくつづけたり。

つぬさはふ　磐之媛記　磐余の池紀　石見の海萬二　石村山萬二　岩殿山甲信紀程

仁德記には磐の媛とも、繼體紀には磐余の池とも連ね、萬葉二には石見の海とも、同三には石村の道とも、石村山にとも續けたり。つぬとは蔦の古言にて、そのさし蔓ふ石といふを、いはといふ音をもてる人名地名に冠らせたるなり。さはふにつき多延ふといふ說あれど、今守部の說に從へり。◇『萬二つぬさはふ石村もすぎて泊瀨山いつかも踰えむ夜は更けにつつ』記『つぬさはふ磐之媛がおほろかに聞さぬかもうらぐはの木よるましき川の隈々よろぼひゆくかもうらぐはの木』

【釆】石には角の多くさし出てあるなり。亦かのししといふものは角を岩に掛て臥たるなり。それをさはると云。又鹿は木草の中を行くに角さはれども滯らず、岩などにさはれば行ことなきを角さはふと云といへり。

【燭】石見と續けたり。顯昭云、角の字につけてすみとよめるは僻事にや。石見の國に角といふ所ありと見えたり。されはつのといふ所を立ちさへて見せぬ石とよめるなり云々。これは萬葉に角障經とかきたれば、つのさふるとよめる義に就いていへるなるべし。或說にかもししといふ獸は、岩に己が角をかけてねるものなり。よりて角を

さふる岩といふなりと云々。この義信用しがたし。この角さはふは岩にかどかどの有りて、物にさはる心なるべし。

【匠】つのは角なり。石にかど／＼のありて物にさはれば斯くは續くるなり。

【考】こは蘿這石と續きたるなり。古は角、綱、蘿を相通はしていふが故に、蘿をつなともつねともいへり。さてつぬさはふといふは、ぬさの反ななれば、つなのなを延べてつぬさといひ、はふは蔓の這なり。磐余とかくも石村と書くも同じくて、大和高市郡にある地なり。

【解】荒木田氏の說に絡石多蔓(つぬさはふ)といへるなるべしといへり。皆石と續けたり。荒木田氏の說よかるべきか。

【石】考の說は覺束なし。このつぬさはふはつぬ多生といふ義にて、つぬといふ菅の多はに生ふる石といふ義なれば、つぬといふもの一種あるなるべし。今はこれも知る人なくなりぬるなり。

【後言】蘿蓋延(つぬさはふ)にて磐と云はん枕詞なり。古くは蘿葛類の蔓をつぬともつなとも通はし云ひける故に、その名をた行に、又通じてつたとも云て何れも同じことなり。

津の國の　何は古十四　名には後十一、拾五　泣かす拾十六　來や後十三　存へ後拾
ほのみしま江詞九　まろやは金八　見つ新勅

古今十四にはなにはは思はずとも、後撰十一には名には立たまくとも、拾遺の戀五には、名には違はずとも、拾遺十六にはなかすと見えてとも、後撰十三には來やとも人をいふべきにとも、後拾遺の十六にはこやことつくるとも、又ながらへゆけばとも、詞華九にはほの見しま江とも、金葉八にはまろやは人を芥川とも、新勅撰十六には

見つとも續けたり。以上攝津國に浪華•長洲(なかす)•昆野(こや)•長柄(ながら)•三島江•御津などいふ名所あるより、同音異義の何は、名には、哭かす、來や、存へ、見つ等の詞に轉じ或は兩義をもたせたり。まろやはと續けたるは、津の國には葦の丸屋多きより我といふ古言の麿やとかけたるなり。◇古「津の國の何は思はず山城のとはに相見むことをのみこそ」後「津の國の名には立たまく惜みこそすくもたく火の下にこがるな」拾「人知れず思ふ心は津の國のなかすと見えて袖ぞくちぬる」拾「津の國の人をば來やといふべきにひまこそなけれ葦の八重葺」後拾遺「しばしこそ思も出でめ津の國の存らへゆけば今忘れなん」金「津の國のまろやは人を芥川君こそつらきせゞは見えしか」新勅「津の國の見つとないひそ山城のとはぬつらさは身にあまれども」

つばさなす　あり通ひ萬二

萬葉二に鳥翔成あり通ひつつと連ぬ。鳥翔成を舊訓とりはなすとあるを、考にはつばさなすと改め、攷にはかけるなすと訓せり。今考の説による。つばさは鳥の義。なすは如くの意。鳥の如くたまず通ふよし比したり。ありは、あり／＼てのありに同じく存への義なり。◇萬「つばさなすあり通ひつつ見らめども人こそ知らね松はしるらむ」

【解】鳥の如く亡魂の飛び翔けりつつ空を通ふ意に續けたり。

【美】鳥翔成。按に説文に翔は回飛也とあれば義を以てかける文字なり。さて成は諸註に如くの意なりといへれど、此は常の成とは異にて、作(ナス)又は生(ナス)などの意なるべし。崇神紀にやまとなすおほものぬしとあれば、日本作大物主なり。本集（萬）卷六に百樹成山は木高しとあるは生の意と聞ゆ。云々。

つばなぬく　淺茅か原萬八

萬葉八に淺茅が原に冠らせたり。つばなは茅花（ちはな）の轉にて、春の頃兒女がこれを拔きとりてままごとの料をなすこと、田舍にては今も行はるることなればかく連ねたり。◇『つばなぬく淺茅が原のつぼすみれ今さかりなり吾が戀ふらくは』

【服】淺茅原といはむ爲につばなぬくと冠らしめて、目前につばなぬくにあらざれば則冠辭なり。つばなは淺茅の花なればなり。

つぼすみれ　罪拾

拾遺長歌に大原野邊のつぼすみれ罪犯しぬる云々と見えたり。菫を摘みといふを罪に轉じたり。必竟は罪といはんが爲に設けたる序にて枕詞にあらず。

【詔】春野の菫草をつむを罪犯すにかけたり。つぼ菫は葉の丸きをいふ。かの花の色少し淺し。

つまかくす　矢野の山散木集

俊頼集に『つまかくす矢野の山なるかつの木のつれなき戀に我も年經ぬ』と連ねたり。こは妻を隱す屋といふ轉にてやの音をもてる地名に冠らせたり。誠に妻を隱せるにあらず。萬葉に妻隱とあるを讀み誤りてかく續けしならむ。

つまぐりの　つまづく柿園詠草

柿園詠草につまぐりのつまづくと連ねたり。つまぐりは爪にて繰る義か。同音を重ねて調となす。

つまごもる を佐保紀　屋上の山萬二　矢野の神山萬十

武烈紀にはをさほといふ大和添上郡の地名に冠らせ、萬葉には屋上の山とも連ね、同十には矢野の神山とも續けたり。接續の意諸說ありて一定せず。試にいはば、紀のは、夫籠る小佐保と唯夫の所在をいひたるにあらざるか。影媛の契りし平群鮪の殺されしも奈良阪なれば、佐保のつづきなれば、然か解せらる。屋上山にかけたるは夫婦共にこもる屋といふをその音をもてる地名にかけたるなるべし。矢野の神山もこれに準ず。手の端によもや矢といふ說はむつかしく覺ゆ。◇記「春日のかすがを過ぎつまごもるを佐保を過ぎ」萬「つまごもる矢野の神山つゆ霜に匂ひそめたり散らまく惜しも」

【燭】つまごもるは妻隱ると書きたれば、つまかくすともよみたり。是は妻を隱すといふ心にて續けたり。人知れぬ屋に置くを隱れ妻とも、こもり妻ともよめり。世の常にも妻をば人には見せぬものにて、奧やに籠め置きつれば、妻かくす屋とはいふべし。

【管】人の妻はつま屋とて常にその屋にかくれて外の人にまみえぬものなり。よつて妻ごもる屋とつづけたり。

【考】こは端の手にこもる箭と續く意なるを、冠辭なれば手てふ語を省きてつまごもるとよめるにや。さてをさほに冠らせたるは小箭といひかけたるなるべし。箭を古さともいひしは萬十三に「投ぐるさの遠かり居て」と詠み、卷廿に「あらしをのいをさ手挾み向ひ立ち」ともありて、即ここにもをさとよめるを前のをさほに合せ見よ。右の矢野は固より屋上に對らせたるも同じく矢といひかけたりとすべし。

【苑】爪ごもる箭と續けたり。箭は手に握りもつものなれば然かいへり。矢をさといふは古語、又佐保にをの屬

をつくるは、小初瀬などいふに同じ。

【解】妻を率て隱る屋といふ義に續けたり。かの八雲立の歌を合せ思ふべし。なさほのなは地名の方も枕詞よりの精の方も添へたる詞のみにして、別に意なく、さほは狹舍の意なり。さは狹く迫りたる意なるべし。凡ほといふ詞は含まる意なる言なり。さればここは含り籠りたる隱所の謂にして妻をゐて隱る佐含と續くなり。

【黑】矢のつまといふは筈のところをいふ。因て又接するに集籠にて樹木の茂れるをいふ。再云、つまこもるは妻籠とある說よろし。萬二此歌の一木につまこもる室上山とあるを思ふべし。

つみの木の　罪といふ罪漫吟集

漫吟集には罪といふ語に冠らするに罪の木のを以てせり。つみの木は一名山桑といふ。字鏡に桁木、豆美乃木とあり。同音を重ねて調をなす。

つむ稻の　積む素性集

素性集に『波間より大藏山につむ稻のつむとも盡きじ君がよはひは』とあり。稻積のつむといふを年月を積む意に續けたり。序歌の第三句なり。續貂に擧ぐ。

つゆ草の　露の命小大君集

小大君集の長歌に『露草の露の命もまだ消えで』云々とあり。同音を重ねむ爲め、且は果敢なき命に喩へたる露を繰り返し出したるなり。

つゆしもの　けなば萬二　消易き萬十二　おきて萬二、三　をぐらの山續古今　古里人續後拾

晩手の稻葉續拾遺

萬葉には消なば消ぬべくとも十二には消易き我身とも比し、同二及三には置きても連ね、二の長歌には秋さりくればとも、十七の長歌には秋に至ればとも續け、後のものながら續古今十九には小倉の山とも、新千載十六には岡邊の眞葛とも、續後拾遺六には古里人とも、續拾遺には晩手の稻葉とも接續せしめたり。露霜の消易きに人生を比し。その生ずるをおくといふより、人を置きて來る意に轉じ、露霜の降るは秋なるより秋に冠らせ、そのふるといふを古里に、おくといふ音に近き地名小倉の山及岡にうつしかけたり。◇萬『うつせみのをしきこの世を露霜の置きていにけむ時ならずして』續古今『つゆしもの小倉山に長居してほさでも袖の朽ちぬべきかな』新千『露霜の岡部の眞葛うらみ侘び枯れゆく秋に鶉なくなり』

つるぎたち

身に添萬二　名萬十一　磨ぐ萬十三　己が心萬九　日嗣の太子紀　戸田川甲信紀行

乎夜爾神社神名帳　石床別神社神名帳　三ごせうけらが化　世にぬけいでし藩翰譜

萬葉二の長歌には身に添へねばとも、十一及十四には身にそふ妹とも、同四、十一、及十二には、名の惜しけくとも連ね、十三には磨ぎし心とも、二十にはいよよ磨ぐべしとも、九には己が心よりとも、履仲紀には日つぎのみことも、神名帳には乎夜爾神社とも石床別神社とも續けたり。又萬葉十三には劒太刀さやをぬけ出て伊香胡山とも見えたり。加藤千蔭はみの一字より三とせと續け。齋藤彦麿は世にぬけ出でしと人のうへにうつしいへり。◇萬『劒太刀身そふ妹がとりみかね哭をぞ泣きつるてこにあらなくに』萬『劒太刀名の惜しけくも我はなし君に逢

はすて年の經ぬれば」萬「劍太刀いよよ磨ぐべし古ゆさやけくおひて來にしその名ぞ」萬「常世べにすむべきものを劍太刀しが心よりおぞやこの君」劍太刀は武夫の身に添ふるものなるより、妻を身に添へと比し、劍太刀には特に名を附する習なるより、己が名譽の名にいひ下し、そのとぎ磨ぐを身を修め心を磨く意に比し、又との音をもてる地名に轉じ、短刀を古はひともいひしより日嗣御子に冠らせ、太刀の緒といふより乎夜爾神社にいひかけ、石にて砥ぐといふを石床別神社と連ねたるなり。己が心は長流・契沖・雅澄・燭夢は心に續けたりといひ、眞淵はなか心とよみて名と同じ續なりといへり。こは刀になかごといふを身中の心に喩へたるなるべし。さやをぬけいで云々は上二句が伊香胡といはむ序に刀擊するを古語にかくといへり。いの音を隔てて續けたるなるべし。

【管】劍太刀さが心から。つるぎたちは心からといはん爲なり。さて太刀に心といふものあり。柄にさし入るかたを中心といふ。からといふは即柄なり、よつてさが心からといふ。

【燭】つるぎたちさやをぬけいでいかご山云々、こは劍を拔きていかくといふ心なり。太刀をかくとは擊つ心なり。いかくのいは添へたる字なり。日本紀に八廻擊刀と云々。

【匠】刀にはその鍛冶の名を彫りつくる故に名をいはんとておく。心とつづくるは刀の柄に刺入る所をなかのこといふ。心の字をなかとよめば、なかごと心とは同じ詞なる故にかくつづくるなり。

【考】身にそへ寢ねば云々、劍は人の身にそへて佩くものなれば、夫婦の身の相添ふに喩へたるにて、こは身に添ふといふまでかかれるにや、又劍刀太子王てふは身と續けたりと見ゆるによれば、ただ身の詞にのみかかれるかとも覺ゆ。その名惜しけくも云々、こは叢雲、草薙などやうに、劍にはたより名をつくれば、名といはんとて冠

らせたるなり。磨ぎし心云々、磨ぎて清きを心の潔きにいひかけたり。又劍刀太子王云々、こは劍刀の身をひともいへば、ひの一語にいひかけたり。さやをぬけいで云々、こは太刀を鞘ふりぬき出して撃と續けたり。こは序歌にて冠辭にもあらねど、つるぎたちいかごの山なども續けつべければ、擧げつ。

【苑】つるぎたちさやをぬけいで伊香胡山云々、つるぎたちよりいかごへ續くといふ證あれど、八背といふ語はなし。

【詞】ひつぎと續くるは北極の第一星を日とし天皇とし太子となすといふよりして、日月の皇子といふ語意にして、劍の鋒突に通はしたるならん。又汝か心と續くるは、劍にはなかごあり。中心といふよりしてなか心と續けたるなり。

【紹】乎夜彌神社云々、石床別神社云々、太刀の鞘とかけ、又つるぎを石に礪ぐとかけしなり。

【一言】いかごとかかるは鐺と一言にかかれり。

【鐘】履仲紀に劍太刀太子とあるは、燒太刀のへつかふとよみたると同じつづけにて、鞘を隔て身に逢るゆゑに隔着といふ意もてかけたる辭なり。

【解】劍太刀身にそへ云々、こは唯劍太刀の身とかけたりともいふべけれど、思ひ合すれば身にそふといふまでにかかれるなり。名の惜しけくも云々、これは名の枕詞とせるなり。さてなとは古刄あるものをいひしと見えたり。なといふ所由は難の意にてもやあらむ。たちといふも斷の意又つるぎのぎも刈の意なるを思へ、劍の片刄なるものをかたはといふにて知るべし。鉾鋩などいへる如きなも刄をいへるなるべし。斧鑿などいふにも通音なる

べし。又つるぎたち、しが心より云々。これは劒の心とかかれるなり。

【冠】つるぎたち名とつゞけたるなは精好なり。片なのなに同じ。天のぬな井とあるも考合すべし。

【通】上古刀身を比とも云ひし。ここも劒に身と云つゞけなり。又或說に刀の身は鞘を隔てゝ體に著くるが故に隔著くと云て目闕に云かけたるなり。

つるぎはの　身を切りくだく拾六

拾遺六に、『別るるをしとぞ思ひつるぎばの身を切り碎く心地のみして』と連ねたり。劒の刄の如くに身を切る思ありと喩へたり。且うへに惜しに鶺鴒をいひ掛けたれば、つるぎばにも劒の刄に劒羽をいひ掛けたり。劒羽とは鶺鴒の背尾に立つ小羽の名にて、形劒の類に似たるよりかくいふ。

つゑたらず又つゑたらぬ　やさかの歎萬十三

萬葉十三の長歌にやさかの歎きと連ねたり。やさかの歎とは彌甚の歎の意にて、つゑとは一丈といふ古言なり。されば丈足らぬ八尺といふを轉じて、かく續けたるなり。萬葉に杖不足と記したるにより、つゑたらぬと詠み來りたれど、つゑたらずといふ方、枕詞の意に叶へりと覺ゆ。

【匠】杖はもと丈の字なり。丈夫の策なるが故に、後に木を添へて杖にはつくるなり。五十八十を百たらぬといふ如く、一丈に足らねば、杖足らぬ八尺の嘆とはいへり。

【考】仲哀紀に身長八尺また上にも我がなげく八尺の嘆をよめり。なげきは長息なり。

【冠】こは杖突きて行くとも越えがたきをいへるにて、杖にも叶ひがたしといふ義なり。杖にも及びがたき偏坂

の歎きと比したるなり。

【石】こは杖突きて行くとも越えがたきをいへるにて、杖にも叶ひかたしといふ義なり。杖にも及びがたき喘吸の歎きと比したるなり。

ての部

手間の關　手間六帖　手さへ漫吟集

六帖に「八雲立つ出雲の國の手間の關いかなる手間に人さはるらむ」とあり。手間とは仕事の隙に費す時をいふ出雲の意宇郡（今は能義郡）にある手間の關のと序に置きて同音を反復して調となす。漫吟集には手さへと續けたり。

てる月の　飽かざる君萬十二　桂の山續古今　清き心山齋集

萬葉十二に飽かざる君と連ねたり。照月は飽かず對ひたきものなれば比したるなり。續古今廿には桂の山と續けたり。月の桂といふ語はいひ馴れたるより、轉て山城の桂山にうつしたるなり。山齋集には清き心と比して連ねたり。◎「荒玉の年の緒長く照月の飽かざる君やあす別れなむ」

【擬】照る月は見れども飽かぬもののゆゑいへり。これを照月の明とのみ係るかと思ひしにさにあらず。月は夜すがら見て、翌は早朝に餞別るものなれば、幸に翌別る人によみて調べたり。今も詠まば、後朝の歌などに照月のあかぬ別れを云々など續けんか。

てをの音　ほと／＼し拾十九

拾遺十九にほとほしかると連ねたり。ほとほとしとは、危きといふ意なれば、工匠の使ふ手斧の音のほと／＼と

音のするを、殆(あやう)しの義にとりなしたるなり。但し序歌の第三句なり。◇『宮つくる飛騨のたくみが手斧音のほとほとしかる目をも見つるかな』

【貂】拾遺に云々、危殆の字をほとんどとよむに同じく、はてばていかなる目をや見ると嘆きするなり。六帖に『不二の山なげきこるてふ斧の柄のほとほとしくもなりし程かな』これは不二の山を仙境にいひなす物語をもて斧の柄の朽しといふ古事をとり合せて、程久しうなりぬと恨むことなり。手斧の音ほと〳〵とは代木丁々といふに同じ。

との部

とがの木の　とがといふ科漫吟集

漫吟集には科といふ語に冠らするに栂の木を以てせり。同音を重ねて調をなす。栂は萬葉につがといへると同じ。

ときぎぬの　思亂れて萬十、十一、六帖

萬葉十及十一に思亂れてとも縒亂れてとも比したり。古今六帖六にも思ひ亂れてと喩へたり。洗ひ張せむ爲に解きたる衣の帛片の亂れ易ければ喩に假るなり。◇六帖「とき衣の思亂れてうき草のうきても我はありわたるかな」

【考】解きたる衣ははばきれきれなどになりて亂るるものなればかくいひかけたり。

ときつ風　ふけひの濱萬十二

萬葉十二に吹飯の濱と續けたり。潮時の風吹くといふより紀伊の濱の名に係けたり。◇『時つ風ふけひの濱に出居つつあがなふ命は妹が爲こそ』

【考】こは時つ風ふくといひかけたり。吹飯の濱は名所集には和泉國に有りといへるは何によりけむ。清正集又大和物語の歌によるに紀伊國にありと契沖いひけり。

ときはなる　松本甲信紀程

村岡良弼はその紀行に信濃の松本に冠らするに常磐なるを以てせり。

とこじもの　打こひ臥す萬五

萬葉五の長歌に打こひ臥してと連ねたり。床じ物にて、じものは状之の義。床の如く打臥してなり。

【解】こは床じものなり。草柴などを手折取り敷きて、床の如くに打臥すといふなり。

【石】床自物なり。枕にあらず。

とこなめの　たゆることなく　萬一

萬葉一に絶ゆることなくと比したり。とこなめとは水底の石にかびの着きて滑かになりたるをいふ。そは絶えず生ずるものなれば、月日の絶ゆることなくと喩へたり。又石上枕詞例にかしこしと續けたるを擧げたれど、こは枕詞にあらず。

【檜】水中の古き巖に水苔の如く滑の附くものなり。それを常滑といふ。

【石】とこなめは、水底の小石にて滑常に絶ゆることなきものなるが故に、比して絶ゆることなくと續けたり。畏しと續けたるは、滑石重く並びたる河は渡るにいと畏ければなり。

とこ世のかり　率ゐる列ねて　續後紀

續日本後紀に率ゐる列ねてと比したり。楫取魚彥の續冠辭考に引きたれど、序と見るべきか。

【續考】雁は常世へゆき來るといへば、しかいひて彼が連ね飛ぶ如くに、大法師等率ゐる列ねて來れりといふなり。

とこよもの　橘　萬十八

萬葉十八に『とこよものこの橘のいや照りに我大君は今も見ること』とあり。橘は古常世の國より多遲間守が傳へたるものなれば、その本原をいひて冠らせたるなり。

【考】常世の國なる物の橘といふなり。さればその木をいふにて侍れど、かかるは冠辭とする例なり。

ところづら　とこしくに萬七　尋ね行く萬九

萬葉七にいやとこしくにと連ね、九の長歌には尋行ければと續けたり。ところづらは野老をいふ。蔓草なり。同音を重ねて調となし、次のはその如くと比したるなり。古事記傳に野老は常葉とあれど秋に至り葉は枯る。◇「すめろぎの神の宮人ところづらいやとこしくにありかへり見む』

【解】古事記傳に田中道麿が説を擧げて曰はく、冬薯蕷は野老なり。いやとこしきと續けたるは、とこてふ言を重ねたるにてもあるべく、又常葉なる故にもあるべしといへり。これに從ふべし。萬葉九のは野老を求むるにはその葛を尋ねゆきて、根を掘り取ればかく續けたり。

となみはる　阪手萬十三　阪なる川鈴屋集　鳥居の君蓬廬集　さかしらに巖足集

萬葉十三の長歌に阪手を過ぎと續けたり。鳥の網張る阪といふを大和の坂手といふ地名に轉じたるなり。蓋し鳥捕る網は坂に張ること多ければなり。阪手池は磯城郡川東村にその跡あり。本居長宣の長歌には阪なる川と、蓬廬集には鳥取の君、和田巖足の集には阪の音をうつしてさかしらにと續けたり。

【仙】阪とは鳥の飛ぶ所に網を張つて鳥をとるをいへば、さかと、いはんとてとなみはるとおけり。

【匠】阪手は延喜式九、神名上云、十市郡阪門神社、平群郡にも阪門あれどもこの續を見るに十市郡なるべし。

【考】こは集中に阪鳥の朝越えましてと、よめるが如く、木深き谷邊に宿れる鳥どもの朝に群れ立ちて山のたわなどを飛び踰ゆるを、そこに網張り設けて取る故に、鳥の網はる坂とは續くなり。坂路は山の挾める所にあるも

のにて、鳥もそこを飛び越ゆれば坂といへり。景行紀に坂手池を作るとあり。大和か。

【石】鳥の羅張るのりを略き、のあを約めてなとなしとなみはると讀み坂の手と續けたり。枕詞とはいひがたし。

とのぐもり　雨布留川萬十二

萬葉十二に雨布留川と續けたり。との曇りとはたな曇りに同じく、雲の棚引き曇るをいふ。さて枕詞の意は、大和の布留川をいはむとて、との曇り雨降るといひかけたるなり。針川といはんとて唐衣ぬふ針川と續けたる類なり。◇『とのぐもり雨布留川の小浪（さゞらなみ）まなくも君はおもほゆるかも』

とぶさたて　舟木伐る萬三

萬葉三には足柄山に舟木きりと續け、十七には舟木伐るとふ能登の島山と連ねたり。とぶさ立てとは杣人が木を伐りたるとき、その梢を折りて、もとの切株の所に立て、山神を祭るをいふ。されば御船の木を伐ると續けたるにて、もとは枕詞にあらず。足柄山にかかるといふ說あれど、舟木へかかるなるべし。後にはとぶさは木末をいふに至れり。とぶさは木を切る具といふ說などもあれど取らず。

【采】八雲御抄には木の梢なりといひ、或る先達は草木の末を切りて、木伐りたる代りに立つるをいふなりと、仙覺は斧まさかりをとぶさといひ、これを打立てて木を切るをいふと。案ずるに木を伐るとき、木足とて切屑の散るが、鳥翅の飛ぶに似たるをとぶさといふ。木足の輕く散るを足柄とよせたるにや。又鳥の翅は神の幣（ぬさ）の如くなり、鳥の飛ばむとては、先翅を立てて足輕くといふことにやと覺ゆ。

【匠】顯昭は鳥は鳴かむとても、立たむとても、羽をも尾をも働かすものなれば、とぶさ立て足輕き山といふか

といはれたれど、十七のは直ぐに杣木きるとのみなれば誤なり。こは杣木ならでも祭ることなれば、枕詞にあらざるべし。とぶさを木の末なりといふは袖中抄の説なり。和名抄に、䳄乎不作支選射雉賦に青䳄莎靡、徐爰云、莎草名。薛綜云、青莎雜レ樹則莎色青也、青、雉尾閒青毛如ニ莎草之靡一也。かかれば何んの鳥の䳄も是に准へて梢を鳥總にたとへて名づけたる意知りぬべし。

【精匠】杣木を伐る時はさまざまに木靈山神を祭て、木の末を伐たる跡に刺立てこれを手向るをとぶさたてといふなり。

【考】こは宮材樵材などを山に入りて採る時、その切りたる木の末を折りて同じ株の中に立て、山神を祭るをとぶさ立つるといふなるべし。その故は延喜式に齋斧乎以伐採氐本末乎波山神爾祭氐中間乎持出來氐云々。さて梢をとぶさといふは、今も遠江の土人の大木を伐りては、その株に同じ木の抄を切りて立つることあり。右に木末を山神に祭るといふ。即如此して手向くるならん。さて木抄をとぶさといふことは、又遠江言に木の最末をとぼさきといへり。越前土佐などにてもさいふと、されば遠先の意なるを、ぼとぶの語を通し、且さきのきを略きてとぶさといふなりけり。

【槻落葉】翅と鳥總と同音にやと思へる云々。鳥總立は翅多知にて、足柄山に續けしは卷十四に母々豆思麻、安之我良乎夫禰、安流吉於保美も足輕き意につゞけたり。

【解】こころみにいはゞ、鳥總とかけるは借字にて、制析料の器名にはあらざるにや（袖中抄にも童蒙抄にも云ふ。とぶさたてとは鐇（たつき）たてといふ詞なりといへり。）とぶさは斂物析（こぶき）といふにて。古材を析く器をしか稱へしこと

のありしなどにもやあらむ。立つとはその器をふり立つる山なり。嚴男云、旅双多立にやと。

【石】木の末を伐りて山祇を祭るをいふ。これも枕詞にはあらず。仙人のする業をまづいへるなり。木の末をとぶさといへるは、手の末をたぶさといふに等し。とぶさは宛てたる字の如くにて、鳥のすがれば、木末の撓むが故に、鳥總と號けしならむ。

【旋解】登夫佐は撓總の意かも知るべからず、撓は多和々、等乎々など常云。そのとをの反となればなり。かの木の最末は多く枝茂りたわみたれば撓總ともいふべきなり。

【黑】攷云遠總なり。木の末のふさやかなる所をいふ。こは冠辭にはあらざるか。烽火といふも遠火なり。

とぶたづの　たづたづし萬十一

萬葉十一に『天雲に羽うちつけて飛ぶ田鶴のたづ〳〵しかも君しまさねば』と同音を重ねて調をなさむが爲におけり。たどたどしとは心細し又は覺束なしの意なり。

とぶとりの　あすか萬　村田の君藤垣内集　板鼻の宿甲信紀程

萬葉一及二にはあすかの川ともあすかの里とも、十六にはあすか男と連ね、六には早く來まさねと喩へたり。早く來と喩へたるは義明かなり。あすかと續くるに諸說あり。飛鳥の多き明日香といふ意か、飛鳥の如く足速きといふより足輕の意にて明日香といふ地名へ掛けたるか。鳥の飛ばんとする時は必ず足をかがむるより足かがむの音よりあすかの地名にうつしたるか。或はあすかといふよく飛ぶ鳥ありしよりいひしか。定めがたし。或はこの時代に瑞鳥の出現せしにより年號も改まりたる程なるよりそれを記念として飛鳥の明日香と名づけたるにや。飛

鳥をあすかと訓むは春日をかすがと訓むと同じく後世うつろひたるなり。◇萬「飛鳥の明日香の里をおきていなば君があたりは見えずかもあらむ」藤垣内集には鳥の群といふより村田の君と連ね、甲信紀程には板鼻の宿に續けたり。こはいと族といふより類音をもてる上野の地名に掛けたるならむ。

【匠】天武紀下、「三十五年秋七月乙亥朔戊午改元、曰㆓朱鳥元年㆒仍名㆑宮曰㆓飛鳥淨御原宮㆒これはとぶとりのと訓むべきか。同上是歳（元年）營㆓宮室於岡本宮南㆒即冬遷以居焉。是謂㆓飛鳥淨見原宮㆒これをばあすかのと訓むべきか。共にあすかと訓まば、再出づべきいはれなし。飛鳥をあすかとよむは、この御代の義訓にて、人皆知ることなれば、註を出さざるにや。若共にあすかと讀まば、この時までは明日香と書けるを、朱鳥の改元に付けて新にあすかと義訓せるによりて、上巻のをも後を初にめぐらして書きかへしと心得べきにや。この義ならば飛鳥の字につきて、それよりとぶとりのあすかといふなるべし。とぶとりはこの時よりの詞にて、あすかの名に相叶へることありて置くにはあらず。

【選】飛鳥の足かがみなり。云々。

【考】こはあすかてふ鳥を明日香の地にいひかけて、とぶとりとは置きしなるべし。白鳥の鷺坂山、天飛ぶや輕路池などの類なり。今いすかと云ふ鳥はありてあすかといふはなし。音通ふ故か。尤もあすかといふも古きものには見えず。されども例によるに鳥の名なり。

【苑】飛鳥の幽かと續けたるなり。

【槻】飛鳥の阿須賀といふ言の意を按るに、飛立鳥はあわただしければ、あわつけきと略き轉してあすかとは續

けたるなり。わはあの餘韻に含む。つとすは常に通ふ例なり。けきとかの一つ音なるよしは上にいふ。あわつけきといふ詞は物語文に見えたり。新撰字鏡に惶悚をあわつとあり。俗にあわてるなどいふ同意の言なり。

【詩】海篇直音に凡鳥必擧ニ双足ニ方能飛といへり。あすかのあすは足なり。かはかかむの三字がさなる。

【檜】この連けは飛鳥の幽とつづくとも、飛鳥の足をかかむる意ともいろ〳〵いへり。

【國】書紀に天武天皇の十五年改元曰ニ朱鳥元年一仍名レ宮曰ニ飛鳥淨御見宮ニ云々。飛鳥とは足蟲といふと同じくて、ただ鳥のことなり。さて大宮の號を然いふからその地名にも冠らせて飛鳥の明日香といへるなり。

【袋】萬葉集中に群ら鳥の朝立つ、朝鳥の通ふなどもありて、朝は鳥の塒より出でて、まづ飛び渡るものなれば、飛鳥の朝と續くるを、さとすと通はして續けたるにや。諸說穩かならねば本抄に委し。

【黑】とぶ鳥の獦子鳥とかけたり。天武紀に朱鳥の瑞あり。仍て飛鳥淨御原宮と稱すとあり。とぶ鳥の稱は靑き雀によりていふなり。

【鷹】飛鳥は高く上るものなり。あすかとは上るを意味せる羅丁語アスカンシヨなり。上陸地上登攀は凡てアスカといふなり。

【豊】あの音を隔てて飛鳥の巣とつづけしものなるべし。水長鳥安房（羽につづく）石走の甘なび山（なびにつづく）と同一例なり。

【折】獦子鳥と本集に言ふ鳥は本名あで、此時代既に發音の困難なところからあ鳥というてゐたのであらうか、古くはあだけで通用したことは、一音名詞や一音地名のあることから考へて知られるから、即飛ぶ鳥のあとつづい

たのが、あすかに限つて用ひられることになつたであらう。

とほつ神　我大君萬一、三

萬葉一及三に我が大君と續けたり。大君は人間の胤ならぬ尊き神といふ義にて、賞詞として置けるなり。

◇「清江の岸の松原とほつ神我大君のいでましどころ」

【考】天皇は即顯津御神にして、遙に人の類ならねば、遠つ神とは申すなり。

【石】帝は世人には獨遠く離れて人には坐さざりけり。これや遠に泊る神吾大君と稱へ奉りしなり。枕詞に非ず。

とほつ國　黄泉の界に萬九

萬葉九の長歌に黄泉の界にと續けたり。黄泉はよみと訓す。闇の義にて死したる人の往く國なり。されば遠つ國と置きたるなり。

【續考】古事記に黄泉國、紀にも黄泉をよみともよもとも訓す。天は玄、地は黄の意にて、地下を黄泉といふなり。よみとは闇の意、蘇生をよみかへるといふも、黄泉より歸るといふなり。

とほつ人　松浦萬五　松浦佐用姫萬五　雁萬十七　獵路の池萬十二

萬葉五には松浦の川とも松浦佐用姫とも、十三には松の下道とも連ね、十二には獵路の池とも、十七には雁が來鳴かむとも續けたり。遠方にある人を待つといふを同音の松といふ字を頭にもてる地名人名にかけ、又雁は遠方より往來すること、恰遠行の人に似たれば、かりといはむとて、遠つ人と置き、又かりの音より石見の獵路池に冠らせたるなり。

【燭】遠つ人を待つといふに松浦といひかく。又遠つ人雁といふ心に獵路池と續けたり。かりぢは獵道と書きたれども、雁の心なり。歌には鳥獸も時によりて人とは詠むなり。時鳥をこの集には來つ人とよめり。
【考】かりと續けるは、遠き胡國より玉章をかけて來りけむをもて、雁の使などいふことあれば、遠の人雁といふなり。雁を頓て遠つ人といへるはいとをかしく思ひよりたるものなり。物語に猫をいづら此人といへるも似たり。
【石】こは遠きに泊る人といふ義にて、旅に出でたる人をいふ。よて待つといふことを活かせて續けたるなり。かりと懸りしは日(か)ありといふ義なり。あはかの韻に含めたり。旅に出で今は日ありといふ義なり。

とほどほし　越の國記

古事記上にとほどほし越の國にとあるを、契沖が說に、たゞ遠々しき越の國と宣へるか、越は彼方(をちかた)なれば、枕詞に置かせ給へるかと兩樣にいへり。

ともし火の　明石萬三

萬葉三に、明石(あかし)の大門(おほと)と續けたり。燈火の明しといふを播磨の明石浦に係けたり。◇『ともし火の明石のなだに入る日にや漕ぎ別れなむ家のあたり見ゆ』
【考】居待月あかしの門といへるが如し。この燈火の明しと續けたるぞ人麿ぬしの比の口つきなめり。後に古今にほのほのと明石といひしは、今昔物語に書けるこそ、誠なりけれ。
【攷】燈火の明しと續けしなり。久老は留火之とあるにより、ともり火のとよむべしと訓つれど語の活用にうと

きにて非なり。

ともたちの　みがほし山萬

仙覺抄にともだちのみがほし山云々、友達は互に見たければみがほし山とよそへたりといへり。これは丹治眞人の筑波山に登る時の歌の句にて、儕立とあるを、律師の誤讀せるにて枕詞にあらず。

鳥がなく　あづま萬二、三、九、十八

萬葉二、三、九には、東國とも、十八にはあづまとも、二十には吾妻をの子とも連ねたり。曉鷄の二聲三聲鳴くや東の方より赤くなりゆくより東に冠らせたるなり。

【仙】あづまと云ふあの字にあくといふ心あれば、鳥はあくるを見てなくものなればかくいへり。

【釆】鷄が鳴く東と云は曉に至ては雌先、うと鳴くを聞て雄卽鳴くなり。因て鳥が鳴くあが妻といふ。

【燭】顯昭いふ、あづまといふことは阪東をいふなり。日本紀七に日本武尊、弟橘姫を忍び給ひ、碓氷の嶺に上りて、東南の方に望みて三たび歎きて曰はく、吾嬬者耶故に山東の諸國を號して吾嬬國といふ。玄中記云、東南有㆓桃都山㆒上有㆓大樹㆒、名曰㆓桃都㆒枝相去三千里、上有㆓天鷄㆒日初出照㆓此樹㆒鷄卽鳴天下鷄皆隨㆑之鳴。今案するに、東南に天鷄初てなくに、天下の鷄皆なくといへば、東國を鳥の鳴くあづまといふか。日本紀云日神閉㆓磐戸㆒幽居之時、思兼神聚㆓常世之長鳴鳥㆒使㆓長鳴㆒云々。この心は鷄鳴きて後日神は出給ふと見えたり。これはつねのやうにも叶へり。これは思兼神の謀に龍宮城の鷄をとりて、磐戸の前に鳴かしめて夜は明けたり。日神出でさせ給へと申す心なり。これよりして日の出でんこと近くなりて、曉に鳥は必なくことになりぬ。云々。

【考】鷄は夜のあか時になく故に明といひかけたり。記にあづまといへるを景行紀には吾妻と書き、仁賢紀には吾夫を訓みてあがつまともあれば、あづまのあはあかを略きていふなり。然れば鷄が鳴くあと一言にかかれる如くなれど、實は吾てふもとの語によりて明といひかけたるなり。

【貂】あか時といふをあとのみいふては、語をなすべからず。すべて鳥が音をもつて名とすることは、西土にもここにも例多し。これは鷄のなく音のあゝと聞ゆるを以ていふにはあらぬか。

【緒】鷄は夜の明くる頃鳴けば、あの一語にいひかけたりといふも如何あらん。魚彦願ふに、記に誘又謂の字をあともふとも訓む。鳥は友呼びかはして群飛ぶものなれば、鳥が鳴きあとむと續くか。とむとつまとは同音なればなり。あとむは集むの義か。

【一言】鷄は夜のあく時になく故に明とあの一言にかけたり。

【解】鷄が鳴くぞ、やよ起きよ吾夫といふ心にて續くなるべし。

【石】如何なる義とも知りがたし。鷄は東よりなき始むるものか。考ふるにこはあづの二音に續けたるなるべし。あつは顯れ續くこと果なしといふ義なり。鷄鳴けば夜明けて萬物見あらはれ續くといふ義を活かせて續けしなるべし。

【折】あづは建築の一部の名處であらう。鷄がそこで時をつくるので、あづを起したのだらうと考へられる。あづは今のづしの類であらう。

鳥が音の　きこゆる海萬十三

との部

萬葉十三の長歌に鳥が音の聞ゆる海と續けたるを名高き海にかかるとし、服部高保の續冠辭考にとりたれど、枕詞にあらざるか。

【服】鳥が音とは聞ゆるといはん爲めの冠辭なり。譬へば越の海、紀の海、筑紫の海などいふ類、何國までも兼ねて音に聞えたる荒海なるべし。檜原山は名高き山とて、『なるかみの音のみ聞きし纒向の檜原の山をけふ見つるかも』とよめるなどを思ふべし。さて鳥の音てふは爰は鷄の聲なり。曉を告ぐる聲は遠く聞ゆるものゆゑ、則鷄の音の聞ゆる海とはよめるなるべし。

鳥がよふ　羽田のなにも紀

履仲紀に羽田の汝妹と連ねたり。鳥が飛び通ふには羽を以てするより。羽田といふ姓の貴女にかけしなり。

【考】鳥の飛び通ふ羽とうけたり。羽田は大和にも河内にもあれど、紀の語によれば、有馬郡の幡多か。

鳥さすや　さへづる國鈴屋集

鈴屋集に鳥さすやさへづる國と續けたり。とりもちにて鳥をさすや、囀にかかりたる鳥の切に囀るものなるより、外國人の鳥語するが如きもの言ふに比したるなり。（或は鳥さすやは鳥なすの誤か。）

鳥じもの　朝立ち萬二　なづさひ萬四　海に浮きゐて萬七　はぐくみ藤垣内集

萬葉二には朝立ちいましてとも、同四にはなづさひ行けばとも、七には海に浮き居てとも續けたり。じものは狀の轉にて鳥の如くの意、鳥の朝立つを人の朝旅ゆくにもためらひ行くにも比し、又水鳥の浮べるが如く人の海上にあるに喩へたり。藤垣内集にははぐくみと連ねたり。

【考】海にうきゐて云々、舟の海に浮べるを水鳥に喩へたるなり。
【解】始のは鳥の埘を刺立つ如く、人の刺立ちゆくをいひ、中のは水上に居る鳥の浪漬傍（なづさひ）といひ續け、終のは鳥の浮居るが如く、船の水上に浮ぶをいへり。

とりならす 笛吹川甲信紀程

甲信紀程にはとり鳴らす笛吹川と續けたり。義かくれたるなし。

とりよろふ 天の香具山萬一

萬の一の長歌に『やまとには村山あれどとりよろふ天の香具山』云々とあり。取よろふは取よそふなり。軍にきる鎧も身をよろひてかこむ物なれば、よろふといふ用の詞を體にいひなして名づくるなり云々と、代匠記にあげたれど、只の形容句にて枕詞と見ざるをよしとす。

なの部

ながたをる　多武山萬九

萬葉九に、「打手折多武山」と續けたるを古くはうちたをると訓みしを、代匠記精選本にはながたをると改めて枕詞となせり。但し古點によるべきか。うちたをるの條を參照せよ。

なきことを　磐余の池拾十二

拾遺に『なきことをいはれの池のうきぬ繩くるしきものは世にこそありけれ』の歌あり。身に覺えもなき無きことを云はれといひて、大和の磐余の池にいひ掛けたり。下句に苦しきものは世にこそありけれと受けたれば、單純なる枕詞にあらで兼詞を旨とせるが如し。續貂にこれをとりたり。

なき名のみ　立田の山拾九　高雄の山拾九　辰の市拾十二

拾遺九には立田の山とも、高雄の山とも、十二には辰の市とも連ねたり。無き名の立つといふを轉用して、立田の山、辰の市の如き大和の地名にいひかけ、又無き名の徒に高しといふを、たかの音をもてる山城の地名に冠らせたり。但しこの頃の枕詞は兼詞多く、ここも歌の上にては、無き名の立つといふを含めたり。◇『なき名のみ立田の山の麓には世にもあらしの風や吹くらむ』『なき名のみ辰の市とは騷げどもいざまだ人をうるよしもなし』『なき名のみ高尾の山にいひいづる君はあたごの峯にやあるらん』

なくこなす 慕ひ萬三、五 言だにとはず萬十三 哭のみし泣かゆ萬十五 ゆきとり探り萬十三

萬葉三及五の長歌には慕ひ來ましてとも、十三にはことだにとはずとも、行き取り搜りとも、十五にはねのみし泣かゆとも連ねたり。なすは似すの意にての如くといふに同じ。泣く子供のやうにと喩へたるなり。言だに問はずとは物もいはずとの意、ねのみとは聲に立てて泣くをいふ。

【考】嬰兒の泣きて母を慕ふに喩へ、又いまだ物もえ言はぬ程の兒に喩へて、死しては答せぬをいへり。

【服】ゆき取りさぐり云々、こは夫旅に立つ折り、宿に置きたる妹を、諸人いひ遊んやと心置きてよめる歌なり。ゆきとりさくりといふは、則里人などの妹が許へ行きて我との中を遮りてふ語にかけて、さてその下に梓弓と續けつる時は、その行取避りは又則靫取持といふ語に通へり。

なくたづの ねのみし泣かゆ萬四 尋ね古十七

萬葉四の長歌にねのみしなかゆと比したり。ねのみとは、哭のみと書くに同じく、聲たてて泣くをいふ。泣かゆとは泣かるの古言なり。たづは鶴なり。又古今十七には、尋ねと同音を重ねむ爲に係けり。◇古『君を思ひ起つの濱になくたづのたづねくればぞありとだに聞く』

なく鳥の 間なく萬十二

萬葉十二に間なく時なくと連ねたり。鳥の鳴く音のやまぬやうに戀の止まぬに比したるなり。◇『戀衣きならの山に鳴く鳥の間なく時なし吾が戀ふらくは』

なぐはし又**なぐはしき** 吉野山萬一 狹岑(さみね)の島萬二 稻見の海萬三 忍山倭姫世記

萬葉一の長歌には吉野山とも、二には狹岑の島とも、三には稻見の海とも、倭姫世紀には忍山とも續けたり。有名なる地には名細しと冠らするは、褒めたる詞なり。くはしは花細しなどのくはしに同じく優るる意なり。◇名ぐはしき稻見の海の沖つ浪千重にかくれぬ大和島根は』

【考】名高きよりいふなり。くはしはいすくはし鯨、花くはし櫻の類なり。

【燈】なぐはしは眞細にて、吉野に續くは美稻、狹岑に續ぐは小眞稻の意、稻見と續くは論なし。

【解】名のくはしく人の耳に觸れたる山にて、地の名高きをいふならむ。くはしは勇細、花細、香細、心細、目細などのくはしに同じ。

【石】賞詞なり。

なぐるさの　遠かりゐて萬十三

萬葉十三の長歌に『なぐるさの遠かり居て思ふそら安からなくに』と續けたり。弓の箭をば古くさともいひたり。されば投げたる矢の如く、遠くに離れてと比したり。

【考】こは投ぐる箭の遠く飛ぶを、人の遠く離れてあるにいひかけたり。又『芦邊ゆく雁が翅を見るごとに君がおばしの投箭し思ほゆ』と詠めり。又歌にさを投ぐる間と詠むも、このなぐる箭のとく飛ぶに喩へて物の程なきをいふ。機の梭を投ぐるといふは據なし。

【石】投ぐる箙の如く遠放り行くと比したるなり。

なすの湯の　たぎる胸能宣集

拾遺集の長歌にたゆる故とも、能宣集にはたぎる胸をもさましつつと續けたり。たゆるはたぎるの誤か。下野那須の湯の湧きあがる如く感情のはげしくなりたる胸と續けたり。

なつかげの　閨萬七

萬葉七に『夏影の閨の下に衣裁つ吾妹、裏まけて我が爲裁たばや、ややおほに裁て』とあり。橘木直香は狛諸成の說を引きて夏影のを閨にかかる枕詞とせり。夏影は夏物陰の凉しきところを指す語なれば、尋常の形容詞と見るべく、枕詞とせざるを可とするか。

【旋解】狛諸成云、女は北方に深く籠り居るものなり。北窓の陰は夏に宜しきものなれば夏蔭のねやといへり。

夏かりの　蘆屋の里續拾　猪名の篠原新續古今

續拾遺三に『濡れてほす隙こそなけれ夏刈の芦屋の里の五月雨の頃』とあり。芦は多く夏刈る習なるより蘆の音をもてる攝津の地名にかけたり。新拾遺にも同じ續見えたり。新續古今には『夏刈の猪名の篠原折りしきて短き夜半のいやはねらるる』とあり。篠なども多く夏刈る習により攝津の猪名の篠原に掛けたり。

なつ草の　相寢の濱記　野島が崎萬三　念ひしなえ萬二　深くも古十四　かりそめに新古三　繁き思新勅十二　野市の里山齋集

記には相寢の濱と連ね、萬葉三には野島が崎とも、同二の長歌には、念ひしなえてとも續け、又古今十四には深くも人のおもほゆるかなとも、新古今三にはかりそめにとも、新勅選十二には繁き思とも續けたり。夏草の繁りて深きより繁きとも深くとも人事に比し、又そを刈るといふを假初に轉じ、又暑熱の爲めに草の靡きしなびてお

るを、思にあぐみたるに比し、又萎え臥したるをねともぬともいふより、伊豫の相寢の濱、淡路の野島が崎に冠らせ、山寮集には野市の里に冠らせたり。野市里は土佐にあり。こは草の野といふつゞけなり。◇記「なつくさのあひねの濱のかき貝に足ふますな明して通れ」萬「玉藻かるみるめを過ぎ夏草の野島が崎に舟ちかづきぬ」古「かれはてむ後をば知らで夏草の深くも人のおもほゆるかな」新勅「夏草のしげき思は蚊遣火の下にのみこそもえ渡りけれ」新古今「夏草のかりそめにとて來しかども難波の浦に秋ぞくれぬる」

【管】夏草の野島崎、夏草は野といはん爲なり。野には草の生るに、特に夏は草の繁りあふ時なれば、とりわきて夏草の野島とはよめるなり。

【匠】夏草の打靡くによせて相寢濱と續けたり。

【考】夏草は茂く長くてなよよかなれば、ともどもに萎伏すを以て相寢の濱にいひかけたり。ねはなえの反なり。又夏草の萎ゆるてふ意にてぬとは續けたり。古は野をぬにいひたり。又夏草はまた弱ければ、なよよかにうなだるるを、人の物思する時の樣に譬へてしなえと續けたり。

【傳】三十九あひねの濱は契沖も師も伊豫國にあるなるべしといはれたり。然るべし。夏草のは、あひねの枕詞なり。別に一考あり。この名ここの外に物に見えたることなく、又名の樣も上代の地名めかざる如くにも聞ゆるにつきて、なほつら〳〵思へば、若しくはこの時夏にて草葉の茂りて靡き合ひたる濱邊をよみ給へるにやあらむ。さらば初句枕詞にあらず。

【按】あひねの濱云々。一說として思ふに、葉末のあふ心にあひと續けたるにやと見ゆ。野島云々。野と續けた

るなり。庭などにもいふべけれど、野はことに草多ければなるべし。

【石】思ひ萎えて、相靡の濱と續けたるは、の如くと比したるなり。奴島と續けしはぬの一聲にかけたり。ぬは歇まるの靈、不及の義、究るの詞なるが故に、その義を含ませて夏草萎えたるぬと續けしなり。こののは調なり。

【黑】あひねと續けたるは相靡の約なり。

なつくずの　絶えぬ使萬四

萬葉四に絶えぬ使と連ねたり。こは續紹にいへる如く、葛かづらの夏は繁りて絶えず延ひめぐるを以て、絶えず通へる使と續けたるなり。◇「夏葛のたえぬ使の通はぬはことしも有るごと思ひつるかも」但し本居翁は、夏は蔓の誤にて、はふくずならむといへり。

【攷】萬の二十には夏葛刈材とよみ、毛詩葛覃注に盛夏之時葛既成矣、於レ是治爲レ布而服レ之云々とありて、葛は夏刈をさむるものゆゑに、夏を專とすれば夏葛といふなるべし。

なつごろも　うすく古十四　立ち別る拾六　ひとへに金二　日も夕くれ新古三

香取の浦新葉三　立田川原後拾　立田山拾遺夏草　みもすそ川建保百首

うたゝね山夫木　をりはへ新拾遺

古今十四にはうすくや人の成らむとも、拾遺六には立ち別るべき今宵こそ一重に惜しきとも、金葉二には偶に着をとも、新古今三には日も夕暮れとも、新葉夏の部には香取の浦とも連ね、後拾遺には立田川原とも、拾遺抄夏には龍田山とも、建保百首にはみもすそ川とも、夫木にはうたたね山とも續け、新拾遺十六にはをりはへ織のと連

ねたり。◇古『蟬の聲きけば悲しな夏衣うすくや人のならむとおもへば』拾『夏衣立ちわかるべきこよひこそ單にをしき思ひそひぬれ』金『我のみぞ急ぎたたれぬ夏衣ひとへに春を惜しむ身なれば』新古『おのづから涼しくもあるか夏衣ひもゆふぐれの雨のなごりに』雄『夏衣みもすそ川の瀬になびく玉藻かりねの床ぞ涼しき』夫木『夏衣うたたね山の郭公今はきときに立ちかへり鳴く』續拾遺『夏衣をりはへ蟬の音に立ててうすくや中の遠さかりゆく』新葉『明けぬるかはやかげうすし夏衣かとりの浦の短夜の月』夏衣は一重にして厚からぬものなれば、交情のうすくなるに比し、一重といふを副詞の偏にとうつし、衣の緣により、裁ち織り打つなどの語より立田川原にいひかけ、うたたね山に冠らせ、をりはへといふ副詞につゞけ、又紐結ぶ、紐の緣語により日も夕暮と掛け、香取浦につゞけたるは夏衣は多く片絲にて織りたるを用ふるより、片織の義にて續けたり。

【考】かとりの浦と續けたるは古き文には見えず。後世の歌にあり。されどもこの續き後人の語にはあらじ。夏の衣は撚らぬ片絲もて織る故に片織と續けたるなり。帷をかたびらといふも、もとは片糸の平学もて織れる布をいふ。思ひ合せよ。

【箋】順の和名抄に、かとりは布帛の總名なるよし見ゆ。それもともと片織の義により名とせるなり。

【石】なつ衣は紵(かとり)と地名にいひかけたり。

なつそ引く　うな上潟萬七、十四　海邊萬十四　うなかぶし萬十三　うなでの森夫木

萬葉七には海上潟に冠らせ、同十四にうながみ潟とも、海邊をさしてとも、十三にうながふしとも、夫木にはうなでの森とも連ねたり。麻は土用の頃根ながら引きて乾して根を去り葉を落すもの。うなとは畝の義にて畠の異

名なり。夏麻を引く畝といふを同音の海、頸、雲梯等に冠らせたるなり。◇萬『夏麻引く海上潟の沖つ州に舟はとゞめむさ夜ふけにけり』萬『夏麻びくうなびをさして、飛鳥の到らんとぞよ吾が下ばえし』萬『夏麻引命號貯かり菰の心もしぬに人知れず本なぞ戀ふる、息の緒にして』夫木『なつぞ引く雲梯の森の村雨に下葉殘らぬ草の夕露』中に萬の十三の長歌、命號貯とあるを仙覺はみことをつみてと訓し、契沖はいのちなつみてと訓し、眞淵はうなかぶしとよめり。夏麻引く畝といふをうなの音に轉じその音をもてる地名に掛けたるが如し。命號はうなかぶしと訓み頸を傾くると說くを正しとす。

【仙】萬十三にみことと云はん爲に夏麻引くを置けり。麻を剝ぎたるからをばみことといふ故なり。

【管】或說に麻とれるからをばみことといふと書けり。心得がたし。ここの詞は夏麻を苧にうみためたるを貯とはいふなり。

【燭】海上は上總國にある郡名なり。與儀抄に『麻の生ひたる所をばうといふなり。あさうなど云ふが文字な取らむとて、夏そ引くとはいふなりと云々。又云ふ苧は刈りて後上皮をば取りて捨つるものにてあるを引くといふなり。亦麻をば根ながら引くべしともいへり。私云古語拾遺の註に古語、麻謂二之總一也今爲二上總下總二國一是也と云々、この義にては上總下總の二國は、もとより夏そ引くべき國なり。命號貯はいのちなづみてと訓なべし一期爲レ壽連持爲レ命。聖教に見えたれば月日をふる程も命なり。夏麻をうみて引はへたるにたとへて命とは續けて、なづみてとは命も絕えぬべく思ひ惱むをいへり。

【近】引くは續なり。上總は麻の好き國なり。昔は麻をふさといひける故に總國といひけるを、今兩國に分てり

といふ。海上潟は上總なれば枕詞ながらそのよせあるにやと思ふを、宇奈比と續けたるは、其國の歌なれば、よせたる意あるにあらず。命と續けしは、麻を引きて長き意なればなり。夏麻を引きて苧になすといふ意にて、麻はまだ績まぬ程をいひて、既にうみ成す苧といふ意と續けたり。與儀抄の說は非なり。

【考】こは陸田に生ひ立てる麻を、六月に根引きすれば、夏麻引く畝といひ續けたりと或人いへり。さて畝のねをなに通はして續けんこと常なるが上に、今の田舍人は即うなといへり。萬葉十三に夏麻引命號貯云々、こは古事記に、八千矛神歌に『やまとの一本すすきうなかぶし』とよみ給へるに同じく、妹戀わびつつ項をかたむけて思ひ惱むをいへり。冠辭は夏麻引畝と續けて右に同じ。而してうなかぶしに命號の字を書けるは、紀に命令二字をうながしと訓みて、語の相似たれば字も訓も借りたるなり。

【栞】夏麻を引きて頸にかくといふ意にて續く。

【解】夏麻引は魚釣緡挽くなり。先魚釣るといふことは、萬葉五に足姫神命のなつらす云々とある之なり。故、釣緡を魚つりそといひ、釣竿を魚釣竿といひしなり。かくて魚つりといふべきを、なつといへるはりは活用言にて自省かる例なり。作田。非光などいへる類を合せ思ふべし。ひくとは控くなり。さて大方海上にて、魚釣にはかの釣繩とていと長き繩に枝緡をあまたつけて、遠くうち延へおきてその繩を引きよせあけて、釣を食ひたる魚をとることとなれば引くといへり。かくて海上とかかれるは、海上は地名ながら海際の意にとりて魚釣緡ひくと冠らせたるなり。

【黑】夏麻引く畝の說よろし。うなに畠の異名、うなふ地なる故にうなといふ。うねを作るといふはうなひて作

る故にしかいふ。うなふは畝爲なり。うながしは命號、貯、項沈てなり。

【臆】なつそびくは海に關する冠辭にして舍讀ナゥス（船）とソヒクス（熟達）との合成語となりしもの。即ち船事に熟練なるを意味せる語なるが如し。從來の解釋の如く、物を引くことにあらず。引くは單に發音の當て字たるのみ。

夏の日の　熱田岡舍歌集

夏日甕麿の岡舍歌集には、尾張の熱田に冠らするに夏の日のと置きたり。

なつ引の　いとほし金七　いとことわり蜻蛉日記　いとま同上　いとかの山夫木

金葉七にはいとほしと續け、蜻蛉日記にはいとことわりとも、いとまとも、夫木にはいとかの山とも連ねたり。絲鹿の山は紀伊の有田郡にあり。夏引の絲といふよりいとの音を頭にもてるいとほしとも浚とも最道理とも續けたり。夏引の絲とは春蠶の繭を初夏の頃乙女子の絲にとるをいふ。後撰の夏引の手引にたへぬ絲にやありけむと續けたるは枕詞にあらず。

◇金葉「逢までは思もよらず夏引のいとほしとだにいふを聞かばや」　夫木「夏引のいとかの山の郭公くるしき色にまたれてぞ聞く」　蜻蛉「夏引のいとことわりや二目三目よりあひくまに程の經るかも」　同「なくばかりありてもこそあれ夏引のいとまやはなきひと目ふた目に」

なつ虫の　ひむしの衣紀

【解】後撰手引にたへぬ云々、後しぞきに引足ながら絶えず音づるるをいふか。

仁徳紀にひむしの衣と續けたり。ひむしの衣とは蠶糸の衣をいふ。ひむしは蛾の名なり。夏夜燭などの火に入る蟲といふよりかく續けたるなり。續貂にあげたるは枕にあらず。

【貂】古今に『夏虫の身を徒になすことも一つ思ひによりてなりけり』又『夏虫を何かいひけむ心から我も思にもえぬべらなり』夏の夜燈火によるは蛾といふ蟲なり。火によりて焦れ死る愚さを身を徒らにといふなり。いづれも思を火にとりなせり。

なとり川　なき名とりては古十三　うき名新千

古今十三になき名とりてはと語を隔てて重ねたり。調を整へむ爲に枕詞を置けるのみ。新千載にはうき名と連ねたり。その仲逢ふ瀬などと續けるもの多し。名取川、陸前にあり。『陸奥にありといふなる名取川なき名とりては苦しかりけり。』『そのままに逢瀬はたえて名取川うき名ばかりぞあらはれにける』

なゝつ子の　さやかに六帖　さやの口々同

古今六帖に『逢ふことのかたなさしたるなゝつ子のさやかに人の戀らるるかな』とあり。魚子（ななこ）鞘とて魚鱗の如きぎざ／＼のある鞘あり。そのさやの音をさやかにといふ副詞に轉じたるなり。續貂に『七つ子のさやの口々集ひつつ我を刀にさしてゆくなり』の歌を擧げ、さやの口々に係れりとせり。されどそれは序にて枕詞にあらず。

【年山】七ツ枝の刀と七ツ子の鏡とを誤りて混同したる語。

【北】七ツ枝（さや）の刀の各の鞘をいふ。

【貂】刀劍に鞘あるは常のことなり。鞘に口あれば、口々とはいふ。さて七ツ子の鞘はいかなる制りさまぞ知り

がたし。按ずるに日本紀神功攝政五十二年に、百濟貢獻に七枝刀一口、七子鏡一面、これを今の點にななえだのかたな、ななつごのかゞみと訓めり。七枝はななまたと訓むべし。もし七枝刀は七枝矛の誤にてはなきか。七つ子の鏡のよみを混じて誤れるにやと思ゆ。

なにはがた　恨む古十八　何にも後十二

古今十八には恨むべきと連ね、後撰十二には何にもあらずとも續けたり。三代枕詞例にいへるが如く、古今のは浦に恨といひ掛け、後撰のは頭音を重ねて、調を整へむが爲めに置けるのみ。◇『難波がたうらむべき間もおもほえずいづこをみつの蜑とかは知る』『なにはがた何にもあらずみをつくし深き心のしるしばかりは』

なにはなる　見つ古十三　身をつくし後十三

古今十三には見つとも續け、後撰十三には身をつくしてとも連ねたり。浪速に御津といふ濟あるを同音異義の見つといふ動詞に轉じ、又彼地には水の量を測る爲に澪標（みをつくし）といふものあり。これを同音の身を盡しの意にいひ掛けたり。◇『君が名も我が名も立てじなにはなるみつともいふな逢ひきともいはじ』『侘ぬれば今はた同じ難波なる身をつくしても逢はむとぞ思ふ』

【服】見つと云はむ爲に、浪花なると冠らせたるは、難波に三津といふ地名あればなり。津の國のなには思はずの類なり。

【貂】後撰に『なにはがた、名に似もあらず、みをつくし深き心のしるしばかりに』難波方は名に似ずといふより、ここの河後の水道標（みをつくし）を身をつくすといひよせて、深き心の印とまでといへり。しるしは圖標木なり云々。

なのりその　名は告り萬三　己が名萬六

萬葉三には名は告らしてよとも、よし名はのらせとも、十二には名はのりてしとも、同音を重ねむ爲に冠らせたり。又萬葉四にはなどかも妹にのらず來にけむとも、六帖には名告りもとも、萬葉六には己が名惜みとも連ねたり。◇萬『みさごゐる荒磯におふる名のりその名はのらしてよ親は知るとも』六帖『磯がくれのりに交れるなのりその名のりも今は知る人ぞなき』これらは名告藻の名とも名告りとも頭音を打重ねたるのみ。名告藻は神馬藻といふものにて、長さ三四尺、柳の如き葉あり、小枝には丸き氣胞を著く。

【解】無名告藻の名義は允恭記に衣通郎姫の御歌に『とこしへに君もあへかもいさなどり海の濱藻のよる時々を』とよみませしかば、御門哀れに愛でさせ給ふあまりに、濱藻をなのりそもと呼ぶべき詔らせしなり。

なはのりの　名は萬一　引かば絕ゆ萬十三

萬葉十二に名はかつ告らじと連ね、十三の長歌には引かば絕ゆと續けたり。◇『わたつみの沖に生ひたる繩のりの名はかつ告らじ戀は死ぬとも』繩海苔は神馬藻の一名ならむといへり。さて接續の意は始のは同音を重ねて調となし、後のは繩海苔のきれ易きが如く、强ひて云ひよれば却りて人の中絕ゆと比したるなり。續解には、この他『わだつみの沖の繩のりくる時は』の歌を擧げたれど、そは序にして枕詞にあらず。

【解】始のは女の思ふ心ありて許さぬ戀なり。中のは强ひて物云はむとすれば却りて絕ゆるが如き、心强さを嘆くなり。終のは歸り來むといふなり、繩といふよりくるといふこと例のことなり。濱藻。名告藻。繩苔は物一つなるべく思ゆ。

なまよみの　甲斐萬三

萬葉三の長歌に甲斐の國へ冠らせたり。この枕詞も義明かならず。國の名は大なる山の峽にあればそれによりて命ぜしことは疑なかるべし。さて弓の材料となるべき梓の木はこの國には多く、この國より弓を貢することも延喜式にも見えたれば弓に因みもなきにあらねど、考にいへる生弓のかへるといふ説もいかが。生善因の貝の說はことさらに設けたるが如し。或はこの國は峽間にありて籠り國なれば、うすぐらき處の隱妻の語を冠らせたるものか。隱るを古くはなばるともなまるともいへり。るの音は省かるる例多し。よみは黃泉の義ならむか。即もその語原は黃泉と同じことならむ。

【仙】甲斐の國のかといふことを香ほりの心によそへとれり。香よしといふ心なり。

【采】なまよみ甲斐とはなよやかにかほる香のよきと續くるなり。

【燭】このなまよみは、生しきがよしといふ詞なり。甲斐に香火によせたり。香は生しきよしといふ心なりと云々。

【匠】仙覺の說もあれど取るに足らず。試に釋せば生吉の貝といふ心か。鮑・蠑螺子等の貝の類皆なましきを賞すればなり。

【考】生弓の反りといふ意を甲斐國にいひかけしなり。かへりのへりを返せばひとなる。皇朝の古き弓は、たゞ木のままに作りて膠して竹を合せなどする事はなかりき。兵庫寮式に御梓弓のことを悉く記されしに、節も竹もあげられぬは、延喜の御時までも木のかぎりなりしこと知らる。さてその木のかぎりなる弓も、まだ小なる新弓

は動きけむかし。

【詮】なまとは生熟等の生にて、なまゆみは生弓をいふか。弓の淵を隈といふ。生弓は淵の深きものなる故に生弓のかひとはいふならむ。

【辯】なまよみは名眞弓なり。峽の國より弓を貢したること式に見えたり。

【解】なまよみは生善肉之なるべし。かひと係るは貝の意なり。貝は鮑・榮螺などを旨といふことにして、そは生の肉をつくり肉などいふものにして食ふが、殊更に味よきものなればかくいへり。

【黒】なまよみは隱蒙なり。物に隱れてさだかならぬ狀をいふ詞なり。甲斐國はこもり國なれば斯くいふ。よみはつたよひ、たじよひのよひに同じ。

【廣】なまよみ甲斐の國は邁羅のことにて日本の甲斐はその移寫なり。この國にメナム河あり。これを昔なまよみ（姫河）と謂ひし如し。なまとは卽ち河、よみのとはヨメノス卽ち姫なり。故になまよみの甲斐國とは、よみある甲斐の國といふことなり。

【豐】なまは物の成熟せざるをいふ。なまよみはなまやみと同じく薄暗き意、かひは峽にて山間に狹まり日光を受くること少く薄暗ければ、なやよみの甲斐といへるならむ。

なみくもの　うつくし妻萬十三

萬葉十三の長歌に浪雲乃愛妻とあり。こは借字にて、靡く藻の如く、なよなよと夫に從へるうつくし妻と比したるなり。萬葉十一には句を隔てて心は妹によりにしものをと續けたり。

【考】浪雲は借字にて、靡く藻のてふ意なるべし。なみとなびと通ふは神なびを神並といひ、押し靡けを押なみなどいふ類、多きことなり。男も女もたをやかにうつくしきをも、又夫に靡きてぬるを、うつくしむをも、靡く藻に喩へたるに同じ。

【一言】浪雲は借字にて並雲の意なり。雲の並びたるは可愛ものなればうつくし妻とかかれり。

【解】萬十一には靡き藻のよりねしものをと句を隔てかけたり。

【票】なみくもは並隱(なへこも)なり。くもは土隱のくもに同じ。並びこもる意なり。夫婦はならびこもる故に並隱のつまといへり。

なみの音の　騷ぐ湊 萬九

萬葉九にさわぐ湊と續けたるを、石上枕詞例にあげたれど、普通の形容句にして枕詞にあらず。

波の穗の　いたぶらし 萬十四

萬葉十四に『おしていなといねはつかねど波の穗のいたぶらしもよ昨夜ひとりねて』とあり。いたぶらしとは荒ぶる意なり。波のほとは浪の先の意なれば、ここは立波の如くに心荒ぶると比したり。

【解】高くいちしるく立つを波の秀(ほ)といひて、その浪秀ぞ甚振(いたぶる)と續きたり。甚振らしもといへるは、心動きのするをいふ。

【石】いたは平等にして不レ絶不レ正形勢をいふ詞なり。悼痛等のいた皆然り。

浪のよる　磯田の朝臣 藏足集

和田磯足の集には磯田の朝臣に冠らしむるに浪のよるを以てせり。浪のよる磯といふ續けなること云ふまでもなし

浪よする　五十路藤垣内集

藤垣内集には五十歳といふ篇に浪よすると冠らせたり。磯を五十に轉じたるなり。

なよ竹の　なゆ竹の　とをよる子萬二　夜長き古十、十八　世に後、拾　齡拾二十　横河甲信紀程

萬葉二の長歌にはなゆ竹のとをよる子とも。同三にはとをよる御子とも連ねたり。とをよるとはたわやかの意なれば、なよなよとしたる竹の如くと比したるなり。又古今十八には夜長きとも、後撰十三には世にへぬものとも、拾遺十八には長き夜とも、同二十には我子の齡をばとも連ねたり。これらは竹の節間のことをよといふより、それを轉じて、同音異義の夜・世・齡といひかけ、又轉じて横河にさへ懸けたり。古今以下にては皆なよ竹といへり。

◎古『なよ竹のよ長き上に初霜の起きゐて物をおもふ頃かな』　後『なびく方ありけるものをなよ竹のよにへぬものと思ひけるかな』　拾『花の色もときはならなむなよ竹の長き夜におく露し掛からば』　拾『なよ竹のわが子のよをば知らずしておふしたてつと思ひけるかな』

【考】こはたをやかなる女の姿を、なよやかなる竹に譬へて冠らせたり。なゆ竹は女竹にて、これを皮竹ともいふ。とをよるものたをやてふに同じくて共に音通へり。

【燭】なゆ竹のを、中古よりなよ竹とよめり。通音なればかはることなし。

【續】和名抄に長川箏はよなが竹とよめり。後撰世にへむものとは、まだよごころ附かぬ女といふ義なり。

【石】なよ竹は谷になる竹といふ竹にて、小なる竹のいとよく撓むものなり。とをよるは撓みよるといふに等し。

【三】竹の節といふより夜とも世とも續け、長き節といふを長き夜に我子の代といふに若子の節といひかけたり。

【黒】とをよるは柔なり。やはらげる狀なり。

なら柴の　別萬十二　ならし顏大和物語

萬葉十二には馴れは優らずと連ね、大和物語にはならし顏と續けたり。同音を重ねて詞をなさんが爲に設く。◇『御狩する狩場の小野のなら柴のなれはまさらず戀こそまされ』『我宿をいつかは君がなら柴のならし顏にはをりにおこせる』

【鉛】今の本に櫟柴とあるを以て、新古今集にいち柴として入れられしかど、いち柴のなれはとは續くべからず。又河野本に柏木のとあるもいかがぞや。

ならの葉の　ならし顏後十七

後撰十七にならし顏に連ねて同音を重ねたり。ならし顏とは馴れて心安げなる樣子をいふ。

なる神の　音萬七、古十一　音羽夫木　ひかをる萬

萬葉七には音のみ聞きしとも、十一には音にのみとも、古今一には音に聞きつつとも、夫木には音羽の瀧とも、音羽の山とも連ねたり。鳴神は音のするより評判の意にて音のみとか、音にとか續け、又それを轉じて山城の音羽といふ地名へかけたり。萬葉十三の長歌には霹靂之日香天之とあり。ひかをる空にかけたり。光り居る義にいひかけ下したるなり。◇『鳴神の音のみ聞きし卷向の檜原の山をけふ見つるかも』『なるかみの音羽の山の夕立に關

のこなたも水まさりつつ』

【考】音のみ聞きし卷向の檜原山云々、これは音といはん料のみながら、この山のいと名高きことを籠めて鳴神のとは冠らせしなるべし。

【眼】萬葉十二に鳴神のひかをる空と續けたり。日かをる空とは、九月の空しぐれ催して月の影の曇れるをいへり。そのひかをるのひかといふ二音に光の語を籠めて、電のことといひかけつと見るべし。

【石】音羽の山と續けしはのの續目尋常なり。音にのみやもと續けしは、雷の如くと比したるなり。ひかをる空とは光居空、光眞空の義にて、神の鳴る空の形勢なり。

なるなしの　なりもならずも古二十

古今二十に『寄生の浦に片枝さしおほひなる梨のなりもならずもねて語らはむ』とあり。なるなしとは枝に生る梨の實の義なり。同音を重ねて調をなさむ爲に置けるのみ。

にの部

にぎたへの　にぎ蝦夷縣居家集

賀茂眞淵の長歌には、にぎたへのにぎ蝦夷と續けたり。にぎたへは和栲にて精良の栲、即上代のよき織物をいふ。アイヌ人の中には久しく王化に浴して文化のやや進みたるあり。これを熟蝦夷といふ。同音を反覆して調をなす。

にげ水の　逃げ夫木

夫木に『東路にありといふなる逃水のにげかくれても世を過すかな』とあり。序歌ながらその第三句は下の逃げかくれにかかる。逃げ水は相摸にあり。橘姫の故事ある地名をとりて、同音を重ねて調としたるのみ。

にこ草の　にこよかに萬二、十一　花妻萬十四

萬葉三及十一にはにこよかにと同音を重ね、同十四には花妻と連ねたり。にこよかとは笑顔をつくることをいふ。十四のは和草の花といふより、うるはしき妻といふ心にて花妻といひ下したり。和草は貝原益軒によれば俗に箱根草といふものといふ。葱に似て小に、葉細く紫色光ありといふ。◇『葦垣の中の似兒草にこよかに我と笑まして人に知らゆな』『あしがりの箱根の嶺ろのにこ草の花妻なれや紐もとかずねむ』

にごりみづ　棲む拾二十

拾遺二十に『雨ふりて庭にたまれる潦水誰がすまばかはかげの見ゆべき』とあり。潦水の澄むを住むにいひ掛けたり。

庭すゞめ　うすゞまり記

古事記雄略天皇御製に、庭雀うすゞまりと見えたり。うずゞまりは蹲る義と契沖もいへり。宮仕人の階庭の下に蹲り居るさまの相似たるより比したり。

【匠】うすゞまりは跪まり居てなり。庭に雀の下りたるは、人の蹲りて禮儀をなせるに似たるを、かくは譬へさせ給へり。

にはたづみ　流るゝ涙萬二、十九　すまぬ拾二十　行方しらぬ新勅十二　うたかた逆はで狹衣

俄藤垣内集

萬葉二及十九に流るゝ涙と續け、拾遺にはすまぬにとも、新勅選十二には行方知らぬ物思とも、狹衣四にはうたかた逆はでとも連ねたり。にはたづみとは和名抄に潦の字をよみて雨水のこととせり。よりて流るゝ涙に喩ふ。又雨水の溜りたるは何方へ流るゝか明かならざるより、途方にくれて物思せるに比し、又雨水には泡沫の生ずるよりうたかたあはでと續けたり。うたかたは暫しといふ義なれども、語の起は容形にて泡沫の消ゆる間もなきより比したるなり。近世のものにては藤垣内集に同音を利用して俄病とかさねたり。◇萬「み立たしし島を見るときにはたづみ流るゝ涙とゞめかねつる」拾「世と共に雨ふる宿のにはたづみすまぬに影の見ゆるものかは」新勅『にはたづみ行方しらぬ物思にはかなき泡の消えぬべきかな』

【匠】にはたづみとは雨ふりて庭に流るる水をいふ。

【考】こは俄泉の流るるにかけたるなり。和名抄、潦（爾八太豆美）雨水なり。これにても俄泉といふ點を知るべし。溜水といふは非なり。庭に立つ水の意といふも惡し。

【服】萬葉七に『いとさはも降らぬ雨ゆゑ庭立水いたくな行きそ』と續けたり。雨降れば水湛へてそが流れ行くものなる故、かく續けたり。歌心は部類標なり。人の知るべきに潦いたく流れ行きそなどいへるは、泪を潦の流れゆくに喩へたり。同十三の長歌に『葦引の野ゆき山ゆき潦川行き渡り』と續けたり。こも潦の湛へるが河の如く流れ行く故、川と續けたり。歌の心は川を我行き渡りといふ意なるを、河行渡りといはんからに、潦か川の如く行くてふ語になれり。

【貂】拾遺二十に『世と共に雨ふる宿のにはたづみすまぬに影の見ゆるものかは』とあり。世と共に久しく住み馴れしかば、暫し絕ゆるやうなれど、又住むべき所なればこそ、馬は引きに遣せといひやりしなり。庭たづみは雨水なり。俄なる雨に庭砌に滯りては流るるもたまりてもあるべし。庭津泉といふ義なりといへり。

【解】にはたづみは庭漾ふ水なり。たゞよふのだよはどと切り、どふはづと切ればだつみとなれり。淚の流るるに比したり。

大原重儉も幾部の言に、夕立などの降りて庭に水の流るるをたづみが走るといへり。然ればたづみといへる古言片山里に存れり。考にいへるが如く、俄泉の義にあらずと冠辭考にいへり。

【檜】庭立水の意なるべし。行潦は路上の流水なりといへり。行潦あらば庭潦もあるべきなり。

【石】にはたづみは雨ふりて平かなる道路に流るる水をいへり。にはたは庭平らかなり。野にも家にも道にも平らかに開延びたる所庭なり。
【思】潦水なり。音便によりてたづみとにごるか。龍と鶴とは一つ言なるをたづは濁れり。

庭つ鳥　かけ記、萬七

古事記上及續紀には鷄と續け、萬葉七にはかけの垂り尾とも連ねたり。にはつ鳥は家つ鳥と同じく、人家の庭に養ふ鳥といふ義にて、古昔唯一の家禽は鷄なりしより換へ詞のやうに總名をおきて枕とせしなり。かけといふはかけろかけろと鳴きしより、名に負へるなり。

にはにたつ　麻手小衾萬十四

萬葉十四に『庭にたつ麻手小衾こよひだに妻よしこせよ麻手小衾』とあり。あさでとは麻袴のつづまりにて、こは麻にて作りたる小き衾をいふ。麻は庭に生ふるものなれば、庭にたつ麻といふより言ひ下したるなり。
【匠】賤しき家には、よき人ならば庭として石を立て草木をうゑて見るべき所までも園にして麻など植うるなり。よりて庭に立つ麻といへり。手とは麻の葉は人の手をひろげたるに似たれば麻手といへり。兒の手柏かへ手など似たる物に名を得たり。
【考】あさて云々は麻布の衾なるを、まづその麻の生へぬる所をいひて冠辭とせり。あさてのでは栲なり。たへ反でなり。麻は專ら畑に作るを又堅庭にも作ること、今の民の戸にもあり、故に庭に立つ麻とも小垣内之麻ともよめり。

【解】こは庭に植つ麻とのみいひ下したるものなり。さて庭とはいへど、堅庭に麻を作るべきにも非れば、垣内の島に作りたるを、頓て庭に立つといひたるなるべしと宮地水溪翁のいはれしが如し。

【石】庭とは地につき随ひて開拓たる所をいふ。野にも園にても家にもさる所あり、海にもいへり。たつは立つなり。こは庭に立つ麻衾といふ義と聞ゆ。さる義ならむには枕にあらじ。

にひばり　筑波紀

景行紀に、にひばりつくばを過ぎてとあり。古語に開墾をはりといひたれば、新墾築といふを筑波にかけたりとも見ゆれど、こは常陸に新治、筑波といふ地名あれば、相並べたるのみにて枕詞にあらず。

【厚】新治をも筑波をも過ぎてここに来てと宣ふ意なり。筑波と續けむ爲の枕詞か。それにつきて兩義あるべし云々。

【考】新墾筑波といふ地の名を、新墾をつくといひなして、次をば數の語もて宣へりと見ゆと、荷田大人はとかれしなり。思ふに新ばりといふ古語多ければ、この筑波わたりに、いと古く新墾の所あるが、早く所の名となり侍りけむを、幸に新まりつくてふ意をそへて文に續けさせ給へるならむと覺ゆ。

【傳】廿七常陸國新治郡新治鄕、筑波郡筑波鄕あり。式に筑波山神社もあり。仙覺萬葉抄に常陸國風土記にはにひばりの國、つくばの國などいへり、云々。萬葉九に新治の鳥羽の淡海云々。さて書紀に蝦夷旣平自日高見國還之西南歷常陸至甲斐國とある如く、常陸國を經て來ませるなれば、その國なる新治及筑波を過ぎてよりとなり。契沖が厚顏抄の說も右の如し。然るに又の考を擧げて云はく、にひばりは筑波と續けむ爲の枕詞か、それに

とりて両義あるべし。新墾の田を作るといふ意か、又新治の道を築くと續くるかといへるは、二つ共に悪し。

【一言】地名を重ね置けり。

【古】こは新墾にて海を埋め山を開きて、田畑とするをいふ。そは築くものなれば、筑波の地名にはたらかせたるなり。

【燈】にひばりとは印度の Nepal にして蓑を意味す。つくばとは今の Punjab にして日本武尊時代にはと。が。ま。といひしものの如し。このとがまが、つくばとなりしが如し。共に國名なり。極東日本のつくばは印度の移寫なり。

にはまりの　おもひあがりうけらが花

千蔭のうけらが花には庭鞠の思ひあがりと列ねたり。庭にて蹴る鞠の高く飛びあがりたるを、心高くかまへたる思ひあがりと轉じたるなり。

にふの川　鈍く柿園詠草

柿園詠草には鈍くといはんとて丹生（にふ）の川とおきたり。同音を重ねて調となす。

にひむろを　ふみしづの子萬十一

萬葉十一に「新室をふみしづの子が手玉ならすも玉の如照りたる公をうちへと申せ」とあり。枕詞解には靜子てふ女名をいはむとて、かの未通女等が袖振山などいふ類に、新室踏と云つて踏靜といふ意につづけたるなるべしといへり。

にほ鳥の　潜ぎ記　葛飾萬十四　二人並び居萬五、十八　なづさひ萬十五　息長河萬二十
憂き住ひ續後拾遺

應神記には潜ぎとも、萬葉十四には葛飾早稲とも連ね、萬葉五及十八には二人並び居とも、十五にはなづさひ行けばとも連ね、十一には足ぬらし來しとも、二十には息長河とも接續せしめ、續後拾遺の十六には憂き住ひとも續けたり。にほ鳥とは鸊鷉即かいつぶりのことにて、水中に入りて潜く鳥なるより人の水に入るに比し、そのかづくの頭音を重ねて下總の葛飾といふ地名へ冠らせ、又この鳥の雌雄相並びたるを夫婦の相偶せるに喩へ、又その水に濡るゝ人の樣子に比して足ぬらし來ともいひ、又この鳥の水に入りて、息の長く續くを、近江の息長河に轉じ、又水上に浮きたるを憂き住ひと人事にいひかけたり。◇記「にほ鳥の淡海の海にかつぎせな者」萬「にほ鳥の葛飾わせをにへすともそのかなしきを外に立てめやも」萬「思ふにしあまりにしかばにほ鳥の足ぬらし來しを人見けむかも」萬「にほ鳥の息長河はたえぬとも君に語らむことはつきめや」續後拾「みだれ蘆の下根にかよふ鳰鳥のうきすまひこそこの世なりけれ」

【仙】おきなか川といひ出でん爲ににほ鳥のと置く。おきなかとは息長しといふ詞に聞ゆれば、にほ鳥の水なかつぎて出でぬれば息を長くつくべきが故なり。又葛飾と續けたるはかつの詞かつぐといふ心に通へば、潜ぐといひ出でん爲の諷詞に用ふ。

【冠】葛飾は下總の國にある郡名なり。鳰といふ鳥は、よく水にかつぐといふ心にて、かつしかとは續けたるなり。然るを奥儀抄の說、顯昭が說には、にほとりはにゐとりといふ心なりと云々、是は稻の早く出來るなばわせと

いへば、それを始めに刈るの心にて、苗取と釋せられたり。亦無名抄にかつしかわせとは稻にて有るを、御物にせんとて、米になすの名なりと、書かれたれども、是は萬葉を不考の誤なるべし。又鳰といふ鳥は、水に入りて久しく有るものなれば、息長しといふ心にて息長川に續けたり。海に出でたる川を奥中川といふ儀あれども不可用。

【考】にほとりの水底に入りてさて浮み出でては、長く息づきて鳴く故に息の長き意にて、息長川に續けしなるべし。又二人並び居云々。妹と夫の相並びゐるに譬へ、潜くといふを略きて葛餝の地にいひかけたり。かづきは水に頭を衝き入るてふ意の語なり。又なづさひゆけば云々。にほも波の上に浮き漂ひてゐるに、船のたゆたふを譬へたり。この語はなづむを延べてなづさふともいひて、安らかにえ行かれぬ樣なり。

【鉛】足ぬらし來を云々、水鳥は足を常に水に浸し居るなり。田を凌ぎて徒歩より來るを、志見つるやといふなり。又後撰集に「春の池の玉藻に遊ぶ鳰鳥の足のいとなき戀もするかな」鳥の水上に遊ぶは人目のどかに見ゆるを水の下に足掻の暇なくあるを、我物思ひして心の暇なきを、人は知らぬよといふなり。

【佐】なづさひゆけばは、雌雄の馴れ親める義はなれぬ心なり。

【黒】かつくは頭衝ぐなり。

にほてるや　近江の海喜撰式　志賀の浦新千載　矢橋の渡堀河百首

喜撰式に近江の海に冠らせたり。諸說あり一定せず。鳰の立てる義ともいひ、或は仁保の港より近江へ漕ぎ出でる義といひ、或は近江の湖をほめて匂て照るといへり。思ふに古事記に「邇本杼里野あふみの海に潜きせな吾」とあ

るは近江を隔てて滸ぎにかかる續なるを、讀み誤りてかくいひしならむ。◇新千「鳰てるや志賀の浦風春かけてさざ浪ながら立つかすみかな」堀河百首「にほてるや矢橋のわたりする舟をいくそたび見つ瀬田の橋守」新千載には志賀の浦とも、堀河百首には矢橋の渡しとも、夫木には櫻谷とも順徳院集にはさざ波とも續けたりと、尾崎氏の補註にあげたり。

【匠】にほてるは湖をいふといへど、近江ならぬ湖にはよめる例なし。和名集に野洲郡の下に邇保とあればにほはやがて地の名にてもあるなり。

【考】こは古きものにも見えず。語のさまはた後の世にいひ出でしものと覺しく、如何に心得ていひしことにや覺束なし。まづ近江の湖をにほの海てふもいかなる由ぞや。和名抄にこの國の野洲郡に邇保の郷南北あり。もしその方にてにほの湖といひしが、すべての名の如くなりけむかし。又は神功紀の歌に鳰多のわたりに鳰鳥とよめる二首あるによりて、好事の人のいひ出でたるにや。況てにほてるとては、科てる、おしてるなどのてるてふ語の例と聞えず。

【一言】或人のいへる如く、てるを立てると解せば鵜鶘立るにや。

【石】こは匂ひ照るなり。ひの結を略き匂照やといへり。結の韻を省くは、二詞を一詞とする定格なり。こは天智天皇の御字を稱賛したるにて、押照るや難波と稱へたるに同じ。

【抄】古事記、仲哀天皇の條ににほどりの近江の海に潜せなわ、こは次の一句を隔てて潜きの枕詞なり。後世の歌に近江の海とよむは、この考の續によりて、この句を直に次句の枕詞と心得、又にほ鳥をにほてると誤れる

ものなり。又近江の湖をにほの海とよむも、この枕詞の誤より出づ。青丹よし國内、押照宮などいふ類なれど、にほはこの海によしなきことなり。

ぬの部

ぬえ草の　女 記

古事記上の長歌に女にしあればと續けたり。考にいへる如く萎草の女と續けて、なよなよとしたる草の如き、手弱女なりといふ意なり。

【厚】鵺艸のが、女の枕詞とは見えたれど、此草和名集等の物に見えたることなし。伊奴江といふ草あり。その上略などにや。弱艸の妻と續くる類か。

ぬえこどり　うらなけ 萬一

萬葉一にうらなげ居ればとも、うらなげましつとも續けたり。考に見えたる如く、鵺鳥の聲の悲しく、うらめしげなるを、人の哭泣に喩へて置けり。

ぬえどりの　のどよひ 萬五　片戀づま 萬三　うらなげをる 萬十

萬葉五にはのどよひ居るにとも、三には片戀づまにとも、十にはうらなげをるとも連ねたり。鵺の鳴く聲は悲しく聞ゆるより、人の恨み歎く意に比し、その鳥の雌雄相はなれ居て、互に相思ふが如きより、片々にて相戀ふる妻に喩へたり。又のどよひといふも彼の鳥の如くと比したるなり。のどよひは長閑に呼ぶの略とも、喉吹溜にて

呼ぶなりともいへれど、卷五貧窮問答歌の前後を考ふるに、茫然としたる意に聞ゆ。さてはのどは長閑の意より來り、よひは語尾か。さて鵺鳥と接續するは、その聲の咽より絞り出づるが如くなるを、のどよひと音の似たるより轉用せしならむ。◇『久方の天の川原にぬえ鳥のうら歎ましつゝともしきまでに』『ぬえ鳥の片こひ妻に朝す鳥のかよはむ君』

【考】かれが聲の悲く恨めしげなるを、人の哭泣（うこな）に喩へ置けり。のどよびと續けたるも、哭に喩へたる意は同じ。裏歎と書き、のどよひといへるを以て、或人は隱聲に鳴く鳥ならんといひしを、實は鳴く聲高く、且喉呼とも書けるは隱聲ならにはあらで、から聲に鳴く方にていふなりけり。又片戀と續けたれば、山鳥の如く雌雄一つ一つ住む鳥にやともいふべけれど、卷三は寄鳥にも、片戀とよめれば、唯妻こひつつ鳴くより、片戀する人の上にとりて冠らせたるなり。

【黑】のどよびは甚々呼にて、甚しく呼ぶなり。

ぬすびとの　龍田拾九

拾遺九に『盜人の龍田の山に入りにけり同しかざしの名にやけがれむ』とあるを、三代枕詞例に盜人は龍田にかかれりとせり。こは枕詞にあらず。

【頭】これは繪様によめるにて、冠言にあらねど、盜人の立田山と掛けしは冠りなり。

野（ぬ）つ鳥　雉子記、萬十三

纜傳記及萬葉十三に雉子と連ねたり。野鳥の中にても雉子は人の賞するものなれば、まづ總名を置きて次にその

種族をあげたること庭つ鳥、鳥つ鳥などいふに同じ。

【考】雉子は野にすむ故に野つ鳥てふ辭を冠らしむ、即庭つ鳥かけといふ類なり。

ぬなはなす　長く

縣居翁集にはぬなはなす長くと續けたり。ぬなはは蓴菜、即ちじゆんさいをいふ。その如くと比したるなり。ぬなはは沼繩とかく如く莖長きものなり。

ぬばたまの　黒き記　甲斐の黒駒紀　黒髪萬四、十三　黒牛潟萬九　夜萬一、二

その夜の梅萬三　こよひ萬四　夕萬二　夢萬四、十一　月萬十七　四日甲信組提

古事記上に黒き御衣(みけし)とも、雄略紀には甲斐の黒駒とも、萬葉四及十三には黒髪とも、同二には我が黒髪とも、九には黒牛潟とも、十三には黒馬とも、斐太の大黒とも連ねたり。ぬばたまは烏墨とも、野干玉とも、烏玉とも、烏珠とも、夜干玉とも様々に書きたれど、皆同じく射扇といふ草の實にて、その色黒ければ、初は黒衣に比し黒髪に喩へたるより、黒髪山・黒牛潟といふ如き地名、及くろといふ語をもてる斐太の大黒などいふが如き人名にも冠らせ、轉じては黒髪、黒駒といはずして、單に髪とも駒とも續くるに至れり。萬葉二及十二には夜渡る月とも、二及十八には夜床とも、六及十には夜霧とも、十には夜渡る雁とも、十七には夜の紐とも、五には夜の夢にとも、三にはその夜の梅とも、四にはこよひさへとも、八にはこよひの零とも、廿にはこよひの月夜とも連ね、二には夕になればとも、四及十一には夢にとも、十七には月に對ひてとも續けたり。◇紀「ぬばたまの甲斐の黒駒鞍きせば命死なまし甲斐の黒駒」萬「居あかして君をは待たむぬば玉の我黒髪に霜はふるとも」萬「ぬばたま

の黒髪山を朝こえて山下露にぬれにけるかも』萬『古に妹とあが見しぬば玉の黒牛潟を見ればさぶしも』萬『ぬば玉の斐太の大黒見るごとにこせの小黒しおもはゆるかも』萬『茜さす日は照らせれどぬばたまの夜わたる月のかくらくをしも』萬『かくのみや吾戀ひをらむぬばたまのよるの紐だにときさけずして』萬『うちなびく春を近みかぬば玉のこよひの月夜かすみたるらむ』萬『ぬばたまの月に向ひて郭公鳴く聲遙けし里遠みかも』萬『わがせこが斯くこふれこそぬばたまの夢に見えつついねられずけれ』萬『ぬば玉のねての夕のものもひにさけにし胸は止む時もなし』これらは黒きと比したるより、暗きに轉じ、それより夜にうつし、夕ともこよひともいひ、遂には夜の義にとりて、夢とも月とも直ちに連ねたるは、なほ足引の木間、あしびきの岩根などいふ類なるなり。近時のものに四日にかけたるは夜の音をはたらかせたるなり。この枕詞を古今の頃よりはうばたまといひ、又訛りてはむば玉ともむら玉ともいへり。なほうばたまの條を參考すべし。

【仙】ぬばたまのぬは寢の義、ばは散の義、たまは神の義なり。ねてちるたましひ夢をかへすべきが故にぬば玉と云ふ。

【燭】夜とも續けたり。或はやみとも續け、黒髪とも續けたり。總じて黒きこと云はむとていふ言葉なり。むば玉、うば玉、ぬば玉などかへてよめる皆同じ詞なり。然るを喜撰式に夢をぬる玉、夜はぬば玉、髪はむば玉といへり。天德歌合に中務が歌に『むば玉の夜の夢だに正しくば我思ふ人を人に見せばや』とよみたるを、夜をばぬば玉といふを書き誤てりと奏しければ、過あらんにはいかでかとぞ仰せられて、この歌負になりぬ。されば喜撰が式に付きてかくぞ侍りつらむ。萬葉集にはうば玉・むば玉・ぬば玉ともに、總じて夜のことにも續け黒髪にもよ

めり。中務が歌詠にもあらざるか。夢をぬる玉といふは、寝るが内の玉しひの夢をば見るものなればいふなるべし。顯昭法師いふ。順が和名に烏扇をば射干と書けり。烏扇の實は丸にて黑きものなれば、うば玉といふを野干の文字の通ひたれば、野干玉と書き、又射干玉と書きたるか。それを略して、干玉とも書き野干ともいふかといへり。亦綺語抄にはむば玉とはからす瓜の實をいふといへり。烏瓜の實は全く黑きことなし。これは烏扇の實といふべきを思ひ違へたるにやと云々。或說に野干とは狐の名なり。きつねは百歲の後うばの玉になる故なりといひたれども、黑きことにいへるには叶はず。又或說に秦始皇の時、異國より五尺の鳥來れり。この羽の間に二つの玉の黑きあり、その鳥を捕へてその玉をとりて箱に納めたるときは、世間あかく、箱を開けば世間暗くなる。これを以て軍に出で、負けむ時には玉を出して世を暗くなして勝ちぬといへる說もあれど、是亦慥かならず。近き頃堯孝法印が歌に、鳥羽の玉の光とよみてくらきことにいひたる、この說を詠みたるか。歌にはたかなき證をも用ひて詠むこともあれば、慥かなる證文なくともよみたるたらん。又萬葉に「うば玉のひま白みつつ紐の緒の結びてしより後あふものか」この歌は夜といはねども、夜のあくる心にいへり。則れば紐を結ぶものなればその心にいへり。亦同集にぬば玉のねての夕の云々、夕も暗くなる心にてぬば玉とは置けるなるべし。

【匠】烏玉とかけると黑玉とかけるとを以て思ふに、烏は黑きものなれば、唐の文にも黑き事にはこの字をつけて黑き雲をば烏雲、黑き蛇をば烏蛇など云へば、黑き玉ありてそれが名をぬば玉と云ふに依つて、出しとおふ枕詞を置くに付けて、夜とも夕とも闇とも髮とも續くるなるべし。くらきとくろきとは本は通へる詞なるによりて夜などとは續くるなり。又は黑き玉白き玉の分別なく玉によそへていふ歟。或說、夜之異名也、言其黑之譬語

也。此集に野干玉・夜干玉とかけるを思ふに、烏扇の實也と云へるは相叶へるか。烏羽の說は後世宇婆多麻と書きたるに付て推說を構へたるか。夜の異名と云は夜とつづけたるにての僻案なるべし。袖中抄云、又ウバとは烏の羽といふか云々。是又僻案なり。

【考】黑しといふ意に續け、それより轉りて暗き意にて夜に冠らせ、再うつりて月に冠らしめたり。あらたまの年といふより轉り〳〵てあらたまの一夜も落ちずなどさへ續けたる類なり。又夢は夜ねて見るものなれば又夜より轉りて續けたり。十一にねての夕とも十五に妹が云々ともあり。上なるは夜宿る意にて續けたるか。又晚と隔てて續けしにもあるべし。次のは寢ることをいとい へば、妹のいに冠らしめつるか。抑ぬば玉てふ辭は、日本紀私記に、烏扇之實なるをよしとす。何となれば、和名抄に射干一名烏扇。又云、考聲切韻云、狐射干也、闇中喧鳴ニ野干ニ詰訛也と、然れば萬葉にぬば玉に射干玉と書くは正字にて、夜干、野干など書くは音を借りたるなり。且射干の實は黑き玉の如くにして野に生る物故に、我國には野眞玉といふなるべし。又卷十二に烏玉黑闇作云々、奥津神はぬばたまのひましらみつつと訓みたれど、烏は白の字を草の手より誤りたるにて、白玉のあひだおきつつと訓みてこともなし。

【槻】ぬばたまは寢程のなり、寢るを東國の方言にぬまるといふ。ばとまと相通ふ。

【言】ぬばたまは稻荷魂の謂ならむか。是夜を守るの神ともいふべきにや。狐を夜干と稱す。夜干は夜を守るなり。再考、ぬば玉は月をいへるなるべし。月は水精なればその色なるときは黑く夜に明なるといふにとりて、黑とも夜ともつづけたるならむ。

【解】ぬばたまは本居氏いふ。或人の說に烏扇の葉は、羽に似たる故に、この草を野羽と名づけ、その實を野羽玉とはいへり、といへるぞよき。

【稜言】こは夜といはん枕詞なり。言の意は寢經間（ねふるま）の夜といふに、多（た）の發語を加へたるなり。

【旋解】奴波多麻は寢る間の夜といふにはあらざるか。間を多麻といふは萬十七二日太末とあり。今も平語には間を置て來る人を間々（たまたま）來る又間々に見えしなど常云、邇近の多末もこれと同じ。

ぬまみづの　行方もなき兼盛集

兼盛集に『夏草の上は茂れる沼水の行方もなき我心かな』と見えたるを、續貂に枕詞としたれど、序の體なり。但し接續の意は沼水の行く方なきを、心のやるせなきに喩へたるなり。

ぬれごろも　夕日も新拾

新拾遺七に夕日も寒くと連ねたり。唐衣ゆふひもと同じく衣の紐も結ぶといふを夕日もと轉じたるなり。

ねの部

ねじろの　白き臂記

古事記上に白き臂と連ねたり。ねじろとは秋成の説によれば大根なりといひ、臂は古語ただむきと訓む。色白き手臂の喩に引きたるなり。

【評】これは乙女の臂の白く清らなるを、蘿蔔の根の白う肥えたるが似たるを以て、冠らせしなり。

ねぜりつむ　田中の里甲信紀程　田澤の站同

村岡良弼の紀行には田中の里、田澤の驛にかけたり。根芹摘む田といふより言ひ下したるなり。

ねぬなはの　寢ぬ名は古十九、後拾　苦し拾十四、後拾十六　來る人拾十九　妬く後拾

古今十九には寢ぬ名は立たじと同音を重ね、拾遺の十四には苦しかるらむとも、同十九には來る人もなしと連ね後拾遺十六には苦しき程とも、ねぬ名の痛く立ちぬればとも、妬くと思ふとも續けたり。◇古「隱り沼の下より生ふるねぬなはの寢ぬ名は立てじくるな厭ひそ」拾「池水のそこにはあらでねぬなはの來る人もなし待つ人もなし」拾「根蓴のくるしかるらむ人よりも我ぞ益田のいけるかひなし」後拾「忘るるも苦しくあらずねぬなはの妬くとおもふことしなければ」ねぬなはとはぬなはに同じく、今蓴菜と呼び料理に用ふる水草なり。ねぬなはといふを同音異義の寢ぬ名に轉じ、又ねの一音を反覆し妬くと連ね、ぬなはといふを繩の義にうつし、繩は繰るより、

苦しとも來るとも轉義に用ひたるなり。

【三】ねぬなはは繰りよするものなれば、苦し・來る・來れなど轉かせたり。又ねぬなはのねぬ名とはたらかせて重ねたり。

のの部

のちせやま　後も萬四

萬葉四、後湍山後も逢はむと續けたり。同音を重ねて調を爲さむが爲めにおけり。のちせ山は若狹にあり。『後湍山後もあはむと思へこそ死ぬべきものをけふまでもいけれ』萬葉には右の歌の外『若狹地の後湍の山の後もあはむ君』ともあり。

のとがはの　後萬十九

萬葉十九に能登川の後には逢はむと續けたり。類音を重ねて調を爲さむ爲に置けること、後湍山に同じ。枕詞解にものとのちと音の通へば。斯く續けたりといへり。◇『のとの川の後には逢はむしましくも別るといへば悲しくもあるか』

はの部

はこどりの　明けて悔しき六帖

古今六帖に明けて悔しきと連ねたり。はこ鳥は果鳥(かほどり)に同じく、深山に棲み、夜來りて塒もとめて朝歸ること、古歌に見えたれば、明くといはむとて置けるなり。◇「とりかへす物にもがもやはこ鳥の明けて悔しき物をこそ思へ」源氏「深山木に塒もとむるはこ鳥もいかでか花の香にはあくべき」

【解】是は箱鳥の明け方に鳴くを聞きて、別の悲しきを告ぐるに、浦島の子が古物語を取り添へていふなり。はこ鳥とはそれが聲のはこ〳〵と聞ゆるにつきて名づけたるなり。鳥の名はすべて聲につきて呼ぶこと西土にも例多し。はこはことも、又かほ〳〵とも聞きなさるるもて、萬葉には果鳥と書きてかほとりとよむなり。

はしだかの　野守の鏡新古十五　外山の庵新勅十六　初狩衣續古五　珠洲の篠原續古六

すずろに玉葉十四　尾上の雪新千七　端山がくれ新續古　羽易の山續後拾遺

とがへる山後十六　狩野の翁蓬廬集

新古今十五には野守の鏡とも、新勅撰十六に外山の庵とも、續古今五にははつかり衣とも、同六には珠洲の篠原とも、玉葉十四にはすずろにとも、新千載七には尾の上の雪とも、新續古今には端山がくれとも、續後拾遺には羽易の山とも、又後撰十六を始めとしてとがへる山と續けたる多し。蓬廬集には狩野の翁と連ねたり。◇新

古『はし鷹の野守の鏡えてしがな思ひ思はずよそながら見む』新勅『はし鷹の外山の庵の夕暮をかりにもとだに契りやはする』續古『はしたかの初狩衣露分けて野原の萩の色ぞうつろふ』續古『はしたかのすゞの篠原狩りくれて入日の岡に雉子なくなり』玉葉『はしたかのすゞろにかゝる住居して野邊の雉子とねをのみぞなく』新千『はしだかの尾上の雪のあけぼのに眞柴をはらふ袖の寒けさ』新續古『はしだかの端山かくれの露なれや知られぬ戀におつる涙は』續後拾『はしだかの羽かひの山を朝ゆけば飛火の原に雉子なくなり』後『忘るとは恨みざらなむ箸鷹のとがへる山の椎はもみぢず』はしたかは小さき鷹にて背は黑く光澤あり、腹は黄黑又赤白なり。その羽といふを端山(はやま)にうつし、尾といふを嶺の意なる尾上に轉じ、その尾羽には石打羽より七番目の羽に、鈴を付くるより、珠洲の篠原にかよはし、副詞のすゞろにうつし、初狩りといふを狩衣にかけ、鳥屋に養はるるより外山に轉じ、秋より冬にかけて毛のかはるより羽易山とも、とかへる山とも續けたり。とかへるとは毛のかはることをいふ。但しとかへる山の椎柴と連ねたれば、とかへるを越前の歸山にかけたるか。野守の鏡といふは袖中抄に野中のたまり水をいへることを記せり。これは故事につけて續けたるか。或は野守の人は己が姿をたまり水にてうつすなれど、ここは唯鷹野といふ續なるか。なほ考ふべし。

【補】昔雄略天皇と申す帝狩し給ひけるに、御鷹それて見えず。野守を召して問はれけるに、御鷹のありかを申す。いかにしてかく定かに申すぞと問はれ給ひければ、この野の水に影映じて侍れば申すよし奏しけるによれり。野にある水を野守の鏡とは申し傳へたるなり。

はしだての

倉梯山記 倉梯川萬七 熊來のやら萬十六 秀倉(ほくら)居集 熊谷中信朝臣

古事記には倉梯山とも、萬葉七にはくらはし川とも倉梯山とも連ね、同十六には熊来のやらとも、熊来酒屋とも續けたり。◇萬 梯だての熊来のやらに新羅斧おとし入るるわしかけて／＼な泣かしそね浮出るやと將た見てむわし」。記「はしだての倉梯山をさかしみといはかきかねて我身とらすも」古の倉は虫害又は濕氣を防ぐ爲に床を高くしたれば、梯子を立てて登りしなり。よりて梯立つる倉といふを大和の倉梯といふ地の枕とせしなり。熊来といふは能登の地名。やらは泥土をいふ。そのあたり道あしくして梯子をかけて渡しなどせるより、かく續けしならむか。或はくまきといふに闕城などの意ありとし同じく倉の義として續くるか。或は梯子は木を組みて作るものなれば、くまきに組木の意ありとして續けたるか。後考を俟つ。縣居翁集には秀倉といふ門人の名に冠らせ、甲信紀程には熊谷にかけたり。これらは古きに倣へるなり。

【冠】高倉の上下には梯を立つるなり。よつて梯立の倉と續けたるなり。此倉梯山も倉梯川も大和國の名所なり。

【匠】熊来と續くるに二つの意あるべし。一には橋立の倉橋立山とつゞけたるやうに、熊の上のくの一文字を倉になして續くるか、玉匣あしきの川。草枕多胡の入野の例あり。二には若しは山をくまと云ふか、然らばはし立のさかし山と續くる心なるべし。

【厚】仁徳記にはし立のさがしき山と連ねたり。山の嶮しきは梯を立てて登る意なり。

【考】垂仁紀に大中姫命曰、吾手弱女人也。何能登ニ天神庫ニ耶。五十瓊敷命曰、神庫雖レ高我能爲ニ神庫ニ造レ梯豈煩ニ登庫ニ乎、云々。古の倉はいと高く構へて下は柱の限あらはに見ゆ。故に梯立てて登りて事をなせしなりけり。今も熱田神宮などにさるさまの庫あり。又梯はそば立つるものなれば、嶮しき山てふ冠辭にもせり。くまぎ云

々、こは證據なけれども強ひていはゞ、和名抄に、棧、阪木構レ險爲レ道といひ、字書に棚也、閣也、閣木爲レ橋といふによれば、棧にも梯にも棚を構ふる木をくま木といふ故に、梯樹の熊來（地名）とは續けしにや。後世語のくも手といふはこのくま木より轉りたる語か。

【守】棚梯はいづくにまれ高き所に登らむ料に作れるものなるを、そを倉に上らむ料に作れるをば庫梯とぞいひけむ。うつぼ及枕の草紙にくればしとあるはこれの轉なるべし。

【石】熊來と續けしは、くみあの約にて、組顯はす木といふ義なり。のは詞、

【黒】くまきは組閣にて庫の一名なるべし。

はしむかふ　弟の命萬九

萬葉九の長歌に弟の命と續けたり。はしははしきやしのはしに同じく、愛する意といへる説あり。又箸の如く向ふといふ説あり。前説よろしきか。

【管】箸は物食ふに一前を取るものなり。兄弟二人あるをいはんとて、箸の一前有る如く向へる弟といふ心なり。

【考】二説あり。先古語の意にていはゞ、相うつくしみ向はゐる弟の命といふか。集中に愛妻、愛嬬など書きたるは、はしき妻ともはしつまともよむべく、向ふとは心に叶ふ意なり。はた二人ある兄弟は相對ふ理のみにてもあるべし。今一つは箸向と書けるを正しき字とせば、今の人たゞ二人ある兄弟をはしより、おとゞひといふは、古よりいへることにてかく言へるか。

【信】箸向ふ汝兄（なせ）と續けたるは、箸備ふるなといふ一言にかかれり。なは魚にまれ菜にまれ食ふものをいふ。箸はよ

り出てたる言なり。

【解】はしとは相對をいふ言にて、相雙對ふ兄弟の謂にて、はし向ふ弟とはいふならむ。箸といふも二つ相對ふよりいふ稱、橋といふも彼岸と此岸と相對はするよりいふ稱なるを思合すべし。

【右】こは雙對(はし)ふなり。弟も父母の愛、兄に相むかふとて弟に續けしなり。枕詞にあらず。

はじ弓の　始め　鈴屋集

鈴屋集には始に冠するにはじ弓のと置きたり。はじ弓は櫨にて作りたる弓。神代記にも天の波士弓(はじ)とあり。こは同音を重ねて調となす。

はたすゝき　久米の若子　萬三　ほに出でし君　萬十四、十六　うら野の山　萬十四　ほふり分けて　出雲風土記　蕃日(はひ)の命　鈴屋集　浦戸の崎　山齋集

萬葉三には久米の若子とも、十四及十六にもほに出し君とも、ほには出でしとも、十四にはうら野の山とも連ねたり。又出雲風土記には、はたすすきほふり分けてとも見えたり。はたすすきとは、薄の穗の長く伸びたるが、旗の如く靡びけるを云ふ。よりて穗の音よりあらはといふ意なるほにといふ副詞に係け、又屠りといはむ爲に冠りとし、又木草の繁りたるを熊曲、熊隈などいへるくまといふを、類音なるくめに轉じて人名に冠らせ、又草葉のさきをうれといふより、その類音なるうらに轉じ浦野山にかうむらしめたり。本居宣長の長歌には穗の音より蕃日の命に冠らせ、山齋集には浦戸の崎と續けたり。穗の末(うら)といふより土佐の地名へうつしたるなり。◇萬三「はたすすき久米の若子がいましける三保の窟は見れどあかぬかも」萬四新室のごときに至ればはたすすきほに出し君が

見えぬこの頃一 萬『彼の子ろと寝ずやなりなむはたすすき浦野の山に月かたよらし』

【匠】浦野山のうらを末になしてはたすすきとは置けり。はたすすきは穂に出でてうち靡きたるが、旗に似たればいふなり。

【解】穂に出ぬすすきをいふ。童蒙抄袖中抄等にも見えて古來區々なり。

【考】神功紀にほに出る吾とのるは、事の顯れたるを薄の穂に出づるに喩へたり。久米の若子と續けたるはいとも意得ず。猶強いていはば、薄は穂の籠れるが見えて、やうやくに開き出るものなれば、こめといひかけしにや。こめと久米と語通へり。又末に三穂といへるへ隔てかかるともいふべしや。はたすすきは紀に幡荻、萬葉卷一に旗須爲寸など書きたるによらば、秋野の中に薄は物より高くあらはれて、葉も長くて巾あるものなれば、幡すすきと云ふならむ。そのよしは魚を紀にも、祝詞にも鰭乃廣物、鰭乃狹物といひ、和名抄に鰭といへり。かくはたともひれともいふは、即旗、領巾などより魚がさまにもいひうつしつと見ゆれば、この薄も旗の靡き領巾を翼などやうなりとてさはいひしなるべし。又皮の字を書きたるによれば、はたのたを濁りて膚の心とし、さて穂を皮に含みもて漸にさき出るなれば、はだ薄といふらむとも覺ゆ。さる時は右の久米も皮に籠る意にて續けしものとすべし。

【服】うらのの山云々、こは薄の末とかけて、うらのの山てふ地名をいへりと見ゆ。うらは上のことにて、集中に『小松がうれ』とも『藤のうらえ』とも『篠の上に來ゐて鳴く鳥うれをおもみ』ともよめり。本草すべてうら有るを、はたすすきといひ出でたるは、彼兒らとはた寝すやならむといふ語をこめたりと見るべし。

【傳】四十一萬葉にはたすすき久米の若子がいましけむ三穂の窟は云々・はたすすきは三穂といふへかかれり。

【冠】昔春秋の頃、旗以て茅鶏旌旗といふ。又はたすすきを花すすきともいふなれば苞茅の謂にや。

【燈】すすきは穗のこもるが見えて端にさきいづるものなれば、久米をこめといひかけしなり。

【石】萬葉一に篠を押しなべと續けたり。こははたすすきの篠穗と比したるなり。久米の若子と續けしは、久米の一體にいひかけしなり。久米は組得といふ義なるを、みえをめと約めて久米といふ。久米の雄元來ざる義なり。はた薄の一群おひ繁りたるを組得たりと比して續けしなり。

【庭解】大方考にいへる轉ながら、旗、領巾を本とせられたるは非なり。波太は端なり。比禮は比良と通ひて物のひらめく形をいふ。そは端なるものは際きひらめくより云ひしにて、則薄も皮の組しまたりたる末の亂れてそぞろきひらめくをいふ。故、波多といふは體、比禮といふは用の如し。すすきはすすろきにて、その葉の亂れてすすろきたればいふ。皮ははぎ、葱などの皮にてその莖立をいふ。

【眞】久米に續けれるは熊檮熊篠のくまと同じく薄の葉の繁れるよしの續きなり。

【黑】はたすすきは長薄なり。

はちすばの　露のたま〳〵新拾十八

新拾遺十八には『蓮葉の露のたまたま法に逢ひつつ』と見ゆ。蓮葉の上の露の玉といふを偶といふ副詞にうつしたり。佛法に逢ふといふより由緣ある蓮を以てせるなり。

はつかしの　もりの言葉金　渡りや千

金葉には羽束師のもりの言葉と連ね、千載十八の長歌には世の人聞ははつかしの渡りやしにけむとあり　山城國

鳥羽の附近にある羽束師の森は古より名高ければ森の響を洩りにうつしたり。但千載のは人きき恥しといふことを兼ねさせたり。◇ 金『家の風吹かぬものゆゑ羽束師の森の言の葉ちらし果てつる』

はつかりの 泣きて古十四 はつかに古十一、新古今十一

古今十四には泣きて渡るとも、なきこそ渡れとも連ね、古今十一にははつかに聲をとも、新古今十一には、はつかにだにもとも、十五にははつかに聞きしとも續けたり。初めて來りたる雁の大空を鳴き渡るといふを、人の泣きて居るに比し、又僅の意なるはつかといふ語を設けむ爲めに同音の詞を冠らせたり。◇ 古『思出でて戀しき時は初雁のなきて渡ると人は知らずや』 古『初雁のはつかに聲を聞きしより中空にのみ物を思ふかな』 新古『東山の嶺とびこゆる初雁のはつかにだにも見てや止みなむ』

はつしぐれ 古き都風八

風雅八には初時雨古き都はと連ねたり。しぐれの雨が降るといふを古るの音に轉じ近江志賀の舊都にかけたり。さて紅葉は時雨によりて色づくものなれば、たよりよしとす。◇ 『志賀の山こえて見やれば初時雨ふるき都はもみぢしにけり』

初霜の 起きゐて古十八 古里續後七

古今十八には起きゐて物を思ふと續け、續後撰七には古郷寒きとも連ねたり。霜の降るを古ると轉じ、霜の置くを人の起きにうつしたるなり。◇ 『なよ竹のよ長きうへに初霜のおきゐて物を思ふ頃かな』

はつせがは 早く源氏

源氏玉葛に『泊瀬川早くのことは知らねどもけふの逢瀬に身さへ流れぬ』と連ねたり。大和の長谷の川は急流なるより、はやくといひて古のことに轉じ、下にけふの逢瀬に身さへ流れぬと縁語にて一首を仕立てたり。

はつ花の　散るべきものを萬四

萬葉四に初花の散るべきものを人言のしげきによりてよどむ頃かも」とあり。生命を落花に比したり。初咲の花のあたら散る如く我も命失せむとの意なり。

【眼】戀に身命も絶えんずるといふなり。三四の句の人言の繁きとは浮名をいひ騒がる、それを厭ひて寄し堪忍びたるさまなり。花は散るもの故冠辭に置けり。初花をいはでもあるべけれど、花の專らは初花なればしかいふ事なるべし。

初雪の　ふりぬること後十四

後撰十四に『身をつめば哀とぞおもふ初雪のふりぬることも誰れにいはまし』とあり。雪の降るを古りぬるに轉じたること、三代枕詞例にいへるが如し。

はとりの　伊刀麻神社神名帳

神名帳に服部伊刀麻神社と見ゆ。機織りの絲といふを伊刀麻と轉じて冠とせしこと續貂にいへるが如し。伊刀麻神社は伊勢にあり。

はながたみ　めならぶ古十五

古今十五及續後拾遺十三にめならぶ人と續けたり。花がたみとは花籠をいふ。籠には編目のあらものなれば、め

といふを、群れ並ぶ意の約りたるめならぶへうつしたり。◇『花がたみめならぶ人のあまたあれば忘られぬらむ數ならぬ身は』

【服】契沖云々、花がたみとは花を摘みて入るゝ籠をいふ。和名抄に筝箐をかたみとよめり。又筐の字をもよめり。又神代紀に以二無目堅間一云々と有りて、自註云、所謂堅間是今竹籠なり。かたま、かたみ同音なり。籠は目多かるものなれば、目並ぶと續けて數多の人をいへり。この解うべなり。然しながらめならぶ人とは眼並ぶ人にはあらず。群れ並ぶ人といふなるべし。

【三】花籠はあみ目の並びたるものなれば、思ふ人數多並べたるを比して花かたみめならぶと續けたり。め並ぶはみえ並ぶといふ義なるを、みえをめと約めてめならぶといへり。

花かつみ　背ても知らぬ萬四　かつ見る六帖、古今

萬葉四には背ても知らぬとも、古今十四にはかつ見る人と續けたり。同音を重ねて調をなさむが爲に冠らせたり。

◇萬『女郎花さき澤に生ふる花かつみ背ても知らぬ戀もするかも』　六帖『みちのくの安積の沼の花かつみかつ見る人にこひや渡るらむ』　花かつみは諸說あり。沼に生ずる菰といひ、否らずといふ。かまやまあやめといふ說あり。菰は沼地に生ず。大阪あたりにては端午に粽をまくに用ふ。樂翁侯のかつみ考あり參照すべし。かつ見るとは一目見るといふが如し。

【童】陸奥國風俗云々。かつみとは菰をいふ。

【綺語抄】芦の花をいふ。

【冠】かたばみと同じ類にて水に生るものなり。四ひらにて葉即花の如くなればはなかつみといふならん。

【續】かつ見るは、はつかに見初めしをいふ。小端をはつ〳〵とも、かつ〴〵ともよむ義なり。かつても知らぬはいまだ見ぬ人をいひ、かつ見るははつかに見し人をいふ。共にその人の勝れて聞ゆるなり。花かつみの事、昔より定かならず。我友岡雄島が美濃の國より得しとて贈りしかつみの粉といふものは、眞菰草の根もて晒して粉につくりしなりといふ。その色相も味も蕎麥に似て團子に作り又切麥にもするといふ。

【攷】本草啓蒙にも菰米に當てたるをよしとす、云々。略解にいへるは田字草ともかたばみ藻ともいふものなり。

【品】按に勝見といふが素よりの名にして、それに花のさきたるを花勝見といふ。橘に花橘といふが如し。さてこの物、菰の一種にしてかつみは實生り、こもは花咲けど實生らず。かつみの苗は、こもより長大にして花の後實成る云々。

花ぐはし　櫻紀　相見し子萬十一

允恭紀に『花ぐはし櫻のめでことめでばはやくはめでず吾がめづる子ら』と見え、萬葉十一には『花細し葦垣ごしにたゞ一目相見し子ゆゑに千たび嘆きつ』といふ歌あり。櫻は花中の王なれば、ほめて花ぐはしとおけるなり。花ぐはしとは花のうるはしく妙へなる意、めでとは賞贊の義なり。紀の歌は衣通姫の美なるを櫻に比したるなり。萬葉のはこれに基きて相見し子にかけて褒むる詞なるべし。葦にかかるといふ說は誤ならんか。

【考】花の中に櫻こそめでたければ、花ぐはしといふ詞を冠らせ給へり。記紀共に微妙をくはしと訓しを思へ。萬葉のは實の景を以て頓て譬になしたれば冠辭にあらず。紀のは櫻の用を擧げさせ給ひたる故に冠辭なり。

【石】芦垣と續けしは芦と續けしにて、芦の花もくはしといふ義なり。

花すゝき　ほに出づ古、後　ほいかに拾十二　まそほの袖成章集　穂阪の御牧夫木集

古今十二にはほに出て戀はとも、後撰六にはほにいづることとも、古今序にはほにだすべきこととも、拾遺十六はほのかにとも續けたり。花ずすきの穂といふをほのかとも、あらはるる意なるほともうつしかけたり。萬葉の頃にははたずすきほと續けたるを、三代集の始つ頃より花すすきといへり。◇『花すすきほにいでて戀は名を惜しみ下ゆふ紐のむすぼふれつつ』『よそにてもありにしものを花すすきほのかに見てぞ人はこひしき』又富士谷成章家集にはまそほの袖と連ねたり。まそほは赤緒色をいふ。薄の色もて喩へたるなり。夫木集には薄の穂といふより地名に轉じたるなり。穂阪の牧は甲斐にあり。

【眼】古今戀部五に『花薄われこそ下に思ひしかほに出て人に結ばれにけり』こは薄は内に穂を含みて有るてふ意もて、戀の心の末ほに出立たぬてふに譬へて、吾こそ下に思ひしかと續けて、はてにほにと受けたり。

【三】薄は穂に出づるものなるが故に、ほと續けたり。思の上事業の上ほに出づるといふは、上にあらはれ出るといふ義にて穂・火・帆等の名義皆然り。

花ぞめの　うつろひ易き古十六

古今哀傷の部に、『世の中の心は花染のうつろひ易き色にぞありける』と見ゆ。花染は色がはり易きより、人心の他へ移るに比したり。

【眉】こは隱るる所なし。上に擧げたるはねず色の移ひ易き、或は月草の移ひやすきなどといふ類なり。花染とは

或は紅花、はねず、月草の花などもて染むる類なるべし。

放ち飼ふ　駒木野の關甲信紀程

甲信紀程には放ち飼ふ駒といふより、武藏の駒木野の關に冠らせたり。

はなち鳥　行方萬十

萬葉十にはなち鳥行方も知らず云々とあるを、眞淵及秋成は放ち鳥とせり。籠より放たれたる鳥の如くと比したるなり。なほ濱千鳥の條を見よ。

はなちらふ　秋津の野邊萬一

萬葉一に花ちらふ秋津の野邊と連ねたるを服部氏の續冠辭考にあげたり。ちらふは散るの延言なり。ここは唯實景をいふのみにて、枕にあらざるか。

【續】秋津の冠辭なり。吉野山は時じく雪のふる所なれば、この冠辭に御幸座る義をかねてよめるなるべしと花散相の三字は雪のふる貌を義を取つてかけると見えたり。云々。雪落貌は花散相の三字相叶ふべき。

【服】こは花の散る頃の歌ともいふべけれど、かの千鳥なくさほの川・三吉野の川などよめるも、千鳥は眼前ならぬをよめりと見ゆれば、是も秋津野の春は、もはら花咲き散りて面白き所なるが故に、冠辭におけりと知らる。

花はちす　身のさかり人紀

雄略紀に「くさか江の入江のはちす花はちすみのさかり人乏しきろかも」とあり。續貂に花はちす身の榮えんとあげたるは少しく訓み誤りたるなり。蓮の花の實といふより身の意にうつしたるなり。

【冠】古事記の歌に、身のさかえ人とあるは、花の見るさかりをいふ、見のさかり、聞のさかり古書にいへり。それを全盛ある人の身によせしなり。

はねず色の　うつろひ易き萬四、十二

萬葉四及十二にうつろひ易きと續けたり。唐棣は庭櫻ともいふ。その色赤し。而して色かはり易ければ、心のうつり易きに比したり。

【管】はねずは木芙蓉の花なり。夏さく花なり。

【報】月草の移ひ易きと續く類なり。花の色はうつろふが中に、わけて鴨頭草、唐棣などは安く移ふものと知るべし。契沖云、朱華を日本紀にははねず色とよめり。郁子は實の名なり。和名むべといふ。郁李仁は郁子の種。

【冠】唐棣と書きてはねずとよむは物あたらず。唐棣花はさいふの花といふ物にて、花は白く赤みたれたるものなり。天武紀に朱華を波泥縟（はねず）とよみたれば赤き色はしるく。古今に花染といふも、もしやはねず色のことにはあらぬか。

【攷】翼醉は借字なり。本集に訓る唐棣は今の世に何といへりや、覺束なし云々。

羽かはす　鳥澤甲信紀程

甲信紀程には武藏の鳥澤といふ地名にかけたり。

はゝそ葉の　母萬

萬葉十九及二十の長歌に母と續けたり。ちゝのみの父と同じく、同音を重ねて詞となせるのみ。はゝそとは柞の

こと、櫟の轉なり。秋紅葉す、これをははそのもみぢともいへり。後には、ははそばといふを直ちに母の義に用ひたり。

【考】ははその木と母との語似通ひたればなり。和名抄に柞(和名由之、漢語抄云波々曾)木名、見作柞也。

【冠】ははそ葉は母育に通ふよりして生育のいひにて子生といふにや侍らむ。

【石】柞葉母と重ねたるにて、のは調なり。

はふくづの　いや遠長く萬三　下よし戀ひば萬十　行方をなみや萬十二　後も逢はむ萬十六　絶えず忍ばむ萬二十　たづねて後撰

萬葉三の長歌にはいや遠長くとも、十には下よし戀ひばとも、十二には行方をなしやとも、十四には引かばより來ねとも、十六には後も逢はむとも、二十には絶えず忍ばむとも、後撰には尋ねてとも連ねたり。◇萬「藤波の咲ける春野にはふ葛の下よし戀ひば久しくもあらむ」萬「大崎のありそのわたり延ふ葛のゆくへをなみや戀渡りなむ」萬「足柄の箱根の山に延ふ葛の引かばよりこね下なほ〳〵に」萬「なしなつめきみにあはつぎはふ葛の後もあはむと葵花さく」「はふ葛のたえぬ使のよどめればことしもあるごと思ひつるかも」後「足引の山下しげくはふ葛のたづねて戀る我と知らずや」延ふ葛の長く延びたるを年月遠長くの意にも、その蔓の彼方此方に別るるを、人々の思々に別るるにも比し。又蔓の分れても又末葉の相逢ふを、人の後に逢ふに喩へ、蔓の切れずあるを時の絶えざるにうつし、引かば蔓のより來るを、愛する人の呼べば來るになぞらへ、蔓の延ひて行方定まらぬを人の戀ひ惑ひて行方なきに譬へ、又葛の低く地面を這ふより、内々の意なる下よといへり。下よのよはよりの意

なり。

【考】絶えず忍ばん云々、こは上に玉葛たえぬと續きたるに同じ。又遠くはふものなるを頭長き喩にしたり。

【服】行方も知らず云々、行方も知らず這ひゆくもののゆゑいへり。この歌は發語より大崎の荒磯のわたりを這ふ葛のといひたれば、爰は冠辭ならねども集中に延葛之てふ冠辭あるゆゑ、かくも續くべきものなれば擧げつ。

【詩】詩の大雅旱麓の莫々葛藟施于條枚云々と同じ。

【紹】後撰集に『足引の山下しげくはふ葛のたづねて戀ふる我と知らずや』古歌にたえずとも、とほながくともよみしを、此頃には延ひゆくさまの定めなきより、尋ねかぬる事にいへり。

【解】葛は物の蔭、木の下などにはひ入るものなれば、はふ葛の隱と續け、又葛は長く遠くはひ入りて、かづらの末の往方の知れがたきものなれば、行方もなくと續けたり。又葛を引くにつれて、その葛の末の來る如く依り來ぬといひかけ、蔓の往き〳〵ては本の所へかへりあふに比して、後も逢はむと續けたり。

【黒】長くつづくより絶えずといふに掛けたり。

はふつたの　別れ萬二、十三

萬葉二には別れし來ればとも、十三には別のあまたとも、十七には行きは別れずとも、十九には別れにしとも、九には各がむき〳〵とも續けたり。葛かづらの彼方此方へ延び分るるを人の別れに比したり。

【續考】おのがむき〳〵云々、蔦かづらの幾筋ともなくはひ別れゆくを己がむきむきとて人の相別るるに譬ふ。

【釋】はふつたの各が向々云々。この向々は面々の義にて各面なるべし。さてはふ蔦石の如く各々別々にわかる

ろよしにつづけたり。

ははまめの　からまる萬二十

萬葉二十に『道の邊のうまらがうれにははほ豆のからまる君をはかれか行かむ』とあり。ははほ豆は這ふの訛言、豌豆の如き豆類のつるの、物に纏ひつきたる如く、日比相馴ひまとひしと比したるなり。

【語】うまらはうばらにて荊棘なり。ははほははふの通音、はかれはわかれの通音、東人の鄙ぶりなり。歌は君にはひからまりて居らむを、今は徒だち給ふに、別れゆかむことの悲しとなり。

【含】賤臣の輔佐多きを、はふ豆のからまるとよめるならむ。はふ豆とは豐盈の詞、豐は豆の豊滿なりと註せり。

【解】豆蔓のはひからまる意より、男女の相馴ひからみてあるにいひ續けたり。

はますどり　足惱む駒萬十四

萬葉十四にあなやむ駒に冠らせたり。濱の洲に居る鳥は、足場の惡きより足惱むものなれば、達路若しくは險路にゆき惱みたる馬の喩に取りたるなり。

【服】あなやむ駒とは足惱むてふにて、妹がり乘り行くに、道など遠くして、駒の足の疲るるをいふ。はます鳥は濱崎、洲崎などに遊ぶ鳥にて、千鳥或は都鳥などいへる類の鳥なるべし。

【續考】足惱むなり。砂上は行きやられぬものなれば、かく續けたり。

【解】こは雁鴨などの陸を歩み行くさま、足萎病ものの如くなればかくは續けたり。

【有】はます鳥は濱に集る鳥といふ義なり。足なやむ駒いは、足萎うのえうをゆと約めてなゆむといふ。足萎發

勤るといふ義なり。濱諸鳥のあさりして足差むといふ義に比したり。

はまち鳥　行方もしらぬ跡古十八、後十　あとやたえぬる後十二

古今十八に『忘られむ時忍べとぞ濱千鳥行へも知らぬ跡を留むる』又後撰十には『かけろふに見しばかりにや濱千鳥行方も知らぬ戀に惑はむ』とも、同十二には「白波の打出る濱の濱千鳥あとやたえぬるしるべなるらむ」とも見ゆ。千鳥の砂上に足跡を印するを、唐土に鳥跡を見て文字を制りし傳に從ひて、筆跡を留むる意にうつし、又千鳥の何方へ行きしか分からぬを戀に惑ひて途方に暮るるに比し、足跡の消ゆといふより情の絶ゆるに轉じたり。後撰十なるを眞淵は放ち鳥をはまち鳥と誤りたりといへり。この他蜻蛉日記には跡も渚の文見ねば人離けたり。千鳥の足跡は多く渚の上にあるより、跡のなきに渚とかけ、踏みに文をかけたり。

【服】跡を留むるは誠の千鳥の跡にあらず、鳥の跡とは文字をいふにて、歌の意は則この歌を物に書きつけ置きて族どもへの形見になし、行方もなく宿を立ち出づるさまなり。

【留】後撰に跡や絶えぬる云々、こは鳥の歩の跡の物の文めきたるといふは、唐土に字といふもの作りそめしといふことより、鳥の跡又千鳥の跡などはいふなり。さて跡といふより、絶ゆる中のしるべといふは、しるしならんといふに同じ。後撰集に『かげろふに見しばかりにやはなち鳥ゆくへもしらず戀に惑はむ』濱の鳥を放ちやれば行方知らず飛去るを、心のやる方なく思ひ惑ふに冠らせたり。

【抄】支云、この歌後撰に濱千鳥とあり。奥義抄に放ち鳥とあり。後撰標註云、奥義抄云、はなち鳥とは籠に入れて飼ふ鳥を放ちたるをいふ。いづちか行くらむ知らねば行くへ知らぬことによるなり。証園云、ここは濱千鳥

もどることなから、放ち鳥の方然るべからむ。飼ひたる鳥を放ちやりたるなり。

はまつづら たのみ萬十四

萬葉十四に『駿河の海おしべに生ふる濱つづらいましを頼み母に違ひぬ』とあるはまつづらを、詞草小苑には、今しにかかる枕詞とせり。されど思ふに蘆邊に生ふるつゞらは、磯行人などのよりすがりて頼みとする如く君を頼みと語を隔てて連ねたるなるべし。

【発】濱つゞら今しは石とかけたり。いしの反いなり。濱にはふ蘿なり。つらの反た、しの詞は然りしといふ詞を約めていふ詞なり。

【品】濱に生ひたる黑葛なり。

はまひさぎ 久しく萬十一

萬葉十一及拾遺十三、金葉十に久しくと同音を重ねたり。はまひさぎとは濱に生ひたる楸なるべし。楸は歴木とも書す。年久しく生きるものなればなり。一説楸はいつさきといふ木なりとも又赤芽柏ともいふ説あり。◇『浪の間ゆ見ゆる小島の濱ひさ木久しくなりぬ君にあはずして』

【品】こは松に濱松などいへる類にて、世の常の楸の濱に生ひたるをいふかともいふべけれども、楸は潮風に堪へ得べきものならざれば、濱島などに生ふべくもあらぬものなり。中山嚴水今俗にいつさきといふものは海濱に生て楸に似たるものなれば、これを濱久木とはいふならむ。と、

はまゆふの 心隔てゝ新拾十九

新拾遺十九に『行かへり千鳥鳴くなる濱ゆふの心隔てて思ふものかは』とあり。濱木綿(ゆふ)は今俗に濱おもとといふ。南海の海岸に生じ、葉は幾重にも重りて莖を包む。花の狀木綿の如く白く垂れたるより名を得たりといふ。莖の幾重にも重りたれば、隔つといはむ料に置けるのみ。

【品】はまゆふは今俗に濱おもととも濱芭蕉ともいふ。その莖の皮幾重にも重れり。七月に花咲く。今も紀伊國熊野の海濱に多し。

【三】新撰六帖に濱ゆふの心隔てて云々、試にいはゞ、隔てと續けたるにて、心に續けたるにはあらじ。重りたる形勢を隔つるの義にはたらかせたるならむか。

はや川の　せきにせくとも萬四　行かくも知らず萬十三

萬葉四には速川のせきにせくとも又十三の長歌には行かくも知らずと連ねたり。後のは考にいへるが如く、速川(はや)水逝くといふを、人の行くとかけたるにて、行くを行かくといふは聞くを聞かくといふに同じく、古言の一格なり。前のは心の抑へがたきを、早川の塞きても崩れて詮なきに比したり。◇『愛しと吾がもふ心速川のせきにせくとも猶やくづれむ』

【眼】萬葉四にせくとも云々、こは瀬の早き河には横かけてせきせけども猶崩れのみすべければ、靈の瀬の如く湧きかへる心もて、塞けどもせきあへられじといふ心なり。心を塞き止むるといふ語に早川のを冠らせたり。

はやさめ　くだみ山出雲風土記

出雲風土記にくだみ山に冠らせたり。積韜にいへる如く早雨の下るといふを、嘉字郡の朽(くち)細山に轉じて轉けしに

て、ここにては實ははや雨の降るにあらず。

【冠】暴雨は早秋の間に夕立雨などいふをいふなるべし。くだるといひ、ふるともいふ。それをくだみ山に冠らせたり。萬葉集には朽網山と書きたり。意宇郡にあり。

はや人の　薩摩の迫門萬三、六

萬葉三には薩摩の迫門とも、同六には迫門とも連ねたり。薩摩、大隅、日向の土民は古より性猛くして擧動捷ければ隼人といへり。この人の住む國なれば、薩摩といはむとて隼人のと置きたるなるべし。さて後には隼人を以て直ちに薩摩のこととし、その國の迫門に續けしは、なほ青丹よし國内といふ類なり。◇「隼人の薩摩の迫門を雲居なす遠くも吾はけふ見つるかも」

【燭】日向、大隅、薩摩の國皆隼人なり。その猛く烈しきこと隼の如しと風土記に見ゆ。兵の名を薩男とも隼人ともいふは、薩摩男といふ義なり。よって隼人の薩摩と續けたり。

【考】こは二つの意あり。一つに或人のいふ隼人の住所ゆゑに然か續くるなりと、蝦夷が住所ゆゑに、夷が千島といふが如し。二には隼人は火酢芹命の裔にて、そのもと海の幸人なれば隼人の幸と續けたるにや。さつまてふ名も、かの海の幸ある隼人の住むゆゑに、幸島といふを略きていふならんと覺ゆればなり。又隼人の薩摩の迫門ともいふべきを、いと言ひ馴れたることなれば、自隼人を即さつまの地名にいひなしたるにてもあるべし。

【言】さつまのつまの二音たと約り、たはとと通へば薩摩人は早人の義なれば隼人とかさぬ。

【一言】隼人は武士なれば、隼人の得物と續く。迫門の瀬と續くは、薩摩の詞を去りていふなるべし。

【古】つは調にて隼人薩摩といふ義なり。隼人は薩摩の國より專ら參り上りて仕へまつりしが故なり。

はや日わけ　はやくも菅根集

菅根集に早くもに冠するに速日別を以てせり。速日別は神の名、同音を重ねて調とす。

はやふねの　早く後十二

後撰十二に『大島に水を運びし早舟の早くも人にあひ見てしがな』とあり。同音を重ねて調をなす。

はるあきの　いや遠長く萬十三

萬葉十三に大船の思ひ憑みて木始巳いや遠長く我念ひつる君に云々、木始巳を高保ははるあきと訓みて、いや遠長くへかかる枕詞とせり。但し木始巳の三字は訓み方につきいろいろ異說あり。古くは柔しおのれと訓み、眞淵は木始は義訓にて根をいふ。而して巳の上には如の字を脫せしにて、ねもころにと訓むべしといひ、宣長は延約石の誤とし、千蔭は木は本の誤、始は如の誤にて、本如巳はねもころと訓むべしといひ、雅澄は樹根之の誤とし、大神景井は始は防の誤にて木防巳即青つゞらと訓むべしといひ定說なし。

【服】木始巳云々、板本にはこしおのれと點じたれど、さよみては彌遠長く吾思へると續かず。殊に我がもへると有るは、おのれとはよまじかし。この說は取るに足らず。加茂大人もよみ誤みいや遠長く續くるには延他之てふ冠辭ありとて、延絡石の三字を誤れるかといへれども、曾て似付かず。思ふに天地之三字を誤れるかと考ふべし。されどかの字曾て似侍らず。然れば本の字のままにて考ふるに、漸く一の意を得たり。巳の字を已と見て、已の字は退止畢記等のよみあり。されば木の始め巳りといふ意を以て義訓するに、冬枯の木の春になりて芽萌の

さすを剛木る始と取り、秋に至りて紅葉しけるを訖りと取りて、木莵已を春秋のとよむべく思ほゆ。

春かすみ　春日萬三　井の上萬七　おほにし思はゞ萬十　立田古二　よそ古十九

萬葉三には春日の野邊にと同音を重ね、同七には井の上ゆと連ね、十には序の例にて、おほにし思はゞと續けたり。霞の立つを居るともいへば、ゐの音より大和の井のべ又伊勢の井村の里といふ地名に冠らせ、又霞の立ち渡るときはおほはるるものなれば、おほの音をうつして、大凡又なほざりの意なるおほにといふ副詞へ冠らせたり。又古今一には立ち別れなばとも、二には龍田の山とも、十八には立ち出でてとも、十九にはよそにも人にとも、後撰十九にははかなく立ちてとも、拾遺六には立つ曉をとも連ねたり。霞の立つを人の旅立つ意にうつし、立つの音より大和の龍田山に冠らせ、霞は物を隔つるものなるより交情のよそよそしくなるに喩へたり。◇萬『春霞かすがの里のうゑこなぎ苗なりといひし枝はさしにけむ』萬『春がすみ井上よただに道はあれど君に逢はむとたもとほり來も』萬『卷向の檜原に立てる春霞おほにしもはばなづみ來めやも』萬『人知れず思ふ心は春がすみ立ちいでて君が目にも見えなむ』古『花の散ることや訖しき春がすみ立田の山のうぐひすの聲』

【仙】春の日は霞に映ぜられて、赤く紫に見ゆれば春霞春日の里といへり。

【匠】井上は今按、ヰカミと讀むべし。或人の云ふ大和にある地の名なり。霞は居るものなればゐるといふ詞まうけむ爲なり。

【考】春霞井上云々。春霞の居るといひかけたり。井上てふ地は大和にあり。

【服】萬三に春日里云々、こは春霞かすむといひかけて、春日の里といへり。春霞眤ともかかれりといふべけれ

ど、專らは右の結なり。又古今十九よそにも云々、こは天雲のよそにぞ君はとよめるが如し。霞雲はよそにのみ見ゆるもの故なり。

【解】春霞おほにし云々、これは春霞の朧しき心にかけたり。

【石】かすがの里とつづけたるは霞の名をかさねたるなり。

はる風の　音に萬四　名古屋蓬廬集

萬葉四に『春風の音にし出なばありさりて今ならずとも君がまにまに』と連ねたり。我が心を云々と打ち出し置かばの意にて、風の音と續けたるなり。蓬廬集には名古屋に冠らせたり。春風のなごやかといふより地名へうつしたるなり。

【服】音にし出なばとは、此の如く初戀の心を出し置かばなり。冠辭を設けば秋風の音にし出なば云々ともいふべけれども、考ふるに爰初めて云ひいでしをりはといふ歌なれば、春風の音相應なり。又秋風は稍過ぎたり。春風ほのかにて宜し。

はるくさの　いや珍し萬三　繁き我戀萬十

萬葉三の長歌にはいやめづらしとも、同十には繁き我戀とも續けたり。春草の萌茂れるを戀のしげきに喩へ、又その柔にして愛らしきより、彌めづらしと比したるなり。◇『春草のしげき我戀大海のへによる浪の千重につもりつ』

【攷】春草をよめる義訓にて、若草は珍らしきものなれば、いや珍しきと續けしなり。

春草を　咋山萬九

萬葉九に馬咋山と連ねたり。馬の春草を喰ふといふを、山城綴喜郡の咋山にかけたるなり。◇『春草を馬くひ山ゆ越え來なる雁の使は宿すぎぬなり』

【考】こは山咋といふ山を馬くひといひかけしなるべし。稻山を衣著ならの山、振山を袖ふる山などいひ下せし類なり。又蒲野を眞蒲野といふ如く、咋山を眞咋の山ともいふを、その眞を馬の事にいひなして、まくひの山とよめるにや。

はるさめの　經る古一　古人古十一　振りいで鳴く後一　ふりはへて六帖　古木の櫻玉葉　故事のみ風雅　布留野續拾遺

古今一には經るに詮あるとも、同十四には古人なればとも、後撰一には振り出でて鳴くとも、同五には世に古りにたるとも、六帖六にはふりはへてとも、玉葉には古木の櫻とも、風雅には故事のみとも、續拾遺には布留野の道とも續けたり。◇古今『白雲のうへしるけふぞ春雨の經るに詮ある身とは知りぬる』古今『かげろふのそれかあらぬか春雨のふる人なれば袖ぞぬれぬる』後撰『梅の花ちるてふなべに春雨のふりいでて鳴く鶯の聲』六帖『春雨のふりはへて來る人よりも我まづつまむやせかはの芹』後撰『ふりぬとていたくな佗びそ春雨のただにやむべきものならなくに』『程ふれば忘れやしつる春雨のふることのみぞ我はこひしき』春雨の降るといふを、ふるの同音なる經る、古るとも、絞り出す意なる振り出てとも、わざわざの意なるふりはへとも、故里とも故事とも轉じて連ねたり。又後撰一の『ふりぬとていたくな佗びそ』といふを、三代枕詞例にはただに係れりといへど、下を隔て

て止むに係れるなり。

はるとりの　さまよひ萬二　ねのみし泣かゆ萬二十

萬葉二の長歌にはさまよひぬればとも、二十には聲のさまよひとも、九にはねのみし泣きつゝとも兼ねたり。鳥の囀づる如く、人の呻くにも笑泣するにも喩へたり。

【考】萬二に云々、こは春の鳥のさへづるを、皇子を慕ひ奉りてなけくに喩へたり。吟の字古くよりさまよふとよめり。

【續考】萬九に芦垣之思亂而春鳥能啼耳鳴年云々、この春鳥を、今本にうぐひすのなきになきつゝとあるは誤し死れる弟を慕ふ歌にて、思ひ亂れてねのみ泣くといふに、蘆垣、春鳥二つの冠辭を置きたるなり。

【攷】春鳥の舊訓うぐひすのと訓み、考には字のまゝにはるとりと讀まれつれど、案るにももとりと訓むべし。

春の海の　なごの浦つづら冊子

上田秋成のつづら冊子には春の海のなごの浦と續けたり。名古の浦は攝津なるべし。春の海は波穏かになぎわたること多ければ、なごむといふ心にて地名にうつしたるなり。

春の日の　長古十三　ながらの濱新古今十七

古今十三には長くや人をとも、後撰三には長き念はとも、新古今十七には長柄の濱とも連ねたり。春の日遅々として長きものなれば、年月長くとか、古よりの念とかいふ意にて、長くとも、又長の字を戴ける攝津の長柄にもかけたり。又萬葉十五には春の日のうらかなしと續けたり。春日うららのうらを心裏のうらにうつしたるか。履歴

氏はかなしは憐む意といへれどいかがあらむ。◇古『逢はずしてこよひ明けなば春の日の長くや人をつらしと思はむ』續古今『春の日の長柄の浦に船とめていづれか橋と問へど答へぬ』

【附】春日はうら〳〵と長閑けく面白きものなれば、うらかなしといふべし。かなしは人の子かなし。又禰手かなしものかなしと同じくて憐む心なり。そのうらがなしてふを則人に別れて心悲しきてふにいひうつしたり。うらとは心のことなり。

春の田を　返す返す拾十三

拾遺十三に返す〳〵と連ねたり。春耕の時、田を打ち返すを、繰返しの意なる副詞に冠らせたり。◇『忘らるる時しなければ春の田をかへす〳〵ぞ人は戀しき』

【附】後撰集にも『梓弓春の山田をうち返し思ひ止みにし人ぞ戀しき』田がへしを返す〳〵打返してともかけしなり。

春の山田の　好ける心成章集

富士谷成章の家集には春の山田の好ける心と續けたり。こは田を鋤くといふより風流の義なるすき心にうつしたるなり。

春の夜の　あけのそほ舟續古今一　おぼろげならぬ鈴屋集

續古今一にあけのそほ舟に冠らせたり。あけのそほ舟とは朱の赭(そほ)もて塗れる舟をいふ。夜の明けといふを朱にうつしていひかけたり。(なほ山下の條を見よ)◇『春の夜のあけのそほ舟ほの〳〵と幾山本をかすみ來ぬらむ』本

居宣長の集にはおぼろげならぬと續けたり。こは春夜のおぼろけにかすむを容易の古言おぼろけなる意にうつしたるなり。

春花の　貴からむ萬二　うつろひ萬六　匂ひ榮えて萬十九　うらぐはし續日本紀

萬葉二の長歌には貴からむとも、六にはうつろひにけりとも、十九には匂ひ榮えてとも續けたり。春花は何と指さざれども主としては櫻などをいふべし。その花の如く貴しと皇子を賞する譬となし、又その花の散るをうつろふといふを以て、舊都の荒廢して人事の變遷あるに喩へ、又花のにほひといひて紅顏の麗しきに比したり。續日本紀の集にはうらぐはしと比喩に用ひたり。うらぐはしは心細しきの義なり。右上枕詞例には萬葉十七に見えたる春花の散のまがひにとあるを擧げたれど枕詞にあらず。

【解】萬二のは櫻を愛づるの餘りに貴きものとして、日並斯の皇子によそへて讃めるなり。日皇子の榮えまさむことを春花のいと長閑けく咲きををれむにも喩へむの意あり。六卷のは、奈良の都の荒れ行きしを見て、世の中のうつろひ變るを思ひてよめる歌なり。花は何の國もすべてうつろへども、就中櫻のうつろふは惜しければ、故鄕のさまによみ合すこと相應なるべし。

はるびのゝはるびを　かすが紀、萬二

武烈紀、繼體紀には春日の春日の春日と續け、萬葉三には春日乎春日の山と連ねたり。春日の霞むといふを、大和の地名にかけたるなるべし。春日の二字をかすがと訓むは飛鳥をあすかと讀むと同じく後世の轉なるべし。

【仙】かすがのかすは赤紫の義、春の日は始て出る時赤と紫に霞みて出るによそへたり。

【管】春の日をかすがの山の、これは文字を以て言ひかさねたるばかりなり。

【匠】春の日は霞みて幽かなればこの義を以てかけるにや、春霞春日の里とよめるも思合すべし。春の日のかすかといふに同じ。春日と書きてかすがとよむ故は傳らず。文字を以てか運よみにいひかさねたると心得べし。飛鳥のあすかの如し。

【考】春日の霞むといふ意にいひかけつ。春日平とは例のよに通ふ乎にて、春日よ霞むといふ意か。又乎はこの訓か。春日と書くことは、右の如く春日のかすがともいひ馴れ、又自らも春の日は霞むものなる故にてもあるべし。かの明日香を飛鳥、くさかを日下など書く類なり。皆語は古のままに唱へて、字を用ふることのうつりたるなり。

【槻】古言に靜をしづけき、靜をひそけき、幽をかそけきなどいひて、かとけきとは相通ふ字言なれば、加須賀はかそけきといふ意に續けたるなり。春は霞のふかくて日影のおほほしければ然かいふ。

【冠】春の日の景色霞の籠めにふさがりて、眺望するに幽遠たると、日の長閑とによりて春日の香（かすが）といふにや。

【解】春日平の平は之に通ふ言にて古義に委し。

はるやなぎ　かつら萬五　かつらぎ山萬十一

萬葉五にはかつらに折りし梅の花云々と見え、同十一には、葛城山に冠らせたり。古、春の柳を折りて鬘に挿せし習ありければ、同音の葛城山にいひかけたるなり。五の歌は梅も手折りて鬘に挿す習ありしかば、かつらに折るといはむとて春柳といひきたるなり。◇萬「春柳かつらに折りし梅の花誰か浮べし盃のへに」『春柳葛城山に立つ雲

の立ちてもゐても妹をしぞおもふ」

【考】こは柳の蘰といひかけつ。楊を蘰につくりてかくるよしはあ部にいへり。

春山の　おぼつかなく萬八　しなび榮えて萬十二

萬葉八にはおぼつかなくとも、十二にはしなび榮えてとも續けたり。春山の木草茂りて奥の知られぬ如きを、覺束なきに比し、又宮人の品よきを褒めむとて、なよなよと生ひ茂れる春山を喩に取りたるなり。

【考】こは宮人の姿のあでになよびかなるを、春山の若枝のしなえ榮ゆくに喩へたり。しなえとは春山のしたゞる、夏草のしなえなどいふ條にいへる如く、しなえの假名なり。さるにここにしなびと有るは、びはその有樣をいふ辭にて、しなびえ榮えといふべきを、びの辭を添へいふ故にえを略けり。えを略きてびを添ふるは物語文に女の我になびき來ることをば、なよび來てといふが如くこのなよはしなえなり。

【解】萬八に云々、こは春山は木の葉繁り合ひ、霞さへ棚引きて奥かも知れず覺束なきものなればかく續けたり。

【石】しなびは品振のぶりを約めたるなり。春山の草木のうるはしき形勢なり。

ひ の 部

ひかるかみ　なるはた少女萬十九

萬葉十九の長歌になるはた少女と續けたり。光る神即雷電は鳴りはためくものなれば、鳴波多といふ少女の名にいひ掛けたり。

【考】こはこの妻が名を機娘といひし故にかくいひかけたるにや。はたものは音するものなれば、鳴るはたともいふなり。古事記に刈幡戸辨、神代紀に栲幡千々比賣などいふ如く、そのわざとするもの故にはたもて名とせし女の多きなり。

【解】光る神は光る雷なり。さてここは死妻を悲しみてよめる歌なれば、その妻の名を鳴波多娘子といへるか。

さらば光る神は鳴るをいはん爲なり。

【石】雷の如く世になりひゞく少女と比したるなり。

ひきさらす　布引山藤垣内集

本居内遠の長歌には攝津の布引山に冠らするに、ひきさらすを以てせり。布を引き晒すといふかかりにて地名に轉ぜしなり。

ひきまゆの　ふたごもり後十二　いさふ心金八　心にこむる新千十一　いとかく身をも新續古今

後撰十二にかくふたごもりとも、金葉八にはいとふ心とも、新千載十一には心にこむる思とも、新續古今には、いとかく身をも包まずばとも續けたり。◇後『引繭のかくふたごもりせまほしみ桑こきたれてなくを見せばや』金『行方なくかきこもるにぞ引繭のいとふ心の程はしらるる』新千『知られじな我のかふごの引繭の心にこむる思ひありとは』新續古今『引まゆのいと斯く身をも包まずば戀しさのみぞ歎ならまし』引繭とは繭に引くこもる繭をいふ。よりて中に蠶のこもるといふを君と我と二人籠りとも、心に秘する思とも、又引繭の絲といふを厭ふとも、副詞の最とも轉じて續けたるなり。

【語】和名抄に獨繭をひきまゆとよめり。蠶のまゆごもりの如くに、思ふ人と二人こもり居らばなり。

引く網の　なづさひ萬三　眼にたまらぬ續古十三　憂けく玉葉

萬葉三の長歌にはなづさひと連ね、續古今十三には目にたまらぬとも、玉葉十一にはうけくと續けたり。海士に引ける網の水に浸りて、速に繰り寄せがたきを、人の行き惱む意に比してなづさひと連ねたり。なづさひは漂流沿の轉にて水にひたる意なり。又泛子はもと釣にのみ用ひしを、後には網にも附くることとなりぬより、うけの音を憂の意なるうけくに轉じていひ係けたり。網の目といふを人の眼にいひうつしたるは義明なり。◇續拾『すてふ袖師のうらに引く網の眼にたまらぬは涙なりけり』『伊勢の海やあきの湊にひくあみのうけくに人を恨みてぞふる』

【考】こは海に網をはへて引くに容易くはより來ず。波のまにまに徐によるを、人の心行きなづみつつ、辛うじて來るに譬へたり。

【解】引き寄する網の浪濆傍といひかけたるなり。

ひけどりの　我が引け往なば記

古事記上の長歌に我が引けいなばと續けたり。此喩したるが上に、引けと同音を重ねたり。引け鳥とは友に率かれて飛び行く鳥なり。をとりといふ說は誤なり。

【疑】ひけ鳥は鳥の名にあらず。群鳥てふ類にて群がり率ゐて飛び行く鳥をいふなるべし。ひき鳥といふべきを通音して然かよめり。

【補】ひけ鳥は俗にをとりといふ。又てゝらともいふ。說文云、繫ニ馴鳥ニ誘ニ外鳥ニ而使レ之來、名曰レ囮とあり。

ひさかたの　天の香山記　天の金機紀　天の川原萬二、六帖　天つ御門萬二　天つ宮萬二
天の探女萬三　天の原萬三　天路萬五　天照る月萬五、六帖、拾十三　天つ瑞萬十
天の戸萬二十　天の橋立續日本後紀　天つ神代千十八　雨萬四、拾十五
昨日の雨萬四　雨ぎる雪古五　小雨ふり奥儀抄　夜渡る月萬七　月萬十五
月夜萬八　清き月夜萬十、十二　月の桂古、後、拾　月の衣拾七　月人男萬、萬
月毛の駒六帖　雲の上古五、拾　雲の通路新拾遺五　雲井金一　嵐も雲ゝ拾 [illegible]草
空ゆく風後鳥羽院御集　都を萬三　光古二　身に添ふ影小大君集　山の南草根集
岩戸の關曾丹集

景行記に天の香山（かぐ）、仁徳紀に天の金機（はた）とあるを始にて、萬一には天の時雨、二には天の川原とも、天見る如くとも、天知らしぬる君とも、天つ御門とも、天つ宮とも、三には天ゆく月、天つたひ來る、又天の探女、天の原などと續け、四には天の露霜、五には天踏、七には天照る月、十には天つ瑞（しるし）、十一には天飛ぶ雲、二十には天の戸開きなど連ねたり。又續日本後紀には天の橋立とも、千載十八には天つ神代とも、古今四・六帖五には天の川原とも、古今十五及拾遺八には、天つ空とも、拾遺十三及六帖五には天照る月とも連ねたり。以上は日刺す方の天といふを、大空ならでも皇室とか、神世より由緒あるものか、又は天といふ語をもてる詞に冠らせたるなり。中に就きあまとよむとあめと訓むとの別あり。あめの方古けれど、義は同じかるべし。◇記「ひさかたのあめのかぐやま、とがまにさわたるくひは、細たわがひなをまかんとは」云々、萬「うらさぶる心さまねし久方の天のしぐれのながらふ見れば」萬「久堅の天見る如くあふぎ見しみこのみかどの荒れまくもをし」萬「久方の天のさぐめの岩舟のはてし高津はあせにけるかも」萬「ひさかたの天踏は遠しなほ〳〵に家に歸りてなりをしまさに」萬「久方の天照る月は神代にかいでかへるらむ年はへにつつ」萬「久方のあまつしるしと水なし川へだてておきし神世し恨めし」雲玉「この世とはかけても見えぬ渡身かな名も久方の天の橋立」又に萬葉四には雨とも、中日の雨とも、古今五にはあまぎる雪とも、拾遺十五には雨の降る日とも、奥儀抄には久方の埴生の小屋に小雨ふりと隔句に續けたり。あまぎるとは空の霧りあひて曇るをいふ。以上は日刺す方の天といふより、同音なる雨に轉じ、又あめの音を語中に含めるあまぎるにうつしたり。而して雨は音の上のみならで、一方より考ふれば、空間に於ける一の現象なるより續けたるなるべし。◇萬「久堅の雨もふらぬか雨つつみ君にたぐひてこの日暮さむ」萬「雨

つゝみ常せす君は久堅のきぞの雨に懲りにけむかも」古「梅の花それとも見えず久堅のあまぎる雪のなべてふれれば」萬葉七には夜わたる月とも、十五には月はとも、八には月夜とも、十及十二には清き月夜とも、古今四後撰一同六及拾遺八には月の桂とも、拾遺七には月の衣とも、菅家萬葉下には月人男とも連ねたり。月は天象に屬するものゆゑ、日刺方の天といふを轉じてかく續けたるなり。月人男とは月讀男と同じく月の異名にて、月の桂とは月中には奇しき桂の生長せりと古人は想像せしなり。又古今六帖には月毛の駒と續けたり。これは月といふより轉じたること明なり。月毛とは馬の毛色の名にして桃花の如く少し赤みたるをいふ。又草根集には月も日もとも續けたり。◇萬「久方の月は照りたりいとまなく天のいさりはともしあへる見ゆ」萬「久方の月夜をきよみ梅の花心にさきて吾おもへる君」後「春霞たなびきにけり久方の月の桂も花や咲くらむ」拾「久方の月の衣は着たれどもそはそはぬ我が身なりけり」菅萬「久堅の月人男をみなへし生とも野邊を過ぎがてにする」六帖「久方の月毛の駒をうちはやめ來ぬらんとのみ君を待つかな」古今五には雲の上にてとも、拾遺長歌にも雲の上までとも、新拾遺五には雲の通路とも、金葉一には雲井とも連ねたり。雲は天象に屬するより、日刺方の雲とも殿上の意なる雲の上とも轉じて續けたるなり。又京極黄門の歌に、『久方の嵐も雲もすみはてて』とあるは句を隔てて雲にかかるかとも思はるれども、嵐も天象の一として嵐と雲と兩方へかけたるなるべし。後鳥羽院集に久方の空ゆく嵐に雲きえてとあるは、空にかかること固よりなれど、雲にもかかれるが如し。蓋し當時の歌は多く緣語を用ひたるが故なり。◇古「久方の雲の上にて見る菊は天つ星とぞあやまたれける」拾遺愚草「久方の嵐も雲もすみはてて空の外なる秋の夜の月」後鳥羽院「久方の空ゆく風に雲消えて月影さむし宮川の秋」又萬葉十三に久方の都を

おきてとあるは、月の都といふべきを略したるにて、月の都とは帝都を指すなり。古今十八に久方の中に生ひたる里なればとあるは、月中に桂ありといふ古傳說に基きて、山城の桂里をいふなれば、これも月といふを略したるにて、土佐日記に久方の月に生ひたる桂川とあるは桂川の序なり。又古十二に光のどけきとあるは、日刺方日といふをひかりに轉じたるにて、古今長歌によるひる分かずとあるは、日といひ月といふを晝日の上にうつしたるなり。又久方は手にとるばかりとか、久方の身に添ふ影とあるは頓て月の意にとりなしたるなり。又山とも岩とも續けたるあり。◇古『久方の光のどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ』萬『久方の都をおきて草枕たびゆく君をいつとか待たむ』古『久方の中に生ひたる里なれば光をのみぞ賴むべらなる』東屋集『久方は手にとるばかりなりにけり雲のゐるてふ寺にやどりて』小大君集『雲のうへに語はざりせば久方の身に添ふ影もおそろしき し』草根集『月も日も年ばをめぐる久方の山の南に春や立つらむ』曾丹集『久方の岩戸の關も明けなくに夜半に吹きしく秋の初風』この枕詞解義一樣ならず。されば今は解し易きにより、日刺方となすべし。

【童】久方とは空をいふ。久しく堅しといふ意なり。

【燭】天といはむ枕詞なり。久しく堅しといふ心なり。日本紀に我國開闢の始をいへるにも、天先成而、地後定、然後神聖生ニ其中ー焉と云々、然ればその淸陽なるものは、棚曳き上りて天となりて久しく、重り濁れるものは、滯りて地となることの遲きなり。天堅まりて久しければ、久堅といふ義なり。或は久方とも書けり。天地の二方をいはば、天は久しき方といはんも違ふべからず。久方と置きては天とも日とも月とも星とも、或は雲とも雨とも總じて天象のものなれば何れにもいふなるべし。又月の名をひさかたといふこと有り。これは昔有りける語に因

ひ の 部

したる袴の綻びて、御膝の白く出でたるが、月に似たりければ、御門の御覽じて、膝形の月はやと仰せられしといふ古き説あり。伊勢が歌にいふ。『久方の中に生ひたる里なれば光をのみぞたのむべらなる』と詠めるぞ月をひさかたといふ儀には聞えたる。月の中には桂の木の生ひたればいへるなり。又后をば月に譬へたること、禮記に云、天子之與レ后、猶日之與レ月、陰之與レ陽と有るゆゑに、月の光を頼むといひて、后の御影を頼む心を添へたるなり。又萬葉十三には久方の都をおきて、これは帝都の久しくてたじろくまじきことを褒めていへる詞にや。又天子のまします所なれば空の如くにいひなして久方の都とはよめるにや。帝都たてらるることをば、日本紀にも下つ磐根に宮柱ふとしき立てて、高天の原に千木高知りてなど書けるにて思へば、宮殿のことをば空になずらへて高く申さむとていへるにもあるべし。

【匠】天といはん枕詞なり。久しく堅しといふ心なり。日本紀に我國開闢の始をいへるにも云々、その清陽なるものはたなびき上りて天と成て久しく堅ければ、重濁れるものは滯りて地となることの遲きに對して久堅といふべし。奧義抄に膝形云々といへるは甚しき誤なり。又易に天を乾といふ。乾は陽剛なれば健の義なる故に久堅とも云ふべし。又地に對すれば成ることのさきなれば久方とも云べし。二つの間いづれ正字と知りがたければ共に並べて用ふべし。

【考】上代の詞の下に、之といふは必體の語にあることにて、用の語にいふことなし。然れば堅きとは用の語なれば、久しく堅き之といふ語はあるべからず。堅きをかたと略きいひても猶同じ。又久しき方のてふは之の辭はいふべけれど方てふ語のいひざま古の人の言とも聞えず。思ふに久堅久方ともに例の借字とす。天の形はまろく

て虚なるを匏の内のまろくむなしきに譬へて匏形の天といふならむと覺ゆ。續日本後紀に瓠葛の天と書きしを御田大人のひさかたのあめと訓まれしぞ即これなりける。瓠は匏の意にて田瓠もて譬ふ。葛は借字にて蛇の意且ひさごのごとかたちのちを略けり。禮記てふ唐文に云々、大報レ天而主レ日也、掃地而祭二其質一也、器用二陶匏一以象二天地之性一也てふも陶は土器なれば、即地に象り匏は空にみなりて内の虚なければ注にもしかいへりけれ。且仁徳紀に全匏をうつひさごとよみ、和名抄に渋雨をうたかたとよめるも虚象の意なるを思ひむかへよかし。

【譜】久方久堅と書て共に天をいふなり。久とは禮記に高明配レ天悠久無レ彊とあり。方は旁達之形即覆物也、堅は乾と同じくして即共に天なり。

【叢】日刺方の義なり。

【苑】匏葛の天といふ續なり。ごかの反か、つらの反た、よつてひさかたとなる。この故にかつらをかたとよめる例多し。天瓠葛の文字に書けるは、續日本後紀に見ゆ。さて瓠葛のことは神代紀に天香葛此曰[illegible]羅一と即是瓠なり。又鎮火祭の祝詞に曰更子生水神瓠云々、さるは伊弉册尊の生みませる神にて、もと天の物なればなり。天のことにかかる發語とす。

【緒】……(前略)……匏を略してひさと訓むこと、神樂歌「とよへつひ、みあそびすらし、久方の天の川原に、ことの聲する、琵琶の聲する、ときの聲する」といふを古本にひさの聲するとあり。ひさのひを〈紐の草字〉と〈琵の草字〉に誤れるなるべし。和名抄に釋名に云、笙竹之体、日匏と、又以レ瓠作ると。

【證】ひさかたは日離る義なり。

【冠】萬葉集に天つ罪とも朝忠集に駒と續けたり。月毛の駒といはむとて久方の駒とのみいふなり（攝要）ひさかたといふこと、前篇に興福寺の僧か奉れる長歌に、瓠葛の天と書きしを所證とし、且書紀に陶用二陶匏一以象二天地之性一也。といふ語をさへとり出でて助けられたり。これは西土の學風何事にも義理を窮めていふ故に、天のかたちは圓形ものをいふを幸にここに叶へるものぞとなり。瓠葛は只借字のみ義理あるべからず。……（中略）……又一說に日のすむ方の天といふ。すむを約めてさといふはすみどころを約めてさとといふ例なり。

【釋】ひさかたは日幸方にて、日の幸ひます方は、天の外なければかく續けたり、

【補】一說に日刺方の天といふ意なるべしといへり。

【發言】比佐は日隅宮の比須と同じく、幽冥の潜み隱れて目に見えぬ方といふつづけにやあらん。

【辨】ひさかたの字は種々書きたれど、皆から借字にて提勝間之といふことなるべし。ひさくといふは風俗歌に知々良々に伊止古世乃加止仁、天宇止乎比佐介天とあるは、調度を提げてといふことなり。古言なるべし。さて凡提ぐ器を指してひさ某といふは、杓を提籠といひ、又提手といふも提筒の意なるべくやあらむ。勝間をかたといふはつまの切たなれば約めいへり。かつまは記紀集中などに見えて目堅く編みたる籠をいへり、さて天を編目の意にとりなして、提勝間の編目といふ心に續けたるならむ。

【石】ひさのひは日なり、さは續り騒ぐといふ義にて、日續り騒ぐ方天といふ義なり。のは調のみ。これを日指方といふ說あり。聞やすけれど理違ふべし。日指方は地なり。久方の地と續けたらばさも說きつべし。中古より此方天象はすべていへれど、萬葉集中天と續けし歌もはらにて日と續けしもなし。雨と續けしは天の轉化にて家

持聊の思ひゑ賜へるなるべし。

【悪】蘊葛は正字なり。天と續くることはあに續けしなるべし。あは青きことなり。ひさごかつらの青と續けて青しといふ意なり。青きことをあとのみいへるは紀に青草をあをかといへるをも見るべし。又、青草に續けりなり。あめは蒼天にてあをぞらなり。

【歴】源泉滾々と湧出するを意味せる希臘語ピタコスは久方。日高。ひぢかた等の語原たるなり。

ひしがらの　刺しけく　紀

應神紀に『河派江の菱殻の刺けく知らに、我心いや鳴呼にして』とある菱殻のは、刺けくにかかれりと、秋成の續貂に見えたり。されど全體が比の體にて特に枕詞となすべからず。

【釋】江沼におふ菱子の殻は刺ありて、手をいたみさすを、人にさしあひしにかけて、我行んと思ひし少女を、汝がはやく指定めしを知らずして、我心の愚りなるはと、戯れ給へるなり。河内國若江郡に菱江の神社といふあり。そのあたりの江なるべし。

ひしなす　いちひゐのわにさ　記

應神記に波那美波志、比々斯那須、伊知比井能、和邇佐能邇袁とあり。その中のひひしなすを、本居宣長は菱なすとし、一句を隔てて和邇にかかる序と說き、高橋遠夢は直下のいちひの井にかくる枕詞となし、橘守部は稜威言別に菱並は椎なすと訓み、斯は衍文としたり。斯くの如く諸說區々にして枕詞と見做すべきか疑はし。前後の續きを考ふれば、なすのところにて意は切れたりと見るを適當とするが如し。

【傳】齒並ゆは齒の並び生ひたる對といふことなり。ひひしなすは菱如なり。（今いふ蕗を古は布々伎といひし類にて、菱をも古ひひしとも云ひしも知りがたし）この二句は次の一句を隔てて、和邇の序なり、そは丸邇てふ地名を鰐魚に取りてこの魚の齒の勝れて利き由なり。櫟の井は大和添上郡にあり。

【石】菱如はいちひゐの枕詞と聞えたれど、いかなる義とも思ひ得ず。古事記傳にはいちひのゐは地名なりといへり。

ひたちおびの　かごとばかり　六帖　廻り逢ふ　續後拾

古今六帖五に「東路の道のはてなる常陸帶のかごとばかりもあひ見てしがな」と見ゆ。三代枕詞例にはこの續分明ならずとあり。續後拾遺十三には又廻り逢ふと續けたり。常陸の國には男女の中らひを占はむとて、苧の帶にその名を記し、鹿島の神前にかけて祝詞を申すことありといひ傳へたり。さて帶は腰にまとふ時、その兩端は互に相分るれども、末は相合して一つに結ばるるより、人の再廻りあふに比したるが如し。かごとばかりとはここにては喞つ又恨む義としては意通ぜず。少にてもとかしるしばかりといふ義を用ふべし。兒僕抄にいへる如く帶にかこなどいふ名どころあらば接續の理も自ら明なるべけれど、その徵なければ、或は何を隔ててあひ見てしの相を逢に通はせ、廻り逢ひと續けたるにあらざるか、尙後考を俟つ。

【東】かごとといふはかこつといふ事なり。又帶にもかこといふものあればそへてよめり。次の義につかば、つながふ心にても侍るべきにや。かことといふは物をつなかふ物の名あり。

ひだ人の　うつすみなはの　一筋に　萬十一　木挽町　蓬廬集

萬葉十一にうつすみなはの一筋にとあるを、續紹には枕詞とせり。されどこは飛騨人の打つ墨縄のひとすぢといふまでが、一つの序と見るべく枕詞となすべからず。飛騨人といふは古彼國より良匠を出ししを以てなり。藻鹽集には木挽と負へる町とつづけたり。

【紹】日本紀に雄略の御時、飛騨の國より、猪名部の眞根といふ木工の名譽あるが出しかば、飛騨人、ひだのたくみとそれらを呼ぶことと成りぬ。すみなはは規矩を試むるに綱ひきはへ、墨をもて跡を記すわざをいふ。

ひだり手の　おくの手萬

萬葉に「我妹子は釧にあらなむ左手の我がおくの手にまきていなましを」とあるおくの手を續紹には後るる義とし、左手の利のわるくて後るる手と同じことを重ねたりといへり。されど奥の手とは袖にまとはれて外部に出でざる部即ち上腕をいふにて普通の續けなるべし。

【紹】左手は右手に後れて物をなすことの遲きゆゑ、後るる義もておく手といふか。左手の腕の手はみよしの吉野の類にて冠言ならねども、吉左手のおくての稻などよまんには興あるべき詞なり。

ひとごゝろ　嵐の山後十八　丑三つ拾十八　淺澤水金八　うす花染新古今十三

宇治の網代かげろふ日記　淺香の浦堀千

後撰十八には嵐の山のとも、拾遺十八には丑三つとも、金葉八には淺澤水とも、新古今十三にはうす花染とも、蜻蛉日記には宇治の網代とも、續千載には淺香の浦とも續けたり。人情荒しとか憂しとか、淺しとか、薄しとか、憂とかいふを轉じて嵐、丑三つ、淺香、淺花色、宇治等と連ねたるなり。◇僞人心あらしの山の爽ければ木の

芽も見えず枝ぞしをるる」拾「人心うし三つ今はたのまれず夢に見ゆとや子ぞ過ぎにける」金「人心あさ井水の底井こそかるばかりにもつままほしけれ」新古今「人心うす花染のかり衣さてだにあらで色やかはらむ」蜻蛉「人心宇治の網代にたまさかによるひをだにも尋ねけるかな」續千「人心淺香の沼のみをつくし深きしるしもかひやなからむ」

【解】後撰集に人心あらしの山の云々、伊勢の集に「身に寒くあらぬものから佗しきは人の心のあらしなりけり」上は嵐の山にかけしのみ。次なるは顯めし心のあらしきを嘆くなり。都の西なる嵐の山の名、古くはよめる歌を見ず。ここは山の嵐の寒ければといふを、嵐の夜の雪ならでの格によみて、山の名にはあらぬか。

ひとだまの　さ青なる君萬十六

萬葉十六にさ青なる君と連ねたり。顏色のよからぬ人を、人魂即幽靈などの如く、と比したるなり。

【石】人魂の如くと比したり。さは冠詞なり。

ひなくもり　碓氷の阪萬二十

萬葉二十に碓氷の坂に被らせたり。日の曇り光り薄日といふを、上野の碓氷にいひかけしなり。日なのなはのの格なること、水の門なみなとといふが如し。◇「光日なぐもり碓氷の阪をこえしだに妹がこひしく忘られぬかも」

【燈】日なぐもりは日の曇りなり。くもり日の薄日といふ心にて云ひ續けたるか。日の暮をば日な暮といふも東俗の語なり。私云、亦萬葉十四卷の東歌の中にいふ。「日の暮にうすいの山を越ゆる日はせなのが袖もさやにふらしつ」これも日の暮には薄くなるの義か。亦うすいの山は碓氷と書きたれば、夕陽の春くといふ心にて續けた

るか。いかさまにもうすひといはむ枕詞なり。よの常に夕暮にかの山越ゆるといふにはあるべからず。

【考】曇り日の影はうすければ、うすき日てふにいひかけたり。

【解】ひなのなはたと親しく通ふ例なれば、純といふに同じ。くぐもりはこごもりと通ひて、流水の凍りて滯れるをいふなるべし。されば純潢滓薄氷(ひなくぐもり)といふ由に續けたるにやあらむ。

【石】日の曇りののをなの裏に轉じたるにて、うすひは薄日といふ義にとりなし。日の曇り、うす日と續けしなり。

【黑】ひなくもりほのぐもりなり。

ひなさかる 國治む萬十三、十九

萬葉十三及十九には國を治むとも續けたり。鄙の方に離(さか)る國といふ義にて、尋常の形容詞なり。◇「大君のまけのまにまに夷さかる國を治めに云々」

日の本の やまとの國萬三、續後紀

萬葉三には山跡の國、續日本後紀十九には耶馬台國と連ねたり。共にやまと訓み、我邦の總名なり。我邦は古くより日出國と稱へたれば日のいづる本の倭國といふ續なるべし。代匠記には枕詞として擧げたり。

姫島の ひめおく漫吟集

漫吟集には秘めおくに言ひしむるに姫島のを以てせり。同音を重ねて調となす。姫島は攝津にあり。

ひもかゞみ 能登香山萬十一

萬葉十一に『紐の能登香山は誰がゆゑぞ君きませるに紐あけず寝む』と見ゆ。こは古の鏡はうらに紐ありて臺の柱に結びつけたれば、解くなといふを、莫解(なとき)その類音、能登香山に冠らせたり。能登香山は美作の英多郡にあり。今の二子山のことなるべし。

【燈】このひも鏡のこと、氷面鏡とて氷の閉ぢたる水の面は鏡の如し。よつて氷面鏡といふ。のとかの山と續くるは、氷の居たる水はのどかなる心なりと(仙覺)いへり。歌の心さはあらぬにやと覺えたり。紐鏡は鏡を袋にも衣にも包みて紐結びたるなり。のとかの山と續くるは、なとかの山といふ義なり。その紐な解きその心なり。さて末の句に誰ゆゑか君きませるに紐とかずねむと詠みたる心は、紐鏡なときそといふ山は、誰かゆゑに思ふ人の來たる夜、などか紐ときて寢ざらんといふ心なり。

【匠】紐鏡は小き鏡を袋にも入れ絹にも入れ、絹にもつつみて紐結たるを云ふべし。垂仁紀に匕首をひもがたなとよめるは荊軻が始皇をさゝむとせしものなり。それを古事記には八鹽折之小刀といへるを思合すべし。紐なば解きそと云ふ意を取るものなり。

【考】こは鏡のうらなる紐は台にかけむ料なれば常につけ置きてとくことなきゆゑに、莫解(なとき)といふべきを莫と能と、加と紀と音の通へば、のとかの山にいひかけたり。

【冠】紐鏡のとかの山はのに詞を隔ててとの詞にかけたり。とぐとが詞相通ふ。

【諺】古の紐鏡を見るに、裏に山の形に松竹鶴龜などを出し、龜の背に后して紐をすげ侍るとて、蓬萊山の意にして長閑の山といふべき。

【石】紐鏡長閑なりといふ義を山の名にかけたり。

ひものを　心に入り萬十二　いつがりあひて萬十八

萬葉十二には心に入りてとも、十八の長歌はいつがりあひてとも連ね、九には紐の兒にいつがり居ればとあり。紐の緒とは衣につける左右の紐にして、一を雌紐といひ、一を雄紐といひて、組入れて結ぶものなれば、心に入りといふへ係け、又その互にからみつきたる有様を娘子と携はり居るに比したり。心に入るとは身に染む義、いつがりのいは接頭辭にしてつがるは繫がる意なり。◇『何故か思はずあらむ紐の緒の心に入りて戀しきものを』『豐國の香春は我家、紐の兒にいつがりをれば香の春はわぎへ』紐の兒とあるは人名なり。但し鹿持雅澄はこれも紐の緒にと改めて古義に出せり。

【眼】人を戀ふるに、心に染入りて戀しきといふ語に、衣の紐を入るといふ語を以て紐の緒と冠らせたり。抑衣の紐には入るといふ語あり。古今集に入紐の同じ心に云々とも詠みて、往昔の衣の下紐は、衣の左右に附きて、袖の下に穴ありて、そこより入れて引き返へし。今の稚子の紐の如くなりけむ。いつがりのいは發言にて纏りなるといふ語なり。遊女とたづさはりつつをる體なり。その所纏といふ語に紐の緒のと冠せしは、衣に纏りあればなり。紐の兒は娘の名なり。

【冠】ひもとをとを男女の事にいふは面白きことなり。いつがりは結付合するなり。

【解】いつがりは著副ふやうの意をいふ言なるべし。紐の緒の人身に着そふが如く、娘子につきそひあひてといふなるべし。又心に入り云々、こは古今の顯昭註をひける契冲の說の如く、入るといふのみにかかりて心といふ

には別に用なきにや。

【評】いつがりのいは冠詞にて思の至り止る所なり。つがりはつきありといふ義なるを、きあをかと約めてつがりといへり。我が思と人の思と相纏ありといふ義なり。のはの如くと比したるなり。

ひろはたの　將た嚴足集　八幡すずのゆふしで

和田嚴足の集には將といふ副詞に。六人部是香の篶の木綿垂には八幡といふ地名へ冠らしむるに、ひろはたのを以てせり。これは同音を重ねて調となせるのみ。廣幡は巾ひろの織物をいふ。

ふの部

ふかみるの　深めて思へど萬二

萬葉二の長歌には深めて思へども、十三には深めし吾とも、深かめし子らとも、六には見まく欲しとも連ねたり。みるとは海松のことにて、海中の岩石に生ずる草なり。ふかは水の深みに生ずるないはむとてなり。こは情の深くといはむとて同音を重ねたるなり。見まくとは見むの義。これも海松のみの音へかけたるなり。

吹く風の　見えぬが如く萬十五　目に見ぬ人古十一　あらちの高根玉葉八　たより後十二

萬葉十五には見えぬが如くとも、古今十一には目に見ぬ人とも、同十九には音にも人の聞えざらむとも、玉葉八にはあらちの高嶺とも續けたり。又後撰十七にはたよりとも連ねたり。◇古『世の中はかくこそありけれ吹く風の目に見ぬ人も戀しかりけり』古『玉かつら今はたゆとや吹風の音にも人の聞えざるらむ』玉『吹く風のあらちの高根雪さえて矢田の枯野に霰ふるなり』後『浪にのみぬれつるものを吹く風のたより嬉しき天の釣舟』風の姿の目に見えぬより、死して再見べからざるに比し、噂に聞きて實際に面を合せざる人にも喩へ、又その狀のほのかなるを幽かなる音信に喩へ、風の音といふを音沙汰の意にうつし、又風の荒しといふを越前の愛發の嶺にいひ掛けたり。三代枕詞例には古今集五の吹風の音にも秋を聞き渡るらむといふを舉げたり。

【義】古今に『吹く風の目に見ぬ人も戀しかりけり』こには未だ見ぬ人を音にのみ聞きて戀しと思ふなり。或は見

えぬものゆゑ置きつらめど、猶意深し。吹風のてふ下に音にのみ聞えてと入れて心得べきなり。

吹く風を　ならしの丘後二

後撰二に『吹風をならしの丘の櫻花のどけくぞ見る散らじと思へば』とあり。吹風を鳴らすといふより大和の地名へかけたり。奈良志岡は神南備山の東方にあり。

【冠】吹く風にならすといふべき詞なるを巧に過ぎたるにや。且つ吹風にの意たがへにや。一説に萬葉集に吾せこを莫越の山の呼ぶ子鳥といふによりて、ならしの岡はなこせの山の誤かといへり。莫は詞にて、大和の巨勢山のこととす。

ふじの根の　燃え古四　ならぬ思に古十九

古今長歌に燃えつつ常に思へども、燃ゆる思とも、又同十九にならぬ思にもえばもえとも續けたり。堪へ難き胸中の思を噴火せる富士に比したるなり。◇古『富士の根のならぬ思にもえばもえかたみに消たぬ空し煙を』こは富士の根の何を隔ててもえにかけたるなるべし。但し思ひに火を兼ねたり。

【眼】ならぬ思てふは我戀の不成就の思なり。常に胸のもゆるを云はん爲、富士の根のと冠らしめて、よしや吾胸燃えばもえよ山神だに何事をかくゆりて常にもゆる思はあるぞとよめるなり。

ふすまぢを　引手の山萬二

萬葉二に『ふすまぢを引手の山に妹をおきて山路をゆけばいけるともなし』とあり。ふすまの乳を引くといふを大和の引手山にかけたるか。蓋しふすまは衾にて、語原は臥す裳とも臥す間ともいへり。古事記に栲ふすま、む

しふすまの語あり。それより轉じては紙障子をもふすまといへり。紙障からかみをふすまと呼ぶは古書に見えざれども恐らくは古言なるべし。菅家文章に紙障猶卑依樹立とも、狭衣には紙障子に夜への御衣をなむかけて侍らひつるとも見えたれば、王朝の始より紙障はありしならむ。而して紙障には開閉に便せむ爲に乳の具へられたるなるべし。和名抄に、鐶鈕(手乃比岐天)門鈎也とありて戸障子の引手ありしこと明かなり。さればふすま乳の引手といふ義ならむ。引手山は大和山邊郡纒向の弓月岳の北方にあり。又考ふるに繼體天皇の皇后手白香皇女の御陵山邊郡衾田にあり。ふすまだは衾田の轉りたるにて上下地名を列ねたるか後考を俟つ。

【燭】これは衾を引く手といふ心に聞えたり。(以上管見抄に同じ)されども道の字心得がたし。衾道も所の名にあるか未ㇾ決ㇾ之。

【匠】衾道をば衾道のと云ふべきを古語にをとりと通じていへり。諸陵式衾田墓、この衾田といへる所の道なるべし。

【考】まづ冠辭としていはば、夜のもの衾には、紐をわたし著て、そをもて引きひろげて覆へば、その紐を引手といふ意にて引手の上に冠らせたりとせむにや。且襖などの手を後世はちといへり。古もさいひてふすまぢといひしか。さては道は借字なり。或人ふすま戸の引手と續けたるかといへるは、後世紙して幾重も張りたる障子をふすま戸といふを思へるにて古に叶はず。今按ふにこは冠辭ならで、たゞ衾てふ地の邊なる引手の山といふならむか。そのよしは諸陵式に衾田墓とある衾田の田を略きて衾道ともいふべし。さては衾道之とか乎とかあるべきを、手とあるは誤か。與之乎の三つ誤れること多し。

【解】この枕詞代匠記によるときは衾道は地名とすべし。もし枕詞とするときは、衾道の道は蓐の乳、茵の乳などいふ乳にて、手して取る料の物をいふなり。さらばその乳をとりて引きよするよしにて引くといふへかかれるのみなり。

【古】衾道は衾手といふに等し。衾の縄なり。よりて引手の山と續けたり。

【文】衾は和名抄衣服類に、説文云、衾大被也とある、これにて道は借字にて今も幟などの手をちといふ如く、衾の手といふにて、衾は引かつぐものなれば、衾ぢを引くと續けたるなるべし。雅亮裝束抄に、御ふすまくびのかたには紅のねりいとをふとらによりて二筋ならべてよこさまに三針さし縫ふなり。云々とあり。この紅の練糸をちといふか。

ふせやたき　すすしきほひ萬九

萬葉九の長歌にすすし競ひと續けたり。すすしきほひとは進み競ふといふ古言なり。伏屋にて火をたくときは、煤のたまること著しければすゞしといふ詞を設けむ爲めに冠らせたり。原文廬八燎とあるを大神景井は廬火たきの誤とせり。

【考】伏屋にたく火の煤と受けたり。ふせやたくと讀まずして、ふせやたきといひ切りたるは冠辭の例なり。昔煤のことといへるもの多し。且いづれの屋にもあれど、打臥せたる如き賤が屋はことに煤けてあるもの故に然かいへるなるべし。すすしきそひとは氣の進みてすずろきつつきそふをいふ。

【解】すすしはすすびといふに同じ。俗にすすけといはんが如し。こは廬屋燎煤の貌といひかけたり。大神景井

いふ廬は蘆の誤、八は火の誤にて、あし火たきなるべし。

【石】すゝしは進しにて、進み領るといふ義なり。

ふせやたつ又**ふせやたて**　つまごひ萬三

萬葉三に『古にありけむ人のしづはたの帶ときかへて廬屋立妻どひしけむ云々』と續けたり。古俗昔は妻を迎へむとては新に室を築きたる習なれば、ふせやたてと訓むべきか。或はいほりたてと訓むべきか。今定めがたけれど、夫婦同寢すべき屋を立てての義と聞ゆれば、枕詞にあらじ。

【考】屋のつまと續けたり。檐をもいふめり。さて屋だち家だちなど常にそへいふ語なれば、立てふ語を添へて調を足し、且たつといひ切りて、つまといふは冠辭の例なり。ふせ屋は田ぶせとも、ふせ廬のまきいほともよみて、賤が屋は低ぐて地に臥せたる如くなればいふなるべし。

ふたさやの　家を隔てゝ萬四

萬葉四に『人言を繁みや君を二鞘の家を隔てて戀ひつゝ居らむ』とあり。ふたさやは蓋と鞘と二つなりといふ說もあれど、契沖のいへる如く二刀を一つの鞘にさししよりいふか。鞘は刃物の家の如し。よりて人の家に喩へ、家を隔ててに掛く。

【匠】二鞘は今按兩枝刀二つを刺す鞘か。中に隔のあれば家を隔てといはむ爲なり。仁德記に云高那夜作ある も諸鞘にて二鞘にや。鞘を刀室と云は人の家にあるに譬へたれば、家を譬へむこと勿論なり。

【栞】家の内に又家を造りこめたるなりといへり。

【寛】二鞘とは今の世に刀を二腰三腰などいふが如く、鞘に入りたる刀二つをいひて、鞘をば室ともいへば、刀二つながら鞘を隔居る意もて續けしなり。説文に鞘刀室也云々、もろさやとはよむ宜しからず。

【石】こは蓋鞘と二つなるべし。蓋も鞘もその物の爲には家なるが故に家と續けしなるべしのは調なり。

ふ た な み　筑波山萬九

萬葉九に二並筑波山とあるを、家藏の魚彦の續冠辭考の頭書に出だせり。こは筑波は頂上二峯に分れたるより、かくいへるなり。

二　荒　山　二たび蓬廬集

齊藤彥麿の集には二たびといふ語に冠らするに二荒山を以てせり。同音を重ねて調となす。

ふ ぢ こ ろ も　間遠に萬三　なる萬十二　おれる心古　荒蝦夷蘇居家集

萬葉三には間遠にしあればとも、十二にはなるとはすれども、又古今長歌にはおれる心とも連ねたり。藤布にて作りたる衣は、織目の荒きより、住居の距離のあるに喩へて間遠にと續け、又衣の褻るといふを、人の馴るにいひかけ、織れるを下れると異義語にうつしたるなり。蘇居翁集にはふぢ衣あら蝦夷と續けたり。藤衣は織目の荒きよりあらの音を和蝦夷に對して文化の進まざる荒蝦夷にかけたるなり。

【考】こは藤の布は織目の荒く間遠なるを、この人の住所の遠きにいひかけたり。さて藤衣は集中に山田守る翁藤衣とよみ、今し山賤などは藤の皮の糸して織りたる衣を着るなり。◇萬三「須磨の蜑の鹽燒衣の藤ころもまどほにしあれば未だ着褻れず」萬十二「大君のしほやく蜑の藤衣なるとはすれどいやめづらしも」

【解】萬の十二のは衣の襲と男女の馴るとをいひかく。萬の三のは藤衣して織れる衣は、古今集にしはやき衣の緒をあらみ、間遠にしあればとよめるが如く、筬間のあらくて遠ければ、間遠といふにいひ續けたり。

【句】ま遠にしあればまは間なり。藤布は織目荒きゆゑに、め遠しといふべきを、めをまの與に轉じてかけたり。

【三】藤衣織といふ義をおれる心とはたらかせたり。おれる心とは日を經て思慮をたたみたるなり。

ふぢなみの　たゞ一目萬十二　思ひまつはし萬十三　並にし古十四　立ち後三

たたまくをしき新古今二　よるとたのめし新續古今　紫の手藤垣内集

萬葉十二の長歌にはただひと目のみとも、同十三には思ひまつはしとも、古今十四には並みにし思はばとも後撰三には立ちも歸らでとも、新古今二にはたたまく惜しきとも、新續古今十三には寄ると頼めしとも續けたり。

◇萬「かくしてぞ人の死ぬちふ藤波のただ一目のみ見し人ゆゑに」古「三吉野の大川のべの藤波のなみにし思はば我戀ひめやは」後「色深く匂ひしことは藤波のたちもかへらで君止まれとか」新古今「まとゐして見れども飽かぬ藤波のたたまく惜しき今日にもあるかな」新續古今「藤浪のよるとたのめし言の葉をまつにかかりて日を暮すかな」唯一目のみ見し人ゆゑにと續けたるは、姿よくしなやかなる女子を藤花に喩へ、見しといふへ係けたるか。藤なみとは花の靡くよりいふなるべし。又藤のかづらは物にからまり靡くものなれば、思ひ纏ふの意にとりたり。並にし思はばとは深く思はずばの意にて、こは並みといはん爲に同音を冠らせたるなり。又藤花を波の意にとり、その緣語なる立つといふを、そこを立ちたる意にいひかけたり。されば後撰三のも、新古今のも、藤の花の咲けるを賞するの餘去りがたき意なれば、有心の序といふべきものなり。新續古今のは波の立ち寄るといふ

より、訪ぬといふ意に續け、下句にまつにかかりといひて、待つことに干係してといふことを藤の松枝にかかれるやうに思はしめたり。この他藤垣内集には紫の子と連ねたり。

【考】思ひまつはし云々、こは古今集にはひまつはれよとよめる如く、藤かづらの物にまつはるるに喩へて、親しき人の心になづさふをいへり。藤なみといふ語、藤並、藤波など萬葉に書けるは、共に借字にて實は藤靡の意なり。しなび靡くものなればなり。

【冠】ただ一日云々。こは藤花一群に咲きたりといふ語なり。牟禮の反り米なること眞淵已にいへり。これは藤靡のただ一群れと續きたり。藤なみの群れと續けたるにはあらじ。

【紹】ただ一日のみ見し云々、いと心得がたきを、試にいはんに、藤靡の子(み)をといふべきを、言を隔てて見し人の見に掛けしか。又藤なみの一芽(ひとめ)といふべきは、花は一片づつ左右に並よくさくものゆゑか。人の死ぬてふことは、古歌には人の死るさまを靡きこやせるなどいふを、藤の末葉のなびきによせたるなり。

【石】藤波は假字にて藤並なり。その藤並は直なるものなるが故に、只とはたらかせて、只一日といへり。

淵にすむ　亀山の里 藤垣内集

藤垣内集には龜山の里に冠らしむるに淵に住むと冠らせたり。淵にすむ龜といふを地名に轉じたるなり。

ふなあまり　いかへりこむ 記

允恭記にふなあまりいかへりこむぞと有り。宣長、久老は枕とし守部は否らずといへり。舟餘りは岸に着きたる舟の勢あまりて少し退くをいふか。よりて歸航することにかくるか。いかへりのいは接頭辭。尙次の條を見よ。

【傳】三十九 舟餘りは還り來むの枕詞なり。かく續くる由は、船に乗らむとする人の乗る人多くて、その船に亂りぬれば、得乗らで姑く回り來る意なり。渡舟などにもさることよくあるものなり。契沖は晴荷の餘りて重ければ船の覆るによそへて、かくは續け給へるかといへども、そは荷の重きにこそあれ、餘るには非ればいかが。且この御歌は島より歸り來むと詔ふなるに、枕詞ながらも舟の覆ることは忌みてよみ賜ふまじくこそ覺ゆれ。
【荒】今も舟人の言に船の岸に着かんとするにその勢のあまりてやや退くをいふ。
【稜言】舟あまりは島に着きたる船の歸路を詔ふなり。そは島に着くは船の片路なるから、片路の歸路をその餘りとは詔ふなり。枕詞にあらず。

ふなぎほふ　堀江萬二十

萬葉二十に舟ぎほふ保利江の川と續けたるを、契沖は枕詞となしたれど、舟競堀江と續けたるにて、堀江の有様をいへるなれば、特に枕詞と見ざるも可なり。

ふねはつる　對島萬一

萬葉一に在根良對島の渡とあるを、枕詞解にはふねはつるの誤としたり。もし然らむには舟の泊る津といふを對島にかけたるなり。なほありねよしの條を見よ。

ふゆきのす　枯が下木記

應神記にからが下木と續けたり。のすは似す又如に同じ、冬木の如く枯れたる木と比したるなり。
【傳】卅三 こは冬木如なり。なすは稻掛大平がいへる如く、似すといふ言なれば、能須ともいふなり。但には

めるとも活きいふ言なればなり。さて萬葉に春の枕詞に、冬木成といへること處々にあり。こは冬木盛を書誤れりとの師説、まことに動くまじく、然るべきことと思はるるを、ここに正しくふゆきのすとあれば、彼も由なきにあらず。尚よく考ふべきことなり。さてこの冬木如はたゞ枯といふ言のうへにのみ係れる枕詞なり。からがしたきとは枯之下樹なり。枯れをからともいふは(古事記)高津宮段に枯野などあるが如し。

【石】こは冬木のなりゆく形勢に比して續けたり。からはかれあの約、かれあらはるるといふ義なり。

ふゆごもり　春萬七

萬葉七には冬隱春さりくればと續けたり。草木は冬の頃は葉うら枯れて生氣は皮の中に隱れこもりたれど、春に至れば萌て芽を生じ花の開くより、冬籠り春と續けて枕詞とせるなり。萬葉一に見えたる冬木成春さりくれば、又同三に冬木成時じく時とあるは冬木盛の誤なりといへり。但し成は盛の誤と見るよりも成は戍の誤と見る方宜しきか。時じくと續けたるは中に落句ありしなるべし。

【匠】冬木成春云々。ふゆきなすと讀むべきか。五月蠅成、鶉成、水鴨成などこの數知らず。冬木は春に成て芽の張るは春を張るといひなさむとて云へる詞なり。

【僻】冬木成春云々、成は戍の誤寫か。

【解】冬木盛は生氣萌といふ義なるべし。ふゆは思顚などいふふゆにて物の利生するをいふなるべし。氣の音の清く通ふままにことうつし云へり。もりは物の初めて萌すをいふ言なり。さて春に至れば萬物の生氣が萌すゆゑに、この枕詞はあるなるべし。成は盛の省字なりと高橋正元いへり。古今集貫之の歌に、冬こもり思かけぬを木

間より云々の歌、冬の氣の內にこもる意にとりてよみたるにて、これより後にはこの類多し。抑古今集の頃に下りては、世の中の諸のことややうつろへるに連れて、古語の本意を失へること少からず。

【石】こは冬木盛張、晴ると活かせて春と續けしなり。こもるは籠るなり。冬ごもりせし人の心も、草木のうへも晴張といふ義なり。

【美】冬木成。今按、釋名釋言語に成は盛也、とあれば成字にもとより盛の義あるなり。さてはこのまゝにて冬木盛と訓むべし。詩鹿鳴の傳に以成禮也とあるを疏に、定本成禮作二盛禮一といひ云々などあれば、成盛の二字は古通じ用ひしなり。

【世】ふゆごもりの草木の發（は）ると心得べし。

【鷹】冬ごもりは春の形容詞にして、光彩華麗を運び來るものを意味せるところの希臘語フェゴホリの「ホ」が。もに轉訛し、以てふゆごもりとなりしものなり。

【折】冬ごもつた草木が發（は）るからだといふ從來の說はよくない。或は冬ごもる華の義かと思ふ。

ふるごろも　待乳山萬六　うつてし人萬六

萬葉六の長歌にはまつちの山とつゞけ、同十一にはうつてし人とも連ねたり。「古衣うつてし人は秋風の立くる時に物もふものぞ」古衣は洗ひて糊をつけ、砧に載せて又打つものなれば、又打つの轉音なるまつち山に冠らせたり。待乳山は紀伊にあるを云ふか。うつてしは打棄てしの義なれば、古衣は打棄つるといふを世に棄てられし人に比したり。古衣さならの山と續けたるは衣、着褻らすといふを奈良山にかけたるなり。

【仙】まつちといふはまたうちといふに通ふ。

【燈】まつち山、又、又打山と書けり。古き衣は解き洗ひて二たびうつ心にてかく續けたり。十二卷の歌にも、つるばみの衣とき洗ひ又打山と詠みたり。同じ心なり。

【考】古び垢づける衣は、度々洗ひはりて砧してうつ故に、またうちといふを、そのたうの反つなれば、約めて信土山にいひかけたり。古衣棄人は云々、てふも同じ。萬卷十二に舊衣著楢の山に鳴鳥の云々、こは古き衣は久しく著馴ることわりにて、楢の山に着ならといひかけたるなり。こを今本に橡衣とあるは誤なり。

【賀】ふる衣は古衣にあらで、振衣、即垢を去るの謂にしてまつちは無垢の地をいふ。

ふるこさめ　間もおきて萬十二

萬葉十二に『ささなみの浪こす朝のふる小雨間もおきて我思はなくに』と比したり。

【緒】上にささ浪の波こす朝とあらば、湖に風まぜの小雨ふりて河面池上などの景色だちたるをいふなり。その小雨の降りみ降らずみ間あるを、我は間もおかで思ひ續くとなり。

ふる　柳　ふりぬ柿園詠草

加納諸平の長歌にはふりぬといふに古柳を冠らせたり。同音を重ねて調となす。

ふる雪の　消萬四、八、十二　いちしろし萬十　しきて思へど萬十　往きに萬六　白髪萬十七　みのしろ衣後一

萬葉四には消なば、八には消ぬとか、十二には消ぬべくと續けて降る雪の消ゆるを、人の命の消え失するに比し

十にはけ長く戀しとも續けたり。け長くは日長くにて、年月長くの意、消といふ音より轉じてかけたるなり。又同卷にはいちしろけむなとも、しきて思へどとも連ねたり。始のは著しからむの意にて、雪のいと白きといふを、際立つ意なる著しに轉じたるにて、後のは雪の降り敷きてといふより、頻りに思ふ意にうつしたるなり。又同六にふる雪の往きには往かじと同音を重ねて調をなさむ爲に冠らせ、十四には降るよきの行きすぎかてぬと重ねたり。降るよきは降る雪にて東國の訛なり。十七には白髮までにとも連ねたり。年老いて白髮になるに比したり。古今長歌には消なば消ぬべくともなほ消えかへりとも、後撰一にはみのしろ衣と連ねたり。雪ふりて身の白くなるといふより、簑の代に着る衣にかけたるなり。◇萬「道に逢ひてゑまししからに降雪の消なば消ぬがに戀ふ我妹（わぎも）」 萬「海人小舟はつせの山に降る雪のけながく戀し君がねぞする」 萬「梅の花それとも見えず降雪のいちしろけんなまづかひやらば」 萬「吾宿の君まつの木に降雪の往きにはゆかじ待にし待たむ」 萬「上つ毛野伊香保のねろにふろよきの行過ぎかてぬ妹が家のあたり」 萬「降る雪の白髮までに大君に仕へまつれば貴くもあるか」

『降る雪のみのしろ衣うち着つつ春來にけりと驚かれぬる』

【解】降るよきのゆき過ぎがてぬ云々、雪をよきとは東人の訛ながら音は通へり。さて行過ぎかてにかけたり。

【仝】みのしろ衣云々、これは雨雪などに、簑の代りにきる衣をいふ。ふる雪の簑に白き心に續く。

への部

へつなみ　そにぬぎうて[記]

古事記上にそにぬぎうてと續けたり。へつなみとは奧つ波に對し岸邊によする浪の義、そにぬぎうてとは磯に脫ぎ棄ての古言。海岸に來寄る浪は、磯にその名殘を留めて引退く如く、衣を磯に脫ぎ置くことの喩とせしなり。そにぬぎうてを鴗緯打といふ說は甚しき誤なり。

【厚】そにぬきうては鴗緯打而なり。鴗は和名曾比なれど、ひとにと同韻にて通ずればやがて下に蘇邇杼理とあり。そに鳥の色なる緯を打てなり。上のへつ浪はこの打を宣はん爲めか。緯を打つこと俗にもいふことなり。

【服】未詳、この續にそにどりの靑きみけしを云々、和名抄、爾雅集註鴗小鳥也、色靑翠而食レ魚、江東呼爲二水狗一俗にかはせみといふ。されば鴗の緯打てと詠めるにか。色を緯に打つといへるつねのことなり。へつ浪は打つといはむ爲、且しば波の寄するは機の織もて緯をうつに似たり。

【後威】邊浪極に脫棄にて、邊浪の限りに流し棄てんといふ意なり。かく云ふは山の曾枳、野の曾枳などいへるそ、又うれしさかなしさなどのさ、又憂瀬逢瀬などのせは佐行の通音にて何れも限り極みの意なりければ、この句のそも邊つ浪の限りに惜げもなく流し棄給ふ意。

【石】邊に消る波の如く、磯にぬぎ棄と比したるなり。

ほの部

ほしづきよ 鎌倉

謠曲調伏曾我に鎌倉に冠らしむるに星月夜を以てせり。星月夜とは星明りをいふ。ややを闇きものなればくらと同音の倉にうつしたるなり。鎌に木間をかけたりといふ説もあれどいづれ正しからむ。

ほそひれの 鷺阪山萬七

萬葉九に細比禮の鷺坂山とあるを、螢明抄にほそひれとよみたり。これはたくひれのと訓むを正しとすべきこと考の説の如し。尙たくひれの條を見よ。

ほそほこの 千足國紀

神武紀に細戈千足國とあるを、魚彥はほそほこのと訓めり。されどこはくはしほことよむを正しとす。精妙なる武器の充ちみちたるをいふ。

ほたるなす ほのかに萬十三

萬葉十三の長歌にほのかに聞きてと連ねたり。なすは如くといふ意、螢の光の如くほのかにと比したるなり。

ほたる火の 光神紀

神代紀下に螢火光神とあるを、服部高保はほたるびの、かがやく神と訓みて、上なるを枕詞となせり。の如く

比したること明けし。

【證】瓊々杵尊、葦原中國を知し召さむとし給ふ時の文章に云々、然彼地多有二螢火・火神及蠅聲・邪神一、復有二草木咸能言語一云々とあり。こは上古葦原中國に邪神多く有りて、惡氣雲霧の如く立れば、まだき國なるを、夜に喩へ、惡神邪鬼をふるふを螢の闇にかがやくに譬へて、右の如くは續けたる冠辭なるべく覺ゆ。

ほとゝぎす　ほとほと萬十　飛幡の浦萬十二

萬、十にほとほとと頭音を重ね、十二には飛幡の浦と連ねたり。ほとほととは殆の古言にして、この詞を設けむ爲めに郭公と置けるのみ。他の一は郭公の飛ぶといふを轉じて類音を頭にもてるとばたといふ地名に冠らせたるなり。◇萬、春さればすがるなく野の郭公ほとほと妹にあはず來にけり』　萬「郭公飛幡の浦にしく波のしばしば君を見むよしもがな』

【考】とばた云々、こは白鳥の飛羽山てふ所にいへる如く、飛ぶとうけたり。とばたの浦は或說に伊勢の鳥羽をあてたれど覺束なし。

【解】ほとほと云々、こは打重ねたり。

ほのへなす　光神延喜式

延喜式に如熒光神在云々とあるを、楫取魚彥はほのへなすと訓み、光神の枕詞となせり。或はほべなすと訓むべきか。ほべは上代照明の爲に老翁又小兒に燒かせたる火器の名、よりてかがやく袖に比す。

【補考】式祝詞、豐葦原の水穗國者晝波如二五月蠅一水沸、夜波如二火瓮一光神在云々、さばへなすといふことは前

の考にあり。瓮は瓦器なり。如火瓮光とは瓮の内の火の光をいふ。
【稜道】燎之方盛時炎煙怒などあれば光(かゞや)く意をとつてかけるにこそ。

穂波よる　田端甲信紀程

甲信紀程には武蔵の田端に冠らしむるに穂波よるを以てせり。こは稲の穂波のよる田といひ下したるなり。

まの部

目かがやく　金子の君に藤垣内集　多摩甲信紀程
本居内遠の集には金子の君に冠らするに目かがやくを以てせり。金の光燦爛としたる形容を氏名にうつしたるなり。甲信紀程には目清く玉といふを多摩の地名にうつしたるなり。

まがたまの　曲る木が花
下蔭のうけらが花には勾玉のまがるを續けたり。人の曲事をいはんとて同音の詞を重ねたるなり。

まがなもち　弓削の河原萬七
萬葉七に弓削の河原と續けたり。まは接頭語、鉋もて弓を削るといふ意よりうつして、河内の弓削といふ地名へ冠らせたり。◇『眞鉋もち弓削の川原の埋木のあらはるまじきことにあらなくに』
【考】こは鉋もて弓を削るといひかけたり。和名抄工匠具鉇部に音斯、和名賀奈、辨色立成、用曲刀二字一、新撰萬葉集、用鉇字一平レ木器也云々、鉇は辨色立成に曲刀とある卽今いふ鉇鉇にてはべり。
【黑】ゆけは遣削なり。やりけづるなり。
【折】鉋で木材を削るといふけを起して弓削と音を隔ててかけたのであらう。

まがねふく　丹生のまそほ萬十四　吉備の中山古十一

萬葉十四には丹生のまそほとも、古今十一には吉備の中山とも連ねたり。上野甘樂郡丹生及備前備中の境なる吉備の中山にては、古鐵鑛を出ししより、これを吹き分くる所ありしなるべく、その有樣を以て枕詞に置けり。

◇『まがねふく丹生のまそほの色に出ていはなくのみか我が戀ふらくは』『眞金吹く吉備の中山帶にせる細谷川の音のさやけさ』

【匠】眞金吹なり。古今集に眞金吹吉備の中山とよめる歌に付て、眞金とは鐵をいふといふ說あるは、彼吉備の中山よりは鐵を出しけるかにて、さはいふにや。吹くとはゆりたるをわかす時、蹈鞴を立てて吹けばなり。

【苑】まがねの吹き立の色は赤ければ、丹の一言にかけたり。

【冠】吉備の中山より黑がね出づるを、彼處に於てたたらして吹き分くるを、まがね吹く吉備の中山といへり、といふこと袖中抄の說、賀茂大人もこれによられつ。その黑金のこと詠める歌ならず。谷川をよめれば、まがねふくは冠辭となれり。

【例】その國の產物をとりいでていへるなり。

【貂】眞金は銅鐵の美稱なり。この二つの利用、鏡に鑄、劍につくりて日々の功を見るには、眞金とは貴きなり。黃金白金は王と等しく、口をこそ喜ばすれ、利用におきては賤物なりといふ說あり。鬪諍の人の害、戲れながら聞きつべきものなり。丹生は即眞赭土のことにて黑がねのこゑといふに同じき詞なり。丹生のその眞赭生の色にと掛けしなり。そのそほによりて眞金は吹き出づるなればいふなり。古今集にまがねふく吉備の中山とよみしは、彼山よりも金を掘り出でたる事のありしなるべし。よて山の名を呼び起すにまがねふくといふ。

【解】眞金吹くなり。丹生山にて金を吹きしゆゑかく續けたるなり。丹生は上野甘樂郡丹生とあるそこならむ。

【石】にふのまそほ云々、まがねふくは賞詞なり。枕詞にあらず。

【黒】庭訓往來に備中鐵と見えたり。鐵は備中より出でたるなるべし。播磨風土記弘計天皇の御歌に吉備のまかね云々とあり。

【折】丹生は地名か、又は丹の意を擴充して土の意として出土狀態から續けたものか。

まがみふる　奇稲田姫紀

神代紀に奇稲田姫に冠らせたり。櫛は髮に觸るるものなるより、眞髮觸る櫛といふを、同音異義の奇に轉じたるなり。

【考】櫛は髮に觸るるものなれば冠らしむ。まはほめたる詞、奇は奇日(くしひ)、いつくし、めぐしなどいふに同じく、めて褒むる語なるを、冠辭には櫛の方にいひうつしたるなり。

【石】まは賞詞、かみは髮、ふるは觸れうの約、髮に觸動る櫛といふ義。

【麿】まがみふる奇稲田のまがみとは、英語のマジックの語源及マジの宗教等同一語なる、希臘語マガノオー或はマガノンなる語に形容的語尾のふるを加へたるもの。即ち奇術妖術を行ふことなり。我稲田姫に妖術行はれず。希臘のアヤ國の王女メデア姫の名とイナダ姫と發音相近きよりその傳說に混亂を生じ、爲にメデア姫の形容語を誤つて稲田姫神話に混入せしものの如し。

眞鴨よ　賀茂の大人 鈴屋集

鈴屋集には賀茂の大人に冠らするに、眞鴨よと同音を重ねたり。

まきさく　日の御門紀　檜の板戸紀　檜の嬬手萬一

雄略記には日の御門と連ね、繼體紀には檜の板戸とも、萬葉一には檜のつまでと續けたり。眞木は檜木をいふ。さくは裂くといふ説もあれど、幸くを正義とすべきか。ひの音に續くるは盛に成長したる眞木即ち檜といふより檜の板戸或は檜のつま手と續け、又同音なる日の御門に冠らせたるなり。つまでとはあらづくりの材木をいふ。

【仙】檜は木の中に殊に良木なれば宮造の材木にとり用ひらるれば、眞木さきはふかといふなり。

【厚】眞木とは則檜の木をほめていへり。割とは昔はよき木を引裂けり。鋸を以て引つるをも云ふべし。

【僻】木を割切は及なれば、及の冠辭に眞木佐苦といふ。及の古語をひといふ。今は通音にて身をいふ。及と檜と同音なれば眞木さくを檜の冠辭とす。

【考】眞木は檜なり。さくとは古は木を斧もて拆きて、板とも何ともせれば然いひて、ここは拆きたる檜てふことなるを、用を體にかけたるなり。右の如くて日の御門にいひうつしたり。右の檜とのみ續けしより見ては檜もて造れる宮門のこととひいふべけれど、同じ記にたかひかる日の宮人、萬葉一に日の御門と書きたるなどを合せ見るに、こは檜を日にいひかけたるなり。眞木を檜なりといふは、多くの木の中に勝れたるゆゑに、眞の木と賞めいふなり。神代紀に檜は大宮造る材といひ、さて眞木の杜眞木の戸などいふ皆檜なるにて知るべし。この木は皮の斜に纏へるものにて、木理もまきてあるゆゑに、まきといふと橘枝直がいひしはさる事なり。檜の嬬手とはまづ麁木つくりしたる林は角柧(かどつま)のあればいふなり。

【檜】眞木さくに斧のたけは割るなれど、それより先は矢を入れてその矢を大き槌にてうち裂くなり。倭名鈔造具の中に鏨、鏨文云、齊人以二大槌一鐫杯鑿とあげて漢語抄云阿比と註したり。古事記に切伏大樹茹矢打立とあり。阿比のあは發語にてひといへるか、又あひなそぎてひとのみいふか。

【一言】まは發語、木を裂く刀と掛けたり。刀をひといふ。つまではうるはしき木の端の手の如きをいへり。

【解】さくは幸にて幸はふといふに同じ。その幸はふといふは、その物の切開をなすをいふ。故に眞木の功用を成しさきはふ檜の材、又は檜の板戸又日の御門などいひ續けたり。

【攷】考に眞木は檜なりといはれしは違へり。眞木は木をほめていへるなり。

【石】まきさくは眞木柝なり。檜は木の最第一なれば眞木と稱へたるなり。されば檜の板戸、檜のつま手と續けたるは稱詞にて枕詞にあらず。

【黑】よくさくる木を眞木さくといふ。今まきとて薪にするもさき割る故なり。

まきたつ又まきのたつ　荒山道萬二　荒山中萬三

萬葉二には眞木立つ荒山道とも、同三にはま木のたつ荒山中と續けたり。こは荒山には檜等の大木樹立せるより尋常の形容詞句と同じく上におきたるなり。◇『おほきみは神にしませば眞木の立つ荒山中に海をなすかも』

【解】まきは檜のことなり。そは檜をほめたる名にして、すすきを眞草といふともはら同例なり。檜は大方荒山に生ひたちてあるものなれば、かく續けたり。

まきつむ　泉の川萬十三

萬葉十三の長歌に「大君のみことを畏み見れどあかぬ楢山こえて眞木積泉河の早き瀬に竿さし下し」とあるを契沖はまきつめると訓み、綾足はまごづみのとよみ、雅澄はまきつむとよめり。ここは眞木積みて竿さし下しと續けたるにて、枕詞と見るべきにあらざるか。

【匠】杣木を積みて下すなり。

【苑】まこづみの泉河は、眞木積の出づるとばかりにもあらず。づみの詞の重ね面白ければなり。

【解】こは眞木の杣木を積みて泉川を下せばかくいへるなり。

まきばしら　太き心萬二

萬葉二に「眞木柱太き心はありしかどこの吾がこころしづめかねつも」とあり。眞木柱の如く太き心と比したるなり。

まくさかる　荒野萬一　荒川甲信紀程

萬葉一に、眞草苅荒野にはあれどと續けたるを、考にあげて枕詞とせり。こは馬草刈ると荒野の有樣をいへる尋常の形容詞にて、枕詞と見ざるも可なり。◇「眞草刈る荒野にはあれど紅葉葉の過ぎにし君が形見とぞ來し」。甲信紀程にはこの續よりうつりて武藏の荒川に冠らせたり。

【考】こは里遠き麁野らを知らするとて、眞草刈るといひたれば、ここの眞草は麁草てふ言なり。まず眞草とは専らは草の中にもすすきなどをいふなれど、はた斯く用ふる時はすべて麁草の方にとりていふあり。

まくずはふ　春日山萬六

【眼】萬葉六にまくづはふ春日山云々、こは春日山は專ら葛はへる山ならめば、かく續けたるなり。集中に千鳥なくさをの川、みゆきふる吉野の岳てふ類なり。是ら眼前に葛をよまば冠辭にあらず。葛なき時、千鳥無き時いへるを則冠詞と取るべきなり。

【折】卷六に云々、又卷十一に眞葛はふ小野の云々、これらは葛は山野にはふものなれば、かく續けたり。

まくらがの　こがの渡萬十四　こがるゝ胸草根集　木枯同上

萬葉十四にはこがの渡と續け、草根集にはこがるゝ胸とも木枯すぎてとも續けたり。この枕詞につき異說あれど萬葉のは唯地名を重ねたるにあらざるか。同東歌の中に『白妙の衣の袖を枕がよ蜑漕ぎ來見ゆ浪立つなゆめ』といふ歌あり。初二句は序にして主想は三句以下にあり。卽ち枕貿といふ所より海人の漕ぎ來るあり。ゆめ荒浪起つなと祈りたる歌なること明かなり。このまくらがといふは或は下總の地名にて、その國の許我といふ小字へ續けたりと見えたり。されば枕詞にあらず。草根集のはその古我といふ地名を同音をもてる焦る、及木枯にうつしたれば枕詞なり。

【仙】こがは所の名なり。ことといふは臥すといふ詞なればことといはん爲に枕がのと置けるなり。又枕のかもこがのがの字も共に所といふ詞なり。

【燭】こは枕香のこがるといふ心にて續けたりといへり。但し枕香といふも所の名と覺えたり。東歌に白妙の衣の袖を枕かよ云々、枕かよと讀めるは枕がよりといふ詞なり。白妙の衣の袖をと置きたるは枕といふ詞來めむ爲なり。枕香といふ所にこがの渡といふ渡の有るなるべし。このこがの渡も下總國にありといへり。

【考】地名の上に眞の語を置きて重ねたり。さて久良我てふ所の名を、久良の反こ。なれば、約めて許我ともいひしゆゑにかくは重ねたるなりけり。この久良我は既に國知られぬ由なれば、更に求めず。されど試に東にある地の名をいはば、和名抄に武藏國久良(久良岐)と記し、今上野國に倉下と書きて久良我といふ驛あり。下總國に古河と書きて許我と唱ふる所もあり。

【冠】枕香の高臥を地名にかく。

【昆】枕香のこがとのみ續けて、焦るとも木枯とも轉じたり。

【石】枕香の如く焦ると地名にかけたり。

枕太刀　立ちの急ぎ　漫吟集

漫吟集には立ちの急ぎに冠らしむるに枕太刀を以てせり。同音を重ねて調となす。

まくらづく　つまや　萬二、五、十九

萬葉二、五、及十九に嬬屋と續けたり。つまやは閨房なり。夫婦は閨房の中に枕を並べつけて寢ぬるよりかく冠らせたるなり。◇萬五『家に行きていかにか吾が爲む枕づく妻屋さぶしくおもほゆべしも』

【仙】まくらづくとは枕馴れたるといふなり。嬬屋といはん爲におく。

【燈】夫婦常にぬるやをつま屋といふ。よつて枕をつくつまやといふなり。

【冠】枕つくは夕づく秋づくなど云ふと同じくて枕によりそふ妻屋といふ意。

【槻】枕づくは枕齋くにやあらむ。枕はいつくものなればなるべし。

まこづみの　泉河萬十三

萬葉十三に眞木積泉河とあるを、詞草小苑にはまこづみのとよめり。まきつむの條を見るべし。

まこもかる　おほぬ川原萬十一　淀古十二、新古今八

萬葉十一には大野川原とも、古今十二及新古今八には淀の澤水とも、後撰八には堀江にとも、榮花歌合の卷には淀の渡とも連ねたり。山城淀及大野川原などにては、眞菰草多くして田夫の刈り取ること世に知られたり。されば此等の歌にては現在菰草を刈ることなけれども、その地を連想せしめむ爲に特に冠らせたるなり。◇『眞菰刈る大野川原のみごもりに戀ひこし妹が紐とく吾は』

まさきづら　たたきあざはり紀

繼體紀に『妹が手を我にまかしめ、我が手を妹に卷かしめ、まさきづらたたきあざはり、ししくしろ熟寢ねしとに』と連ねたり。まさきづらとは正木蔓にて、今いふ野葡萄のことなるべし。予が郷國にては野葡萄をまさきともえびともいへり。たたきあざはりとは手抱き糾ろ義。二人の手を組み合せからみ合ひたる有様をいはむとて正木蔓の手が互にまとひつきたる狀を比喩とせるなり。蔓のことをてといふ。今も俗に蔓のものに手をやるなどいへり。されば蔓の手の物にすがりからまるをいふ。この他、冠辭考には萬葉七及九の冬薯蕷葛をまさきづらと訓みてこの部に擧げたれど、そはところづらと訓むべきこと記傳に田中道麿の說を引けるが如し。

【厚】俗につゞるといふはつゞらなり。たたきあざはりと續けたるはその由を知らず云々。

【考】まさきかづらの物に糾り纏ふが如く、妹と夫の互に手を相纏へるをいへり。たたきの語を隔て糾にかかれ

り。且あざはりはあざなはりなり。萬七に冬薯蕷葛いや常しきに云々、こはまさきかづらの常葉なるが如く我も榮くありてなり。萬九に冬薯蕷葛尋去ければ云々、こはまさきづらの長くはひ續くに譬へて、追續きて行けるをいへり。まさきづらは常葉なる故に、眞榮葛といふを略きていふなり。かのまさか木も眞榮樹の意なるを思ふべし。

【摘】たたきあざはりとは戲れ給ふ姿なり。是のまさきづらを冠らせつるは、うずめの命の故事より、神樂の舞人は眞榮木をかづらにせるなり。冬薯蕷をまさきづらとよむ人あり。そはさねかづらなり。

【傳】廿九田中道麿がいふ。萬七及九なる冬薯蕷をまさきづらとするは心得ず。まさきは冬常葉といふべきなし。六帖に右の歌をまさきづらとあるは、萬葉の此冬薯蕷の訓をつくべきやうを知らざりしから、妄に然か訓みて載りたるものなり。又冠辭考にもこれをまさきづらと訓みて、まさきの說は精しけれども、その冬薯蕷に當るべき由は更に見えず。いかが。冬薯蕷は野老なり。云々。

【稜言】國史草木攷云「靈龜紀に云々、今正木葛と云ふものは本草拾遺に載せたる扶芳藤也。俗につるまさきといふ。正木に似て蔓纏するものなり。又今云、冬靑とて本草拾遺に載せる常春藤をも云ひしにや云々」この俗につるまさきと云ふものを栽て見しことありしに、今この御歌に阿娜播梨と續けさせ給ふにいとよく合ひて、その葛にたく纏ひからまるものなりき」云々。たたきあざはりは手抱糾交なり。たゞきの三言を略て正木葛のまつはり糾交るよしにて、それを互に身を交へ纏はり寢給ふことに喩へたまふなり。

【右】正木葛たたきあざはりと續けしは、如何なる義とも知りがたし。考にいへる所も心ゆかず。古事記によりて

ちふるに、たたは地々にて道々といふに等し。きは來なり。道々來といふ義なるを、たよせの要語なるが故に任せてたたといへるならむ。正木葛の道延來る形勢に比したるなり。

【意】すべてまさきは眞拆にさくる葛をいふ。

ましみづの　心もけやに萬十六　まして六帖　淨見原の宮縣居家集

古今六帖五及蜻蛉日記には眞清水のましてと同音を重ねたり。『我が門のいささ小川の眞清水のましてぞ思ふ君ひとりをば』萬葉十六の長歌には『寒水の心もけやにおもほゆる』とあり。心もけやにとは、心地の清々しく胸中に何の滯りもなきをいふ。こは比したるなり。縣居翁の集には淨見原の宮へかけたり。清きといふよりうつしたるなり。

【解】寒水は萬訓にはひやみづとあれど、ましみづと訓むべし。清水は寒なる義もて書けりと見ゆればなり。さてこは清水の如く心を深くおもほゆるといふ意の續なり。けやは雄略紀に太　言又源氏物語行幸に言いとけざやかに聞えて云々、枕草子に梅の折枝などのけざやかに云々、など見えたり。同音なるべし。

ますかゞみ　見し拾九　敏馬浦續後撰五　うつり果てにし同十五　向の丘新古今

拾遺九にはますかゞみ見しかと思ふ妹と續け、見ずばとも連ね、續後撰五にはみるめの浦に冠らせ、同十五にはうつり果てにしとも、續古今十七には向の丘とも續けたり。ますかがみとは眞澄の鏡の意にて、鏡は朝夕などに人の向ひ見るものなるより、見しとも向ひの丘とも又見ぬ目と同音なる攝津の敏馬浦にも轉じ、又鏡には影の映るより、人心の移りかはりたる方にとりなしたり。◇拾遺『澄鏡見しかと思ふ妹に逢はむかも玉の緒のたえたる

戀のしげさこの頃」 拾「影たえておぼつかなさのますかゞみ見ずば我身のうきも知られじ」 續後撰「ますかゞみ對馬の浦の夜半の月氷をよする秋のしほ風」 同「忍ぶとて影だに見えじますかゞみうつればてにも人の心は」 續古今「朝な朝なよそにやは見るますかがみ向の岡につもる白雪」 又三代枕詞例には古今六の「ますかがみ見る影さへにくれぬと思へば」 後撰八の「ますかゞみ影ばかりをぞ君にそへつる」 同十九の「ますかゞみ底なる影をたぐへてぞやる」を枕詞として取り出でたれど、こは枕にあらず。

【冠】見しか、うつれる、みるめの浦、むかひの丘、いつれも發語にて續けたり。

【辨】まそかがみは眞耕鏡にて、照り明り光りかがやく色にふせて名づけたり。

【異】ますは眞直(ます)なり。まそも同じ。まつすぐに見ゆる意にて、澄むにあらず。かゞみは影見なり。

【應】まそかがみは眞澄鏡と書きて澄みたる意味に解し來れりといへども、實は圓形（乳房の如く）の鏡といふものにして、まそとは希臘語のマソスに當るなり。

ますがよし　蘇我の川原萬十二　須賀山久米集

萬葉十二に眞菅吉蘇我の川原と續けたり。これを仙覺抄にはますげよしと讀み、代匠記及考にはますがよしとよめり。今よしの說に據る。大和の蘇我の川邊によき菅の生ひたるより、その名物を枕に置き且はすが、そが類音を重ねて調をととのへたり。◇「眞菅よしそがの河原に鳴く千鳥まなし我せこ我こふらくは」久米集の歌には須賀山に冠らせたり。すがの音によりて續けたるなり。

【參】そがの河原は出雲國にあり。出雲風土記の菅の心清々しと宣ひし所を素我ともいふなり。亦音はすがともいふ故

に、ますげよき菅といふ心にて續けたり。菅をば笠にも簑にも席にも作る草にてあれば、ほめて眞菅吉きとはいふなり。亦二條院讃岐歌云「千鳥なくそがの川風身にしみて眞菅かたしき明す夜半かな」これはこの川に眞菅の生ひたる心に詠みたり。

【考】同じものにまとほむる語を加へて重ねたるなり。吉は借字にて、眞菅よ菅の川原といふに、しの助辭を添へたるなり。宗我の河は神名式に高市郡宗我都比古神社あり。この川なるべし。

【解】菅と宗我とは音の通ふが故に重ねいひたる枕詞なり。推古紀にまそがよ、そがの子らは云々とあるに同じ。吉は麻賓吉、大魚吉、玉藻吉などいふ吉と同じ。

【石】まそがよの枕詞に同じ。よしは依會ることを領るといふ意なり。

ますらをの　手結が浦　萬

萬葉三の長歌に手結が浦にと續けたり。古、益荒雄は手纏といふもの着けたり。よりて越前の田結の浦といはむとてますらをのと冠らせたり。手纏は小手をいふ。再按、古農人の組合の如きものをゆひといひたること堀河百首に見ゆれば、益荒雄即ち丈夫の組合といふを地名にうつしたるか。たは手と同じく人といふ義ならむ。

【管】手結とは籠手をいふ。よつてますらをのとは云ひかけたり。

【匠】日本紀にあゆひを、脚帶とかきたれば手帶とかくべきにや。

【考】こはますらをの手に著る手纏をこの浦の名にいひかけたり。和名抄に射韝和名多末岐、一云小手也といひ、集西宮抄裏書に小手と有るなどによるに、古への手纏は弓の小手の本なり。ますらをてふ語は正荒雄の意にて、

中に益ゝ雄と書ける益は借字なること、たゞ荒雄等とも詠めるにて知れ、然るを後の人ますらを女に當れば、まさり男の謂、女は男に劣れば乙女といふといふは、おしはかりの説なり。

【記】たゆひのひはふに通ふにて、大夫の浦なるべし。丈夫は大夫といふに同じ。よりて益荒男とかさぬ。

【枝】正荒男の手につくる手纏をたゆひの浦にいひかけたり。

【黑】手ゆひは袖の上につけて袖をしむる具なり。

【折】ますらをの田結、ゆひ即協同作業か手業であるから、手をつけたのであらう。或は田結かも知れぬ。ゆひは古書にも見えて隣保相扶けて互に勞働をしあふ組合的な作業である。だから小田のますら雄即健康な田夫らが協同で田植などしてゐる樣を聯想して續けたのだ。

まそかゞみ　見る萬　敏馬の浦萬六　南淵山萬十　清き月夜萬八、十一、十七　とぎし心萬四
床の邊萬十一　かけて忍ぶ萬十二、十五　二上山萬十九　三宅の主蘆垣內集

萬葉三には仰ぎて見れど、十一には見ともいはめや、十九には見ぬ日時なく、六には敏馬の浦、十には南淵山と續けたり。まそかゞみは眞澄鏡に同じく、鏡は人の見るものなるより、妹を見るとも、垣間見とも、仰ぎ見るとも、轉じてはみの音を頭にもてる攝津の敏馬、また大和の多武峯のほとりなる南淵山へも係けたり。萬葉八、十一及十七には清き月夜とも、七及十一には照るべき月とも、照れる月とも續けたり。團々たる月を澄み徹りたる鏡に比したるなり。又萬葉四には磨ぎし心、十一に床の邊去らず、十二及十五にはかけて忍ぶとも、十九には二上山とも續けたり。鏡は磨ぎて曇なからしむるより、磨ぎし心にうつし、又その置く所に隨ひて床の邊に思ふ人の俤の

見ゆる裏に註し、蓋のあるより二上山(越中)に冠らせ、又古鏡は裏に紐を附して臺に掛けたるより心にかけての意に轉ぜしめたり。この枕詞は三代集以降にありては、ますかがみといへり。又鏡の見といふより凡河内集には「三宅のぬしと並ねたり。◇萬『まそかがみみぬめの浦は百船のすぎて往くべき濱ならなくに』萬『眞十鏡見名淵山は今日かも白露おきてもみぢ散るらむ』萬『このことを聞きなむとかも眞十鏡照れる月夜も闇のみに見つ』萬『まそかがみとぎし心をゆるしては後にいふともしるしあらめやも』萬『里遠みこひうらぶれば眞鏡床のへ去らず夢に見えつつ』萬『祝らがいつくみもろの犬馬鏡かけてしぬびつ逢ふ人ごとに』

【管】まそかがみ床のへさらず夢に見えよ。ますかがみ床とは續かず。末に夢には見えよといふ。見の字にかけて心得べし。

【匠】見宿女浦云々、鏡を見ると續けたり。只一字をいはむ爲なり。

【考】眞そ鏡てふ語は眞澄鏡てふ意なり。照る、清き、見る云々、これらの續は皆明らけし。また向ふとも、面かげとも續けたる多かれど、いよよ隱れたる事なければ洩らしつ。又鏡は磨ぐものなれば、我心を磨ぎ潔めて在りつるに譬へたり。又床のへさらず夢に見えこそ云々、こは鏡台の鏡の樣を思ふに、古は床の上さらず置くことなれば、寢る床をさらで夢に見えねかしてふに冠らせたり。犬馬鏡かけてしぬばゆ、こは鏡は裏に紐つけて臺などに懸くるものにて、神の鏡もしかすれば懸といひかけたり。又眞鏡蓋上山に云々、こは鏡筥の蓋を二上山にいひかけつ。

【眼】見名淵山云々、こは萬四に『匣にのれる鏡なす見津の濱べに』十五に『朝されば妹が手に卷く鏡なす美津

能波廣備爾」とよめるに等し。十一にまそかがみ見ともいはめやと詠めるは、見るとみるとかけたり。今は南淵へ云かけたるのみ。深心なし。集中に梓弓いそべなどいへる類なり。

【解】とこのへ去らず云々、こは鏡は毎朝見るものにて、寝床のあたりを去らず置くものなれば、床の邊去らずといふ意にかけたり。

まそがよ　蘇我の子ら 紀

推古紀にまそがよ蘇我の子らと重ねたり。考にいへるが如し。

【考】こはそがと云はむ料に、同じ物に眞とほむる語を加へて重ね給へり。眞玉手の玉手、みよしのよしのなどの如し。且蘇我は昔のことなり。蘇我の子とはそがの大臣馬子をさすめり。

【石】まは賞詞なり。そがは菅の古名、そはさをの約、稲の穂先外に出ると菅の生茂る形勢を以て名とせしなり。……中略……よは呼の詞、まそがよと呼出し置きて、再まそがといへるは、かたまよみかたまの類なり。

またまつく　遠近萬四　越智萬七　小幡の神鈴屋集

萬葉四に遠近かねてとも、七には越智の菅原とも連ねたり。まは褒むる詞、玉を付くる緒といふを略して、をといふ音を頭にもてるをちこちに、又越智(大和)といふ地名へ係けたり。本居宣長の長歌には小幡の神をも續けたり。緒の音を小にうつしたるなり。◇『眞玉つく遠近かねて結びつる我下紐のとくる日あらめや』『眞玉つく越智の菅原あれからす人の刈らまくをしき菅原』

【考】こは玉つくる緒といひかけたり。越智の菅原、河内の邑ならむ。

【語】つくは繼りてあるなり。

またまづら　たえむ萬

萬葉に『丹波道の大江の山の眞玉葛絶えむの心我が思はなくに』とあるを、上田秋成はまたまづらと訓みて、絶えむの枕詞とせり。されどこは義によりてたまかづらと訓むべきか。葛は絶え切るる事あるより、交情の中絶にいひかく。

【解】何のかづらにも子の生るをいふ。さてかづらは中絶ゆるものの故にかけしのみ。大江山は丹波國桑田郡にあり。

またまなす　我思ふ妹記

允恭記に眞珠なす我が思ふ妹と比したり。萬葉十三の長歌にも同樣の續あり。珠は人のめづるものなれば、その如くと喩へたり。

またみるの　またゆきかへり萬十三

萬葉十三の長歌に又行き歸りと連ねたり。又といふ詞を設けむ爲に、同音をもてる詞を冠らせたり。またみるとは枝の分れたる海松をいふ。

【解】またみるは海松の枝のあるをいふ。又といふにのみ。

まつかへの　榮えいまさね萬十九

萬葉十九の長歌に松柏の榮えいまさねと續けたり。松柏は常葉木にて盛り久しきものなれば、君の榮えませと比

したるなり。

【服】松柏の木の榮ゆる如く、榮えて有りませてふ語にて深據なし。

松風の　音羽の山つづら冊子

上田秋成の長歌には松風の音といふより音羽山に連ねたり。

まつがねの　待つ萬十三　絕ゆることなく萬十九

【續考】松は年經る例にせるものなれば、その根の如く絕ゆることなくといふなり。

萬葉十三の長歌に松が根の待つこと遠みと同音を重ね、十九には松が根の絕ゆることなくと比したり。

【服】十三のは松が根のてふより、待つと受け出でたる重語なり。松根のともいふべきを、松が根といへるは、待不得てふ意をこめて待つこと遠くと續けたり。十九のは天皇の奈良の京に榮えまさむことを壽ぐに、玉かづら絕ゆることなくともいふべきを、上に欅木のといひたれば、同じく木もて譬をなさむとて、松が根のとは調べたるなるべし。凡そ山に松は絕えぬものにも侍り。

【冠】萬三に松之根也遠久しき、松根也は松根の遠く根延ふをいひて、遠く久しきの枕詞なり。さて松根之といふべきを、やとしも云へるは、松根之遠久寸也といふ意なるを、そのやを上にうつして云へるなり。さて遠久寸也は遠く久しき故にやといふ意なり。萬十三に木始已いや遠長く、按ふに木始已はもと松根之とありけるを、松字を公の畫を脫し、始は義を得て子と訓むべきか。又根の草書を始に誤れるか。已は之の草書を已に誤れるにやあらむ。さらばまつがねのと訓みて、上の卷三なると同じ種なり。又大神景井考あり。その說にいはく、始は防

字を草體にて寫し誤れるものにて、未防巳はあをつづらなるべし。さて葛の蔓長く延わたる意に續きたるならむといへり。今案に字鏡に未防巳、佐奈葛、一云須衣比とあれどいかが。同卷にまつがねの待つこと遠み、こは松と待つと言の同じきを畳ね云ひたる枕詞なり。十二には「神さびて巖に立てる松が根の君が心は忘れかねつも」この續の意未詳ならず。若しは心とかかりて、松が根の凝るといふ意に續きたるか。又は松根の如く常に變らず君を心に忘れぬといへるにて枕詞にはあらざるか。

まつかへり　誣萬九、十七

萬葉九及十七にまつかへりしひにてあれと續けたり。しひとは强言にて、常盤なる松の葉の色變らぬものなるを松かへりといふは、誣ひたる言なればかく續けたりともいへり。原文に松反四臂とあり。四臂八羽は戯訓に用ひたるかと思はるれど、未だ考へ得ず。◇『松反りしひにてあれや三栗の中すぎて來ずまつといへや子』

【管】松反四臂而有八羽云々。或說に待つに歸りたるを强てといふ心にいへり。その義確にも聞えず。この詞は松の木の曲れる如くに有る臂といふ心なり。人の臂のうつくしくもなきを喩へていへるなり。松かへりしといふまでの發端の詞なり。

【匠】松反とは松は色も變らぬ物なるを、變ずといふやうなるをしふるといふ、誣の字なり。口よくあらぬさまに物をいひなす心なり。

【解】松反は强の枕詞とは聞えたれど、いかでかくいふ所由を未考へ得ず。契沖は云々といへれどいかがなり。又中山巖水は今の世の俗、をさなき子供を誡なる言に、人に物をやりてそを取り返せば、その反りに背中に松の

木生ふるといへることあり。思ふにこのことは古よりさる物語のありしより、然かいひならへるなるべし。これによりて思ふに、ここの松反もさる類のことなるか、ここは既にさきことをも有りといひなす戯言の名となりしなるべし。さて強るといはむ爲の枕詞と成れるなるべしと。猶考ふべし。

【折】まつかへりしびは鷹狩の用語。山詞の記にも、見えない鷹が鷙く鳥を隠して徘徊ること、しびに踞り居ふることと思はれる。

まつち山　待つ萬十二　本つ人萬十二

萬葉十二には待つらむ妹とも、拾遺の長歌には待つ程過ぎてとも連ねたり。こは同音を重ねて調をなせるのみ。又萬葉十二には「つるばみの衣とき洗ひ眞土山もとつ人にはなほ若かずけり」といふ歌あり。まつち山は本つ人に冠らせたりと見ゆ。この歌上三句は序にして、衣を解き洗ひて砧上にて又打つといふ義を、まつち山に重ねさせたり。本つ人とは昔馴染の人をいふなるべし。眞土山より續けたるは、山といふ語は、山邊とか山里とか山下、山本などと常に呼びなす語なれば、山本といふ字ぐさりの如くに連ねたるか。而してまつちもとつと音の似通ひたるところあれば重ねて調を助けたるか。

【辯】萬十二に云々、これはまつちともとつと音の似通へばかく續けたり。又同卷に亦打山まつらむ妹云々、音の同じき侭ねいひたるなり。さてこは覊旅發思歌の中に出でて即旅行地の名をもて枕詞とせるなり。

松の葉の　散りうせず古今　いつごも分かぬ古十一

古今序には散り失せずとも、同十一にはいつともわかぬと續けたり。歌の散佚せざらむことを、松の葉の常磐な

るに比し、又時分かず人を思ふ心を常かはらぬに喩へたり。◇『夕づく日さすや岡部の松の葉のいつとも分かぬ戀もするかな』

【解】松の葉のときはの色を、いつとも分かぬにかけたり。

まつひとの　ゆききの岡續古今

續古今には往來の岡と連ねたり。待つ人の行き來るといふをゆききの岡にいひ係けたり。◇『待つ人のゆききの岡も白雪のあすさへふらば跡やたえなむ』

まつ山の　待つ新古今十七

新古今十七に『存へてなほ君が代を松山のまつとせしまに年ぞ經にける』と見ゆ。君が代を待つといはむ爲に、同音の松山のと置き、頓て松は悠久しきものなれば、その縁にて年經るといふことを利かしめたり。

まとり住む　雲梯の森萬七、十二

萬葉七及十二にうなでの杜と續けたり。まとりとは鵜と說く人あり、鷲といふものあり、鵠となすものあり。いづれ正しきか明かならず。古は人名にも眞鳥と附けたるあり。强きを意味せんが爲に鷲をいひたるか。さらば鮭なく佐保の川などの類にて、その森にかの鳥の多くゐたるを以て枕として上に置きたるなり。雲梯社は大和高市郡に在り。

【仙】眞鳥は鷲なり。爽は鷲の羽をばまとりのはと云なり。うなてとは海のはたと云ふ心をこめたれば、鷲は海近き森にすむ鳥なればよそへたり。又云、まとりは海にすむ鵜なればまとりすむうみと云ふ心にも通へるか。

【管】まとりは鵜の名なり。うなでは美作の國にある森の名なり。まとりは鵜なればうなでとつゞく。

【匠】鵜ならずとも木を眞木といふ如く萬の鳥を眞鳥といふべし。森には諸鳥の來て集るものなればかくも續くるか。雲梯森は高市郡にあるにや。日本紀に石上の溝などありて溝(うなで)をうなでといふ。それに得たる名にや。

【考】或人眞鳥は鵜にて、それが住む海と續けしならんといへりしを、又の人はいか樣にも鵜の事と聞ゆれど、鵜をしも眞鳥といはむとも覺えねば、この眞は魚の誤にて、魚鳥すむ海と續けしにやといへり。げに魚くふ鳥は多かれど、鵜は殊にさもいふべく、集中に眞葛を相誤れる所も有るめれば、魚もはた誤るまじからぬ字なり。されど鵜の住む磯といふ如く礒鳥などにはいふべく、海とては少しはとしたる心地もするなり。よりて思ふに、木の眞木は檜なり。獸の眞がみは狼なり。鳥の眞鳥は鷲をいふにあらずや。かの眞鳥の大臣の名もあるからは、眞鳥てふものは有りぬべきなり。卯名手の森は、式又和名抄に大和國高市郡雲梯、宇名天といへり。

【詞】まとりといふは鵜なり。鵜といふは一に淘河鳥といひてよく水を淘りて魚をとるといふよりの名なるべし。鵜と雲梯と音の同じきよりつづけたるか。

【貂】前篇に眞鳥は鷲なりといはれたり。鷲は人里近き森林に住む鳥にあらず。按ずるに眞鳥は鵠をいふなるべし。倭姫世紀に廿七歲秋九月に云々、其處に伊佐波登美之神の奉宮造皇太神の攝二攝社一、伊雜宮是也、彼の鵠の眞鳥、號二稱大歲神一云々、これ正しく鵠を眞鳥といひたり。此鳥は野に下りて餌ばみする故に、しら鳥の眞野といふ冠言も見えたり。さらば雲梯の杜などに巣くふて住むべきものぞ。

【石】鵜は眞鳥と賞すべき鳥にあらず。考ふるに、回居(まをり)といふ義にて、森に宿れる鵜の形勢をいへるなるべし。

圓居のをはとの餘音に含めたり。圓居作鶴といふ義を森の人名に續けしなるべし。

【冠】常の鳥類をまとりといへるかと思へど然らず。なほ鷲なるべし。まとりすむは冠辭にあらざるべきか。

【折】雲梯社に鶴が棲んでゐたと見るよりは、鶴の海邊に宿るところからうなを起したと説く方がよいと思ふ。又眞鳥鮪が父子なのを見るとやはり魚の名と考へられる。

まなごぢの 又まなごづち　まなほに萬七　間なく萬十二

萬葉七には愛子地まなほにしあらばと續け、十二には愛子地間なく時なくと連ねたり。愛子は借字にてまなごと訓みて眞砂子の義なり。これを地の字と連ねて、枕詞解にはまなごづちと訓み、右上にはまなごぢのと擧げたり。二首ともまなの頭音を反覆して詞をなさむが爲、序の體にて頭に置けり。まなほとは眞直なり。表裏なきなり。

◇『衣手の眞若の浦のまなごぢのまなく時なしあが戀ふらくは』『豐國の企救の濱邊のまなごぢのまなほにしあれば何かなげかむ』

【解】始のはまなの言を疊ねいひたるなり。後のは數の眞砂の透間なき意に續けたるなるべし。又上の如くまなの言をうち疊ね云ひたるにも有るべし。

【石】まなごぢは眞砂子地のすを略きたるなり。まさごぢといふに似て異なり。まさごぢは砂地なり。まなごぢは砂の平かなるなり。こはまなごぢ、まなと同語を重ねたり。

まよびきの　横山萬十四

萬葉十四に横山に冠らせたり。横たはりたる遠山を遙に望むに、女子の畫きたる眉の如くなるより、相比して眉

引のと置きたるなり。◇『妹をこそ相見にこしか眉よびきの横山べろのししなす思へる』

【燭】女の眉は横に引くものなれば、よこといはむとて置かれたるなり。

【匠】まよびきは眉なり。仲哀紀に睩の字をよめり。眉は横にあるゆゑ横山とつゞけたり。

【考】こは遠く横折れたる山は、女の眉引の如く、とをゝに匂ひて見ゆればいひかけたり。仲哀紀に譬如美女之睩(まよびき)有向津國ともいへり。よとゆと相通へり。

【石】まよびきとは墨もて書ける眉なり。まよはまゆおといふ義にて、まゆの外に出るものゝまよなり。ゆおをよと約めてまよといへり。共の眉引の如く横ほれる山と續けしなり。

【辭】まよびきの横山はその形似から言うたものか。唯横にかけたのか判然せぬ。

まろこすげ　拾遺十三、蜻蛉

拾遺十三にまろこ菅まろがまろねはと續け、蜻蛉日記にはまろ小菅まろは人すげなしと連ねたり。まろこすげとは葉の圓き小菅なり。下のまろとは麿と書き自らの義、古言に才あるをかどありといひ、才なきをまろといひしより自稱の代名詞に用ひたり。まろこすげは同音を反復して調をなせり。◇『夏山のしげみに生ふる丸小菅まろがまろねは幾夜なるらん』

【留】我非を謙りてまろといふは、才智の人をかど有る人とも、かどかどしといふに對せし語なり。丸寢は一人寢をするにうちつぼまりて臥せる形をいふ。

まをこもの　ふのみ近く萬十四

萬葉十四にふのみ近くてと續けたり。まをこもは眞小薦にて、まもをも接頭辭なるべく、唯席のことなるべし。ふとは薦の編目をいふ。住居の相近くしてといはむ爲に、薦のふといふことを喩へに引きたるなり。◇『まをこものふのみ近くて逢はなくば沖つ眞鴨の歎きぞあがする』

【解】こは眞小薦のなり。さて薦は席なり。和名抄坐臥具に唐韻云、薦席也、和名古毛とあり。ふは結節のことなり。さてその薦は結節の近きものなれば、近きといはむとて、かくはいへるなり。さてふのみ近くてとは節の近きのみにてといふ意なり。

【石】まは賞詞、をは苧、眞苧にて編みたる菰の如くふ(菰の織目)のみ近くてと比したるなり。

みの部

みかしほ　播摩速待紀　榛澤郡甲信紀程

仁德紀に播摩速待と人名に冠らせたり。この枕詞も明かならず。みかしほは大きく美しき鹽といふ義か。みか栗みか蜂など用例あり。さて播磨と續くるは、この國古より製鹽事業進步して良鹽を出したれば、所の名物を以て稱詞となしたるを播摩といふ姓にも係けたるならむ。再按、嚴潮の速きと續けたるか。一說には三日潮張りといふより播磨に轉じたりといへり。尙後考を俟つ。後うつりては榛澤郡に冠けたり。

【厚】私記に師說三日之潮其流急速、故欲レ謂ニ早待一之發語、置ニ此言ニ乎といへり。

【考】こは私記に云々、神代紀にもその後の書にも、潮の狹てふ語の多ければ、速といはんはさることながら、この冠辭の樣は、語を隔てて速きと續けしものとも聞えず。今思ふに三日の潮速と續けしにもあらむ。今も有るごと、公望が此にも三日のの潮速きといへれば、三日の潮はいと上つ代よりも名あることなりけむ。且萬の物のおこるをば發るといへば、潮の起るにもしか云ふべきなり。或人は甕國播摩と續けたるか。物の大なるを甕といふ。みか栗みか蜂の如し。昔播摩よりは堅鹽の大きに塊れるを出せしよりしてかくは續けたるにやといへり。その國つ物を以て冠らせたらば、さるべき辭をも添へいふべきを只みかしほとのみいひては理なし。

【槻】嚴潮（いかしほ）なり。みかといかと相通ふ。播磨國はわきて汐路の早ければ速待の速までかけたる發語なり。

【僻】五美通は伊加に通ふ言なり。厳しき潮の速さと續けたるなり。三日の潮僻事なり。

【冠】二月の祈年祭の祝詞に八束穂乃伊加志穂爾云々、このいかしほは稲穂の盛やかに生足りて見ゆるを、形には彌穂といひ、美るにいかし穂といふ。そのいかしは嚴大の義なり。大御代の榮を茂御世と讃詞するに同じ。さていかとみかと音を通はせていふは、神名の建御雷槌を武甕槌と書き、又甕之速日神と申すをもむかへ見れば、みかといかの音通へるをもて、いかし穂をみかし穂ともいふべく覺ゆ。さて厳穂のはり榛とは、赤木の華をはるといふより、稲穂のはるとはかけたり。

【校正】みかしほは三日潮なり。私記に三日之潮其流急也云々。この枕詞は播磨より連待までに係るなり。はりとは榛、顆汐に水を灌ふるを水をはるといへば、即潮の満潮て又速に乾るよしなり。

【通】みかしほは播磨の地名にて厳潮の義なり。播磨風土記飾磨郡伊和里の條に、大汝神謂弩都比賣曰惡子遁遇風波被太辛苦哉、所以號曰瞋鹽とあり。これにて地名なること明けし。

みかづきの　さやにも萬十一　われて六帖、古十九　おほろげならぬ戀古　俄かで入りにし古今

萬葉十一にはさやにも見えずとも、古今十九にはわれて物思ふとも、古今六帖にはわれては人を思ふとも、又金葉八にはおぼろげならぬ戀とも、俄かで入りにしとも連ねたり。◇古「宵の間に出でて入りぬる三日月のわれてもの思ふ比にもあるかな」六帖「三日月のおぼろげならぬ戀しさにわれてぞ出づる雲の上より」三日月は鎌の如く全月の割れたるやうなれば、あながち又は無理にといふ意なるわれてといふ副詞に係け、又月光のさやかとか朧とかといふより人の姿のさやかに見えずとも、おほろげならぬ戀とも連ねたり。おぼろけならぬとは、容易な

らぬとか並々ならぬとかの意なり。三日月は愛づる程なく隠るるものなるより、一目見るや忽見へ入りたる人はさまにも喩へたり、又萬葉六には月立ちてただ三日月の眉根かき云々とあり。こは人の眉の形を三日月に比したるなり。

【釈】三日月の眉根かき云々、こは初月の形の眉づくりに似たるをいひよせ、さて誰に眉のかゆきは、思ふ人にあふべき祥ぞといふ事の違はずもあるかなといふなり。又われて云々、月の圓き星のかけてかたわれなるを、人のことはりなきをも、今も恥らひもせでするわざを破れてといふにいひかけしなり。

みかはなる　しかすがに　縣居家集

縣居家集にはみかはなるしかすがにと續けたり。しかすがにはそうはいふものの義、三河の國にはしかすがの渡あり。萬葉以下の集に詠まる。しかすがといふ副詞をおこす爲に同音の地名を冠らせて調となす。

みかもなす　二人並びゐ　萬三

萬葉三の長歌に二人並び居と連ねたり。水鴨の如く睦じく夫婦の並び居たるをいふ。

【眼】には鳥の二人並び居といふに等し。水鳥は雌雄並び居るものなれば云ふのみ。水鴨の水は借字にて眞鴨、美言をそへたるなり。

【補考】水鴨とは水に住もていふのみ。又葦邊に遊べば葦鴨ともいふに同じ。鴨は雌雄相離れぬものなれば、男女並居ることにいひかく。

みくさかる　信濃　萬二

萬葉に水鹿刈信濃とあるを、仙覺はみくさかると改めたれど、みすずの訓然るべきか。猶みすず刈るの條を參照すべし。

みくしげの　二上山萬七

萬葉七に二上山に冠らせたり。みくしげとは御櫛笥の義なれば、その蓋といふを、ふたの誓をもてる二上山へかけたり。二上山は大和河内の境上にあり。◇『紀路にこそ妹山ありといへみくしげの二上山もいもこそありけれ』

みけむかふ　木の瓲の宮萬二　淡路の島萬六　味原の宮萬六　南淵山萬九

萬葉二の長歌には木の瓲の宮とも、六には淡路の島とも味原の宮とも、九には南淵山とも連ねたり。◇『御食向ふ南淵山のいはほにはふれるはだれか消えのこりたる』みけむかふは御食向と記したる如く、貴人の食に供ふの義ならむ。よりて葱とも粟とも小鴨とも蜷とも續けしを本にて、その意をもてる地名に轉じ掛けたり。木の上及南淵は大和にて、味原は今の大阪市の中に屬す。

【補】帝王のきこしめすものを御食といふなり。淡路の島の海士ども、御肴とりて日々の貢のものに奉りけるにより、御食もてむかふ淡路といふ心なり。亦浪華の宮にして赤人が詠める長歌に『みけつ國、日々のみつぎと、淡路の野島の蜑のわだの底おきついくりに、あはび玉さはにかつぎて』とも詠めり。この歌にて思へば、難波に向ふ御食つ國とも聞えたり。いづくに限らず、帝王の參りもの奉らむ國は皆御食國とよむべし。又御食向木瓲の宮と續けたり。こは酒がめをば玉だれの小がめなどとよめり。酒がめも御食に奉る物なれば御食向ふこがめと續けたるなるべし。

【匠】みけ向ふは食を備ふる時その食に向ふごとく前、近く有るものを皆かくいふなり。指向ふ意にはいづこにも置くべきか。木瓱といひ味原宮とつづけども食の字に付て意あるべからず。
【考】これに二の意あり。一つには様々に續けたれど、皆御食の机に向ふが如く、直ちに前に迎はる所をいふにや。淡路の島に直向といひ、卷四に夷の國邊に直向ふ淡路を過ぎて云々とよめるは、直路ただ目に見るとよめるが如く聞ゆればなり。今一つは御食に供る物の名に冠らしめたるか。さるときは木瓱は酒の瓱なり。淡路は粟とかかりて飯のよしなり。味原は美味を總べていふか。又味鴨、味魚などの贄の意にてもあるべし。南淵は蜷貝にいひかけしか。或は眞魚の意にやあらむ。
【信】みけむかふきのへ云々、こは區志考に擧げたり。大御饌に供ふる區志といふ意に續く意なり。くしは酒の古名、久志の約め幾なり。むかふは備ふるといふ意に等し。手向のむけに同じ。
【解】考の第二の説によりて考ふるに、木瓱とかかれるは甕といふ意にかかれるか。又は粟の國といふ意にもあるべし。味原とかかれるは、味良といふ意か。ふさふはふとつづまれり。南淵はみの一言にかかりて、みは肉の意なるにや、肉をみといふは、刺肉、作肉などいふ是なり。又御魚菜といふにてもあるべし。
【黑】御食向ふは御食に向ふなり。向は御用向になるなり。御用にあたるなり。きのへに續けたるは酒の瓱にかけたり。

みけつくに　志摩萬六　野島萬三

萬葉六には御食國志摩とも、三食津國野島とも續けたり。大内の供御を奉る國といふ心にて、それぞれの土地に

冠らせたり。

【考】こは何處はあれど、殊に大御食の御贄物奉る國ところに冠らしめていふ。延喜內膳式には紀伊・淡路・近江・若狹を日々の貢の由とせられしかど、昔大和の京の時は、攝津、淡路などは素よりにて、伊勢、志摩よりも殊に奉りしゆゑに、右の如くよめるなるべし。

み心を　吉野萬一　廣田紀　長田紀　安田のをぢ久老集

萬葉一の長歌には吉野國、神功紀には廣田國、長田國などと續けたり。萬葉のは御心を寄すといふを吉野へいひ掛けて枕詞となし、紀のは心廣くとか長くとかいふを攝津の地名に冠らせたるなり。荒木田久老が長歌には安田のをぢと心安しの義より轉じて冠らせたり。

【考】萬葉のは、天武天皇の歌の如く、この吉野をよしと見そなはして御心を慰め給ふてふ意にいひかけたるなり。御心廣田國てふは、神の此所にしづもりまして、遠く廣く見はらし給はんことをいひ、御心長田國とは長く久しくここにまさんことをいへり。顯宗紀に築立柱はこの家長の御心の鎭なり云々てふも皆古の賛稱なり。

【解】こは天皇の大御心よ善とたたへ奉れる謂にて續けたるならむか。さらば寄は余といはんが如くなるべし。

みこもかる　信濃萬二

萬葉二に水薦刈信濃と續けたり。水薦刈信濃は古點にはみこもかるとありしを仙覺はみくさ刈ると改めたれど、契沖は古點によりみこもかると訓めり。信濃は今の埴科郡に大なる田野あり。その野にみこも多く叢生せしを其の人が刈りとるさまの都人に珍しかりければ、そのところの景物を以て枕詞とせしか。眞淵はこれをみするかる

と訓を改めたれば、その後の歌人はみすゞ刈るとよむもの多くなれり。但し新校拾遺にはみこもかる信濃と續きたる歌もあればその起原はいつれにもあれ、今は二つながら擧げたり。尚みすゞ刈るの項を參照せよ。

【匠】水薦刈る信濃い云々。發句をみくさかると訓める仙覺新點は字書に薦作甸切、音箭、草の稠曰薦とあればみくさと點するか。但古點みこも刈るとある上、六帖も別校本も同じ。又新續拾遺に大納言爲定卿の歌にもこの歌を取る、『しひてよも云ふにもよらじみこも刈る信濃の眞弓引かぬ心は』とよまれたれば旁是を合せて古點によるべし。科野には池も澤も有ればその心につくるなるべし。

【考】こは眞篶を刈る野と續けたり。荷田大人のいへらく、水篶は眞すずなり。水は借字、眞と麻はことに通へり。神代紀に使二山雷者、採二五百箇眞阪樹一八十玉籤一、野槌者、採二五百箇野篶八十玉籤一云々。今本はこれも薦に誤りぬ)これによるに、すずてふ小竹をかる野と續けし物なりと。こは古意なり。篶はしのめ竹の類にて、いと小くて色黑き竹なり。これを阿波土佐などの國にては須々といふといへり。東國の山邊にては篶竹をも然いふものもあれど猶別なり。

【苑】みすゞかる云々、みすゞは雪國の山に生ふる小竹なり。

【紹】これは水薦苅信濃と書きて、水草の刈る時にしなへなびくをいふと、誰も說き來りていふかしきことあらぬを、強ひて薦は篶の誤字とし、篶はしぬ竹なれば、みすずかるしなぬとよみ改められしは過ぎたりといふべし。眞薦かる大野河原の水こもりにとよめるを思へば、水薦、眞薦同物にてこそあれ。これ等はを改めんこそ私の甚しきものなり。

【冠】こはみしぬ刈るしぬぬと續く。すゞ小竹(しぬ)刈るにて眞すゞ刈るともいふ。すゞ篠といふ。
【[illegible]】みすゞは寒國の山中に限らずいづれの山にても生ずるものなり。然るに信濃にのみ詠み續くることかは、是は禮記聘義に孚尹旁達者信也とあるに基く。
【一言】みはまと同じ。薦は薦席の時、こもといへるに、假借レ薦(すゞ)、さてこもを刈る沼(ぬ)と續くか。しなぬは信濃なり。
【改】御薦刈野とつゞけたるのみ。神代紀一書に五百箇野薦八十玉籤云々と見ゆ。韻會に薦、草之深厚者云々とありて何となく草の生ひ茂りたるをいへるなり。後世の歌にすゞふく風、すゞわけて、すゞのしのやなどよめるも、もとはたゞ草の事なれど、後には一つの草の名となれること、薄を後に一つの草の名とするが如し。考に薦は篶の誤とて改められしは例の古書を改るの癖なり。
【解】水薦は水は借字にて眞こもといふに同じ。さて信濃は國名の由來は級ある野といふべけれども、枕詞よりのかかりは、裏沼(しなぬ)とうけたるなるべし。しなは日本紀に匿字をしなめとよみたるしなと同音にしてしたと相通へり。裏沼は隱沼といふに同じ。されば眞こもを刈る裏沼といふ心に續けたり。
【石】みすゞは御薦にてすゞの深きをいふ。こは轉用なれば枕詞にあらず。

みさごゐる　磯回萬三　荒磯萬十二　沖萬十一　渚萬十一　諏訪甲信紀程

萬葉三に磯回に、十二に荒磯に、十一には沖に、同卷に渚にと續けたり。こは雎鳩(みさご)居ると實景をいへるにて特に枕詞といふべくもあらず。但し後には實景にあらで磯、沖などの語に冠らしむるときは枕詞と見るべし。甲信紀程には雎鳩居る洲といふより諏訪に掛けたり。◇萬三みさごゐる磯回に生ふる名のり藻の名は告らしてよ親は知る

とも』萬『みさごゐる沖の荒磯によする浪のゆくへも知らず吾が戀ふらくは』萬『みさごゐる渚にゐる舟の漕ぎ出でなばうら戀しけむ後はあひぬとも』

【服】或抄にみさごは水底の砂なりと說けるは大に誤れるなり。みさごといふ鳥は、渚に居て魚を喰ふものゆゑ、渚といはむ爲にみさご居ると冠らせたり。千鳥なく佐保川、蛙なくよしの川てふに同じ。

【諺】これは關雎の雎鳩にしてうをたかをいふなり。

【解】こは雎鳩の集る磯とかかれるなり。雎鳩はよく磯邊に集るものなればいへるなり。

みすゞかる　信濃萬二　篠の井甲信紀程

萬葉二には信濃と續けたり。「水薦刈る信濃の眞弓我が引かばうま人さびて否といはむかも」水薦刈を契沖は古點によりみこもかると訓み、秋成・雅澄等はこれに從ひ、眞淵は篶の誤としてみすゞかると改め、木村正辭は薦の字もすゞと訓むべきよしを委しく論ぜり。みすゞかると訓むを正しとするか。みすゞはすゞ竹ともいふ。彼國に昔多かりしよりそを刈り取る光景を擧げて枕とせるもの。猶みこもかるの條を參照せよ。

【諺】薦は箭の字と通ひて箆竹(のだけ)をいふなり。故に眞弓といふに續けたるか。箆の大なるを篶といふ。即みすゞなり。笑に作るべし。

【美】考に薦を篶に改めて云々、須々といふ。正辭云、薦字このままにてスヾと訓むべし。神代紀に野薦をヌヌメと訓るを證とすべし。これを篶に改むるはわろし。其說は篶字は古くはなき文字にて五音篇海といふものに始めて見えて、篶は黑竹なりとあり。須々は茂生の小竹なるが以て茂草草稠などと書ける薦字を借て充たるものなれ

【新】みすゞのみは接頭語、篶は竹類の禾本で、しのべ竹ともいふ、山地に多い、小さな色の黒い竹である。又すゞ竹ともいふ。山國信濃には多く出て都へ獻ることがあつたのであらう。

みさけぶや　猿橋

甲信紀程には甲斐の猿橋にかけたり。猿の三聲叫ぶと詩の句よりつゞけたるなり。

みちしばの　おどろの髮小大君集

小大君集に『道芝のおどろの髮にならされてうつれる香こそ草枕なれ』とあり。ここにみちしばとは狼尾草に擬らす、道の邊に生ひたる草をいふならむ。その長けたるは荊棘の如く葉の亂りて繁りたれば、蓬々たる髮に比していふ。

【貂】こは路傍の荊棘を老いて髮のかれ亂るるにかけたり。怪しき香のすればくさ枕とはいふなり。

みちのくの　來まほしく拾十四　思ひしのぶ金八　いはで忍ぶ新古今十八

拾遺十四にはこまほしくと續け、金葉八には思ひしのぶとも、新古今十八にはいはで忍ぶとも連ねたり。◇拾『逢ふことのかた伺したる陸奥のこまほしくのみ思ほゆるかな』金『みちのくの思ひしのぶにありながら心にかかるあふの松原』新古今『みちのくのいはで忍ぶはぞえしらぬかき盡してよ壺の石文』。陸奥には岩手信夫等の里あれば言はで忍ぶに地名を掛け、又かの國より古來名馬を出せるを以て、陸奥の駒といふを來まほしと轉じたり。來まのまはまくに同じ。續貂には古今十四の『陸奥のしのぶもぢずり誰ゆゑに』の歌を舉げたれど、そは枕詞にあらず。石上枕詞例には萬葉七の『みちのくの安達たらまゆみ』と續けたるを舉げたれど、こは地名を連ねたるにて

枕詞にあらず。

【石】おだたらは仇生あといふ義。れあをらと約めてしかいへり。仇生顯るる所ぞといふ義なり。さるを陸奥にあだたらといふ地あるが故に陸奥のとおきて續けしなり。

みづかきの　久しき萬四、十一　幾世雪玉集

萬葉四及十一には久しき時ゆと續け、又金葉十には、「瑞垣の杜をうつす宿なれば月見むことぞ久しかるべき」と見え、三條西公條の集には世々とも、雪玉集には幾世とも續けたり。瑞垣とは玉垣と同じく御垣を賞めていふ義にて、神社の圍りの垣をいふ。いづれの社にてもいふべけれど、大和の布留の社は崇神帝の頃、その御垣の久しきを經たるより、久しといはむ爲の枕詞となせり。されば萬葉四に「袖ふる山の瑞垣の久しき時ゆ」とあるが如にて、世々とも幾世ともいふは、それよりうつれるなり。金葉集のは瑞垣を直に神社の義とし、尚下に久しと續語の如く置きたるなり。崇神天皇の宮を磯城の瑞籬宮といふは、宮城の四圍を神宮の垣の如くに作られしよりいふか。みづの義たる若々しき木といふ說と嚴めしきといふ說と茂りたる森などいふ說とあり。嚴の義なるべきか。

◇萬四『をとめらが袖布留山の瑞籬の久しき時ゆ思ひき吾は』　公條集『九重にめぐりて花をみづ垣の世々のかざしと匂ふ春かな』　雪玉集『みづ垣のいく世かすめる乙女子が袖ふる川の音たえずして』　夫木『みづ垣のかげにぞすめる貴船川久しくすめる神の心は』　夫木のは枕詞にあらねども下に久しとおきたるは金葉集の例に同じ。

【補】水垣とは神社の瑞垣なり。神は太古より結ひて後久しければ久しき世よりといふなり。

【標】舊事本紀を案ずるに、磯城瑞垣宮天皇御世に布留大神の社を大倭國山邊郡石上邑に移し祀て、天璽瑞の寶

同じく其れに緘めて號二石上大神一以爲二國家一爲二氏神一と云々、然れば布留の社は瑞籬の宮の御宇にたてられて、わが國にては神社の始とす。よつて布留の社はふるき事に別してよめり。此故に久しきことをばみづ垣の御代（崇神天皇）を申すなり。布留の神社の神垣を以て、皇后の瑞垣の宮に相兼ねて、みづかきの久しき世とはよめるなり。

【匠】水垣の久時。かく續くる故は神を齋ふ處に瑞籬はする物なれば、神代よりといふ意なり。

【考】萬十三に『楉垣の久しき時ゆ戀すればあが帶ゆるぶ朝よひ毎に』とあり。崇神天皇の磯城瑞籬宮は上つ代の中にも特に名高く聞え來て、いと久しき昔の御代のことなれば、このよみ人の時には、甚久しき例にいひけむ。故にかくも冠らせたるならむ。後世には奈良宮をふりて久しき例とするが如し。みづてふ語は先は草木の若くうつくしく榮ゆるをいふより、萬の物を賞稱へてみづ云々とはいひけらし。さてこれに依るに、崇神の御時は、まだ萬の事かりそめの如くなりければ、みづみづしき若木などして籬せさせ給ふことの有りつらんをほめ稱へて宮の名とせられしなるべし。卽この詠人もさる意を得て楉垣とは書きけむかし。……（中略）……又卷四に云々、こはこの神の宮はた久しき時に齋ひ初められしなれば、久しき例にいはんも理あり。又右の歌に打任せて、楉垣云々といひしに同じ詞なるを思ふに、これは古同じ天皇のみづ垣の宮をあげて久しき例にいふこと、いと早くよりありしをもて、借り用ひて振山のみづがきとはいひ下しつらむとも覺ゆ。

【精】崇神天皇の坐す師木水垣宮は、いと上つ代にてめでたく、天皇も長壽にましければ續くならん。

【傳】廿三萬葉十一に云々、こは石上振社はいと上代よりの神社にて、その水垣は久しき世々を經たる故に久しの

枕詞にせしなり。かくて後は振山といはでただ水垣の久しとのみよむは右の歌に重ねて沓けるなり。もしこの宮の號(崇神天皇)につきていはば、水垣の宮のといはでは言足らず、水垣とのみにては宮の號にはなりがたかるべし。

【鐘】この枕詞の續けは元より磯城にも石上にも拘るべきにあらず。上古は瑞籬と云ひしは直に神社の森を指して云つれば、後墨江の松・三輪の杉などを久しき物に云ひ習ひたると同じく、何れの社もその御諸(みもろ)は即神にて、それにもまして久しき物も又あらざりければ、そを瑞籬と云て久しとはつづけ習はしたるならん。

【解】水垣は、水は美詞にて神社の御垣をほめていへり。神代紀にみつのみあらかとあるみづに同じ。大方の意はまづ契沖の説の如し。但し神社の始とすといへるも、皇居の瑞籬の宮に相兼ねたりといへるも共に惡し。ただ布留の神社の美豆垣の世にふりたる如く久しき時といふなり。

【黒】貢嚴垣(みいつがき)なり。樹木の生ひ茂りたるを神のみいつ垣といへるなり。それは久しきものなればかくつづけたり。

【折】みづ〳〵した青い若木を以て結ふた籬である。そんな垣根に靈を作りて擬はした習慣から、瑞(みづ)、久と聯想したのではないか。或は立木の垣根は他の垣と違うて朽ち壞れることがない處から久しき時を現したものか。

みつぎつむ　大藏山 拾十

拾遺十に大藏山に冠らせたり。諸國より貢する貢は宮城内の大藏に積むを以てなり。◇「貢つむ大藏山はときはにて色もかはらず萬世や經む」

みづくきの　水城 萬六　岡 萬七、古今　行方も知らぬ 新古今八　流れて 同

萬葉六には水莖の水城の上とも、同七には岡の湊とも、十には岡の木の葉とも、同の岡邊とも、十二には岡のく

ず並とも連ね、古今二十には岡の館とも、新古今八には行方も知らぬ昔とも、流れてとまるとも續けたり。◇萬「ますらをと思へる我や水莖の水城の上に淚のごはむ」萬「秋風の日にけにふけば水莖の岡の木の葉も色づきにけり」新古今「尋ねても跡はかなくて水莖の行方も知らぬ昔なりけり」「かきとむる言の葉のみぞ水莖の流れてとまる形見なりける」水城とは水を湛へて敵を防ぐやうに設けたる城をいふ。その跡は今も筑前太宰府附近にあり。みづぐきとは瑞莖にて、水城と連ねたるは、同音を重ねて調を整へむ爲に置けるなり。岡と續けたるは、瑞莖の若といふを類音のをかに轉じたりといへり。後の世には水莖のと書し筆跡の義となせり。よりて單に跡ともかき絶えてとも、又水といふより行方も知らぬとも、流れてとまる形見とも緣によりて連ねたり。又荒木田久老の長歌には岡といふより岡田の吾兒と人名に連ねたり。

【管】水くきの水城の上、水くきとは水の長く入りこみたるところをいふ。水城は天智天皇三年於二筑紫一築二大堤一貯レ水名曰二水城一と云々。

【補】一に水莖の岡と續きたる水莖は、皆岡の枕詞にして地名にあらず。然るを昔より枕詞なることを知れる人なくして、或は筑前、或は近江の地名と心得つるは、ひがことなり。水莖はみづ〳〵しき莖といふことにて草木の莖なり。さてくきといへば、即木のことにも草のことにもたれり。木神を久々能智といふにて心得べし。さて岡と續くるは、わななく、をののく、わかづる、をこづる、たわやめ、たをやめ、など多き中に、神樂の採物歌に、天にますとよ岡姬のとあるを取りて、源氏物語の乙女の卷には、天にますとよわか姬とよめる、これ正しく岡と若と通ふ例なり。さればみづ〳〵しき木の稚にしてふ意にてみづくきの岡とは續くるなり。又萬卷六に水城と續き

たるは頓てみづ〳〵しき葉のみづ木と重ねたるなり。又古今集にみづぐきの岡の屋がたとよめるは、岡屋縣にて、和名抄に山城國宇治郡岡屋乎加乃也とある所なり。後に岡屋關白と申しがおはせしもこの地名なり。縣をあがたといふは、山縣、片縣などの如し。

みつ栗の 中記 那賀萬九 中務成章集 中臣のぬし蒹葭集 中野甲信紀程 中山道同

應神記にはその中つ土とも中つ枝とも連ね、萬葉九には那賀に向へるとも、中旬すぎて來ずとも續けたり。栗の刺皮一つの中には子三つ入れるが常なれば中と掛け、中といふより、常陸の那賀といふ地名にも、月の半ばの意にも續けたり。富士谷成章家集には中の務と續け、蒹葭集には中臣のぬしとかけ、甲信紀程には中野又中山道に冠らせたり。◇萬「三栗の那賀に向へる曝井の絶えず通はむそこに妻もが」萬「松かへりしひにてあれや三栗の中(旬)すぎて來ず待つといへや子」

【燭】なかといふ詞設けむとて、三つ栗のと置きたり。栗はいがの中に多くは三つづつ籠りて中なるものなり。三つ並ぶものは中を取る故にいふ。

【考】栗は一つの刺皮の内に子三つあり。さて三つ有るものは左右と中とあるゆゑに中てふ語に冠らせつ。

【石】三栗の如く中に向ひたると比したるなり。

みつしほの 流れひる間古十三 からくて拾九 からかの島續後撰

古今十三には流れ干る間をと連ね、拾遺の長歌にはよにはからくてとも、續後撰にはからかの島とも續けたり。滿汐の流れ干るといふを晝に轉じ、汐の辛くといふを、身の辛苦によせ、又からの音よりからかの島にうつし續け

たり。からがの島はいづこなるか、若くは唐荷の島を誤りて詠めるにや。◇古『滿汐の流れ晝間をあひがたみ積馬の浦によるをこそ待て』續後拾『滿汐のからがの島に玉藻かるあまらも見えぬ梅田の頃』

【參】拾遺長歌に、よにはからくて、隔句なり。潮は味のいとからければ身の辛苦によせたり。滿字に心なしただ汐といふが如し。

みづたでを　みづたて　穗積萬十三

萬葉十三の長歌には水蓼穗積に至りてと見え、同十六には八穗蓼を穗積の朝臣と續けたり。水蓼の穗を摘むといふを穗積といふ地名へうつしたり。水蓼は川蓼のことなり。

【仙】穗積といはんとてみづたでをと置けり。

【契】水蓼はもとより水に生ふるもあれど、ここは稚蓼てふ意ならん。稚穗を摘むものなればなり。穗積は和名抄に攝津島下郡に同名見えたれど、ここは大和のなり。

【[illegible]】みづたては馬蓼なり一に水荳といふ。水といふ字あれどみすずの水と同じく、蓼の大なるをいふならむ。

【[illegible]】みづたて四言によむ。水蓼は穗をつみとりて膳具に用ふるものなれば、穗を摘むといふ心に穗積にいひかけたり。

【石】水蓼穗摘といふ義なるを、枕詞なれば、我方に奪ひて水蓼をといへり。

水たまる　池田の朝臣萬十六

萬葉十六に池田の朝臣と續けたり。池には水溜るものなれば水溜る池といふより、轉じて池田といふ人名へ係け

たり。◇「佛つくるまそほし足らずば水たまる池田のあそが鼻の上をほれ」
【考】應神記にみづたまるよさみの池云々。又萬十六に云々、こは流れ出でぬ池水なればいふのみ。依網池は河内丹比郡にあり。
【石】よさみの池と續けたるは、轉用なれば枕にあらず。

水つたふ　磯の浦回萬二

萬葉二に水傳磯の浦回と續けたるを古くはみづづてのと訓したるを、契沖みづつたふと改めたり。人の水にそひてゆくといふ說と水の礒をつたひゆくといふ說とあり。後說宜しきか。「水傳ふ礒の浦回の石つゝじもく咲く道をまたも見むかも」
【匠】磯は水にそひて傳ひゆく意なり。
【考】打寄せたる波は、磯を傳ひて流るゝものなれば、萬十一に荒磯こえ、ほかゆく波の外心とよめるさまなるべし。
【折】水つたふいそは磯でなく石であらう。川などの上を石並傳ひに渡るのを、水傳ふ石といつたので枕詞ではなからう。

水鳥の　浮寢萬七　立たむ裝萬十四　立ちの急ぎ萬二十　憂きて經ぬ拾十二
はかなき跡後十二　羽易の山續後拾八　青葉の山萬八　鴨萬八　賀茂の神山新拾遺

萬葉七には浮寢や爲べきとも、十四には立たむよそひとも、二十には立ちの急ぎとも、續古今十七には世に立つ。

跡とも、後撰十二には憂きて寢ねらむとも、はかなき跡とも、續後撰八には羽易の山とも、又萬葉八には青葉の山とも續ね、又新拾遺には加茂の神山と續けたり。村田春海の長歌には賀茂の宮と續けたり。水鳥はいふまでもなく、水上に浮ぶものなれば、浮きを憂きとも、憂き寢とも、果取なき跡とも續け、その飛び立つといふを、人の出立にうつし、或は世間に獨立する意に轉じ、又羽を易へるといふを羽易の山にいひかけ、青羽といふを若狹の青葉山にかけたり。これらは水鳥にも限らざるなり。又萬葉には水鳥の鴨と續けたるを轉じて山城の加茂山と連ねたり。◎萬「波高しいかに楫取水鳥のうきねやすべきなほや漕ぐべき」萬「水鳥のたたむ裝にいものらに物言はず來にて思ひかねつも」・萬「水鳥のたちの急ぎに父母にものはず來にて今ぞ悔しき」後「波の上におとやは見ゆる水鳥のうきてへぬらむ年はとしかは」後「水鳥のはかなきあとに年を經て通ふばかりのえにこそありけれ」續後撰「結びかねうきねにたえぬ水鳥の羽易の山も霜やおくらむ」萬「秋の露はうつしなりけり水鳥の青羽の山の色づく見れば」萬「水鳥の鴨の羽色の青馬をけふ見る人は限なしといふ」新拾遺「水鳥の賀茂の神山きえくれて松の青葉も雪ふりにけり」

【考】鳥の青羽を山の青葉にいひかけたり。この青葉の山は地名にあらで、木繁くて青き山をいへり。

【眼】萬七に云々、水鳥は浮きてぬるものゆゑ冠らせしにて、萬二十には旅立の急しきをいへり。

【餘考】萬二十に云々、こは水鳥の飛び立つは物に驚き、さなくとも忙しく見ゆるものなれば、防人の家を立出づる時の急といふ冠辭におく。

水 の 泡 の　消え古十五、拾十一　うたかた後九

古今十五には消えて憂き身と續け、拾遺十一には消えかへるとも、後撰九にはうたかた人に逢はで消えぬやと續けたり。水の泡は消え易きものなれば、果敢なき命の消ゆるにいひかく。又泡は中空なるより一名をうたかたといふ。それより轉じては假初にといふ副詞をもうたかたといへり。◇古「水の泡の消えてうき身といひながら流れても倚賴まるるかな」　拾「あな悲しはつかに人をみづの泡の消えかへるとも知らせてしかな」　後「思川たえず流るる水の泡のうたかた人にあはできえめや」　後撰のは水の泡の空形（うたかた）といふを、どうしてまあといふ意の同音の副詞に連ねたるなり。拾遺のは上句にはつかに人を水の泡のとあれば水に見といふことを兼ねたり。

【考】このうたかたは本沫なれば、しばしばかりの意に取るな、そのもとに付て水の沫のとは冠らせたり。さてうたかたのことは、和名抄に、沫雨、雨滴土沫若二覆盆一（和名宇太加多）ふにて水の上に浮ぶ大きなる沫をいふ。そは暫しの程に消ゆるものなれば、萬葉には危くかりそめなる意、しばしの程なる意、定めなくはかなき意などにも取りてよめり。

【絡】拾遺に云々、水を見つにかけたる、例の清濁を言はで、詞にのみ掛くることと上にいへり。消えかへるは消入るといふばかりの義にて、かへるはその比の平話にもあるべし。

【右】うたかた云々、物事業の上、形有りながら、末空しかるべきものを空形といふ。

みづのもり　見つる後十四

後撰十四に「逢ふことを淀にありてふみづの森つらしと人を見つる頃かな」とあり。見つると句を隔て同音を兼ねて詞となせり。

【貂】水の杜、山城久世郡に水主の郷ありて、水主の神社も神名帳に見ゆ。又水度の神社も見えたり。この社のある森なるべし。水の杜の見つるとかけ、其處歌にみづの杜もるこの頃とあるは、森を漏るにかけたり。

みつほなす　枯れる身萬二下

萬葉二十にかれる身と比したり。みつぼは水粒なり。字鏡に濹涙をみつぼと訓めり。枯れる身とははかなき身をいふ。水滴の消え易きが如くと比したるなり。◇萬『みつぼなす假れる身ぞとは知れれども猶しねがひつ千歳の命を』

【管】みつほは水粒なり。うたかたといふに同じ。かれるとは水の涸くによせたり。

【槻落】みづほなすは如水火にて、人の世にある、水の流れて止らぬが如く、火の燃ゆるかと見れば、忽に消ゆる如く假りなる身ぞとなり。

【貂】是は水の沫の圓やかなる形したるをいへど、定にはうたかたといふより、小やかなる水沫の消え易しといふに似たるかりの命なれど、只々末長からむことを願ふぞと云ふなり。釋氏の語につきて枯れたる身とはいふなり。

【石】瑞穗なり。刈るといふ義を假りに轉せたり。

みづみづし　久米の子記　久米の若子萬三　瑞穗國岡舍集

神武記にはみづみづし久米の子とも、萬葉三には久米の若子とも連ねたり。『みづ〳〵し久米の若子がい觸りけむ礒の草根のかれまくも惜し』久米の子とは神武天皇に隨ひて軍功ありし人なり。みつ〳〵とは眼のまろ〳〵の義、

又見つ〳〵の義といふはいかゞ、又才德勇威あるをいふとの說もあれど、若く壯きかんなるを賞むる詞なるべし。栗田土滿はみづ〳〵し瑞穗の國と續けたり。

【仙】みづ〳〵しとはおさな〳〵しといふ詞なり。

【厚】大久米命の目の裂けるが、にらまへたるやうなれば、大に見る意に見つ見つしといふなるべし。この二つのつ。は天つ國などのつ。の如く助けたる字にて、しゝ文字はみつ〳〵しきといふを略せる意なるべきか。

【考】こは若く健かなる人を褒めて、みづ〳〵しといひて、意はみづ垣のみづに同じ。若きをいふは、即久米の若子といへるにても知れ。今しも萬の物の若くうつくしきをみつみつしとはいふめり。

【槻】今の言にみづみづ若き、みづみづ肥えたりなどいふはもと滿光へる意なれば上古は都をすみていひけん。濁れるは後の音便なり。

【詩】詩經の衞風に其葉沃若とある沃若は潤澤の貌といへり。之により沃若をみつみつしと用ふるにや。

【傳】十九みつみつしは滿々しにて、圓々しといはむが如し。しは嬉し悲しなどのしなり。みづとまととは本同言にて音通へり。こは目の圓に大きなる貌をいへるにて、久米の枕詞なり。書紀釋にも滿々也といへれども、それは言光滿也と註せれば、八十建が大室內に滿る意にとれるなり。非なり。又見つ見つをといふことのあるべきかは。又師はつ。を濁りてみづ垣などのみづとして若く健かなる人をほめて云へり。されど、このみつみつしは記に皆都字をのみ書きて必淸音なるをや。又余思ふに書紀顯宗紀に不才をあつなしと訓めり。續紀の宣命にも才をあと書ける多ければ、これもみつなしにて、みつは才の古言か。然らばこのみつみつしも才々しにて、且

つきの才々しきをいふにやと思へども、尙上にいへる意なるべし。大久米命を　利目と下文にありて、目の間に大きにありし故に久米てふ名を負ひたまへる、その久米は久流目(くるめ)の約りたる言なり。

【稜言】御稜威御稜威しき來目の子等之にて、其來目は皇軍の業をいふ故に御稜威とは負けるなり。道臣命其來目部を帥給へば大に伴ふ意を以て大伴とたたへ、又主掌給ふ故を以て大來目主命とも申しつるなり。來目部は組部の義なること難語考中卷に辨へたり。

【冠】みつは顯宗紀に不才、仁德紀に不佞とあるを美都那斯(みつなし)と訓みたるみつにて、才德勇威あるをいふ。しはすがすがし、たづたづし、ゆゆし、ををしなどのしに同じ。凡て久米直等の祖代々武事もて仕奉ひ、その勇威(いさ)ありしから、かく續けたり。

【石】こは久米部の臣等の若く壯りなるを賞てうたひたるなれば實詞なり。

みてぐらを　奈良萬十三

萬葉十三に奈良にかけたり。みてぐらは神に奉る幣帛なり。そは神の御前に並ぶるより、ならの音をうつして大和の奈良へ續けたるならむ。

【仙】みてぐらはなら〳〵と諷はるれば奈良といはんとて置けり。

【服】みてぐらは幣帛なり。これを並ぶるといふ語をもて冠辭をととのへたり。幣帛は上古は和細布(にぎたへ)・麁細布に限らず疊みてそのまま神前に諸人置き並べて奉ることなり。さるに仍てぬさ置くこと數多よめり。加茂大人說いて曰はく、こは奉幣使の奈良より神南備山吉野をかけて打越ゆるさまなり。幣帛を持ちてといふべきを略きて、

帛叫とばかりいひつと見ゆるとなり。高保思ふに奉幣使との說は尤なり。帛叫てふはいづれにも冠辭と聞くべきなり。奉幣使の事なれば、幸に帛叫並といふ語をもてしらべたるなり。

【石】みてぐらは御手座にて神の手にいます間の座といふ義なり。續けたる義知りがたし。

みとらしの　梓弓萬一

萬葉一の長歌に御執の梓弓とあるを考には冠辭としたり。されどこは天皇の大御手に取らし給ふ梓弓といふ續にて枕詞となさゞるをよしとす。

【僻】一古本にみたらしのとよめり。古語にひとりをひたりともいふにて、とらし・たらし同じことなり。たらしはならしと云ふ故實の例證多し。手にならす物、弓に限らねども弓には鳴弦とて邪氣を退け惡靈をおどすわざあり云々。

【考】こは天皇の御手にとらせ給ふ弓なれば、御執しの梓の弓といへり。劍を御佩のつるぎといへる類なり。

【解】凡て弓を御とらし、劍をみはかしといふは、衣を御著(みけし)、帶を垂といふ類なり。

みどり子の　夜泣をし萬十二　たゝむ日拾遺

萬葉十二には夜泣をしつつと續たり。みどり子とは嬰兒即稚兒をいふ。子供はよく夜泣をするものなれば、その如くと比したるなり。◇萬「若子に戀ふとにしあらしみどり子の夜泣をしつついねがてぬくえし」又拾遺集には立たむ日なくとも連ねたり。嬰兒は物によりて立つものなれば、月日の立つにうつしていへり。◇「數ふことの片ゐざりするみどり子の立たん日にも逢はじとやする」

みながとり　安房萬九

萬葉に水長鳥安房と續きたるを燭明にはみながどりとよみて、あげたれど、こはしながとりとよむべくその條下に說けり。

みなしたふ　魚紀

繼體紀に『磐余の池のみなしたふうをも上にでてなげく』とあり。こは魚は水中を通るものなるより水の下經る魚と續けたり。

【厚】水下經、魚も上に出て歎くなり。魚の歎くとは浮び出て息を吐くを宣ふなり。是は結局『誰れやし人もうへにでてなげく』を宣はん爲なり。

【積考】こはみな底ふといふが如く、水下經魚と續きたるなり。實は水下を經行くはもとよりにて、又水の上に浮び出づる時もあるを以て、上にあらはれて歎くといはむとて、上にこの辭を設けたるなり

みなせがはゝみなし川　下ゆ我やす萬四　絕ゆ萬十一

萬葉四には下ゆ我瘦すとも、十一には絕ゆちふことをとも、古今十二下に流れて戀はしぬとも連ねたり。水無瀨川は山城の山崎のほとりにも其他にもあり。河床の模様により水の涌きて川面に流れぬこと常なれば、水の下を流るといふを心のうちに思に沈むに比し、又水の絕ゆといふを交情の絕ゆるに係けたり。◇萬『戀にもぞ人は死にする水無瀨川下ゆ我瘦す月に日にけに』萬『こととくは中は淀ませ水無瀨川たゆちふことをありこすなゆめ』この他萬葉には『水無瀨川ありても水は行くちふものを』とも、古今十二には『みなせ川ありてゆく水なくてこそ』

と續けたるは、有ると無きとを對比したるにて、尋常の枕詞にあらず。

【勝】古に水無瀨川といひしは一の川の名にあらず。いづれにもあれ、水の無き川をいふものにて、あるは砂の下を水は通りて、うはべに水なき川をもいへり。云々。

【三】水無瀨川は砂川にて、水砂裏に沈むが故に上に流ると見えねど砂底に流れ行く水あるが故に、比して下に通ひて、又ありて行く水と續けしなり。ありて行く水は、うらにありて行く水のなくばこそといふなり。

みなそこふ　をみの乙女紀

仁德紀にはをみの乙女に係けたり。魚は水底をもぐりゆくものなれば、水底經大身魚といふ義より[illegible]の臣の少女にかけたりといへり。明かならず。この句下に誰養はむとあれば、或は皆ぞ噬ふ臣の小女といふにて枕詞にあらざるにやとも考へらる。尙後考をまつ。

【厚】水底經、臣孃女なり。枕詞の意は、をみのをとあと通すればあみといふ鳥の名なり。又往古はやがてなみとも申たるにても侍るべければ、水の下に潜て經る、をみとつづけたまへるか。

【考】こは水の底を經通ふ魚てふを臣積の庭にいひかけさせ給へり。顯宗紀にみなしたふ魚も上にてて歎くとよみ、武烈紀にみなそそぐ鮪若子てふなどもて知らる。をみのをとめとは臣積の少女てふことにて、即ち春日[illegible]媛をさし給へり。

【古】水底に生ふる魚といふ義なるを、うを略きてをみと續けたりと聞ゆれど、臣と轉きては假字違へり。いかなることにか。

【通】臣の孃女なり、上句より續は水底經大身之魚の意にて、その大身を臣にいひかけて轉じたるなり。

みなそゝぐ　をみの少女記　鮪の若子紀　魚町鈴屋集

雄略記にはをみの少女とも、武烈紀には鮪の若子とも連ねたり。そそぐは諸說あれども、水を濯ぬる意なるべし。魚の驚くとき又はその他の時に於ても、水を撥ぬる習あるより、水はぬる魚とか、鮪とかいふを、鮪といふ人の名又をの音をもてる苧績の少女にかけたるなるべし。本居宣長の長歌には魚町と續けたり。

【考】この續みなそこふに同じ。さてみなそそぐとはあれど、實は水の中にある魚なるをかくはよみ給へり。

【傳】四十二みなそそぐは水灌にて、次句のをに係れる枕詞なり。をと續くは魚の意なり。そも〳〵魚はうをなるを、をと云ふは、上のそそぐのくの韻うにて、長く引きて詠へば、くうおとなる、そのうおはをと切れは、自ら魚と聞ゆるなり。おみのをとめは契沖が臣之孃子なりといへる宜し。書紀武烈卷歌、又天智卷歌に臣の子、萬葉三に臣之壯士などある類の稱なり。師云、遊字は游の誤にて、麻績の少女なり。女といふも麻續女といふことなりと云はれたるは非なり。或人はみなそそぐは言を隔て處女のをへかかれるといひ、或は大海之魚と續くといへる皆惡し。

【通】或人は海之魚と係る枕詞なりといへり。それ安らかに聞えたれど、さらば宇彌能烏とこそ云べけれ。尙按るに、於瀰能烏は大身之魚の方なるべし。記に意布袁余志斯毘都久阿麻余とありて鮪を大魚と云れば大身の魚とも云けらし。今鮪の品類を大魚と稱へり。然れば大身の魚とは古昔鮪を指して云ける名と見るべし。

みなつきの　名越の山六帖

古今六帖に名越(なごし)の山に冠らせたり。みなつきは水無月にて六月のことなり。古には六月晦日に川の邊に出て身の罪科をはらふこと例となれり。これを和(なご)し祓といふより、同音を頭にもてる名越山に冠らせたるなり。◇『みな月のなごしの山の呼子鳥おほぬさにのみ聲のきこゆる』

【貂】六月晦日には、身の罪科をはらふわざするを、みな月ばらひ、又なごしのはらひ、大祓ともいふをもて、なごしの山にかけしなり。此事天智の大津宮に始まりしなり。

みなのわた　か黒き萬五、十三

萬五及十三にはか黒き君と續け、同七及十五にはか黒き髪と連ねたり。か黒のかは發語なり。蜷の貝の腸は至りて黒きより、黒髪又は色黒の人に比せしなり。◇『かもじもの浮寢をすれば蜷腸かぐろき髪に露ぞおきける』

【匠】或說に蜷といふ貝の腸は黑き物なれば黒しと云はむとては蜷腸と置くと云へり。和名抄云、崔禹錫食經云、河貝子、今按、みなはいと小さき貝にて腸など黒しとも白しとも取出て云ふばかりの物にあらず。蜷腸とは假て書て鮭の背腸(みなわた)なり。黒き物なればかくは續くるなり。

【考】みなのわたは和名抄に年魚背腸(美奈和多)とあるものならんと或人のいへり。同抄に背腸の背を背に誤りて美奈腸といふかといへれど、この事は奈良朝よりも前よりいへりと見ゆれば、字につきたる說にはあらじ。今越後國より出る年魚背腸の鹽を見るに、いと赤きが極めて黒く見ゆるものなれば、是をもいひつべきや。又卷十三その外にも蜷腸と書るにつかば、和名抄に河貝子(美奈)殼上黒、小蝸螺似、人身ニ著出てふものにて、腸もいと黒ければ髪にたとへたるか。猶覺束なし。香黒の香は借字にて且發語なり。萬葉に香青なる、香副にかが香ふて

ん、賜物にかよりあひ、物語にかよれるなどいへるかは皆同じ。

【解】契沖は和名抄に本朝式に云、年魚氷頭背腸ムヽなどあるを引く。みなのわたは蜷のみなわたの事なるべし。さけのわたは背のかたに在りて黑きものなりと聞けば、今みなのと、のの文字は濁りたれど、是にやと思ひ侍り。蜷といふ貝はそれがわたなどいふ程もなき小貝なりといへり。今按に背腸を奈美和多といふはもしは身之腸(みなわた)の義にはあらざるか。さらずとも背腸を美奈乃腸と乃の言を添へていへりとは思はれず。又小貝なりとて、あながちに取り出づべきにあらずとせむもかたよりたるやうなり。されば蜷の方をよしとせむか。

【石】貝の腸はいと黑きものなるゆゑに比して黑髪と續けしなり。かは冠詞にて光輝はかり無しといふ義なり。

【疏解云】これは水に蜷の腸ゐてふを香黑に云ひ移したるにて、これを美那といふは水上、水激、水沫など下へ續くるときの語格なり。又綿は假字にて、水のわだかまり湛へたる所をいふ。大和田といふ地名も皆さる處にて、蜷は字書に蟲形屈曲するなりとある其の意にて、水の深く淀みて浪なども立たぬは潛みかくるといふべきなり。

みなれさを　見馴れぬ人拾十一　指して來れ新勅十二　さすが見馴れぬ新古今十九

緑野。郡甲信紀程

拾遺十一に見馴れぬ人と續けたり。みなれさをとは水馴棹にて、筏師などの水中に立て筏をあやつる竿をいふ。見馴れぬといふ詞を設けむとて同音の詞を置けるなり。新勅選十二には指して來れどもと續け、棹さすといふより、目指して來ると轉じたるなり。又新古今十九にはさすが見馴れぬと續け、又甲信紀程にはみの音より緑野郡にかけたり。◇拾「大井川下す筏のみなれ棹見馴れぬ人も戀しかりけり」新勅「筏おろす仙川川のみなれ棹さして

逢れども逢はぬ君かな」―「熊野川下すはやせのみなれ棹さすがみなれぬ浪の通路」

みなわなす 脆き命萬十一

萬葉五にもろき命と連ねたり。のあの約な、水泡の如くと比したるなり。◇「水泡なす脆き命も栲縄の千尋にもがとねがひくらしつ」

【續考】水の沫のづを略きのあをつゞむればなとなるをもて、みなわと訓む。なすは例の如くの意にて、水の沫の如くもろき命といふなり。

みなわまく 眞淵菅根集

菅根集には賀茂の眞淵に冠するにみなわまくを以てせり。淵には水の泡のうづまくものなれば水泡捲く淵と續けたるなり。

みはかしを 劍の池萬十三

萬葉十三の長歌に劍の池と續けたり。みはかしとは御佩刀をいふ。さて佩刀には劍を用ひたれば、劍といふ音をもてる大和高市郡の池名に冠らせしなり。

【匠】日本紀云、御刀此云二彌波迦志一、又劍をみはかしとよめり。用を以て體に名づけ、をはのと同韻にて通すれば御佩の劍の池といふに同じ。

【考】みはかしよ劍といふべきを、音の通へば乎とよめるなるべし。與といふべきを乎といへるも古語に例あり。（又この乎は與の字を誤れるにも有るべし。）景行紀に御刀媛（御刀此云二彌波迦志一）と訓めり。後にはみはかせ

といへど、みはかしと訓むぞ古意なる。

【燈】こは御佩（みはかし）をこそ劍とは申さめなどいふ程の意に、乎の詞をもてよみたるか。

【打】御佩は劍といふ義なるを、をといふは其の義を我方に奪ひていへるなり。をと續ひたる枕詞はすべて然り。

みふゆつき　春萬十七

萬葉十七にみふゆつき春は來れどもと續けたり。こは春過ぎて夏來るらしと同じ類にて、三冬盡きて春は來るといへる續なれば、枕詞となすべからず。

耳　高　の　青菅山萬

代匠記精撰本に疑を存して擧げたるが、こは耳梨の青菅山の誤なり。

みもろつく　鹿背山萬六　三輪山萬七

萬葉六の長歌には三諸著鹿背山とも、同七には三諸付三輪山と見えたり。諸説ありて定めがたけれど、契沖がいへる如く、みもろとは神の社をいひ、つくは齋くの略にて、その山に神をいつき祀れるより鹿背山又三輪山へかけたるなるべし。

【匠】みもろつく。みもろは神社なり。かせ山の神の爲にみもろを築けるなるべし。

【考】今本に三諸着と書きて、みもろつくと訓たるはいよよ何の理りともなし。こは例の草の手より天を三に誤れるものと見えて疑なければ、あもりつくと改めつ。

【摘】眞淵は天を三にせるなりといへれど、そはみもろつく鹿てふことなり。

【信】みもろつくは鹿背山、三輪山にかかる枕詞なり。これを師説には天降就の誤として冠辭考にもみの部に收められたり。或人は生緒懸の誤字といへり。さて三諸著は誤字にあらず。三諸は醇交の酒の名、みは酒の實をいふ。もろはもろ〳〵と濁れるをいふなり。つくは輕く添へたる言の着くか、又は造るか。鹿背山にかかるは食稻の意、(けとかと通音、しねの反せなり) 三輪山にかかるは、實湧の意、酒の實の湧くなり。

【傳】或人三諸は生緒の字の誤なるべしといへり。著は繫字の誤にて、うみをかくならむ。生緒は借字にて績苧を繫くる桛と續けたるなり。

【解】三諸は御室にて神を安置奉る御室のことなり。卷三に吾妻屋戸に御諸を立てて枕邊に齋戸をすゑて云々、なほ他卷等にも見えたり。さて著は借字にて齋くをいふなるべし。卷七に『木綿かけていつく三諸の神さびて』など見えたるを今考へてその意なるをさとるべし。かくて齋をつくといへるは神功紀に撞賢木嚴之御魂云々、雄略記に『もみろにつくや玉垣つきあまし』云々などある是なり。かくてこの鹿背山を齋奉りけむは何の神にか考へ知らねど、思ふに三輪の大物主命なるべし。さるはこの大神は天皇の近き守護神にて、大和にて特に崇め奉り齋き奉れる神におはしませば、久邇に都遷し玉へる時も遷し奉りて、この鹿背山上に御室を仕奉り齋奉りたるべきならむとぞ思はる。略解に就は龍の誤にてみもろのなるべしといへるはいかにぞや。

【鐘】三諸は生諸木のことにて、諸と森と通音にて同事なれば、それに御言を添へて神社の杜の名に云ひ習ひたること既に辨へたり。就くとは海かたづけるなど云ふ附の意なるべし。さらば即その神籬に寄り就けるよしなり。

宮木ひく　泉の杣萬十一

萬葉十一に『宮木ひく泉の杣に立つ民の止む時なしに戀ひわたるかも』とあり。引くを引きと訓みて宮殿の用材を引きいづといふより泉の杣にかけたるか。若し實に人々が宮木引く篙に泉の杣に立つならむには枕詞にあらず。

【匠】宮材の重きを杣山の嶮しきより引く民の思ふ時なく苦しきを、つれなき人を思ひかけて戀ひ渡るに譬へたり。

みやまぎの　戀り後十七

後撰十七に『我がためにかつはつらしとみやま木のこりともこりぬ斯かる戀せじ』とあり。深山木を樵るといふに戀る意をもたせたり。且つ深山木といふに上句の說明語たる見といふことを兼ねたれば古き枕詞とは違へり。三代集の頃の手風なるべし。

【冠】み山木は樵木にして里に出すを懲りに戀ぬる心にいひよせしなり。

み雪ふる　越萬十二

萬葉十二には越の大山、十七の長歌には越と名に負ふ、十八越に下り來云々、北國は氣候寒くして多く雪ふるより、眼前の景ならずしてかく冠らせたり。この他萬葉十三に吉野の岳、萬二、十三、十八、及二十等に冬と續けたるを鹿持氏の萬葉枕詞解に載せたれど、それらは枕詞と見ざるをよしとす。◇『御雪ふる越の大山ゆきすぎて何れの日にか我里を見む』

【冠】みゆきふるは雪降ると、行經るといひかよはしたるさまあり。

【冠】み雪ふる冬の林に、又吉野の岳に云々、こは吉野の山は常に雨も雪も降るよし長歌にいひて、さて雙にかく

詠めれども、雪は吉野山の事なるをいひ出でたるにて、彼の隈なく三吉野川、千鳥なくさほの河といふ類の冠詞と知るべきなり。又越に下りて云々、こは越國は寒國にて、雪もはらなる故かくよめり。

見れどあかぬ　人國山萬七

萬葉七に『見れど飽かぬ人國山のこの葉をし己が心からなつかしく思ふ』とあり。見れど飽かぬ人といふより大和の人國山に云ひ下したり。木に寄する歌にて、固より有心序なれど、木の葉にかけぬを見しとすべし。

【匠】この頭句は人と續けむ爲か。又句を隔てて木の葉の爲にいへるか。寄木歌なれば木の葉の爲にいへること は勿論にて、木葉と云ふも人に譬ふれば先は人を女になしておける詞なり。人國山は大和なり。

みるのごと　わわけ下れる萬五

萬葉五にわわけさがれると續けたり。みるとは海松といふ海草にて、莖なく枝繁くして棕櫚の如きものなり。こ とは如くの古き形なり。わわけとは破れて散亂せるをいふ。貧者の襤褸をまとへるを海松の如くと比したるなり。されど枕詞とせざるも可なり。

【解】こは海松の枝は繁垂りたるものなれば喩へていへり。

みわの山　過ぎ新古今九

新古今九に『別れにし人は又もや三輪の山過ぎにし方を今になさばや』とあり。大和の三輪には神話に載りたる杉の大木あれば杉を過ぎに轉じてかけしなり。而して三輪といふに又も見るといふ意を兼ねしめたり。

みをつくし　深き後十六、千十四　身を立て新千載十八

萬葉十二に『みをつくし心つくして思ふかな』とあり。つくしといふ詞を重ねて調をなしたるはいふまでもなけれど、そは枕詞にはあらじ。後撰十六に深き心と續け、千載十四に深きしるしとも連ね、新千載十八に身を立てながらといひ下したるは共に枕詞にて、一は澪標のみをといふ音を重ね、一は深き水中に立てる標木なるを、心の淺き證に比したるなり。◇後撰「難波潟なにもあらずみをつくし深き心のしるしばかりぞ」新千「いかにせむ和歌の浦和のみをつくし身を立てながら淺き心は」

【冠】萬葉十二に云々、こは澪標なり。それを戀によりて身をつくしといふ語に轉して、心つくしとは續けたり。

【解】こは標澪なり。こはつくしといふ言を疊ねいひたる枕詞なり。

むの部

むぐらはふ　いやしき

【詞】いやしきと續く。こは葎敷を賤しさにかけたり。

むさしあぶみ　さすがにかけて伊勢物語　かゝる同　ふみ六帖　文だに新千十一

伊勢物語には「流石にかけて賴むには」とも、かゝる折にやとも連ね、古今六帖五には「定めなくあまたにかくる武藏鐙いかに乘ればかふみは違ふる」と見え、新千載十一には文だにも見ぬと續けたり。むさしあぶみは其昔主として武藏國より出せし一種の鐙にして、上輪の中の舌の如く左右にかけ換へらるるものなりきといふ。よりて鞍に掛くるとか懸かるとかいふを、心を掛けにうつし、斯かる時と轉じ、鐙に足かけて踏みて馬に乘るより、文を踏み誤るとかけ、又踏を同音異義の文にうつしたり。◇伊勢「武藏鐙さすがにかけてたのむには訪はぬもつらし訪ふもうるさし」同上「訪へばいふ訪はねばうらむ武藏あぶみかかる折にや人は死ぬらむ」新千「むさし鐙ふみだにも見ぬものゆゑに何に心をかけそめにけむ」

【要】武藏鐙は後世のものの如く、鐙の端にさすがを作り付けにするより、流石にかけて詠む。

【三代】六帖五に云々、武藏鐙はのればへ掛る枕詞なり。

むしぶすま　なごやが下に記　名護屋山家集

古事記上及萬葉四にむしぶすま、なごやが下にと續けたるを高橋殘夢は枕詞とせり。むしぶすまは苧麻の寢衣かとも思はるれど、蟲衾(むしぶすま)にて蠶よりとりたる絹の寢具をいふなるべし。そは柔和(なごや)かなるものゆゑしか續けたり。但し古事記のは枕詞にあらず。後世山齋集には名護屋へ冠らせて枕詞とせり。

【行】蒸衾の如く和屋(なごや)と比したれば枕詞なり。

【新】むしぶすまのむしは布の名である。苧麻で織つた布で作つた衾、柔いのでなごやが下といふ語の修飾としたのであらう。

むすび松　とけて　萬二、小町集

萬葉に「いはしろの野中に立てる結び松心も解けずいにしへおもほゆ」とあるを續貂にあげ、むすび松はとけすにかかる枕詞とせり。結松とは契をかくる爲め枝に物を結びつけたる松をいふ。この萬葉卷二の歌は結びと解けと語を對比して歌のあやをなせるものにて、この松に對して感を述べたれば枕詞にあらず。小町集に「むすびきといひける物をむすび松いかでかとけて君にあふべき」とあるは、萬葉の有馬皇子の結松を、いかでとけてといはむ爲に置きたるなれば枕詞なり。

【貂】結松のこと、有馬皇子、紀の國に召さるる時、岩代の濱にてぞ、ここなる松が枝を引きむすびて、我幸あらば又ここに歸り來て、汝を見んといふ心をよみたまひしより、此松の名に負せたるなり。そも松を結ぶとはいかにするならむ。知られぬわざなれど、歌の心にては、松のときはにあやかりて身の危きを逃れむとや思しけむ。云々。結びしものは解くべければ心のとけぬ思にかけたりき。小町の集にも「むすびきといひけるものをむ

すび松いかでかとけて君にあふべき」心のとけあふことにかけてよめり。解悶と字には見えたる義なり。

むばたまの　我黒髪古、後　妹が黒髪拾　髪後　闇古　夜の衣古　こよひ後、拾　夢古
黒田の里名寄

古今及後撰には我黒髪とも、拾遺には妹が黒髪とも、續古今には黒髪とも、後撰には單に髪とも連ね、又古今には闇のうつつとも、夜の衣とも、後撰及拾遺にはこよひとも、古今には夢とも續けたり。ぬばたまは、ぬばたまの轉にして、射扇の實をいふ。その色黒ければ髪の黒きに比し闇のくらきに喩へ、轉じては黒髪山とも又こよひとも夜風とも夜見るものなりとて夢ともうつしたるなり。萬葉時代にはぬば玉、若くはうばたまと詠みしを、三代集の頃よりは皆むばたまといへり。うまそむまといへる如く一の轉訛なるべし。（ぬば玉の條な參考せよ）◇後「むば玉のこよひばかりやあけ衣あけたなば人なよそにこそ見め」拾「むば玉の妹が黒髪こよひもや我なき床になびき出ぬらん」古「むば玉のやみのうつつはさだかなる夢にいくらもまさらざりけり」歌合「むば玉の夜の夢だにまさしくは我思ふ人を人にみせばや」名寄「目に立てぬ人なかりけりむば玉の黒田の川によれる白波」

むまさかの　三輪萬

萬葉に三輪と續けたりと燭明抄にあげたれど、こはうまさけのと訓むべし。其の條を見よ。

むら雲の　杉の庵玉葉

玉葉冬部に杉のいほりと連ねたり。群雲の過ぎといふを、杉の庵にうつしたり。◇「村雲の杉の庵のあれまより時雨にかはる夜半の月影」

○むらぎもの　心をいたみ萬一　心くだき萬四

萬葉一の長歌に心をいたみとも、同四には心くだきてとも、十には心不欲とも連ねたり。むらきもは群りたる肝の意か、或は胸肝の意か、或は群がり物の義か明かならず。初の說によらば群肝の中にある心との續け方、中の說ならば村肝ののは單に調の爲に添へたるにて、むら肝即心といふ意かと思はる、心といふ語原は凝る凝るの義といふ說と、許多こころといふ說とあれどいかがあらむ。心は元來かかるなどと近似の詞にて、物にからまる又よづかるなどの義か。又考ふるにろは唯添へたる辭と覺しく、ここはかかの轉にてかどかどの義にあらざるか。さらばそのはたらきによりての名なるべし。むらきものの用例を見るに、心をいたみ、心くだきての如く、傷心の方に用ひ、樂易の方には從來例なし。

【管】切にもの思なげく時、肝の碎けて村々にあるといふ心なり。

【匠】むらきもは心なり。むらは群にて多きなり。きもは字のままにも心得べし。日本紀に心府とかきて心肝とよめれば、心を丹府といふが如く、きもといふも心なり。心はここらといふことにて多きなるべし。

【考】こはまづ一わたりにて云はゞ、肝は七葉群りてあれば群肝といひて、さて肝向ふ心を痛みとよみたる如く心と肝は相離れぬものなれば、然か續けたりとすべし。されども肝の心といひては穩にも聞えず。字につきてのみことわるも萬葉の意ならず覺ゆ。故に思ふに肝の二字は訓を借りて、かの靡くものてふを浪雲乃とかき、天者(あめは)しもを天橋文と書ける類か。さらば群りものてふを加里の反紀なれば、群(む)き物といへるなるべし。さて物の多きことを、ここら、ここばくなどいへば群るもののここらといひかけしならん。武烈紀にものさはに大宅(おほやけ)すぎと續けし

類とすべきなり。

【諸】古詩に摧心肝又傷心肝など用ひたり。心をムネと訓す。むねはむなともいふ。むなのなはらと通す。されば群肝は胸肝の心と續くなり。

【傳】三十六腑中に多くのきもの相對ひて集りありて凝々しといふ意に心とは續くなり。冠辭考の說は惡し。群り物といふ言、古にあるべくもあらず。

【一言】群肝の心と續くか。心はさまざまの子細あるものなればなるべし。

【石】肝の臟は心の臟に並びたればかく續けしなり。

【黑】群肝の妙用の凝る所は心肝なれば、むらきもの心といひつづけたり。

【折】きもは臟腑の汎稱で、臟腑の所在即ち生活機能の中樞といふ考が、靈魂臟腑存在說を形づくつた素朴な古人は、むらぎもの心と說くが、むしろ經の精の心と同じく、臟腑の錯雜してゐる樣から、こからかるの意の凝る、こるに接したのであらう。露西亞のネフスキイ、ニコライ氏はむらはむらとであり、むらぎも即むらときもの義で腎をいふ、臟腑といふ意で心を起したのである。

むらさきの

匂へる妹萬一　心にしみて萬四　名高の浦萬七　粉滷の海萬十六　雲の林新古今二十　藤井の原夫木　藤江の岸續後撰三　藤阪山萬二十

萬葉一には匂へる妹とも、四には心にしみてとも、七には名高の浦とも、十六には粉滷の海とも連ね、新古今二十には雲の林を見渡せばとも、夫木には藤井の原、續後撰三には藤江の岸とも、同二十には藤坂山とも續けたり。

◇萬『紫の匂へる妹を憎くあらば人づまゆゑにあれ戀めやも』萬『むらさきの粉潟の海にかつぐ鳥珠かつぎ出ば吾玉にせむ』萬『むらさきの名高の浦の靡きもの心は妹によりにしものを』夫木『むらさきの藤井の原の花かつらににや春のくれかかるらむ』續後撰『むらさきの藤江の岸の松が枝によせてかへらぬ波ぞかかれる』『紫の雲の林を見渡せば法にあふちの花咲きにけり』紫色はけ高きものにて昔より人の貴ぶものなれば、名高しといふ心を紀伊の名高の浦にかけ、その色のうるはしく照れるを乙女子のかんばせに喩へ、色の濃しといふをこかたの海に係け、色の染むといふを心に浸みてと續け、藤の花は紫なるより、そのゆかりにて藤といふ語を含める地名にいひ係け、又紫雲といふ語あるより、京都の北郊なる雲林院といはむとて、紫の雲といふを、雲の林と續けたり。柿園詠草には木津といふ地名にかけり『紫草は昔は武藏野の名草なりき。高二尺許、莖葉共に毛茸あり。夏の頃頂に白花を着く。根は紫色を帶びたり。古は染料に用ひたり。木津にかけたるを見れば近世に於ては彼地にも多きにや。

【他】むらさきのむは高き義、らはあかき義なれば、名高といふにつきてむらさきとかくべし。

【匠】紫は色の中にも名高く、又高貴の人の著れば、名高の浦とはつづけたり。

【考】名高の浦云々、紫は殊に貴き色として名ぐはしければ、名高しといひかけ、又こかたの浦云々、紫の濃きとかかれり。紅の淺葉の浦と續けしを見よ。名高の浦は紀伊の國に、こかたの浦は越の國にあり。

【略】宣長云、紀伊に名高といふ邑の内に紫川といふ小川あり。これ古の地名にて有る名高の浦にはあらざるか。名高の浦は今も名高といふ。名方とも云ひて黒牛と續ける邑なり。さては枕詞にあらず。猶考ふべし。

【尾】今案、夫木には藤井の原、續後撰には藤江の岸と續けたり。

むらさきは灰さすものぞ　椿市萬十二

萬葉十二に『紫は灰さすものぞ椿市のやそのちまたに逢へる子や誰』とあり。燭明抄にあげたれど、序となすべし。

【燭】これは紫にて物を染むるには、椿の灰をさすなり。椿市といはむとてかくはいひかけたるなり。

むらたまの　樞（くる）萬二十

萬葉二十にくるに釘さしと續けたり。これは關東人の歌にて、むらたまはむばたまの横訛なり。うば玉の黑と比せしをもとにて、その類音なる戸の樞（くる）に轉じて續けしなり。◇『むら玉のくるに釘さしかためとし妹がこころはあよくなめかも』

【管】むらたまは數多き玉なり。くるにくぎさしとは緒をさし通すなり。玉をぬけば緒とは云なり。くるとは玉の緒なればくるといふ。

【解】こは群玉之轉といふ意に云ひかけたるなり。群玉とは貫き統べて群れる玉をいふ。くるは轉めく意にて戸の樞にいひかけたるなり。或說にぬば玉を東語にむら玉といへるにて、烏玉の黑とかかれるよしいへるはあらず、ぬばをむらとはいふべからず、萬六に指進乃栗栖の小野云々、これも指進は村主の誤にて、群玉の轉といふ意に續けたるか。

むら鳥の　群れ起、萬九　朝立ち萬六、十七　出立ちかてに萬二十

記の上には我が群れいなばとも、萬葉九には群れ立ちゆかばとも、六及十七には朝立ちいなばとも、二十には出立ちがてにと續けたり。群鳥の朝塒より飛立つを人の旅行に喩へたり。且つ、むらと群れいなばのむれの音通

むて調となせり。又古今十三には立ちにし我名と續けたり。『むら鳥の立ちにし我が名今更にことなしぶともしるしあらめや』

【續考】吾の語を隔て群鳥の如くに群往くはとなり。

【三】古今十三に『むら鳥の立ちにし我名今更にことなしぶともしるしあらめや』古今六帖一には『入日さす時ぞ悲しき村鳥の己がちり／＼なりぬと思へば』かく立ちにし、己かちり／＼と續けたり。ことなしぶとは事無いふとものいを略きてぶともいへり。いはしの餘韻にあれば省けるなり。

むろかやの　つるの堤萬十四

萬葉十四に武路我夜の都留の堤と續けたるを、代匠記に擧げたり『むろかやの都留の堤のなりぬかに心はいへど未だねなくに』むろかやは群茅の轉か。さらば群茅の生ふる都留の堤と續けたるならむ。

【匠】試にいはばむろかやは室草なり。新室を葺くべき草なれば、空蟬の鳴くといふが如く、また刈らざるさきにも此名を呼ぶなり。らとるど通ずれば、つらになして室草の生列なれる意か。椿の繁きを列々椿といひ、詩に草連レ天など作れるを思ふべし。

もの部

もしほぎの　辛く清正集

清正集に辛くもと續けたり。もしほぎとは藻を集め燒きて鹽を製する時に用ふる薪をいふ。鹹きより、苦しき意なるからくにうつしたり。◇『須磨の浦の鹽やのこりつむもしほ木のからくも下に思わたるかな』

【解】こはからくと云はんにのみ。辛くとは辛勞の義なり。ここは苦心の意なるべし。俗にからき命などいふは辛勞の義なり。藻鹽木は鹽やく料のこり木に藻草などさしそへて焚くなるべし。

もしほぐさ　書きおく新古八　敷津の浦千八

新古今には書きおくと連ね、千載には敷津の浦と續けたり。鹽を製する時潮水をしますする料に用ふる藻をもしほぐさといふ。こは熊手の如きものにて搔き集むるより、書き集むとか書き置くなどと轉じに用ひたり。後には備忘錄の如きものをも藻汐草といふに至れり。又草を敷くといふより攝津の地名敷津浦へ係けたり。◇『見し人は世にも汐のもしほ草書くおくたびに袖ぞしをるゝ』『もしほ草敷津の浦の寢覺には時雨にのみや袖はぬれける』

もだもあらず　五百代小田を萬八

萬葉八に『然不有五百代小田を刈り亂り田ぶせに居れば都しおもほゆ』とあるを、萬葉古義には然は默の誤とし、もだもあらずと訓みて五百代にかかる枕詞とせり。この然不有の三字を袖中抄にはただならぬと訓み、仙覺抄に

とはしかと有らぬと讀みたり。契沖の說穩かなるか。さては多くもなしといふ意にて枕詞にあらず。

【匠】貧窮問答歌云、しかとあらぬ鬚かきなでて云々、この初句を證としてしかとあらぬと讀むべし。（中略）五百は必らず數を限りて云ふにはあらず。五百重山などいふ如く、唯多きをいふ詞なれば、山田の一代許なるが、棚のやうに段々にいくらともなくあれば、然ともなき小田の數の一代づゝ・五百許りもあるをといふなるべし。

【解】こは默不有して、云ふといふ意を、五百に轉じて續けたるなり。

もちづきの　たゞはし萬二、十三　たれる面輪萬九　益めづらしみ萬二　木間より拾八

萬葉二及十三の長歌にはたゞはしけむ、九には足れる面輪、二には益めづらしみと連ねたり。十五夜の月は圓々として虧くる所なければ、世中の物の滿ち足らへるに喩へ、又顏ばせの美しく缺點なきに比し、或はいや愛らしきと佳人の姿を褒めたり。萬葉二の益字を服部高保はましと讀み、その他はいやと訓じたり。尙拾遺八には『望月のこまよりおそく出でつればたどる〳〵ぞ山はこえける』の歌あり。こは木間より月の出づといふに信濃なる名高き牧場の一なる望月の駒とかけたるなり。

【考】萬二に云々、こは望月の如く、天が下に御うつくしみの滿足はせ給はんと、太子にませる時より、世人の思ひ賴みて待ちしをいへり。さて今本にみちはしけむと訓めるは、字に泥みてよそを見ぬわざなり。卷十三に何時可聞、日足座而、十五月之多田波思家武登とよめるに同じ續にて、次の語の意さへ等しければ、こを以て右をもたゞはしと訓むべきなり。されど次に擧ぐる歌に滿をたれるとよむべく、右に日足ともいふによりて、上をば暫くたらはしとよみたり。又卷九に云々、これもたれるおもわと訓みて不飽事なき面の樣をいへり。

【詞】もちづきはみち月ならむ。望とは月滿與レ日相望なり。又滿は足なりと註す。
【服】萬二に益目頬染云々、こは望月は人ごとに猶更めづるものなれば、まし珍してふ意に冠らせたり。

もちどりの　かからはしも萬五　かけて留めて巖足集

萬葉五の長歌にかからはしもよと續けたり。とりもちにかかるといふよりかからはしとも續けたるなり。かからはしとは物に繋がれて離れがたきをいふ。和田巖足の集にはかけて留めてと續けたり。
【考】黐にかかれる鳥の立ち離れがたき如く、親にかかはりて逃れがたきことわりを云へり。

もとかしは　もとの心古十七

古今十七にもとの心と同音を重ねたり。本柏とは古き柏といふ義にて、舊の心といはむ爲に、序の體にて置けるのみ　一說もとかしはは柏の古葉の冬落ちずして附き居るもの、大嘗會の時その葉に酒を浸して神前に備ぐといへり。◇『石上ふるから小野のもとかしはもとの心は忘れざりけり』
【詔】本柏故の情は忘られぬといふにのみ。もとかしはとは一本柏といふことなり。一本を一本といひ、又茂林茂きがもととといふ。

もとつ人　ほとゝぎす萬十

萬葉十には本つ人霍公鳥と續けたり。本つ人とは昔馴染の人をいふ。郭公をも人の如くに思ひて呼びなしたること、遠つ人雁といへる類なり。◇『本の人ほととぎすをや希に見む今や汝が來し戀ひつつ居れば』
【匠】本人とは昔の妻をもいひ、なき人をもいふ。ここは郭公の聲を昔より聞き馴れて云ふなり。鳥獸草木まで

も人とはよな習なり。後撰に待人は誰ならなくに郭公とよめるも、郭公を指して待つ人といへり。此集に雁なも運つ人とよめり。

【石】本つ人は契ありて昔相見し人をいふ。古今集に「ふるから小野の本柏もとの心」と續けしも本つ人のことなり。萬二十に「かけつつもとな」と續けしは、頓て原の心にかけつつといふ義なり。郭公云々は隔句にて珍しと續けしにや。略解にいへるは覺束なし。

ものさはに　大宅すぎ紀　公の仕縣居家集　大垣の里藤垣内集　大島山山齋集　大津同上
大里郡甲信紀程　大屋同上

武烈紀におほやけ過ぎと連ねたり。こは物澤に多しといふを、大和の大宅といふ地名へ轉ぜしなり。縣居翁の集には公の仕と續け、藤垣内集には大垣の里と轉じて連ね、山齋集には大島山及大津の田井、甲信紀程には大里郡大屋などに冠らせたり。

【匠】大宅には物多きゆゑにかくは續くるなり。

【考】官家は諸の司諸の國を統べて事繁ければ物多に公といふ意にて、添上郡大宅てふ郷にいひかけしなるべし。

【石】さは積り隘ぎ開延ぶるといふ義にて、物も事も茂きをいふ詞なり。多の字につけて多しといふ義なりと思へれど、公事積り騒ぎ繁ひて茂く開延ぶる處、平かなる公朝といふ義を、大宅といふ地名にいひ續けたれば枕詞なり。

もののふの　八十氏河萬一、三、十一　八十伴雄萬三、六、十七、十八　八十少女萬十九　宇治川萬十三

磐瀬の森萬八　男女の花萬二十　大前つ君萬一　矢野の神山玉葉　矢田野夫木
八幡の峰拾葉御集　弓削の町菅家集　武甕槌蓬窻集　八島の浦同上

萬葉一、三、及十一には八十氏河とも、同三、六及十七、十八には八十伴雄とも、十三には八十氏川とも、八十の心とも、十九には八十の少女とも、八には磐瀬の森とも、廿には男女の花とも續けたり。又萬一には大臣と連ねたり。又近古の集には矢といふより矢野の神山、矢田野の淺茅、八幡の峯等に續けたるあり。又菅家集には弓削の町とも蓬窻集には武甕槌とも八島の浦とも續けたり。もののふとは、古は武勇にして兵事にあづかるものも、朝廷に仕ふる人も、すべて稱したりと見ゆ。かくて其數多かりければ、八十といふ詞にかけたり。八十とは多數の義なり。八十氏川とは宇治の川をいはむとて、物部の八十氏といふを宇治へ轉じたるなり。それ又いひ馴れては單に氏河とも續けたり。古、軍兵の屯聚するを、いはむといひたれば、もののふのいはむといふをいはせの杜にかけ、武夫の男といふより男女ともいひ下したり。武士は弓矢を帶するものなれば、矢野の神山とも矢田野とも續け、又弓を削るといふよりそれをうつして河内の弓削といふ地名に掛けたり。◇萬『物部の八十氏河のあじろ木にいさよふ浪のゆくへ知らずも』萬『もののふの八十氏人もよしの川たゆることなく吉仕へせむ』萬『もののふの八十のをとめが汲まがふ寺井のうへのかたかごの花』萬『物部のいはせの森の郭公今もなかぬか山のとかげに』萬『秋野には今こそゆかめ物部の男女の花にほひ見に』萬『ますらをの鞆の音すなり物部のおほまへつ君楯立つらしも』玉葉『梓弓春立つらしも武士の矢野の神山霞たなびく』夫木『もののふの矢田野の淺茅さわぎ雲に亂るる秋のかりがね』拾葉御集『梓弓春とはしるくもののふの八幡の峯に霞そめぬる』

もの の 部

【仙】一義云ふ。もののふとは武士なり。つはものは弓箭をもてるものなれば矢といはんとて八十氏河と續く。一義、武士の姓は八十あれば、八十氏河とつゞく。又つはものは馬を馳せながら物を射る故に、もののふのいにせの杜とつゞく。

【冠】物のふとは物のふしといふ詞なり。萬人に勝れたりと云ふなり。

【燭】日本紀に屯集と書きていはむとよむなり。亦滿字をもよめり。神武紀に大軍集而滿二於其地一、因改號爲磐余こと云々、大和國の磐余といふ所、始の名は片居と書きしを皇軍の屯せしよりいはれと名づくと見えたり。八十うちは八十氏といふ意なり。武士の氏姓の多き心なり。八十は數の限にて、多きことには皆八十と讀めり。亦もののふの氏河ともよめり。これは八十氏といふより起りて、八十を略していへるなるべし。但しこれは千早人宇治とよめる義にも叶へり。或説に應神天皇の御時吉野よりもののふ參れり。その名を八十氏人と申すものなりと奏す。御門彼に所を賜りて山城の國宇治に住ましむ。これよりもののふの八十氏川とはいふなりと云々、此事日本紀等に當て見えず。

【晉】もののふの男女の花。大とちといふ草なり。女郎花の如くにて花の白く咲くなり。

【匠】八十氏河と續く。舊事本紀第三にも、天神饒速日命を天降し給ふ時も、天物部等二十五部人同帶二兵仗一天降供奉とて二田の物部、當麻物部の名を擧げたり。されば其の子孫ひろごりて氏々の限なければ、多きことの限りを八十といひて八十氏川とは續けたり。

【考】萬十三（或本の歌）物部之氏川渡云々、こは紀にも集中にも、千早人宇治の渡ともよみ、此歌も血速舊于遲

邇乃渡とありて、其一本にかく物部乃氏川渡とあるからは、物の布はいちはやび猛き人をいひて、ちはや人といふに同じ意なること著し。さて氏と書けるは借字にて、宇治は稜威てふ意にて、もののふのいづとかかれる辭なり。　萬一に八十氏川に云々、これは古は健き人を惣てもののふといひて、そは世に限なくあければ、八十稜威人とはいへり。神武の御時に八十建てふも多くの猛人をいへれば、もののふの八十てふに同じ謂なるを知るべし。この八十氏川といへるをもて、もののふは數多あれば、八十氏といふと誰もいへど、是は皆く後の說なり。　又八十伴雄云々、伴緒とは部類の多き人なれば、一つの緒に數の玉を貫くに譬へて、其の緒とはいふなり。古事記に并五伴緒矣支加而天降也てふ中に、二命は女神なれど、伴緒といひ、神代紀に凡諸部備行以奉貢焉といへり。此諸部は皆女なるに、とものをと訓みたり。然れば萬葉觀詞などに女之壯・伴男など書ける壯も借字なり。　又八十のをとめ云々、こは只八十までかゝれり。　男女の花見に云々、こは男とうくるのみ。且これに男女の花とは雄花、女郎花をいふべし。　石瀨之社云々、こはもののふのいはむとかかれり。

【服】萬一に物部乃大臣楯立良思母、こはもののふなる大臣云々といふ意なり。

【傳】十九、もののふと云ふは、總て武勇職を以て仕奉る健士の稱にして、萬葉歌にこれを宇治の枕詞にいへるもいちはやしといふ意なり。又三卷には武士とも書けり。後世までも武士をもののふといへり。さて又朝廷に仕奉る人等を凡てもののふといひて、もののふの八十伴緒などよめるも、萬葉に多きは上つ代に武勇職を主とせられし世の古言の遺れりしなり。もののふの事、師の冠辭考に委く說かれたり。其中に古凡て武き人をもののふと云ひて、そは世に限なくあければ、八十稜威人とはいへり。と云はれつるに據へり。云々。

【[illegible]】うぢ、八十、いはせ、をとこなどつゞくこと萬葉に見ゆれど、物部といふこと、いと古きものには見えず。ことわり如何とも知りがたし。云々。うぢと續くことは、日本紀に勢引きことを稜威とかきて以豆と訓む。以豆とうぢと同音なればなり。又八十と續くこと種々にいへど、物部を云說には弓取ともいふ意にて、矢と續きたるか。石瀨と續けたるも、射と續けたるなるべし。

【冠】もののふの石瀨の杜云々、いの一言にかかる。武部のいづといふ心に續けたり。

【辨】もののふは鞆の部にてとを略きてものべといふ。それよりものの部とうつり、本、弓に取り帶びし鞆によりて、鞆守といひて、今伴部これなり。鞆の守もののふといひ來りしなり。

【燈】もののふ、物はあらゆると云はんが如し。部は仕官の限りをいふ。それは常に百官といひて氏々職多かればば宇治川へ八十氏川とつゞけたるなり。

【解】八十氏と續くるは記傳の說の如し。又八十氏川と多く續け馴れたるより、唯何となく、宇治川の枕詞の如くにもなれるから續けたるべし。

【黒】もののふは物部にて萬のことをするわざ人をいふなり。武事のみには限らぬことなり。文官の人をもものゝふといふべし。もののふの稜威といひかけて宇治へかくっ八十は多き意なるを轉じて大宇治川へいひかけたり。氏といふ詞も本は稜威なり。物部の八十氏といふは武士に氏多きことをいふといひ、或は物部姓に支別多くて八十氏ありといふ。此二說共に非なるべし。倭姫命世紀を考ふるに一役づつ事を司る人の種類多きを物部八十氏と見えたり。

もみぢ葉の 過ぎ萬一、二 移り萬三 あけの玉垣新勅九 あけのそほ船新後撰十七

萬葉一には過ぎにし君とも、二には過ぎていにしとも、九には過ぎにし子とも、十にはすぎがてぬ子とも、十二には散り過ぎにしとも、三には移りい行けばとも、新勅選九にはあけの玉垣とも、新後撰十七にはあけのそほ船とも續けたり。◇萬『紅葉ばのすぎがてぬ子を人妻と見つつやあらむ戀しきものを』『見れどあかぬいましし君が紅葉々のうつりい行けば悲しくもあるか』 新勅『紅葉々のあけの玉垣いく秋の時雨のあめに色よりぬらむ』新後撰『もみぢ葉のあけのそほ舟こぎよせよここを泊と君も見るまで』。過ぎにし、散り過ぎにし、移り行けば昔人の死する意にて、木葉の色かはるをうつるともいふ。よりて人のこの世を辭しゆくを木葉の色かはり散り過ぎゆくに比したり。すぎがてぬ子とは、考にいへる如く、戀しき思をやり過しかたきをいひて、紅葉の過ぐとかかれるなり。又後の二つは紅葉の色のあかといふを、朱の玉垣即ち神社にある朱塗の瑞垣及丹にて塗りたる船と續けしなり。あけのそほ舟のことは、やましたの條を見よ。

【考】萬葉には專ら紅葉と書きて、たまたま赤葉とも書きたり。もみぢは紅出の意にて、黄の字に當れり。萬及一に過ぎ云々。こは木葉の散り過るを、人の此世を過去くに譬へたり。今も人の身まかれるを過去れるといふよなり。卷七に『ゆく川の過ぎにし人の』十九に『つゆ霜の過ぎましにけれ』などよめるも皆同じ。下に過ぎがてぬ子云々、こは前と異にて戀しき思をやり過しがたきをいひて、紅葉のすぐにかかれるなり。

【解】過るとは死ぬるをもいひ、時の移るをも、思を遣るをもいへど、紅葉のといふより續きたる意は皆同じ。

【三】古今五に『秋風にあへず散りぬるもみぢ葉のゆくへさだめぬ我ぞ悲しき』こは紅葉々の如くと比したり。

もゝきなす　山は萬六

萬葉六の長歌に、ふたぎの宮は百樹成山は木高しと連ねたり。山は木あるを貴き習なるより、百木生る山と美詞を冠らせたるなり。

【眼】こは新京のさま、山のたゝずまひを褒むるに、先づ山高しと云ひ出でたるなり。こ高しと木はもありて高き山となり。すべて諸木の生るものなれば、百木をなせる山てふ語をもて生二百木一といへりと覺ゆ。なすは生作等のことにて如結若長柄（うなゐなす）、如泣兒（なくこなす）墓来坐てなどの意にあらず。

もゝくきね　美濃萬十三

こは百しぬの條に記したればそこを見よ。

もゝくにの　大國主鈴屋集

鈴屋集には大國主の命に冠するに、もゝくにのを以てせり。百國は大國なれば然か續けたり。

もゝしきの　大宮人記、萬　大宮所萬　大宮拾　八十氏人六帖　人の心後十八　うち新古今　うつらふ同　袂の數とも大和物語　大内山新葉　御階の櫻新千

雄略記を始め、萬葉三、六、七、十、十八には大宮人とも、萬一及六には大宮處とも、拾遺には大宮とも連ね、古今六帖一には八十氏人とも、後撰十八には人の心とも、新古今十八には内のみとも、うつらふ秋とも、大和物語には袂の數とも、新葉集には大内山とも、新千載二には御階の櫻とも續けたり。この枕詞も明かならざれども、萬葉六に「吹花の色もかはらず百石城の大宮」と書したるを正字とし、數多の石をたたみ築きたる大宮といふ意なる

べし。蓋し古の皇宮は城の如く構へられたるによるならむ。後には百敷を直ちに大宮の義にとり、大内のみとも、大内の人とも、大内の人々の衣袂とも、御階の櫻とも、詞を略して續けたるなり。又新古今にうつろふと續けたるは、伊勢が歌にて、亭子院の御位をゆづり給はむとせられし折の歌なれば、皇位をうつさるるに轉じたるなり。

◇萬「咲花の色はかはらず百石城の大宮人ぞ立ちかはりぬる」六帖「長月の九日ごとにももしきの八十氏人の君ゆてふ菊」新古今「百敷のうちのみ常にこひしくて雲の八重たつ山はすみうし」新古今「百敷はおきてかはれど百敷のうつろふ秋はものぞ悲しき」同「百敷のたもとの數は見しかどもわきて思の色ぞこひしき」續集「百敷の大内山の櫻花さきてや君が御幸まつらむ」新千「ももしきの御階の櫻ちらぬまに朝ぎよめせよ伴のみやつこ」

【仙】大内は百官の直廬のやしきあればももしきといふ。

【燭】大宮と續けたり。禁中には百の司の座を定めて百の數物あるゆゑなりと云々、大宮と續けねども、百しきとばかり讀めるも内裏のことなり。

【匠】百磯城之、百式乃、百石木能、百師紀能、百石城乃、百礒木之など書けり。萬葉に磯城島を志貴島とも、式島とも、古事記に師木島とも書ける類なり。一所も敷とかけることなし。されば崇神の磯城瑞籬宮にして國を知らすこと六十八年泰平にて、めでたき御代なれば、其の代を百重ねはかりても此宮にて知しめせと祝ひて、大内を百しきとは名づけそめたるか。この義考ふ所なしといへども、文字の書きやうに付けて思ふなり。

【考】皇大城の堅きを石に喩へて百の石城の宮といふなり。萬葉には借字の多かれど、古の百磯城は正しく書きしものなり。崇神記に「都於磯城是謂瑞籬宮(しきのみづがき)」とあるに、意も字さへ同じければなり。磐石もて築き皆

とせしは引くに堪へず。さて百とは例に依るに、五百津(ゆつ)磐城といふべきを、百磯城と約めいひて、言詞上でしもいなり。石を志とのみいふは、穴石(あなし)、明石(あかし)、磯城の類なり。城を紀(き)といふは古き語にて多ければ更にもいはず。

【精】大宮と續くこと記及萬葉に見ゆ。之を百官の座を敷くことといへど、雄略天皇の大御歌に見えたれば、古くいへることなり。その比までは百官の座を敷く杯いふことは見えざるなり。萬葉に百磯城、百石木など書きたれば、百は美辭にて、百石城の宮と續くるなりと考にいへり。

【附】百磯城にて、いかにも堅らかに築平し下つ石根に宮柱太高しきてといへるより、百石敷くにて王實の座といふ、かくめてたき大宮作りをいふ。

【後言】百敷城之にて大宮とかかる枕詞なり。毛々とは牟久佐加、木丘開、蕃茂などの牟、茂の垂れるにて、その昌なるを云ふ一つの語なり。百足、百襲など云へるも木昌なる意。さて百敷城之といふべきなれど、その同言の重れる故一つ略けること、旅人を多毘等(たびよ)といふが如し。

【石】ももしきは百官、百寮を敷くといふ義にて、内裏にある所の宮敷、及百敷、百士の司る所をいふ義なり。のは調にて足引のといへるに同じ。ただ百敷大宮といふ義にて稱詞なり。枕詞といふべきものにはあらず。これをもももしぎと濁りて唱ふるは非なり。清むべし。此稱詞を百石築の略といへれど、そは城などの上にこそもいふべし。天皇の大宮をたたへむには百石築の詞は似つかしからず。

【王】磯城の砦に壯大なるを百しきといふ。

もゝしきや　大内山新葉　御垣が原新拾遺　みぎりの竹風雅　古き軒端續後撰

新葉には大内山とも、新拾遺には御垣が原とも、風雅にはみぎりの竹とも、續後撰には古き軒端とも連ねたり。これらは皆百敷のといひしを、中世、のをやに改め、且は百敷を皇居のことゝして轉じて續けしなり。やに改めたるは、ささなみのを、ささなみやとせると同じ。◇ 新葉「もゝしきや大内山の櫻花咲きてや君がみゆきまつらむ」新拾遺「百敷やみかきが原の櫻花春したえずば匂はざらめや」　風雅「もゝしきやみぎりの竹の臥して思ひ起きて殘るも我君の爲」　續後撰「百敷やふるき軒端のしのぶにも猶あまりある昔なりけり」

もゝしぬ又もゝしね　三野王(おほきみ)萬十三　三野國萬十三

萬葉十三に、百小竹之三野王とも、百岐年三野國とも連ねたり。燭明抄には百小竹をもゝさゝと訓み、百岐年をもゝくきねと訓みたれど、百岐年も考にいへる如く岐は詩の誤にてももしねなるべく、しぬしねも相通じて小竹をいふ。さて美濃國とも美濃王とも續くるは、百の小竹の生ひたる野といふ義を轉じていへるならむ。

【燭】もゝくきねのとは案ずるに、是はさゝめといふ草のくきをとりて眼が簀に作るなり。百くきの簀といふべきをねとのと五音通ひたれば、もゝくきねと云ふなるべし。百草の義なり。もゝは多かる數なり。又萬十三にももささの美濃の大きみとよめる歌もあり。ささめといふべきを、文字の餘ればもゝさきのと云へるなるべし。三野の王は人の名なり。私云、もゝさゝのみのは篠の實と續けたるか。篠には實のなるゆゑなり。篠の多かることをば、萬葉に道のべの五百篠が上になどよめり。ゆささは五百篠といふなり。さらば百篠ともよむべし。

【匠】百岐年は百岫嶺(もゝくきね)といふ義にて山の多き意か。やがて下に與十山、三野山などあり。

【考】百小竹の云々、こは百と多くのしなへたる草の簀と續きたり。さて小竹(しの)は訓を借りたるのみ。まゝ書けな

どのみならず。小竹をもしなゆるもののゆゑしぬといふなれば、物は異れど語は同じ。又百詩年云々、こを今本に百岐年と有りて、ももくきねとよみ、百の草莖のみのてふ意といへど、岐をくきと訓むべきよしもなく、年の語も協はねばいふに足らぬことなり。はた右の百小竹之三野云々と、これと同じ字同じ續なる中に岐一語のみ異るべくもあらず。岐は詩の字なるを、草の手より誤れるものなり。よりて改めつ、（或人は百稍の意あらんといへど、稍に顯の有ほどの名にて、こぎおろせし後はわらとこそいへ。）且しなゆる草のみぬといふは、今も沙草さしめたどいひて、細く長き草もて簑はつくれり。田舍人のわざは今も昔もことならぬ事の多ければ、昔も然かならんと覺ゆ。

【一言】百篠と多くの篠の生ひたる野と續く。百くきねといふは美濃には山多ければ、多くの岫峯の美濃とかけたり。

【冠】もしぬのももはみとなり、しぬは笑をいふなれば、野を笑と通じて笑の多く生るといふの意なり。

【解】百岐年はもと百傳布とありけむを誤れるなるべし。多くの處を經傳ひゆく御野といふ心なり。考に百小竹の意といへれどしぬをしねといへることとなし。

【石】しぬはしのうの約、しのは篠なり。うは動發るなり。小竹、萱、萩等種々のくさの茂く生ひたるを、なべてしのといふ。よりて百しぬ深野といふ義をはたらかせて、美濃國、美濃の大君などつづけしなり。

【黒】百撓なり。しねはしなへの約言なり。百撓の眞野と續けたり。

【折】ももは多きこと、しぬは小竹或は柔軟な竹草の類をもいふ。そのしぬで簑を作る處からみぬにいひかけた

のである。

もゝたらず やそばの木紀　やそのくまで記　八十隅阪萬三　山田の道萬十三　筏萬

五十槻が枝萬十三

仁徳紀にはやそばの木に冠らせ、神代紀には八十坰手とも、萬葉三には八十隅坂とも、同十六には八十のちまたとも、十三には山田の道とも連ね、又萬一には筏につくりとも、十三には五十槻が枝とも續けたり。百に足らぬ八十又五十といふを、や又いの音を藏ける抓楼、山田とも、筏、齋槻などと轉じて續けたるなり。鶴居翁の集には五十連音とも連ねたり。◇萬「百足らず八十隅阪に手向せばすぎにし人にけだし逢はむかも」

【匠】一に百不足はいといふべき枕詞なり。百の數に足らぬ五十と續くるなり。但し五十日太とかける章、百日足らぬ五十日と續くる意なり。末に百たらぬ山田の道、百たらぬ三十の槻枝、百たらぬ八十隅阪など、皆この格に同じ。神代紀に百不足八十隈と大己貴命も宣へれば古語なり。

【考】八十坰手云々、こは百に足らぬ八十と續くるのみにて、百傳ふてふに似たる語なり。やすまの木云々、これも同じく八十と枝の多く立榮ゆる抓楼の木を、かくは續けなし玉へり。抓楼の木は和名抄に抓楼(曾波の木)木なり。又四方木なりといひ、枕草子にそばの木のもみぢともあり。山田道云々、こは八十の十を略きて八といひかけしなるべし。集中に五十と書きて、伊とのみ唱ふるを對へ見れば、八十をもやともいふべきなり。五十槻が枝云々、こは今本に三十槻と書きてみそつきと訓みたれど、三は五の草の手より誤れるもの明かなれば、改めていつきが枝とよみていかだと同じこととす。さてこは五十と多くの槻の木ともいふべけれど、樹一本に枝の多

きを尊むといふなり。又神南備の御田屋に近き槻なれば齋槻(いつき)の意にて、そのいつ一言に續けしにや。

【冠】百不足山田道乎云々、古事記傳にこの歌を引きて云く、我徒齋田諸縄が考に、百不足は足日木なるを、日を百に、木を不に誤れるを、百不足を誤れるものと心得て、遂に足字を上に移したるなりといへるぞ宜きといへり。又按ふに百不足は百木足(もゝきだる)にて、百木垂の意か。木垂といへること集中にあり。又百木成の義にもあるべし。冠辭考に山田と續くは八十の十を略き八といひかけしなるべし。五十と書て伊とのみ唱るを迎へ見れば、八十をやつといふべしと云へるは、いと僻なり。

もゝつしま　足柄小舟萬十四

萬葉十四にももつしま足柄小舟と續けたり。ももつしまは百の島の義。百の島を傳ひゆく足輕き小舟といふを、足柄にて作れる小舟にかけたるか。

【匠】百津島は多くの島々なり。それを傳ひ行く足の輕き舟と續くる意なり。第七に島傳足速乃小舟とよめるに同じ。相模國風土記に此山の杉を以て作れる舟の足の輕かりけるより山の名に負せけるよし侍るとかや。それを男の心輕くこなた彼方に心を懸けて行くに寄す。

【古】母毛豆思麻云々、豆は濁字なれど、百つ島といふ義なり。こはあつ一聲にかけたる枕にて、百つ島顯はるるといふ義なるべし。

もゝつたふ　鐸(ぬて)ゆらぐ記　度會紀　角鹿記　磐余の池萬三　八十の島田萬七、九

顯宗記には鐸(ぬて)ゆらぐもよとも、神功紀には度會(わたらひ)とも、應神記には角鹿の蟹とも、萬葉三には磐余(いはれ)の池とも、七及

九に八十の島囘とも續けたり。萬葉のは數へて百に傳へ至るといふ意にて、五十とか八十とかいふを、大和の磐余及多くの島回の意なる八十島回へ續けたるなり。角鹿は今の越前の敦賀のことなれば、都よりは多くの山川宿驛を經るといふ意にて、百つたふと冠らせ、度會といふも多くの山川をわたり來るといふ義にて連ね、又往古宿驛には驛鈴とて鈴を備へたり。これを古語にぬてといふ。顯宗紀には驛鈴ならねど、置目といふ老嫗が召したまはむとて鈴をならし給ふよりかく續けられしなるべし。◇記「淺茅原小谷をすぎて百つたふぬてゆらぐも置目來らしも」記「この蟹やいづくの蟹百傳ふ角鹿のかに云々」萬「百つたふ八十の島回を漕ぐ舟に乘りにし心忘れかねつも」萬「百傳ふ磐余の池になく鴨をけふのみ見てや雲かくれなん」拾穗大本などにはこれを百づてのと訓みて五十師の篠生などよめり。

【燭】百つたふ磐余の池、こは五十と書きてはいとよむなり。五十、六十、七十、八十、九十といひて百に傳ふ心なり。いといふ詞設けむとて百傳ふとは置くなり。ももつての八十島わともよめり。

【匠】この集に續けたるは五十も八十も皆百より内の數なれば、是より傳ひて百とはなれば、るはつゞくるなり。角鹿、度會などは驛を傳ひてゆくことの遠くて數の多き意か。若しは角鹿は津、度會は國々續けさせ給へるか。旅ゆく人は多く道を傳ひゆく意か。

【考】磐余云々、こは百に數へ傳ふる五十てふ意にていはれのいの一言にいひかけたり。萬九に百傳八十島回云々、今本にももづてのとよめれども、八十と續けたる意は異ならず。されどこの之は不か和たとの字の草より誤れるなるべし。と常樹はいひたり。百傳ふぬては驛路の鐸の意なれば、百とおほくの野川をも傳ふ意にて、淺茅原小谷

を過ぐとはのたまひつ。此老嫗は宮邊に居れども、鐸の音して參れば、御製に驛路のさまに宣へるなり。されば福内賓は越前國にて、京より多くの山道を傳ひ行くが故にしか續け、わたらひも遠々に驛を傳ひたる心の誼ならむ。又敦賀は關と續きたるか。長くへわたる心なり。

【傳】卌二、もゝつたふは百傳にて、百と多くの處々を經傳行よしなりと冠辭考に見ゆ。下卷近飛鳥宮段にぬてゆらぐも、書紀神功卷に百傳度逢縣、萬七に百傳八十之島廻、此れも遠く傳ひゆく由にて同意なり。然るに冠辭考に是をば百に數へ傳ふる八十といふ意なりとあるは、例に違ひて非なり。又萬三に百傳磐余池とある百傳は、角障を寫誤れるものなり。さて角鹿に百傳ふと冠らせるゆゑは、蟹の彼浦より多くの處々を經傳來つる由なり。然るをたゞ角鹿は多くの山路を傳ひ行く處なる故とのみ心得むは委しからず。若然らば角鹿よりもなほ遠き國處は多ければ、他地にも、この詞を置ることあるべきに、さる例なきを以てただ角鹿の遠き由をいへるのみにはあらず。蟹の來へることに依れることをさとるべし。

【眞】もゝつたふは遠く渡ゆくをいふ。百は大の意にて遠に通ずるなり。

もゝづての　五十師の篠生夫木　八十の浦和夫木

夫木集には五十師の篠生又八十の浦和に續けたり。百足らずを誤れるにや。五十又八十は百に足らざるよりいひかくるか。もし助けていはゞ五十も八十も數へて段々に百に達するものなれば百に傳ふの義ともいはるべし。五十師は攝津にあり。今の貧窮の地を指す。八十の浦は陸奥の名所、今の磐城の相馬郡矢部浦をいふか。◇『百づての五十師の篠生しぐれしてそつ鹿まゆみ紅葉しにけり』『遠近の汐風こむみももづての八十の浦和に千鳥なく

なり』。

もゝ鳥を 狩野の翁

蓬廬集には狩野の翁に冠するに百鳥をを以てせり。鳥を狩るといふより人の名にうつしたるなり。

もゝはり 蘇我の國儀式帳

皇太神宮儀式帳に百張蘇我國云々、こは百の針にて裂く菅といふを、蘇我國にかけたりといふ。

【續考】そがは伊勢國にある地名なるべし。國とは吉野國・泊瀨國などいふ如く、今、郡といふ程の地をもいへり。百張の張は借字にて針なり。その故は式大祓詞云、天津菅曾乎本苅斷末苅切弖、八針爾取辟弖天津祝詞乃太祝詞事乎宣禮云々、二つの天津は稱辭也。菅曾とは菅を細く割りたるをいふ。本苅云々は菅の本末を切斷し中の弱らなる所を用ふるなり。八針に取辟きてとは、菅を割るには針もてするなり。やつは彌つにて細く數々に割るをいふ。百針といふもその意なり。この故に百はりそがの國とはいへるなるべし。蘇我は神名式に伊勢國壹志郡須加神社あり。和名抄にもこの地有り。これか。

もゝふね又もゝふねを 度會倭姬命世紀

倭姬命世紀に百船度會縣とも、儀式帳に百船乎度會國云々、こは百船の渡るといふより、伊勢のわたらひあがた又わたらひ國へうつし係けたり。二つながら同所なり。

【續考】海に多くの船を渡すといふ意もていふのみ。

もゝふねの 對島萬十五 津輕の滄溟集 船津林圃詠草

萬葉十五にも「ふねの泊る對島のあさぢ山云々、こを鹿持氏は枕詞としたれど、百船の泊る津といふを對島へかけたれば、序詞とするを穩當とすべし。蓬廬集には津輕の濱、柿園詠草には船津と地名に冠らせたり。

【解】こは百船の泊る津といひかけたるなり。卷六に百船のはつるとまりと八島國云々とよめり。

もゝよぐさ　百世萬二十

萬葉二十に百世草百代いでませとあり。同音を重ねて調をととのへたり。百世草を歳玉集には菊の異名とせり。

◇萬『父母がとののしりへの百世草百世いでませ我來るまでに』

【采】百世草とは月草なり。此草百夜花さく故に此名ありと云ふ。

【紹】もゝよ草は百世といはんにのみ。月草の別名とはうけがたし。六帖に草の部に出せれば、その比までは人知りたるを、世うつりて名の呼ばかはれるにか。今それとさすべからず。殿の後方に生るは庭草などにや。百世伊坐ませは坐は支の誤にて生ませにや。又生てませの略にや。

【品】未詳ならず。小野博は菊また鴨跖草をも、もゝよぐさとす。猶考ふべし。六帖には雜草に載せたり。

もろかづら　もろともに後十

後撰十にもろともにと續けたり。諸共にといふ詞を設けむ爲に序の幣にて置けるなり。もろかづらは二葉の葵の異名なるべし。賀茂の葵祭に用ふ。◇『足引の山に生ふてふもろかづらもろともにこそ入らまほしけれ』

【紹】もろかづらは一種の名とも覺えず。かつら草のもつれあひたるにや。歌は佛の道に入りたりときゝて、我も共にこそと云おくりしなるべし。

やの部

やき鎌の　利根川遂鹿集

齋藤彦麿は利根川に冠らするに燒鎌のを以てせり。鎌の刄の利(と)といふをその音をもてる地名にうつしたるなり。

やきたちの　利心(とこゝろ)萬二十　へつかふ萬四　戸隱山甲信紀程

萬葉二十には利心と比し、四にはへつかふと連ねたり。燒太刀は銳きものなれば利心に喩へたるはいふまでもなし。へつかふと續くるは燒太刀の竈より取出でたるものは、灰塵の附着せる習なれば灰着かふと比したるならむ。古語に竈をへといひ、竈食をへぐひといひ、地方の方言にも、鍋墨を山陰にてはへぼといひ、又防長二州にてはへぐりといひ、佐賀等にてはへぐらといひ、沖繩にてはへんぐといふ。共に灰の凝りつく意にて古言に竈をも灰をもへといひしなり。かくて表面にのみ着くといふより諂らふ義に用ひたり。この他、石上枕詞例に萬葉六の『燒太刀のかどうち放つ丈夫のほぐ豐みきに吾醉にけり』とあるを擧げたれどそは枕にあらず。◇萬『劍育にねのみしなけば燒太刀の利心も我は思ひかねつも』萬『絶ゆといはばわびしみせむと燒太刀のへつかふことはやしや吾君』近き頃のものにては村田良蘭氏は、信濃の戸隱山に冠らせたり。利(と)の音を戸にうつしたるなり。

【參】燒太刀のへつかふ。やき太刀とは太刀に刄をつけたる心なり。へは邊なり。つかふは付くといふ心なり。太刀は武夫の身を放たぬものなれば、いつもその人の邊には侍る心なり。市をよめる詞にもへつかふといへり。

【考】萬二十に云々、こは刄の利きを人心の敏きにいひかけて、且物思ふに敏心も失せて、たづきも知らずてのみありといふなり。萬四に云々、こは太刀は鞘を隔て身につけて佩くものなるを、思ふ人の住里に近けれど、隔てあはぬに喩へたり。

【信】この燒といふは燒刄をいひて、へつつかふは刄つくといふ意にかかれる言なり。へとはとは常通ふ言、つかふはつくの延言なり。さてもとの語にへつつくは今ひつつくといふ言なるを、刄付の意に轉じていひかけしは後語の常なり。

【解】萬葉四のは、太刀は武士の身を放たず帶ぶるものなれば、付經は邊付くといふに同じ。附くをつかふといふは散るをちらふなどいふ例と同じ。さてへつかふは歌の意にてはへつらふといふなり。

【古】へつかふと續けし義知られず。考の說もいかが。次のは角打放ちと比したるなり。又燒太刀の鋒といふ詞にとりなして、利心と續けたり。

【誤】かねを燒きて作る故にやきたちといふ。太刀は身にへつきてあるもの故へつかふといふ。へつくは端著くなり。身の片はしにつきてあるなり。

燒太刀を　礪波の崎萬十八

萬葉十八に礪波の崎に冠らす。燒太刀を礪にて磨ぐといふ意にて越中の地名に連ねしなり。◇「燒太刀をとなみの崎はあすよりは守部やりそへ君をとどめむ」

【匠】磨ぐといふ意に續けたり。

【解】燒太刀乎の乎は例の之に通ふ言にて、利心と續けたる如く、燒太刀の鋭とかゝれるなり。

【石】かく續けしは祗並といふ義に比したるなり。

やくしほの 思ぞ燒くる萬一 辛き戀萬十五、十七

萬葉一の長歌には思ぞ燒くるとも、十五及十七には辛き戀とも、古今十七には辛くも我は老いにけるかなとも連ねたり。鹽の辛きを人事の苦しきに比したり。思ひぞ燒くると連ねたるは、比喩の外にやくといふ同音を重ねたるなり。◇古今「しかの蜑の一日もおかず燒鹽のからき戀をも我はするかも」又續拾には信明集の「しかの海人の一日もおかずやく鹽のからき戀をも我はするかな」と擧げたり。こは二句の序と見るべし。

やくもさす 出雲の子萬三

萬葉三に出雲の子らと連ねたり。素盞嗚尊の八雲立出雲とあるに基き、人名に冠らせたるなり。さすは立つに同じ。尙次の條を見よ。◇「八雲さす出雲の子らが黑髮はよしぬの川の沖になづさふ」

やくもたつ 出雲記 出雲師梟紀 てまの關堀河百首

古事記には伊豆毛やへがきと連ね、紀には出雲の梟師とつゞけ、堀河百首にはてまの關とも續け、續古今十九には『八雲立つ道は深さを淺香山淺くも人の思ひ入るかな』と見え、新後拾遺には八雲立つ出雲八重垣書きつけてと序の詞に用ひたり。◇堀河百首「ありともと思ひしかども八雲立つ手間の關にも我はとまらず」八雲と書きたるは借字にて彌雲立つの義、たつはさすに同じ。故に人麿の歌にはやくもさす出雲の子と續けたり。さて出雲と續くるは、素盞嗚尊の出雲の須我里にて、雲八重垣と重ねて宣ひしを、後人出て雲を重ねて出雲と

訓み國名となしたるにて、最初は枕詞といふにもあらざりしならむ。後には八雲立つを出雲の國のこととし、その國なる中間の國に冠らせ、又下りては歌は八雲立出雲八重垣の三十一文字に始れるより、歌道といふを八雲立つ道といへり。

【燭】出雲と續けり。すさのをの尊の歌より起れり。古事記に云々。古今集序に、かの尊出雲國に宮作らし給ふ時、その所に八色の雲の立つを見てよみ給へるなりといへるも、古事記を本文にていへるなるべし。尊の出雲八重垣とよませ給へるより國名ふも出雲と號するなり。亦八雲さすともよめり。紀の歌には衣都米佐須伊豆毛云々、こはえとやと五音通へるなり。つとくと同韻の字なり。めともと亦五音通へり。然ればえつめさすも八雲さすに同じ義か。

【匠】八雲とは八つは物の多きにいへば多く雲の立つをいふべし。古今序の古註に八色の雲の立つを見てとあるはさもこそ侍らめど、本文共に見えねば覺束なし。釋日本紀に出雲風土記を引ていふ。號二出雲一者八束水臣津野命詔八雲立給之故八雲立出雲云々。

【考】このいづもは出づる雲てふ語なれば、それに彌雲立つてふ詞を重ねたり。その出雲は本にて、やくもたつを冠辭なりとするは、立ち出づと直ちには續けずして、たつと唱へ擧げてさて次の語をいふ例の冠辭のさまなるにて知られ、はた同じ語に彌てふ語を置けるも、かの八穗蓼を穗づみ、眞そがよそがの子らなど、重ねたる類なればなり。次の出雲八重垣とは出雲なる須賀の宮造り給ふをいへり。

【[illegible]】やくもたつはやくもさすに似て、やは矢なり。雲は蜘員と通じ矢竹をいふ。立つはさすと同じく指にて表

剌中剌などいふが如し。出雲の出は射なり。

【黑】やくもは彌籠(いやこめ)に立つなり。やくも立つと一つに續けて組立てたる用言と見るべし。倭建命の御歌に夜都米佐須とある米は米にて、やつみなすなるか、然らば彌集(やつみ)なすなり。

【鷹】八雲立つ出雲はユダヤ經典なるヤコモとイドムとの兄弟の名に當れるものなることは音韻上直に知るべきことなり。やくもの意味はヨカマトスなる希臘語に當り、容易なる勞働を意味せるものゝ如し。イドムは泉の義ならむ。

やさかどり　息づく妹萬十四

萬葉十四に息づく妹と連ねたり。やさか鳥は八尺鳥にて鴉の類なりといふ。水中に入りて出でては吐息をつくゆゑ、そのさまを嘆息せる女に喩へたるなり。◇『沖に棲む小鴨のもころやさか鳥息づく妹をおきて來ぬかも』もころは、如しの義。

【匠】鴨の水を出でては長き息を衝く故に八尺鳥といへり。卽ち上の小鴨を指していへり。小鴨の如、八尺鳥とつゞけたれば鴨の外にさる鳥のあるやうに聞ゆるなり。八尺鳥の名を以てやがて妹が嘆の息の長さにたぐひなきをとてかくはいへるなり。

【眼】やさか鳥とは鳥の名にあらず。上句にいへる鴨のことをいへり。水鳥は水中に潜みて頭を出しては、長き息をつくらむ故に、集中にも沖つ鴨の嘆きぞ我が爲るとも詠めり。なげきは長息といふ語の略なり。然ればやさか鳥つくと續けしは、水中入潜鴨をいへりと知るべし。息づく妹とは旅立ちたる我を戀ひて、八尺の長息つく妹

のことなり。

【管】萬葉に『沖にすむ小鴨のもころやさか鳥いきづく妹をおきて來ぬかも』もころは如くといふに同じといへり。やさか鳥は即ち小鴨の如くといへば、是も水鳥の名かと思ふをすべて水鳥は水に入りて魚をもとむるに、息をつかであるを、八十ばかり息づかぬ鳥といひて、すべて水に入る鳥の事とすべく見ゆ。八尺ばかりの長き息を衝く鳥といふなり。

【石】彌坂鳥の彌坂越えて息衝く如く、我も然かすと比したるなり。

やすかはの　安寢（やすい）も萬十二

萬葉十二に安寢もねずにと連ねたり。野洲川は近江にあり。ここはやすといはむとて同音の詞を重ねて調をととのへたるなり。◇『吾妹子にまたもあふみの野洲川のやすいもねずに戀ひわたるかも』

やすみしし　我大君紀、萬

景行紀にも仁德紀にも萬葉にも、我大君と續けたるもの甚多く、又わご大君とも、あご大君とも連ねたり。我といふことを古はあともわともいひたれば、わごもあごも同じく共に我の轉なり。さて按積の意は安く見そはす義と說く說もあれど八隅を知らしめすと贊辭を冠らせたるなるべし。後、玉葉には八隅しると用ひたり。

【仙】やすみと云は八洲なり。ししといふは初のしはしろしめす詞、次のしは詞の助なり。

【釆】八方上下八島國をしろしめすと云ふ詞なり。

【匠】仙覺云八すみは八洲（やしま）をいふ、知之の知の一字はしなり。假令如ニ寺中知客一ト而謂ニ之師可一といへり。契沖以

へらく、やすみは八隅なり。知之はしらしめらを省けるなり。立つをたゝしといふ如く古語にて、語上の詞にあらず。又云、知客をしかといふは、宋朝の禪宗を傳へ來て後、彼宗にその比の音を以ていふ名目なるを、何ぞ往古にめぐらすや。

【僻】八隅は借訓にて息（やす）の義なり。知之（しし）は借音にて鹿の義なり。昔崇神天皇奈良山に御狩し給ひし時、鹿ありて天皇の前に臥して拜し奉りければ、天皇あはれと思召して殺し給はざりしよし古説に傳へたり。されば息（やす）み鹿（しし）は我君を伏拜み敬ふ意の詞にて、我大君といふ時の冠辭なり。

【考】八隅まで殘なく知しめす天皇と申すことと誰も思ひて實にさることなれば、さても有るべし。されどもかくては唐文の詞の如く理り過ぎて、皇朝の上つ世の稱へ言にも似ず侍るはいかに。よりて思ふに、萬葉第一より始めてかたがたに、安見知之と書きたるを、正しき字とせんか。集中にも祝詞にも、安良氣久平良氣久見之賜之賜などいひ、安國と見し給ひ知しめすともよめり。さらば安らけく見そなはししろしめし賜ふてふ語を約めて、安見知爲（やすみしし）といひて冠らしめたるにや侍らん。且つ知之（しし）とは立たせ給ふをたたしし、御坐ますをおはししなどいふ類にて、天皇の御事へつけて崇め申す語なり。

【詞】尚書、皐陶曰、都在レ知レ人在レ安レ民といふことあり。これ天下知めすの言の基づくところ、こゝは安見の義なり。

【發】大君の天下を安らけくせさせ給ふ心に冠らせたり。後世はやすみしるとよみ續けたり。さる時は八隅知之とかけるを正字とし、四方八方を知召す心なり。新古のたがひめ能く思ふべし。

【冠】八隅と書けるは借字にて、安み知すてふ義なり。さてやすみのみはまみむめの活用言にて、惱み、うれしみ、かなしみなどいふみと同じ。さて知之をししといふは、足らしをたし、減らしをへしなどいふ類なり。やすみしすと書かざるはいさなどり海と續くるが如し。

【石】天が下八隅を〆領る我大君と稱へたるにて稱詞なり。

【言】安見し爲の吾大王と心得べし。このしは敬語なり。萬十九に豊宴見爲今日者云々、又國看之爲志氏と見えたり。やすみしすといふべきをやすみししといふはいさなどるといふべきをいさなどりといふに同じ。

【山】安知なり。西行撰集抄に淸涼紫宸の間にやすむし給ふとあるこれなり。上のしは知る、下のしは助辭なり。

【美】熟考ふるに、やすみししの下のしは所知の意にて、天下を安く見所知よしの稱言なるべし。(仙覺が初めのしはしろしめす詞、次のしは詞の助なりといひしは知之とある文字に泥みての說なり)しかいふ故は日並知皇子の尊を續日本紀の古本どもには日並所知の皇子尊とあり。又粟原寺の鑪盤銘には日並御宇東宮とあり。これらの所知又御宇の字はしの言にあてたるものなれば、しは即ち所知又御宇の字の意なること明かなり。かくてこの御名のしと八隅知之の之と全く同意なるべく覺ゆればなり。

【燈】やすみししとは至上至高を意味する語なり。即ちやとは希臘語にしてすみししとは羅典語同意義のスムムスのスムムしとなり、すみししとなり、兩語を連ねてヤスムムスのやすみししとなりしなり。至上の敬語なり。

やそくまの　熊内　菅根集

菅根集には熊内の地に冠するにやそくまのを以てせり。やそくまは八十隈にて道の多くのまがりたるところをい

ふ。同音を重ねて調となさむが爲に置く。

やつはしの　くも手に 後九

後撰九にくもでに思ふと續けたり。くも手とは彼方此方にといふ意なり。さて捉積の意は三河國八橋といふ所には、橋八つ渡したること伊勢物語にも見えたれば、蜘の手足は八本あるより、かく續けたるなり。◇『うちわたし長き心は八橋の蜘手におもふことは絶えせじ』

やつめさす　出雲建 記

景行記に出雲建といふ人の名にかけたり。燭明抄にえつめさすといへるは、夜都米佐須を衣都米佐須と誤りたる書に從へるなり。八雲立つと同じ義なるべし。

【考】日本紀には椰何毛多莵、伊頭毛多箇流儀とあれば、八雲立つと同じ續けなり。右つめすの三語は皆の通へば、さる唱もありしならん。

【苑】やつめさすは彌つ芽のさすなり。いづもとかかるいづは活き出づるの意なり。

【言】やつめとは鳴筒をいふ。和名抄に也豆米加布良といへり。又簾をいつみといふ。されば鳴筒を簾にさすといふ意にて續けとせるならむ。

【石】この枕詞いかなる義とも知られず。寫誤りなるべし。

やへだたみ　平群山 萬十六　扇の山 山會集

萬葉十六の長歌に平群山に冠らせたり。八重疊綵纏るといふを大和の山名にかけたり。諸抄雅言の山會集に扇の

由に冠らせたり。扇は使はぬ時はたたみてあるより縁語を以て扇の山にかけたるなるべし。

【考】こは此の疊を幾重も隔て敷くにて、續けたるさまはこもたたみ平群の朝臣と續けたるに同じ。やへは彌重の意なり。

【石】是はへぐり、へぐるといふ詞を平群山と續けたり。

やへむぐら　さしてし門 後十四

後撰十四に「八重葎さしてし門を今更に何に悔しく明けて待ちけむ」とあり。葎の八重に繁りて、人の往來も稀なるばかりにさし堅めし宿といふ意を匂はせて、直ちに戸鎖したりし門と續けたり。

【三】葎の刺すといふ義を閉すの義に轉じてさしてし門をと續けたり。

やほかゆく　濱のまさご 萬四、拾十四

萬葉四、及拾遺十四に濱のまさごと連ねたり。やほかとは八百日と書きて、八百日に限らねど數多き日をいふ。されば長き旅ゆく濱邊といふ續にて枕詞にあらず。石上枕詞例の說はいかがはし。

【石】八百日は借字にて、やは彌の略、ほは帆、かは日なり。彌帆日々にゆく濱と續けたり。

やほたでを　穗積の朝臣 萬十六

萬葉十六に穗積の朝臣と連ねたり。やほたでとは彌穗蓼にて多くの穗をもちたる蓼をいふ。その穗を摘むといふを同音をもてる人の姓にかけたり。◇『若子ども草はな刈りそ八穗蓼穗積のあそがわきぐさを刈れ』

【考】八穗蓼とは一本の蓼に、多くの穗あるものなれば、彌穗といふなり。且つ古蓼を摘みて用ふるは內膳式に

蔓の茹てふあり。

やほにゝやほによし　杵築宮祝、記

出雲國造神賀詞には八百丹杵築宮とも、雄略記にはやほによしいきつきの宮とも見えたり。やほには八百土、よは呼かくる辭、しは助詞、いは接頭辭、きつきは杵築にて今の出雲大社をいふ。出雲の意宇半島は昔は島にてあり、今の杵築宮のあるあたりは昔は海峽の一端なりしなるべく、そこに宮居を築かれたる時のことを想ひていへるなるべし。

【厚】多くの土を杵にて搗きて築きたる宮にて甚の堅きなり。

【考】やほは彌百を約めたる語、には土の古言にて、彌百と多くの土を重ねて、杵築き固めたる宮地をいへり。よしのよは呼び出す辭にて、しは助辭なること既にいひつ。いきづきのいは發語にてきづきは杵築なり。

【荒】やほには彌百土にて多くの土をいふ。よしは讃むる詞、彌百土よしと多くの土をほめ、次に築り立つる宮のことをいふ。

【石】やは彌の略、ほには赭丹なり。よしは依會り領るといふ義なり。赤土をほにといふは、日光火光をほといふに等しく、土色の日色火色あるが故なり。いきつきの、いは冠辭にて築なり。やほに依會りその丹を領て築きたる宮と稱へしなり。これも稱詞にて枕詞にあらず。

やまかぜの　あらちの嶺新後拾遺六

新後拾遺六、篤家卿の歌に有乳の嶺と連ねたり。山風の荒しといふを有乳の山に轉じてかけたり。あらちの嶺は

長前にあり愛發とも書けり。◇『矢田の野にうちいで見れば山風のあらちが嶺は雪ふりにけり』

やまがつの　いや敷き後拾遺六　しづはた帶新後撰十七　逢ふ期かげろふ

續拾遺六にはいや敷き降れる夜半の白雪と連ね、新後撰十七にはしづはた帶とも、蜻蛉日記には逢ふ期なしとも續けたり。やまがつとは樵夫又は賤民をいふ。よりて賤しきといふをいや敷き降れると轉じ、山賤の意により倭布機にて制りたる帶にいひかけ、賤民は物を荷ふ朸(あふこ)をもてるより、これを逢期にうつしたり。朸は兩端の尖りたる棒にて物を貫きて荷ふものをいふ。逢期は逢ふ時をいふ。◇後拾遺『眞柴かる路やたえなむ山賤のいやしきふれる夜半の白雪』新後撰『山賤のしづはた帶のいくかへりつらき恨にむすぼほるらむ』かげろふ『片戀や苦しかるらむ山賤の逢ふ期なしとは見えぬものから』

やまがはの　たぎつ心萬七　音古十八　淺ましき拾十四　皆下なり拾八

萬葉七及十一には瀧つ心とも、古今十八には音にのみ聞くとも、拾遺十四にはあさましきとも、同長歌にはみなしもなりとも連ねたり。山川を流るる川は、岩にせかれたぎりゆくもの故、戀ゆゑに心のたぎつといふ語にいひかけ、その水の淺しといふを、惘るるの意なるあさましきと轉じ、川の水下といふより皆下（位につきて）なりしと同音異義の語にうつしたるなり。◇萬『言に出でていはばゆゆしみ山川のたぎつ心をせかへたりけり』古『山川の音にのみきく百敷をみをはやながらくるよしもかな』拾『さを鹿の爪だにひぢぬ山川のあさましきまでとはぬ君かな』拾『思ふもしるし山川のみなしもなりし諸人も云々』

やまぎりの　いぶせき萬十

萬葉十にいぶせき我胸と連ねたり。解にいへる如く、山霧の如く立ふさがりて心地惡しき我胸と比したるなり。但し序歌なり。◇「長月のしぐれの雨の山霧のいぶせき吾胸誰を見ば止まむ」

やまこえて　遠津の濱 萬七

萬葉七に「山越えて遠津の濱の石つつじ我が來るまで含みて有り待て」とある山越えてを、服部高保は枕詞となせり。遠津の濱は紀伊か。今の海部郡の徳勒津のあたりとせば、その地形により枕詞とも見らるべく、或は山越えて我が來るまでと續くにて枕詞にあらずとも見らるべし。土地の實況を知らねばいづれとも定めがたし。

【服】山など越え行くは、路遠きものなるゆゑ、遠つといひ出でん爲に山こえてと冠辭に置けり。遠つ濱は地名なり。津國紀州の中なるべし。

山城の　こはに 古十四　問はぬ 新勅十六　こまかに 小大君集

古今十四にはとはに相見むとも、新勅撰十六にはとはぬつらさとも、小大君の集にはこまかに知らぬとも連ねたり。山城の名所に鳥羽及狛といふ地あれば、同音異義のとことはの意なるとはにとも、又訪はぬとも續け、細かにともかけたるなり。◇古「津の國のなには思はず山城のとはに相見むことをのみこそ」新勅「つの國のみつともいひそ山城のとはぬつらさは身にあまるとも」小大君「うりどころここにはあらじ山城のこまかにしらぬ人なたづねそ」

【服】不ㇾ斷てふを、とはにと詠めるなり。とはといふは、ときはてふ語を略るなり。それを山城の鳥羽てふ所名にかけて冠辭におけり。

【新】新勅選には鳥羽といふ地名を人の問はぬにそへ、小大君集には狛といふ所の名を細かにとそへたり。

【三】こは國名を枕に置きて地名を用語にはたらかせて下へ續けたり。これ三代の比の枕詞の一種なり。

やますけの　實ならぬ萬四　亂れ萬十一　止まず萬十　そがひにねしく萬十四

萬葉四には實ならぬとも、十及十二には止まずとも、十一には亂れとも、十二には思ひ亂れとも、十四にはそがひにねしくとも續けたり。山菅の卽ち麥門冬の葉の互に入り亂れたるを思の亂るるに比し、その實といふより實事ならぬ意にいひ下し、又同音を重ねて調をなさむとて止まずに冠らせたり。そがひにねしくとは背中合せに寢しとの意にて、山菅の葉の正しく相對はぬに比したり。但し菅そがの背向奏をなす。◇萬「山菅の實ならぬことを我によせいはれし君は誰とかぬらむ」萬「玉葛たえず行かさね山菅の思亂れて戀つつまさむ」萬「山菅の止まずして君をおもへかもあがこころどのこの頃はなき」萬「かなし妹をいづち行かめと山菅のそがひにねしく今し悔しも」

【仙】山菅のそがひにねしくとは根の長くして、もとの草村よりは遙に遠くのきてこゝ〳〵に茂生れる意なればせなか合に遠かりゆく心なり。

【考】眞ならぬことを實ならぬといひて、山菅の實ならぬといひかけたり。又葉繁くて亂れ靡くものなるを戀の亂にいひかけつ。山菅は和名抄に麥門冬といへるものにて、山々に生ひて瑠璃の玉なす子あり。又そがひに寢しくと續けたるはすげとそがひと通ふ故に重ねたり。背向はうしろむきといふに同じ。

【袋】山菅は俗に尉の髮といふこれなり。

【釋】山菅の葉は彼方此方に靡きて、正しく相對はざる故に、背面と續く。
【石】そがひはそ來合の約、そは背なり。背とそそ來合ねしといふ義にて、軈て背〻といふに等し。山菅は背と背と向合ひて生へるものか。さらば比したるなり。
【折】山菅のそがひは同音聯想。みならぬ、亂は麥門冬の實を珍重した所から起つたらしい。

やまたづの　むかへ記

允恭記に『君がゆきけ長くなりぬ山たづのむかへかゆかむ待つにはまたじ』とあるを萬葉二には第一句をやまたづねとしむかへと連ねたり。山たづの誤なるべし。山たづは木を伐る手斧にて我が方にむけて削るものなれば、迎への枕詞とすとの說もあれど、たづの木の枝葉の相むかへるに喩へたりとの說從ふべし。たづの木につき加納諸平の多豆考にはにはとことし、木村正辭の美夫久志には女貞とも、吾友學田八十代氏はのりの木に似たる對生葉の灌木にて阿波の山間には今も山たづの木といふ方言存せりといへり。
【袖】今按にたつぎといひて木をきるものに山を添へてやまたつぎといふべきを、ぎの詞を略して山たづといふ。
【厚】杣人は木を伐り置きて、水の多き時を待ちて河より流して、下に下りてこれを迎へて取れば、迎とはつづくるなるべし。
【匠】山には山彥木魅あるゆゑに杣人などの遲ければ覺束なくて迎を遣すなるべし。
【考】こは古事記の註に山多豆者今造木斧也といひ、和名抄に鐇和名多豆伎、廣刄斧也といふなどを併せて思ふに、今杣人のもたる廣刄斧の類なるべし。迎ふと續くるは、斧もて木を削るには、左右の手して我向にふりあげ

て打つをいふならん。

【傳】卅九山釿(たつ)のなるべし。迎へと續くゆゑは、凡て釿は刄を吾方へ向へて用ふるものなればなり。大な刄物の中に刄をこなたざまに向けて用ふるものは、この物のみなり。故、迎の枕詞となれるなり。これにても山多豆は材を伐る釿なること熊々明らけし。契沖も袖中抄に本づきて、この御歌の萬葉に山たづねとあるに就きて杣人の如くして、杣人は山に入りてよき材を尋ねたるものなれば、山尋ねと名づけたるを下略していへるにや云々、いと物遠き謬言なり。

【加納諸平多豆考】古事記に多豆者是今造木者也とある造木者と訓むべく、今はにはとこといふ。にはとことは一名を多豆の木、又、木多豆ともいふ。木たづ即ち蒴藋(そくとを)に對していへるなり。山たづの木葉も枝も對ひ生ずるものなれば、迎へといふ語の發語とせしならむ。

【秘言】大神宮儀式(木本祭用物中)大鑽二柄、立義鑽二柄、前斧八柄などある。此大鑽は鐇の柄の長きにて即山多豆。名義は山立截なるべし。山に立ちて截るよし也。今杣人の山にして植木(たちき)を切るを見るに、兩人其樹木の左右に對ひ立て相互に柄の長き大斧もて打つつ切る。これやまたづのむかへと續く言のよしなり。

【美】正辭按に造木の二字は正字にて即ち山多豆の漢名なり。眞本新撰字鏡七に女貞とあり。この木、たづの木の名あるのみならず、一名造木とさへあれば造木は漢名なり。女貞はその葉相對向せるものなれば向ふといふべきものなり。接木心は年中葉あるものにあらず、女貞は字鏡に樋、又樣ともありて常磐木なり。

【黒】山たづは葉の互生する故に向へかかる。山たづといふは蒴藋(そくとを)(たづといふ)に對していふ。義臣便覽後集に

訓讀をくさたづといへるは後世の名にてたづといへるならん。このたづといふに對へて山に生ずるを山たづといへるならん。又云、山多豆は山美々なり。むかへは茂生にて、むかはえを約めたるなり。さりとれば又茂るよりかくいへり。いかしやこはえの如くといへるに同じ。

【豊】たづはのりの木に似たる對生葉の灌木なり。たづといふ名は今も阿波國の山田部の方言に遺れり。

やまとの　黄楊の小櫛萬十三

萬葉十三の長歌に日本の黄楊の小櫛と連ねたり。大和の山邊郡に闘雞の里あり。今都介野村といふ。地名のつげを木の黄楊にうつしたり。

【眼】こは大和國山邊郡つげてふ地名あるを、黄楊の櫛といはむ爲に、やまとのと冠らしめたり。板本には日本之をひのもとのと點せるは惡し。やまとのと四言によむべし。神代紀に耶麻騰と同訓あり。

山鳥のひとりし寢れば六帖　尾の上續拾遺

古今六帖にひとり寢ればと比し、續拾遺には尾の上と連ねたり。山鳥は雉子の類にて、雌雄別處にいぬるものなれば、男女の床を別にして一人寢たるに比したるなり。又山鳥の尾といふより嶺の意なる尾の上と續けしなり。

◇六帖「秋風の吹く宵ごとに山鳥のひとりしぬれば物ぞ悲しき」續拾遺「長しともなに思ひけむ山鳥の尾上にかかる秋の夜の月」

【錦】「足引の山鳥の尾のしだり尾のなが〳〵し夜を獨りかもねん」山鳥のを一人ねに冠らすといふは誤なり。

やまのまゆ　出雲の子ら萬三

萬葉三に『山の際ゆ出雲の子らは霧なれや吉野の山の岑にたなびく』とあり。山のまゆのゆはよりの古言。燭明には山のはにと訓みたれど、契沖の說に從ひやまのまゆとよむべし。雲は山の際より出づるものなれば、出雲娘子といはむとて置きたるなり。

山の井の　淺き心萬十六　飽かで古八

萬葉十六には淺き心とも、古今八にはあかでとも連ねたり。◇萬『あさか山影さへ見ゆる山の井の淺き心を吾がもはなくに』古『むすぶ手の雫に濁る山の井のあかでも人に別れぬるかな』山より湧き出づる泉は淺きより心の淺きに比し、又水のことを梵語にてはあかといふ故に、山の井の水といふ心にて、あかの音をもてる飽かでもと轉じたり。而して一首の意より考ふれば、淺き山の泉に手をひたし掬ひあぐるときは、その指の間より雫の滴りて濁の爲に垢を生ずるが如く、いと惜しき心地する意にも聞ゆ。

【冠】山の井は岩間に水の湧く所をいひて、深からぬものなれば、淺きとはいひつづけたり。

【飽】岩井の水は、手に掬ぶたび每にかき濁さるるにぞ、飽ばかりはえ汲まぬといふ詞のあやのめでたさよ。又拾遺集には山の井の濁りしよりもと續けたり。

やまはたの　將や柿園詠草

柿園詠草にははたといふ副詞に冠するに山畑のを以てせり。同音を重ねて調となす。

やまびこの　こたへ萬、古、後　聲に後十二

萬葉六、十及古今十一後撰十二に答へと續け、後撰十二には聲に立ててもとも連ねたり。◇萬『山彦の聲に立て

ても年はへぬ我ものおもひを知らぬ人きけ」山彦とは狹き谷間にて、人の大聲を發するとき、向より答へするが如く聞ゆるものをいふ。今日にては音の反響なることと人々のよく知ることなれども、古人はこれを山神の所爲と考へたり。さて山彦は答の音あるより、人の返事返答、若くは聲に立てても、音といふより山谷の音響といふ里名にも冠らせたり。

【紹】山彦は天聲に同じくて、山谷に聲ありて答するをいふ。說文に谽は谷中響なりといふ是なり。俗にはこだまといへど、それは和名抄に樹神をこだまとよみて異なり。年ふりたる木には怪靈ありて、怪しき畏怖しき聲を吼るとするを木客ともいひて、魑魅の屬なり。

やまぶきの 匂へる妹萬十一　止む萬十

萬葉十一には匂へる妹と連ねたり。山吹の花のうつくしきを、婦女の美しき姿に比したるなり。やまぶきを倭名には山の款冬となせど、考の說に從つて山吹とすべし。◇萬「山吹の匂へる妹がはねず色の赤裳の姿夢に見えつつ」枕詞解には、萬葉十に見えたるやまぶきの止む時もなくと續けたるを擧げたり。これは同音を重ねて調かなしたれども、一首の意を考ふるに、實際に山吹に就きて慕ふ情を述べたるものなれば、枕詞にあらず。

【管】萬十に山吹のやむ時もなく云々、重ね詞にいひかけたるなり。

やま水の いはまほしく後九　あさき契新後撰十四

後撰九にはいはまほしくと連ね、新後撰十四にはあさき契と續けたり。始のは山水は岩間などより出づるものなれば、いはまを言はまほしくと轉じ、後のは山水の淺きを契の淺きに比したり。◇後「行かもなくせかれたる山

水のいはきほしくもおもほゆるかな」「いかにせむ岩間をつたふ山水の淺き契は末もとほらず」

【冠】山水岩間といふ義を、言ばきほしと轉かせたるなり。尤可笑のはたらきなり。

やまもとのゝやましたの　あけのそほ舟萬三

萬葉三に「旅にしてものこほしきに山下のあけのそほふね沖に漕ぐ見ゆ」とあるを、やまもとゝ訓む説とやましたとよむ説と兩説あり。いづれ正しからむ。明かならず。後人はやまもとゝ讀めり。續古今及續千載にその例あり。あけのそほ舟とは朱(あけ)の埴(はに)舟にて、赤土色に塗りたる舟をいふ。山下を地名と見ばこれは枕詞にあらず。又案するに、萬葉十二には上(あげ)に種まき云々の歌ありて、あげは上田の意なり。海岸地方にて少し小高き所を今もあげと呼び、村名に負へる所あり。されば山下の上(あげ)といふを朱に轉じて枕詞とはせるか。

【仙】山下(もと)は肥後にあるにや。夜の明くるには山の端より白み始めてあけ渡るによそへて、山下のあけのそほふねとよそへよめるなり。

【匠】あけを紅葉になして續けんと山下といふか。山下は仙覺云、所の名なり筑後國に有にや。今按、尾張より都の方へ歸る歌なれば筑後の山本郡にはあるべからず。只常の山本なるべし。

【冠】あけのそぼ船とは朱の埴にて、赤塗の舟なり。その赤土は山本などにあるものなれば、山本のと冠らしめたり。はにともそほにともいふ。

【解】山下のとよみて秋山の條下にいへり。

【石】山本のといひて、あけ(赤)と續けたるは、枕なるべくぞ覺ゆる。こは秋山の紅葉たる如き、あけのそほ舟

と比したるなり。

やみのよの　行先知らず萬二十

萬葉二十に行先知らずと比したり。俗に一寸先は闇の夜などいふが如し。◇『闇の夜のゆくさき知らずゆく吾をいつきまさむととひし子らはも』

やみよなす　思ひまどひ萬九

萬葉九の長歌に思ひ惑はひと比したり。闇夜の如くと喩へたるなり。なすは似すなること前にいへり。

ゆ の 部

雪じもの　往來つつませ萬三

萬葉三の長歌に雪じもの往來乍益と連ねたり。往來乍益はゆききつつませと訓むべし。古義にゆきかよひつつと訓みて、雪の字を下句につけて讀みたるは宜しからず。旅行くに氣を附けといふ意にて、かく言はむとて同音の句を枕におきて詞となしたり。じものは狀之の轉なること前にいへり。

【行】ゆきしものと訓む。しはじといふ義にあらず。うましもののしに同じく、雪の一方を領めたる助辭なり。さてその雪の名を行の詞に轉じてゆききつつませと續けたり。

行く牛の　おそき翁藤居家集

藤居家集にはおそき翁に行く牛のを以てせり。牛の步のおそきをうつしたるなり。

ゆく川の　過ぎ萬七

萬葉七には過ぎにし人とも、九には過ぎにし妹とも連ねたり。亡せにし人を流水の逝きて歸らざるに喩ふるも論語に逝者云々などといへると相似たり。◇「往く川のすぎにし人の手折らねばうらぶれ立てり三輪の檜原は」

ゆく月の　入佐の山源氏　御船の山續後拾遺

源氏末摘花に「里分かぬ影をば見れどもゆく月の入佐の山を誰かたづぬる」とあり。月の入るといふを但馬の入

佐山にかけ、續後拾遺五には『空清き雲の浪路をゆく月の御船の山に秋風ぞ吹く』とあり。こは空ゆく月を船に譬へたる古歌に基づきて、吉野の御船山に序の體にていひ下したるなり。

ゆくとりの　爭ふはしに萬二　群れて侍ひ萬十三

萬葉二の長歌に行く鳥の爭ふはしにとも、十三にはゆく鳥の群れて侍ひとも連ねたり。飛び往く鳥の後れじと爭ふ如く、軍人の進むに喩へ、又鳥の群りたるに人の群れ居たるを比したるなり。

【考】群りて飛び行く鳥の己後れじと爭ひつつ行くを、多くの軍人どもの先きを爭ひて向ふに喩へたり。はしにとは間にてふ義なり。

【解】萬葉十三のは群而待は群而侍の誤なり。

ゆく舟の　過ぎて萬十　ほ手うち土佐　ほにあらはれ新千

萬葉十には過ぎて來べしやとも、土佐日記にはほ手うちてとも、新千載十にはほにあらはれてとも連ねたり。舟の過ぎゆくといふを、人の許を訪はずして過ぎ行くといひ下し、又帆の側面に付けてそを左右にひかふる索の綱を帆手といふ。それを人の手を拍つほでに轉じ、又高く見はるることを、ほにあらはるといふより舟の帆といふを轉じて續けたり。◇萬『吾戀を妻は知れるをゆく舟のすぎて來べしや事もつげなく』土佐『追風の吹きぬるときは行舟のほでうちてこそ嬉しかりかれ』

【眼】萬葉に過ぎてといはん爲、行舟のと冠らせたり。集中にゆく川の過ぎ行く妹などよめるに等し。これをこの舟のとあらば冠辭ならず。

ゆく水の　過にし妹萬九　絶ゆることなく萬十七　早く古十一　大井の河邊古序
淺き心新勅十二　隅田川蘇居家集　三河國東うた

萬葉九には過にし妹とも、十七には絶ゆることなくとも、古今十一には早くぞ人をとも、大井川行幸和歌序には大井川の河邊とも、新勅選の十二の長歌には淺き心とも連ねたり。◇萬『しほけ立つ磯にはあれど逝く水の過にし妹が形見とぞ來し』萬『片貝の川の瀨きよく行く水のたゆることなくあり通ひ見む』古『吉野川岩波たかく行く水の早くぞ人を思ひそめてし』流れゆく水の過ぎて歸らぬを、死せし妻に喩へ、流水の日夜止まぬを時の間なきに比し、流勢の速きを以前よりの意なる早きと轉じ、流るる水の多きを類音の大井と重ねたるなり。蘇居菁の集には隅田川にかけたり。水の澄むといふ意にて續けたるなり。菅根集加藤枝直が歌には三河國に冠らせたり。

ゆだねまき　ゆゆしき君萬十五

萬葉十五にゆゆしき君と重ねたり。ゆだねとは御祭の料に用ふる穀物齋種をいふ。ゆゆしき君は忌々しといふ意なり。同音を重ねて調となす。◇『青柳の枝きりおろしゆだねまきゆゆしき君に戀わたるかも』

【語】忌々しきといはんにのみ、ゆゆしき君とはよりつきがたきといふ程の意にここは用ひたり。ゆだねは五百種なり。ゆつ岩村を五百箇岩村と書けるにて知るべし。穀種を蒔き種うるに、その田に眞柴折りさし繩引はへていみいみしくするなり。

【解】ゆたねは齋種なり。さて齋忌しき君と續けたり。

ゆふごりの　霜萬十一

萬葉十一に『夕凝りの霜おきにけり朝戸出にいとあとづけて人に知らゆな』とあるを楫取魚彦の續冠辭考にあげたり。尋常の形容詞と見るも妨なし。

ゆふだすき かけ古七、後四、千 かゝる袂拾十 我片岡の神千二十

古今七には一日も君をかけぬ日はなしとも、後撰四にはかけてもいふなとも、拾遺十にはかかる袂とも、千載二十には我片岡の神とも、新古今七には千載をかけてとも連ねたり。ゆふだすきとは木綿にて作り肩に掛くる襷をいふ。肩にかくるものなるより、かくる、かかるの語を轉じて心に掛くるとも、斷かるとも、千歲を兼ねての意なる千載をかけてとも、肩にかくといふより、片岡の神とも轉じたり。◇後『木綿だすきかけても言ふなあだ人のあふひてふ名はみそぎにぞせし』 拾『ゆふだすき斷るたもとは煩しゆたげにとけてあらむとを知れ』 千『さりともと頼ぞかくるゆふだすきわが片岡の神とおもへば』 新古今『ゆふだすき千年をかけて足引の山藍の色も變らざりけり』

【紹】神に事ふる忌人等はゆふをもて襷とし、是をかけて萬の事をなし奉るなり。さて古今にかけてといふは、想を懸るなり。

【三】ゆふだすきは宮人の掛くるものなれば、宮にかけてもといふ義に轉じてかけてもいふなと續けたり。又拾遺十にゆふだすき草のかきはもことやめてきけとあり。草と續けしはいかなる義か。

ゆたねまく 小田の若子藤垣內集

藤垣內集には小田の若子に齋種まくを冠らせたり。つづけは前條に同じ。

ゆふたゝみ 手向の山萬六、十二 田上山萬十二 白月山萬

萬葉六及十二には手向の山とも、十二には田上山とも白月山とも連ねたり。ゆふだたみとは木綿を疊むにて、即に幣奉らむ爲に、手にて疊みて置くより、手向山とも、その轉音なるたながみ山にも冠らせ、又木綿は白きものなれば白月山に續けたり。眞淵は白月山は田上山の誤といへり。新勅選にはこれを白月山として擧げたり。◇萬『木綿疊手向の山をけふこえていづくの野邊にいほりせん子ら』萬『木綿だたみ田上山のさなかづらありさりてしも今ならずとも』『木綿裏白月山のさなかづら後も必ず逢はむとぞおもふ』

【補】ゆふだたみ田上山といへるゆふは御幣なり、みぬさの串の頭には紙を疊みてつゝめばゆふだたみと云。疊みたる紙のすそに四手を書きて垂るゝものなれば、田上山といふ名を手の上といひなせるなり。

【燭】ゆふたたみ田上山は木綿を疊む手と續けたるか。又ゆふは白きものにて、神に手向くるものなれば、白月山とも手向の山とも續くるなり。

【考】こは幣料の木綿布をば、たたみて手に捧げて手向くればしか續けたり。萬三に木綿疊手に取り持ちてよめる是なり。又十二に木綿裏白月山とあれど、木綿裏てふ語の例もなく、白月山てふ山も聞えず、はた木綿は白しといへどかくやうにのみ續けんものとも覺えざるなり。こは草の手に木綿疊田上と書きしを木綿裏白月と見そこなひたるなり。

【眼】木綿裏白月山はゆふづつみ在明山なり。（尙ゆふづつみの條を見よ）

【解】木綿は神に供へ、常に貯へ置くにも打疊みてある。そを頓てゆふだたみとぞいひつらむ。それを神に手向くる意にて手向の山にかけ、又田上山とはゆふだたみ疊るといふ意にかけたり。

ゆふだちの　ふるから小野新勅三　一村すゝき新後拾

新勅撰三にはふるから小野とも、新後拾遺四には一村すゝきとも連ねたり。夕立雨の降るをふるから小野といふ地名にいひ掛け兼ね詞となし、又夕立の一むらといふを一村すすきに轉じたり。◇『水無月の雲ともいはば夕立のふるから小野の楢の下蔭』

ゆふづきの

萬葉一に莫囂圓隣之、大相七兄爪謁氣とあるを續紹にはゆふづきのおほにてといへばと訓みて、夕月はさやかならぬものなれば凡の意に連ねたりといへり。されどこは萬葉中解すべからざる歌にて、仙覺はゆふづきの仰ぎてとひしと點じ、契沖は一句の圓は圖の誤とし、二句の謁氣を靄氣に作りて、まがつりの、おほひなせそと訓み、東麻はきのくにのとよみ、宣長はかまやまのと訓み、久老はかぐやまのとよみ、或人はあけくれのとよみ、其成はゆふづきよといひ、諸説區々にしていづれとも定めがたし。

ゆふづく日　入佐の山新勅六

新勅撰冬の部に入佐の山に冠らせたり。夕づく日入るといふを、入佐に轉じたること行く月のに同じ。◇『夕月日入佐の山の高根よりはるかにめぐる初しぐれかな』

【語】つくは著なるべし。夕日の斜陽陽炎の如くにして其桔槔のかはる〳〵上下するが如し。

ゆふづく夜　曉闇萬十一　小倉の山古五　入佐の山千三　入野拾遺愚草　かけの瀧夜鶴吟

萬葉十一には曉闇と連ね、古今五には小倉の山とも、千載三には入佐山とも拾遺愚草には入野とも、夜鶴吟には

かげの悲とも續けたり。夕づく夜とは月の光幽かなる夜をいふ。夕月のを暗しとか、入るとか、影とかいふを他へ轉じたるなり。曉闇はを暗きものなれば續く。◇萬『夕月夜あかつき闇の朝影に我身はなりぬ汝をおもひかねて』古『夕月夜小倉の山になく鹿の聲のうちにや秋はくるらむ』千『夕月夜入佐の山の木がくれにほのかに名のる時鳥かな』拾遺愚草『夕月夜入野の尾花ほの〴〵と風にもつたふさを鹿の聲』續撰吟『夕月夜かけの港の入汐に浪もかすみもかへるかりがね』

【童】夕月夜とは宵に出てとく入るをいふなり。

【仙】夕月夜の頃曉闇なればよそへよめるなり。

【紹】夕月夜なれば、必あか時は闇なるを冠とせしは、三冬つき春さりくれば、春過ぎて夏きたるらしの格なり。

ゆふづゝの　かゆきかくゆき萬二　夕萬五　ほし六帖

萬葉二の長歌にかゆきかくゆきと續け、五には夕になればとも古今六帖にはほしとは見れど逢はぬ君かなと連ねたり。『日暮るれば山の端に出る夕づつのほしとは見れど逢はぬ君かな』ゆふづつとは夕方に見ゆる太白星をいふ。而して星は西に往き東に去るが如く見ゆるものなれば、人の心痛めて右へ左へさまよふ意にて、か往き斯くゆきと連ね、又夕と同音を重ねて調をなし、星を欲しに轉じて續けたり。

【考】夫の皇子の心痛みて慕ひ行き給ふとき、足も定めず、彼方此方たゆたふ様を、長庚星の或は西に往き或は東に去りて見ゆるに譬へたり。夕星は和名抄に太白星一名長庚暮見二於西方一爲二長庚一といへり。

【紹】六帖のは長庚星の星を、見ま欲しの意にかけたり。

ゆふづつみ　在明山萬十二

萬葉十二に木綿裏白月山とあるを、服部高保はゆふづつみ在明山のとよめり。ゆふだたみの條を參照せよ。

【眼】考には白月山てふ山有るべくもあらず。こは田上山を誤りたるなりと。又板本にはしらつき山とよめり。

高保考ふるに、木綿裏は借字にて夕恙なり。在明月の頃は夕は月なくして暗く、物ごと惱ましければ、在明といふに夕恙といふ語を冠らしめたるなるべし。

ゆふはたの　袖つけ衣萬十六

萬葉十六に袖つけ衣と續けたるを石上に擧げたれど、木綿機の袖と續けたるにて枕詞にあらず。

【石】ゆふはたは木綿旗にて、今、幟といふものなるべし。それには袖付けたるものなるが故に、木綿旗の如く袖付衣と比したるなり。旗の袖といふは小旗なり。

ゆふばなの　榮ゆる時萬二

萬葉二の長歌に榮ゆる時と連ねたり、木綿にて作りたる花は長久に枯れず美しきより人の齡の榮ゆるに比したり。

【考】木綿もて造れる花を、げに咲き榮ゆる花の如くにいひなして、皇子等の御齡の盛なりしをいふ冠辭なり。

ゆふひなす　うらぐはし萬十三

萬葉十三にうらぐはしと續けたり。夕日の如く心細しと比したり。くはしきとは精妙の意なり。

【冠】細とはうるはしと褒むる詞なり。うらぐはしは心細なるを約めてうるはしといふ、物每に麁きは惡く、細きは善ければ細の字を集中にくはしとよめり。夕日なすは如二夕日一なり。宮仕するを朝日夕日もて擧げたる故なり。

よの部

よごもりの　猪飼の岡萬二

萬葉二に穗積皇子の歌に、吉隱之猪飼の岡と續けたるを、其訓はよごもりのと訓みて猪飼の岡の枕詞とせり。されど、吉隱はよなばりと訓むべく、伊賀の名張といふ地名にて、そこにある猪飼の岡と續きたるなれば、枕詞にあらず。

【解】よごもりはよく籠るといふなり。猪のししの寢所はよく構えて臥すものなり。同じ所に七夜ふして亦寢所を代ゆるといへり。されば猪といふ詞設けむとてよごもりとは置けるなり。後の歌にゐごもりの猪飼の岡とよめるぞ心得ぬ。

よしき川　山も萬十二

萬葉十二に山もあらぬかと同音を重ねたり。吉木川は奈良春日山の下にあり。◇『吾妹子に衣かすがのよし木川よしもあらぬか妹が目を見む』

よしの川　よしや古十五

古今十五によしやと連ぬ。同音を重ねて縱の意なるよしやに轉じたり。『吉野川よしや人こそつらからめはやく言てしことは忘れじ』

よしのやま よしや忠岑集

忠岑集には吉野山よしやと續けたり。よしやといふ詞を述べむが爲に、設けたる枕詞なり。◇『吉野山よしやつれなく忍ばれむ耳なし山の知らず顏して』

よする浪 間もおきて萬十一

萬葉十一に『菅島のなつみの浦によする浪間もおきて我思はなくに』とあるを精貂にあげたれど、これは序の體にして、枕詞にあらず。

よつのとき 御津の濱風漫吟集

漫吟集に難波の御津の濱にかくるによつの時を以てせり。四つ三つと數の詞を列ねて調となす。

よど川の よどむ古十四

古今十四に淀むと人はと連ねたり。三代枕詞例には淀川の如くと比したりといへり。その上に同音を重ねたるなり。◇『淀川のよどむと人は見るらめど流れて早き心あるものを』

よと共に あふくま川後九

後撰九に「世と共にあふぐま川の難ければそこなる影を見ぬぞ悲しき」とあるを精貂に冠言としたれど、これは逢ふといふに阿武隈といひ掛け、頓て川の底といふに其許を兼ねたるにて枕にあらず。逢隈を阿武隈といふは東國の訛音なり。

【貂】世の中の心に任せぬ習と共に、逢事も亦かたければ、其處にありと知りつつ、影をだに見ぬゝ歎きてやる

なり。河といふより底にかけていへり。

よぶこどり　呼びかへせ萬十　聲に泣き出て後十

萬葉十に君呼びかへせと連ね、後撰十に聲に泣き出でと續けたり。始のは喚ぶ鳥の如くと人事に比し、後のは同じ音を重ねて調をなさむ爲におく。◇『我背子をなこせの山の呼子鳥君よびかへせ夜のふけぬとに』『ひとりのみ戀ふれば苦し呼子鳥聲になきいで君に聞かせむ』

よる舟の　ひるま信明集

信明集に『難波がた汐干のかたによる船のひるま侘しき戀もするかな』とあるを續貂に擧げたれど、こは序歌なりとす。但し寄る舟に夜の音をきかせ、これに對する晝間とおきて干る間とかけたり。

わの部

若葦のつかみ拉がむ蓬廬集

蓬廬集にはつかみ拉がむに冠らするに、若葦のを以てせり。若葦は柔かくとりひしぎ易きにより比となす。

わが命を　長門の島萬十五

萬葉十五に『我命を長門の島の小松原いく世をへてか神さびわたる』とあり。わが命長かれといふ心より、長の音をもてる地名にうつしたり。長門島は安藝にあり。今の倉橋島をいふ。島中の本浦といふは萬葉歌人の歌よみし跡なり。

【眼】こは天平八年新羅へ遣はさるる使人安藝國長門島に船泊てしてよめる歌なり。然れば常よりもことに命を長くあれと祈るはすべての事なれば、この冠辭は置けりともいふべし。長門といはんにうみ出す長門の浦にとも巻十三によめれば、然かいふべきを、集中に防人の歌、遣唐使に付きてこの歌、すべて命無恙行きてかへらむことをのみよめるに合せて思ふべし。

わか草の　妻の命記　わがつま紀　いや珍しき萬三　若く紀　新手枕萬十一

思ひつきにし萬十三　あゆび萬十七　ここの葉つてよ六帖　花のさかり千[illegible]

ほのかに見てし新古今十一　日暮里甲信紀程　濱崎閣

古事記上には妻のみこととも、仁賢紀には吾が夫とも、萬葉三にはいや珍らしき我大君とも、齊明紀には若くありきとも連ね、萬葉十一には新手枕とも、十三には思ひつきにしとも、十七にはあゆび手作りとも續け、六帖にはことの葉つてよとも續け、千載十四には花の盛りとも、新古今十一にはほのかに見てし人ともいひ下し、その他つまと續けたるは萬葉に甚多く、二卷には妻の命とも、そのつまの子とも、十一にも妻許とも接續したり。

◇萬「天なる一ツ棚橋いかでゆかむ若草の妻がりといへば足結したたす」萬「若草のにひ手枕をまきそめて夜をや隔てむにくからなくに」紀「射ゆ鹿をつなぐ川邊の若草のわかくありきと吾がもはなくに」六帖「春はまづ東路よりぞ若草のことの葉つてよ武藏野の風」萬「久方の天見る如くまそかがみ仰ぎて見れど若草のいやめづらしき我大君かも」。若草はなよなよとしてやさしきものなるより、思ひつきにしと人に比し、愛らしき妻に喩へたるを始にて、古は夫婦互につまと稱へたるより、我夫にも冠らせ、又若草は柔かく新々しきものなれば、その新の字をとりて、結婚當初のにひ手枕とも連ね、草の花といふより節まさに盛なる意にて花の盛ともいひ下し、草の葉といふより青の葉と續け、雪間の若草の地上にぬきいでて寸にも足らざるは珍しきよりいや珍しと人の上にいひ、又そのほのかなるより一目見し人にいひ係けたり。又同音を重ねて調をなさむ爲にわか草の若くと年齢の上にいひ、又草のもえいづることをあゆるといふより、脚結とて昔の人の足に纒へるものにもかけたり。村岡良弼は甲信紀行に日蔭里とも韮崎とも續けたり。こは若草の新といふを日の音又韮のにの音にかけたるなり。

【仙】つまのつはつづくと云ふ詞、まはまとはるといふ詞なり。草の生ひ出でて、未だ葉も開けざるは續きまとはれたり。又あゆびと續くるは、草の始めて生ひ出でたるは、葉のもとに纒はれたれば、あゆびによそへたるなり。

【燭】つまと續けたり。日本紀註に古者以二弱草一喩二夫婦一故以二弱草一爲二夫一云々、つまとは夫婦ともに通じていふ詞なり。わか草は春草・初草なり。我妻の他かず珍らしき心にて、若草に喩ふ。又萬葉三にはまし珍しき我夫君云々、皇子を見奉るにいや珍らしきといふ心を若草によせられたり。

【考】春の若草は、愛らしくうつくしまるる物なれば、夫婦に譬へ、又若草は新しき草なれば、なと新枕まくにいひかけ、又うつくしみ思ひつきにしてふ意にも續けたり。

【袋】催馬樂に若草の妹とあるも妻に同じ。獨案卿の說につまは端の義なりといへど例に違へり。

【解】思ひつきにしと續けたるは、草の地上に生著よしにて、若草の萌くと續くなるべし。あゆびと續けたるは、若草のあゆるといふ意に續けたるか。あゆるは若芽の草の成立つ意に續けたるならむ。

【石】若草の妻と續くるは摘の詞を轉用せたるなり。つまはつみあの約にて、つまむはつみ顯はさむ、つますはつみ顯すといふ義なり。このつまの詞を妻と轉じていへるなり。まし珍しみといへるは、若草の如く日々に增りめづらしみといふ義なり。思ひつきにしは若草の如く春情思ひ付きしと比したるなるべし。あゆびと續けしは、若草は野邊ゆく人の足ゆふと續けしなるべし。

【抄】わかくさのあゆび云々、萬葉類林に和名抄唐式云、行纏一具、本朝式云、波々岐、新撰本草云、脛巾、二の菌の若く生出でたるを編べければ、かく續けたるならん。

【折】うぶうぶしく愛らしい妻を嫩草を以て形容したものか、或は爪、摘むなどに關係があるか、或は若草の實用にする部分を特につまと言うたことさいたづまの如きか。あゆびとかけるは若草を結ぶといふところからゆびな

擬したか、或は若草足の結とかけたものか。

わがこころ　清瀧川玉葉　名草濱漫吟集　赤城山甲信紀程

萬葉十三に我心つくしの山とも、吾情清隅の池とも續けたり。こはあがこころと訓むべきか。又わが心とよむべきか。明かならざれば、今兩所に擧ぐ。心を盡しといふを筑紫にかけ、心きよしといふを、清隅にかけたることあの部にいへるが如し。玉葉には我が心清瀧川と續けたり。『年をへて濁にしみし我心清瀧川にすすぎつるかな』漫吟集には名草濱に連ねたり。こは心慰むといふ意のなぐさの音を地名に轉じたるなり。甲信紀程には吾心赤しといふより上州の赤城山に冠らせたり。

わがこひに　くらぶの山古十二

古今十二に『吾戀に暗部の山の櫻花まなく散るともかずは優らじ』とあるを續紹に擧げたり。こは我戀に比ぶといふ意に、山城の暗部の山をいひ掛けたれど、下句に照し見れば、譬詞と見る方穩かなるべし。

【紹】くらぶ山は近江の國にあること天武紀に見ゆ。又山城ともいへり。

わかごもを　かるぢの小野萬三　假なる宮鈴屋集

萬葉三の長歌に獵路の小野に係けたり。若菰を刈るといふを大和の地名獵路（かるぢ）に轉じたり。かるは輕の市と書けるに同じ處なるべし。本居宣長の長歌には假なる宮と續けたり。刈りを假に轉じたるなり。代匠記にはわかごも三重の川原の續を擧げたれど、そは吾疊三重の川原を誤れるならむ。

【考】こは菰を刈るといひかけしのみにて、小野まではかからず。且老菰は川ふるに堪へねば、まだ若きほどに

刈るものゆゑにわかごもとはいへり。わかくさと訓むは誤なり。

わがせこを　巨勢の山萬七　吾松原萬十七

萬葉七にはいで巨勢山とも、十にはな越(こせ)の山とも、十七は吾松原とも連ねたり。我兒子(せこ)即夫を、いで來ましあなといふを轉じて、大和の巨勢山に冠らせ、又な行かしめそといふを、なの音を隔てて、同じく巨勢山にかけ、又我兒子(せこ)を待つといふを轉じて松原に續けたり。◇「我背子をいでこせ山と人はいへど君も來まさず山の名にあらし」「我せこを吾松原よ見渡せば蜑少女ども玉藻刈る見ゆ」

わがたゝみ　三重の川原萬九

萬葉九に「吾疊三重の川原のいそのうらに斯くしもがもと鳴く蛙かも」とあり。あがたゝみとも訓まるべけれど、今按に揭げたり。さて接續の意はたゝみはこもだたみ平群の條にいへる如く一重二重といふより、三重と伊勢の地名へかけたるなり。吾といふは輕く添へたるか、若しくは吾の義なるべし。

【管】疊をばしき重ぬる心にてかく續けたり。

【匠】疊は表薦、重薦ありて中に藁を多く入れて作るをいふか、三重の川は伊勢にあればそこなるべし。

【考】貴人は禮記に天子之席五重、諸侯之席三重、大夫之席再重てふを引きたり。思ふにこゝの古による證あるにはあらねど、自ら疊の三重ならんも據なきにあらず。又或説に疊は表薦と三重あるものなればいふかといへり。是もよしなきにあらず。されどもし薦たたみ平群の條にいひし如く疊は幾重も隔て重ぬるをほめて、百重しみ重にて三重とは續けしにや。直熊野を三熊野、眞袖をみ袖などともいひ、且八重だたみてふも、八重に幾重の意な

れば、必ず三つの數を定めて三重といひ續けむは、ここの古の歌に似ぬ心地するなり。

【冠】わかだたみは吾が敷く疊といふことなり。又按若疊か。

わかひさぎ　我が久さならば萬十二

萬葉十二に『度會の大川のべの若楸我が久さならば妹戀ひんかも』とあり。我が久さしくならばといはむとて、同音の詞を重ねて詞となせるのみ。ひさぎのことは濱楸の條にいへり。

【紹】若歴木云々、歴木と書きたるは義訓なり。くぬぎと訓まば久ならばといふにかからず。

わかれては　伊倉の山六帖

古今六帖に『別れてはいくらの山を越えぬれば逢ふことかたくなりもてくらむ』とあり。一たび別れては、幾等の山を越えなば、再逢ふべきか。それも今は難しといふ意とも聞ゆれど、秋成のいへる如く、別れて行くといふを伊倉の山に掛けたるか。さらば立ち別れ因幡の山の類にて枕詞なり。伊倉山は信濃の伊那郡にあり。

【紹】別れては往くとかけしなり。別れてはのはは輕く用ひしなり。伊倉山信濃といへり。和名抄、長門國豐浦郡に伊倉の郷も見ゆ。

わかれぢを　おし明け方新勅八

新勅撰八にはおし明け方と續けたり。別路を惜むといふを戸を押し明くるにいひ掛けたり。兼詞ながら枕詞とす。

◇『別路をおしあけ方の槇の戸にまづ先だつは涙なりけり』

わきがみの　木間武雄蓬廬集

蓬農集には本間といふ姓にわぎがみのと置きたり。大和に嫌間丘（ははき）といふ地名あり。このははきの丘は岡見山のことにて後世本間村に屬す。この故事より人の姓にかく。

わぎもこが 鏡山後七　布留山千載一　御裳裾川新千載十二　かたちの小野新續古今五　日も夕暮續後拾遺五　孕の山山齋集

後撰七には鏡山とも、千載一には袖ふる山とも、續後拾遺五には日も夕暮のとも、新千載十二には御裳裾川とも、新續古今五にはかたちの小野とも連ね、山齋集には孕の山に冠らせたり。◇千『わぎもこが袖ふる山に春來てぞ霞の衣立ちわたりける』後『うちむれていざ吾妹子が鏡山こえて紅葉の散らむかげ見む』新千『わぎも子が御裳裾川の岸におふる君をみつのの楠とを知れ』續後拾『わぎも子が日も夕暮の霜なればあかずぞ花の色は見えけり』わぎもことは我妹子の音便にて、愛する妻又は婦人をいふ。そのもてる鏡とか、その容とか、その着たる衣の裳裾とか、衣の紐を結ふとかいふを同音異義の地名物名に轉じて用ひしなり。又我妹子が袖ふるといふを、大和の布留山にいひかけたり。かたちの小野は萬葉のあきつの小野とあるを古點によみしに從へるなり。

わぎもこに 逢阪山萬十、十五　近江萬十二　あふちの花萬十　淡路の島萬十五　行合の早稻新拾遺十八　春日萬十二

萬葉十及十五には逢阪山とも、十二には又も近江のとも、十にはあふちの花とも、十五には淡路の島とも、新拾遺十八には行合の早稻とも、萬葉十二には衣春日とも連ねたり。◇萬『わぎも子に逢阪山のはたすゝき穗には咲き出でず戀渡るかも』萬『吾妹子に又も近江の野洲川の安寢もねずに戀わたるかも』萬『わぎも子にあふちの

花は盛り過ぎずいまさけるごと有こせぬかも』新拾『我妹子に行逢の早稲を刈る時になりにけらしも萩の花さく』萬『わきもこに衣かすがのよし木川よしもあらぬか妹が目を見む』我妹子即愛する婦人に逢ふといふを轉にて、あふの音をもてる地名物名にかけたり。行合の早稲と續けたるも、行き逢ふといふを行合といふ地名に、終のは衣を貸すといふを轉じて衣かすがといひて、大和の春日に冠らせたり。

【考】萬十二に『吾妹に衣かすがのよしき川よしもあらぬか妹が目を見む』こは衣をかすといひかけたる冠辭なり。かくの如く末に妹こふる情をいふに、又本にわきもこなどの語もて冠辭によける類多くあり。萬十にわきもこに相阪山云々、本は序、末はただ忍びに戀わたるてふ意なり。わきもこのきを省るべし。わがいもこがいを約めたる語なればなり。さていもてふ語は、雄略紀の古註に稱レ妻爲レ妹、蓋古之俗乎といへり。

【解】あふちの花云々、棟の花の盛り過ぎしを恨めるにて、わきもこはあふにかけし冠のみ。又淡路の島云々、是も妹に逢はんといふ詞をかけしのみ。

わぎもこを　いさ見の山萬一　早見濱萬一　菟餓野萬十一

萬葉一には去來見乃山とも、早見濱風とも、十一にはききつが野邊とも續けたり。愛する我が妻を我妹子といふこと前にいへり。◇萬『わきも子をいさみの山を高みかも大和の見えぬ國とほみかも』萬『吾妹子を早見濱風大和なる吾をまつの木に吹かざるなゆめ』萬『わきも子をききつが野邊のなびきねむあひしのびえず間なくも思へば』始めのは我妹子をいざ見むといふを轉じて伊勢の佐見山といふ地名に掛けたり。いは發語なり。中のは早く見むといふを、攝津の早見濱にかけたるにて、終のは妹が身の上を聞きつくといふを、聞きを隔て攝津の菟餓

野にいひかけたるべし。
【苑】去來見乃山は、もしはいざと詞を隔てて、美濃山へかかるなるか。
【槻】いざみの山はいは發語、佐見の山は伊勢國二見の浦にあり。
【傳】卅二これは妹を誘ふ山の枕詞なり。いざ見んといひ續けしにはあらず。
【石】いさむどいふを山の名にかく。
【解】始のは吾妹子を去來見むといふ意にかかれるなり。中のは妹を早見むといふ意にいひかけたり。早見濱は津國の地名なるべし。本居氏は見濱はみ濱にて、唯濱のことなるべしといへり。終のは吾妹兒が耳のうへのことを聞きつぐといふ意に、菟餓野てふ地にいひかけたり。

わくごの　はひたもとほり萬三

萬葉三の長歌には、はひたもとほりと連ねたり。わくごとは若子をいふ。その如く這ひ徘徊ると比したるなり。

わしのすむ　筑波の山萬九

萬葉九に筑波の山と續けたるを代匠記に引き出でたり。鷲なく佐保の川原などいふと同じく、その土地に著しきものを以て冠らしめたるなり。但し尋常の形容詞に異ならず。
【冠】つくばのつ。く。はつかむを約めたるもの。はは羽の義。ここはつかむ鳥てふ意にて鷲のすむつくばといふか。
【燈】筑波は峯高き大山なれば、かかる荒鳥住むによりて、然か續けたり。但中千鳥鳴くみ吉野川、佐保川てふに等し。且これを後世に鷲の居ると詠めるはいかが。意は同じけれど、鷲の住むとよめるは賢ふけんなや。

わすれがひ　忘れ萬一

萬葉一には忘貝家なる妹を忘れて念へやとも、十一には我は忘れじとも、十二及十六には世にも忘れじと連ねたり。◇「鹽乙女かつぎとるちふ忘貝世にも忘れじ妹が姿は」同音を重ねて調をなさむ爲に頭に置けるのみ。忘貝とは、斧足類の一種、殼は扁平にして厚く前方少しく尖り後方は圓し。淡紫色にして裏は白し。瀬戸内海に多く產す。人のこれを拾ふ間はうさも忘るるより名づけしか。

【解】忘貝如何なる形ぞ。或人蛤の中に黑き色なるをいふといへど、慥なる說にもあらず。住吉の濱傍に拾ふ歌多ければ、ここに多かりしならめ、今は遠淺に成りて、さる物をさすべきなし。黑きのみにあらで、色々にうつくしく染まじへたらめ。

わすれ水　たえま〳〵後拾三　たえ〳〵ならで詞花　たえがちなる是則集

後拾遺三にたえま〳〵をと續け、詞花集にはたえ〳〵ならでと連ねたり。又是則集に「霧ふかき秋の野中の忘れ水たえぬがちなる頃にもあるかな」とある忘水を續紹に枕としたれど、こは比喩の歌にて、序の體と見るをよしとす。◇「はる〳〵と野中に見ゆる忘水たえま〳〵を歎くころかな」「住吉の淺澤小野の忘水たえ〳〵ならで逢ふよしもがな」

【解】忘れ水とは池沼小川などの水の涸れ殘りたるなり。それは絕ゆと見てたえぬ様なるを、我頼もし人の絕ゆともなくて過ぐる月日の中々につらしとなり。

わすれぐさ　忘るばかり後十一

後撰十一に忘草忘るばかりのと連ね、千載の長歌には忘れ顔と續けたり。わすれ草は萱草の一名にて、ここは唯忘るといはん爲に置ける序のみ。◇『わが爲に見るかひもなし忘草忘るばかりの戀にしあらねば』

わだつみの　深き萬、土佐　そこのありか後十一　翁六帖

萬葉及土佐日記には深き心と比し、後撰十一にはそこのありかと連ね、六帖三には翁とも續けたり。わだとは海、つはのに同じく、みは神の略なり。さればわだつみは海神の義なりしが、轉じて海のことにも用ふ。ここは海の如く深き心と比し、海の底といふを、そのもとの意なるそこと轉じ、海の沖といふをおきなに轉じて枕詞とせり。◇『わだつみの底の心はありながら恨みられぬる物にぞありける』『わだつみのそこのありかは知りながらかつぎて入らむ浪の間もなし』『わだつ海の翁も花はかざしけり春のいたらぬ所なければ』

【三】六帖にわだつみの翁云々、こは海の沖と續けたるにて、のは常ののなり。

わだのそこ　沖萬一、七　沖つ深江萬五

萬葉一には沖つ白波とも、七には沖漕ぐ舟とも、五の長歌には沖つ深江とも連ねたり。その他沖と續けたる少からず。海のうち、岸に近きをいそと云ふに對して、遠かりたるを沖とも底ともいひしよりかくは續けしなれば、底とは退處（おきとこ）の義なるべければなり。深江といふは筑前糸島郡なる地名なり。◇『わだのそこ沖こぐ舟をへによせむ風も吹かぬか浪たたずして』『和田の底沖つ白波たつた山いつか越えなむ妹があたり見む』

【辯】海底は古本にわだのそこ。仙覺古訓を非とし、わたつみのと訓めり。沖の冠辭なり。

【考】こは海の底の奥深きといふを深江村にいひかけたり。さて古は海にてもいづこにても、遠き方をも深きこと

なも、おきともおくともいひたり。ここは上に底といひ下に深江とあるからは深きを沖といへるなり。わたのたを濁るべからず。わたは渡なり。つは例の助辭なり。みはもちの反なり。海をすべ有つ神の義、それを海の總名とすることは、海神の名よりうつれるなり。

【解】このおきは深き方にいふ奧にて底の心なり。

わたりがは　渡る　朝忠集

朝忠集に「古は思ひいできやわたり川渡るてふ名は流れめや君」とあり同音を重ねて調をなさむ爲におく。

【解】渡川はかち渡りする川なり。わたるてふ名とは、男の此處彼處わたりあるくあだあだしき名はなかれといふなり。

われ舟の　ひく人もなぎさ　順集

順の集、前栽合の判詞に破れ舟のひく人も云々とあるを、續貂にあげたれど、こは下の句と連ねて比喩にいへるにて、枕詞にあらず。

【解】順の集に前栽合せの判の詞に、破れ舟のひく人も渚に捨てられたる心地なんしける云々、風波の荒きに傷はれし船の捨てられたるを、便なき身の喩言ながら、我を引く方にする人なきといふに、われ船は冠り言なり。

ゐの部

ゐまちづき　明石の門萬三

萬葉三の長歌に『ゐまち月明石の門ゆは夕されば汐をみたしめ』と連ねたり。月を賞するに、その出づる時の遅速に隨ひ、立ち待ちの月とか、居待の月とか、寐待の月といふことあり。十八日を居待月といふ。さて接續の意は月明しといふを明石の浦にかけたるなり。燈火の明石といふ類なり。

【管】十八日の月を居待月といふ。明石とは月の明きといひかけたるなり。

【考】こは後にいふなる十八夜の月のことならん。さて此旅人けふぞこの明石に到れるに、月の明ければ、この詞を冠らせしにや。

【辨】こは奉祭月にて、人打より集ひて祭するをいふ。つりの反ちなり。

ゐる雲の　たちてもゐても拾十三

拾遺十三に『足引の葛城山にゐる雲の起ちても居ても妹をこそ思へ』とあり。ゐる雲とは山などは中空に懸りて、動かぬ雲をいふ。その生するを立つといふなり。起きても寐ても の意なる、起ちても居てもに續けたり。

【貂】物思して起居の安からぬを、高嶺にかかる雲の立居に喩へたり。

ゐる鶴の　乏しき萬十四

萬葉十四の『阪こえて阿閉の田面にゐるたづの乏しき君はあすさへもがも』のゐる鶴を坐光寺南畔の和歌詞高には乏しきにかかる枕詞とせり。こは上三句を序と見るべし。

ゐ

【ゐるつるの】ともしきといふを友とかけたり。ゐるは集るの義、ともしきは布陳の義にて列るをいふ。

をの部

をぐるまの わが身玉葉　別れ新葉　和田の岬宵柏集　丑三つ永正百首　錦新千載

玉葉十四にはわが身一つはと連ね、新葉の十四には別れはと續けたり。この他牡丹花家集に和田の岬と續けたるも、共に車の輪といふより、我がとも和田とも別とも連ねたるなり。又永正御着到百首には丑三つ待たでと續けたり。こは古は多く牛車を用ひたるより車の牛といふを、十二支の丑の刻にうつしたるなり。新千載に錦と連ねたるは、車の荷といふよりにの音をもてる錦にかけたるか。或は古代錦には車の綾文ありしより然か續けたるか。今前説を取らむ。◇玉葉『花ざかり塵に馳すなる小車の我身一つぞやる方もなき』新葉『小車のわかれはあまた馴れしかどこの曉ぞやるかたもなき』宵柏集『波の上にさえのぼるかな小車の和田の岬の冬の夜の月』『小車のうし三つまたで歸るにも人はおどろく夢もやはある』

岡谷の 高き卑しき漫吟集

契沖の漫吟集には高き卑しき人々の喩に岡谷のを用ひたり。岡の高きと谷の低きを配したるなり。

をし鳥の 惜しき萬二十　憂きためし千十八

萬葉二十に『いその浦につねよひ來すむをし鳥の惜しき我君は君かまに〳〵』とあり。同音を重ねて詞をなさむ爲に頭に置く。又千載十八長歌には『流れての名ををし鳥の憂き例にやならむとすらむ』と見えたり。この言意

には名を惜む意をかけ、下はをし鳥の浮きといふを憂きに轉じたり。

をしね刈る　鎌倉柿園詠草　宇田の吾兄すゞのゆふして

柿園詠草には鎌倉に冠するにをしね刈るを以てせり。稲を刈る鎌といふより地名へ轉じたるなり。舊の木綿疊に宇田の吾兄に冠らせたるは晩稲刈る田と續けたるにて、宇田は小田と音近し。

をしほ山　神代新葉二

新葉二には『をしほ山神代もきかぬ紅のうす花櫻いまさかりなり』とあり。社頭花を詠ぜるものなれば必ずしも枕詞と見ざるもよけれど、山城國小鹽山には藤原氏の氏神を祀りて古くよりその名高ければ、自ら聯想せしむるたよりあるを以て續けたり。

をたてやま又をだて　やまとを過ぎ記

仁徳記に倭に冠らせたり。服部氏の續考には流布本の古事記によりて小楯山を以てやまとに掛くる枕詞とし、本居氏は眞福寺本にやまの二字なきにより、小楯を以て倭へかかる三言の枕詞とせり。倭の國は四方に楯の如く山を繞らしたれば、その形勢を以て倭一國の枕詞ともなし、その中の倭一郷の枕ともなせるなり。又楯に矢は目ら緣語なるをも心して續けたるか。

【服】こは私記に『小楯なり。倭國の山は如レ楯云々』といへり。これによれば、小楯の如き山なるやまとの國と續けししものなり。

【傳】三十六をたてては倭の枕詞にて小楯なり。倭國は楯を並べたる如く、山の圍れる國なるを以てなり。

【[illegible]】表を立て境をはかり地中にもとめて大和國を定めたるをいふにや。故に表立(をたて)山大和といふなるべきか。

をだまきの　めぐる漫吟集

漫吟集にはめぐるに冠するにをだまきのを以てせり。苧環は糸のめぐれるものなるよりこれを人事に轉じたり。

をとこやま　榮ゆく古十七

古今十七に『今こそあれ我も昔は男山さかゆく時もありこしものを』と見ゆ。男山といふは山城にあり。石清水の八幡宮をまつる。ここは男山といふに、我も男なりといふ意を兼ねしめ、さてかの山に阪あり。人の過ぎゆくこと常なれば、男山の阪行くといふに、男盛りのありしといふことを兼ねさせたり。

【[illegible]】我も昔は盛行(さかゆく)時もありつるを、かくの如くさかりの下りたりといふに、その榮行くを山の坂にかけて男山坂といひたり。

をとめごが　袖ふる山萬、拾遺　ゆふかみ山續古今　葛城山續千載　姿の池堀河百首

萬葉及拾遺十九に袖布留山とも、續古今にはゆふかみ山とも、續千載二には葛城山ともつらねたり。こは乙女子が衣の袖を振るといふを、大和の布留山にいひかけ、髮を結ふといふをゆふ神山に、乙女子の髻といふを葛城山へ響かせて連ねたり。又乙女の姿といふより堀河百首に姿の池と連ねたり。〇萬「乙女子が袖ふる山のみづかきの久しき世よりおもひそめてき」續古今「乙女子がゆふかみ山の玉かづらけふは姿をかけやそふらむ」續千「乙女子が葛城山の櫻花心にかけて見ぬ時ぞなき」堀河百首「をとめ子が姿の池の浮葉は心よげにもひらきにけり」

をとめらが　布留山萬四

萬葉四に袖ふる山と續けたり。さて後識の意は次に擧ぐる考の說に明かなり。後の集にはをとめごがとよめり。

【考】乙女らが袖ふりて我を招く意にて、石上のふる山に袖ふる山といひ下したり。

をとめらに　逢阪山萬十三　行合の早稻萬十

萬葉十三には相阪山に連ね、十には行合の早稻と續けたり。乙女らに逢ふとか、行逢ふとかいふを、かかる詞をもてる地名に冠らせたり。◇萬『をとめらに行合の早稻を刈る時になりにけらしも萩の花咲く』『物部の氏川わたり乙女らに逢阪山云々』。

【考】冠辭の早稻、むろのわせなどいへる如く、行相てふ里の早稻をいふならん。萬九に射行相のみねの麓に云々と詠めるも、いに發語にて、行相は右と同じ所の名なるべく覺ゆ。龍田越の道にある所の名なるべし。

【佐】續後撰・續千載・新續古今・家隆卿集などには、拾をとめごと詠めり。今の世には、これに從ひて乙女子がとよむべし。

【石】始のは逢と續けしにて事もなし。地名なるべしと考にいへれど、うけがたし。行合の霜といへる歌古今六帖には見えたり。七夕歌には行合の橋ともいへり。こは少女の行合と續けしにて、早稻刈頃の野邊のさまをいへるにて、枕詞にはあらじかし。

をののえの　ほと〳〵しく拾十七、六帖

拾遺十七及六帖九にはほとほとしくとも連ねたり。木を伐るとき丁々の音するを、危きの意なるほとほとしに轉じたるなり。續貂にほどほどしといへるは誤ならん。◇『薪こる人入山の斧の柄のほと〳〵しくもなりにけるか

な」『ふじの山なげきこるてふ斧の柄のほとほとしくもなりし君かな」

【拾】拾遺集『なげきこる人入る山の斧の柄の、ほどほどしくも成にけるかな』これは斧の音をほと〳〵とよみし詞よりうつして、仙家に入りて、斧の柄の朽ちし物語をもてつけ、聞ふる久しさにかけたり。なげきこるとは木樵といふに悲嘆をいひよせしなり。

【三】ほと〳〵しくは殆々しくといふ義にて、人の心の今は頼みがたくて危く見ゆるを、薪こる斧の音のほとほとと聞ゆれば云々。

をみなへし　咲澤萬四、七　佐紀野萬十

萬葉の四及七には咲澤に連ね、同十には咲野と連ねたり。こは女郎花の咲くといふを大和の佐紀野又佐紀澤の地名に掛けたるなり。◇萬『をみなへし咲澤野邊の眞葛原いつかも繰りて我衣にせむ』『ことさらに衣はすらじをみなへし咲野の萩に匂ひてをらむ』

【仙】これは咲くといはん爲の諷詞なり。さく野は信濃にあり。

【攷】本草啓蒙に敗醬を指したれど、女郎花は別物にて漢名知りがたきものなり。

をやまだの　おどろかし後十六

後撰の十六に『小山田のおどろかしにも來ざりしをいとひたぶるに逃げし君かな』とあり。おどろかしは鳥おどし又かゞしに同じ。小山田の鳥おどしといふより驚告といふ方に轉じたるなり。この歌は山田の案山子といふに、母の來りて君を驚かすといふ意にかけて、下句一向に引板を掛けたり。ひたとは今鳴子と呼びて鳥の驚す害

を防がむ爲に繩をつけて引く板なり。

【釋】山田に鹿おどすわざするを、音づれ驚かし言にいひ寄せたり。人にものいひ聞ゆるをも驚すといふはこの頃の語なり。

枕詞の研究と釋義 終

昭和二年十月五日印刷
昭和二年十月十日發行

定價六圓八拾錢

枕詞の研究と釋義

著者　福井久藏

發行者　石川清晴
東京市外池袋一一三五

印刷者　渡邊順三

發行所
東京市牛込區喜久井町二十九番地
不二書房
電話牛込五五五六番
振替東京七四四六四番